THE CENTRAL REVIEW

中央公論

—第一回定期増刊

「不安恐怖時代」號

第三十九年　第七號　第四百三十六號


染めたと見えぬ
生れ付の黒髪と同色に染る
志らが
赤毛染
ナイス
ナイスの五大特長
タツタ二十分で染る。
自然の髪の色艶に染る。
襟枕に汚染の惧なく
洗ふて剝げず永く保ち。
用法至極手輕便利也。
發賣元東京大阪
丹平商會
全國化粧品店及び藥店にあり



霧馬　平福百穗筆

大正十三年

中央公論

六月十五日發行

第卅九年第七號

一年一回定期增刊

「不安恐怖時代號

第四百三十六號

不安と恐怖の陰雲を一掃して
平和と安樂の天日を仰ぐべく

人類の歴史の半ば以上の頁を占めてゐる戰爭の記事は、吾等をして十分に戰爭の慘禍を知らしめねばならぬ筈であつた。併し吾等は、歴史の教科書に於て、又其他の參考書に於て、戰爭と云ふものゝ壯烈なること、戰勝國の勃興すること、凱旋將軍の花々しさなどを多く見せつけられて、其悲慘な方面、戰敗國の窮狀、枯骨となりし萬卒の哀れさなどは、着物の裏地の如く、其裏に書き立てられた記事の端々から、僅かに覗き得らるゝに過ぎなかつた。現に私の如きは、其中學時代に於て日清戰爭に、其大學時代に於て日露戰爭に、我が國命を賭したと云ふ二大戰爭に遭遇しながら、多くは連戰連捷、而かもバルチック艦隊渡航の外、我領土領海内に敵軍の襲來を受けたことがなかつた爲めか、舞臺やフイルムに於て見る戰爭の如く、其勇壯活潑にして、花々しく面白き方面に於て戰爭を眺むることに馴れた。イヤ、之は獨り私のみではあるまい。自ら出征した陸海軍人、負傷者や戰死者を出した不幸な家族親戚等を除いては、多くは私と同じやうに。又所謂戰爭成金といはれた或る種の商人などは私等以上に、戰爭ほど有難い、儲かる商賣は世に一つも無いなどゝ考へたものさへもあつたに相違ない。

然し、一九一四年夏を以て開始せられ、一九一八年冬を以て終結を告げた所謂世界大戰爭は、戰爭に對する多くの人の從來の考へ方を根本的に搖撼した。文明國民を以て自他共に識認した歐米の殆んど總ての國民は、敵を殪して自ら勝たうとする外に餘念はなかつた。豺狼の兇暴も、狐狸の狡智も、固より人間に及ぶ筈はなかつた。人間は、地球上の生物の最も勝れたる智惠才覺の持主として、自ら護り敵を屠るの方策に於て、其智惠才覺を極度に働かした。此大戰の慘禍の總決算如何と見るに、召集總兵員六千萬人の中、死者五百萬人、廢疾者七百三十萬人、戰費四千二百二十億萬圓、而して幾百萬の寡婦と孤兒と、幾千萬の失業者と生活不能者と、無數の破壞された生產工場と、滿目只荒蕪となれる耕作地と。――戰爭が終つて、上せ上つた頭を振つて、落

於いて回想して觀れば、何れも皆熱病患者の如く立舞つた自分達の狂態に驚かぬものはなかつた。内にあつては從來の戰爭の場合の如く、戰敗者側にのみ味はゝれた悲慘ではなく、理窟こそ勝たれ、戰勝者の側にも悲慘はあつた。詰り戰爭は、一部の政商や、政治家や、軍需工業者などの考へる如くに、儲かる商賣では決してなく、斯う人智が發達し、武器が精鋭になり、國際關係が複雜になつては、恰かも兩虎相搏ち、兩龍相闘ふが如く、結局共倒れとなるの外無いと云ふことを、敵にも味方にも、しみ／＼と味ははさせた。戰爭當時は軍需品注文の甘汁を吸ひ込んで、戰爭樣々と云ひ兼ねまじかつた我國の多くの人々も、戰後の世界に襲ひ來つた世界的大不景氣の煽りを喰つてからは、流石に日清・日露の兩戰役後とは異つた感じを抱かせられたに相違ない。「デモクラシイの爲めの義戰」と云ふ標語の下に結び附けられてゐた聯合軍側でも、獨逸に對する利害關係によつて、戰後の世界に關する希望にも大いなる杆格を來たし、平和克復後七年を經たる今日に於て、未だゴタゴタを重ねて居る。世界第一の專制君主國たりし露西亞は倒れて、赤色勞農露西亞は、其赤い色で以て、從來の資本主義的諸國家の支配階級を戰慄せしめ、世界無比の英雄君主とせられしカイゼルは、幽囚の身となつて今は和蘭のドールンに其殘生を果敢なんで居り、獨逸帝國は一面に黄色に塗られんとしてゐる。英吉利は勞働黨の天下となり、伊太利はファシスチーの專制に歸し、佛蘭西は内閣も輿論も、白と黄とに轉々又轉々、殆んど其歸着が分らない。民主主義のアイドルに祭り上げられたウイルソンを出した亞米利加合衆國は、世界の批難攻撃にお構ひなく、歐洲移民を一般的に制限し、我國に向つては特殊的に極端なる移民禁止案を通過せしめた。世界は今や動揺に動揺を重ねて、自ら其動揺に目眩みつゝある。吾等は歴史に於て、支那・印度の王朝の幾交代したことを知つて居り、希臘文明の衰微し、羅馬文明の崩壊したことを知つては居たが、人間の果敢なさ、自ら體驗し、自ら目撃するまでは、どうも自己の實感として強く深く之を享け入れることが出來なんだ。併し今度と云ふ今度は、歐洲文明の行詰り、現代國家組織及び社會組織が、一大變革期に遭遇しつゝあることを、イヤと云ふ程見せ附けられた氣がする。

吾等の生を托してゐる此地球なるものは、誠にたよりない一塊球であることは天文學の教ふる所である。無邊際なる宇宙の中の一小部分を占むる太陽系に附屬する一遊星で、引力といふ物理的の法則によつて、太陽の周圍を一定の軌道に從つて運行してゐる。――いはゞ宇宙から觀れば大海の一粟所ではない、極微の一土塊で

——又引力などゝ云ふものゝ、實は綱渡り以上の危ない藝當だ——といへばいへぬ事もない代物である。それに地球が段々冷却する、太陽だつて何時かは燃え盡きる。——と云ふ事も學問上明かだと云ふ。現に地球面が悉く氷に掩はれて、あらゆる生物が絶滅した事が一度ならず二度ならずあつたことが證明出來ると云ふ。だからよく考へて見れば、地球其物、從つて其上に生を托する吾等其物が、甚だ不安心な存在であるといふ事は、分り切つて居ることではあるが、そんな大きな變動は、いはゞ何十萬年に一度あるかなしかと云ふのであつて、有史以來四五千年の歴史しか有たず、又個人としては、長生をしても八九十歳、多くは五六十歳、平均年齢は僅かに廿幾年しか生きぬ今日の人類に取つては、一種お伽噺でも聞くやうな興味で、學者の説なるものを聞くのは止むを得ない事である。イヤ、此僅か四五千年の歴史に於ても、大洪水、大地震、大厄病、大噴火、大火災等の記事は可なりに多くあつた。我國の餘り遠くない時代にも現にそれがあつた。併し吾等は「方丈記」を一種甘美なる詠嘆を以て讀んだ。「武藏鐙」を一種驚異すべき事件として受取つた。いはゞ淨瑠璃のサハリを聞き、演劇の悲痛な舞臺面を見る以上の實感を動かさなかつた。

　併し大正十二年九月一日正午の關東大地震大火災は、吾等の地球上に於ける生存の安定感を根本的に轉覆した。「動かざること地の如し」など形容して居つた其大地が波を打つて搖らぎ撼いた。大地の上の建物は、弱きは、パタパタと將棊倒しとなり、強きも、或は屋傾き瓦飛び壁落ち柱歪み、湘南一帶より京濱・總房かけて、少しの損傷をも受けぬと云ふ建物は一つもない。のみならず、多くは可燃性の木材を以て作られた吾等の家屋は震後直ちに火を發し、火は風を起し、風は火を煽つて焔々相連ること方數里、火熱亦千二三百度に昇騰して、厚硝子板は水飴の如くだらだらと溶け流れ、鐵骨鐵筋は飴ン棒の如く捻れ曲り、女の髮の毛の如く縺れ落ちた。横須賀・横濱の殆んど全部、帝都の約五分の三は全く灰燼に歸して了つた。其被害の總計は、死者十八萬、傷者廿萬、燒失崩壞家屋五十萬、罹災者二百九十萬、物資の損害約百億圓といはれる。此れ程の大いなる天災は恐らく何人の想像をも絶したものであつた。尤も吾等とても、ヴイスヴイアスの噴火によるポムペイ市の全滅、桑港の大火、さては明暦、元祿、安政等の大火大震の記錄を知らぬ譯ではなかつた。併し自ら體驗し、自ら目撃するにあらざれば、實感として強く深く享け取ることの不可能なる吾等は、今次の大震大火に見舞はれるまでは、地球と吾等、自然と人生との相關交渉の深甚なることを、多く忘れ勝ちでゐたのである。

[illegible]に、世に[illegible]について[illegible]へ[illegible]
大事件であつた。同時に[illegible]に[illegible]きされた[illegible]には[illegible]
今尚世界の各國が[illegible]しつゝある目前の事實であつて、此問題の正しく解決せらるゝと否とは、實に人類の生活が益々幸福となるべきか、或はこゝに行詰つてしまふかと云ふ程の重大な意義を有するものと云つていゝ。

何事も人だ、人の數だ、多數の力でなければ何事も出來ぬ。——之は取りも直さず戰の數へたる結論であつて、戰後デモクラシーの思潮が、滔滔として世界の隅々までも押し寄せたのは實に之が爲めである。百年前佛國内に叫ばれた「四民平等」の理論は、百年後の世界大戰の結果によつて、事實に於て立派に證明せられた。彼等はあらゆる特權階級の存在を不當とし、特權階級の利益を中心として作られたあらゆる社會組織の現在を呪つた。而して彼等は大戰中彼等の拂つた犠牲に對して報酬と慰安とを需めた。而かも戰後の各國家は、何れも其要求に應ずる力が無かつた。戰敗國たる獨墺及び革命に疲れた露國が、物資の缺乏と、貨幣の暴落の爲めに物價が數十倍に上れるを初めとし、戰勝國と雖も、物價は戰前の約三倍に騰れるが爲め、すべての國民は、皆生活の不安困難に襲はれた。資本家は自己の立場を保持し、勞働者は勞働條件の改善を強要し、兩々相執つて讓らざる爲め、勞働爭議は頻々として絶ゆる間もない。而かも勞働者側は目的の貫徹の爲め——或は貫徹に絶望せる爲め、直接行動——暴力に訴へるにも至つた。主義主張の相違と、利害關係の扞格は、暗殺騒ぎ、爆彈騒ぎを頻發せしめた。何となく重々しく頭の上に乘しかゝつて來る不安不滿不平憤懣の空氣は、無邪氣たるべき少年をしてまで、鐵道のレールの上に枕木や大石を並べしめた。今の世に、本當に今の社會に滿足し、自己の職業に安住し、行く先きの生活に危惧の念を抱かざる人間は果して何の位あるだらうか。富者は富者なりに、權者は權者なりに、彼等相應の不安があり、恐怖がある。又貧者や弱者に至つては、不安や恐怖を通り越して、彼等の生活其物が悲慘其物の具象化だ。社會生活に於ける此等の不安と悲慘とに搗てゝ加へて、嚴寒、酷暑、暴風、大雨——それ等の自然界の變調の外に、永い間忘れ勝ちであつた大地震、大火災の脅威。算へ來り、考へ來れば、現代に於ける吾等の生活は、恰かも不安と恐怖の連續だ！と云ふの他ないやうな感じがする。

併し吾等は生きられる丈けは生きねばならぬ。イヤ、單に生きる丈けではいけない。安全に、幸福に。出來る丈け最も安全に、最も幸福に生きなければならぬ。左樣に生きる途を考へ、生きる方法を講じなければなら

ない。成程デモクラシーの思潮は、在來の階級的社會制度に一大混亂を來たした。併し不合理なる階級の撤廢は、全人類の安全と幸福にとつて必要なことに相違ない。頑迷なる傳統主義者の謬妄を破し、又過激なる破壞主義者の狂愚を戒めて、眞のデモクラチックの社會の實現に努むることは、少しく心ある人士の當然の志望でなければならない。又吾等は自然界の脅威に對しても、徒らに迷信や獨斷に惑はさるゝことなく、飽くまでも科學の指示する所に從ひ、焦せらず、併しながら休まず。落附いて、併しながら熱心に、自然と人間生活との相闘の理法を講究し、地球上に生物の生存し得る限り、吾等の生活をして、より安全にして、より幸福ならしむべき方策を見出さなくてはならぬ。

併し、それは頭腦の中で考へる理想であり、情意の中で祈る熱求ではあるけれど、いざ之を實現せんとするは、固より容易の業ではない。前後五年に亙る大戰の慘禍を滓の滓まで嘗めさせられた歐洲の國民さへもが、動もすれば阿片病者が阿片を求むるが如く、殺人者の刄の血が、更に新たなる血を求むるが如く、一方戰禍に戰慄しつゝ、他方再び干戈を執らんとするの衝動に驅られんとする。國際聯盟、海軍制限など、戰禍を避けんとするの風潮は固より存在するけれども、又自國の利害の爲めに、遂ひフラ〳〵と砲彈に手をかけんとする氣分がないでもない。又飛行機の發達、毒瓦斯の研究、殺人光線の發明など、戰爭の度數を減少するには役立つかも知れぬが、又戰爭の慘禍を激しくするの役目をも勤め兼ねない。又吾等は大震火災の教訓によつて、自然界の理法に眼覚め、耐震耐火の建造物、道幅擴充、大公園の新設・防火區域の設定等諸種の改善變更の必要なるを悟り、徒らに怯え騒ぐことの愚かしきことに氣附くには氣附いた。けれども資力の缺乏と、識見の卑小とによつて、此等理論も一向に行はるゝ模樣もなく、在來の猥雜狹隘なる露路小路にも米松と亞鉛板のバラックが櫛比して建てられつゝある。又吾等も、災後十ケ月にして、まだ路傍の所々に堆積せられ放つしになつてゐる焼け亞鉛板（トタン）や碎けた瓦石などを見ては、未だ全く當時の惡夢から醒め切ることは出來ない。それに此頃は又ちよい〳〵地震がある。そして安政の際にも、昨秋の際にも水涸れたと云ふ品川の井戸水にまた變調を呈して來たと云ふ。又何とか云ふ地震博士は、今年中には一月十五日程度の地震が三回位あるなどと稱す。吾等は高層建築の下を歩いたり、或は其中に入つたりした時、今にもドシンと頭の上に倒れかゝることを恐れたり、道路を歩いてゐる時、ゆら〳〵と足元の土地が揺り上りはせぬかと氣遣つたりするのも、強ち根據なき杞憂だともいはれ

ないやうな心地がする。習慣の久しき所は[illegible]感ずる。[illegible]

ものに、本能的に不安を感ずることに已むを得ざる人間の弱點といはなければならない。

戰爭と震災とは、地球上に餘りに多過ぎやうとする人類の繁殖力を調節する。大災は古き汚き穢な建物を燒き盡つて、新しき美しき街を建てる。地殼は海水に呑み込まれんとする陸地を持ち上げて、地上の生物を保護する。——と云ふ風に觀る人も大きな眼で觀れば、何れも皆人間生活にとつて必ずしも有害だとはいはれぬ事件だ。——と云ふ風に觀る人もない事はない。併し此等の事件に現在惱まされて居る吾等には、さう云ふ遠い大きな眼で觀る餘裕もないし、また興味もない。

地球は太陽の牽引力と地球自身の反撥力の調節によつて一定の軌道を作る。時計の振子は中心に靜止せんとして右又左に振動する。男女、陰陽、積極消極、互に相反せる二つの力によつて其物の活動があり、調和がある。保守急進、左黨右黨、有産無産、資本家と勞働者、支配階級と被支配階級の存在するのは實に已むを得ざる人世の理法であつて、之あるが爲めに社會の進歩があり、人類の生活があるやうに考へる人もある。我等も此見方に多少の眞理のあることを認める。併しながら凡そ平和の時代、文化發展の時代に於ては、其社會の一部——左端と右端とには多少の異分子、相反撥する異分子を有つて居つても、其本體は靜かにぢつとして一つ路を安らかに進む。一定の方向と進路を取つて靜かに動いて行く本體がある。其れが平和時代と文化發展時代の特相である。然るに現在吾等の目の前に見る世界は、頭も尻尾も動いてゐる許りでなく、全身が蠕動してゐる。戰慄してゐる。痙攣してゐる。ぢつと安らかに息してゐる部分は何處にもない。

吾等は不安の空氣に窒息せんとする。恐怖の戰慄に喪心せんとする。一日も早く此重苦しい雰圍氣を一掃して、麗らかな天日を仰ぎたい。それには行き詰つて混亂してゐる社會にデモクラシーの大道を疏通し、疑ひ惑つて昏迷してゐる人心に、自然と人生に對する正確なる科學的知識の普及を計るが一番の捷徑と信ずる。若し本號が、不安と恐怖に滿ちた現代の世相を明示し、併せて之が救治の策を暗示する所あらば、編者の希望は即ち達せられたりと云ふべきである。(大正十三年六月三日T・T生)

中央公論



第卅九年　第七號
「不安恐怖時代」號
第四百三十六號

不安恐怖的現代の存在、原因、及び價値

杉森孝次郎

一　經驗的判斷としての不安恐怖的現代の存在

現代は一とつのいちじるしい不安恐怖時代だと概斷する人の數は、恐らくは現代の靑、壯、老年者の總數を概ね構成する。この概斷は、反省され、批判され、それの理由を考索された場合に、なにものとして再認されるか。

現代人の大多數が現代に於いて或る非常特別の程度に於ける不安恐怖時代を發見しはじめたのは、歐洲戰の發生、發達、及び戰後の社會が新たに示し來たつた或る種類の現象と共にであつた。そしてその「或る」は、きのふまでは、た

となる現代の、[illegible]に、[illegible]たる、そして暗合的に執拗なる相反状態に置かれて、それらが互ひに依存と支配を[illegible]は、要言にしてまたといふ性質を、それの代表的一性質とするものであるがゆゑに、いふところの或る種類の現代は、すくなくともその一性質に於いて、それの直接先起現象に屬する大戦そのものと共通だ。

大戦自身が、殊にそれの勝敗が未決であつたあひだ、一とつの甚だ暗い、そして根深い不安恐怖を當時の諸國民に投げつけたことは、世界の最も新鮮なる一記憶だ。しかしながら、大戦自身は、現代の不安恐怖を例證する一現象ではあつだが、それによつて現代の不安恐怖が説明される原因としての位置を持つたものでもなければ、それによつて現代の不安恐怖が解除される方法または結論としての價値を帯んだものでは最初からない。大戦が意味した限りの不安恐怖は、實に、一時天日を蔽ひ隠した地上一延の炮烟爆火同然、瞬間にして社會をそれ自身の慘烈なる爭闘意志の渦中にまき込んでしまつたが、次ぎの瞬間には、日星河嶽歴然として再び現はれ、まき込まれた社會も、渦心の移るを待つて示し合はせた樣に、かつて、つて不栓同様の彈性を略ぼ完全に保存して概ねもとの位置に浮き上がつた。大戦自身は、現代の不安恐怖的中心渦を豫表した一淺渦にすぎなかつた。

大戦は、意識と自覺と反省とを持たない、單なる本能的行動及び作爲としてすでに著大に發達した國際的社會が、後者をばいよく持ち、前者をばいまだ持たず、しばく却つていよく持たない傾向を好んで追ひ進んだ事情下に、必然生起するほかなかつた内亂につひに到達したかたちにほかならなかつた。經濟、思想の諸形に於いて諸國家と諸民族とが外的協力に從事し來たつた歴史はすくなくとも過去最近の四分の三世紀を貫綫する。しかもその歴史は探照燈に似て未廣だが探照燈に似ずして末濃だ。しかるに、諸國家と諸民族の心術は、もしくは心術は一帝國主義一によつて代表

される性質のものであつた。「帝國主義」は鎖國主義、排外主義がただそれの力度に於いて一層積極的であるだけのものに、しかしながら、ほかならない。一個人または一團人が統覺を缺く行動または作爲に從事するならば、その內的矛盾は、多少の時間後に、なに人の眼にも眩明なかたちに於いて、かれの生活事實の上に外證される必然がある。大戰はこの論理の一とつの具體全であつた。

大戰が現存の時代的不安恐怖に對して保つ關係と位置とは、かくして、一現象深だけのものであつて、全原則深のものではない。それは、第二封建的慣習、制度、常識、學說が、殊に政治生活に於けるそれらが、すなはちそれらとしての第二封建主義が、殊にそれの外的側面に於て、いよ〱それの不適を、知覺的現實經驗の鮮露さと顯烈さを大規模に具備したかたちに於いて、證明されはじめたことを自身の性質及び形式とするものにほかならない。存在判斷の一とつの第一結果的對象としての大戰は、それの原因としての理由を、最も選擇的、代表的、直接的には、最近代及び現代の封建主義に有したものとして再認される。そして、この現代的封建主義こそは、現代の一特質としての不安恐怖を最も奥深く原因づけ、最も直接に機會づける當體だ。

現代的封建主義は、かくして必然、現代の國際的政治生活に於ける不安恐怖とは多少別質の多く乃至すべての現代特有の不安恐怖の原因として、大戰の場合同樣に發見される。

ロシヤの革命と、勞働運動の各產業國に於ける急進的發達とは、人をして現代は特に一とつの不安恐怖時代だと判斷せしめる事情因を、國際不安と相竝ぶ位置にある新現象だ。國際不安と、直接には國內的社會不安としての形と質とを過去及び現在の事實としては有する社會主義的、勞働運動的社會不安、その意味に於いての社會不安との兩不安を對比して、どちらが一層深い、さし迫まつた、大きい不安であるかは、現代及びそれに續く近い將來についていふ限り、單

純な答へを期待しうる問ひではないと考へられる。ただ、社會主義的、勞働運動的に示されるところのものは、國家際、民族際、人種際不安としての國際不安（一）も、そのかたちに於ての社會不安（二）も、一番進んだ、すなはち一層高級文化質のもので、もの自身の本質としては、たしかにある。どうしてかといふに、いはゆる國際不安は、民族またはi人種といふ、たとひ全部的、絶對的にではないながらも、比較的に生物學的、その意味に於て原始文化的、非文化的、自然的な事實を直接的基礎條件の大いなる一とする性質のものであるのに、いはゆる社會不安は、比較的に近い人爲的すなはち文化的起原及び發達を持つ現存の經濟的制度、慣習、學說、常識に對する或る批判とそれの必然的連續としての改作意志を最直接、最主要の內容とする性質のものであるがゆゑにだ。經濟的制度、慣習、學說、常識は、原始文化の場合に於てすら、それの全內容をば決して形成しなかつたし、それの最高位的部分をも決して形成しなかつた。現代の發達した社會に於てこの關係はいよ〳〵較著だ。なほかつ、しかしながら、現代に於ける經濟組織、及び殊にそれに對する批判的改作意志を中心要件とする社會主義及び勞働運動が、民族主義、人種主義、民族主義と殊親關係を有する國民主義等との對比に於て、純たる一とつの文化世界內的主張であることは顯明だ。國際不安、階級際不安のほかに、現代社會不安の內容はなほある。性際不安がそれの漸熱的一大內容であり、階際不安がおもむろにそれの後影を追うて發達し來たらんとする現在の一般的情勢だ。

二　不安恐怖的現代の存在の代表的原因

前節に於いて、わたくしは、現代に社會不安が或る複數態に於いて存在することを注意した。社會不安は、現代を特徵づける一とつの性質とさへもいひえられるほどに、現代に於いて特に著甚であることをも、わたくしは、同時に不充

分ながら注意した。

すでに一とつの存在判斷をなしたからには、われらは、先づその存在の原因を豫想して求索する知的性能を持つ。存のすべての社會不安的事實は、それ〴〵に、特殊の原因を有するには相違ないが、それらの諸特殊因の奥に、總統的原因は存在しないだらうか。國際不安には國際不安特有の、階級際不安には階級際不安特有の、また性際不安、齢際不安にも、そのおの〴〵に特有の原因が發見さるべく存在してゐるに相違ないといふ限界にまでは、容易に知性的——知識的ではない——確信が到達する。しかしながら、同一時代の同一社會に於ける種々の代表的社會不安的事實が、或る共通因を發見される、すなはち所有する性質のものではなからうかといふ驚異、怪訝、好奇心は、知性の統一的本能からしてもおのづから發生しうるが、もつと歸納的に、國際不安、階級際不安、性際不安、齢際不安等のおの〴〵を個別的に研究對象として充分なる認識的注意をそれに向け、したがつてそのおの〴〵の存在因を求索し、そして發見したのちに、先づ複數のかたちに於いて、すなはちはちその特殊的社會不安の數だけの數に於いて發見された原因を比較して見るならば、なに人も、その複數因が單一質のものであることを容易に發見するだらうと信じうる經驗的根據をわたくしは持つ。

先づ國際不安について、それの本質因を求索する。おの〴〵の異民族、他國民、別人種の人性に對するおの〴〵の自民族、自國民、自人種の驚くべき無洞察、無想像、及び無知識が、その本質因の第一位を形成してゐることは、現代に於ても、或る人々には明確をきはめてゐる一とつの眞實であらねばならん。榮辱、愛憎、身體的快苦、義理人情が意味する道德的根本質、美醜意識、科學的及び哲學的本能、たとへばこれらの性能に於て、自民族、自國民、自人種は本質的に具足してゐる、他民族、他國民、他人種は本質的に缺乏してゐるかの如くに、現代人の自民族觀、自國民觀、自人種觀

と異民族は、異國民は、異人種的には、またしばしば決定づけられてゐる。平時における國の共同一般の間にだにしても、對していだいた觀念、異國民の本質及び現實に間違ないものだとしておれらが抱懷した觀念、合衆國の白人種が黑人種に對してのそれ、京濱大震火災後の數日間に日本民族の或る部分が朝鮮民族に對して示したそれ、なほその他、あの時にもこの時にも、あそこにもここにもといふやうに、注意をこの問題にしばしば携へば、實例は實に例外的少數でなく、通則的多數であることが容易に確實に意識される。

おの〳〵の異民族、異國民、異人種は、おの〳〵の自民族、自國民、自人種の或る意識內容としての性質に於いては、客觀的には、すなはち眞知の或る對象としての資格に於いては、それが確實に具足してゐる人性をきはめて不確實に、不完全に具足してゐる。性愛、親子愛、姉妹兄弟愛、朋友愛、鄕土愛、同族愛、眞理愛、正義愛、創造愛、善愛、美愛、自由愛、百千限りもなき種類の愛欲が人性には多少必具にしてしかも深根を張つてゐる。人性は雜質的愛欲から成る一全體だとも適當に判斷されるが、そのおの〳〵の愛欲が滿足させられる悅びと、それが厭制される痛苦悲哀とは、それの持ちぬしたる當人にとつては、至深、絕烈、最大の問題たる性質を、他の人の愛欲の滿、不滿との比較に於いては常に持つ。人性そのものが要するに高度の意識質のものであるから、そして意識の根本質は情意性だから、さらにそして情意性は必然的に、本質的に目的質のものだから、自己の目的の達成ほど尊貴なもの、必要なこと、幸福な經驗は各人にとつて絕無だ。各民族、各國民、各人種は、そのおの〳〵の構成單位的實在としての各人は、第一に、そして最後まで、要するに完全なる一人性として存在する。人性の現代に於ける最低限發達、その意味に於いての現代的最低限人性を學術的に槪定することは難くない。現代的最低限人性の內容、組織、性質に認識的注意を向ければ、現代の各民族、各國民、各人種自身にとつての本質的悲苦哀歎が、その意味に於いての價値問題及び價値生活が、いかに他民族、他國

民、他人種によつて無視され、不存在扱いされてゐるかは、杜絶、隔絶を先づあたひする程度のものだ。一言にして現代の各異民族間、各異國民間、各異人種間に於ける人性的相互理解の乏絶は、それをいかに價値づけべきであるかは別の問題として、眼前の巨大なる事實だ。人性の存在範圍、人性の同質的存在範圍を、民族別、國民別、人種別の意識によつて眩惑され、失明させられ、專制されて、正しく、全たく視得ないかたちが現代生活及び現代文化の一側面形だ。

人性的同根、人性的同質、人性的姉妹兄弟關係を、單なる環境爲的、方法價的、表層質的意義を眞實には有するにすぎない民族的、國民的、人種的要素、すなはち語脈、血統、慣俗、鄕土、史實等に於ける特異質のために遮眼されて明視しえないことは、洞察的識力の缺乏、類推的想像力の缺乏、直接的及び間接的諸樣式に於ける經驗的知識の缺乏によつて原因づけられた現象にほかならない。しかるに、洞察的識力、類推的想像力、直接的及び間接的諸樣式に於ける經驗的知識は、いづれも人にとつて、いよ〳〵有るほどいよ〳〵喜ばしく、いよ〳〵無いほどいよ〳〵悲しい或る本質價だ。現代に於ける民族的、國民的、人種的意識の專制は、實に、現代人が或る持つべきものを持たないゆゑの現象であつて、それだけの原始、野蠻、幼稚を意味する。

洞察的識力と推察的想像力とは、知性及び情性に天才的に分配される心理的能力だ。一時代の大多數男女は、經驗的知識と共に判斷する。しかるに、現代は、半世紀乃至一世紀前との比較に於いてこそ、交通の範圍及び內容の上に、眞に隔世的、革命的進步發達の績を示すが、なほかつ、現代に遍在する對異民族的、對異國民的、對異人種的錯覺、幻覺、無知に機會を拒むべくそれはあまりに貧疎だ。たとへば、現代の日本民族にして、同國民たる朝鮮人や臺灣人のきはめて限られたる數をさへも、自分の直接の交友的または熟知的經驗のかたちに於いての知識として持つ人の數は、とても

現代日本民衆が米國人としての社會的といふ名をあたへしない僅な數だ。斯、獨人の代りに日本人の二億をもつてせても同様だ。現代英國の大多數男女が獨人、佛人、あるいは米人を知る程度も、日本人が異民族を知る程度に比して大差あるものでは決してない。戰時中の英國のいはゆる淑女階級及び紳士階級も驚くべき多數者が、獨逸國民に對し現はるゝあらゆる憎惡心煽動的荒唐無稽の記事をいささかも疑はずに貪り信じた如きも、單なる憎惡本能の作用では決してなかつた。かれらは、獨人に對するなんら確實の知識、直接的經驗のかたちに於ける知識を持ち合はせてゐなかつたゆゑに、かれらの粗質なる想像力は、ひとへに憎惡衝動の命令下に立ちはたらいたのだ。また、かれらに對獨人的知識が缺乏してゐたればこそ、それが原因となつてかれらの憎惡心が發生したのだといふ一側面の大きな因果關係もそこにはあつた。

熟知は情愛を生み、經驗的知識は確信を形成する。現代の各民族と各國民と各人種とは、異民族と異國民と異人種とに對して、熟知と經驗的知識とを缺くがゆゑに、かれらに對して情愛を持たず、なんら自信ある判斷を持たない。煽動政治家、煽動的新聞記事、煽動的演說、乃至いかなる流言にも、風說にも、かれらのうちの平均的普通的頭腦は、なんらの抗彈力もなしに隨撓する。現代の國民主義、民族主義、人種主義が、鎖國主義的形式を帶びる場合にも、帝國主義的形式を帶びる場合にも、資本主義經濟の純粹利益打算に全因を有せず、他國民、他民族、他人種に對する自國民、自民族、自人種の無知ゆゑの憎惡、不信用に一大主要因を有することは、疑ふ餘地がない。一國民、一民族、一人種が、他他の國民や、民族や、人種との間に、交通及び接觸の現實的及び可能的機會をば多少持つが、いまだその他國民や、他民族や、他人種に對して、一般的情愛及び信用をその一國民、一民族、一人種が持ちうるほどにはその機會が發達、增進してゐないあひだ、鎖國主義的及び帝國主義的政策と思想がきはめて潤澤にかれら自身の機會を享樂することは、

さかも不思議でない。純粹なる資本主義的經濟利益の打算からすれば、現代の民族主義、國民主義、人種主義は、到底それらが保つ安全存在、頑強存在を維持し切れない筈だ。要するにどれもこれも窮屈な小社會を、民族的社會、國民的社會、人種的社會等の名と形に於いて、一とつづきの狹い地上、地球の表面に幾つもの數に於いて持つことは、純粹資本主義經濟の利益打算からしては、百損あつて一得なき方法だ。牢としていまだ拔くべからざる、たとひ拔かうと企てても容易に拔けない民族的、國民的、人種的自愛他憎の存在を確實に、現實に經驗して熟知しすぎるほどにも熟知してゐるがゆゑに、現代の資本主義經濟利益追求者は、帝國主義の前線にも立ち、鎖國主義の尻押しをもつとめるのだ。資本主義經濟意識は、帝國主義や鎖國主義の創造主ではなく、運命的不可抗力、與件的原始力に於いて存在するそれらを、せめても利用しうる限り利用する方法として、それらの主義の闘將であつたり、參謀であつたりするのだ。勿論、しかしながら、抽象的に考へられた資本主義經濟意識そのもの、資本主義經濟意識の論理的純粹形そのものと、現代の資本主義經濟利益追求人とは、多少別だ。現代の資本主義經濟利益追求人の多くは、洞察力に於いて、想像力に於いて、現代の平均的普通的頭腦の持ちぬしだから、かれら自身も、民族的、國民的、人種的愛自憎他のかはゆい、しかしながら淺識卑志を意味する一側面を小さからず持つ。國際横斷の資本家を正直に自己の目的としてゐる人の數は現代に於いてどれほどもあるまい。たま〳〵自分の出生民族や、屬籍國家が雄強だから、その餘威を借りて國際資本界に覇を樹てようと意氣込む位の人はあらう。純粹資本主義經濟利益打算の前に、現代の民族主義、國民主義、人種主義は、いかにも邪魔になる側面を有するがゆゑに、すくなくともその側面を適當に改作するなり、取り去るなりしようといふほどの意識も、熱意も、現代の資本主義者には概して見つからないやうだ。個人的功名心や、國家以下の組合や團體のアスピレーションやアムビションが、それらが力度的にまじめなもの、本氣なもの、眞劍なものである限り、國内に機會

を抑えた、[illegible]

して出でないことも、[illegible]いてなほさらに注意さるる所なだ、現代人のアムビション[illegible]

鬱に、有害に、民族意識や國家意識のために不知不識的に不自由にされ、發育不全にされてゐる[illegible]には、この種の現象は、現代人が好んで自己を束縛し、牢制しつつある方法だとしか結論されない。

英雄氣取りの政治家連も、すくなくとも現代の日本においては、國位保護、國權擴張にさへも內實の興味をば持たず單なる組閣ぐらゐにアスピレーションや、アムビションの限りを燃やす。學者や思想家は、なんのかんのといひながら、歐米模倣か、自國及び支那、印度の過去模倣かのいづれかに低迷する。政黨の貢献は精確に國內第一黨を極限とし、民間の各種團體運動の如きものも、國際橫斷的運動の發明だけはちよい〳〵とやつても、原案と內氣と容喙以上のものでは滅多にない。比較的に發達した英國の勞働運動の如きでさへも、ナショナル以上には曾つて一と度びも本氣に踏みでたことがない。ギルド主義の宣傳者の面々が、いかに苦肉的に滿足的にインツラ、ナショナルの立ち場を、寄生植物が本樹に寄りすがり、しがみつくが如くに必然視し、不可避視してゐるかを見よ。

現代人といへども、かれの行動的、實質的、體驗的生活を見れば、國際人だ。かれの衣、食、住を見よ。かれの用具を見よ。かれの乘り物を見よ。原料と技術と科學と勞働と思想とに於いて、現代人の國民生活そのもの、民族生活そのもの、人種生活そのものが、いかに深甚に、廣漠無際限に、國際消費人的のものであるかは、かれの意識的、自覺的、心證的生活に於いて、それが敵視され、賊視され、無視されてゐる事實との對比に於いて、現代的矛盾、不統一、對照の最巨例の一を形成する。かれの知的生活を直接具體の知覺的經驗のみによつて構成する短見者が、室内にゐて、大地や天日を、それらが床や天井同樣の露烈さに於いて視覺され、觸覺されないだけの事情に制せられて、存在判斷及び價値

判斷のかたちに於いて否定するといふ現實的可能に缺けた假想が、現代人の異國民觀、異民族觀、異人種觀に於いては類似的形式に於いて現實だ。

現代人は、異民族、異國民、異人種の存在及び價値を判斷する能力に於いては、これでも人かとあやしまれるほどの低能者だ。知的低能者は、表面的現象の差別につまづいて根本的同一または統一に歸到しない。かれは、個々の現象、一々の經驗を、孤立的、隔在的のものだと考へる。かくしてかれは科學を生まず、眞義の哲學を生まない。それらの高級概念知はかれの能力の達限を越えた仕事だ。言語、體質、慣俗、歴史、住地ぐらゐが異であれば、心髓の本質までが別であるかの如くにかれは碌に考へもせずに獨斷する。似た者同志揃ひの群衆意識のかたちに於いていよ〱勢ひづいてさうする。輿論、民論、公論までもが、政治的に、社會思想的に、このあたりから支配位を形成して來る場合が常則的にしば〱だ。

異民族、異國民、異人種の歴史を讀み、かれらの文學、藝術、哲學を研究し、かれらの慣俗、制度の心理的原因及び實質、本體を推斷し、熟知し、これによつてわれらのと本質的には共通であり、一脈であり、同根であるかれらの人性を信ずるといふだけの單純なる知慧が、現代人によつては演ぜられない。思考の根本法則の一である理由本能が、現代人の民族意識の前には無作用だ。過去を目的として將來を決定し、物質を目的として精神を決定し、偶然を目的として本質を決定する一巨大形が、現代人が、慣俗、傳統、歴史、生物的人間組織、自然的天地的環境、言語等の別異意識に主觀的に權威づけられて協力以上の競爭、すなはち意志に於いては不斷の、そして行動に於いては一算不可避的時々の戰爭に「良心的」、「必要的」、「打算的」に浮き身をやつしつゝある現象の眞實形だ。けれども、人及び萬有の本質は情意性のもの、意志的のものであり、情意性は本質的に目的質のものであり、過去を目的とすることは本質的には不可能事であり、精神は物質よりも深位、高位。支配位を本質的に占有する實在であり、偶然は本質よりも完全にもの的問題だ。

人が自覺するならば、かれは自由を獲たり欲するがまゝに出でることに[illegible]

現代人は、そして、東西南北のどの方位へ足跡を印し歩くにしても、[illegible]すぐに因襲に[illegible]この上もな[illegible]い生活に原則的不安を覺えない現代人は、昨の封建制を、なんらの深徹した原則意識にもとづいて脫ぎ捨てたものではなかつたことを事實上告白する。

國際不安の本質的第一因として、わたくしは、現代のおの〱の民族と國民と人種が、人類に共通の根本性能を自民族、自國民、自人種の特有質であるかの如くに盲信してゐることを注意した。現代の國際不安には、しかしながら、本質的第二因と見られべきものがある。それは、現代の各民族、各國民、各人種が、他の民族、國民、人種の生活を、それの對自民族的、對自國民的、對自人種的奉仕、有用、必要すなはち對我的價値にしたがうて理解しないことだ。他民族、他國民、他人種の存在及び生活の對自民族的、對自國民的、對自人種的社會價すなはち公價を、現代人は、それがある通り、あるだけに見ない。

けれども、現代に於いて、他民族、他國民、他人種の對自民族的、對自國民的、對自人種的奉仕價を成るべく無視し、成るべく輕視し、成るべく邪惡視し、成るべく禍害視することは、現代人の識力と情能に於ける內的制限を第一に意味する現象だ。識力弱き人は、寫實的、寫眞的形式に於いて經驗を想像的に認識する力がしたがつて弱い。情能低き人は、改作的、創造的形式に於いて經驗を想像的に評價する力がしたがつて低い。識力弱く、情能低き人の存在判斷の世界と價値判斷の世界とは、その弱さ、低さに相當するだけの限界を、かれの本能的、無意識行的經驗はどんなに豐富であつても、心理的、主觀作用的に形成される。

現代人が好んで營むかれ自身の消費生活を見よ。そして、その物質的及び精神的消費內容、消費容體、被消費物のい

かなる割合が、純としてかれ自身の民族、國民、人種の筋肉的及び頭腦的勞働に、それの生産が必要とした人力が關する限り、原因づけられ、機會づけられたものであるかを考察せよ。輸入科學、輸入技術、輸入感情、輸入觀念、輸入文化が、視界、聽域、嗅、味、觸の世界、概念の世界、自覺の世界、構想の世界にまでも、薄暮、空を仰いで先づ一二點の星が、そして、しばし注視しつづけるにしたがつて、百千萬億限りもない數の遠近小大の星が映眼し來るが如くに、いかにも遍在的であることが發見されよう。

消費的經驗を、その消費されるものの存在内に對する認識を具備したかたちに於いて認識することは、經驗に對するわれらの寫實的及び寫眞的認識を完全なものにするための一必要件だ。われらはなにを消費するかを知ることは、われらの自知、すなはち自覺の一内容を構成する。しかるに、そのなには、單なる感覺的または知覺的認識のみによつてはきはめて不完全に、不充分にしか知られない。それの原因、客觀的原因を知ることによつて、はじめてそのなにに對するわれらの寫實的及び寫眞的認識は完成される。現代人は、しかるに、論理學者のいはゆる充分なる理由の法則を持ち合はせてゐないかの如くに、自己の消費的經驗に於ける客觀的側面を、單純なる「同一の法則」程度の認識によつて、知的には、扱ひ濟まし、それ以上に考へない。これを民族的自尊心、愛國心、人種の誇りと正當に呼ぶことが出來るか。それは勿論出來ない。それは、最も適當には、知的低能及びその種類のことばによつて呼ばれべき一事實だ。

經驗の客觀的側面を文字通りに感覺的に、すなはち雜然的または渾沌的感官認識のかたちに於いて認識するだけではいかなる原始人の知性も勿論滿足しないが、個々の知覺的認識、すなはち常識的意義に於いてのものとか事とかいふ程度の認識を、その程度に於いて具象的な、有形的な、個々的な、組織的または統一的な認識を單元または素材としたかたちの感覺的認識には、現代人の知的生活は結構滿足して見える

存在者としての部分に代表されたる一全人の自覺または比較に、[illegible]する活動に進み、それらの間に、內的連絡または統一すなはち內的關係の結合を[illegible]族的、國民的、人種的特徵に於いて別であれば、しかるに、現代人は、その複數的、綜合的綜合を、それぞれの本質的、內省的異同によつて分類する比較活動をばせずに濟ます。かくして、一民族、一國民、一人種の範圍內にも、民族的、國民的、人種的同一をほかにしては、いかなる人間的差別もありうること、多民族、多國民、多人種際にも、民族的、國民的、人種的差別をほかにしては、いかなる人間的同一もありうることを現代人は識得しない。この點に於いて、現代人の知的生活は、比較學、分類學を、鑛物の世界、植物の世界、動物の世界に對しては發達させたが、人の世界に對しては發達させてゐない。單なる膚色、骨格、發育、語綴、文法、料理、服裝、住宅、禮、式、及び純自然的環境等に於ける同質、異質を識別して、類、種、科、屬、目の體系をどんなに完全に仕上げて見たところで、それで人の分類や比較が出來たことにはならない。それは、現象人の或る部分に對する認識といふだけの功績であつて、本質人の世界に對しては全然不認識だ。たとへば、葬儀は別々であらうとも、惜別の悲歎に民族別、國民別、人種別はなく、婚式は各異的であらうとも、性慾、戀愛、嫉妬のまじめさは、各民族、各國民、各人種間に、要するに同樣に本具されてゐる。思考の第一則としての「同一原則」に連續した位置にある「矛盾原則」も、「拒中原則」も、現代文化にあつては、要するに純自然的及び準自然的現象に對してのみ作用してゐる。現代人の無自知は先づここにそれの一大存在を示す。現代人は、人性にとつて最も遠隔的位置にある純自然的環境と、それに次ぐ遠隔的位置にある過去文化的、慣俗もしくは習性文化的環境とだけを統同辨異的に識別することを知つて、人的自然自體、人性そのもの、自己をさうすることを知らない狀態にある。

思考の法則は、雜多の經驗的存在に對する統同辨異的認識から、その比較された結果を一層內的に、そして客觀妥當的に關係づける活動へ移る。しかるに、現代文化にあつては、この經驗的存在に對する原因認識的興味と努力とは、化學、物理學、生理學等の位置が示す如く、要するに自然現象的存在に對して最も代表的に、ほとんど全然的に、發動してゐる。社會現象的存在に對しては、それはむしろそれの缺乏、不存によつて最も顯著に、明確に、深烈に意識される。それはサムシング、ミッシングとしてわれらの識閾內を占領しうる。

かれの社會的、文化的經驗、殊に消費的形式に於けるそれを、現代人が反省するならば、その經驗の客觀的側面は、むしろ通則的に、すくなくともいよ〳〵通則化的に、原因を國際的大社會に自由に有するもの、有しうるものであることを、かれの充分なる知力だけを條件として、かれはつひに發見する必然がある。現代人の消費する社會財、文化財を、現代人自身が、それがいつ、どこで、いかなる人的筋勞及び腦勞を或る必要條件として見いだし、それを滿たして、しかるのちにはじめてそれがかれの消費內容たる現在の位置を形成するに至つたかを研究したかたちに於いて認識するならば、かれはかれの消費生活を、社會財、文化財のかれの消費が關する限り、科學的に認識したことになる。そして、經驗を、先づ科學的方法にしたがつて認識するでなくては、人は、それを哲學的または倫理的に、すなはち評價的に認識することは出來ない。

社會財、文化財の消費生活が關する限り、現代人は、それの客觀的側面に對する認識に於いてひとへに斷片的、瞬間的、多元的であるがゆゑに、すなはち科學的でないがゆゑに、社會財、文化財が關する限り、それに對する現代人の評價は、したがつて無組織であり、不統一であり、不完全である。

完全なる評價は完全なる寫實的及び寫眞的認識をそれの先要件とする。經驗を、それの客觀的側面の內包と外延と關

係上にしたがつて充分に[illegible]でなくてこそ、[illegible]に於ける[illegible]たる[illegible]に[illegible]、評價、改作的意志、[illegible]的努力、すなはち要するに價値[illegible]及び價値意識がそのため[illegible]に制約されて、その場合には、充分なる自由を持ちえない。錯覺的、幻覺的、欲望的客觀認識に續くものは第一に、錯覺的、幻覺的、欲望的主觀活動だ。現代文化に於ける民族的、國民的、人種的意識に機會づけられた對社會財的、對文化財的認識の不具、竝存、發育不全と、同じ社會財、文化財に對する評價のそれとは、精確に函數的だ。そして、前者は後者に對して比較的に決定位にあり、後者は前者に對して比較的に被決定位にある。

現代國際不安の本質的第一因及び第二因は、要するに上述の如くにして、現代人が、民族意識、國民意識、人種意識の奴隷位に立ち、人性の存在範疇すなはち存在數を、またおの〳〵の人性に於ける本質的實在を充分に自由に認識しないこと、及び、現代人が、同じ原因及び事情によつて、自己が消費する、しかも本能的及び良心的に消費する社會財及び文化財を、それの充分なる原因關係にしたがつて自由に認識しないことにあると確實に驗察され、考斷される。衣服の奥に身體を見ず、皮膚の奥に人間魂を見ない方法が前者であり、學術や製品の過去に同じく人間魂を見ない方法が後者であるのだが、兩者ともに、現代人に、透視力や占斷能が、そんな奇蹟的なものが持たれてゐないからではなく、或る經驗的存在判斷を、現代人が、純眞なる愛知熱に於いて、正直に、精確に、完全に比較することをせず、及びその存在の原因關係に對する認識のかたちに於いて理由づけ、論理化することをしないからこその現象にほかならない。

いふところの第一因及び第二因が、現代の一大特徴である國際的不安恐怖の代表的全因だ。經驗的、批判的、考察的三形式に於いての知的制限が、その全因の代表的内容だ。無知または無識または無知識のいづれの一表現たりともが、それゆゑに、現代國際不安因の完全記述たりうる。

國際不安因を、それの機會または事情にしたがつてでなく、それの自體または本質にしたがつて認識することは、しかしながら、一見して偶然にも、再考して自然至極に、現代に發達しつゝある階級際的不安恐怖の本質因を完全に認識することだ。

國際不安因を考察したわたくしの努力は、人性認識と、消費認識とに於ける或る不完全の發見によつて、結論的に酬いられた。その消費認識は、現代人が、自身、現に、好んであるひは自己保存、自己成遂の、すなはち廣義の愛己的必要意識に於いて消費しつゝある、及び消費したく願欲、意志しつゝある社會財、文化財の客觀的原因、歴史または起原に對する認識を意味した。社會財及び文化財は或る生産だから、或る筋勞的腦勞的生産の結果にほかならないから、社會財または文化財に對する認識は、或る生産に對する認識を意味する。すなはち、社會財または文化財に對する認識の缺乏は、或る生産に對する認識の缺乏を意味する。生産を、それの消費欲滿足の現實形に於いてのみ認識し、それが、その現實形に到達しうるために必要とする、それの發生態及び發達態に於いて認識しないことが、いふところの認識の缺乏だ。ちやうど、太陽を、それの光りが網膜に到達した以後の直接觸覺のかたちに於いてのみ認識し、その以前のかたちに於いては認識しない原始的不完全認識の場合にそれは似てゐる。太陽崇拜は原始人に於いて顯著であつたが、太陽に善意の存在をさへもかれらは錯認したが、社會財及び文化財の生産者に對する憎惡は現代人に於いて顯著だ。自己が必要的に消費す、社會財及び文化財の原因體には、現代の消費者は、意識の缺乏を、あるひは惡意の存在を主觀的に性質づける。西洋哲學史の開卷第一頁が、宇宙は水だといふ自然哲學に內容づけられてゐるといふ事實にも例示される通り、また現代の心理學、倫理學、社會學、哲學の類が、社會的環境から虚僞的に抽象された個人心理學、個人倫理學であつたり、現存の意志を忘れた過去社會學であつたり、社會的經驗及び實在を注意の圏外に置く自然哲學及び主觀哲學

であつた。[illegible]にも[illegible]、人類[illegible]は、人[illegible]、目[illegible]とをにしになる起點と[illegible]を、人生における[illegible]に拘らず、すなはち人生における一[illegible]て、分析し、闡明してゐることを、われらをして、この場合にも注意せしめる。

現代に於ける階級際的不安恐怖の第一因は、現代の消費的有力者が生産意志を、その有力ゆゑにみづからは持たずに、ひとへに消費力の大にまかせて、自己の使用されずに浪費しつつある生産力と、生産者の滿たされずに鬱積しつつある消費意志とに對しては完全に閉眼して、専ら自己の消費意志のみに機會を與へる經濟的封建制に第一に內容づけられてゐる。消費意志に代表される人性を、現代の消費的有力者は、現代の生産者に認識しない。生産されるものが物品である場合に於いてこの不認識は殊に完全だ。生産されるものが物質的特徴を最も顯著に具備するがゆゑに、生産行爲自身、生産者自身も物質的な或るものだ位に、現代の消費的有力者はほとんど考へてゐる。

經濟的生産は文化の一內容だ。原料と機械と工場と運搬機關にさへも、それの選擇、それの發明、製作、使用が關する限り、それはあきらかに人爲だから、文化質が帶ばれてゐるが、勞働、技術、科學、組織は、一見して明瞭至極に或る人爲だ。人爲がすなはち文化だから、それらのものは或る文化的事實だ。經濟的生産は、人の作用及びそれの結果の或るかたちにほかならない。

これだけの事理に對する認識が完全であれば、そして、經濟的生産は、技術、科學、組織のほかに、いはゆる勞働を、絕對不可缺の純人爲的一原因とする現象だといふ事理に對する認識が完全であれば、勞働者が或る人性的實在であり、勞働が或る人性的作用であることは、思考さるべく、問題とさるべく、あまりに自明だといはねばならん。

消費的有力者に代表される現代人は、しかるに、生産されるものの物質的特徴につまづいて、生産行爲及び生産者の

人性的本質を有るか無いかの不確實なもの扱ひに、第一にかれらの知力的淺弱及び經驗知的缺乏ゆゑに、する。健康教育も、家庭も、娛樂及び興怡も、名譽も、權勢も、自由も、成長の悅びも、表現の滿足も、高級文化生活の體驗及び味識も、深い人性的榮辱本能の保護も、勞働者にとつては、自分たちにとつてと比べては殆んど全然不必要なもの、無用なもので、客觀的にあるとかれらの知性は事實上結論してゐる。知の眞切篤實なるところ卽はち是れ行だと、陽明がいうたが、いかにもその通りであつて、人性は、自己の知的內容を、いひかへるならば知的自己を、行的自己に於いて無制限に僞はることは出來ないやうに組織されてゐる。現代の消費的有力者が、現代の消費的無力者の大部分を形成する勞働者に對する行的態度及び待遇は、かれらの惰性に於ける殘忍、冷酷を證示するよりも一層の深度に於いて、かれらの知力及び經驗に於ける弱と乏とを證示する。いふところの行的態度及び待遇の大部分は、勿論、制度、慣習のかたちに於けるそれだ。

手工時代、家庭工業時代の傭はれ勞働者は、或る點に於いては、現代の勞働者よりも奴隸扱ひされたが、主人はかれらを熟知する機會を持つたがゆゑに、主人はかれらに對して人情を持ちえた。知が情を決定する一例として注意される。

現代階級際不安の本質的第二因は、消費的有力者に代表される現代人が、勞働が、それの結果としての生產のかたちに於いて、いかに直接に、したがつて、それの被消費的現實形獲得以前の狀態に於いても、間接ながらいかに確實に、かれらの消費意志に達成を與ふる一決定力であるかをリアライズしないことにある。それを眞切篤實に知らないことにある。

勞働及び勞働者に於ける人性的本質と、勞働及び勞働者が經濟的生產に對して確實に保有する一決定權、及び經濟的生產が經濟的消費意志に對して確實に保有する全決定權とは、しかしながら、勞働者自身によつても、かれらが無力で

まつたあひだは決して知られなかつた。

勞働者が有力になり始めたのは、勞働者同志が密接に共同生活を營みうるやうに至つた、すなはち原始的經濟生活に代はるに及んで、鑛山、工場、鐵道、河川、港灣、市街の各所に於いて、勞働者は、限りなき同業相識の機會を自由に享樂しうる新境地に再生した。知識は情愛を生み、雜居相識は團結に機會を與へる。勞働者の同業組織、文字通りに職業組合、作業團結である勞働組合がこの事情下に發生し、近代式産業の發達と共に發達した。

勞働者同志が相知る機會は、勞働者と非勞働者、なかんづく組織者、投資的組織者、單なる投資者との間なる直接相識の機會に比して、退潮に比された進汐の如くに增進した。疎知は批判、無頓着に機會づける傾向を有するに反し、冷忍、殘酷に機會づける傾向をさへ有するに反し、親知は同情、關心、護成、愛助に機會づける傾向を有する。それはひいき、惑溺に機會づける傾向をさへ有する。勞働階級と資本階級とが對戰的兩大團のかたちに於いて新たに産業的社會を區劃づけて來たことは、またそれに誘發されて一般無産階級と一般有産階級とが一層包括的に同樣のかたちに於いてさうして來たことは、かくして、新環境が人性に新反省、新自覺、新發達を與へ、それが社會に新現象を進化的反射、進化的報復のかたちに於いて與へ返へす一般形式の一新例であつたのだ。

科學が工藝を生み、工藝が勞働團と資本團との對戰を生み、いな、それよりも先きに勞働者の相識を生み、勞働者の相識が勞働者の組織的團結の可能に對する知識を生み、その知識に助けられて勞働者が自己の人性的本質と勞働の對消費階級的支配力、對消費意志的決定力、對非勞働者的真價をいまさらの如くに驚喜して發見し、組合的罷工の續發と擴大と進勢とに打擊され、脅威されて資本家及び一般消費階級がさらにいまさらの如くに錯愕して勞働者の人性的本質を、内實的には性惡說のかたちに於いて、表面的には人格說のかたちに於いて、また勞働の對資本家自身的、對一般消

費階級自身的必要價、したがつて決定力、支配力を被強制的に發見せしめられた。

資本家及び一般消費的有力階級すなはち一般有産階級が、人性的本質を、性惡說のかたちに於いて自己に發見し足らず、性善說のかたちに於いて勞働者に發見し足らない現狀は、またかれらが、自身進んですべての筋勞に從事するかたちに於いて、勞働を全然自治、自營に移す意志と確信をばすこしも持たずに、技術をも、科學をも、組織をも、資本をも、殘らず悉く組合の一手に引き受ける意志と確信を無制限に有する勞働者との對戰を、勞働者の本質的人格性すなはち自己目的質と、勞働の本質的社會性すなはち自他目的質とを知らない根本的無知の兵法に依賴して多少とも樂觀しつつある現狀は、かれらのがはに於けるそれだけの識力及び經驗知の缺乏を意味する。

勞働者のがはにも、非勞働者に於ける人性的本質と、非勞働的形式に於ける生産とに對するかれらの認識に於いて多少の缺乏が看取される。しかしながら、かれらの生活は消費によつてでなく、生産によつて特徵づけられる性質のもので、明確、鮮鋭、顯著をきはめたかたちに於いて、あり、しかもその生産が、かれら自身の本質的人性の最低限以下の保存を辛うじて目的とする性質のものであるがゆゑに、すなはち、かれらの生活は、かれらの隣人及びかれら自身の衣、食、住の生産によつて最も代表的に特徵づけられる性質のものであるがゆゑに、かれらの自覺は、必然的に、それの對社會的影響に於いて基礎的であり、それ自身に於いて本能的だ。社會のいかなる權威力をも否定しうるが、社會のいかなる權威力によつても否定される可能なき原始的支配力としてのかたちに於て本能的だ。それは、最も底層的であるがゆゑに、それに理解なきいかなる上層物をも、意にまかせて龜裂させ、搖落させ、倒壞させることが出來る。勞働が永久に社會の淨化力であり、地の鹽であり、すべての善の象徵であるといふ判斷は、社會に於ける勞働の位置によつて確實に理由づけられる。

人性の根本實に二たつはない。性情は二つでなく一元だ。知力と感情とは共に、わたしの根本にはにかにおいて、ではいたつて、
な內包だ、形式化し、具體化するにしたがつて、限りもなき無窮が現はれる。もしもかりにわたしが、
人々を完全に知ることが出來たならば、その瞬間に、平和の大部分は消されるだろう。性情がもともと同化するとと
いふ判斷は、人類の根本性情がそれだといふ判斷に比して、現代の反省と思索と問題提示とが遙かに大きく寄與するも
習のものだ。

以上に於いて、わたくしは、不安恐怖的現代の存在及び原因を、國際不安と階級間不安との二者について、代表的に、そのかたちに於いてまた例證的に、そして多少統一的に、多少斷片的に、注意した。他の特徵によつて認識される現代的不安恐怖的現象は、要するに原則に於いて前二者と共通であり、ただ材料と事情とだけに於いて特異であるだけだといふことをいまは注意して問題の他の一角へ考察を進める。

三　不安恐怖的現代の存在の第一價値

人生に於いて、不安の感覺は問題の豫覺を、不安の意識は問題の發見を意味する。問題は進步の母だ。もしもわが百年前後の過去に不安がなかつたなら、維新が意味する進步は生まれなかつたらう。不安は問題を生み、問題は理想を生み、理想は實驗を生み、實驗は失敗による反省と成功による確信を新たにその實驗者及びかれの交通、接觸の範圍內に、すなはちかれの社會に與へる。

不安は、しかしながら、現實に對する價値判斷の或るかたちだ。現實に對する價値判斷は、しかるに、現實に對する認識の完全、不完全によつて、自身の完全、不完全を決定される。聰明にして熱意ある理想は、そしてこれのみが社會

改良、社會進歩の最直接の創造者だが、深徹し、全達した現實認識のそとからは決して生まれない。

不安恐怖的現代は、現代人をして、現代を觀察的、反省的、思索的に先づ深く注意せしめる必然がある。社會科學、社會哲學、人性科學、人性哲學、それから自然科學さへもがそれに附隨して、新發達を、不安恐怖的現代によつて豫約されつつある。不安恐怖的現代の第一價値はここにある。

不安心理の諸相
回避と闘爭の二心理

千葉龜雄

緊張と窒息の世界

社會不安と、世界不安の現情は、現代文明下における、人類生活と人類心理の、病的なほどの緊張から生れる。その緊張が刻一刻に強まつて行く。そしてその緊張が、さらにまた因果をなして、社會と世界の不安の累層をなをと高めて行く。

To Die in Harness に「スペクテエトル」で、こんな風に嘆いて居る一人があつた。職業階級の中には、幸福といふ大きな源泉が、もうすつかり取り拂はれて了つた。頭腦勞働者は、古風な人々が樂しんだやうな、「生活の午後」といふやうな幸福をもう望むことが出來ない。日中の重い惱みと炎熱にのたうち廻りながら、凡てが待ち望むものは、休養する時間である。少なくともいくらかづゝ、「荷が輕くなつて」行く時間である。そして、その待ち望む「生活の午後」を得て、或る者は、自分の道樂のためにその數時間を費やそうとしやう。また或るものはそこにある人生を、もつと落ち付いて考へて見やうとする。或るものは一すした旅をしたい。或るものはその際でぶらぶらしたい。何にしても、定木でおしたやうな日課で抑へつけられない。何程かでも餘裕のある暮し方をやつて見やうとするのだ。それが誰も誰もの望みなのである。ところがけふ日の生活では、彼等の前にはそんな祭日などといふものはもう迚も夢にも望めぬのである。人生は、昔あつたよりも數百倍も世知辛くなつた。そこで彼等の待ち望める一つの自由は、たゞこの「死ぬまで仕事は止めない」といふ自由、たゞそれだけがある。ところが、彼等が、斯うした緊張、過勞、窒息の情態にある故に、なをと「氣晴らし」が大切なものとなるのであるのに、一日の生活に、生活の午後が無い。そこで一つの人生にも、人生の午後が抹殺されて來る。何といふいたましい人生であらう。

近代人類の、この病的な生活と神經の緊張窒息は、心的に二つの逃げ路或は旋回點を見出して、そのどちらかに、暫時か或

は永遠かの安定を求めやうとする。二つの逃げ路とは何か。絕望と疲弊につき落された揚句、何等かの捌け口を求めて、逃避するのがその一つである。その正しい慾望を達成しやうとする熱意から、勇敢に戰鬪の手段を擇ぶものが他の一つである。逃避するものは、もとより人生の戰線から逃げ出したものである故に、現實の人生に生きることは、非常な痛苦でなければならぬ。けれども、生きる間は、なを逃避しながら、人生の現實に當面せざるを得ない。そこで實人生の脅迫觀念が、彼等に對して絕えない不安を持ち來すのである。なをまだその不安が、ますます彼等の神經を興奮し、緊張させ、そして彼等の官能の頹廢的衰弱を、ますます極度に傾むけさして行く。次に積極的な戰鬪者の方面でも、それが社會不安を人類の心理に刺激する程度は、前者に數萬倍まさるとも、決して劣るものではない。いな現代生活が人類心理に與へる不安の多くは、むしろ後者の鬪爭心理にあるといふ方がよいやうにさへ思へる。それは鬪爭心理が殆んど人類の本能に胚すものでないかを疑はするまでの執着深さを、近代世界と社會の情態が示して居るのも一つであるが、それとともに、鬪はねばそしてどちらかが勝たねば、とても見込みのつきそうのない社會の既成狀態の根深さが、一寸思つて見るだけでも、底知れぬ恐怖と不安を惹き起させる充分な價値がある。さてこの鬪爭はいつ終るであらうか。またこの鬪は、範圍をどこまで延長することであらうか。どんな知識者もそれに對しては充分な答辨を與へ得るものがない。

そして現代社會人と世界人心理の緊張と窒息は、一方から見れば、實にその發生を、この二つのどちらかの心理に根ざすものであり、しかしてこの二つの現實は、更に因となり、果となり表裏して居て、決して、一つから一つを取り放せぬものである故に、この不安の心理と現實を取りのぞくことが、なを困難な仕事となるのである。

何故なら、逃避する者は、その觀念からも感情からも、出來るだけ、そうした鬪爭の世界を否定しやうとする。或はその鬪爭が自分達の背つて在つた世界の、安定を土臺から覆へすものであることを知るために、そしてその安定を出來るだけ長く保たうとする爲めに、消極的にも、そうした現實の地位を保存しやうとする。だから逃避の銃口からのぞいた彼等の社會不安心理には、そういふ恐怖が可なり重大さを占めるともいへる。然るに社會改造の戰線に立つものから見れば、かうした逃避者の心理を可能にするやうな現實そのものが、逃避者の心理とともに好ましくないものなのである。で、かれらの砲火の半沿線が、そうした情態を持來す現實及びその現實の奧に逃げ込んだ

逃避者の大部に向つてもともに向けられる、そこでは會不ごか、
一面の苦をもつて、現代世界の至上者に肉迫して來ることになる。

女性自殺者の増加

けれども、前に擧げた逃避者の分類を、單に始めから現實と將來を回避する部分のそれだけだと悉くを見るならば、それは大きな錯誤でなければならぬ。

マクス・ノルドウは、十九世紀末文明の纖維を、或る點まで精細に解剖した外科醫である。彼れは一方に國民の黄昏たる、世紀末の廢頽神經を民衆に發見すると共に、他方必ずしもそうした廢頽者のみではなく、既成の社會の制度や現代の世界情態がそうした廢頽者を養はねばならぬ必然性をも決して見のがさなかつたのである。即ち彼れが「因襲の虚僞」の總論で述べたやうに、彼が「現代人の苦悶」を以下のやうに結論したのは正しい。われらの觀念と、われ等の文明のあらゆる形式に潛む永遠の闘ひ――即ち、われ等が、かくも明らかに虚僞であるとわかつて居る制度の中に、なを活きて居なくてならないといふ必要は、われ等をして、どうしたつて深い厭世と懷疑の念を抱かしめずには止まない。それが全文明に亘つて動いて居るところの、恐怖すべき破綻である。この排し得られない矛盾の中に、われ等は、人生のあらゆる些事、あらゆる努力の價値をさへ失つて了ふ。今日すべての日々を通じて、朝には夕に、[illegible]すことこその、熱烈な煩悶と不平がそこに起るのであると。

ノルドオが擧げたやうに、そうした虚僞の近代文明が、民衆の感覺を壓迫して、「死人と一緒に墓場に閉ぢこめられた生きた人間」のやうに、もしくは、「狂人と一緒に閉ぢこめられた健全な精神の人間のやうに」苦悶した揚句、絶望し、頽廢して了ふ人々も決して少ないとはいへないのである。たゞノルドオの生きた時代には、單にその深刻な煉獄の中に煩悶する人間を見ただけで、現代のやうに更にその煩惱境をつき破つて勇ましく立ち上る勇敢な闘士を見なかつただけだ。

が、ノルドオがこゝに擧げたやうな、近代文明の努力に抵抗した揚句、つひに弓折れ矢が盡きて、つまりはそうした絶望な境地に忙ぐものの、決して少くないことも大いに注意せねばならぬ。

たとへば、近代の文明國における、女性の自殺が、夥たしい數に上る如きもその一例であらう。即ち歐洲の中でも、すべてに保守的であるイギリスでさへも、近年において、女性の自殺者が男性のそれに比べ一驚くべき高度を示す。いなそればかりではたい。十五歳から二十歳までの妙齢婦人の自殺が目につく

ほど多くなつた。次に、精神病者の數が、男性のそれを遙かに超過して居るのも一つの記錄である。またフランスでは、男性の一番多く自殺する年齢が四十歳から五十歳と統計せられて居るのに、女性の自殺者が、十五歳から二十歳のものが一番多數である。一九一一年の統計によると、イギリスでの女性精神病者が、男性の精神病者よりも超過すること約一萬人で、その多くは未婚の女性である。そしてそこには、五四、二三三人の未婚者と、二一、二九九人の結婚者と、九、二二九人の寡婦を數へ得る。

それなら、近代において、何故斯く若い女性の自殺が多數であるか。その自殺する若い女性が、どんな社會に居るものが多いかと見ると、それは職業階級などにあつて、男性と仕事を一緒にする機會を多く持つものである。そしてそれは、單に自殺者を多くするばかりでなく、若い女性の精神病者と犯罪者を多生しつゝある。卽ち若い女性の男性との職業的接觸が、自ら知らず女性の性的刺激を誘惑し、しかも、結婚する機會と生活を多く奪はれて居る彼女等をして、絶望の極、もつと大きい悲慘であるところの、自殺の途を撰ばせるのだと、心理學者が論結する。だからハヴェロック、エリスの如きは、キャンベル博士が、自殺者としての女性の數が、男性よりも平均に少ないといふ議論を否定し、たとへ見たところそんな風であつても、女性というものは、習性として、男性などよりも、自殺しやうと思ふ事が非常に多いのだ。つまり本能的に自殺する傾向を持つて居る。たゞ必ずしも、それを悉く實行に移さぬまでの違ひに過ぎぬと抗議して居る。しかも時代と文明の影響と壓迫が、その第二本能を刺激する機會が多いとしたなら、女性自殺者の增加して來ることは止み得ない趨勢と云はねばならぬ。

性の不安、これもまた近代文明の頽廢と救濟に、見のがしてならぬ重大な懸案である。

情緒への逃避

現代における性問題は、思ふに二つの視角から眺められる。一つは性に對する興味であり、他は、性に對する不安である。性に對する近代的興味は、性に對する病的な歡樂や、追求や、研究の驚ろくべき發達を促がしたが、それは單に、現世の生活にあまり直接な交渉を持たぬところの、有閑階級の享樂感を滿すもので、彼等の異常な性的慾望は、同時に彼等の官能や感覺をますます頽廢するところの、兩刃の劍たる役目を勤めたに了る。それはより多くサイコ・アナリストの領分に屬する。けれどもそれが、現代前紀の、變型的氣分に所依するものの多いこ

とは注意されねばならぬ。

いなそればかりではない、直接に、生きる生活に窮乏して、その本能である性的衝動を、自然の途に發散することが出來ぬためから、若い女性の中に、物狂ひ、幻想、メランコリア、病的な自己否定もしくは自己擴大、顏面掻痒、不眠症、幻覺、その他、諸種の秘密な習慣を養ひつゝあるのは、歐米における、職業女性研究者の一致した觀察である。そして彼等女性は、その本能的追求から忘我するために、いろいろな逃避の方法を考へ出す。それによつて、彼等はその病的な感覺を刺激されやうとするのである。で、或るものは　多量の藥味を入れた食物を攝る。或は大きな丸薬にして飮み込めるやうな食物を求める。バナナだの、燒き立ての麵麭、パイだのがいろいろにして喰べられる。さうかと思へば、パン屑だの、林檎だの、生きな植物だの、容易に嚙みこなせない堅い食物ばかりをとる者もある。それは不消化の恐るべき結果を思はずに、虚僞の食慾をそゝらうとするのである。また或る少女はさうした性慾望をまぎらすために、食つた度に食つた物を嘔吐して了ふ技巧を作り出した。昔しロオマの有閑階級の婦人が、食覺の快感を貪ぼるために、やはりこんな仕方をやつた事があるが、要するに、こうした食道機關の濫用が、たとへ極度までではないにしても、多くか、[illegible]若い盛りの時に、思ひ切つて生きられぬことを[illegible]

これもまた、いたはしい逃避の一例である。[illegible]「結婚」の中で、近代文明が、女性のヒステリイと共に、同性のヒステリイ患者を生む事實を擧げたが、あの頃までの女性のヒステリイは、家庭奴隷としての有閑階級婦人が、娯樂的に病的に感覺を尖らかされる結果から來るものが多かつた。が、現在の職業女性のヒステリイは生きることの鐵架が、彼女等をそうした異常變型者に育て上げて行くのである。かうした現代の逃避型こそは、社會事實として最も傷ましい一面でなければならぬ。

現代文明の一面

けれども强ち女性ばかりではない。現在の生活不安に脅迫されつゝある民衆が、感覺、もしくは情緒の方面に逃避の捌け口を見出さうとするのは、人類心理の止み得ない傾向でなければならぬ。感覺、もしくは情緒が、刹那の忘我に最も力强い衝動を與へるからだ。だから、アメリカの思想家フランシス・グリアスンが、近代文明下における民衆生活の一面を、「動情の爐」といふ語彙で掩うたのは、この意義では決してまちかつて[illegible]

い。彼はかういふのである。―われわれの情緒といふものは溶の火のやうなもので、われ等はその大きな仕事の爲に、薪を投げ入れるのだ。そしてわれ等の心的精力は、煙の中に浪費されて了ふ。イタリイのフエルレロオ教授は、「凡そどんな時代でも、人類が現代のやうな、永遠に漸加して行く、こんな激しい興奮の情熱と時代を見たことが無い。もし古代の人間が、もう一度蘇がへつて來たとして、恐らくその刹那の第一印象は、人間といふものが、みな狂人になつたのではないかと思ひうたがふ事であらう」と。

なるほど、蹴球などといふものは、それ自身では、無邪氣で面白い遊戯に過ぎぬ。然るにそれを僅か背くばかりで、競戯にあまり實際的興味を持たぬらしい數百萬人を素晴らしい程度に激動させるに充分である。それは、野球、クリツケツト、ポロ、テニス、拳闘のどれにも同様に引き當てられる。何といふ活力の無用な浪費であらう。

われわれはまた、「自働車顔」といふものを創造し始めた。自動車顔といふのは何であるか。それは、自動車をドライヴする女は、年より二十も老けて見えるし、男は、十五も老けて見えるといふのである。今日どこの階級にも、この動情的刺激が生み出したところの、それ自身の特殊な型といふものがある、それが一般社會的なものの場合になると、活動精力の空費が莫多量なものになると同時に、國家の利害にも、個人の肉體と精神にも、ますます破壊的なものになつて行く。

スピノザは説いた。情緒の忌むべきは、一つの動情が他の動情を殺して了はねば止まぬことであると。つまり人類は、二つの動情の刺激を、同時に享け入れることが出來ない。これぞわれ等が、引續いて刺激された二つの情緒の本質をどうしても區別して想ひ出せない理由である。最も大きく、最も珍らしくて最も強い刺激を與へるものは、いつも最後のものときまつて居る。そしてその刺激がどんなものであらうと、それは問はない。たゞ神經に新らしい刺激を與へ、感覺へ新らしい顫動を與へればそれでよいのである。かくして「顫動」といふ言葉が、現代の動情の耽溺と道連れになつて、殆んど一つの狂的流行になつて了つた。

神經衰弱時代

かくの如く、現代の民衆は、氣違ひのやうになつて動刺激の快感を追求して居る。そして、そこに苦しい生活の休養を求めるやうにして居る。けれどもそれは、決して「スペクテエトル」の一投書家が求めたやうな「生活の午後」でもなければ、また心

の和らげられるやうな一瞬時らしいでもない。たゞそれは、かれ等が生活の甘泉だと思つて掬んで飲んだものは、泉の水ではなくて、事實は海の苦潮であつたからだ。それはアンダ・マリナの與へる惑はしの水である。アンダ・マリナは大洋の泡から生れた波のしなやかさから彼女のむくろが生れ、泡沫の白さから彼女の皮膚が生れ、太洋の貪慾から彼女の魂が生れる。彼女の抱擁が誰のそれよりも誘惑的であり、彼女の肉體が、誰れのよりもたをやかなのはその爲めだ。そこで彼女は、あらゆるものの慾望を刺激するが、決してその渇きをいやさない。もし人が、あまりに澤山に海潮を飲むならば彼れは狂人となると云はれる。

人々は、人生の苦悶から遁れやうとして、たゞたゞ強烈な刺激の快感にすがりつく。けれどもそれはグリアスンが指摘したやうに、その刺激がどんなものであるかを吟味する際がないのだ。たゞ與へられるがまゝにその苦杯をのみほす。しかも一たびよび起された刺激は、決してそのまゝに死んで了はない。疲勞した知覺神經と頭腦中樞は、いやが上に衝動を求めて飽くことを知らない。實生活の不安に堪えずに、その逃避をたゞたゞ感覺に求めるものが、やがて神經の錯覺と疲勞のために、理性の導びきに從ふ判斷力を失なふ、そしてたゞ強烈な色彩、強烈なに已實在のみ限定する事を要求しない。かうして、常ならぬ不安を達觀することから出發したものは、常に不安に生きるので、夢遊病者のやうに、不安を興奮する材料を探し廻る。なぜなら、現代人が追ひ求める新奇な事實とは、何か知ら異常な感じを與へるものであり、それで神經を衝動するやうなものでなければならぬ。しかし實社會において、さうした異常な事實が頻々として生起することは、その社會狀態が、必ずしも安定したものでないことを語るからだ。けれども民衆の異常を追求する病的感覺は、眠つて居る異常事の耳を引張つて強ひて日光の下に起たしめねば止まぬ。われ等はその好い適例を現代新聞紙の上に發見する事が出來る。

原始に還れの聲

現代新聞の多數の讀者は、單に在つた事實を新聞が報道するだけに滿足するならば、現代の新聞は、いはゆる識者と呼ばれる階級が惡感視するほどに、新聞格が決して墮落しなかつたであらう。もしまた讀者が、理性で判斷し、知識し得る程度の記事を新聞に要求するだけならば、新聞格は、決して、今日在るやうに猥俗化せぬであらう。然るに新聞の多數讀者は、さうした社會の正常時の報道のみを新聞に求めない。出來るだけ異常

事の報道の多量であることを要求する。世界を通じて新聞界の努力の頂上とするところの、「特種（フイチュア）」や「ストオリイ」の仰々しい競爭がこゝから起る。大した内容でもないものを大袈裟に記述し、見出しや、大活字や、組み方やで、煽動性の極點ともいふべきものを拵らへ上げる。在つた事實を、逸早く報道することはもとより新聞の任務である。それさへも、掛値無しの正札であるのが宜しい。けれども新聞記者は、讀者の要求のどこにあるかを知る故に、凡てを調子づけてその刺激性に媚びやうとする。そして新聞存立の競爭は　新聞をしてまたまたかうした傾向を帶びさせる。讀者は、その大活字に含む暗示性によつて、極端な感情の煽動に陶醉すると共に、そうした異常事の發生に對して、絶大な社會的不安を感ずる。ネロがロオマを焚いたのも、そうした絶大な好奇心の犧牲であつた。アルツバアシエフは、現代では、決鬪さへも、一つの享樂機關になつたことを一つの作物で説いた。いな、戰爭さへも、一つの冒險的な遊戯である。ボルチエゼの小説「ルウベ」で、ルウベが、世界大戰におけるイタリイの立場を友達のムラツチと論じて居る。ムラツチが、イタリイが、最初はどの側にも立たず、交戰國の砲火線外に立つて、「類的中立の望樓から」戰爭を眺めて居た心理がいかにも神秘だといふ。するとルウベが、いやそれは、必死の決鬪をする人間が、審判者と、自分の皮膚を賭けて喜んで居るやうなものだ。つまり、高雅過ぎた教養を持つものの一つの現象だよ。と斷ずる。

かつては、あまりに高雅な教養を持つ有閑階級が、異常に織巧な感覺刺激を求めた世界がある。そこにノルドオの指彈した十九世紀末の、世紀末と變型時代が來た。またあまりに苛酷な實生活につかれ切つた、粗い教養しきや持たない、或ひはそれすらも持たない民衆が、ひたすらに卑近で、けばけばしい衝動を求めるところに、廿世紀現代の、挑發新聞萬能の時代が生れた。こゝでは、「ヘラルド」の故ベンネツトと、「ウオルド」の故プリツザアと、「アメリカン」のハアストが、近代民衆感覺を支配する三大巨人となつた。

が、かくして廿世紀の現代は、有閑階級、特權階級に屬する人々も　被搾取階級に屬する民衆も、だれもみな、感覺の上では、倒錯して居る。少くとも、疲勞するか、興奮するか、神經衰弱であるか、性格破産者であるか、どちらにしてもノオマルな情態にはない。理性が物を言はずに、感情が口をたつて居る、感情と感情との火花が散るところに、決して正しい理性の聲が全局を支配し得ない。民衆も世界も不安を怖れる。しかもその怖れる不安が、ますます果知れずに廣がつて行く。合理的

たゞ頂である。

文明の没落を叫ぶものがこゝに起つた。原始に歸れと高唱するものがある。文明は果して没落したか。原始には果して歸られるか。

新自我の發見

吾人は今まで、社會不安の暗示がひき起した、現實に於ける諸種の情態を説き、そして、それから逃れやうとする二つの逃路の中で、その一つの方の逃避者の群の採り上げた手段が、どんな結果をもたらしたのであつたかを先に述べた。そして、その夢遊心理がよび起した層一層の不安が、果ては、文明の没落と、原始の廢墟への還元までに、逃避せばならなくなつた、究竟の行き詰りを舉示せねばならなかつた。

けれども、單に嘗つて在つたものの大仕掛な破壊と、大規模な殘頽と、それから來る大渾沌そのものを直下に見て、そこに一つの世相の終焉を豫言することも、聰明な洞察で無いとはいへない。またその文明が、單にそうした、末紀的な衰弱しきや養ふだけの精力がないものなら、そんな文明の没落はたとへどんな光榮な過去を持つにしても惜しむに足りない。が、大なる混亂と頽廢と破壊が、必ずしもそれが没落する場合にのみ起る[illegible]ものではなくして、それは[illegible]排する道の得ることとなつた[illegible]人間には、[illegible]文明の爛熟つたを、没[illegible]行く民族の夢見てきたことには[illegible]に容易に断じ得ない。またいはゆる現代文明そのものは、それなに造作無く壊滅して了ふには、まだあまりに根強い内容と生命素を持つて居ることを思ふものである。だからとて、何もその文明が持ちつたへて、腐敗しきつた部分までを後生大事に保存しやうといふのではない。また新らしく來る文明が、今い文明よりも、どこもかしこも光輝あるものであるならば、舊文明を古草履のやうに棄てるには何の異存もない。けれどもこんな事を言てゐるのは、要するにまだ抽象した文明といふ言葉に捉はれて居るまでの事である。文明は道具である。道具を使ふものが人間である。文明文化はただ人類に光化を與へる一つの對象に過ぎぬ。もしその内容を持たぬものであるあらば、名にどんな文明でも決して文明でも文化でも無い。その意味で、もし没落してよい文明なら、それは本質において文明ではないからである。たゞ人類が、人類を理想的に高化する目標として、眞の文明を持つべきことは永遠に變らない規範で無ければならぬ。人類の世界は、どこまでも文明人文化人の世界で無ければならぬ。そうした眞價値を持つ文化が没落する時ここには、[illegible]

て全人類の沒落であることを覺悟せねばならぬ。

近代文明は、自我の發見から序幕された。現代における世界と社會の不安動搖も、本を掘り下げれば、また民衆の更に新らしい自我の世紀を表現するための、發見の努力に外ならぬことを知るによつて、われ等は、この不安に對して、新文明のほのぼのと明ける理想をこそ求め、決して文明そのものゝ沒落を齎想することが出來ない。たゞ古い文明の發見した自我は、まだ正しく檢討されてない自我であつた。自我の對象となつた自由そのものが、あまりに自己的で、勝手に解釋されて居たやうに。そして、人により、國家により、社會により、百人百樣に解釋された自我と自由が、現代までのやうな、富強な各自の國家と、富強で暴虐な掠奪の金權政治を作り上げた。そして、今や、その極度に曲げ歪められた自由と自我が、新らしい、正しい民衆の規範によつて建て直され、そこで、當然古い文明の色揚げが、現代民衆の熱望する所となつて來たのである。そこでは新らしい國家、新らしい社會、新らしい個人の意義が何であるか。今までその一切の意義を刈りかくし、ひたすらにその自覺を妨たげて居た舊自我の持主に對して、新らしい民衆が、社會正義のために猛然として起つて反抗し始めたのである。そこに現代の混沌があり、その混沌から不安が生れた。われ等はこの不安と混亂が、犧牲を出すことが出來るだけ最少限でありたいと希求する。けれども、この不安が醸酵する思想索においては、十分の必然性があることを認めざるを得ない。

社會不安と大戰

エドワアド・カアペンタアが、「文明の素因と救治」を書いた、それに對してゼエムス・オッペンハイムが、「何？　文明の救治？　文明の救治は、たゞより以上の文明をもつてするのだ」と評し去つた。まことにそうである。

文明を救治するものは、たゞより良い文明である。さらば、よし文明が頽廢したと考へられるにしても、原始に還れとは何であるか。文明世界における自我の確立とは、民衆個々が、正しい自我を中心として、世界を對象に運用し作用することである。原始の生活とは、自我を自然に屈從した生活である。自我もない、また個性もない。文化人は、社會に棲む社會人であることに始めて意義がある。原始の生活とは、社會を逃避し、回避して、對象の無い自我を滿足させる生活である。それは自己主義ではあつても個人性では無い。文化人の用意すべきは回避であつてはならぬ。鬪爭でなければならぬ。ジヤン・カルレル

は、ヴオルテエルがルツソオの[illegible]に對し、一本の[illegible]をして、四足の上に歩かせようとするものだ」と云ふした言葉を擧げ、「自然の中に、どこに個人性の權利があるか、彼れのたゞ一つの自然の權利は、裸で森林の中をあるき廻り、猛獸と鬪ひ、仲間から奪ひ取つた食物を食ふそのことだけである。そしてその仲間は、みな彼れのやうに自由で野蠻だ。が、凡ての他の權利を――絕對に、凡ての權利を、一人の人間が、皆な社會に對して負ふものだ」とし、だからルッソオの唱へるものが、個人主義ではなくて自己主義だと批難したのは聞くに値ひする。そこで吾人は、この現代不安の中に醸されつゝある回避傾向を否定し、その鬪爭意志の妥當性を認めやうとする。そしてそれが現實において、どんな旋回線を採りつゝあるかをこゝに改めて點検しやうと思ふ。

思ふに世界大戰の前において、多くの戰爭がどんな動機から起つたか。それはどこの國にでもが、「神秘的」愛國主義といふ強い衝動がどの國民の心理構成の中にもあつた。その衝動の根は、われ等の思議し得ないほど深い傳統であり、その衝動の前に立つては、文明に缺き得ない社會心も、同胞愛もみな粉微塵となつて碎け散る。そこで、もし文明といふものをこの上持續しやうとするならば、われ等に國民が國家を支持する動機を、他の別な方面に轉出させねばならぬ。そしてそれは新らしい[illegible]トラヂションによつて、彼等の本能を滿足させなければならぬ。たとへば宗教的狂信主義が、歐洲の社會を潰裂しやうとした時に、異教默認のトラヂジョンをもつてそれを救治したやうなそれである。そのトラヂションとは何であるか。そこに「兵力の經濟的無効」を證明する重大な意義を感じて、「大幻想（グレイト・イリユウジョン）」を起したノルマン・エンゼルがある。こゝに「大幻想」が與へた大きな新意義がある。そして彼がこの書について言はうとするのは大體かういふ意味であつた。國民同志の鬪爭の中に潜む、經濟的動機の自覺は極めて少量であると普通考へられる。ましてや、愛國主義國民主義の狂熱などは、殆んど何等の部分もそこに占め得ないやうに思はれるが、豈はからんや、缺き得ない充分な人生の情態が何であるかを正しく思索し、それによつて前のやうな過分な熱情を押し止め、それを善導することによつて、文化の將來を持ち來すのは、一にこの經濟的眞理の實現によらねばならぬ。云々。少くとも、戰爭における經濟能力の働らく地位を明確に指示した少數識者の一人である彼は、その經濟能力からの兵力否定をもつて、將來に戰爭の可能性の乏しいことを說いた。然るに、世界大戰が、その不可能を暗示すべきさ經濟的動機を中心として起つたのは、何といふ皮肉だといふべ

きであらうか。

そこで彼は、大戰終了後の大著「勝利の收穫」の中でから說いて居る。「戰時における敵國との鬪爭において、喧嘩好き、協同、强健が、充分な滿足を見出すことが出來た。今は戰爭が終つた。然るに、その今日でも、一たび非常な熱度で敎養されたその本能は、なを滿足を求めて飽くことを知らない。そして彼等は、二つの方面にその途を求めて居る。一つは、同盟國の間の鬪爭、他は國民團體の中での葛藤に。」

「で、われ等は、一見この道德的な謎と思はれるものに對して或る說明を見出すことが出來る。第一は、「戰後」といふ言葉はかつては、國際的結合の唯一の希望であり、それはすべての階級を、一つに統一する護符だと待ち望まれて居た。ところが蓋を明けて見れば。全く意外である。國家は、互にその殘忍な社會的混亂によつて狂氣にされ、果ては革命の脅威さへものしかかつて居る。第二は、戰爭が濟めば、協商國を分離して居たすべての古い惡感を拂ひのけることが出來ると思はれたのが、彼等の戰後の關係を見れば、戰後において猶をと惡くなつた。」……と。

民衆の一般不滿

なるほど、いはゆる「大戰の後」の時代が、大平和と、共和と、人類博愛の理想鄕だらうとは、理路としては許され[illegible]るべき結論であつたに相違ない。藝術家、宗敎家、思想家の多數も、もとよりしかく信じた。けれどもまた更に考へて見れば、世界大戰は、かく在るべき世界鬪爭の、わづかに序幕に過ぎなかつたのかも知れない。グスタアヴ・ル・ボンは、戰後の著作「反亂の世界」において、戰後の動亂が何によつて起るかを考へる。今日の民衆は、新しい時代、新らしい魂といふことを盛んに高唱する。けれども、精密にその意味を定義する人々が無い。たゞ新らしい魂は、一般の不滿の情態だとして、より特殊に表現されて居る。そしてその不滿は、變動を熱求する感情によつて作はれるものと見られる。われ等は、今日かくして、すべての階級、すべての民衆の間に、反亂の魂を發見することが出來る。

「戰爭は不平黨の多數を增したであらう。なぜなら、それは社會の固定した分子を土臺から搖り動かし、全社會の特種階級を片つ端から混雜して了つたから…。戰爭によつて作り上げられた「新成金が」が、「新貧者」の領分で圍まれて居る。そしてその「新貧」は、かつては社會精力の中心力であつたところの中流階級そのものであつたのである。」

けたこともル・ボン[等]、大戰によつて、不平黨の[氣]を増したこと否定する場合には、その真見の價値が損はれる。大戰によつて不平黨の數が増したのではない。當然増して來た不平黨の數が崩潰しかかつた舊世界の上に、この大戰を作り上げ、その大戰の吐け口によつて、不平黨達が、始めて社會の地平線に踊り出して來たのだからである。そして、大戰によつて小手調べをした彼等の闘爭精神、エンゼルのいはゆる、大戰によつて、「高い修養を經て來た」本能が、ますます本式にこれから展開しやうとするのである。そして大戰の起つた端緒であつた、民衆不平の總決算をそれぞれ清算してもらはうとするのである。そして、その反亂の一部分を爲すところのどんな愛國的、國際的闘爭にさへも、なを經濟素意識を多分に含ませずには居ない事實を見るところに、それは世界のこれまでに無い、最も眞劍で、最も大規模な闘爭の姿を持つものであることがわかる。なぜなら、民衆は現代において、始めて自分等の生命の眞實を把む事が出來て來たのである。そしてその第一目標は、先づより良く生きることに歸着する。生きること、そして良く生きる途を保障する生活の約束を求めやうとする事だ、意義ある生活の建て直しである。どんな生物も、生きやうとする意志、生きるが爲めに闘ふ意志よりも、恐らく眞劍で熱烈なものが無い。

[illegible]し、[illegible]された[illegible]、それ[illegible]に、より[illegible]一つの許き得ない離[脱]であり、[illegible]であると[斷]じた。あまり進歩し過ぎた社會的思想の頭腦を、平均な地位までに引きかへすために、一時全く、原始的な本能へ引き戻す心理の賠償法則だと説明した。が、少くとも現代の社會闘爭は、そうした法則とはまつたく正反對するものである。ただ解放といひ得べくは、高壓された不正と不合理な世界からの解放であり、また原始の本能へ引き戻されるものではなくて、光輝ある文明を建造するための闘爭でなければならぬ。

さらば建て直しとは何を建て直すのであるか。書き換へとは何を書き換へるのであるか。社會不安とに、その建て直しの條件と内容と經過とが、事情、ややもすれば、感受性の鋭い近代人を恐怖させるやうな、手段や情態を採り上げる傾向を示す爲に起り、またその當然に滿たさるべきものを容易に滿たされない不合理な缺乏の心理構成の相でもある。そこで、その不安を取り去る條件として、諸種の考察が諸思想家の頭腦に考へ出されて來る。

たとへばバアトランド・ラッセルは、現代の混亂は、四つの政治的勢力の干渉によるものだとする。一つは、産業主義が、

生する二形式―資本主義と社會主義であり、他の一つは、國民主義が派生する二形式、帝國主義と民族自決主義である。世界現代の混沌は、これらの四勢力の間の、巨大な衝突から萬事化生するものであつて、一方に資本主義と帝國主義が立ち、他方に、社會主義と自決主義が握手して居る。

恐らくこの大別は、正しく現業生活の現在を凝視する者にとつて、誰もあまり異議のない分類であらう。が、もつと細かに考察して、他方面から總括したのが、恐らく「絶望の文學」の中に、文明に對する五つの恐怖の抗議と八つの救治法を擧げたグレエン・フランク氏の分類であらう。

文明の恐怖と救治

彼は近代の西歐文學に、絶望を鼓吹する氣分がだんだん高まり行くことに目を向ける。しかしてこの絶望氣分は、近代の歐洲文明が、次第に暗黒時代に近づきつゝあることを暗示するものに外ならない。そこに歐洲文明に對する五つの恐怖がある。といふ。

第一は、民族が變型しつゝあるといふ生物的の恐怖である。

第二は心理的の恐怖である。卽ち群集と、群衆展開が、これまで進歩の大橋梁であつたところの、創造力に富み、反抗心に富んだ個人に取つて代るであらう。

第三は、經濟上の恐怖である。それは產業文明が、それ自身の均衡を失つて了つて、それ自身の肉體の中に、それ自身の腐敗の種子を宿して居る。

第四は施政的の恐怖である。といふのは、現代の世界は、あまりに大き過ぎ、複雜過ぎて、今まであつたやうな施政的知識では、どうにも取扱ふことが出來なくなつた。

第五は、道德的恐怖である。「野生的な現代人」は、これまで健全だとして考へられた凡ての基調に對して、片つ端から服從の義務を棄權して了つた。

それに對して、希望の文學、もしくはルネサンスの文學が起るならば、それはどんな要素をその中に含むべきであるか。それに對して、彼れの擧げた條項には左の如きものがある。

第一は、國民思想の教養である。もしあの大戰時を横行したやうな動物園そのまゝの状態に、全歐洲を固着さして置くならば、どうして西歐文明の新生が望めるだらうか。

第二は、經濟的國際主義の思想である。われ等は誤まつて、政治的の一角から、この國際主義の方に近づいて行つたのであるが、これは超政治的の形式をとるべきものであつた。卽ち新らしいルネサンスの國際主義は、樣式から機構に入り込むこと

でにたい。素朴からモノ段式へ進むことを告げたのであつた。

第三は、民主化された產業である。產業的專制政治は、政府のそれと同じやうに今では既に絶えた。尤も、その雙方に多少のさうした專制統治は殘つて居ても要するに舊態からの遺物に過ぎない。それを滅ぼすための闘者の上に勝利の星が護る。將來はかくてデモクラシイに屬する。少なくともよく討檢され、よく定義されたデモクラシイに。

第四は、事業自由化の思想である。といつても、自分の自由化といふのは、よくある情緒的自由主義を云ふのではない。たとへば「氣の毒な勞働者を高上」するために、價値のある社會政策を考へ出すのに專心するといふやうなそれでは無い。將來の產業は、どこまでも堅固な社會的なものを土臺とせねばならぬ。つまり感性から進めて行く產業組織よりも、科學的立場から生れる產業組織の自由化を謳歌しやうとするのである。

第五は、合理的政策の思想である。自分はこれによつて、政府を事實の根底の上に置くことを意味するのである。來るべきルネサンスは、科學的理知と政府との結婚をもつて理想とせねばならぬ。事實と政策の結びついた計畫は、單に危險な獨身主義の種を蒔くに過ぎない。

第六は、教育人道化の思想である。それは單純ではあるが、しかし[illegible]。[illegible]られなかつた。[illegible]することは、[illegible]かに重大なものなのである。

第七は、宗教社會化の思想である。

第八は、人類善種の思想である。

暴力主義の恐怖

思ふにフランク氏の擧げた五つの恐怖は、恐らく現代不安を掩ふ、社會權威の大半を數へたものであらう。たゞ第二の心理的恐怖として擧げたところの群衆が衆愚となり、ために時代知識の標準を低下しやうとの恐怖のみは、よく識者といふ階級からさへも聞く批難であるが、それは極めて聰明を缺いた思索と云はねばならぬ。もつとも、現代の社會不安には、殊にこの權威が既成社會に暗影を投じて居ることは大したものである。富も、地位も、特權も、一括して奪ひ取られ、ブルジョアニに代つて、プロレタリヤが統治する。が、プロレタリアの統治、民衆の統治は現代の民衆や無產階級の地平線までに、標準を引き下げることではない。民衆が、プロレタリアが、ブルジョア階級以上にさへも教養された全民衆知識の黎明である、知識の特權を、少數教育の機會を享け得たもののみに許して、他の大多數をそ

の支配に忍從させようとする。それが既成社會人の特權的な物の見方であつた。フランク氏の批判も、この點だけではその時代前を多くの特權者と同じくする。

なをまた、この五つの中に集められなかつたものに、性の鬪爭がある。男性專制の十數世紀根底をひつくりかへして、兩性平等の權利に還らうとする女性の革命がそこにある。

また氏が第四に數へた施政的恐怖に屬するもので、近來における東洋民族や有色民族が、白人文明とその統治から獨立しやうとする潮流もまた見逝すことが出來ぬ。エヂプト、トルコ、インド、支那。そこでは、みなかつて有數な文化の華が驚ろくべきさんらんたゝ光輝を示した。その後に、死火山のやうに永遠に死滅したやうに見えた。然るに世界大戰を境ひとする民族自決主義は、彼等の若い血が、新らしい血管に蘇がへつて來た事實を偶然に發見さしたのである。その驚奇すべき新らしい活力が、かへつて舊文明の上に、西洋文明の精華を汲み入れることによつて、どんな異彩に富んだ新文明を創り出さぬと誰が言へやう。

またフランク氏の條項に見えなかつたもので、暴力主義の恐怖がある。つまり反動團體がどの國でも、相應の勢力を有ち、保守思想の民衆の力を強制して、暴力をもつて合理法を破碎しやうといふ傾向である。これはフランス、イタリー、アメリカ、ドイツどこにもある。暴力は自然力でなく、物理力である。反省が無い。それ自身に何等の目的がない。たゞ機械とし、手段として働らく、手段である。そこでどんな非合理性のためにも無反省に働らく。そしてこの暴力を用ゐるものは、それが恐怖を知らぬからではない。合理性が當然に、自分等の地位に取つて還ることを自覺する恐怖から、暴力によつて、しばしでもその侵掠する者の歩みを遲くしやうとするのである。そしこ暴力を用ゐる動機の恐怖、用ゐた後の恐怖が、自分をも、敵者をもまた一般社會をも、より以上の不安た地獄に陷ゐれる結果になる。何にせよ、合理性が暴力のために何程かでも抑束されて居る現代の世界は、どの途、決してノオマルな世界とは云へぬのである。

現代日本の不安

テエムス河の水は、日本橋橋下に逝する。日本現代の社會不安相とても、決して世界を流れて居る不安の主潮と、それほど桁がちがふわけのものでは決して無いのである。たゞ日本といふ特殊の國情や社會が、たとへ世界と均等に持つ筈の不安相をも、或るものは色を濃くし、或るものは褪色させて居る程度は

あるまいか。

その點から云へば、わが國の特殊な宗教的な雰圍氣は、どの國に比べても、あまりに鈍く淀んで居る、これだけ決して在り得べき筈でないものが、大っぴらにその存在を許されて居る。それが政治に、經濟に、宗教に、社會に、兩性問題に、等、等等、無數である。それに對して挑戰するものの受難は、また決して生やさしい事ではないのである。國内はその通りだ。さて國外に一歩出やうとすれば、いたる所日本のために門戸が鎖されて、光榮ある孤立を餘儀なくせしめられる。國際感情の不安、經濟生活の不安が、またひしひしと國民に攻め寄せる。

[illegible]

[illegible]民衆がおもむことは思へぬ。けれどもたとへ[illegible]安でも、全くはけ口の無い不安といふものがあるものではない。たとへその不安の興奮の救ひが、單に感情の解放のみによるならば、感情の内訌は、ますますその心理を不安と恐怖の底につき落すに了るであらう。現代の不安がたしかに感情をもつて感情と戰ひ、或は感情の耳のみをもつて、社會の聲を聞かうとするために、猶と不安を嵩めつゝあることは疑がへないのである。そこでこの不安から、良い途に解放されるには、どうしても、一路合理性の導びきに從がうのが何よりも好ましい。

米國の排日立法と我國の經濟的不安

法學博士　堀江歸一

一米國に於ける排日運動――其歴史の一斑――日本の退讓外交――排日運動の終熄せざる所以――地方的から中央へ向つて排日の漸次發展、二日本移住民の排斥される理由――通商條約に對する除外例――二重國籍の取得――第一回勞働會議に於ける日本の態度、三米國に於ける富源と人口との分布――人種差別と戰爭の原因――移民政策に於ける一個のヂレンマ――移民政策に對する我國の態度――移民送遣に依る經濟的利益、四移民政策に代る可き三個の經濟政策――經濟的帝國主義――之に對する反對――戰爭に依る局面の轉回策――

一

米國の排日立法は今や現實の問題と爲り、近く其實施の曉に於ては、我國は殆ど米國に移住民を送遣する道を絶たれざるを得ざるに至るのである。始め加利福尼州に始まつて、日本移住民排斥の政策は次第に其効果を擴大し、米國に於ける我國同胞の住居、營業、新に渡米する者の入國を制して、已まなかつたが、遂に今回の如く發展して、國法を以つて、徹底的に日本人の入國を禁遏するに至つては、誠に我國に對して不謹慎なる差別的待遇を爲したものであつて、國交の根本義を蹂躙するの甚だしきものとせざるを得ない。蓋し米國に於ける排日運動の根柢は甚だ深く、又強い。千九百年桑港排日派市民大會が排日決議を成立せしめたに續いて。千九百一年加州知事が排日教書を州會に送り、州會亦日本移民制限に關する建議案を可決して、之を中央議會に送付した當時に於ては、此問題が將來如何に發展するかに就て、世人をして尚ほ判斷に苦しましめるものがあつた。或は加州農業地方に於て、地主や、農業經營者が勤勉誠實なる勞働者をして日本の移住民を必要とする事實は自然排日論者をして排日的態度を露骨に標榜することを愼ましめるであらうと云ふ觀察すら行はれて居つた。然も排日の氣勢は益々揚り、千九百六年桑港學務局が日本人學童の爲めに、隔離學校を設立する決議を爲した爲めに、始めて日米兩國に於ける公式の交渉案件として、排日問題が上ることと爲つたと共に、千九百七年日本政府が學童排斥中止の交換條件として、在布哇日本人の大陸轉航禁止に同意し、續いて同年所謂紳士協約なるものを締結し、日本政府自ら移住民に對する旅行劵の下付を嚴重にし、日本の自發的意思を以つて、移民制限を行ひ、斯くて米國をして日本の體面を傷けるが如き程度の移民排斥を行はしめざることを期した。是等の事たる、要するに日本が對米移民問題の交渉に就て、退讓を敢てする第一歩と爲つたのである。

然しながら斯る退讓的方針は移民問題を解決するに、幾何の資するものあるを得たであらうか。日本政府は爾來米國移住民

に對する[illegible]を開始し、[illegible]することとな[illegible]さゝ傾けつゝあるに相違なく、從つて[illegible]排斥の[illegible]にして、如何に日本の勞働者が[illegible]しても、移住民の[illegible]に依つて、之を侵害するを難しとしたのである。然も米國の排日論者は此程度の排日を以つて、足れりとするものではない。州市の政治に於て、將た又國の政治に於て、選擧の行はれんとするや、日本人排斥の一條を政綱に掲げて、運動すれば、日本人の入國に依つて、不利の影響を蒙る勞働者の歡心を結んで、彼等の投票を收め得るの情實は常に職業的政治家を驅つて、排日運動を標榜せしめる。斯くて千九百九年以來日本人土地所有禁止案は一再ならず加利福尼州議會に提出され、日本人の同州に於ける農事經營を脅かさうとした。唯中央政府は纔に日本と紳士協約を締結し、日本をして誠實に之を履行せしめて居ることとの關係から斯る排日的州法の成立するを以つて、日本に對する外交上の關係に於て、面白からざるものであるとし、千九百七年並に同九年に於ては、ローズヴルト大統領、千九百十一年に於てはタフト大統領其れ〴〵加州議會を說得して、斯る立法をして成立せざらしめることゝした。然も千九百十三年同一法律案の加利福尼州議會に提出されるや、ウヰルソン大統領の干渉も何等の效を奏するに至らず、同年五月始めて日本人土地所有權が禁止さ

れることゝなつた。[illegible]に[illegible]提出に依つて、日本人[illegible]の法律を可決し、[illegible]止すると共に、其米國出生子女の後見人たることを禁止し、千九百二十一年三月華盛頓州會亦日本人の所有權禁止を目的とする外國人土地法を制定し、千九百二十三年には日本人の收穫分配契約に依る耕作を禁止する法律、加州に於て成立し、日本人の歸化權や、土地所有權に關して、邦人の起した訴訟は悉く高等法院に於て、日本人に不利なる判決を下された。

以上の排日運動たる、固より日本移住民の本據とも云ふ可き加利福尼、華盛頓兩州に起つたのであつて、日本に及ぼす影響の大なる可きは論を俟たざる所であるが、合衆國の方から見れば、純然たる地方的案件たるに止まつて居つた。隨つて共國家的問題と爲らざる間に、阻止壓抑の道を講ずるのが我國外交當局者の當然爲す可き所であつたのである。然も外交當局者は紳士協約の締結に依つて、辛うじて我國の體面の表面上糊塗されることに安んじて居つた一方に、合衆國に於ける排日運動は次第に地方から中央に向つて發展し、千九百十五年にも、千九百十七年にも歸化不能外國人移民の禁止を含む移民法案は合衆國の議會に提出され、兩回共に外交上の關係に依つて成立するに至らなかつたが、千九百二十四年四月日本排斥を目的とする歸化不

館外國移民禁止條項を含む移民法案は日本政府の抗議に拘はらず、遂に成立し、國法を以つて、日本移民を排斥し、今後日本の移住民の合衆國に於て發展する望みをして全然水泡に歸せしめるに至つたのである。

二

合衆國が斯の如く日本移住民を排斥する態度を決したのは、固より近き將來に行はれんとする大統領選擧に備へる必要に出でたと見る可きであるが、假に斯る政治上の事件がなかつたとしても、合衆國に於て、我國の移住民を排斥することは、殆ど一つの傳統的事實であつて、勢の已む可からざる所に屬した。即ち(一)我國移住民の合衆國に於て營む生活程度は甚だ低いもであつて、粗衣粗食に甘んじ、陋巷に潜住して顧みず、米國民一般に生活標準點を高きに居らしめようとする努力を空しからしめること、(二)斯る劣等なる生活を營み、随つて低廉なる賃銀の下に、長時間の勞働を忍ばうとする移住民の存する以上は、自ら合衆國勞働組合の維持しようとする勞働條件の標準を脅かして、已まざること(三)日本の移住民が合衆國内に生活するや、毫も合衆國に同化して、渾然たる一體を成さず、自國の宗敎風俗道德を固執し、年を經て、論らざること、(四)啻に然るのみならず、彼等は合衆國に永住する念に乏しく、其つて得た報酬は出來るだけ貯蓄して、之を本國に送還すくて彼等の合衆國に來るや、要するに其富源を涸渇せしめるものであること、(五)加ふるに彼等の大都會に住る者は衛生道德其他の點に於て、好ましからざる非難あることは、常に日本移住民に對して、排日論者の加へる非難である。固より合衆國が外國人をして自國に同化せしめる條件の基本とも云ふ可き歸化の自由を我國に與へずして、我國移住民の合衆國に同化せざることを難ずるが如き、議論として背理の甚だしきものとせざるを得ないが、尚ほ右に揭げられた排斥理由の内には日本人として合衆國に向つて、抗論することを難しとするものもある。我國としては早く合衆國に於て我國民の爲めに、歸化權を獲得して置く可き道理であつたし、更に根本的に云へば、往年の通商條約改訂に際し、兩國民の締盟國間に於ける來往、營業、財產所有の自由を認めるに當り、其適用を絶對無限とす可き道理であるに拘はらず、特に當時の我國代表者をして

日本帝國政府は勞働者の合衆國移住に關し、過去三年間實行し來りたる制限及び取締を從來と均しく有效に維持する覺悟なり

と云ふ旨を宣言し、移住民送遣國である故を以つて、通商條約

に[illegible]れた[illegible]取得に[illegible]へらるゝを[illegible]の途を[illegible]にした。而して[illegible]に就ては、我國自ら之を取得することに努力せず、假令合衆國に出生した我國移住民の子女が出生に依つて、市民權を取得する場合に於ても、尚ほ彼等をして我國籍を脱せしめず、爲めに二重國籍の取得に惱ましめるが如き、求めて排日論者に歸化權なき國民を親とする子女に市民權を與へざる主張を試みしめる口實を與へるの嫌なきを得ないのである。斯の如きは、我國一部の國民が偏狹なる國家的思想に制せられ、一度び我國民を親として生れたる者は終生日本人たらしむ可く、外國に出生した故を以つて、外國人たらしめるは、毋國に忠なるものでないとするが故であらうが、斯る思想の移住民政策を通じて、國の勢力を外に張らうとする要求に背馳するの甚だしきは、論を俟たざる所である。

斯の如く我國自ら對米移住民の送遣若しく移住民の合衆國に於ける發展を困難ならしめ、一方に移住民問題の解決を急としながら、他の一方に之を妨害しつゝあるの趣きなきを得なかつたが、更に我國移住民の合衆國に於ける聲價を失墜し、排日論者に日本人排斥に就て、恰好の口實を與へたものは、實に第一回國際勞働會議に於ける我國政府代表者の態度であつて、八時間勞働制、夜業廢止等に就て、總て日本の特殊國として特別の取扱[illegible]にこと[illegible]日本の[illegible]作の[illegible]でき[illegible]容されることを表[illegible]したものにほかならない[illegible]日運動の本據である合衆國の[illegible]に於て、[illegible]る以上は、同國の排日論者が之を捉へて、日本移住民排斥の[illegible]に充てのは勿論、勞働運動者、社會改良家、教育家等も、亦之に與するのが當然であつて、爾來合衆國に於て、排日運動の火の手が猛烈に爲り、地方的に局限されて居つたものが國家的のものと爲り、遂に爆發して、今回の如き徹底的排日計劃に進み來つたのも、敢て怪むに足らないのである。

三

右の如き理由に據つて、合衆國が日本移住民を排斥することは、濠洲に於て、南阿に於て、亦同樣の處置に出でる理由と爲る。否濠洲の如きは社會政策上の理由に基いて、所謂白濠洲を建設することを以つて、年來の理想とし、白皙人種よりも生活程度の劣り、又勞働能率の與からざる有色人種の渡來を拒否する政策を講ずることに就ては、寧ろ合衆國の先鞭を付けたものであると云へる。南阿聯邦亦其富源を白皙人種の間に獨占し、[illegible]て他に之を頒與せざることを以つて、對外經濟政策の根柢と

て居る。一國に於ける人口と富源との割合に就ては、國に依つて、其れ〳〵相違の存することを免かれない。合衆國、濠洲、南阿聯邦の如きは、其抱擁する人口の寡小なるに對して、其現に地上に現はれ、又地下に埋藏される富源の廣大であること、容易に窺ひ知るを得ざるものありと稱されよう。然らば是等の國は宜しく其國の全體を開放し、富源の割合に、多數の人口を收容する國から、其一部の過剰人口を吸引し來り、國際間の廣さを通じて、人口と富源との分布に均衡を保たしめて、始めて世界全體に人の生活程度を向上せしめるを得る所以と爲り、經濟上の幸福を最も豊に人々に頒つ狀態の出現を期するに至る道理である。若しも今日總ての人々が神の心を以つて、各自の心としたならば、假令ひ人種に如何なる差別があり、又其居る所の國籍に如何なる區別があり、又其れ等の國が如何なる境界があらうとも、自他を擧げて、一切無差別の社會を出現するに至らしめなければならないのである。然るに今日各國の間に踰越す可からざる境界の存すると共に、人種の差別に基く排他的觀念も亦相當に強い根柢を持ち個々富源の豐富なる國に定住する國民は其富源を自國民又は自國民と同一人種の國民だけの獨占に歸せしめようとし、廣く他人種に屬する國民の來つて、之を利用することを妨害しようとする。此種の主張は其國民生活の基礎に關係するの故を以つて、頗る牢固なる力を持ち、正とか、博愛とか、平等とか、誠に欽す可き主義を標榜し國民であつても、生活上の必要を眼前に控へては、外國並に外國人に對して、偏頗不公正の所業に出でゝ、毫も憚る所を知らないのである。

日本は曩に歐洲戰後の講和會議に臨んで、其全權委員をして國際間に於ける人種差別の撤廢され可きことを提議せしめた。蓋し關係諸國は國際間に於ける永久の平和を確保する爲めに、國際聯盟の約定を締結せんとするに忙はしかつた。此際に人種差別が何時までも撤廢されず、或る一國は國內に於ける富源の貧しきに拘はらず、多數の人口を擁し、彼等をして劣等の生活を營ましめなければならない慘狀に居る。然も諸外國は人種差別を云々して、斯る貧しき國の國民をして其豐富なる富源に近づかしめないとすれば、富源に乏しき國は結局武力に訴へて、他國の富源を奪取するか、又は之に接近することを強要するか、二途の一に出でざる可からざる道理である。斯く考へたならば人種差別の維持は爲めに不利なる影響を蒙る國に向つて、武力に訴へて、此桎梏を脫せよと云ふことを教唆し、煽動するものであつて、國際間の平和を維持するには、何としても人種差別は之を撤廢し、富源の存する所には、其存することに相應する

だけの人口の吸引さるゝ途があることなければならない。[illegible]に達する道程に人種差別の如き障害が存する以上は、之を除去することは、當然の事であつて、我國全權の主張した此提案位正當の理由に基礎されたものは、殆ど他に其比を見ざる次第である。然も列國の偏見は今日に於けるが如く、當時に於ても、譲る所を見なかつた。而して此日本の提案に反對する國の多くは、人種差別撤廢の結果として、日本移住民の入國に對する制限を撤除せざる可からざるに至ることを不利であるとしたのであつて、此一事を以つてすると、人種差別が人種に對する反感と云ふことよりも、經濟上の理由に基いて居る所以を知るを得るであらう。茲に於てか、我國の移住民政策は一個のヂキレンマに陥らざるを得ない。我國民の内國に於ける生活狀態劣等であつて、勞働條件も亦不良であり、隨つて其れ等の優良である外國に一部の國民を送遣しなければならない場合には、外國に於て之を受入れることを拒否する。而して斯る國の經濟狀態が發達して、相當の程度に達し、多數の國民をして優良なる生活を營ましめるに至つたならば、一部の國民を他國に移住せしめるに就て、其國の反對を受けないであらうが、斯る曉には國民の外國移住を必要とする時代を離れてしまうであらう。即ち移住民を送遣したい時には、外國で受入れて呉れず、受入れて呉れる時には、最早や送遣することを要しない[illegible]狀態に陥ることを見ると云ふので、移住民[illegible]る一のヂキレンマなのである。

之を日本の實際問題に適用して考へると、日本に明治初年から今日に至るまで、依然として外國に移住民を送遣することを必要とする經濟狀態に居るのである。我國に比較して、外國同種階級に屬する國民の生活程度の高いことの如き、外國に於て勞働に對する報酬の我國に於けるものに比較して、遥に高きことの如き外國に於ける生活費の相當に高い事實を勘定に入れても、尚ほ賃銀の實額の高いと云ふことの如き何れも、我國に於て人口の割合に、富源の乏しいこと、此狹隘なる面積の國土に於て多數の國民を給養さするに、困難である證左を以つて目される。斯くて明治初年以來海外に出稼人を送ると云ふことは、殆ど我國の國策を以つて目され、始めは布哇に、次いで北米合衆國に多數の移住民を送遣することに就て、政府自ら努力を致し北米合衆國に於て、排日の勢を生ずるや、之に代る可き移住地として、南米其他の地方が選ばれることゝ爲つた。時には斯く移住民として内國多數の壯丁を海外に送遣したならば、内國に於ける勞働者の供給を乏しくすると云ふ見點に於て、海外移住有害論が唱へられ、移住民の渡航を制限せよと云ふ議論もあつ

たが、斯る意見を懐く者は少數の保守論者だけであつて、固より輿論の赴く所を左右するを得なかつた。第一、移住民の送遣が內地に於て、人口の過剩ならんとする勢力を緩和し、第二、海外に送遣された邦人に內國に於けるよりも、優良なる生活を營ませて、彼等に有形的利益を與へ、第三、移住民の內地送還金に依つて、國際貸借上に有利なる差額を維持するは勿論、多くの移住民を出し、隨つて送還金を受けることの豐なる地方は之に依つて地方の經濟を潤澤ならしめるを得たし、第四、邦人の海外に移住する者の多きに隨つて、我國物資の海外に於ける販路を擴張するに至つたこととの如き、何れも移住民の送遣が我國に與へた經濟的利益の動かす可からざるものであつて、隨つて我國民は移住民制限論の如きには、耳を藉さず、多々益々移住民の海外に出づることを希望し、一の道が塞がれゝば、他に之に代る可き道を求めるのが常であつた。

斯る事情の下に、往年の紳士協約の如きものが日米兩國の間に成立し、日本の合衆國に送遣する移住民の數に嚴重なる制限の加へられた其上に、合衆國に於て日本人の有す可き私權の範圍が狹隘と爲り、公權に至つては、其賦與が全然問題とされないと云ふことは、我國の對外經濟上に獲得し得る利益を奪ふものとして、我國に取つては、大なる打擊であつた。唯我國民の一部には極めて樂天的の者があり、又合衆國の排日政策が如何に牢固なる經濟的理由に基くかを知らざる者があり、合衆國の對日態度が近年に至つて、著しく急迫し來つたに拘はらず、何時の日にか形勢の緩和す可きことを待望して居つたようであるが、事實は却つて然らずして、今回の如き移住民の絕對的排斥に會するに至つた。而して合衆國の爲す所にして、經濟上の理由に根據を置くものである以上は、今日特殊の事情に據つて、日本の移住民を歡迎しつゝありと稱される國に於ても、結局合衆國に於けると同一の理由に基いて、日本人の入國を排斥するに至ることは、略ぼ之を想像するに難しとしない。卽ち日本は內國經濟上の關係に於て、此狹隘なる國土と國力とを以つてしては、七千萬人の同胞に優良なる生活程度を維持せしめるに堪へない。之を維持せしめるには、一部の人口を海外に送遣しなければならないが、海外諸國は嚴に其國を鎖して、我國をして所謂八方塞りの窮境に陷らしめる。而して、我國が國內に於て國民の生活程度を優良にするを得たならば、外國は其時こそ移住民として我國を迎へるであらうが、斯る際には最早や移住民の送遣は我國に取つて必要事に屬せざるに至るのである。

或は此必要事に屬せざる時代の到來した際に、合衆國を始め爾餘の諸國は我國移住民の入國を寬大にし、或は我國の爲めに

[illegible]
[illegible]に、更に今日に至つて、這[illegible]
き將來ではない。今日に於て是等の要求を杜塞された我國が經濟的立國に於て、大なる困難を感ずるのは勿論であつて、何等か打開の道を講じなければならない。

四

我國は多年鎖國の狀態に居り、密貿易なり、又は限定された範圍內に行はれる貿易なりを除いては、徹頭徹尾自足自給の經濟生活を行はなければならない次第であつた。永く鎖國の狀態に居れば、之に慣熟して、大なる不便を感じないかも知れないが、其以後の經濟生活は總てを擧げて、自由開放の原則に律されたのである。而して何を方便として自由に外國と經濟上の關係を結ぶを得たかと云へば、其第一は物資の輸出に依る代金の受入れであり、第二は移住民の送還に依る送還金の領收であり、其第三は資金の海外放下、海運業の外國荷客運送に依る利子運賃の回收であつて、是等の債權科目の存することに依つて、我國をして容易に又低廉に外國から物資の供給を受けるに難からざらしめるを得たものと認められる。即ち從來我國の國際貸借に於て、移住民の送還金が債權科目中に於て、相當の重きを成し

[illegible]
[illegible]
其居住に係る一切の利益の阻止され[illegible]に至つては、[illegible]
に我國に一個の經濟的不安を惹起するの[illegible]はなければならない。此危機に處して、我國經濟生活の安定を圖するには、自ら方法がなければならない。而して今私をして其方法を考へさせれば、

第一、武力に訴へて外國に領土なり、權力範圍なりを擴張し、其處に過剩なる自國民の移植を試みること、又は同樣の手段に依り自國民の入國を排斥する國をして其方針を一擲せしめること、

第二、一國の有する富源と現在棲息する人口との間に、適當の調和を保たしめる方針の下に、富源の增殖を許さざる限り、人口の增加する勢に對して、人工的制限を施すこと、

第三、一國をして其限りある面積の下に、多數國民の優良なる條件の下に、生活を全うするを得る經濟上の政策を樹立せしめること、

の三策を推すことが出來るのである。

第一策は所謂經濟的帝國主義であつて、獨逸の如き、[illegible]の如き其全盛時代に於ては、共に此主義を以つて對外的な

策の根柢とし、兩國共に共新に勢力範圍とした領土に於て、偏頗なる排他的經濟政策を行はんとした。而して今日の如き國際間に於ける經濟的競爭の劇烈なる時代に於て、或る國が世界の或る方面に於て、排他的政策を施したならば、其の他諸國に及ぼす影響の酷烈であるのは當然であつて、後者は決して前者の爲す所を默過するものではない。斯くて日英米三國は極東に於て門戸開放、機會均等を主義として、露獨兩國の排他的政策に對抗しようと試み、日本が露國極東政策に對する當面の敵手として、干戈に訴へて、露國と爭うに至るや、同盟の誼ある英國は勿論、一の與國たる合衆國が日本に對して多くの援助を與へることを辭さなかつたのは、經濟上に於て自由競爭の行はれる天地を東洋に得るには、露國の排他的經濟政策を打破することを必要としたからであつた。而して日露戰爭の結果、日本は露西亞に代つて極東に霸權を握るに至つたが、若しも當時我國の國策を樹立し、指導する任に居る官僚、軍人若しくは資本家の輩をして外國の感情や、利害を顧慮することなく、自由に之に當らしめたならば、經濟的帝國主義の下に、新領土や、新權力範圍に於て、獨占專私を事とする經濟政策を行ひ、以つて他國の勢力を排除することを敢てしたに相違ないのである。然も斯の如きは事實に於て、行ふを得ず、依然たる門戸開放機會均等の傳統的政策に據らなければならないこと、爲つた。即ち門放機會均等を以つて、經濟政策の基調とする以上は、日本獨り朝鮮滿洲に於て、特に差別的利益を收めて、經濟的利益を獲得する場所とするを得ない。資本を放下すること多く、事業を經營することの廣き國が其多く、又廣き程度に應じて、經濟上の優勝者たり得るのであつて、自ら國際間の自由競爭の劇烈なるを見ざれば已まないであらう。啻に然るのみならず、滿州朝鮮の如き、日本人に比較して、遙に生活程度の劣等であり、又賃銀の低廉なる朝鮮人や、支那人の密集して居る所は何としても日本勞働者の捌口たるに不適當である。隨つて我國が經濟的帝國主義の下に、人口問題を解決するには、諸外國と殆ど關係なき無人の曠野で、然も富源の埋藏される蓬萊島でも自國の權勢下に包擁するに至らざる限り、實現され可きものではない。

經濟的帝國主義の下に、日本の剩餘人口を移植せしめるが如き新領土は容易に之を求めるを得ない。一時外務當局者が對外移民の制限の急なるに當り、之に對する一策として、滿韓移民集中論なるものを唱道したことがあつたが、論より證據、滿韓兩地方が氣候の點に於て、生活標準の低き關係に於て、日本人の移住地として、不適當であることは、十數年の久しきを通じて、日本の統治に居る兩地方に日本勞働者の移住し、勞働に就

く[illegible]

ここに於て[illegible]

に依ることを可なりとする議論が一部の國民の間に主張されるのは自然の道理であつて、現に日露戰爭直前の如き、日露兩國が長期に亘る戰爭を果しなく行つたならば、其間に我國が同胞を殺傷すること、夥しき數に上り、殘虐見るに堪へ難きものあるであらうとして、非戰論を唱へたり、又は平和的手段に依る解決論を說いたりする者のあるや、主戰論者は之に答へて、露西亞と一戰せず、滿洲は固より、朝鮮まで擧げて、露國の權力範圍に置いたならば、六千萬人の同胞は滿韓の天地に於て、發展する道を塞がれ、遂に此狹隘なる日本國土內に跼蹐し、同胞互に相食むの慘狀を現出しなければならない。戰爭に依つて、幾萬の同胞を殺傷することは、情に於て忍び難き所であるが、尙ほ我同胞が國の四方を塞された爲めに、戰はずして殺されるに比較すれば、事の小なるものであり、少數者の犧牲に依つて、多數者を生す所以であるとして、以つて戰爭の已むを得ざることを辯疏しようとした。日露戰爭は右の理由に據つて、始めて正當視されるを得たのであつて、此戰爭が當時國民の感情を刺戟することの大であつたのも、其基礎を國民生活の安定並に其發展に置いたことに歸しなければならない。既に此理

[illegible]に於つて、日本[illegible]

したならば、日本は移住民を[illegible]

[illegible]する日本人をして新に米國[illegible]

ることを困難ならしめ、以つて日本人の合衆國に於ける企業を脅かし、其生活すら困難ならしめる合衆國に對して、日本が戰爭を試み、武力に訴へて、以つて合衆國をして其非を改めしめるに憚らざる道理である。殊に移民問題に就て、合衆國をして其態度を一變せしめるに止まらず、戰捷の結果、合衆國の領土に向つて、經濟的帝國主義を實行することも、亦主張され得る筈であるのに、移民問題が日本に取つて如何に不利なる狀態と爲り、又如何に日本の體面を傷けるに至つても、平生對外硬論を叫んだり、國權擁護論を唱へたりする人々の間に於てすら、尙ほ對米開戰の聲を聞かないのは、何故であらうか。私は之を以つて左の諸原因に基くものと考へる。

第一、日露戰爭は日淸戰爭以來多年月に亘つて、計畫され、政府亦國民の敵愾心に乘じて、萬般の施設に遺漏なきを得たに反し、米國に對しては、毫も斯る用意の存せざること

第二、日露戰爭前に於ては、諸外國の日本に對する感情は概して日本に有利であつて、英米兩國の如き、日本の武力に依つて、露國南下の勢を沮止し、極東に門戶開放機會均等の主

義の維持されるを望んで居つたに反し、今日我國に對する諸外國の感情は必ずしも良好であると認めるを得ないこと、

第三、日露の斷交、次いで生ずる戰爭は經濟上の關係から云つて、日本の國民生活に苦痛を及ぼすこと、必ずしも大であるとするを得ざりしに反し、日米戰爭に依つて、日本の物資の販路の合衆國に於て失はれる一事は日本に取つて重大事であつて、殊に今日の如く疲弊した我國の經濟社會は到底其犧牲の大なるに堪へ難きこと、

第四、日本の移住民を受入れることを喜ばないのは獨り一の合衆國のみに止まらない。濠洲の如き、加奈陀の如き、阿非利加の如き、盡く合衆國と同樣の地位に立つことは、爭ふ可からざる事實である。果して然らば日本が移民問題の解決を武力に訴へることは、單に合衆國を敵手とするのみに止まらない。濠洲其他の殖民他の母國である英本國とも結局爭端を醸す覺悟の下に、之に當らざる可からざるに至ること。

五

日本は如何なる時まで隱忍し、又如何なる手段に依つて、外國から蒙る差別的取扱を脫せんとするものであるか、此點に就ては、見る人に依つて、自ら意見の異なる所なきを得ないであらう。兎に角今日の日本としては、戰爭に依つて、移民問題を有利に解決するに難き地位に立つことはだけは、之を否定するに苦しまない。斯くて移民問題に關聯して、我國に擡頭し來る議論は産兒制限に依る人口增加抑制策である。此事たる、兩三年前合衆國から産兒制限論者であるサンガー夫人が來朝して以來、頓に世人の注意を惹くこと、大なるに至つたようであるが富源と人口との間に調和を保たしめる必要上、産兒制限若しくは墮胎に依つて、人口の增加を抑制することは、敢て珍奇の方法を以つて、見る可きものではない。封建時代に於て、一の藩と他の藩との交通は多くの點に制限を蒙つて居り、其何れも藩內に存するだけの實力を以つて、藩民の生活を營む資料に於てなければならない場合に、偶々一の藩に於ては、山岳地多くして、耕耘に適せざる爲めに、多數の人口を給養するに難く、強いて之を給養しようとすれば、藩民の全體を擧げて饑餓に苦しましめる恐れあるに當つては、老人を遺棄することも、墮胎を爲すことも、死産を行ふことも、亦已むを得ざる所業を以つて目されるのである。遺棄、墮胎、死産を行ふことよりも、避姙に依つて人口の增殖を制限することが人の健康を保全する點に於て、又人心の荒廢を防ぐの點に於て、勝れるものゝあるは勿論であつて、斯くてサンガー流の所説を生ずるのも亦無理なら

なことゝ考へられ[illegible]かも知れないが、[illegible]ば、大國としての資格を備へるには、或る數の人口を必要とし、多數の人口から選擇されて、始めて優秀なる人才の輩出することを望み得るの道理であり、又富源の乏しいだけ、人口を制限するよりも、増加した人口に適應するだけの富源を獲得するなり、既存の富源を開發するなりすることに依つて、一國の國運を隆昌ならしめるを得るものと考へられる。國民の多數が人口増加に對する人工的制限を濫用して、退嬰を事とし、消極を旨とする生活を送るの風潮盛に爲つたならば、小國として無爲の裡に國民生活を過すことは出來るが、大國として能く國際競爭の劇烈なる今日に處するを得るかどうかは、大なる疑問に屬するものとしなければならない。

茲に於てか、日本は外國移住民政策を一擲し、我國主權の及ぶ領域内に於て、今日と同數又は其以上の同胞をして今日よりも豐富なる生活を送らしめるの道を講じなければならない。世人は多く日本を以つて、人口の密度の頗る高い國であると云ふ如何にも日本の人口の密度は必ずしも低いと稱するを得ない。然しながら英吉利の如き白耳義の如き、日本よりも遙に高き人口の密度を保つて居り、而して都鄙全體を通じて、國民の生活程度は日本に於けるよりも、英吉利に於て、遙に高く、白耳義に於て[illegible]一國に人口が増加し、[illegible]に因つて、人々の生活に影響を及[illegible]からざるに至ることは、一國の經濟的[illegible]鑛山業とかいふやうな土地の面積の關係と密接の關係を有し、面積を廣く取らなければ、規模を擴張するを得ない事業に依つて維持されて居る場合に、必然の結果として起る所である。而して一國が農業牧畜業鑛山業の如き事業に依つて、國民經濟を維持しつゝある間に、人口が漸進的にせよ、或は突發的にせよ、國内に存する富源に對する正常の割合を超へて、増進したとしたならば、國民の生活程度の引下げられることを防ぎ、國民の間に行はれる生活上の競爭の劇烈と爲る勢を緩和する爲めに、國民の一部を他國に向つて、移住民として送遣しなければならないことゝ爲るであらう。

然しながら一國に行はれる事業には之を經營するに就て、土地の面積の廣きを要せざる、又土地の面積を離れて、如何ようにも其規模を膨張するを得るものがある。商業製造工業海運業の如きは即ち是れに當り、殊に外國に向つて、資本を放下するとか、海外に於ける企業を經營するとか云ふが如き方面の事業に至つては、國内に於て寸尺の土地すら存在することを必要とし

ないのである。果して然らば、一國が其國内に包擁する國民の生活程度をして高きに就かしめるには、必ずしも國の面積の廣大であることを要しない、又面積の狭隘である場合に、増加する國民の一部を國外に移住せしめることも亦必要であるとはしない。要は多數の國民を狭隘なる國土に於て、豐富に給養するを得る富源若しくは富源を運用する力にして、土地の面積に支配されざるものを備へることの如何に緊がるものと云はなければならない

六

試に國際貸借を組成する諸種の科目の消長が、國民經濟の盛衰に如何なる關係を有するかを考へたならば、以上の道理は自ら理解されるであらう。國際貸借の分子として、如何なる國の如何なる經濟狀態の下に於ても、必ず存在するものは、輸出入貿易であるが、一國が自國物資の輸出に依つて、外國から輸入する物資の代金を決濟すると云ふのは、其國の經濟の未だ進歩しない狀態に居るときに、現はれる事相であり、殊に其輸出する物資が專ら農產物であり、林產物であり、畜產物であり、鑛產物であり、其產出に就て、大なる土地の面積を要するが如きものであるとすれば、其國は決して國の面積の大なる割合に、多數の國民を包擁して、彼等に豐富なる生活を營ましめるない。是れ一國の農業時代に現はれる國際貸借の狀況であつて如何に農產物の豐饒なることに依つて、輸出超過を期し得るとしても、之に依つて收められる經濟的繁榮は敢て盛なるものではないのである。

然しながら一國は何時までも農業時代の下に、農產物を外國に輸出して、安んずるものではない。輸出超過の續くこと、幾年かの久しきに亘り、其決濟に對する資金が國内に流入し來つて、内國に於ける資本の供給を潤澤ならしめるに至れば、國民に企業的精神の勃興するに隨ひ、此潤澤に爲つた資本と本來豐富なる原料品とを利用して、工業を起すに至るのは勿論であつて、斯くて國際貸借に於ては農產物の輸出を減じて、工藝品の輸出を以つて、之に代らしめる一方に、工藝品の輸入を減じて外國から輸入する原料品食料品の類を以つて、之に代らしめるに至るであらう。斯くて國内に工業起り、工藝製造品の輸出盛なる時代に於ては、之を農業時代に比較して、多數の人口を國内に包擁することゝ爲るのは勿論であるが、更に同一の趨勢を盛ならしめるには、經濟上の國運に一進歩のあることを要する。

即ち製造業時代換言すれば、工業立國の時代に於て、一國が一方に外國に向つて工藝製造品を輸出する他の一方に、原料品

[illegible]輸入するに當り、[illegible]權利には如何にするであらうか。他の海運業の發達した國に其物の運送を託すると云ふことも、一の方法たるを失はないが、運送上の便宜を收めるには、其國自ら海運業を經營することを以つて當れりとする。而して一國自ら海運業を營する場合には、其規模をして單に自國の輸出入品を運送するに足るの限度に止まらしめず、隨時之を擴張して、他國の輸出し、又輸入しようとする物資をも運送し、之に對する運賃を收得し、物資を運送して、海難其他の危險に遭遇することとの關係から、海運業に伴つて、海上保險の業務を行ひ、之に對して外國の保險契約者から、保險料を收得し斯く國際貸借に於ける受取勘定の項目中に、輸出貿易の外に、運賃並に保險料と云ふ二科目の加へられるを見るに至るのである。

製造工業の隆盛は資本供給の潤澤なることに依つて、之を期するを得るのであるから、一方に一國に製造工業の發達するや其國に於ける資本增殖の勢は農業時代に比較して、其強さを加へ製造工業の擴張又は維持に就て、資本に對する需要の自ら强大と爲るに拘はず、資本の增殖する勢の盛なるや、必ず其國に行はれる一般金利步合を低廉ならしめる。斯くて資本家は自己の所有する資本に對して、高率の利廻りを收めんとする爲めに、資本の一部を外國に放下すること[illegible]たる國は多く未開の[illegible]であつて、[illegible]事業家は斯る國に向つて、自[illegible]資本を投下された、[illegible]品を産出して、其自國に對して、豐富に供給されるに至ることを希望し、少なくとも自國資本の力に依つて其國に於て斯る物資の生産される場所を權力範圍として、持つことを希望するであらう。斯くて資本家と事業家との利害は此點に於て正確に一致する。資本家は高利廻り獲得の爲めに、事業家は外國資源開發の爲めに、其れ〲外國に資本の放下されることを必要とする。其期する所に多少の相違はあるが、終局の結果は外國に債權を設定し、之に對する利子收益を獲得することに於て、同一樣に現はれるのである。

斯の如く一國の經濟が發達し、海運業保險業の伸張、對外投資の增加に依つて、運賃、保險料、利子、收益の形態に於て、外國から債權收入を回收することゝ爲り、更に是等の收入を[illegible]なる債權に振替へることに依つて、手數料の收入をも獲得するに至つたならば、其國が國際貸借上有利なる差額を有するのは論を俟ない。此有利なる差額の存することは、一國をして低廉に容易に、又確實に外國から萬般の物資の供給を仰がしめる所以であつて、其物資の内に原料品があれば、以つて自國の製造

工業を起すに資す可く、其物資の内に食料品があれば、以つて自國民の生活を豐富ならしめるを得る道理である。一國が國際貸借上に於て、債權國たる地位に達し、對外債權の收入に依賴して、多額の輸入を行ひ、輸出に依つて、決濟するを得ざる所卽ち輸入超過を決濟するに、對外債權收入を以つてするを得る時代に至つて、一國の經濟は極めて圓滿に運用されるを得るのである。卽ち此時代に於ては、一國は廣大なる面積の國土を擁することを必要としない。蓋し國防の根據として、必要なる土地の面積だけは何としても其國に備へられなければならないが、既に農業に依賴して、自國内に食料品や、原料品を求めたりする自給時代の狀態に居ることを要しない、斯る物資は外國をして之を供給せしめ、之に對する決濟の道亦與へられて居る以上は、面積の廣狹と國民生活の盛衰との間には、何等密接なる關係を存せず、狹小なる面積の國土を以つてして、多數の國民を豐富なる狀況に於て、給養することが經濟政策上に於て、可能の事と爲るのである。

七

玆に於て私は我國當面の問題に立戻つて、考へなければならない。日本が從來の如く、或る數を超過した國民を以つて、過剩であるとし、隨つて彼等を外國に移住せしめて、人口過剩から來る經濟生活上の不安を回避することに努力したのは一の政策であつたと云へる、此政策を以て、正しきもの道理に適つたものとする前提を置けば、今日の如く北米合衆國を始めとして、多くの英領自治殖民地に依つて、日本人移住の門戶を閉鎖された場合には、日本將來の經濟生活に不安があると考へられるかも知れない。然しながら此經濟的不安たる、外國に過剩人口を移住せしめることを以つて、我國に取つて、絕對的必要とし、此事を除いて、他に我國民を生かす道なしと云ふ前提の下に、始めて生ずるのであつて、此前提を以つて、正しからざるものとしたならば、移住民の排斥が如何に廣く行はれるとも、之を以て直に我國の經濟的不安とすることは、道理の許さゞる所であると結論しなければならない。

私は旣に移住民送遣に伴ふ數個の利益を擧げた。而して從來我國に於ては、明治の初年から今日に至るまで、時に移住民の送遣が内國に於ける壯丁の供給を減じ、勞働力を乏しからしめるの故を以つて、之に反對する議論が行はれたが、尙ほ全體から見れば、移住民の送遣を利益とする議論が多數の人々に依つて、承認されて居つた。而して斯る議論の内には、海外に領土を擴張する政治的野心に基くものも、なしとしなかつたが、尙ほ

大陸に於ける事業の[illegible]を經營するものに相違なかつたのである。然しながら日本から布哇に送り出した契約移民の如きは勿論、其後北米合衆國に渡航した自由移民にした所で、其移住先に於て如何なる種類の職業に、就いたかと云へば、多くは下級の力役であつて、彼等が裸一貫で移住先に赴いたことは、合衆國が彼等の入國を制限する爲めに、若干の現金携帶を必要とした事實を以つて、之を知るを得るであらう。隨つて移住民の内には、多年の拮据勉勵に依つて、或は馬鈴薯王とか或は、果實王とか云ふ尊稱を博する者なきに非ざるが、移住民の多數は入國當時に於て、一介の力役者であつた如く、幾年の後に於ても亦依然たる勞働者であつて、其間に社會上の地位の上進するが如きは、容易に望まれない。其斯の如きは、第一、彼等が力役に對して收め得た報酬の大半を本國に送還するに忙しく、自身の居る所に持つて居らないこと、第二歸化權を有せず、土地所有其他の權利にも制限を蒙つて居る爲め、永住の希望を生ぜす、出來るだけの貯蓄金を本國に送還するに勉めること、第三貯蓄金を本國に送還しないで、自分の手元に所有して居る者があるとしても、民度の頗る高い合衆國であつては、移住民の貯蓄金程度の資金を以つてしては、移住民をして勞働者の列から、資本家の班に進ましめるを得ないことの如き種々の原因に[illegible]ものと言はなければならない。[illegible]もつては、如何に多く[illegible]り、彼等の送還金が能く彼等の[illegible]國に於て、彼等の肉や、血を賣却して之を貨幣に換へるものに外ならない。同胞の血や、肉を外國に賣り、其代金を内地に送還金とするが如き、吾人の情に於て忍びざる所であつて、私が多年契約勞働又は之に類する移住民の送出を以つて、甚だしき沒人情の行爲と認め來つた所以である、

然らば斯る沒人情の行爲を移民政策なる名の下に於て、行はなければ、我國は他に立國の策を立てるを得なかつたのであらうか。此點に就て議論する以前に、私は我國が今日まで、商工業を基礎として國民經濟を盛ならしめることに就て、幾何の努力が致されて居つかを考へたい。今日まで我國をして商業立國の政策を施さしめなければならない、否我國こそ工業を以つて立國の基礎とするものであると云ふ議論は常に官民の間に唱へられて已まない。蓋し斯の如きは我國の國情から云つて、此狹隘なる國土に於て、多數の人口を給養するには、商工業の發達に依賴するの外に、求める可き道の存しないことが國民に依つて、自覺された結果であると云へるかも知れないが、此自覺が果して何處まで、徹底して居るであらうか。我國民は自己の區

濟生活の據う可き所を正視して居るであらうか。私は此點に、就て、多くの疑を持たざるを得ない。

第一、商工業を以つて、經濟生活の基礎とする根柢を築く以上は、此根本政策の下に期する所は輸出工業國たるの一事であつて、之を期するからには、商工業は勿論、海運業國際金融業の如きは、必ず之を發達せしめるにことを要するが、此發達の道程に於て、或る事業を犧牲に供へざる可からざる場合に接するは、豫め覺悟す可き所である。商工業國として、將た又輸出工業國として、第一に必要とする所は原料品幷に食料品の供給豐富であり、又其價格の低廉なることとである。蓋し原料品の廉價は工業製造品の生産費を節約して、販路の擴張に資する所以と爲るし、食料品の廉價は勞働の費用を省約して、賃銀を低廉ならしめ、又從來の賃銀を以つてして、勞働者に滿足なる生活を營ましめ、斯くて勞働の能率を發揚せしめるに資するからであつて是等の二點は輸出工業國に缺く可からざる要件と爲るのである。然るに何故か我國に於ては、依然たる農業國本論が到る所に跋扈して居り、食糧品の自給論や、國産奬勵論と相俟つて、我國をして低廉なる費用を以つて、食料品や、原料品の供給を海外に仰がしめることを妨害したもの〻、一再に止まざる次第である。

第二斯の如く原料品や食料品の供給に就て、國內自給の方に依つて、內國の農業を保護することを可なりとする說がある爲めに、今日に至つて、對支經濟政策の基礎を確立するを得ない。滿鮮の如き、支那一帶の地方の如き、其所に埋藏される富源を開發することに依つて、日本の製造工業の爲めに、原料品を供給す可き土地たる自然の約束を持つのであつて、斯る富源の開發に依つて、是等地方に於ける住民に職業を與へ、彼等の購買的能力を刺戟して、以つて我國製造工藝品に對する需要を盛ならしめたならば、期せずして日本、滿鮮、支那を網羅する經濟的聯繫を成すを得る道理である。然も我國の輸出工業たる可き將來の方針に對する理解の存せざる爲めに、原料品の供給は確保されず、食料品の供給亦不定の狀に居ることは、輸出工業國たる地位を築くに就て、大なる妨害であると云はなければならない。

第三、資本の供給に就ても亦之を潤澤ならしめることが、輸出工業國の一大要件である。即ち如何にして國民をして貯蓄に從はしめ、以つて資本の供給を增殖するか、國內の事業に於て、時に無節制なる競爭の行はれる結果として、一の目的を遂し、一の效果を擧げる爲めに、資本の放下が二重にも三重にも行はれて、資本の消耗を招きつ〻ある場合に、國家は如何

にし之を防止し。資本をして最も有效に低下資用の途に就かしめ可きものであるか。資本の供給を増加すると共に、限りある資本の利用をして最も經濟的に效果あらしめることを期するのは、國民の宜を致す可き所であるに拘はらず、我國に於ては是等の事は常に閑却され、小規模の事業到る所に對立して、容易に合同に依つて、其大を成さず、斯くて資本の消耗を招きつゝあるは、掩う可からざる事實である。

第四斯くの如く資本の供給を潤澤ならしめると共に、其一部を外國に輸出して、對外企業に投入し、我國民の資本技術經營に依つて、海外に富源を開發するなり、斯く開發された富源を原料として、其他外國に製造業を起すなりすることは、我國當面の經濟生活に取つて、緊要事である。斯の如くして我國の國際貸借に於ける債權科目中に、利子利潤の一項が加はり、之に依つて輸入超過を決済するを得るの結果、原料品並に食料品の輸入の潤澤と爲り、輕易と爲る狀況の現出を期することを必要とする。然るに此點に於て我國は今日如何なる地位に居るであらうか。歐洲戰爭中偶然の出來事に依つて、我國は歐洲諸國や支那に對して、多額の債權を持つと共に、從來の債務をも亦或る程度まで償却するを得た。斯くて進んだならば、永く債務國であつた地位を脫して、債權國たるを得るに至りはしないであらう

かと云ふことに、何人の腦中にも置かれた一の疑問であつた。固より歐洲諸國に對して持つ債權は讓渡の實行する定位に、行する形態に於てするのであつて、之に對して利子を獲得するを得るが、其以外には何ものをも期し得られない。唯是所に對する資本の放下に至つては、事業の經營に於て、之を爲したものきに居るのであるから、之に對して利潤の獲得されるのは勿論であつて、此點に於て我國の國際貸借上に重きを成すものゝ如くに考へられたのである。然るに戰時より戰後に於ける我國經濟政策には大なる過失があり、政策の衝に當る當局者亦愼重を缺き、殊に原高橋兩內閣に於て、其弊の甚だしかつた爲め、戰後に於て貿易上に逆調を告げること甚だしく、正貨支拂の危機は次第に殺到し來り、新に外國に資金を融通する餘裕の存せざるは勿論、嚮に外國に融通した資金は着々其返濟を受ける一方に、外國から更に資金を借入れなければ、正貨支拂の狀態を保全ならしめるを得ざることゝ爲り、債權國たるが如き地位に上つたのは、槿花一朝の夢であつて、今や依然の債務國に復歸するの已むを得ざるに至り、往年支那に獲得した債權は當局者不用意の致す所として、今や一片の反古に異ならざるものである事情判然し、益々我國の債權國たらざる事實を明にするものあるやに認めらるゝ。

八

斯の如く考へると、我國現時の經濟社會には不安の陰影の濃厚なるものがありはしないであらうか。移住民の排斥に依つて對外的發展の道の絕たれんとすることの恐るゝに足らないのは、移住民以外に、發展の遂げられる望みあるが故である。移住民に依る發展は人間の勞働に依る發展であり、更に之を露骨に云へば、血と肉とを以つてする發展であつて、其喜ぶ可からざることは、其本質に伴ふ。然るに國力を外に伸ばす方法としては、事業に依る發展もあり、資本に依る發展もあり、是等の發展の行はれる以上は、移住民に依る發展の如きは、何等重きを置くに足らず、前二者にして成效する限り、後の一者の如き當然棄て去られて、顧みるを要しないのである。然るに今我國に於ては移住民に依る對外發展は外國の意思に強ひられて、我國としては自己の爲さんと欲する所に反きつゝ、尙ほ之を廢棄しなければならない場合に際會した今日、之に代つて資本に依り、企業に依る發展の道が充分に工風され、又は現に其緖に就いて居るものがあるかと云へば、旣往の歷史は旣に其失敗を語つて居るし、將來に就ては、國民の我國の現狀に對する理解不徹底であつて、其爲す所果して時の要務に觸れるや否や、明なるを得ない。然らば我國將來の經濟的運命は合衆國の排日立法に依つて、其外に伸びんとする勢を閉塞されたことを動機として、永く萎靡の狀況に陷りはしないであらうか。此形勢の打開されざる限り、我國の經濟社會に不安の念の付纏ふのは、免かれ難き勢である。排日立法は年來の積勢であつて、現に制限の加へられて居るものに法律上の制限を施したに止まり、實質上の效果は必ずしも大なりとするを得ないかも知れない。唯其爲めに我國民をして精神的萎縮の已むを得ざるに至らしめたと共に、我國の經濟社會に於ける不安を大ならしめることは、排日立法に伴ふ副産物として、吾人の心外に感ずる所である。此危機を脫して、經濟的安定の地步を築くことは、我國の爲政者として一日をも緩うす可からざる所である。

「戰爭」一家言

水野廣德

○

人類は常に向上進歩の道程にある。地球上に人類が發生してより今日までに少くも五十萬年を經過したと云ふことである。其の間不完全ながらも歴史の存するは僅に最近に於ける五六千年に過ぎない。此の有史以來極めて近かき期間に於てすら、人類は精神的に相當大なる變化を來して居る。殊に最近一世紀間に於ける知識の發達と思想の進歩とは誠に著しきものがある。今や空には飛行機翔り、海には潜水艦浮び、無線電信、電話など人間の知識は自然を征服したかの如き觀がある。此の勢を以て進まば今後二三世紀に於ける世界の變化こそ誠に恐るべきものがある。火星との通信ぐらゐは或は實現するかも知れない。科學的知識の發達と共に人間の思想も亦著しく進歩して居る。其の進歩の最も大なるものは恐らく政治的自覺であらう。世界の各國民は專制の產物たる英雄崇拜より覺めて自由の本源たる自治の殿堂に向つて進んで居る。中にも歐洲戰爭は世界の無產階級を經濟的に覺醒せしめ、ブルジョアの堅城たる國家主義の一角は崩れて社會主義は急激の發展を遂げつゝある。

斯くの如く駸々として進歩する人類の過去と現在とのみを見て、遠き將來を迄も豫斷せんとするは寧ろ無謀の擧である。左れば人類の將來が永久の平和であるか、將た不斷の戰爭であるかは容易に論斷することの出來ない問題である。元來人類は本能的に平和を愛するか、戰爭を好むかゞ此の問題の解決に要する第一の鍵である。凡そ己の好まざる處を避けて、己の欲する處に向つて進み或は進むべく努力するは生物普遍の通則である。無心の草木と雖ども日陰を厭ふて日表に枝を張らんと力めて居る。故に人間が真に戰爭を嫌ふて平和を愛する動物であるならば、いつかは絕對平和のユートピヤを現世に見るであらうと想像することは必ずしも不當ではない。

○

抑も現代の人間は本能的に平和を愛するのであらうか、將た戰爭を好むのであらうか。凡そ生を愛し死を恐るゝは是れ亦生物通有の本能的意慾である。之を生存慾と稱する。戰爭は其の理由と目的との如何を問はず、結局人間の殺し合である。即ち生存慾の破壞である。故に本能意慾より云へば人間は戰爭を好まぬのが通則である。然るに人間には優越慾なる他の本能がある。總ての人間が己の優越慾を滿足せしめんとするの結果、爰に自ら生存の競爭を誘起する。生存競爭の窮まる處自己の生存を保たんが爲めには他の生存を脅やかさねばならぬこととなる。此の生存競爭が個人間に生じたる時は爭鬪となり、國際間に生じたる場合は戰爭となるのである。即ち人間に生存慾あるが爲めには一面に於ては戰爭を好まざるも、他面に於ては戰爭を擬なくせらるゝ盾矛の結果を生ずる。

高等生物となるに從ひ生存慾が强烈となる。生物最高の人間に於て最强點に達する。同じ人間界に在つても文明人は野蠻人よりも生存慾が大である。是れ文明人は野蠻人よりも文化の德澤に浴すること厚く、生命の價値を感ずること大なるが故である。此の意味に於て富者は貧者よりも、都會人は田舎人よりも生に對する愛着が深い譯である。即ち文明が進歩するに間は戰爭を嫌忌する念が强くなる。而して文明は年と共に人口は年と共に增加する。故に文明の進歩と共に人口も亦增加すると云ふことが出來る。然る處人間を養ふべき世界の食料生產には一定の限度がある。從ふて人口の增加と共に人間食料の缺乏を來し、自ら生存競爭を激烈ならしめ戰爭を誘發する機會が多くなる。即ち人間は文明の進歩するに從ひ戰爭を厭ふの念を增加するも、同時に人口の增加に依り戰爭の機會を多からしめる。此處にも戰爭に對する人間性の矛盾がある。

此の二つの矛盾あるが爲め、人類の將來が果して平和であるか戰爭であるかを論斷することが出來ないのである。即ち一面より考ふれば永久平和の可能が信ぜられ、他面より考ふれば不斷の戰爭が想像せられる。而して戰爭を嫌忌する心は個人の生存慾より發し、戰爭を擬なくさるゝは國家の生存慾に生ずるのである。

○

往時封建時代の戰爭は專ら大名なるものの慾望野心を滿たさんが爲めに行はれたのである。而して戰爭に從事したるものは武士と稱する特種階級に屬したる人間であつた。凡そ時の古今

を問はず、戰爭に必要なる絶對にして而かも絶大の條件は、戰士をして死を恐れざらしむることである。故に大名は武士をして戰爭に强からしめんが爲めには、弓馬刀鎗等の戰技の訓錬を施したるのみならず、精神教育に依つて名を重んじ死を輕んずるの氣風を養成することに力めた。之が爲め武士道或は騎士道などの如き戰爭を標準としたる時代道德さへも作成せられたのである。其他或は種々の特權特典を與へて武士を優遇し、或は武功を重賞して彼等の名譽を表奬した。斯くて幾世紀間に亘る世襲的鍛錬に依つて遂に殆んど完全に近き戰爭人間を製造することが出來た。左れば彼等武士階級は社會の最上に位し、社會も亦人間の事業中戰爭を以て最も高尙なるものとさへ信ずるに至つた。彼の「花は櫻木人は武士」の諺の如きは最も明白に此の間の消息を表はせるものである。封建制度廢れて比較的日尙ほ淺き我が國に於ては今尙ほ尙武の心强く、軍職を以て最高とし戰爭を以て神聖と信ぜるものが甚だ少くない。

封建更つて郡縣となり、武士階級廢せられて國民皆兵主義と爲るに及び、國家は種々の關係上封建の大名が武士に對せし如く、數多き全國民に向つて名譽慾と物質慾とを滿足せしむることが出來なくなつた。是に於てか軍人並に軍人の母體たる國民をして戰爭を厭はざらしむる爲めに、新たなる國民敎育を施すの必要を生じた。是に於て人智の[illegible]、人間の通有性たる己惚心や虛榮心やを巧みに利用して、或は團結の必要を說き、大に國家的思想の鼓吹に力めた。或は民族の優秀を說いて愛國心を涵養し、或は對外問題に托して敵愾心を鼓舞する等、機會を捉へ、手段を盡して、國利を說き、民權を叫び、國威を稱へ、以て國民の國家觀念國家意識を强盛ならしめた。同時に一面に於ては軍事を獎勵し、軍人を優遇し、國家の爲めに身命を捧ぐることが國民として最高の名譽、無上の奉公たることを敎示した。斯くて國民は全く國家の奴隷となり、戰爭を以て積極的には國家の發展の爲め消極的には國家の防衛の爲め當然の行爲として之を認め、國家の爲めには身命を抛つことすらも厭はなくなつたのである。此の國家主義の過度に偏狹に發達したるものが即ち軍國主義にして、歐洲戰爭前の獨逸が之を代表して居た。歐洲戰爭の原因と認めらるゝものは、種々あるも、結局相對立せる偏狹なる國家主義の衝突に外ならないのである。

○

歐州戰爭の結果は從來國家主義に依つて說かれたる戰爭の利益を裏切り、幸に戰爭に勝ちたるものも少數の戰時成金を[illegible]

の外は、國民としても、國家としても、何等の得る處なく、唯得たる處のものは高き税金を拂つて、愛する子弟の屍を戰場に曝らしたるのみであつた。是に於てか勝ちたるものも、敗れたるものも、戰爭に就きて考へた。

「我等は三千億圓の戰費を以て何物を獲たる？

「唯一千萬人の屍ばかり！

彼等は豁然として國家慾の迷夢より覺めた。而して聲高く「平和」の叫びを揚げた。

歐洲戰爭の產物は併し一千萬人の墓とタンクばかりではなかつた。尙ほ他に大なる收獲がある。此の戰爭は物的には戰爭の機械化即ち工業化、人的には戰爭の國民化即ち民衆化の實を示した。過去の戰爭に於ては唯壕の埋草として戰場に狩り出されたる無產階級—勞働者は今度の戰爭に依つて彼等も亦戰爭の重要因子たることを發見すると共に、國家の名の下に資本家の手先となり足袈となりて血を流すことの愚なるを自覺した。即ち無產階級の國家主義（資本階級に依つて操らるゝ）に對する離反である。凡そ國民の國家に對する奉仕は國家より受くる恩惠に正比することが人情の自然であるならば、平素國家の恩惠を被むること最も薄き無產階級が戰爭に對する觀念は略ぼ察知する事が出來る。自ら稼ぎて自ら食ふ國德我に於て何かあらんやと云ふのが世界無產階級の共通心理である。

現代文明の粹を集め精を極め五年の久しき間殺戮破壞を恣まにしたる歐洲戰爭は殘虐悲慘の極みであつた。世界は戰爭に飽き／＼した。世界は戰爭に懲り／＼した。戰爭終に收つて平和思想は既に早くも勃然として全世界に高まつた。將來の戰爭を防止する目的を以て不完全乍ら國際聯盟も成立した。獨逸軍國主義の滅亡と共に戰爭の讃美歌は最早や再び聞かれなくなつた。第二の獨逸と疑はれたる日本の軍人すらも「吾人は平和を理想とす」などゝ叫ばざるを得なくなつた。殊に今後の戰爭は無產階級就中勞働者の贊同なくして遂行し得ざるに至りたるとは世界の平和に對して慥かに數步を進めたるものと謂ふべきである。

○

如何にして戰爭を防止せんかとは、如何にして平和を維持せんかとは、現在世界に橫流せる强き思潮である。國際聯盟も、華府協定も、不完全ながら、不滿足ながら共に此の目的を以て作られたる人類史上最も高尙なる產物である。抑も戰爭なるものが夫れ程迄に苦心し努力して防止せねばならぬものであるならば、然る時戰爭は果して罪惡であらうか。

宗敎或は哲學の見地より戰爭を罪惡として否定したるものは

少くない。併しながら世界何れの國に於ても實際政治の上に、實際教育の上に、戰爭を罪惡として取扱ひたるものは未だ曾て之を聞かない。啻に罪惡として否定せざるのみならず、寧ろ戰爭を以て國家存立上必要なる道德的善行爲として之を是認し、尙ほ進んで國民をして戰爭に强からしむることを以て教育の主要方針とさへして居る。彼の兵役を以て名譽の義務と云ひ、戰死を以て名譽の犧牲と云ひ、勳章賜金を以て軍功を賞する如きは、戰爭を以て國家の善行たることを證明せるのである。更に又戰爭を以て罪惡となせは軍備の設置は是れ罪惡の豫備行爲にして、國家は公然罪惡の準備を爲しつゝありと云ふことになる。故に現代の世界に於て戰爭は決して罪惡とは認められて居ないのである。斯くの如く國家は國際的には戰爭を避けんが爲めに多大の努力を以て種々の手段を講じながら、國内的には戰爭に備へんが爲めに是れ亦多大の努力を以て種々の手段を講じつゝある。大なる自家撞着である。恰かも僞善者が家庭に於ては贅澤をしながら家外に於ては質素を說くと同一の不德である。爰に現代國家の不徹底と、不純潔と、虛僞と怯懦とがある。

而して此の自家撞着を誤魔化さんが爲めに案出せられたる逃辭が卽ちマハン大佐の謂へる「軍備は平和の保障なり」と云ふ武裝平和であつた。世界は此の武裝平和の蔭に隱れて盛に軍備を擴張し戰爭準備を整へた。而して其の結果は[illegible]に[illegible]依つて無惨にも[illegible]、今や武裝平和なるものは如何なる軍國主義者と雖ども誤りにも之を口にするを恥ずるに至つた。

縱令戰爭が國家的善事であつても、國際道德が幾分發達し、國際制裁が幾分存在せる現代に於ては、最早や切取り强盜的の侵畧戰は許されない。縱しや實質に於ては侵畧であらうと、吞噬であらうと、形式的には戰爭を以て自國に有利なる如く道理つけ正義つけることが必要となつた。少くも無名の戰爭を恥つると云ふ國際良心の進歩である。日淸、日露の兩役は日本に於ては之を正義の戰、自衞の戰と呼んで居る。支那も、露國も亦夫々自國を以て正義の師と稱へて居る。歐洲戰爭は今日尙ほ聯合、同盟兩國側に於て互に戰爭責任のナスリ合ひをやつて居る。孔子は春秋に義戰なしと云つたが、嚴正なる神の裁判の下に於て「正義の戰」なるものは古今東西を通じて恐らく唯の一つもあるまいと思はれる。

○

個人間の爭鬪殺戮卽ち喧嘩は罪惡として道德的にも法律的にも禁止せられ、之を犯す者は理否の如何を問はず罰せらる。然

るに國家間の爭鬪殺戮卽ち戰爭は道德的にも法律的にも善事として是認せられ、平素より爭鬪の方術を訓練し、殺戮の用具を整備し、以て時の到るを待つて居る。元來國家は國民に依つて形成せられ、國民は個人の集團より成れるものである。故に常識論より言へば個人惡は國民惡となり、國民惡は國家惡となるべき筈のものである。卽ち爭鬪殺戮が個人惡であるならば同時に又國家惡でなければならぬ。然るに個人が之を行へば惡となり國家が之を行へば善となる。恰かも息子が散財すれば惡となり親爺が散財すれば善となると云ふと同一論である。

個人の喧嘩が罪惡として禁止せらるゝは社會の公安を害するが爲めであると言はれる。國家の戰爭が善事として是認せらるゝは自己生存に對する正當防衛の爲めであると言はれる。息子の散財は道樂だから惡い。親爺の散財は交際の爲めだから差支へないと云ふ。慥かに道理である。併し時には惡友を無理に引つ張り出しながら、而かも尙ほ且つ交際の爲めと言ふ横着親爺のあることを否認する譯には行かない。唯如何せん息子の散財は親爺の權力で叱り付けるが、親爺の散財は之を取締るものが無い。道樂の爲め破産するか、惡疾の爲め斃れるか、親族會議で禁治産に處するかの外は無い。獨逸は道樂が過ぎて破産しかけて居る。露西亞は惡疾に犯されて斃れかけて居る。然るに親族會議の國際聯盟は道樂親爺の文句が多くて纏まらない。道樂國家に禁治産を宣告する國際裁判所が一日も速かに設立されたきものである。

○

個人の喧嘩の原因は主に色と慾と顏とである。尤も偶には意見の衝突から擲り合つたり、思想の相違から甘粕つたり、甚だしきは貴樣の面が癪に障はるとて、イキナリ通行人の横の面を張り飛ばす亂暴者も無いではない。國家の戰爭の原因も亦個人の喧嘩と同樣で、唯色戀の戰爭が無いだけである。慾卽ち利害の衝突と、顏卽ち體面の保持とが多くの、場合に於ける戰爭の原因である。朝鮮の奪ひ合から日清戰爭が起り、滿洲の奪ひ合から日露戰爭が起つた。歐洲戰爭は聯合同盟双方の利害と體面の突張り合である。西比利亞出兵は勞農露國の面構が氣に食はぬとて擲り付けたのである。廿一個條では支那が頻りに體面を叫び米國の排日問題では日本が今盛んに顏を氣にして居る。

○

双方の實力に大なる逕庭ある場合は個人間に於ても喧嘩は起らない。畢竟するに弱者の隱忍と强者の寬裕との爲めである。

戰端の起るは多くは双方の力が相均しく場合である。戰爭に於ても亦然りで、國力に大なる相違ある國家間に於て戰爭は殆んど起らない。如何に國家の體面などゝ力んだ所で、到底に勝ぬと知りながら劍を拔くものはないからである。露國が曩きに國際對等を理由として我が浦鹽領事館の閉鎖を迫り、軍事探偵の嫌疑を以て我が駐在武官を逮捕するや、我が國には忽ち懲露膺懲會なるものが起り、西比利亞出兵、浦鹽占領などと恐ろしく元氣な宣言が發表された。性懲りもなく復た又七億圓の金を西比利亞の雪に埋めて尼港の慘劇を買ふことかと潛かに憂慮したものである。幸に出兵もせず、日露交渉は甚だゆつくりながら牛の如く歩みつゝある。

今回米國の排日法案に對する我國論の激昂は遙かに浦鹽問題以上である。扨ては又懲米膺懲會が作られ、大將博士の活動を見ることかと、心潛かに期して居た。然るに膺懲會も出來ず、出兵占領の決議も聞かず、第二の「臥薪嘗膽」などゝ頗る尋常に收つて居る。同じ國家の面上に泥を塗られながらも米國に對すると露國に對するとは余程匙加減が違つて居る。米國あたりから却て差別待遇の抗議が起りはせぬかと思はれる。目下同時に行はれつゝある對米對露の交渉に於ける日本の腰付こそ、當世外交談判の好標本である。

○

今回米國の排日法案が上下兩院を通過したる時、紐育其他に於ける米國の大新聞紙が筆鋒鋭く議會の暴擧を痛撃し、我が國に對して大なる同情を表した。吾人は之が爲め米國議會が反省して排日法案を撤回するとも思はない。又之を見て米國民の輿論は排日法案に反對であるなどゝ早合點をするものでもない。併しながら米國新聞の此の正論を讀んで、米國亦正義の人あるを知り、米國に對する吾人の反感を著しく緩和することが出來た。

嘗て我國より支那に強要したる二十一個條なるものは、其の條文の内容に於て、其の要求の手段に於て、今回米國の排日問題に對する我國民以上に支那國民をして憤慨激昂せしめた。之が爲め支那には國恥記念日までも設定せられ、今尙ほ我國に對する反感反抗の氣を年々に新にして居る。所謂對支廿一個條なるものは國際正義の上より見て論議すべき點が尠くない。當時日本の新聞紙は之に對し、今回米國新聞の取りたる如く侃諤正義の論を吐いたるものがあるであらうか。今日、日支親善、日支提携を說く日本人は甚だ多きも、日支融和の最大障害物たる二十一個條の改廢を唱ふる聲を聞かない。米國の排日に依つて

の面目を踏み潰されたる我が國民は、之に鑑みて他國の面目を尊重すべきことを覺らねばならぬ。

我身抓つて人の痛さを知れと云ふ諺が國際間に徹底すれば外交紛議は起らない。米國の不法を絶叫する我國民は支那や露國の面目を尊んで居るであらうか。

○

マハンに依つて唱へられたる武裝平和論は軍國主義者の利用する處となり、忽にして各國の軍備競爭を誘促した。軍備競爭こそ戰爭を激發する有力なる動因である。歐洲戰爭が英獨の海軍競爭、露佛對獨墺の陸軍競爭に依つて激成せられたるは明らかなる事實である。其の停止する處なき軍備擴張は双方國民の敵愾心と反抗心とを愈やが上にも増進せしめ、サラゼウォの兇變なくともやがて爆發すべき危險性を呈して居たのである。英國よりの海軍協定提議に獨逸が應じて居つたなら、あの戰爭は恐らく起らなかつたであらうと唱へられて居る。華府會議に於ける海軍協定は關係諸國に於ても何れも不滿不平の聲あるに拘はらず、此の協定成立したる爲め、一面に於ては軍費の節約に依つて國民の負擔を輕減し、一面に於ては日米海軍の競爭を防止して漸く熱せんとせる兩國民の敵愾心を冷却し、以て太平洋上の低氣壓を未發に消滅せしめ、延ひて世界の不安
效果は甚だ大である。華府協定を以て日本の手足をも、
米國の野心であるなどゝ説くは、日本の事情を知らざる者の曲解に過ぎない。同協定に依つて救はれたるものは日本の海軍である。

米國の世界一周飛行機が霞が浦に飛んで來た。日本の飛行機顏色なしである。米國に於ては排日法案を討議せる間に、日本に於ては米飛行機の大歡迎が行はれた。此處日本人大出かしである。然るに我が國民の一部殊に軍人中には、米國飛行機の渡來を以て、日米戰爭の場合日本攻撃の航路研究の爲めだなどゝ又しても僻見根性を出す者がある。之が國際猜疑心である、國交を阻害するものは多くは此の猜疑心である。

暗夜墓原を通つて鬼火の搖曳を見るも勇氣ある者は何の恐怖も感じない。勇氣なき者は螢の火にも膽を潰し腰を拔かす。勇者の恐れぬのは幽靈なるものゝ存在を信ぜぬからである。後者の腰を拔かせるは今にも幽靈が現はれはせぬかとビクビクせるが爲めである。吾人の國際關係に對する亦之に類するものがある或る人は外國に野心無きを確信して平然たるに反し、他の人は今にも外國から攻め來るかの如く憂ひ、常に不安の心に襲はれて居る。前者は内外の形勢を察知せるが爲めの安心であり、

後者に無知の恐怖である。此の恐怖心は乃ち國際的疑心となり、疑心自ら暗鬼を生きて、或は對外恐怖患者となり、或は國際神經衰弱病者となるのである。而して帝國主義者、軍國主義者、國權主義者等の中に此種の病患者が最も多きは、畢竟するに己を以て人を律するの過に出るものでは無からうか。

富者は泥棒を恐れるも貧乏人は泥棒を恐れない。富める米國が他國の侵略を恐れるのは無理もない。貧乏の日本を取りに來る者が何處にあるであらうか。我より他を侵さざれば、我等は枕を高ふして可なりである。

○

擊劍柔道の稽古は健康の爲めにするも、護身の爲めにするも將た又パンの爲めにするも、誠に結構である。ところで少しく腕が出來ると、實地に試めして見たくなるは普通の人情である。彼等の或者が相手欲しさに拳固を握り、肱を張り、肩を怒らし大道狹しと練り歩く樣は聊か交通妨害の嫌はあるが、障はらぬ神に祟りなしとこちらから避けて通れば、まだ辛棒が出來る。併し夫れ彼等の或者が其の腕前を鼻に掛け、通行の誰れ彼れなしに喧嘩を吹き掛くるに至つては、社會の危險と迷惑此の上もない。而してそんなのは必ず教養乏しく思慮淺き人間に限つて勝つ[illegible]の惡人間の常である。小人罪なく[illegible]で、[illegible]と云ふよりも[illegible]である。

國家の軍備は侵略の爲めでなく、脅迫の爲めでなく、自衞の爲めであると何れの國も言つて居る。然るに軍備が余り強くなると、而して軍人が余り勢力を張ると、空砲ばかりでは滿足が出來ず、亂暴な柔道使同樣たまには實彈演習がやつて見たくなる。國民も亦年々巨資を投じて折角軍備を設置しながら、觀兵式と觀艦式だけでは物足りない。機會だにあらば大に其の實力を發揮さして見たくなるは自然の勢である。偶外交紛議が起る、相手が弱しと見れば正邪を問はず理非を辯せず、軍備を盾に强壓手段に出る。相手が屈せざれば忽ち戰爭となる。過去の戰爭は悉く斯くの如くして起つたのである。元來國家も個人と等しく文明の低き國ほど腕力を愛し戰爭を好む。故に文明の低き國が强大なる軍備を擁することは世界の平和に大なる脅威である。個人の亂暴は警察が取締るが國家の亂暴は今の處取締まる機關がない。

外交が軍備の力に依つて支持さるゝ間は世界に眞の平和は來らない。外交が正義に依つて支持せらるゝに至つてこそ、初めて平和を語ることが出來る。平和を求むる唯一の道は、[illegible]

備の縮小、尋で軍備の撤廢である。

○

日露戰爭までは軍人の戰爭であつた。而して軍人の大多數は無産階級の子弟である。故に戰場に屍を暴す者は貧民階級であつて、富有階級は大砲の響も聞かねば碧血の流も見ず、唯纔かに慰問袋の寄附と出征軍の送迎位に過ぎなかつたのである。即ち戰爭は貧民階級に取りては生死の問題なるも、富有階級に取つては半ば遊戯氣分であつた。

然るに歐州戰爭以來戰爭は全國民的となつた。飛行機の爆彈は見舞ふに貧富の差別を設けない。遠距離砲の彈丸は擊つに老幼の區別を措かない。鐵砲擔ひで塹壕に立たずとも、全國到る處が戰場となつた。戰爭は貧者の仕事として富者は高閣に晏如たるを得なくなつた。戰爭は兵隊の仕事として一般國民は局外に超然たるを許されなくなつた。次の戰爭は東京も、大阪も、火の雨降ると覺悟せねばならぬ。

亞細亞の大陸から離立せる我國は地理的關係上、古來外敵の侵襲より免かれた。之が爲め幸か不幸か我國民は戰爭の眞の殘虐味を知らない。近くは日淸、日露、日獨の三役とも幸に連戰連勝で未だ曾て敗戰の悲慘を味はない。從ふて我國民は戰爭に對して今尙ほ頗る樂觀的である。日本魂と伊勢の神風、一ば必ず勝つものと迷信的に信じて居る。勝利を輕信せるが故戰爭をやりたがる。加ふるに國民性の性急がある。外交問題が起る毎に國民は一束飛びに最後の手段に急ぎたがる。國家の危險が此處に在る。

○

職業は趣味を生じ、趣味は愛着を生ず。靴屋は人の足を見て步き、理髮屋は人の頭を見て步く。軍人の職業は戰爭である。縱令今の軍人は轡の音に目を覺ます程に軍事に鋭敏ならずとも既に職業である以上彼等が戰爭に趣味を有し、戰爭を好愛するは人間の自然である。殊に戰爭は軍人が平素學びたるところを實地に試驗し平素憧る勳章を飾るに唯一の機會である。軍人は其の職任に忠實なれば忠實なる程戰爭を好愛する。恰かも熱心なる解剖學者が運ばれたる屍體を見て喜ぶと同一心理である。故に軍人の好戰心を惡むは正に火藥の爆發性を惡むと同一の愚である。火藥は爆發性を有するが如く製造せられ、而して爆發性を有するが故に尊いのである。軍人は戰爭を好むが如く教育せられて居る。故に好戰心なき軍人は爆發性なき火藥と同樣軍人として價値なきものである。

火藥は爆發の危險あるが故に之を火氣の無き場所に貯藏せねばならぬ。軍人は好戰の危險あるが故に之を政治の外に隔離せねばならぬ。軍人に政權を與ふるは恰も火鉢の傍に火藥を置くと同樣に危險である。軍人は戰爭を好むが故に動もすれば建ての國家機關を戰爭の目的に供せんとする。之が即ち戰前の獨逸式軍國主義である。西比利亞出兵などの愚擧は軍人宰相にあらざれば爲し能はざる處である。

理想と議論とは別とし、苟しくも國家が軍備を整へて軍人を養ふ以上、軍人は成るべく強く好戰心に燃へしむべきである、我等は軍人の好戰心を憂へない。唯軍人として政治上に權力を振はしむることを危險とする。

○

勞働問題のやかましき現在は知らず、曾ては紡績女工なるものゝ境遇は極めて悲慘なるものであつた。田舍の純良なる少女が老猾なる勸誘員の棚ボタ的口車に乘せられ、三年勤めて嫁入仕度をと夢み乍ら足一たび工場の門を潜るるや、空想の甘夢覺めて牢獄の苦に泣きつゝ欺かれたる身の不幸を歎くが常である。而かも鬼の如き資本家に青春の血を吹ひ絞られ、漸々年期を終へて着換一枚纏に故郷に歸りたる彼女は決して工場の苦痛を語らない[illegible]とする小さきバニチイか、否らざれば他人をして亦己と同じく苦痛を嘗めさめしんとする江戸の敵を長崎で討つの類であらう。

夫と是とは事變はれど。兵役は名譽の義務といふのも口には言ひながら、其實苦痛の義務として十の九まで之を嫌ふは明かなる事實である。現在の如き不完全なる徵兵法の下に於て壯丁が兵役を厭ふは寧ろ同情すべきである。壯丁の多くは幸に身體強健なりしが故に不幸にも徵兵に取られ、爲めに一生のスタートに取返へしの付かぬ立ち後れをするのである。我等は每年「祝入營」の旗を見る每に世間の僞善を笑ふと共に、他人の苦痛を歎びとする世間の殘酷を悪むものである。殊に軍事當局者迄が一面には兵役を名譽の義務なりとして國民を煽てながら、他面には徵兵忌避の犯罪者に對し、名譽と稱せらるゝ兵役の優先權を與へせる如き不眞面目には呆れざるを得ない。兵役其ものが悪いのではない。軍備ある以上、國民の誰かゞ服せねばならぬ義務である。然るに軍事當局者が服役者の苦痛に同情して之を軽減するの策を講ぜず、名譽の義務などゝ子供騙しに世間の盲目を煽て上げお祭騒ぎを爲す氣が知れない。納税が名譽であるなら兵役も倶に名譽であるに違ひない。併し名譽不名譽に拘はらず兵役が苦痛たることは事實である。國家は之に對して如何に

んとするのであるか。

壯丁の大多數は兵役を苦痛として初め入營を嫌ひながら、愈義務を果して在郷兵となるや、彼等の殆んど總ては兵役讚美者と早變りする。軍隊教育の效果とすれば軍隊の爲めに慶賀する。若し又紡織女工と同一心理に出づるとせば、我等は人間を悲觀する。

○

鐵騎蕭々、劍聲鏘々、大地を鳴らし黄砂を蹴つて騎兵の一隊が駈けて來た。馬は逞しく人は壯に、何と云ふ勇ましいことであらう。こゝ代々木の練兵場、草は枯れ、土は乾き、烈々の白日は眩ゆきまでに兵士の長劍にきらめいて居る。若き指揮官の吹き鳴すパイプの響と共にやがて練兵が始まつた。一群の馬蹄に蹴上げらるゝ黄土の砂煙、砲煙の渦卷く如く、夏雲の流るゝ如く、南風に靡きて濛き練兵場も見る〳〵黄塵の幕に來された。人も馬も砂煙に埋もれて見へつ隠れつ、獨り劍光ばかりが閃めいて見へる。或は近づき、或は遠かり、右に放れ左に合ふ。去る時は奔馬逸散怒濤の退く如く、近づく時は鐵騎突出刀鎗鳴るの概がある。誠に勇壯又活潑である。斯くて二十分、三十分、汗馬は洗ふが如く、兵士の服は絞るばかりである。思へば何の爲めの此の強訓練ぞ、敵なる人を殺さんが爲めである。何の爲めの此の猛勞働ぞ、草一本の生産もない。國防の爲めなら是非もなしとは云へ、何と云ふ馬鹿氣たことであらう。

路の傍には一群の子守女を相手に年老いた飴屋の爺さんが荷を置いて居る。頭は白く手は筋張つて黒き顏には多年の生活苦に疲れたる幾筋かの深き皺がある。茶色に焦げた麥藁帽子にスネの抜けた古ズボン、見てやる息子は無いのであらうか。

見よ、こゝには勞働にも堪へぬ哀れな老人が生きんが爲めに微かなる飴賣渡世に喘いで居る。向ふには屈強なる多くの壯丁が不生産的な勞働に汗と膏を惜氣もなく流して居る。あの訓練とあの勞働とを生産的に用ひたなら、あの爺さんも……と思はざるを得ない。爺さんの一人息子が兵隊の中に居る樣な感じさへする。

之が文明とか、開化とかを誇る二十世紀の人間の爲す事實劇である。獨り日本ばかりでなく世界を通じての社會相である。息子を兵隊に採られる心配もなく、縱令採られても遊んで食へるブルジョアが政治を支配せる間は、軍備撤廢は愚かなこと縮小すらも出來はしまい。眞に兵役の苦痛を齊感するプロレタリヤの天下となつて後、初めて軍備の縮小も世界の平和も論ずる事が出來る。

消費體系の國家意識とその崩壞

長谷川如是閑

一

社會生活は種々なる分業の生活の渾然たる統一から成り立つてゐるものであるが、この分業の各はそれぞれ一系の生活の體系を形造り、各の分業的生活はそれぞれの體系に於て完成されるのである。分業的生活は全社會生活に對しては部分的生活と稱すべきものであるが、この部分的生活が、それぞれその部分的の目的並びに部分的の樣式を以つて、それ自らの生活の體系を完成せしめたものが卽ち文化現象なのである。文化現象はそれ故に部分的の生活がそれぞれ自己の體系を完成せしめる過程であつて、文化意識が想定するやうに、全體的統一の現象ではない。換言すれば全體の統一は保たれなくとも、部分的の生活が極度に完成すれば、そこに社會現象としての文化なるものがあり得る。例へば軍國的文化は軍國生活といふ部分的生活を中心として發達し、宗教的文化は宗教生活といふ部分的生活を中心として發達するやうなものである。日本の戰國時代に甲冑刀劍等が世界に類のないほど高級の發達を遂げたやうに、全體の生活から觀れば極めて部分的の生活と言はなければならない局部の生活體系が完成される。宗教的文化現象もその通りで、一般生活の極めて低級な時代にも、寺院の建築とか、宗教上の繪畫彫刻物、學問といふ類のものが間抜けて高級の發達を遂げる。社會現象としての文化はつまりさういふ性質のものであつて、文化の意識とは全く反對に、部分的生活が全體の關係を失つて局部的に發達することによつて發生し進展したものなのである。

生活の部分的體系は、それぞれ生活の各方面の特殊の發達となつて現はれ、それ自體の體系だけで完成した形を取るものであるから、これを或る一つの方面的生活完成であるといふことが出來る。この方面的生活體系は、全體に對しては部分であるけれども、その方面自體の體系に於ては、一個の完成した生活

である。而してこの方面的生活がそれぞれ完成され、それが全體の關係に於て統一されたものが社會生活の體系であるが、各の方面的生活が同じ程度で完成されるといふことは、歴史的にはあり得なかつた。社會生活を構成する各方面の生活體系がそれぞれ各自の體系を完成せしめんとするに當つて起る各體系の生存競爭の爲めに、或る體系は優れて發達し、他の體系は壓迫されるといふ事情があり、それが爲めにすべての體系が平等に發達するといふことは、歴史的には殆どあり得なかつたのである。一つの社會に於て、貴族の生活も學者の生活も、武人の生活も百姓の生活も、同じ程度で完成されたといふ時代は決してない。いろいろな方面的生活體系の內の、或る一つ又は數箇の體系が、他の生活を犧牲とすることによつて自己の體系の生活を完成せしめるといふのが、社會生活の現象である。

如何なる事情がかやうな狀態を惹き起すかは姑く措き、これを自然界の現象に見れば、或る體系が、生活の方面的體系であるに拘らず、その體系自體の目的を以つて發展して行くといふことは、その體系が一つの有機的全體をなす場合に起る現象なのである。各の方面的生活體系は、一つの有機的全體である。それが社會といふ全的體系に對して如何なる關係を有つにしろ、方面的體系は一つの有機的全體として、體系自身の有機的過程を有つてゐるのである。さうしてその體系はそれ自身の過程によつて進展する。一つの生物は他の生物の體系を犧牲として自己の體系を完成せしめやうとし、生物の或る集團は、他の集團を犧牲として自己の集團の有機的過程を進展せしめやうとする。各の生活體系はそれ故に極めて利己的であるといはねばならぬ。それは往々全體との關係を無視して、それ自體の體系を發展せしむる。

そこで今、社會生活の方面體系がそれぞれ、それ自體の有機的組織に向つて進展して行く場合に、その各の方面的生活體系のさういふ發展が、全體の社會の體系的發展に如何なる關係を有つかを問はないで、變態的の分化を生ずることがある。詳しく言へば、分業の生活は、本來全體の社會的生活の方面的分擔なのであるが、その常態が或る事情の爲めに變態的に進化することがあり得る。全體を構成するには方面生活の各が渾然としてその全體に綜合されて始めて分業の意義があるのであるが、その常態が變態的に——方面的生活が全體的統一に就て渾然合化されないで——分業が對立的に存在する場合がある。譬へて言ふならば、人體生理に於て、運動の生活と安靜の生活とは、一個の人體の生活に渾然統一されて始めて生理的生活の正態が保たれるのであるが、それが變態的になつた場合には、或る人間

は運動のみの、他の人間は安靜のみの生活を送ることとなる。一個の生理體に於て統一されなければならない二つの狀態、即ち運動と安靜とが別々の生理體にそれぞれ固着するところの分業となるのである。これは分業の變態的發達である。社會現象としてもそれに似た變態が起り得る。社會生活の全體的體系を構成する爲めには必然に統一されてをらねばならない生活の各の狀態が、別々の體系をなして別々の人間の生活に固着し、それが社會的全體の體系に統一されないで、對立的に同一社會內に並行線的存在を續けて行くことになるのである。如何なる方面を分擔するものも、共通に取らざるを得ない生活の容態を分離して各別の人間に分業的に取らしめることになれば、それは運動と安靜とを別々の人に分業的に生活せしむる場合と同じやうに、變態的生活と言はなければならないのである。

すべての方面的生活者を通じて普遍的に取らねばならぬ生活の態度の最も根本的のものは何であるかと言へば、即ち生產の生活と消費の生活とである。——言ひ換へれば、勞働の生活と享樂の生活とである——この二つは如何なる方面的分擔を取る人間に於ても、人間自體の生活の體系に於て渾然統一されねばならぬものである。生產し、而して享樂するといふことは、社會的生活體系の必然的條件であると同時に、それは個人の生活の體系に於て渾然として統一されねばならないのである。何等の生產的生活を取らずに、ただ享樂的の生活を取るといふことはあり得ない。然るに、變態的生活に於ては、生產は生產者といふ特殊の集團の人々の社會的分擔として、その上に負荷せしめられ、これに對して消費は、生產生活をしない人々の集團の生活として、その人々の專門的生活態度となつてゐる。これは丁度甲といふ人間は專門的にただ食物を製造し、乙といふ人間は專門的にただそれを食ふといふ分業のやうなものである。製造することも、食ふことも、共に生活の態度であるが、それは一つの體系に統一されねばならぬ態度であつて、或る體系はただ食物を製造し、他の體系は全くただそれを食ふだけであるといふやうなことはあり得ない。社會生活の上にさういふあり得べからざることが成立してゐるが故に、それは變態でなければならぬといふのである。

社會生活に於て、二つの根本的な態度が別々の體系をなして、それぞれその各の體系が別々の發展を遂げたといふことは、寧ろ異樣の現象なのであるが、歷史あつて以來數千年間、所謂文化現象なるものは、かやうな分裂に基く方面的體系の組織から發生したものであるから、文化意識の上に於ては、この現象に

全く當然と考へられ、これに對する懷疑的意識は極めて近代までは具體的には現はれなかつた。(尤もさういふ文化意識を承認しない生產體系の意識は、極めて古代から存在してゐるのである。)

この組織の下に於ては、生產は特殊の階級に於ける生活として、一系の有機的進化を遂げ、これに對して他の一方に消費の生活の體系が成立し、これ亦その消費體系をそれ自らの有機的の組織を以つて進展せしめたのであつた故に、前者を生產體系の生活といひ、後者を消費體系の生活といふのである。消費體系の生活が如何にして成立したかは、ここに詳說することを省くが、それはつまり生產の生活を營む集團に對立する非生產的集團が、その生產生活の集團に對する支配を開始したところから出發するのである。古代の社會に於てはその經過が明かに認められるが、一旦さういふ支配狀態が成立した時には、既にその社會の文化意識は、さういふ狀態を當然のこととして、その變態的發生事情を忘却してしまふのである。宗教家、貴族、軍人等の階級は、すべて非生產的生活體系を發展せしめた階級であるがその生活の體系は全然消費的である。社會生活の生產的方面は全然この體系と異なる生產階級の生活の體系として發展するものである。社會はその生產階級の生產に依賴して生存を維持したのであるが、その生產の效果を消費する生活の體系は、全然他の一方の非生產的階級の生活體系として發達して行つたのである。消費體系の生活者は、彼等の時代の生產の效果を消費することを專門とする生活の體系を完成せしめた階級である。消費體系の生活と生產階級の生活とは、それぞれ別々の階級に於て、別々に完成せしめらるる別々の生活體系を構成することとなつたのである。

二

前に言つた如く、文化の現象は各の方面的體系の獨自の生活完成である場合が普通なのであるが、文化の意識は之れに反して、その文化現象を產出する方面的體系のそれからは發生しない。何ういふ生活の體系に於て文化意識が完成されるかと言へば、各の方面的生活の效果を享樂する生活の體系——消費體系——に於て文化の『意識』が發生する。文化的創造は各の方面的生活の體系に於て見出されるのであるが、文化的意識は、その文化を享樂する階級の生活の體系に於て見出される。文化現象を產み出す方面的生產生活者は、之れを享樂する階級に屬するものでなく、之れを享樂する者は創造する階級に屬さない人々なのである。而して創造する階級に屬せずして、享樂する人

ものは[illegible]にて[illegible]化の[illegible]されきに[illegible]

文化意識は、その意識の根底をなす生活完成を生産者の生活體系に求めるものでありながら、しかも、この階級の創造の結果を享樂する生活態度から産れる意識なのである。即ちその意識の構成の條件としては、一方に方面的生活の完成がなければならぬが、同時にその方面的生活の效果を享樂する生活體系の完成があらねばならぬ。即ち文化の生活事實は、生産階級の生活體系の所産である。文化の『意識』は享樂階級の生活體系の所産なのである。然しこの享樂はやはり消費體系といふ生活の有機體系を人間的努力によつて發展せしむる生活構成なのであつて、單なる動物的享樂の生活ではない。それは極めて人間的の生活——或ひはそれだけが人間的生活であると思はれた位人間的の生活——である消費階級の支配の成立つた社會に於ては、その社會のすべての制度文物は皆消費體系の生活完成の努力の結果である。國家でも、寺院でも、法律でも、道德でも、藝術でも、禮儀作法でも、言語風俗でも、消費體系の生活完成の現はれでないものはない。(國家といふものが、社會組織の上に消費體系の支配が成立した故に出來た制度であることは、歷史の示す通りである。有史以來生産體系の生活者の國家といふものは見當らない。從つて『國家』といふ特別の名稱は、之れを消費體系、[illegible][illegible]しながら、[illegible]といふ[illegible]國家も進化過程の上の一つの現象であつて、それが消費體系式に完成されたことも決して突然のことではなく、長い期間の進化過程の結果である。從つて國家はまだ完全に消費體系のそれになり切らない狀態にあつたことも考へ得られるし、又この消費體系式組織が他の體系による組織に進化することも考へられる。消費體系の國家組織にのみ國家の名を賦與する時には、この進化過程に於ける別の體系の國家には別の名を與へねばならぬ。即ち『勞働者の國家』といふやうなことは云はれなくなる。然し、そんなことは言葉の都合で何うにでも言へるとした方がいい。生産體系の國家でも、これを『國家』と呼んで少しも差支へない。即ち國家は、消費體系の國家であり得る如く、生産體系の國家でもあり得るのであつて、老子の國家、トーマス・モーアの國家、ソヰエットの國家といふ風に、いろいろの國家があり得ると觀ていいであらう。)

が、消費體系の國家組織は常に——その成立の當初から——他の生活體系の意識によつて批判されることを免かれなかつた。それは消費體系の生活そのものが批判されることに關聯してゐるのである。法律、道德、學問等が嚴重に消費體系の生活

に立脚してゐた時に、生活體系の生活者はその消費體系の文化意識に對して、大抵消極的の反抗的態度を取つてゐたのである。が、又積極的に消費體系のそれとは異なる生活意識を以つて消費體系の文化意識を批判してゐたこともあるのである。消費體系の支配が、常に武力と教化とによつて、生產體系の意識を壓迫しなければならなかつたのは、その理由である。

『國家』といふ意識は、それ自體、消費體系の生活意識と根本的に必然の關係で結びついてゐたのである。それは國家そのものが生產の體系の生活と全く異なる生活の組織として發展して來たからである。この國家生活の事實が一般生活の進化につれて次第に進化して來ると共に、その意味の國家意識を動搖させざるを得ないのであるが、それは畢竟生產と消費とを對立的の關係に於て別々の階級的生活體系として完成せしめるといふやうな意識が決して正常の生活狀態でないことに原因してゐるのである。その事情を明かにする爲めには、先づ消費體系の國家意識の特徴を考へて見なければならない。

三

消費體系の國家意識は、先づ第一に支配的である。支配といふことが、生活の組織に於て或る程度まで存在せざるを得ない強制を意味するならば、それは國家組織の一つの條件とし缺くべからざるものである。が、生活の或る組織に於て是非とも強制が行はれざるを得ない場合にも　その強制は決して生活の組織の根本的性質を形作るものではない。親は子に對して或る場合には強制しなければならぬ。犬猫の親子に到るまでの強制は着き纒つてゐる。それほど親子の關係に強制が缺くべからざる條件となつてゐるが、しかも誰か親子の間柄を強制的であると考へる者があらう。親と子との結びついた生活組織の一つの體系は、決して強制をその根本的性質としてはゐない。道德の上からも　常識の上からも『親子の關係は強制關係である』とは決して認められない。生活の組織に於ても、亦同じことであつて、社會の或る組織に於て、その中の一員は、或る場合に、他の一員を強制する必要のあることは言ふまでもない。しかも、如何なる社會的組織も——恐らく監獄の組織も——その組織の根本性質を『強制』といふことの上に置いてゐるものはない。生活を一つの渾然たる組織體として觀るならば、その有機的全體を保持する關係は、物理的強制力も働らくことがあり、心理的強制も作用することがある。或る見方によれば、それは全く強制的關係であるとも言へよう。然し各、牙や爪を持つ動物と雖も、決して常にその牙と爪とだけの生活を彼等の生

[illegible]してゐない、

一つの集團がその集團的生活の組織を可能ならしめてゐる作用は、決して強制ではなく、その有機關係が各の個體をその有機的全體の目的に從つて行動せしむる作用である。之れを社會全體としての方面から言へば、各員の間の有機的關係であると言へるし、各員の方面から言へば、各に潛在する社會的本能であると言へる。有機的全體がその有機的作用を營み、各員がその社會的本能を働かせるところに、一つの集團の生活の組織なるものが存在し得るのである。それは一員が他の各員に對する又は各員同士の間の強制ではなく、全體の組織的生活の衝動によつてゐるのである。

集團の組織が、さういふ社會的有機關係の完全體であることは、群生動物の生活を見ても分る。そこにも往々強制が存在する事實が發見されるが、然し群の生活を構成する全體の關係には、ちつとも強制が働いてゐないのである。群生動物の生活がさうである如く、人間の集團に於てもさうでなければならぬ。人間が群をなす關係を、各員の強制と見るやうな見方は、如何に非常識な人と雖も敢てしないところである。況して人間の集團に對する近代の研究によれば、その最も最初の形であるところの部落的集團が全く信仰的集團であるといふ事實がある。信仰に於いて[illegible]の意識である。後代に至つては[illegible]さうなつた時には、今日の國家組織と同じ[illegible]立した時なのである。部落的集團の組織的結束は、強制と[illegible]渉な各員の心理的共通によつて保持されてゐたのである。人間同士は――動物でさへも――決して互ひ互ひを強制することによつて集團を形作るものではない。

原始時代の部落的集團においても強制はあつたが、それは人間同士の現象ではなく、神の人間に對する作用だつたのである。ただ神のみが強制したのである。それすらただ信仰破りに對する神の制裁としてに過ぎなかつた。生活そのことが強制的ではなかつたのである。社會といふ一つの有機體系の生活に於てはその構成分子たる各員は、その社會全體の有機關係に於て立ち働くやうに本質づけられてゐたのである。故に正常の社會意識はかやうな有機的共存關係の意識でなければならぬ。そのことは今日でも人々が家族關係を意識する場合に明かに現はれてゐる。何人も家族關係を強制關係であるとは意識しない。一つの渾然たる有機體系の關係で各員を結びつけてゐて、誰もが強制を感ぜずに家族的關係に溶け込んでゐる。それが、本質的の家族生活の意識である。そしてそれは過まつた意識ではないので

ある。この家族的關係に於て眞であるとは、同時に社會關係に於て眞なのである。

然るに消費體系の國家意識に關聯する『支配』は、右のやうな社會意識とは反對に、嚴重なる强制の意識であつて、それは必ず强制關係に立脚する。

消費體系の國家意識が支配的であるといふことは、即ち消費體系の國家が强制關係に立脚してゐるといふことである。

消費體系の國家意識の根本性質は、絶對主權の觀念である。この觀念は國家生活の現實と矛盾してゐることが極めて明瞭であるに拘らず、今日も尙ほ消費體系の國家意識からこの觀念を取り去ることは出來ない。近代の歷史的研究は、かやうな『絶對』の、實は全く相對的であることを明かにしてゐるのであるが、さういふ理性は決して、消費體系の國家の絶對性を改心せしめる力はない。それは、消費體系の支配の根本に、强制的關係を持つてゐることの結果であつて、その關係の意識は軈がて『絶對』の性質で現はれなければならないものなのである。元來强制關係は、それが事實上成り立つや否やといふこととは關係なしに意識の上では必らずその强制が絶對のものであることを想定する。他人に對して腕力を振はんとする者は、自分の腕力が相手方よりも强くても、弱くても、そんなことに關係なく、自己の腕力の絶對的權威を以つて相手方に迫るのである。强制が事實上成り立たないといふことは、決して强制の絶對的性質を妨げるものではない。だから絶對主權說に對して、如何にそれが事實上成立しないといふことを闡明して見せても、又主權の絶對性が實際貫徹されずに、人民や外國の力で壓へつけられることはあつても、決して主權の意識の絶對的性質を妨げない。從つて現實の世界に於て、絶對の支配が成立しないといふことは、意識の世界に於てそれが成立することを妨げるものではない。

消費體系の生活者が何故に自己の國家が絶對的であると信ずるのであるかと言へば、それは消費體系の生活の組織が彼等消費體系の生活者の意識を決定するが爲めである。消費體系の生活は、非生產者が生產者の所產を消費する生活であつて、この消費の生活の體系を完成せしめる爲めには、この生產の效果を收得する組織の完成に待たねばならぬ。この生產の效果を收得する組織は即ち生產體系それ自體の內部に於ける有機的關係ではなく、生產體系以外の力が生產體系に加はる强制的組織である。生產者がその生活の組織を有機的關係に於て成り立たしめ、そこに豐かな生產の效果が擧げられれば、消費體系の生活者はその效果を全的に收得する方法を持たねばならぬ。この方法は、原始的には信仰的並びに腕力的であつたのである。消費階

於[illegible]に、[illegible]時にこれを見れば、[illegible]既に述べた如く[illegible]者の階級だつたのである。そこでは非生産體系の生活か、宗教的信仰若しくは軍事的勢力のいづれかにより、或ひはその二つの力の結合した勢力により、生産體系の集團の上に君臨したのであつて、その生産體系の所産が消費體系に收得される作用はいづれにしても『絶對的』なのである。契約とか承認とかいふ關係ではなく、たゞ絶對の力がそれをするのである。信仰の場合も、亦武力の場合も、この絶對性には變りがない。前にも言つた如く、原始時代の強制は、人間同士の生活ではあり得ない、ただ神と人間との間にのみあり得ると考へたのである。從つて強制が有効に行はれた時には、その現實の關係は人間同士のそれであつても、意識的にはそれは神業だつたのである。虎のやうな腕力を有する人間が強制を行ひ、それが社會的に成立すると、人々はその人間を自分達と同じ人間であると意識することは出來ないで、その人を神にしてのである。彼等に取つては、人間が人間に對してさういふ強制を行ひ得ることは信じられなかつたのである。從つて武力的征服の完成も亦その時代の意識としては神業だつたのである。而して神の力は必らず『絶對的』として意識せられる。故に『強制』は之れを社會的に言へば、人間同士の間に於てはあり得ないことで、神と人間との間に[illegible]る。

消費階級の國家意識に、消費階級の生活が右のやうな階級の組織の下に完成されたものであるから、その國家の特徴は強制的支配であらねばならぬ。今日の教科書にも、國家とは力の關係であると書いてある。權力とそれに對する服從との關係が國家意識の根本的性質をなすといふのが、國家に關する消費階級の常識である。

消費階級の國家意識が絶對的性質を持つた力の關係に依存するといふことは、次第にその觀念が進化していろ〳〵の形を取るに至つても、終始一貫その特徴を保存するものである。立憲政治は絶對主權を制限する政治機構であるといふが、その機構はさういふ風に變化しても、その政治そのものが消費體系の生活者の支配狀態である限り、國家意識の根本的性質に變化はない譯である。組織を如何樣に變へても、その組織を維持する階級の生活體系が消費體系である限り、前に陳べた生産收得の絶對的關係から脱却するものではない。政治的支配は生活の二の體系――生産體系と消費體系と――の渾然たる統一の關係ではなく、一つの體系が他の體系に對する強制關係を基調とする點に

於て消費體系式なのである。從つて政治的權力が如何樣な組立てから成り立てゐるとしても、國家意識は力の關係であることに變りはない。

この力を是認する法理學は、つまり消費體系の學問である。

生産體系の生活に於ては、生産行動そのものが決して力の關係に立脚してゐない。社會的生産行動は隣人に對しても、自然に對しても、有機的關係を以つて互ひ互ひの生活に參加する組織的方法である。米を作る生産行動は、人間が米の生産過程内に參加することであり、――米の成長の有機關係に人間が手傳ふである――而して米はその成長を以つて人間の生存過程に手傳ふのである。この生産關係に於ては、互ひ互ひの生存が互ひ互ひの行動に有機的に關聯する。そこでは互ひ互ひの間に有機關係はあるが強制關係がない。之れに反して消費の體系に於ては生活者は決して米の生産過程に參加しない。たゞ米が米自身の體系の果實を產んだ時にそれを收得し消費するか、又は他人の生産した米を收得消費するのが、卽ち消費體系の生活である。それは消費するだけで決して種子を蒔いたり肥料を施したりして、米の生産過程に參加することはしないのであるから、米に取つては消費體系の生活は何等有機的關係に於て結びついてゐる生活とは言はれないやうに、生産體系の生活に取つても消費體系の生活は有機的關係に於て結合してゐるとは言はれない生産體系の生活は力の關係を基調とするのであるから、生産體系の生活に於ては互ひ互ひの生活が關係的であり、從つて決して『絕對的』といふやうな意識を產まない。

消費體系の國家意識の特徵が『支配的』であるといふことは、卽ち以上述べたやうに、消費體系の生活そのもの丶特徵と關聯してゐるのである。而して二つの國家意識は、そのやうな關係が社會生活の組織として完全に成り立つた時に於て最頂點に達するのは自然のことである。それは古代國家に於いて見出される事實なのである。歷史家が國家發生の時代としてゐるエヂプトバビロン等の古代の東方諸國は、消費體系の國家として空前絕後のそれであつた。有名なソロモンの榮華は、如何に消費體系がそれ自らの生活體系を完成せしめたかを物語つてゐるのである。その時代の宮殿、墳塋等が後代に見ることの出來ないほどの大規模で、又壯麗を極めてものであつたといふのも、消費體系の國家の黃金時代を示すものである。

四

消費體系の國家意識の特徵は、その次ぎには、階級的であるといふことを擧げ得る。社會生活の組織が各の方面的體系から

成り立つてゐることには、前に述べた通りであるが、その各の體系の生存が有機的相互關係によつて保たれないで、他の體系の犧牲に於て一つの體系を完成せしめる組織である時に、階級的となる。かやうな組織が可能である爲めには、そこに支配的關係の成立が必要なのである。が、支配的關係はそれを生活の組織そのものと異なる角度から觀たのであつて、階級はそれを組織そのものの構造から觀たのである。それは生活の組織的構造であつて、各體系が一つの社會體系のうちに存立する場合に生ずる狀態の一種である。

消費階級の國家意識は他の體系の犧牲に於て、或る體系の生活を完成せしめるといふ狀態を條件として成立する意識であるが、然し、消費體系の意識に於ては、國家生活は集團的全體の生活の意識であつて、彼等は決して或る階級を國家生活から除外してゐるとは考へない。(極端の場合には、消費體系の國家が或る階級の生活者を意識的に國家生活から除外する場合がある。例へば被征服者が或る種の同化しない生活を取つた場合には、征服者の階級は、その被征服者の階級を國家生活以外に驅逐する。)

消費體系の國家意識は、凡ゆる生活の體系を包含するといふが、それはたゞ彼等の意識の上の虛僞であつて、實際は決して國家生活の圏外に生活の[illegible]ることをしないのが[illegible]國家の特徴である。古代に於ては既に[illegible]意識的にそれを敢てした。ギリシア時代の市民——消費階級の國家は商人、工匠、農民、奴隷等を牛馬のやうな國家生活の道具とは認めたが、國家生活そのものからはそれ等を排斥したのである。封建時代の日本人は百姓町人と雖も日本人であるとは認めたに相違なく、從つて國家生活はそれ等の人々をも包含してゐると意識したに相違ないが、實際は、百姓町人は日本人でありながら、國家生活の特權を與へられなかつたのである。消費體系の國家生活の本質的性質は即ち支配の生活、文化の生活、民族的獨自生の活等であるが、さういふ生活からは百姓町人は除外されたのである。之れは現代に至つても、國家生活の特徴として殘存してゐる現象であつて、支配の生活、文化の生活、民族の生活等を獨占するものは、大體に於て消費體系の生活者である。而して消費體系の國家生活とは、即ちそれらの特殊の生活を意味することになつてゐる。それらの生活の圏外にあるものは、國家生活から事實上除外されてゐるのである。

されば消費體系の國家意識は階級的であることを特徴とすると言へるのである。つまり消費體系は他の體系の犧牲に於て自己の體系を完成せしむる生活であるから、その國家生活に於て

完成せられる生活體系は消費體系のそれでなければならないといふことになるのである。元來、階級は生活の組織の變態である。消費體系の國家意識が階級的であるのは、即ち消費體系の生活完成がこの變態的構造によつてのみ成し遂げられるものであるからである。元來生活の特殊の行爲の組織的發達は、それを組み立てる特殊の體系の發達に待つのである。耕作の生活でも、工匠の生活でも、それが組織的に完成されるには、それぞれその特殊の生活能力を發達せしむる體系的の組織によらねばならぬ。生産行動がさうである如く、消費の行動に於ても、前に言つた如く、動物的消費と異る特別の消費生活の體系が人間的に組み立てられて、始めて消費の生活が人間的發達を遂げるのである。その標本的な例に引かれるのはギリシヤの市民の生活であるが、消費の生活を完成せしめる組織能力の點に於て、ギリシア人は異常の天分を具へてゐたと認められる。消費體系の社會組織が産み出す凡ゆる人間的制度が、悉くギリシア時代に存在して居つたと言はれてゐる位ギリシア人は消費體系の生活を人間的完全の頂點まで持つて行つたのである。ギリシア人がかやうな組織能力を産み出すことは、やはり消費體系の生活が特別の體系的發達を遂げたことに原因するのである。それは確かに人間が成し遂げ得る最も立派な仕事の一つである。消費體系の生活者がさういふ消費體系の生活のみが人間的生活であると考へたのも無理がないと思はれる位、それは見事な生活である。而して今日までの凡ゆる文化現象は皆このギリシア式消費生活の組織の賜物なのである。

けれどもこの組織の最頂點はやはり過去にあつたのである。西洋に於てはギリシア文明に優る文明が出現しないと言はれ、支那に於ては周代の文明に優る文明が生れないと言はれ、いづれにしても過去の文化が空前絶後として尊崇されてゐるといふのは、即ち一つは過去尊崇といふ本能的傾向の顯はれでもあらうが、然し事實文化の産物を個々に検して見ても、建築でも彫刻でも藝術でも哲學でも、苟くも消費體系式のそれは、西洋ならばギリシアのそれに比べられるものは殆どなく、支那ならば周代のそれに比べられるものは殆どないと言はれてゐる。何と言つても、消費體系の生活は數千年の過去に於て絶頂に達したといふことは拒まれないやうである。

それは即ち消費體系の生活が據つて立つところの、階級的構造が數千年の昔に於て最も完全に成立してゐた故である。階級組織を、他の生活體系の犠牲に於て或る生活體系を完成せしめる組織であるとすれば、その最も標本的なものは、奴隷の存在である。奴隷は被征服者の人間的能力を牛馬のそれを使役する

やうに發生するところから求められたのであつて、消費體系の生活はこの奴隸の成立から出立し、所謂奴隸經濟が完成するに作つて完成した組織である。古代國家ほど大規模な、又極端な奴隸經濟はなかつた。古代國家の階級的構造は全くこの奴隸經濟の組織そのものだつたのである。この奴隸の組織が大規模であつた爲めに、消費階級の收穫が又大規模であつたのである。而してこの豐富な生活の剩餘を消費することに於ても、亦從つて大規模であり得たのである。しかも經濟現象の進化は次第にこの奴隸經濟の組織の可能性を減少せしめ、從つてその經濟的效果を減少せしめ、文明の進むと共に古代國家式の大消費が次第に制限を加へられるに至つたのである。けれども消費體系の生活は、全く奴隸なしの組織に於ては決して成り立つ筈がない。人間的生産能力を働かすものがその生産の效果を收得し、生産能力を働かせないものは、生産の效果を享樂するを得ないといふのは、消費體系の生活の否定である。尤も消費體系が老人や子供と同じやうな社會的地位にある人間ならば、非生産的であつても、社會はその生活を支へるであらうが、消費體系の人々は子供でも老人でもないから、社會は有機的にそれを支へる作用を持つてゐない。從つて生産と消費とが必然の關係にある時には、消費體系の生活は成り立たない譯である。で、若くも消費體系の[illegible]系の生活者に對し、その[illegible]言ひ換へれば、組織がその[illegible]の下になければならなかつた。組織の生活とは即ちこの關係の産んだ組織なのである。從つて今日の國家は古代國家ほど消費の體系が極端の程度に達することはなくとも、古代的國家生活の延長であることはいふまでもない。

消費體系の國家意識が階級的であるといふことは、後代の制度の上には次第に緩和されて現はれる。現に奴隸が廢止せられ、權力が平等に支持され、契約の自由が保障され、人身賣買が禁じられ、その他宗教道徳の上に於て、各人が人間的單位を與へられ、從つて國家意識の上に於ても階級的特徴は意識的に壓迫されてゐるのである。が、一つの制度の廢滅は、直ちにその制度と關聯する生活組織を作り變へるものではない。奴隸制度は撤廢されたが、奴隸制度が産んだ組織で、さうして奴隸制度を別の名で支持する生活の組織は必ずしも改められない。即ち消費體系本位の組織は依然として殘存する。資本家と勞働者の對立に於ても、國家生活の體系を生活する者は、消費體系の生活者であるところの資本家であつて、勞働者ではない。權利は與へられても、それを享樂する階級は消費體系のそれである。

自由、正義、自我等の意識が次第に階級的構造を破壞せしめつゝあるといふが、それは畢竟舊階級の崩壞であつて、その自由、正義、自我等を新に實現せしめる生活者は、やはり消費體系の人々である。そこで所謂近代國家にも依然として階級的性質が保留せられてゐるのである。

併しながら既に國家意識から階級的性質を排除するといふ意識を多少とも生ぜしめたことは、國家生活の內容の進化に原因してゐるのである。古代國家ほど、消費體系の生活意識が、國家的動機として作用することが極端であつたといふことが示してゐる通り、他の一方の生活體系、即ち生產體系の意識が次第に國家意識の構成要素の中に喰ひ込んで行くのである。それは社會生活の組織が緩漫ながら消費體系のそれから生產體系のそれへと轉化しつゝあることを示すものである。これ亦消費體系の國家意識の崩壞に外ならない。

五

消費體系の國家意識の次ぎの特徵は、それが『文化的』であることである。國家の生活理想を文化意識に求め、文化實現が國家生活そのものであるとするのが、消費體系の國家意識の特徵である。これは强ち近代ドイツの國家哲學ではなく、古代に於て既にさういふ國家意識が、多くの國家生活に於て顯著ゐたのである。支那の國家意識の如きはその顯著な一例である。がその『文化』といふのは、各の方面的體系の完成を意味する文化現象ではなく、前にも言つた如く、その文化的所產を綜合的に享樂する消費階級の意識による文化の意味なのである。消費階級は、文化現象を產み出す體系は生產のそれであることには目を塞ぎ、『文化』と言へば消費體系の生活それ自體が產む一種の觀念的生活であるとする。支那の儒教も、ドイツの哲學もこの點には變りはない。ところが屢々言ふ如く、消費體系は享樂の生活體系であつて、創造の生活の體系ではない。從つて文化が若しさういふ體系から產れべきものであるとするとそれは生活の創造ではなくただ生活の意識であらねばならぬ。それは生活を如何にして創造するかといふ過程ではなく、生活を何う意識するかといふ觀念生活の過程である。消費體系に取つては、文化はさういふ一つの意識狀態を指すのである。さればそれは創造的生活を享樂する一つの態度である。それは人間的生產を人間的に享樂する生活の意識であつて、社會的生活の各の方面的體系を生活するものの心的態度ではない。だから生產體系の生活者は決してさういふ文化意識を持つことは出來ない。偶さういふ意識を生產階級の人々が持つてゐるのは、要す

る文化等によつて、生産體系の人々が、消費體系の生活意識を一様化する結果である。米を作らなければならない百姓が暴利を得やうとする慾望をもつこともあるが、それは生産階級の百姓が資本家階級の人間心理を模倣するものである。生産體系それ自らの意識としては決してさういふ意識は産み出せない。彫刻家が立派な彫刻を作らうとする衝動は、即ち生産體系の生活本能であつて、それに伴ふ意識は生産體系の意識であるが、若しその彫刻家がその製作を高く賣つて巨利を博さうと考へたならば、それは決して生産體系の意識ではない。それはさういふ商業的交換によつて暴利を貪る階級の生活意識を「模倣」したのである。消費體系の生活者の文化意識は、生産體系の創造が文化現象を産み出す場合の意識ではなく、その創造の所産を消費體系の組織に於て享樂する場合の意識である。消費體系の國家意識は、即ちこの意味の文化意識を基調とするのである。

消費體系の國家意識は、それ故に文化が消費體系に於て完成されることを國家目的の實現と思惟する。而してこの文化は消費體系それ自らの生活完成なのであるから、全體の方面的生活の關係を顧慮しない。消費體系の局部的の生活完成はそのまま國家生活の完成として意識されて、多くの人々がこれに衣食の多いことが國家的優越であると考へるのである。それは極端なやうではあるが、古代民族が庭園を築くこと、寺院を建立するにして、それらに國家生活を表現せしめるのと同じ意義であり、又所謂文明國がその局部の一都會に高級な文化的表現を有すことによつて、國家的生活が完成されたとするのも亦同じ意識なのである。尨大なロシヤの一局部のモスコウに極めて高級な藝術が存在すれば、何億のロシヤ人民が如何に低級な生活をしてゐても、ロシヤの國家生活の完成があると意識するのが消費體系の國家意識の特徴である。又特殊の階級に特殊の英雄が現はれて、軍事的征服を完成せしれば、そこに偉大な國家的表現があつたと意識するのもそれである。丁度戰國時代に甲冑や刀劍が工藝美術の最も高級の發達を遂げたことによつて——それはただ軍事的生活の極めて局部的な生活體系の完成であるに拘らず——それが國家生活の理想的表現であると意識するやうなものである。さういふものが消費體系の生活完成の典型的のものであるところから、ただそれだけで日本の國家生活の偉大な表現であると意識するのである。

從つて、かやうな國家意識に於ては、完成せしめらるべき國家生活の範疇には、ただ消費體系の生活のみが包含される。こ

の組織の下に於ては生活の進歩は、消費體系のそれに沿うて進んで行く。例へば、刀劍は前述のやうに發達するが、農具その他の生産用具は依然として舊態に止まつてゐる。工藝的創造の能力も消費體系の生活に沿うて發達するのであるから、例へば日本特有の漆工の如きも、消費體系の生活用具に沿うて發展し刀槍や武家の調度などの消費體系の生活用具の技術として發達するが、鋤や鍬には決して金蒔繪は施されない。凡ての文化現象は生産體系の用具を度外視して、消費體系の生活にのみ協力する。古來の文化的技術や學問の多くは皆消費體系の生活にのみ役立つのである。

生産の體系にさういふ人間的努力が加へられたのは、十八九世紀以來のことであつて、近代科學の發達が即ちそれであつた。この科學は消費體系の生活にも沿うて進み、軍事的生活その他種々なる享樂的生活にも役立つたが、然し驚くべき生活の變革を惹き起さしめたのは、科學が生産體系に沿うて進んだ爲めである。かやうな人間的意識が生産體系に沿うて進むやうになつたのは、即ち消費體系の生活の崩壞を暗示するものであつて、古來曾て無かつた現象が生産體係の側に起つたのである。

しかも文化の意識はさうなつた後も尙ほ消費體系に沿うて進んでゐる。今日の文化意識は昔のそれと全く同じ態度で、生産體系の意識を排除する。生活的方面は消費體系の文化意識て捨象せられ、消費體系的意識生活の上にのみ『文化』は存する。國家意識が實現せしめる『文化』は即ちこの種の文化である。かやうな意識は消費體系の生活が極度に繁榮した古代國家に於て最もよく現はれてゐるのであつて、プラトーや孔子の聖人の國家といふやうな徹底的な消費階級意識は、近代の文明意識に於ては存在しない。近代の意識は極めて複雑な構造によつて人工的に組み立られてゐるに過ぎないのであつて、徹底的の消費體系式國家意識は古代のそれに盡きてゐる。それは丁度消費體の國家目的が近代の社會的生活によつて次第に朦眛な形を取りつつあるのと關聯してゐる。國家社會主義といひ、社會政策主義といふ、いづれも消費體系的生活意識に立脚したものであるが、それでもその意識の不徹底加減は、到底古代國家の徹底的な消費體系式國家意識とは比べものにならぬ。それは畢竟文化意識の上だけで舊精神を支持してゐるに止まり、現實の國家生活は次第にその意識と距離を生じつつある故である。

六

最後に消費體系の國家意識の他の特徴は『民族的』であることである。無論民族的意識は決して消費體系だけの意識でな

い、國家[illegible]に、[illegible]生活から階級的に除外されてゐても、決して民族的意識に缺いてゐない。内部で奴隷的待遇を受けても、それは國家生活の人工的組織の結果であつて、集團の自然狀態としては、凡ての階級を引括めて民族的意識で統一されてゐるのである。けれども消費體系の國家意識は、その國家體系の生活に於て、意識的に特に民族精神を發揚せしむることを特徴とする。

元來民族的本能は、生物學的本能作用に出立し、それが宗敎的信仰のやうな人間的意識狀態と現はれて、或ひは信仰的に、或ひは哲學的に發展したものである。この本能的衝動は凡ての本能が然る如く、後天的の事情で變化することの絕對不可能なものである。ただ生活組織の進化の凡べての本能的衝動を抑制する傾向をもつものであるから、組織が複雜となるに從つて、簡單な本能的衝動はその發揚の機會を減少せしめられる。道德・法律・風俗・習慣等は凡べて複雜な生活の組織が本能の働きを調節する作用なのである。本能はこの生活の調節によつて生存の上に初めて功利的の作用を働き出すのである。無論生活の組織が餘りにこの本能を制度的に壓迫すると、生存の衝動がそれに反抗して、結局生存要求の制度破壞となつて現はれる。餘りに制

交[illegible]他の所謂[illegible]るのである。

併しながら人間的社會生活の本質はどうしても、本能の制度的調節にあると云はねばならぬ。生活の組織は、異つた種族に會へば必ず鬪爭を惹起すといふ本能を壓迫して、異種族間の接觸が圓滿に行はれるに至る。それが人間的社會集團の協同生活の出發點であつた。猫と鼠とでさへ、見世物などにあるやうに、彼等の生活組織の如何によつては、極めて圓滿な接觸を保たしめることも出來る。それは生活の組織が如何に動物的衝動を抑制するかを說明してゐるのである。人間の動物的衝動も明かに生活組織の進化によつて、次第に抑制の度を增されつつあることは拒めない。つひ近代までは同じ日本人の間にさへ鄕黨の相違の爲め、接觸即ち鬪爭といふ原始的本能を發揚せしめたのであるが、今日では僅々數十年の間に、全くさういふ本能が働かないやうになつてしまつた。民族間に於ても接觸が鬪爭を本位としたのは、かなり近代までさうであつた。が、今日ではその反對に、接觸は必ず平和を原則とし、鬪爭を例外とするに至つた。人間の原始的本能が生活の組織によつて全く壓迫されるといふことは、非常に長い年月を要するのであるが——如何なる

い年月を以てしてもそれは不可能であるかも知れない位であるが——生活の組織の上でその本能が働けなくなることは、案外容易な現象なのである。日本人の原始的本能が維新前後を界として、非常にその作用の變化したことは爭へない事實である。されば生活組織の複雜に進化することは、同時に本能を弱めることであると云はねばならぬ。最も如何に弱められても、生活がその本能を必要とする場合には、その本能は猛然としてその原始的勢力を恢復するのである。それほど本能は根本的にそれを如何ともすべからざる性質のものであるが、他方から言へば、それほど強い本能をともかくも壓迫する生活組織の作用もまた極めて力強いことを思はねばならぬ。

ところがさういふ風に強い生活の組織とは如何なる生活を意味するのであらうかと言ふに、それは現實生活を組織的に支持する生活の體系なのである。現實生活を支持する生活の體系とは、屢々いふ如く、二つの生活體系のうちの消費のそれでなく生產のそれなのである。

生產體系の生活は人間の社會的生存を現實に支持する組織である。だからこの組織に於て作用する生存の法則は、何よりも力強く人間を支配する。何となれば人間が生存するには生存の法則によらなければならないからである。生存を支持するものは生活の創造的作用であるが、この創造は既に言つた如(く生)產體系のみの作用である。消費體系自身が創造と考へるも(のは)享樂生活に於ける發見である。言ひ換れば、或る生活を如何に享樂するかの人間的方法の發見である。それは全く動物にはない作用であるが、然し生活そのものを第一次的に支持する作用ではない。それは最も人間らしい生活の創造であると言はれ、又さうでもあり得やうが、それだけで人間を生かし得る作用ではない。その意味の享樂生活の創造は畢竟生產體系に依據する生活である。故に本能の作用が生活組織で調節されるといふ場合の生活は、第一次的に生活を支へる生產體系の生活なのである。

ところが消費體系の意識は全くそれと反對のことを考へてゐる。本能の作用は消費體系の生活組織のみが之れを調節し得ると考る。道德・法律・宗教等の制度の消費體系に於て成立したもののみが、本能を調節する力を有つといふのである。これは無論人間的意識が本能を調節する作用を有する限り、間違ひのない所ではあるが、然し消費體系の生活意識がそんなに有効に本能を抑へられない理由がある。それは第一に消費階級の生活態度そのものは根本的に本能的である。(このことは他の雜誌で說いたこともあるので、ここには詳說しない。要するに消費の生

活は消費の生活であるが、蒐集の生活は生産の生活に[illegible]より本能的のそれである。従つて蒐集生活は發達した消費體系の生活には本能的要素が優つてゐる。それは丁度耕作の生活に比し、戰鬪の生活が、より本能的であるのと異ならない。生産の生活も無論或る意味で本能的であるが、それよりも動物的本能に近いのが、蒐集の生活の本能の性質である。）

生産體系の性質は、生産そのことが本能の制壓に出立してゐることによつても、その本質を窺ふことが出來る。生産行動が行はれる場合には、より動物的のいろいろの本能を壓へなければならない。米を蒔くには食慾を抑へ、放逸の生活から定期的正確の生活に入らなければならない。より發達した生産行動に於ても、やはり動物的本能を抑えることから出立する。之れに反して、消費體系の生活に於ては、より動物的本能に立脚する行動が優つてゐる。無論その動物的本能は消費體系の生活に現はれる場合には頗る文化的に修飾されてゐるが、本質に於て本能の滿足であることを暴露する。阿房宮を造るのも、數千人の妻妾を後宮に蓄へるのも、それらの生活——建築なり婦人文化なり——が結局消費體系の生活樣式の內容をなすほど文化的に修飾されてゐるのであるが、さういふ生活の根本動機は本能的慾望に出立してゐるといふまでもない。戰爭の道德の高調、蒐[illegible]的[illegible]を[illegible]させる。消費體系に[illegible]なければならなかつたのは、この本能的生活の[illegible]つたのである。しかもこの道德意識は根本的には消費體系の本能的生活の昂進を如何ともすることが出來なかつたのである。

次ぎには消費體系の道德そのものが生産體の意識を壓迫し消費體系の意識生活を高調するに役立つ働きをしてゐるのであつて消費體系の本能的性質を壓迫するよりは寧ろ昂進せしめるに役立つたのである。聖人の道德は多くの場合消費體系の生活を極端まで持つて行つた理想的境地であつて、それは極端に生存を嫌惡する意識である。生産行動に沒頭する者を、孔子が禽獸に均しいと言ひ、アリストートルは市民たる資格がないと云つたやうに、人間的生活本能、即ち生産本能を忌避して『全く生産しない生活』を人間生活の極致としたのが消費體系の道德である。それは要するに生産行動を回避する消費體系の生活に加擔する規範意識に外ならない。かやうな道德も時には生産を尊重する意識を示してゐるが、之れは誰も言ふ通り、封建大名の百姓尊重と同じく、消費體系の國家的富强を冀ふ場合に過ぎない要するに消費體系の道德は、消費體系の生活本能を支持する意識である。

生産體系の生活は、之れに反し、生産生活の體系がそれ自身の有機的關係に於て本能を抑へるのである。生産行動そのものは人間的本能に出立し其本能の完成であるともいへるが、生産體系は、それを組織立てることによつて、本能調節の組織に進むのである。外國と接觸した場合にも、民族的本能がややもすれば理由なく鬪爭的に奔るのを、生産的生活組織の有機關係がそれを平和に導くのである。平和とはただ鬪爭しないことではなく、相互の生活を有機的關係で結びつけることである。そのことは全く生産關係に於て成り立ち得る。古代の國家が接觸の場合に必ず鬪爭を生じたのは、兩者の間に生産的有機關係が存立しなかつた爲めである。この關係が一度び存立すれば、そこに決して民族的本能の跋扈が允されない。

消費體系の國家意識はその體系の道德意識と同じく、消費體系的生活理想の實現である故に、彼等が事實國家生活の範疇外に置いてゐる階級の利害によらずに、自己の階級の利害によつて國家的接觸を意識する古代に於てはこのことは一層著るしかつた。消費體系の國家は生産體系の生活利害と沒交渉に、旺んに外國戰爭を起したのである。その結果は民族的接觸を早め、生産體系の生活に急劇の進化を喚び起し、結局生産文明の發達を捉したのであるが、然し生産體系の意識はさういふことの爲めに戰爭を讃美する意識にどうしてもなれないのを特徴とる。これに反して消費體系の意識に於ては、階級的生活の行動が意識的に讃美される。生産體系の生活に取つて禍であるといふ外はない種々なる生活態度が、消費體系に於ては信仰的に哲學的に藝術的に讃美される。消費體系の國家はさういふ生活理想を實現する意識的企圖を有つものである。

かくて民族的本能は特に消費體系の國家意識と結びつく理由をもつのである。消費體系の國家は、必ず先づ民族的本能をもつて他國民を敵視する態度を取る。その間に生産體系の生活者は國家的禁制を破つて、盛んに民族的接觸を遂げようとする。日本の國家の鎖國狀態はつまりさういふ國家意識の所爲であるが、常にこの鎖國破りを出すことを免かれなかつた。また所謂平和的接觸に於ても、國家意識を以てするそれは生産の互助關係ではなく、所謂平和的掠奪を目的としたのである。縱令平和の名に於て行はれても、それが消費體系の生活發展である場合には必ず征服的であり、場合によつては掠奪的である。現代に於ては、國家意識が次第に民族的本能から離れて、生産體系の意識に『模倣』するに至つた爲め、國家的接觸が右のやうな意識を伴はないやうになつたが、それは僅々十年このかたのことである。

國家意識がかやうに[illegible]にも昨日の友に民族的本能を發揮した
ことは、歷史の上に先例のないことであるが、然し斯きにも言
つた如く、民族的本能はただ生活の組織によつて抑へられるだ
けで、機會が要求すれば何時でも勃發する。而してこの勃發を
誘導するものは、必ず何時でも消費體系の國家意識である。

アメリカの排日も亦その例に洩れない。生産の互助的關係か
ら言へば、米國の太平洋岸に日本人の生産能力を輸入すること
は、誰に取つても決して禍ではない。米國の勞働者がそれが爲
めに壓迫されるといふことも多少あり得るが、然し近代の資本
主義組織は、同國人の勞働者の增加が勞働階級を脅威するとい
ふ狀態にあるのである。しかも同人種の窮迫は互助關係で支持
しなければならぬと考へ、他人種同士の間では、相手の窮迫に
對して一層それを窮迫せしめなければならぬと考へるのは、全
く動物的種族本能である。しかもアメリカの排日は必ずしもそ
の生活組織の必要ではなく、それを組織立ててゐる今日の國家
制度が常にさういふ本能を昂進せしめ、それを利用することに
よつて、國家生活の向上を計らうとしてゐることに起因する。
さういふ國家的意圖が常住的に存在してゐて始めて排日のやう
な運動が、組織的に成立するのである。米人の黒人に對する暴
虐でも、生活の組織が必然にそれを導いてゐるのではなく民族
的本能が今日の[illegible]
本人が鮮人に對して持つたことも、事實[illegible]に基い
てゐる。それは何れも生活の生産體系の完成に關係なく民族的
反感を挑發せしめたのである。

かやうな民族的本能の高調は、常に消費體系の國家的發動に
伴ふ意識である。人間がかやうな國家生活に幾重に訓練されれ
ばされるほど、民族的本能が生活の互助關係を阻碍するやうに
働くのである。ただ生産の體系の生活意識だけがさういふ民族
間の反撥作用を緩和せしむる力を有つものである。

之を要するに、消費體系の國家意識の特徵は、第一支配的、
第二階級、第三文化的、第四民族的であるといふことが出來
る。然し、前述の如く、國家生活の進化に於てさういふ意識の
極度の發動は、過去數千年前に於て既に完成の極に達し、或るも
のは最近數十年間に急劇な變化を來しつつありといふやうに
既にそれが崩壊の過程を取りつつあることを認めない譯に行か
ない。而して新たな國家意識は、常に必ず何程か生産體系の生
活意識を取り入れて構成されるものである。此の傾向は、國家
意識の進化を觀察するものの見脫がしてはならないものであ
る。（完）

婦人公論

七月五日發行

男女の握手號

特價金八拾錢　郵税二錢五厘

ブルジヨアの不安とプロレタリアの悲慘

無產・有產兩階級への希望

安部磯雄

近來社會問題に對して一般の注意が喚起されるやうになつたが、社會問題の中でも最も主要なる問題、といふよりも社會問題の中心となつて居るものは貧乏の問題である。一面から見れば世界中の富は非常に增加して來たが、其分配が巧く行つて居ない爲めに、甚しく貧富の懸隔を生ずるに至つた。一方に少數の富者があり、他方に多數の貧者があるといふ狀態が、世界を通じての現代の社會的現象である。若しも貧乏といふものを撲滅することが出來ないならば、人類社會は非常な不幸に陷り、終には貧乏の爲めに滅亡するに至るだらう——さういふと人は餘りに悲觀的、感情的だといふかも知れない。併し他の一面から云へば、チフスとか、赤痢とか、或は肺病、黴毒とかいふやうな傳染性の病氣を放任して置いたならば、人類は結局墮落と滅亡を免れない如く、それと同じやうに貧乏も流行病に勝るとも劣らぬ恐るべき社會病である。文明國に於てチフス、コレラの流行病を防止、撲滅すると同じやうに、貧乏病を防止、撲滅しなかつたならば人類社會のために由々しき大問題である。勿論世界各國に於いては貧乏病撲滅の爲めに相當力を盡しては居るが、概して云へば未だ其努力が足りないやうに考へられる。といふのは世界各國の政治を見れば、實に政治は此重大問題を等閑に附して居るのである。少くとも此重大な社會問題が

上の重大問題となつて居ない。又所謂政治化されて居ないのであつて、貧乏の問題は社會問題としては取扱はれて居るが、實際政治の問題となつて居ない處に、文明國が此問題の取扱ひに不熱心なことが分る。私共は政治といふ事の大部分は此貧乏を撲滅することでなければならぬと思ふ。然るに我々は日本の政治を見ると、政治のどれだけの部分が此重大な社會問題のために行はれて居るかは甚だ疑問であつて、それが爲めに行はれて居るのは實に政治の小部分に過ぎない。我國に於ては近來社會政策が次第に行はれるやうになつたが、それに費される金額に就いて云つても、恐らくは國費の中の千萬か二千萬位であつて、一億とは使つて居ない。而も實際の政治は此社會問題とは關係のない他の方面に精力を向けて居る。換言すれば今日の政治は國民の注意をなるべく貧乏問題に向けないやうに仕向けて居るとも云へるのであつて、即ち政治の主なる部分を形成するものは外交問題であり、軍備なども國際關係より生ずる事柄であつて、此國際問題、外交問題が政治の大部分を占めて居て、外交問題の如きは恰も社會問題の起るのを防ぐ爲めの牽制策に用ひられて居るかの如き觀がある。然るに我々の理想とする政治は國内の事を主とした政治でなければならぬ。譬へばそれは國内に於ける貧乏病の撲滅のために大部分の力を向けることを主とする政治でなければならぬ。外交問題の如きは第二等る。日米問題の如きは新聞も紙面の少からぬ部分を割いて之を論じ、國民も亦運動を起して、集合し、決議する。乍併排日問題の如きは貧乏問題に比較すれば小さな問題であつて、我々は國内の貧乏問題に考へ及ぶ時には、排日問題のためにさう躍起となることは出來ない。政治家が外交問題を故意に牽制策として利用して居るとは考へぬが、外交問題は結果に於て自然に牽制策となるのであつて、それがために國民の注意が貧乏問題に集注しないやうになる。戰爭の如きは外交問題中の大なるものであつて、之れが或場合に牽制策として用ひられる。國内問題が行詰つて苦くなると戰爭をやるのは、昔の政治家が屢々政略として用ひた手段であつたが、今日に於ても猶さういふ形勢が見られるのである。

近來無產階級が大に社會問題を叫ぶやうになつた。それは必しも昔に比較して今日の方が貧富の懸隔が甚しいとに原因するが爲めではない。それも一部の原因ではあるが、それのみが無產階級の聲を大きくしたのではなく、寧ろ無產階級の自覺といふ點に其原因を求むべきである。其一の例として無產階級の有產階級に對する思想が非常に變化したことである。封建時代に於ては總てが階級的であつたから、傭人である無產階級は傭主

である有産階級を恰も主人であるかの如くに考へて居た。其主従の關係は封建時代に於ては依然として社會一般に認められて居たので、傭人が主人に反抗するが如きことは當時の道徳律が之を許さなかつた。然るに今日ではデモクラシーの思想が一般に認められるやうになつて來た結果、傭人と傭主とは平等の關係に立つて居ることが同時にまた一般に認められるやうになり、資本家だけが勞働者を助けて居るのではなく、勞働者も亦資本家を扶けて居るといふ、兩者は互助的關係に立ち、殊に經濟學の立場から云へば、資本家と勞働者は共存共榮でなければならないのであつて、兩者の孰れかゞ主従であるといふ關係は成り立たなくなつた。從つて傭主のみを特に尊敬しなければならなかつたのは昔の事であつて、最早それは今日の勞働者に要求すべきではない。若し勞働者が傭主を尊敬しなければならないのなら、傭主も亦勞働者を尊敬しなければならないのであつて、其間に區別のあるべき筈がない。併し或人は斯う考へるかも知れぬ。理論は兎に角、現在の社會組織の實際に於ては、勞働者は資本家の恩惠を蒙つて居る。資本家は常に勞働者を首切ることの出來る立場にあるが、勞働者は進んで資本家の前に働かねばならぬといふのは、概して云へば金錢の形に於て、即ち俸給、賃金の形に於て報酬を受ける者は弱味を持ち、それを與へる者は強者であること[illegible]、受くる弱者と與へる強者との區別が判然たる日には、デモクラシーといふもそれは空名に過ぎないと。併しながら金錢を受くる者が成に人が不利の位置に立つといふことは、未だ直に私が前に述べて居る事實を説明するに足らぬ。といふのは金を貰ふ者必しも弱くはない。客が物を買ふ時、賣手は頭を低くして禮をいふが、それも毎も定つてさうするといふのではない。私共が汽車に乗るために切符を買ふ時金を拂ひ、切符を賣る者はそれを受け取るが、其場合に賣手は決して禮を云ふことはなく、寧ろ間誤々々して居るとけんつくを食はされる位である。斯くの如く人間の強弱は金を受けると受けないに依つて定まるものでないとすると、それを決定するのは何に依るかといふに、それは常に競爭をしなければならぬ地位に立つ者が弱く、反對の立場に在る者はいつも強いといふ理由に依つて居るのであつて、世の中の事は總てそれから説明することが出來るのである。勿論資本家にも競爭はあるが、勞働者は多數であるがために、從つて其地位を獲得するために餘計に競爭をしなければならないため常に不利の位置に立つことになるのである。現在の競爭制度を見れば貧富の懸隔の依つて起つて來た原因を十分に知ることが出來る。若し社會問題の上から貧富の懸隔を無くさうとする

らば、勞働者をして競爭の立場に立たなくとも濟む地位に在らしめることが根本的に必要である。さうなることが又勞働者の希望する所であつて、競爭や、頭を下げることに依らずに容易に自己の地位を獲得しやうといふのが勞働者の自覺の一面である。無產階級の自覺の他の一面は、無產階級が貧乏の原因をはつきりと認めることが出來た結果に基く。昔は貧乏に對する人間の考が違つて居て、貧乏は貧乏になつた個人の責任であつて、其責任は他に嫁すべきものではなかつた。換言すれば個人の貧乏は自分が惡いからさうなるのであつて、昔の諺に稼ぐに追ひ付く貧乏なしと云ひ、一生懸命に働らく者は金持となり、働かない者は貧乏するといふ道德律が存して居て、貧乏をしても天も人も恨まず、只自己を責むるのみであつたから無事であつた。然るに今日の無產階級は斯くの如く貧乏を見ない。貧富の程度は必しも個人の伎倆、勤勉の程度に比例せぬ。昔流の原則で行くならば、個人の伎倆と勤勉の度合に比例して必ず金を得られる筈であるが、事實は決してさうでなく、寧ろ反對の場合が往々ある。生れながらの旦那であつて、無能力であつても現今の財產相續法に依つて、居ながらにして數百萬乃至數千萬の身代を受け繼いで居る者があるのは其著るしい例である。又世には正直に勤勉して富を積んだ者よりも、それ以上の巨萬の富を蓄積した者は、概して不正手段に依つて其富を獲得したが少くない。寧ろ反對に正直な、勤勉な人間に貧乏人が多いのは、現在の社會に於ては昔の諺の當嵌まらぬことを證據立てるものである。玆に於て無產階級は現在の社會組織の缺陷を直覺するに至つた。同時に社會は常に不變、不動のものでなく、人間の力に依つてそれを改造することが可能なるを看破した。貧乏は最早個人の責任ではなく、それは社會の責任であつた。遂に無產階級は社會改造の可能を信じてそれを要求するに至つたのである。人間が貧乏から免れるためには、社會改造の途に依るより外に逃れ路はない。其社會改造の理想も從來は無產階級の夢として考へられて居たが、露西亞は既に其先鞭をつけ、獨逸、英國は今や社會改造の中途に在るのを見て、日本の無產階級は益々其要求を强くするに至つた。

斯くの如き形勢は現代の日本の有產階級に對して大なる脅威とならざるを得なかつた。我々は何故に現代の有產階級が恐怖を抱いて居るかに就いて研究しなければならぬ。有產階級が常に恐怖を感じて居るといふ事實は拒まれぬ。嘗て私は或る日本の貴族が云つた言葉を新聞か雜誌で見たことがある。それを見ると、恐らく將來に起らんとする社會改造に對して、最も鋭敏に恐怖を感じて居る者は貴族階級であつた。それは外國の書物

や苦悶、暴動などを讀み、ヨーロッパ諸國に行はれた[illegible]改造の趨勢を知る有産階級の何人もが抱く恐怖の感じであるが、併しそれは本當に恐怖と呼ばるべきものであるか、又社會改造は果して有産階級のために恐怖であるかは問題である。其處は有産階級の誤解もある。有産階級の人は、有産階級と無産階級の對立を以て恰も昔の源平二氏の對立の如くに考へて居るのではないかと思はれる。若し有産階級と無産階級の對立が、源平二氏の權力爭を意味するならばそれは油斷を許さない。何故ならば、平氏が天下を取れば源氏は根こそぎに亡ぼされなければならぬ。此意味に於て將來無産階級が勢力を得て天下を取るやうになれば、有産階級は無産階級の復讐を受けて、其全財産は沒收され、遂には其身までも亡ぼされる結果に陷る。併しながら有産階級と無産階級の對立は決して源平二氏の對立と同一の意味を持たない。何故ならば無産階級は常に平等を主義とする。其主義の上に於て、有産階級に對して無産階級は同等の地位を要求するけれども、無産階級が有産階級と地位を換へて、前者が後者を支配する形式を再び持ち來さうとするものではないからである。無産階級は只經濟上の平等、又政治上の平等は云ふまでもなく、それを強く要求する者であつて、有産階級と無産階級とが經濟的に平等の地位に立つことが出來[illegible]の有産階級に對する復讐などといふことは[illegible]ない。若し無産階級が天下を取つた曉に有産階級を[illegible]し、排斥するならば、それは無産階級の理想に反する行爲であつて、そこに平等はない。不平等は無産階級の反對する所であるから、社會改造の行はれた後の社會に於ては、有産階級も無産階級も共に平等の地位に立つて、兩者は眞實に幸福の途を行くやうになるに違ひない。併し有産階級にとつては自分等の特權を棄てゝ、他と平等の地位に立つ事が既に苦痛であり、恐怖であるかも知れぬ。果して然らば有産階級は、自分等が有産者であつて、他が無産者である區別の上に立ち、財産と特權の差別の上に立つことを以て有産者の幸福と爲す者であらねばならぬ。併ながら貧富の區別の存する所に決して金持の幸福は有り得ない。若しさう考へる者があつたならばそれは人生の何たるかを知らぬ者である。金持が貧民窟の中に入つて來て立派な邸宅を構へることは決して金持の幸福ではない。人間の優越欲は何等かの點に於て自己が他に優越して居ることを意識することに依つて幸福を感じるのであるが、物質的優越を以て幸福と感じるやうな思想は不健全な思想である。私共は決して悪平等を稱へる者ではないが、少くとも總ての人間が中流階級の上位の生活

標準に於て誰れもが生活出來るやうになり、人間が貧乏の爲めに困らぬやうになることを以て眞の幸福と考へる。現在の社會に於ては有產階級も亦幸福ではない。何故ならば彼等の生活も其處に於ては保障されて居ないのであつて、間違へば生命、財產を失ふ惧れがあり、一代の財產も子孫に依つて蕩盡される憂があるが、將來社會改造が行はれゝば有產階級も亦生活を保障されることになつて幸福になることが出來る。然らば無產階級の自覺が有產階級の大なる不利と恐怖とを招く原因ではなく、有產階級が强ひて無產階級の希望と要求とを抑壓し妨害するならばそれは有產階級の不利益となるが、若し平和の間に無產階級の理想である平等が社會に行はれるやうになれば、それは有產階級の恐怖ではなくして幸福を得る結果となるに違ひない。此意味に於て現代の有產階級が眞面目に貧乏問題を考へ、同時に無產階級の地位に立つて、彼等の立場から現代の社會を觀察することが非常に大切であると思ふ。

ブルはブル流、プロはプロ流

文學博士　三宅雪嶺

ブルジョアとプロレタリアと大體上に區別があつて、時と處とでいろいろと違ふ。日本で金持ち氣分と金持たず氣分とに分れ、其の間に少らぬ變遷があり、他の國と一樣に云へぬ所がある。他の國でも變遷し來り、現に變遷しつつあるが、日本で特別の財產ない官吏や會社員や教育者や、双方に彷徨ふを免かれぬ。久しく富貴と貧賤とに分ち、富むと貴きと何邊かに共通するを認め、公卿のやうに貴くて貧なるもありながら、其の日暮しと別階級に居ると知られた。明治に入つて大臣參議を始め、政府に位置を占める者は、金を求めずして自づと金廻り好く、暮し向きも上流から中流に及んだ。馬車や定紋付き人力車や、殆ど官吏の專有となつて居つた。それが次第にさうでなくなり、勅任官でも官を離れて別に職を得るのは格別、左もなけれ

は閑な役目な就職に陥るのがある。官吏になつて若干の年月に成らうとするのも、政治に意あるよりは、恩給を目懸ける傾向がある。其の以下に至り、官を離れると共に、何うなるか知れぬのが少くない。恩給とか退職の手當とか、それぞれ定まつて居つても、生活を保障されて居ると云へず、近頃人にノルと云はれ、それは間違ひ、實にプロの仲間と答へるのは、あながち冗談でなく、幾分の事實がある。俸給取りが自らの位置を守るに急、何が何でも噛り付き、いよいよ罷めるとなつて、何とか手當の増額を計る。恩給の増加に伴ひ、金鵄勳章の年金を増加する運動の興り、功一級及び二級を倍にし、順次比例を増し、七級を四倍にしようとするのであつて、それでなければ一朝事ある場合に生命を抛つ者がなくならうと稱して居る。金に緣故ないとして居ると思はれる軍人が左うであり、他は押して知るべきであらうか。

其の反對にプロレタリアと見做される側で案外豐かなのがある。今は戰爭當時ほど賃銀は高くなけれど、印絆纏を着て高等官並の收入あるのが珍らしくなく、大工の棟梁など、絆纏を着ても自働車を乘り廻せぬでない。自らプロの代辯者を以つて居り、他にも左う見られるので、印税とか何とかで勅任に當るのがある。何處でプルとプロとの界をつけるか、プルがプロか、プロがプルか、比べたり入つたりして居ることになる。プロが革命を稱へ、プルが之れに反對することゝなつて居り、其にいくらか其の跡を見るにせよ、なかなか簡單に云ふ譯に行かぬ。其の最も明かになつたのは露國であり、プルが現狀を維持し、プロが之れを覆して革命を計つたが、他の國々で之れと趣を異にし、米國の如き、何處から革命が起り、何處で之れに反對するか、單に階級を以つて云ふ譯に行かぬ。プル以上の貴族が最も保守的である筈であつて、改革の火の手が其處から揚る例に乏しくない。日本で幕府に反對の火をつけたのは、幕府と切つても切れぬ親藩の水戸よりして居る。露國のクロポトキンは之れと性質を異にするものの、社會に不平のなかりさうた身分で、根柢から改造を圖らうとし無政府主義を宣傳した。不平は貧窮者の常のやうであつて、貧窮者が却つて其の日暮しで平氣になつて居り、裕福な者が裕福に慣れ、何かな變つた事を爲さうとしたりする。帝王が功名心に驅られ戰爭を始めると云ふのも、それからである。プルが現狀に滿足し、プロが不平を抱くと限る事が出來ぬ。プルが小金持ちを意味し、大金持ちを除外するならば、或は小成に安んずると云ふ所もあらうが、根柢ある不平は、多少の餘裕に基くと云へぬでない。貧窮なるは貧して鈍し、社會改造を考ふべくもなく、考へたとて人が聞い

納得しさうな考を出すに堪へぬ。同じく貧乏しても、無能で貧乏するのでなく、片意地とか痩我慢とかで貧乏する連中こそ真面目半分、面白さ半分に改革の計畫に從事したりすれ、單に貧乏したゞけで世間を騒がす者と言へぬ。

社會の狀態にも因るが、日本で貧乏に慣れた者は貧乏括みの愉快があり、何處かに不平を漏さうと躍起にならぬ。現狀に不滿を懷き、資本制度を覆し、貧富の關係を一變しようとするのは、金よりもより多く他に考へ、何か腹の癒えるやうに目醒しい事を爲さうとする人々である。或は自分自らの利益よりし、或ひは國民の幸福又は人類の幸福を慮るよりし、動機の種々ながら、金儲け以外に興味を感ずる所に出て居る。誰にでも幾分か其の分子あるとし、それを多分に備へて居るのがあり、改革家とか革命家とか云ふのを何よりの事と心得るのがある。志あつても才が無く、才あつても時に逢はず、何事をも爲し得ずに身を卒はるのが普通にしても、稀に悉く備り、驚くべき事變の起るのを見る。其の人が何處から出るか豫め分らず、ブルから出でぬと限らず、プロから出ぬとも限らぬ。改革の氣運の熟するのは、從來の秩序の破滅するを意味し、延いて前に失意であつた者が得意になり、プロ出身が志を得たと見られるけれど、必ずプロと運命づけられたのでなく、場合によつてブルを極めたかも知れぬ。木下藤吉郎はプロから出で、ブルを通り越族の絶頂に達した。藤吉郎の如き者が必ずプロに限るとず、又ブルに限ると云へぬ。社會の固定した時代に、階級の區りに冒し得ないにせよ、それ程固定せぬ時代、ブルとプロとの區別が紙一重であり、見た所判然しても、ちよつと捲くれば、自由に往き交ふ事が出來る。日本の社會は或る程度まで固定し、外觀程固定して居らぬ。他にも種々の事情が加はり、ブルが不安を感ずる事も少く、プロも悲慘を感ずる事が少い。總じて割合に呑氣な暮しをして居る。唯、他から見ればブルが不安を感ずべく、プロが悲慘に惱むべき關係になつて居り、それを左程に思はぬのは、特別にかゝる事を認識すべき刺戟を受けるの少かつたに由る。印度は幾千年間同樣の階級を繼續し、各自ら定つた階級に閉ぢ籠つたが、日本はそれ程甚だしくはなく、明治になつて前の大小名より多くの貴族を作り、平民で公方樣と肩を比べるのが幾人も出で、それで貴族國になるかと見れば、何とかして爵を辭したいと云ふのがある。首相職について授爵沙汰を辭退したのがあり、隱居して貴族院から衆議院に移つたのがある。階級が定つたやうで決して定まつて居らぬ。それでも自づと秩序が成り立ち、それになれて不思議がらず、ブルはブルで得意になり、プロはプロで自ら滿足する所があ

る。

併し他の國で種々の例を見せつけられ、何時までもブルの天下と見えたのが引続返り、プロが何でも勝手次第に行ひつつあると見えたりする。世の中は案外危いものと感ずるやうな事もある。ブルが資本制度の永遠に確固不抜でないのを見せつけられると共に、プロが考へて見て、己れの位置の頗る悲慘なのに想ひ到る所もある。産れてから慣れに慣れ、さういふものと想つて居つたのに、成程同じ人間と生れ牛馬に變りない待遇を受けるなど、何處ぞに缺陷がある爲めと考ふるに到る。それも久しい習慣で詮議に及ばず、或る部分が注意するかと見れば、他の多くの部分は、傍見して與り關する所がない。普選問題が起つても、多數民衆は他人事のやうに心得、特別に感ずる所が薄い。他國の成行きを見、ブルが現狀に安んずべきでなく、プロが悲慘を悟り、振ひ興るべき順序であつて、餘り喧嘩腰に爭ふに及ぶまいとする。何でも他國の例を見るの慣しになつて居り、菊石が靨でなく、見苦しい菊石であるを知るやうになつても、遽かに奮起して運動するといふ程の事を爲さうとせぬ。他の多くの國々がブルを攻め立て、次から次ぎと陷落するならば、何とか之れに動かされるが、それ程まで急劇な變化がなく、從來の通りにして經過し得ると思はれる。

併し[illegible]きを逃げ得ただけ、[illegible]なやうで無[illegible]であり、[illegible]敢てするを忘れたい。血の雨を降らさずに何程まで改革を行ひ得るか、それを考へるとなしに考へて居る。ブルヂョアは改革を妨げるものと云はれるが、日本のブルはそれ程まで妨げはせぬ。一應妨げても、必要を見て取る事が早い。根抵まで突入するに努めず、微温的な嫌ひあるにしても、自滅法界に抵抗し、何うにも抜き指しのならぬやうにするやうにならぬ。程好いと云はば云ふべく、生温いと云はば云ふべく、何れにせよ、プロが悲慘に奮慨し、ブルを攻め立て、ブルが逃げ處を失ふといふやうにならぬ。知識の増進するに從ひ、ブルが聊か自ら警め、濫りに高振らうとせず、プロが何時までもバラックに住はず、稼げば稼ぐだけの事があり、更に努力相當の收入を得、ブルに劣らぬ程度になり得るとして働かう。他より刺戟を與へ、或ひはブルの不安を增し、プロの不平を增し、判斷力を鍛錬する所あるが、血で血を洗ふやうな騷ぎを想像するの餘あると言[illegible]ぬ。

却て住み甲斐ある時勢

菊池寛

ブルジョアの不安と云つたところで、不安を感じてゐるものは、智識階級に近い事理を解したブルジョアで、本當にブルジョアらしいブルジョアは、社會不安など云ふものは、まだ〳〵感じてゐないやうに思ふ。僕の知つてゐる實業家の人々なども、革命とか勞働運動などは、警視廳にさへ委して置けば充分だと云ふやうな氣でゐる人が多い。とにかくブルジョアの不安とプロレタリヤの悲慘とが相殺するやうに考へるのは間違ひである。ブルジョアの不安は、所持してゐる者の不安で、その不安は結局所持の幸福の影にすぎない。一方プロレタリヤの悲慘は、絶對的な悲慘で、何うにもあきらめやうがない。今にプロレタリヤ全盛の世が來ると云つたやうな信仰は、プロレタリヤを救ひ得る程普及してゐない。

結局ブルジョアの中で、不安を感じてゐるものは、社會主義の理論が解り、資本主義の崩壞をおぼろげながら信じてゐる人々で、ブルジョアの中では、ブルジョア的罪の少い連中である。さうして、社會主義などが分らず、プロレタリヤを蔑視してゐる連中が、即ちブルジョア的罪の多い連中が、尚泰平を享んでゐるやうな有様である。そんな意味で、人生など云ふものはいつでも不公平だ。

また翻つて、我々智識階級の不安は何であるかと云ふと、來るべき社會改造の過程に於て本當の正義や合理が、天下を支配せずして、無智な暴力や感情が、天下を支配しはしないかといふことだ。とにかくその後にどんないゝ時代が來るにしろ、我我の時代が一時でも、不快な混亂に陷り我々の感情なり理性が蹂躙せらるゝことは、我々として忍びがたいことだ。

だが、かうした社會不安は、現代生活を享受する人間が喰ふべき罪である。とにかく、人間としてかうした歷史的意義のある時代に生れたことは、不幸なやうで幸福である。太平の惰眠を貪つてゐるやうな平安無事の世に生れるよりも、かうした社會的動搖の烈しい時代に生れたことは、我々の一の欣びである

に違ない。その混雑に、日本歴史の中で、何の時代に生れたことを望むかと問を出されたら、誰しも戦國時代とか維新前とかを望むのに違ない。とにかく、そんな意味で大地も揺ぐやうな時代は、却つて我々に住み甲斐があると云ふべきである。

かうした時勢に乗じて、自分の信ずる所を行ふのも男兒として快事である。とにかく、いろ〳〵した事が面白くなる。それだけでも面白いと思ふ。それからこの、いろ〳〵な事が起るだらう。それを見聞することも一つ樂しみであらう。とにかく我々の不安などにビク〳〵しないで、大に生活することである。

ブルヂョアの不安とプロレタリアの悲慘

法學博士　堀江歸一

（一）

英國では勞働黨內閣が既に成立し、獨逸に於ては、社會黨の內閣正に組織されようとし、共に無產者階級の爲めに、氣焰萬丈の趣きであるが、我國に於てプロレタリア階級の悲慘なることは、今も昔も何等の相違する所を見るを得ない。政治上に於ては、普選の實行されない今日、全然無能力者扱ひであつて、如何なる人物を衆議院に送つて、自己の代表者とす可きや、選擇の自由を持たさるは勿論、立法の力を通じて、階級の利益を保護する力を備へない。斯くして歷代の內閣は何人が之を組織し、何人を擧げて、閣員とするやを問はず、其行ふ政治は著しく金權政治の色彩を帶びたものであつて、無產者階級の利益を傷けること、甚だしい。公債の時價が低落して、財產家や銀行業者が損失を蒙れば、減債基金に增額を施して、公債の市價を騰貴せしめようと云ふ運動は必ず關係者に依つて企てられ、斯る運動に對しては、政府は直に之を容れて、其及ばさることを恐れるものゝ如くであるが、無產者階級の負擔を緩和するとか、其利益を伸張するとか云ふ問題に觸れば、政府は殆ど

馬相關せざる態度を取つて、渝らないのである。

茲に於てか無產者階級は其の職業に依り、又は其居住する區域に依り、適宜團結を組織して、以つて他に當るの覺悟をしなければならない。勞働者は勞働組合を、教員は教員組合を、俸給衣食者は俸給取り組合を組織す可く、更に利害の共通する所に據つて、彼等の間に大同團結を設けることも亦不可なりとしない。私が從來勞働組合を始めとして、種々の團體の我國に起ることを希望し、其組織に就て、聊か文筆や言論を以つて、援助することを惜まなかつた所以である。

（二）

然るに此點に於ける政府の態度は果して如何であらうか。勞働組合の組織に對しては、嚴峻なる方針を取り、法律を以つて之を公認しないのは勿論、治安警察法を勵行して、其行動の自由を束縛する。勞働者は如何に團結の力に依つて、各自の地位を向上せしめようとしても、容易に其目的を達するを得ない。勞働者は一國無產階級中の首位を占め、無產者の運動を利導して、之を其正しきに就かしめ、又は無產者全體の運動に氣勢を添へ可きものであるのに、其壓迫を受けること、斯の如くであつては、到底社會上の關係に於て、公正を保ち難きことは論を俟たない。

然しながら無產者階級が斯る不公正なる取扱を受けて、之に堪へ忍んで居つた時代は我國に於ても、既に過ぎ去つた。封建時代と違つて、今日の社會に於て特徵を以つて目されるのは、社會全體を通じて、知識の分配の公平に爲つたことであつて、國民教育制度を普及した一事の如き、此點に於て資するもの大なるを得た。斯くて知識の程度の進んだ者が之に伴ふ報酬を收得しようとする欲望を生ずるのは、當然の事實であつて、此欲望は抑へんとして、抑ゆ可からざるものである。斯る欲望の充されざる場合に、無產者階級の不平の醸されるのは、必然の勢であり、更に經濟組織の不備なる結果として、經濟社會に變動を生じて、事業界に沈衰を來すや、其損害は多く失業と云ふ形に於て、無產者階級が之を負擔し、有產者階級は自己獨特の權勢を利用して、負擔を無產者階級に轉嫁し、之を免かれようとする爲め、此點に於ても無產者階級の悲慘は一層の重きを加へられる。

國民教育制度の普及は無產者にも知識を頒與し、社會全體を通じて、知識の分配を公正にしたことは、爭う可からざる事實であるが、然も無產者階級の受けるを得る教育の程度は尋常小學六年間の義務教育だけであつて、義務教育の年限短かく、補習

教育の設備は完全ならず、高等教育の費用に不足して居る狀態に於て、無産者階級の知識を豐富ならしめるを得ざることは、已むを得ざる所に屬する。而して社會に於て、地位を得るとか、產を成すとかするには、知識を以つて其基礎としなければならない場合に、無產者階級に對する知識の分配が斯く不平等であつては、社會上の關係に於ける機會の平等は彼等に與へられて居らず、一旦無產者の階級に列した者は其子孫をも無產者たらしめ、世襲的無產者階級なるものゝ出現することを免かれない。是れ亦無產者に加へられる悲慘の最も大なるものである。

（三）

然らば斯る無產者の悲慘に對して、有產者階級は自家の幸福を祝福し、彼等の現に住う今日の社會を以つて、理想の境地として居るであらうか。有產者が其所有する財產の威力を藉りて、無產者を自己の意の赴く儘に、驅使するを得たこと、恰も封建時代に於ける君主と奴隸との關係の如くであつたならば、一方の悲慘は地方の飽滿であるを得たに相違ない。然しながら今日は金權が社會の或る方面に於て跋扈して居ることは事實であるとしても、金權萬能の時代は早くも過ぎ去り、有產者は徒に財產を擁して、種々の點に不安を覺える。今日の有產者は其成效に[illegible]ても、[illegible]ないであらう。而して斯く[illegible]に於る。

第一、致富の手段に公正を缺いたこと。人の一代に數千萬圓とか、一億圓とか云ふが如き、財を積むことは、固より時運に投ずる僥倖と云ひながら、容易ならざる業であつて、此事業を成し遂げるに當つて、人は果して常に公明正大の道のみを辿んで居つたであらうか。辛うじて法網を脱するを得たやうな際どい所業もあつたらうし、法律には觸れないまでも、道德上の制裁の免れ難き行ひもあつたに相違ない。斯くて彼等は成效の暁に、年齒加はり、健康の衰へるに隨ひ、既往の情懷を顧みて、良心に大なる惱みを覺へざるを得ない。富豪の或る者が老來頓に公共事業に金錢を喜捨したり、宗教に依つて、悟りを開かうとしたりするのは、何れも自己の良心に感じる寂しさを除かうとする努力の一端であらう。

第二、自己の後繼者に惱むこと。富豪權門から不肖の子を出すのは古來の約束であつて、有產者に勝れた素質があるとしても、其素質が自分の子に遺傳すると云ふことは、遽に望まれない。斯くて有產者は一旦築き上げた有產者たる地位を如何に永續せしめ可きかに就て、大なる苦心を拂ふ。家憲を制定して、

相續人から財産處分權を奪ひ、準禁治産者同様の扱にしたり、養子を入れて相續人とし、實子の後見人たらしめたり種々の策を廻らすのは、有産者が有産者たるの故を以つて、特に持つ苦痛の一ッであつて、其原因は財産の相續に値しない不肖の子あるが故であり、而して斯る不肖の子の生じたのは、有産者の家庭の紊亂して居ること、有産者其人の品性劣等であり、素行不修であることに基くものとすれば、自ら責任を負はなければならないもの丶、有産者に取つては、其將來に於ける大なる惱みとしなければならない。

第三、無産者の復讎を恐れること、今日の經濟社會に無産者を以つて、見る可き者の數甚だ多く、正當の勞働に服して、眞面目に之に當りながら、尙ほ自己並に家族の爲めに、衣食の要求を充すを得ないと云ふが如き、經濟組織の不備に基き、而して其不備なる、有産者の權利を餘り強く認めたことに存する。無産者にして此般の關係を理解したならば自己の貧困無産は自己の缺陷から生ずるものでなく、有産者が經濟組織の不備を利用し、又は之を奇貨として、無産者の勞働の結果を搾取した結果であると考へるに至るのは當然であつて、之に次いで無産者の有産者に對して爲す所は復讎の一事に外ならない。有産者が社會に何等か變動が起ると、之に對して大なる恐怖を感じ、時に

育家の蒙らんとする危険又は蒙るかも知れないと胸中に描ける危険を免かれる爲めに、逸早く喜捨金や、寄附金を申出るが如き、今日の有産者階級が如何に一種の恐怖心に襲はれ無産者との對抗上、不安を感じて居ることの證據とするに足るであらう。

斯の如く考へれば、無産者として世に立つ者の幸福ならざるが如く、有産者たる者亦必ずしも多慶なりとするを得ない。有産者無産者を舉げて、自然の與へる快樂を縱ならしめる社會を現出するの工風は遂に講ぜられるに至らないものであるか、吾人の考へざる可からざる點である。

人間不安

室伏高信

ブルジョア階級が馬鞍に乘つてから一世紀である。そして運命の日は既に見えてゐる。歷史上の支配階級のうちでこの階級の運命が最も哀れなものかに見える。

　プロレタリヤがブルジョアに代るであらうことはたしかである。工業主義の發達した國家、都會集中制度の行はれてゐる國家では、プロレタリヤの手に政權が移るであらうことはたゞ時期の問題である。露西亞のやうに、ブルジョア階級の發達がまだ甚だ幼稚な國家では、社會革命は尙ほ遠き將來のことだとされてきた。マアクス・エンゲルスは、凡ての西歐諸國に社會革命が行はれた後でなければ、露西亞に社會革命が起ることはなかるべしと豫言した。その豫言は見事に裏切られて、兎も角も、半政治半社會革命がこの國に起つた。ブルジョア階級は馬鞍に跨ること數ケ月にして、第四階級が政權を手中に收めた。工業主義の發達したところでもしないところでも、かくしてブルジョア階級の運命は今や瞬間的なものと見るのほかなくなつたのだ。

　露西亞革命はわれ〳〵に多くの善きもの惡しきものを數へてゐるが少くとも二つの大きな社會的效果を擧げた。農民階級の發見とブルジョア不安とがこれである。農民が一つの社會經濟階級であることを尙ほ氣付かざる多くの人々は露西亞革命以前の人々である。それとともにブルジョア不安を感んずることなきブルジョアは露西亞革命以前のブルジョアである。

　ブルジョア不安はたしかである。巨大の富を擁しながら、そしてその富が子孫の何代も何十代も恐らく永久に亘つても驕奢不勞の生活を與へるに充分なものでありながら、尙ほ今日のブルジョアに生活安定なきことはたしかである。

　世界革命の恐怖がこの不安の一つの原因であることは露西亞革命がこの不安の直接の動機の一つであることによつても明らかである。それがしかしたゞ一つの原因であらうか。多くの人々は、ブルジョア不安とは、社會革命の脅威のもとにのみ在

するものだと考へてゐる。ブルジョア不安は果してかくのごとき政治的動機から生れてきたものなのであらうか。

私の考は全然これとは違つてゐる。政治的にいへば、ブルジョア階級は、今日までの支配階級のうちで最も多く安定的な階級である。貴族階級に比較せよ。貴族階級はその經濟的基礎においてブルジョアのごとく安定的なものではなかつたのだ。

政治の需要は、本來は都會とともにある。都會的社會制度なく、政治需要はないのだ。貴族階級の政治にしても、その政治上の存在理由は、一つの都會的社會制度の發生からきたのだ。それにもかゝわらず、この階級の經濟的基礎は農業制度のうへにあつた。都會的政治と農業的經濟制度との二つのジレンマのうへに立つて、貴族階級の政治上の覇權は常に不安、常に動搖をつゞけてゐたのだ。

ブルジョアの覇權は、經濟的權力のうへに政治的權力が置かれたことである。政治上の權力と經濟上の權力とがこゝに歴史上において始めて完全な一致を見たのである。この階級のごとくにそれゆえに安定的な政治階級はこれまでなかつたといふが至當なのである。

政治とは集中經濟の必要から生れたものである。眞の政治需要は、ブルジョア社會のごとくに、工業主義、商業主義、大都會制度、大國家制度、大社會の存在するところに存在する。政治はこの時代に至つて最も旺盛である。封建時代には、一方に權力の中心はあつたにしても、その權力の及ぶところはたゞの一部であつた。その權力は一般の人民と交渉するでもなく、その權力は全體の經濟生活を左右するものでもなかつたのである。農民は無政府の狀態に生活し、工人はギルド自治を享樂することができたのである。無論そこには切捨御免があり、様々な暴政があつたことはたしかである。切捨御免はしかし猛獸の害のごときものであつて一つの制度でもなく、日々の出來事でもなく、たゞ時々の偶發的出來事、時々の恐怖であつたに過ぎないのである。

ブルジョア時代では、人々は一日も政治から離れてゐることはできない。その生るるから死するまで、人々は法律の桎梏の中に、戰々兢々として生活する。法律の專門家と雖も尚ほ知悉することの遠く及ばざるほどの多岐多端の法律が時間的にも空間的にもわれ〳〵の生活の一切を拘束する。この時代を人々は自由だといふた。法律の自由である。法律が、男を女とすること以外には、一切自由なのだ。法律が自由、政治が自由であつて人々は不自由である、大衆の不自由は、前代の如何なる時代よりも甚だしく、それだけに法律、政治、從ひてこの時代に馬鞍に乘

つてゐる云ふ—ブルジョアの自由、權力、威嚴は、古代の如何なるものよりも偉大なのだ。

その權力、その自由は、何等のジレンマのうへにも立つてはゐない。その自由、その權力は、それ等の社會的基礎としての經濟制度と圓滿なる階調をとげてゐる。その基礎あり、この權力あり、ブルジョア階級は政治上にも、經濟上には勿論、最も多く惠まれた階級なのである。

私は政治上の權力がやがてプロレタリヤに移るであらうといふた。プロレタリヤと雖もしかし長く政權を維持するであらうとは思はれぬ。

プロレタリヤは最後の階級ではない。プロレタリヤを最後の階級だと考へたマアクス主義は露西亞革命失敗の重大な原因をなしてゐるのだ。

農民は最後の階級である。プロレタリヤは一つの中間階級である。清浦内閣のごとくに、それはたゞ一つの内閣の辭職から次の總選擧までの運命である。ブルジョアから農民までの間に、プロレタリヤ中間階級が存在するのだ。

プロレタリヤは政權を掌握するであらう。露西亞のボルシエヰキは彼等の權力を永久にするために、言葉を換へていへば、政治のために、經濟上には[illegible]務…である。政治は根本である。經濟制度は[illegible]。經濟制度のうへに政治が立つのでなく、政權獲得のために經濟制度を切り賣りしつゝあるのだ。

このみじめなるプロレタリヤ代議者等は政權欲のために凡てのプロレタリヤの社會的職分に背いて、政權廢止の理想から益益遠ざかつてゆきつゝある。プロレタリヤの代りに、社會主義者が政權を掌握したところでは、しかしこのことは獨り露西亞だけではないであらう。

社會主義者はプロレタリヤではない。その政權欲において疑もなくブルジョアである。クロポトキンが指摘したこともあるやうに、社會主義政治家は明らかなるブルジョアである。頭のてつぺんから足の爪先きに至るまで、立派なブルジョアである。彼等のブルジョア觀念、ブルジョア價値觀念、その唯物的評價、滿々たる政治的野心を見よ。たゞにプロレタリヤでないのみではない。プロレタリヤの敵である。吸血鬼である。人民の代表者と稱する代議士が人民の吸血鬼であるように、プロレタリヤ指導者と稱する一團の知識的驕慢者、政治家的策略家はプロレタリヤ吸血鬼である。

これ等の吸血鬼はプロレタリヤをもつて一つの政治階級に組

織することを要求する。虐げられたるプロレタリヤの復讐心理を利用して、プロンタリヤを毒に對する毒にまで墮落せしめやうとしつゝあるのだ。こゝにプロレタリヤ階級は永遠、その政治上の覇權は永久のごとくに見えてゐる。社會主義者がプロレタリヤ代辯者である限りそうなのである。

社會主義は一つの大社會を要求する。大工業制度、從ひて大都會制度、從ひて大國家制度の要求である。また從ひてプロレタリヤ政治の要求である。

その政治は、社會主義の理論と方法との下では永久的であると見るのほかはない。彼等が口に如何なるユトピアを說明するとも、そはたゞなるユトピアである。彼等の理論と方法との下では、政治上の權力需要は益々增大するのみである。

この政治上の權力は如何なる經濟制度のうへに立つであらうか。私は大工業主義、大都會主義だといふた。それは同時に農民搾取の制度である。農民の搾取なくして大工業制度なく、從ひて大都會制度なるものはありえないのだ。

工業主義の社會では、人口の一半または大半が都會に集中する。その人々は本質的生產者ではない。農民のみが本質的生產者である。農民の搾取において工業的プロレタリヤの大衆が存在しえられるのだ。依然として消費者の社會である。農民はこ

こに最後の階級なのだ

プロレタリヤ時代には或は贅澤品の一部は廢止されるであらう「單純生活の理想—農民的世界の存在するに至らざる限り、しかし土地の原價値觀念の代りに、唯物的猶太的價値觀念が依然として支配するのだ。勞働の退屈、苦痛、その非創造的生活、懷疑的精神は、そのうへに、何等かの形において、ブルジョア的官能享樂を要求し、ブルジョア的價値判斷が農民的觀念を支配しつゝ、農民の搾取をつゞけること、今日のブルジョア社會と撰むところはないであらう。

農民搾取あり、大社會あり、經濟の中央集權あり、政治上の中央集權は勿論存在しなくてはならぬ。社會主義のもとでは、プロレタリヤもまた斯くして一つの特權階級、一つの搾取階級にと組立てられなくてはならないのである。

そはしかし社會主義の理想である。プロレタリヤは斯のごとき「理想をもたない」プロレタリヤには、本來は理想の國はない。プロレタリヤは一時の階級である。プロレタリヤはブルジョアを廢止し、そしてそれ自身をも廢止するからである。プロレタリヤはプロレタリヤとしてはその職分を使ひ盡くして死滅するのだ。彼等に與へられた社會的職分はたゞ一つ、ブルジョアの廢止だけである。從ひてプロレタリヤの廢止そのものであ

る。

プロレタリヤから發生されたプロレタリヤなるものはない。プロレタリヤなく、プロレタリヤの理想なるものはないのだ。プロレタリヤの覇權は、それゆえに一時的に成立するにしても、それはたゞ一時的である。プロレタリヤはやがて消滅して他の新らしいものがそれに代るのだ。私の考では、それは農民を本位とする新らしい社會なのだ。私は文明の沒落をこゝに見るのだ。

ブルジョア去り、プロレタリヤも次いで去り、そして安定の社會が生れる。ブルジョヤもプロレタリヤも、ともに一時の階級、一時の覇權なのだ。ブルジョア沒落の日が來たとともに、プロレタリヤ必滅の時もまた明日につゞいてゐるのだ。

今日のブルジョア不安は、たゞなるブルジョア不安ではない。一切の世界、一切の生活不安なのだ。その不安の基礎は今日の經濟制度そのもののうへにある。

今日の經濟制度は、自給自足ではない。他給他足である。自ら必要あるがゆえに生産するのではなく、自ら欲するがゆえに勞働するのではない。他給他足は彼欲するのである。自給自足はツアラツストラの言[illegible]は[illegible]できる。彼者は[illegible]かは自他の世界に屬する。彼が何を欲するかは[illegible]に屬する。從ひて彼が何を欲するかは彼自身のみが知る。彼に非さるものはたゞ彼が何を欲するであらうかを想像し推測するよりほかにないのだ。こゝに他給他足は生産過剩があり、過小がある。こゝに中世の公定價格の代りに近代の投機がある。他給他足は一つの投機的經濟制度である。投機的心理なくしてはかゝる經濟制度は發達することができないのだ。

他給他足は、たゞに一つの投機的制度であるばかりではない。貨物の非人格化である。人々の生産するものは、人々の創造的欲望から、若しくはその生活上の需要から起るのではない。そは自己に原因なき理由によつて、自己とは遠く隔つて何ごとも知らず、何ごともかゝわることなき或るもののために生産されるのだ。生産に對する愛、勞働の享樂は失はれて商業的動機のみが支配する。人と貨物とは分裂して生産の機械化がこゝに行はれるのだ。

今日の經濟制度は一つのメキヤニズムである。世界的なる一つのメキヤニズムである。今日は勤勉なるものが富むのではない。勞働の報酬は勞働の結果ではない。勞働せざるものが[illegible]

受取り、怠惰なるものが富む。その富めるものもしかし常に富めるものではない。子孫のために美田を買ふとも、その美田の價値は美田そのものに原因なき他の或るものの作用のために常に動搖して止まるところを知らぬ。紙幣の價値が常に變化してゐるごとくに、貨物の價値もまた常に變化する。世界戰爭が亞米利加の景氣に影響し、その影響がまた直に日本の生絲相場を支配する。それがまた同時に信州の農民を、更に日本國民一般の經濟生活を左右する。人々の財產は勞働する時に增加するのではなくて、その眠つてゐる時に增大し或は減少するのだ。

市場不安なのだ。兜町不安が世界不安なのだ。兜町が世界の縮圖である。人々の財產は一秒每に變化する。自己に原因なき或るもののために自己の財產が增減する。その財產は今日は一切である。財產が價値である。名譽である。道德である。宗教である。藝術である。權力である。財の動搖は、それゆえにブルジョア社會では一切のものの動搖なのだ。人間動搖である。財產不安は人間不安である。今日は人間不安の時代である。獨りブルジョア不安であるばかりではない。一切の生活不安、一切の人間不安なのだ。ただなる政治不安ではない。おしなべての社會不安なのだ。

ブルジョア社會は不安社會である。不安であることが、ブルジョア社會の原理なのだ。恐怖は專制政治の精神である。モンテスキユウはこういふた。モンテスキユウに倣ひていはゞ、不安はブルジョア社會の精神なのだ。

ブルジョア階級はプロレタリヤの搾取において存在するとは一般の社會主義理論である。その搾取はしかし失業なくしては可能ではない。失業なくば勞働者の團結は勞働者の權力を資本家の權力にまで高めることが可能である。失業があり、勞働豫備軍があり、從ひて勞働者の生活不安があり、こゝに勞働者の團結は資本家の經濟的權力の前にしばしば、そしてあまりにしばしば、土崩瓦解するのだ。勞働者の生活不安のうへにブルジョア搾取制度が存在するのだ。

財界不安は、更に成金を製造し、成貧を製造し、ブルジョア內における富の轉換を可能にし、從ひてこの階級を停滯と不活潑とから救ふのだ。

不安なくばブルジョアなし、不安はブルジョアの成立原理であるとともに、その致命的欠陷の一つもまたこゝにある。ブルジョアは不安によつて立ち不安によつて滅亡するのだ。

ブルジョア經濟制度、從ひてブルジョア社會制度は、かくし

て人間性の弱點のうへに立てられてゐる。弱點を見ることにおいて、商人は天才である。商人的天才がプルジョア覇權を築いたのだ。こゝにプルジョア制度の拔くべからざる基礎がある。然り、眞に容易に拔くべからざる基礎なのだ。プルジョア覇權の時代は過去一世紀の間であり、その運命もまた見えてはゐるが、これより先き、これより以後、プルジョア的精神は幾世紀に亘つて存在し、プルジョア覇權以前の社會にプルジョアの實權があり、プロレタリヤ露西亞にまたプルジョアの實權があるのを見よ。

惡魔は人間の弱點のうへに成立する。プルジョア制度は惡魔制度である。夜の制度である。晝の制度ではない。一つの暗黑時代である。それは人間性を一方に捕へてはゐる。しかし太陽に堪えることはできない。

And tyrants and slaves are like shadows of night
In the van of the morning light.

われ／＼の努力の目標は、生活と道徳とを一致せしめることである。今日は生活と道徳とが別々の世界に分れた。こゝにもろ／＼の罪惡、もろ／＼の僞善が存在する。

生活と道徳との一致は、道徳によつて生活を指導することではない。生活のうちに眞實を見ることである。生活は[illegible]になからしたることである。人間性の弱點のうへに立たないで、その美しさのうへに生活を立てることである。惡魔の代りに、神性なるものによつて人間生活を支配することである。ベルグソンの所謂下降する實在の代りに上昇する實在をもつてすることである。

プロレタリヤが悲慘な生活のもとにあることは事實である。彼等は食物と衣住のために常に不安を感んじてゐるばかりではない。光もなく空氣もなき場所に住む。野獸よりも奴隷よりも、彼等の生活はより貧しき生活なのだ。

その救濟はしかしたゞプルジョアを仆したことによつて行はれるものではない。唯物的價値觀念が行はれる限り、第一のプロレタリヤが仆れても第二のプロレタリヤが起るであらう。既にボルシエヰキは下層プロレタリアを卑しもうとさへしつゝある。ブハリンがルンペンプロレタリヤを卑しみつゝあるを見よ。

If I am not level with the lowest I am nothing.

人々が若しも最貧の階級を卑しむなら、社會主義はナツシングなのだ。一切の唯物的價値觀念を除き去れ。プルジョア社會の亡びるのはその時なのだ。プロレタリヤの存在を失ふのも其

の時なのだ。生活と道徳とが一致し、人々が勇氣と誇りとをもつて生活に面することのできるのもその時なのだ

われ／＼の任務はプロレタリヤに唯物主義を鼓吹することではない。プロレタリヤに權力慾望を煽動するなどではない。れ等の一切の惡魔、一切のブルジョア觀念を一掃することである。

覺え書き

本間久雄

○

今日の不安な社會相の第一は、必要以上に所有する者が、その必要以上に所有することに對する不安である。

所謂ブルジョア階級の不安がそれである。

この不安は、感受性の敏感な詩人、文學者などに夙く既に現はれてゐる。近代文學の中のアンニュイの氣分、生活倦怠の氣分などにも、このブルジョア階級の不安要素の多分に入り込んでゐるのは怪しむに足りない。

生活には何の不自由もない、自分は自分の思ひのまゝの仕事をすることも出來る。しかし生活をする張合がない。仕事をする勇氣がない。たゞあるものは、生活の倦怠だけである。

かういふ生活倦怠の氣分が、殊に、有産階級に漲つた近代社會の一つの雰圍氣である。

かういふ生活倦怠の雰圍氣そのものが必ずしも近代的不安そのものを構成するわけではないが、この雰圍氣が醸し出す絕望、恐怖等の感情がつひに「世界苦」といはれる特殊の不安的氣分を構成することゝなる。

近代デカダンの鼻祖ボオドレエルは、近代人の不安絕望の感情を古い破鐘（われがね）に托して歌つた一節に

そもわれは心破れぬ。懶愛のすさびごゝちに、
寒空（さむぞら）の夜に響けと、いとせめて、鳴りよそふとも、

凄惨な、雷にこそたてた、銃聲の音も哀れ。
哀れなる臨終の聲は、血の波の淵の岸、
小山なす屍の下に、身動もえならで死する、
棄てられし負傷の兵の息絶ゆる終の呻吟か。

（上田敏氏譯）

といふのがあるが、かういふ深刻な不安と絶望と恐怖の感情は、とりも直さず、生活倦怠の氣分から釀し出されたものに外ならない。

○

ブルジョア階級の不安は、二つの相において現はれてゐる。一つは、上にも擧げたやうな恐怖と絶望との卒直な表現であり、今一つはプロレタリヤ階級との妥協によつて、その階級的不安を擁護しようといふ彌縫的方策である。

故の有島武郎氏の如きは、日本において最もよく前者を代表した人であつた。

氏は、あれだけ敏感な、そしてあれだけ眞面目な、そして又あれだけ、ブルジョア對プロレタリヤの問題に對する理解の透徹した人であつただけ、言葉を換へて云ふと、プロレタリヤ階級が當然勃興すべく、ブルジョア階級が當然滅亡すべきであることいふことに對する理解の透徹した人であつただけ、そして氏自らは、自らも許し、他も許してゐる通り、ブルジョア階級に屬する人であつただけ、自己の屬してゐるそのブルジョア階級の滅亡といふことには、恐らく吾々の想像以上の不安があつたであらう。

そして氏にとつて更に、惡かつたことは、新興階級のプロレタリヤの擡頭を、當然のことゝ信じ、その擡頭運動に盡力することが人間としての正義であると信じ、同時に、自分もそれに對して一臂の力を致さうと考へながらも、而も氏はこれを敢てし得ないといふことであつた。

氏には、プロレタリヤ運動に參加すべく、その教養なり、趣味なりが、餘りにブルジョア的であつた。生れ落ちるとから、ブルジョアの環境に生ひ立つて、骨の髓までブルジョア文化に浸り漬つてゐた氏に取つては、どう踠いてもプロレタリヤ運動に參加することが出來なかつた。このことは氏の有名なそして又、一ブルジョア、インテリゲンチヤの苦悶の貴い記錄である『宣言一つ』の中に遺憾なく書かれてゐる。

かうして、結局は、滅亡すべき階級と、自分の運命を苦にしなければならないと考へた時、氏には果して不安がなかつたら

うか。不安といふよりはむしろ絶望の哀愁がなかつたらうか。そして、この絶望の哀愁が、いよ〳〵高じて來たとき、氏の生活意志がます〳〵痲痺されて了はなかつたであらうか。

有島氏の戀愛死なども、この意味から云ふと、決して單なる情死ではない。これは恐らく、生活意志を失つた者が、その戀愛死の中に辛じて、生き甲斐を見出さうとした苦しい悶えであつたであらう。更に言葉を換へていふと、ブルジョア階級の不安が、氏の戀愛死の遠因であると云つても、あながち、さう唐突な言說ではないであらう。

○

プロレタリヤ階級の擡頭に恐れながら、而も飽くまでも、自らのブルジョア階級を擁護しようとする狡猾なる一派の武器は、溫情主義と勞働協調とである。

しかし、これは到底彌縫策たるに止る。プロレタリヤが、眞に自己階級の眞の意義を自覺し、自己階級の眞の力を自覺したが最後、ブルジョア階級の小供だましのやうな溫情主義や勞資協調の何の役にも立たなくなることは、火を睹るよりも明かである。

そのときこそ、今日のブルジョア階級が、プロレタリヤとの階級戰爭において、完全に敗北した時である。不安どころではない、恐怖どころではない。そこには、完全に打ちのめされたものゝ臨終の呻きがあるばかりであらう。

○

今日まで、この世には、餘りに必要以上の富を蓄積した階級があつた。と思ふと一方には、餘りに必要以下の生活を餘儀なくされてゐた階級があつた。必要以上と必要以下と、富の分配が餘りにも不公平であつた。そして、必要以上に所有するものは、その必要以上の所有を、必要以下の生活をするものゝ誰れかゞ、來て奪ひはしないかといふ不安と、それを理不盡に保護しようとする焦燥とに常に惱まされてゐる。一方では必要以下の生活者は、常に、人間として生活するといふよりは、人間以下の一生物であるといふ悲慘な狀態に置かれてゐる。

蓋し、一方に必要以上の富を擁して生活をするものと、他方に必要以下の悲慘な生活をするものと、どうして、さういふ區別が生じたかといふやうなことは社會學の常識であるから、ここでは贅しない。たゞ、必要以下の生活をするものゝ悲慘といふことを考へる場合に、その最も甚だしい例として、私は、いつも農民の生活を念頭に思ひ浮べる。

農に、こ[illegible]民の本なと昔から云はれてゐて、この言になほ[illegible]る最も有用な仕事である農業に從事するものは、その當然の權利として、最も正當に報ゐらるべきであるが、事實はその反對で、少くも、我國では、昔から彼等ほど不當に報ゐられてゐるものはない。

これは明かに徳川の對農政策に原因する。瀧本誠一博士が『日本經濟史』によると、徳川政府は、農民に對しては、歴代、正信主義、即ち家康の參謀本多正信の獻策として傳へられる「百姓を治るの法は、一年入用の食料だけを殘して其の餘は年貢に取り、彼等の手許には財の餘らぬ様に且つ不足なき様に治むべし」と云つた主義を巧妙に勵行したもので、表面は常に農業の尊ぶべきことを諭示し、百姓の撫育せざるべからざることを說きながら、決して百姓の利害を思ひ幸福を進めることを計つたものではなく、仁政の標榜の下に彼等の膏血を絞ることをのみ力めたものだといふことを、さまぐの材料を擧げて細論してある。

家康の云つた有名な言葉にも「百姓の氣儘なるは一揆の基なり。難儀のならぬほどにして氣儘にさせぬが百姓への慈悲なり。」といふのがある。これによつてもいかに、狡猾な溫情主義を以て、徳川の爲政家だちが農民を苦しめたかゞ窺はれる。而も八代の[illegible]ものほど、仁政をし[illegible]思ふとき、[illegible]年の歴史は、結局農民搾取[illegible]の歴史であると云ふことが證據立てられる。これはともかく、徳川時代の農民がいかに悲慘な狀態に置かれてあつたかを、上記『日本經濟史』の中から抜き書きして見よう。

「山方に生るゝ百姓は雜炊にゝても米を食ふ事あれども、山方野方に生れては、正月三ケ日と雖も、米を口に入るゝ事なき所多し。粟、稗、麥など食に炊くとても、菜、蕪、干葉、芋の葉、豆さゝげの葉、其の外あらゆる草木の葉を糧として、穀物の色は見へぬばかりにして、而も朝夕飽く程の事なく、漸く日の中一度づゝならでは是を喰ふ事なく、餘は前に云ふ粥の類にて日を送る。朝夕の膳などに坐るといふこともなく、少し物をたべれば蟹の泡の如くなり、茶をいくらも汲飲んで足れりとす。斯く恐ろしき物を食として、而も明七つより起て骨を折り、夜九つ迄働きて繩をなひ、草鞋を造る、其の辛苦常ならず……世を覆ひ、國を治る人は、心を留て、これを聞き給はゞ民を憐れむ助ともならん」民間省要

いかにその悲慘であるかは、改めて云ふにも及ぶまい。而も、かういふ農民の悲慘な狀態は、單に徳川時代ばかりには限つ[illegible]

い。明治時代でも、更に今日でも、如上の悲慘から、農民が、どの位脫出してゐるかは大きな疑問である。(無論この場合の農民は小作農を指す。地主としての農民は、製造業者としての工場主など〻同じくブルジョア階級であり、資本家階級であるから、問題外である。)もしこのことを疑ふ者は、例へば故長塚節氏の『土』一卷を味ふがよい。明治に於けるプロレタリヤとこの小作農の悲慘なる哀史が、この『土』一卷の中にいかに鮮かに展開されてゐるかは、恐らく讀者の誰れもが見落さないところであらう。

○

必要以上に所有するブルジョア階級の不安と、必要以下の生活――生活といふよりは單なる生存――に甘んじなければならないプロレタリヤ階級の悲慘とは、しかしいつかはこの世から滅絕させなければならない。

それは或ひは一個のまぼろしであるかも知れない。この世のつゞくかぎり、永久に、必要以上に所有する階級と必要以下の生存に甘んずる階級との對立がつゞくかも知れない。しかし、さう對立がなくなつて、各個人が必要以上でもなく、必要以下でもない、といふ生活を基本とする時代の來ないといふことを、誰れが果して斷言し得ようか。

現に、さういふ時代への憧れの幻は次第に現實のものとなつゝある。それは、すなはち、現代におけるプロレタリヤの擡頭である。プロレタリヤの運動が、本當にわがウイリアム・モリスの『無可有の鄕の日記』の中のやうなユートピヤの世界を現出するのは、遠い〳〵後の世のことであるとしても、プロレタリヤの擡頭そのもの〻文化史的意義は、上に述べた新しい時代への黎明の鐘を打ち鳴らすことでなくて何であらうか。

「幻のないところ、民衆は滅ぶ」と、西洋のある詩人は云つたが、吾々今日の一般民衆に取つて、多くの社會改造家の胸に宿つてゐる幻のかず〳〵こそ、先づ第一に貴ばるべきではないか。

或者は道徳的から或者は經濟的から

小川未明

生產し、供給しつゝある階級が、衣食住にすら窮し、自からの手にて造れるものすら、自由になし能はざる事實を見る時、無爲なるか、しからざれば、たゞ消費するだけの階級が、自分達の比較的、もしくは甚しく贅澤な生活を顧みて、良心を持つ程の輩なら、やましく思はぬものは、あるまいと思はれる。

何といつても、所詮、人間は、この世の中に生れたからは、幸福でありたいと願はぬものはないのである。幸福だけが、生存を誘惑する美しい幻影たり、目的たるのである。だから愉快に、面白く暮らすこと、それ自身がわるい譯ではない。たゞ、その愉悦や、快樂は、共有すべきものでなければならないといふのである。

資本家は、事業に於て、資本を提供してゐるから、幸福を獨占する權利があると思つてゐるなら、それは、甚しい錯誤であることは、いまさら說くまでもないことだ。いづれにしても、不勞所得は罪惡視せられる。そして、この資本家階級を取卷いて、たゞ消費することだけしかしない、プチブルジョアが、やはり、生產者の生產を搾取することになる限りは、これ等の輩が、不公平な分配のためから、生產階級の、貧困切迫する有樣を見る時、やましさを感じない筈がないのである。

ブルジョアの不安と脅威は、心あればこそ、良心の前に戰いてゐるのである。この頃、特權階級の新人等が、一平民たらんとする願ひも、恐らく、この良心の苛責にあるのでなからうかと思はれる。

もう、一つは、實質的から、考へて見て、まさに、ブルジョアの不安を感ずることに値する。すべての生產機關は、勞働者の手中にあるからだ。たゞ、その機關の運轉が、勞働者の意志如何にあるからだ。今日、勞働階級の自覺は既に昔日の比でない。彼等は、どういふ場合に、この機關の運轉を停止することが、有効なるかをよく心得てゐる筈だ。

生產を杜絕された曉には、資本家や、それを取卷くプチブル

ジョアの運命がどうなるか、そのことは、ブルジョア自身が、最もよく感じ、且つ、知つてゐることでもある。ブルジョアの恐怖が日に深刻になりつつあるのは、勞働階級の自覺とまさに正比例するからである。

次のやうなことは、クロポトキンも言つたことであり、よく、例に引かれることであるが、文士は、勝手に、自己享樂的な文章を書き、また、有閑階級に取り入るやうな事實を小說とし、劇としてゐる。やがて、それは、雜誌に、書物になつて表はれると、彼等は富みを得、同時に虛名を博することができるのである。そして、作者自身は俺が偉いからだと思つてゐる。しかし、實際は、この蔭に、どれ程眞面目な人間の勞力が、——しかも、無益なことのために、眞の人生にとつて、生死の社會にとつて、何等寄與することとなきことのために費されてゐるといふ事實を彼等は、知らないのである。印刷職工及び、製本業者のストライキが、將來、單に、資本家階級に對する脅威たるにとゞまらず、またブルジョア作家にとつての脅威たる日があるであらう。

眞に、感情なく、また道德的觀念なく、しからされば、現存、社會組織に對する智識なき、ブルジョアのみが、無産勞働階級の前に、不安なく、恐怖なくして、傲慢であり得るのである。

眞に、生産する者のみが、生産機關を自由にする權利を有ることが、眞理であるかぎりは、蓋し、ブルジョアの恐怖は、偶然ではないのである。そして、生産階級の貧窮悲慘なる生活こそ、却つて、不可解な現象とされなければならないのである。

いまや、資本家は、溫情主義によつて、勞働者を手馴けんとしてゐる。智識階級は、政策的に、兩者の衝突を緩和せしめんことに努力しつゝある。

しかし、一切の虛僞は、つひに、眞理を抑壓することは、できないであらう。

協營運動の革命政策

澤田謙

『プロレタリアの悲慘とブルジョアの不安』といふ事實を背定して、この事實を說明することは、鷺を白しといひ、烏を黑いといふのたぐひで、なん等意味ある仕事ではない。むしろ、プロレタリアの繁榮とブロジョアの滿足を說く方が、堅石非石、白馬不馬の辨として、ソフイステイックな欲求を滿足さすであらう。之は、一個の社會事象として、意義の世界に入るとき、はじめて生彩を發揮しきたる問題である。

わたくしは、かく考へる。そして『プロレタリアの悲慘とブルジョアの不安』なる事實に、革命的な意義を附することにより、社會組織變改の、『革命政策』について考へて見たいと思ふ。

一

『プロレタリアの悲慘とブルジョアの不安』は資本主義文明の特色である。そして同時にその運命である。われ等がわれ等の文明を維持する限り、この運命から脫出することはできない。わたくしは明らかにこの『運命』を認識する。しかしこの運命に社會的意義をあたへ、この特色に獨得の色彩をほどこしたのは、社會主義である。ことに科學的社會主義である。カール・マルクスが、その資本理論と唯物史觀とを完成したときに、『不安時代』は去つて『恐怖時代』が來たのである。もとより、プロレタリアとブルジョアの階級的對立は、それが歷史の意志である限り、『事實』としてこれを否定することはできない。わたくしもまた事實としてこの階級對立を背定する。しかしこの二つの階級の溝渠の間に、『恐怖』といふ橋を架することは、絕對的に必然なものであらうか。疑を挿むの餘地があると思ふ。

こゝに『革命政策』成立の間隙があるのである。

『プロレタリアの悲慘とブルジョアの不安』は、『革命』を必至ならしむる歷史的絕對命令である。わたくしはこの『絕對命令』に反抗して、『革命』を拒否せんとするのではない。欲すると欲せざるとに論なく、革命は必らずくる。しかし革命が、『恐怖』の

本能によつて導かれるか『進歩』の本能によつて導かれるか、――破壊か創造か、――それは問題である。もし革命をもつて、流血と慘害と破壊と掃蕩と、その廢墟の上に建立さるべき黄金國とを意味するならば、話は全然別である。しかし革命とは、社會組織の變改の義であるといふならば……

「わたくしは革命主義者であつた。そして永久に進化的革命主義者であるであろう。」

と、『英國勞働の父』たるロバアト・スマイリーは言つたが、もし『進化的革命主義』という語が許されるならば、『革命政策』ということも、考察の餘地があるであろう。

二

しばらく、理論的檢討をはなれて、歷史的考察を試みる。そしてその一手段として、英國の例をとる。

イギリスに勞働組合の發生したのは、社會主義未生前のことである。正確にそれが何時發生したかといふことは、もとより決定しうべきことでもないし、この場合重大なことでもない。とにかく十八世紀の初頭において、封建社會の崩壊と、これに伴ふギルド制の無力化とにより、當時の『職人』の間に、『職人倶樂部』が成立して、これが現在の勞働組合運動の萠芽となつたといふことは、シドニー・ウエッブ夫妻の綿密なる研究によつて、明らかになつてゐる。すなはち勞働組合運動は、勞働階級の發生とともに發生し、その發達とともに發達したものである。そしてその目的と使命とが、勞働階級の社會的地位の向上にあつたことも、多くの疑の餘地はない。

ながい歷史的叙述は略する。勞働組合運動が、英國においていかに發生し、いかに發達し、それが社會主義運動といかなる交渉を有し、さらに協營運動の進展といかに呼應したかの歷史的事實は、――『協營運動の革命政策』を論ずるのが、本稿の主なる意圖であるが、――わたくしの近著『勞働内閣まで』において、やゝ詳にしえたかと思ふから、こゝに再錄はしない。しかし勞働組合運動が、新興勞働階級の代表的運動として、資本主義社會の發達とともに、(すなはち勞働階級の發達とともに、)發達し、資本主義社會がその特色を完成するとともに、(すなはち勞働階級がその社會的特色を完成するとともに、)その社會的特性を完成したことは、こゝに爭ふべからざる事實として、明記しておかねばならぬ。

すなはち、資本主義社會がいまだ幼稚なりしころ、別語にしていへば、嚴密なる意味における『資本階級』と『勞働階級』とが、社會的に成立せざりし時代において、勞働組合とは、要す

るに、一定の職業に從事する勞働者が、一定の資本を基とした雇主に對して、その勞働條件と生活條件を、維持向上せんがためにする、特定的な運動團體にすぎなかつたのである。一八五〇年代において、ウイリアム・ニウトンの組織完成した『機械工統合組合』は、當時勞働組合の『新典型』と稱せられ、一時勞働組合世界におけるける流行を風靡したのであるが、これも要するに、『一職業、一組合』を標語とする、部分的、排外的團體で、勞働階級全體として、資本階級に挑戰せんとする、大運動ではなかつた。アヲン、アップルガアス等のいはゆる『ジュンタ同盟』と雖も、勞働階級の統一的戰鬪團體ではなくて、部分的、排外的なる諸獨立勞働組合の、友好俱樂部にすぎなかつたのでる。

三

この勞働組合が、勞働階級の統一的戰鬪團體に化したのは、資本主義社會が完成し、從つて『勞働階級』なるものが、社會的に完成したときである。年代にしていへば、十九世紀の末葉、『紡績』、『機械』『建築』の三大組合が、勞働組合世界の指導的地位からすべり落ちて、『坑山』、『鐵道』、『運輸』の三新興組合が、これに代るに至つたころである。もしエポック、メーキングな事件を求めるならば、一八八九年におけるロンドンの[illegible]代へかけて、[illegible]したものともいへる。

この傾向は、むしろ、自然なる傾向であつた。かへつて、勞働階級の史的發展が、その傾向を必然ならしめたものである、といつた方が當つてゐるかも知れない。なぜなら、その初期において、勞働階級の存立が特立的なりしころ、勞働組合の特立が特立的であつたことが、必然的であつたと同じ意味で、勞働階級が統一的社會階級となりしとき、勞働組合運動が、統一的戰鬪運動となつたことは、むしろ當然以上であるからである。これは史的發展の『當然』である。そしてこの『當然』を、未前に洞察し、その必至を豫言するとともに、その發展に史的意義を附して、史的原理の名のもとに、階級鬪爭の事象を洞觀したものが、カール・マルクスである。

われ等がカール・マルクスのうちに、多くの豫言者的風格を見るのは、まつたくこのゆゑである。かれが豫言者なりしがゆゑに、時代はかれとともに歩きえなかつた。かれが『階級鬪爭』を唱導せしとき、英國の勞働組合は『賃銀』と『時間』とに沒頭してゐた。かれの高弟ハインドマンが『社會民本聯合』をつくつたとき、勞働組合は、社會民本聯合の挑戰に應じて、『われ等は資本主義社會の一部である』と豪語したのである。[illegible]

義と勞働組合とが和睦したのは、一八八四年、フェビアン協會の成立したとき、或はさらに遲く一八九七年、社會民本聯合が、勞働組合容認の宣言を發したときである。その以前において、社會主義と勞働組合とは、全然別個の社會運動であつた。

しかし勞働組合運動が、社會主義思想の影響なしに、發達したものであると、誰がいひ得やう。兩者が相爭つたのは、一が現實の事象に着眼せるに反して、他が將來の發達に着目せるが故にすぎぬ。ともに先後して同一の軌道を走る。この事實は二十世紀に入るとともに明白になつた。

四

二十世紀に入るとともに、英國の歴史が、その『革命時代』に入つたことは、たれの眼にも明かな事實である。一九〇〇年には、『勞働黨』の前身たる『勞働代表委會』が成立した。それは勞働組合と社會主義とをつなぐ、歴史的の楔である。このころに至つて、社會主義の豫言した理論と、勞働組合の發達せる事象とは、漸くに一致しはじめたのである。そして『革命』といふことが、『社會組織の變改』といふこと以外に、新らしい意義を附せらるゝに至つたのである。

新らしい意義とは、『階級鬪爭によつて』といふことである。階級鬪爭の理論は、もとより、社會主義の革命理論をなすものである。しかし勞働組合は、そのはじめ、階級鬪爭の機關として生れたのではない。まへにも述べたとほり、その誕生のころにおいては、階級鬪爭の機關たるべく、勞働階級自體が、いまだ發達してゐなかつたのである。けれども、こゝに注意しなければならぬことは、勞働組合そのものが、はじめより、一種の『爭鬪機關』として生れたと云ふことである。言葉をかへていへば、それは『鬪爭』の本能によつて成立したものである。『蛇は寸にして人を呑む』といふ如く、それは特立的にしてまた制限的ではあつたが、勞働組合が、資本家または雇主に對抗して、自己の權利と利益を伸張せんがために生れたことは、後年、階級鬪爭なる一大運動に發達すべき、充分なる萌芽をもつてゐたものといへる。少なくとも、社會主義の『階級鬪爭による社會組織の變改』なる『革命理論』を受け入るべき、充分なる素地をもつてゐたのである。

さらに着目すべきは、二十世紀の十年代における、英國勞働運動の急激なる進展である。このころ、米國のI・W・Wの思想は、スコットランドからイギリスに輸入された。他方トム・マンの手によつて、フランスのサンディカリズムが、ロンドンから全國に普及された。一九一二年と一三年とに、全國的大罷業が、

彼いて叫つゝ發展したる如き、英國おいよ／＼『革命時代』に入れることを、深く時代心理にうえつけたものである。かくして『階級闘争による』といふ信條が、『革命』なる意義の、超對條件なるが如くに、考へられはじめたのである。

しかし、事理は果して然るであらうか。

五

こゝにおいて、わたくしは、冒頭に掲げたる疑問をば、さらに新にせざるを得ない。

もとより、『プロレタリヤの悲慘とブルジョアの不安』は、否むべからざる『事實』である。この事實は、さらに『革命』の當來を必然にすべき、關係的事象である。これも疑ふことはできない。また疑ふものでもない。しかしその革命——『社會組織の變改』——は、必らず『階級闘争』なる方策によつて、達成されなければならぬであらうか。別の言葉でいへば、『闘争』の本能が、絶對的の革命指導者であらうか。社會主義の革命理論は、『階級闘争』と『社會組織の變改』とを、見えざる糸でしばりつけて、二者一體の理論と化してゐる。しかしその理論に欠陷がないかどうか。

理論的檢討は、これを他日に讓らなければならぬ。しかし事實として、この兩者が、密接な關係の下に見做されきたり、現さにおいて、離すべからざるものなるかの如き關係にあることは、すでに述べた通りである。若し勞働組合運動と社會主義運動とをもつて、或は兩者の聯合運動をもつて、唯一の社會運動となすならば、二者はすでに切り離すことはできまい。その欲すると欲せざるとに拘らず、その理論の正當非當に拘はらず、にの本能は闘争して、革命事實とよつて達成されるであらう。

しかし、わたくしは、この二運動のほかに、かくれたる一大運動の存在を見おとすわけにゆかぬがゆえに、それに疑問を挿むのである。それは現在において、英國人口の三分の一を包容する『協營組合（コオペラテイヴ・ソサイテイ）』の運動である。

「協營主義（コオペレーシヨン）を採用しなければ、革命は免がれない。」

これは『消費者協營主義』の著者、ソンニクヤンの言である。その意味は、『協營主義』の革命によるにあらざれば『闘争主義』の革命は免れぬ。といふにあるのであらねばならぬ。

私もまた然か思ふ。協營か闘争か。途はただ二つ。いづれにしても革命は免れぬ。そして現在の社會革命の事實は、いづれの方途を進行しつゝあるか。…それが問題である。

わたくしは、もとより、豫言者ではない。従つて將來の革命が、協營と闘争の、いづれの方途を選擇するであらうかとい、

ことを、こゝに斷定することはできぬ。しかし同時に、現在の事實として、協營主義の革命運動が、鬪爭主義の革命運動と並んで、これに比較するほどの實勢力をもつてゐるといふことと、現在の英國勞働黨の政策が、著るしく協營主義に傾きつゝあるといふ事實を、否定するの不可能を知るものである。

六

協營組合運動は、その友僚運動たる勞働組合運動に比して、決して弱勢なる社會運動ではない。その協營者の「所有」し且つ『經營』する『資本』だけでも、およそ十億圓に上り、その運轉額も、ほゞ三十億圓と稱せられてゐる。その組織者にして同時に顧客たる勞働者に對し、配當金及び購買割戻金として分配する額は、年に約一億七千萬圓である。かくの如き偉大なる組織團體が、資本主義社會組織の內部に、資本主義にあらざる原則――協營主義の原則――によつて、存在してゐるといふ事實を、その組合員が英國全人口の三分の一を占めてゐるといふ事實と想ひ合はすれば、何人も協營運動の弱勢を嗤ふものはあるまい。

しかるに協營組合の運動は、最近にいたるまで、多く世の注目を惹くことができなかつた。それは勞働組合運動が、つねに資本主義に『公然』と挑戰して、ストライキによる恐怖をもつて、武裝的『鬪爭』を行へるに反し、協營組合運動が、倉庫計算器と陳列棚のかげにかくれて、ひたすらに『實利』を擧げんとつとめてゐたゆゑでもある。また勞働組合運動が、社會の生產組織內に內亂を起して、力と力との相克により、一擧に敵羣を屠り去らんとするに對し、協營組合運動が、一般消費者懷ろ勘定のうちから、またすべての住宅の臺所のうちから、資本主義の要素を、一つ一つ協營主義に變改せんとしつゝあるからでもある。それが結局において、社會の經濟的、政治的、社會的基礎を、革命化せんとしつゝある點において、兩者に變異ある故ではない。

協營主義の原理は、いたつて簡單である。社會經濟關係における『生產』と『交換』と『分配』とを、協營主義によつて、（或は新らしき意味の民本主義によつて、――協營主義と民本主義との關係については、新なる檢討を要する）勞働者自ら、經營するといふのである。その目的のために、勞働者は自ら店舖を設けた。工場を建てた。倉庫をつくつた。船舶を動かし、運送を行つた。銀行を經營した。すべて資本家が、資本主義に則つて行ひつゝある仕事を、勞働者が、協營主義に則つて行ふのである。しかもこの協營主義によつて經營さるゝ事業が、現在においては、資本主義の社會內部に、動かすべからざる根をすゑ

て、さらに資本主義社會を、一歩一歩と變化しつゝあるのである。

これは事實である。空想でもまた理論でもない。この『事實』を直視するとき、社會組織の變改――『革命』――は、必らず『鬪争』によらずんば、達成しえざるものなりと、斷言することができるであらうか。

七

協營主義は、勞働組合主義に比すれば、新らしい社會改造運動である。協營組合がはじめてできたのは、一八四八年、ロッチデールの『蟇街』（トードレーン）の裏通りに、二十八名の織機工が、十圓づつの金を出し合はせて、合計二百八十圓で、小さな小賣店を出したゞけからであるとされてゐる。尤も、早くキング博士は、その社會改造思想の結論として、協營主義の組合に想倒して、その設立を提唱し、その以前からも協營組合はあつたのであるが、社會運動として、協營組合が發足したのは、ロッチデールからであるといはれねばならぬ。その意味で、二十八名の織機工は、『ロッチデール先驅者（パイオニアス）』であり、ロッチデールは協營主義のメッカである。

しかし協營主義の新らしいのは、その『歴史的』新らしさでなくて、その『本能的』新らしさである。勞働組合が革命理論とする『鬪争』に、[illegible]存』の第一次的本質であるが、もとより『鬪争』の本能をもつて、野蠻なりと無下に斥けるのではない。それは人間的本能のうちで、最も原本的なものである。それと同時に原始的なものである。これに反して、協營主義の原則は、『組織』本能によつて支配され、『經營』慾によつて推進される。その仕事が、破壊的に働らくよりも、建設的に働らくことの多いのは――（そしてそれが勞働組合運動の如き華々しさをもたぬ所以であるが）――その故である。その點において、『自由競争』なる、一種の假装せる『鬪争』――平和的（？）鬪争――に則る資本主義に對し、『協營』なる原則は、たしかに革命的意義を有するものといはねばならぬ。

若し私觀をゆるすならば、『革命』とは、單なる『外形的』社會組織の變改をもつて、萬事の終結を劃するものではあるまい。社會組織の變改は、組織を支配する原理の變改を意味すべき筈である。單に『支配階級』が、資本階級より勞働階級に移轉したりといふ事實によつて、社會組織の變改、すなはち革命が成就したりとなすは、あまりに安價なる革命論である。かくの如きはいはゆる社會主義者と雖も、とらざるところである。勞働組合主義は、この點において、いかなる見地に立つか。『[illegible]

會』の指導原理はいかに。協營主義はこの點において明答を與へてゐる。勞働組合は、協營主義のこの解答を、いかに解するであらうか。

八

『プロレタリアの悲慘とブルジョアの不安』。これは社會事相である。それは『革命』を暗示するものである。しかもわれ等はこれが『革命政策』として、二つの主義を檢別した。勞働組合主義と協營組合主義。或は『鬪爭』主義と『協營』主義。――わたくしは、この二者のうち、そのいづれを可とし、他を不可とせんとするのではない。たゞ、少なくとも、理論として、この二つの革命主義が認められるのみならず、事實として、この二つの革命運動が存在することを、述べ來つたわけである。

英國の勞働黨が、『穩健なる』社會主義と稱せられ、その政策が、はなはだ『着實』なりと賞せられる、その所以をこゝに詳説するのは、あまりに本題を離れるものであらう。しかしその政策が、著るしく協營主義に接近しつゝあることは、具眼の士の決して見おとさないところである。かれ等が『國有化（ナショナリゼーション）』を提唱するとき、決して『産業の支配（コントロール・オヴ・インダストリー）』について、民本的勞働主義をつけ加ふるを忘れないのは、協營主義の思想が、少なからず内部に蠢動しつゝあるを思はするものである。その『資本論』を提唱するや、聲を涸してまで、『資本の徵發』にあらざる所以を辯明するあたりは、單なる戰術または政略と見ることはできぬ。われ等は、英國の勞働組合と社會主義とが、一たび勞働黨に結合し、さらに勞働黨が政治的實勢力をうるに及んで、その政策のうちに、生硬なるマルキシズムや、階級鬪爭論が、次第に影をうすくして、協營主義の考へが、漸く根底化せんとしつつあるの事實を明らかに觀取するものである。

わたくしは、『プロレタリヤの悲慘とブルジョアの不安』をもつて、單なる社會事相として、觀察するにしのびない。そは明かに、より偉大なるものゝ、一つの表現として、あるひは、新らしきものゝ生みの惱みとして、これを觀得する。さらにそは、『新興階級』の勝利の前兆として、無條件に、これを肯定することもできない。「いかなる道徳原理によつて」と考ふるとき、わたくしは『協營主義の革命政策』を想起せざるを得ないのである。

「資本主義か社會主義か」

日本の思想界は、あまりにながく、かう考へることに慣らされてきた。わたくしは、その最後にでもいゝから、「協營主義か」の五字を加へられんことを要求する。『理論』の名においてまた『事實』の名において。



慘苦と迫害の生涯を送つた
渡邊崋山
―本朝畫人傳の一―

村松梢風

一

或る日虎之助は、永の病氣で煩つてゐる父の爲めに本町迄藥を買ひに行つた。「いわしや」といふ大きな藥種問屋へ行つて、頸に掛けて來た欝金木綿のよごれた財布の中から、藥の名を書いた紙切れと一緒に有りたけのお鳥目を出して番頭に手渡すと番頭は無造作にそれを受け取つて、錢は帳場の錢箱の中へガチヤンと投げ込み、それから無數の抽斗の附いてゐる戸棚の其の一つの抽斗から藥を出して、袋ごと秤へ掛けて、「ハイ、お待遠樣」と言つて虎之助に渡した。虎之助はそれまでボンヤリと番頭の所作を眺めてゐた。さま〴〵な藥の匂ひが一緒になつて廣い店中に漂つてゐた。朝からお客が大勢藥を買ひに來てゐて、澤山の番頭達がめい〳〵忙しさうにそれらのお客達の相手をしてゐた。虎之助は、いつも此家へ藥を買ひに來る度びに感じることだが、此の廣い店いつぱいに藏つてある澤山の藥といふ物が何故か非常に尊い物であるかのやうに感じられてくる。あの强い藥の匂ひに包まれてゐると何んとなく神々しいやうな氣持にさへなつてくる。さうして漠然と藥といふ物に對して憧憬れに似た氣持を持たせられるのだつた。

「此の店中の藥を自分が欲しいだけづゝ自由に持つて行くことが若し出來るとしたら、それはどんなに嬉しいことだらう……」

そして其の高價な藥を絶やさず父に飮ませたならば、父の病

氣も屹度速く癒るのだが……と虎之助は及びも付かない事を考へて見たりした。やがて虎之助は藥の袋を小さな風呂敷に包んで大事さうに持つていわしやの門口を出た。大通へ出ると大層な人通りだつた。花見に行くのだと見えて、酒樽を持つたり重詰めを持つたりした連中が、揃ひの着物や揃ひの手拭で威勢よく歩いてゐる。田舍の見物人が幾たりもつながつて可笑しな恰好をして歩いてゐる。さういふものを見ると虎之助はもう藥のことは忘れてしまつた。藥のことを忘れると同時に、父の病氣のことや、我家の貧しいことや、それらから起きるいろんな果敢ないやうな心持も消えてしまつて、今日の空のやうな晴れやかな氣持になつた。風が無くて暖かで、何んとも云へない好い日和だつた。虎之助は浮き浮きした氣持になつて日本橋の方へ歩いて行つた。

と、橋近くなつてから、向ふ側の橋の袂に人が黒山のやうに立つてゐるのが虎之助の眼にはいつた。群衆が輪を描いてゐる其の眞ん中で、一人の男が何か高聲に喋つてゐる。見物人がどツと笑ふ聲が聞えてゐる。「辻講釋かそれとも齒拔きかしら」と虎之助は遠くから見てゐたが餘り面白さうに見物人が笑つてゐるので自分も側へ行つて見度くなつた。彼は人通りの多い往來を斜めに横切つてそちらへ驅け出した。處が、忽ちどんと人にぶつかつた。餘り勢よく走つて行つてぶつかつたので、助はすてんと其の場へ倒れてしまつた。

「無禮者ツ」

と大喝一聲頭上から浴びせられた。虎之助は漸う這ひ起きて見ると、美々しい行粧を備へた大名の列が橋を渡つて來る處で自分が今突き當つた相手は其の先拂ひだつた。「これは大變な事をした」と虎之助は思つた。

「無禮者奴が、お供先を切るとは不屆千萬、これへ出へ」

「飛んだ粗忽を致しました、平にお免し下さりませ」

「いや成らん、場所もあらうに斯樣な大道でお行列を冒すとは、定めて故意であらう、さあ、意趣を申せ」

「どう仕りまして、全く粗相で御座ります、御慈悲を以てお免し下さりませ」

袴の股立ちを取つた武士が四五名で虎之助の周りをグルリと取り卷いた。何處からともなく彌次馬がゾロ／＼やつて來てまた其の周りを取り圍んでしまつた。大名の乘物は橋の中頃で止まつてゐた。

「備前樣のお行列だよ、それをあの小僧がお供先を切つたんだ」

彌次馬がガヤ／＼とそんなことを言つてるので虎之助は初め

て其の行列の主が前町の池田侯であることを知つたのだつた。何れにしても落度は自身にあるので謝まるよりほかに道は無かつた。

「此奴、乞食のやうなむさくるしい身なりを致し居るが、見れば兩刀を帶して武士と見える。こりや、やい、其方は何れの家中だ、主人の名を申せ」

「何卒、其の儀は御勘辨下さりませ、重々お詫びを仕ります」

「主人の名を云へぬと云ふのか、それとも宿無しの素浪人か。やい小倅、本來なら一刀兩斷に斬つて捨て可き奴だが、今日は殿樣御佛參の途中ぢやに依つて命ばかりは助けて遣はす、向後氣を付けろ」

と言ふが否や一人の武士は足をあげて、大地へ手を突いて頭を下げてゐる虎之助の肩の邊りを丁と蹴つた。虎之助は横ざまに倒れた。續いて肩と云はず背と云はず散々に打ちのめされたり蹴られたりした。武士達は隨分虎之助を折檻してしまつた後で、意氣揚々としてお供先きを揃へて歩き出した。何れも、さういふ事をしたことに依つて自分達の主君の威勢を庶民共に知らせて遣つたといふやうな顏をして。

行列は徐々と通つた。虎之助は散々打擲されたので直ぐには起ちも上れなかつた。彼は依然として地上に倒れた儘行列を送つてゐた。が、綺麗でやさしさうな[illegible]たつて、たゞ一人頭を上げて其の乘物の中を見た。備前岡山の藩主池田内藏頭は當年十一歳であつた。彼は乘物の戸を開けさせて往來の有様を珍しさうに眺めて行くのだつた。頭髮から衣服まで泥にまみれて倒れてゐる自分と同じ年頃の哀れな少年の姿をも、内藏頭は輿の中から見たけれども、それは路傍に名も無い雜草が踏み躙られてゐるのを見た時以上には、何んとも感じてゐないやうな顏をしてゐた。

二

虎之助は、半藏門外の三州田原藩三宅家の邸内にある我家をさして歸つて來た、家では母のお榮が、繰買ひに遣つた悴虎之助の歸りが何時にない遲いので案じてゐる處へ、虎之助は歸つて來るには來たけれど、見れば打ちしほれて、其の上髮を亂し着物は泥まみれになつてゐるので驚いて「此の兒の常にも似合はない、何處ぞで喧嘩をして來たものと見える」とは思つたが「虎之助、まあそちの其の有様は何んぢや」と叱り付けた。

虎之助は母の顏を見たので今迄こらへてゐた涙が一度に堰を切つたやうに迸り出て、母の足許へ泣き伏してしまつた。

「餘所で惡戲をして、大切な着物を代無しにされて來て、[illegible]

で家へ來てまで泣く意久地無しがあるか、何んといふ馬鹿な兒ぢや」

「否え母樣左うでは御座いません」

虎之助は泣く泣く今日の一伍一什を母に物語つた。虎之助は惩んな口惜しい思ひをすることは生れて始めてだつた。彼は小様ながらも武士の子として生れて來た。物心が附いてから何を一番最初に教へられたかと云へば、それは武士としての誇りを失ふなといふことであつた。武士の誇り――それを忘れたことはなかつた。處が、今日はどうだつた、其の大切な武士の誇りを滅茶々々に蹂躙されてしまつたのだ。まだそればかりではない、あの大道の眞中で草や石ころと同じやうに土足で踏み躙られた自分の體には、生きてゐる人間としての値打さへ見られないのであつた。何んといふ情無い事だらう。自分は其の日の生活にも困る貧しい武士の子である。そして先方は天下に重きをなす三十一萬石の大々名である。生れ乍らに身分は天地の相違がある。併し、自分も池田侯も同じ人間である。しかも同じ位の年頃だつた。それだのに、かうまで甚だしい懸隔があるといふのは何故だらう……虎之助はそんな事を考へ乍ら、家へ歸ることも忘れてあちこち歩いてゐたのだつた。

母親は我が兒をふびんに思つた。可愛い我が兒が大勢の人の爲めに手痛めにあつて打ち打擲されてゐる有樣を考へると、自分の肉身を寸斷されるやうな苦痛を感じた。落度があるとは云ひ乍ら年端もいかぬ子供を捉へて餘りと云へば酷い仕方だと、彼女は火のやうな憤りを感じた。併し相手が大名では何んと云つて見た處で仕方がない。大名といふ大木に對しては、自分達は扇の風ほどの力さへ有つてゐないのだ……。

「そちがうつけ者ぢやによつて其のやうな目に會ふのぢや、それに懲りて此の後はたしなんだがよい」

と、彼女は涙を目に浮かべ乍ら我が兒を叱つた。

「母樣、私はお願ひが御座ります」

「何んぢや」

「私は學問が習ひ度う御座ります、どうか父樣にお願ひして、明日から學問の先生の所へ遣つて戴き度う存じます」

「學問をしたいと云やるのはよいが、何んでまたそちは、其の樣に急に學問がしたくなつたのぢや」

「母樣、私は今日途々考へました。わたくしは備前の殿樣に負けたことが殘念でなりません、どうかしてわたくしは大人になつたら備前の殿樣よりも偉い人間になり度う御座ります、それには學問をしなければなりません、學問をして日本一の學者になつたら備前の殿樣にも負けてゐなくてもよいだらうと存じま

す。殿様、どうか父様に會はせて下さいませ」
と虎之助は、何時の間にやら涙の跡も消えてしまつた眼に希望の光を輝やかせながら言つた。
お繊は默つて我が兒の顔を見守つてゐた。が、其の時彼女の胸には強い喜びの情がこみ上げてゐた。お繊は我が兒の行末を賴母しく思つた。それにつけても思ひ出されるのは虎之助の幼時の事柄だつた。
お繊の夫は三州田原三宅家の藩士で渡邊市郎兵衞と云つた。そして彼女は攝津高槻の城主永井大和守の家臣河村彦左衞門の娘であつた。彼女が渡邊家へ嫁して最初に生んだ兒が虎之助であつた。虎之助が生れたのは寛政五年九月十六日だつた。處が、虎之助は生後十日以上經過しても眼を明かなかつた。
「此の兒は生れつきの盲目なのだらう」
と人も云つた。お繊は、人からさう云はれる度びに心が暗くなつた。或る日も彼女は添へ乳をしながら眼を明かない我が兒の顔を眺めてゐるうちに悲しくなつて涙がハラ〳〵とこぼれた。
「お前はせつかく總領に生れて來たのではないか、それだのにまあどうして眼も明かないのだ」
彼女は腹立たしくなつて來て、抱いてゐる幼な兒の背中を撲り[illegible]明いた。
「まあ此の兒が眼を明いた！」お繊は驚喜の聲を上げた。
夫や姑も急いで側へ來て見た。幼な兒は人々に美しい眼をみひらいて、何か見えるかのやうにニコ〳〵と笑つてゐた。それからは病氣も無く大きくなつて行つた。虎之助が二歳の時だつた。其の時分市郎兵衞夫妻は巢鴨のお下屋敷の方へ行つてゐた。或る日お繊は虎之助を抱いてお屋敷の戶外へ出てそゞろ歩きをしてゐた。すると向うから立派な老僧が二三名の徒弟を隨へて托鉢をして來た。見るとそれは當時名僧の聞えある根津の新幡隨院の和尚だつた。其の時お繊はふと、新幡隨院の和尚は人相を看ることに妙を得てゐるといふ人の噂を思ひ出したつで、彼女は布施をして、
「此の兒の疱瘡はどうで御座いませうか」
と言つて尋ねて見た。
和尚は一寸見て
「疱瘡か、疱瘡は輕いから心配することはない」
それから和尚は虎之助の顔を熟々と見て
「よい兒ぢやな、此の兒は後來必ず名を成すだらう、大切にお育てなされ、……併し、惜いことには、最後に至つて不慮の災

禍に罹つて天命を全うすることが出來ない」と言つた。

お織は喜んで其の事を夫に話したのだつた。それ以來お織は何んとなく我が兒の將來を賴母しく感じるのだつた。其の後次男の喜平次が生れ、三男の要之助が生れ、長女のお元が生れ――さういつた具合に段々子供が澤山になつて來たけれども、お織の虎之助に對するさういふ盲目的の感情はいつまでも變らなかつた。生れて十日間眼を明かなかつた兒が、彼女の一喝に依つて忽ち眼を明いた事と、新[illegible]隨院の和尚の豫言とが、虎之助の事を考へる度びに彼女の腦裡へまつ先きに浮かんで來るのだつた。さは云へ虎之助は、親の欲目ばかりではなく、幼ない時から普通の子供とは餘程異つてゐた。世間の子供のやうに惡戯もしなかつた。竹馬へ乘つたり凧を上げたりすることも餘り好きなやうではなかつた。大勢子供達が遊んでゐる場所へ行つても、きつと一人別者になつて遠くに離れて見てゐるのだつた。泣きもしないが、何か遣つても餘り喜ばなかつた。何處となく鷹揚でボーッとしてゐるので、子供仲間では「阿呆」だとか「鈍馬」だとか常に云はれてゐた。さう云へば餘り鷹揚過ぎて阿呆に近い位の所もあつた。六つか七つの時だつたが、虎之助は祖母に伴れられて餘所へ行つた歸り途で、荷車に衝き當つて、避けやうとする拍子に過つて路傍の溝の中へ陷ち込んだ。が虎之助は泣きもせず、さうかと云つて自分で起き上らうとせず、たゞ泥の中へ仰向きに倒れた儘大きな眼を明いて青天井を眺めてゐるのだつた。祖母が驚いて引き上げた。上げられてからも虎之助は平氣な顏をしてゐた。

「此の兒は何んといふ鈍な兒だらう」と祖母は家へ歸つて來て話した。

虎之助は八歲の時から若君の御側役に擧げられた。毎日午前十時に出て、正午に下り、午後の二時に再び御殿へ上つて、日暮れに下つて來る、それが日課だつた。虎之助は一日もそれを缺勤するといふことはなかつた。雨風の日には簑笠を着て出勤した。何故かと云ふと、彼の家は非常に貧乏で傘を買つて貰ふことが出來なかつたから。

親達は、其の子に學問を仕込むといふことをおろそかに考へてゐたわけではなかつた。が、貧しい生活には何事も餘裕が無かつた。其の上市郎兵衛は永の煩ひで大概床の上で暮らしてゐる有樣だつたので、一家の者は食をつめても猶且つ藥餌の代に追はれなければならなかつた。そんな風で、虎之助に學問を施すといふことも今日までは等閑に附して來たのだつた。併しお織は、今日といふ今日は、どんな苦勞をしても此の兒を立派な者に仕立てなければならないと思つた。彼女は直ぐ樣病床の夫

にあつて[illegible]
市郎兵衛は自分も學問好きだつた。彼の家は元々貧乏で[illegible]は無かつたが、學問をしたさに十五の年に故郷田原から江戸へ出て、三宅家の儒臣鷹見星皐の門下生となつた。彼は日夜精勵刻苦して學業に没頭したが、書籍を購ふ金が無いので、四書五經から史記左傳などまですべて他人の本を借りて來て謄寫するのだつた。さうした苦學の効が現はれて彼の學業は大いに進んだので、若年にして拔擢されて主君對馬守康和の側用人に擧げられた。市郎兵衛は名は定通、字は叔澤、巴洲又は半斬と號した。さういふ人となりであつたから、市郎兵衛は我が兒の健氣な發奮を妻以上に喜び、其の翌日から虎之助を自分の恩師である鷹見星皐の許へ入門させることになつた。

しかしお榮は、我が兒が入門の束脩の金を算段するために、生みの母親の形見で之ればかりは放すまいと思つてゐた笄をも質に入れなければならなくなつた。

三

田原の城主三宅對馬守は、南朝の忠臣備後三郎高徳の後裔であつた。それほどの名門だが、高は一萬二千石の小藩で、帝鑑の間詰めの小大名であつた。一萬二千石の知行では、家名を維持[illegible]に三宅家は多額の借財を背負つてゐた。[illegible]家臣は其の俸祿に[illegible]はれるので、[illegible]なくなつてゐた。渡邊市郎兵衛は十五人扶持から削り上げて、現在では側用人で八十石の知行を貰つてゐるわけにはなつてゐたが、前に云ふやうな主家の財政だので、實際は其の半分位しか支給されてはゐなかつた。其の僅かな收入では到底武士の體面を維持して行くことは出來なかつた。加ふるに市郎兵衛は全然理財の才の無い人物だつた。そこへもつて來て近年子供は殖えるばかりなので、生活は年一年と苦しくなつて來た。處が、一番最後に彼が病氣に罹つてしまつたので、窮迫は急轉直下どん底まで墜ち込んでしまつた。

虎之助が十四歳になつた時には弟妹が七人あつた。老祖母もまだ存命してゐた。市郎兵衛の病氣は金が掛るばかりでいつ快復するといふ見込みも立たなかつた。家財道具は殘らず質に入れたり賣り拂つたりしてしまつたので、今では破れた雜具の外には何も無かつた。着物もめい〳〵が着てゐる破れ衣が一枚宛だつた。食事すらあてがはれなくて空腹を抱へて過すやうなことも稀らしくなかつた、お榮の苦勞は一と通りでなかつた。

彼女はいつが日にも蒲團といふ物を着て寢たことはなかつた

いつでも破れ襖の上へごろ寢をした。冬は炬燵をこしらへてふせつてゐた。虎之助は御殿の勤めから退つて來ると、父の看病をして按摩をするのが毎日のきまりだつた。小さな弟や妹のお守もした。その間には星巖先生の塾へも通學した。虎之助の熱心と其の頭腦の明敏さは師の星巖も常に驚くほどだつた。

或る時もお繼は、差し當つて若干かの金がなくては凌ぎが付かないので、自身の縁者で、山伏だが、本所一ツ目に住んでゐる某といふ者の處へ金を借りに行くことになつた。合憎川先きになつて雪が降り出して來た。が、延ばしてはゐられないので、末の兒を脊負つて雪を冐して出て行つた。歸りは夜になるのだつた。虎之助は御殿から退つて來てから、母の歸る前に洗足の湯でも沸かして置かうと思つて竈の前で火をたき乍ら、其の明りで書物を讀んでゐた。がいつしか書物の方にばかり心を奪はれてゐるうちに、あたりがキナ臭いので氣が付いて見ると、薪の飛び火が袖の上に來たのを知らずにゐたので何時の間にか三寸四方もある大きな燒け穴をこしらへてしまつた。それは一張羅の御殿勤めの紋服だつた、虎之助は途方に暮れてしまつた。母が平常から着物の事は特にやかましく言ふことを知つてゐるので、恁んな粗相をしてしまつて母が歸つて來たらどんなに叱られるだらうと考へると氣が氣ではなかつた。其處へ母は歸つて來た。

お繼は、自分が早く歸つて遣らなければ、病人も年寄りも供達も此の寒空に空き腹を抱へて夜食も食べられずに居るのだと思ふので、大雪の中を本所から足にまかせて急いで來た。途々脊中の兒に泣かれるのが何よりもつらかつた。借金は度々の事なので不成功だつた。それでも先方も此の雪の中を態々やつて來たのに滿更素手で歸すのも氣の毒だと思つたと見えて、歸り際になつてから「これで子供に菓子でも買つてやつて與れ」と言つて小粒の二朱の金を紙に捻つて與れた。餘り快くはなかつたけれど、そんな事を云つてる場合ではないので其の金を貰つて歸つて來たのだつた。

虎之助は玄關へ洗足の湯を持つて行つたりして、母が上つて來てから、

「母樣、わたくしは飛んだ粗相を致しました」と見付けられない先きに自分から言つてしまつた。

「どのやうな粗相をしやつたのぢや」

「あの、只今お洗足の湯を沸かしてゐて、恁んなにお召を燒いてしまひました」

と言つて虎之助は袖の燒穴を母の前に出して見せた。するとお繼は血相を變へて怒つた。

「これはまた[illegible]燒穴ぢや、外に着て行くものがないお前に此の綻な燒穴をこしらへてしもうて、明日から御前へ出るには何を着て行くのぢや」

「申し譯は御座りませぬ、これから氣を付けますから、御勘辨下さりませ」

「これから氣を付けたとて其の燒穴はもう直りやせぬわいの。何んといふうつけ者ぢや、これ、母樣はな、此の雪の中を本所までお金の融通を頼みに行つたのぢや、けれども本所のおぢ樣も度々の御無心ゆへ聞いては下さらず、たつた之れ丈のお鳥目を拜借して來たのぢや、此の母の苦勞も思はず安閑としてゐるから其の樣な粗相を仕出かすのぢや」

　お織は腹立ちまぎれに二朱の金を疊の上に叩き付けて泪を流して叱るのだつた。虎之助も泣き出した。終ひには母と子は、互ひに抱き合つて何ん共云へぬ悲哀にうたれて只泣くのだつた。

　其の着物はお織が細工で五寸四方もあるつぎを當てゝ、虎之助は相變らずそれを着て御前を勤めた。

　これではどうにも仕方がない、恁んなことをしてゐれば遠からず一家の者は餓死してしまはなければならなかつた。其處で或る人が見るに見かねて、せめて家族の口を減らすやうに、二男と三男を他家へ出してはどうかと云つて市郎兵衛夫婦にすゝめた。[illegible]喜平次は板橋の[illegible]寺へ[illegible]り、三男の要之助はまだ七歳だけれど、これも芝の青松寺へ小僧奉公に遣ることになつた。

　喜平次が板橋の寺へ貰はれて行く日に、虎之助は其の弟を板橋迄送つて行つた。矢張り寒い日で、途中まで行くと雪がチラ／＼降り出して來た。虎之助は弟の手をひつぱつて歩いた。先方の寺の名も知らさず貰はれて行く約束だつたので、板橋の杜の辻といふ處で、先方から來た迎ひの者に引き渡すどいふことになつてゐた。漸う約束の場所まで行くと、寺男か何かと見える鬼のやうな荒男がとうから其處に待つてゐて、直ぐ樣喜平次を虎之助の手から奪ひ取るやうにして向うへ伴れて行くのだつた。雪はやまずチラ／＼と降つてゐた。青物の荷を附けた馬が澤山通つてゐた。十歳になつたばかりの喜平次は、寒さうな恰好をして後ろを振り向き振り向き手を引かれて行つた。虎之助は弟の姿が見えなくなるまで同じ場所に石のやうに立つてゐた。さうしてゐる虎之助の兩眼からは雪も溶けるかと思ふやうな熱い泪が迸つてゐた。

　同じ家中で、御納戸を勤めてゐる高橋文平といふ人があつた。高橋は渡邊とは特に入懇にしてゐて、年は若いが極く親切

な人物だつたので、渡邊家の窮狀を見るに忍びずよく色々の世話をしてくれるのだつた。此の高橋が或る日もやつて來ていろんな談しの後で親子の者に向つて言ふことには、

「時に、虎之助さんの問題だが、誠によく學問ができて末頼母しい息子だと云つて應見先生も大變賞めていらつしやる、だから普通なら此儘續いて學問をさせるに越したことはないが、併し考へて見ると、學問で金を取るまでは實に容易でない、到底修業が續きますまい。其處で私の考へだが、繪を習つたらどうかと思ふ、繪の方なら學問と違つて早く金が取れる、何の道だつて出世すれば同じ事だ、それも滿更繪心のない者では仕方がないが、幸ひ虎之助さんは繪が上手で習はなくてもあれ位に畫けるくらゐだから、本式に師匠に就いて二三年もみつちり修業したら、早い咄が燈籠の繪位は畫けるやうになるかも知れない、さうすれば幾らか暮らしの足しにもなつてよからうと私は思ふのだが」と頻りに繪を習ふことをすゝめるのだつた。

まつたく高橋が云ふ通り、虎之助は生れつき不思議な畫才を有つてゐた。ちいさい時からよく獨りで繪を描いてゐたが、其の繪は大人が見ても駭く程うまかつた。六歳か七歳の時だつたが恁んな事があつた。或る日市郎兵衛が不在中に來客があつた。其の時執り次に出た下僕の者が、主人が歸宅してから、それを報告したはいゝが、來客の名前を云はうとするとハタと忘れてしまつた。

「名前を忘れてしまつては、どなたが見えられたのか薩張り分らんではないか」

「へえ……」

下僕が汗を出して弱つてゐると、側にゐた虎之助は何んと思つたか向うへ走つて行つたが、やがて反古の端へ繪を描いて來て、

「父樣、今日來たお客樣はかういふ人でございました」と云つて父に見せた。

市郎兵衛は一見して驚いてしまつた。其の繪に描かれた人物を見ると、それは懇意な或る旗本の隱居の顏で、幼い筆つきだけれども、一見其の人だと思ふやうに描いてあつた。下僕もそれを見て呆れながら「確かに此のお方に相違御座いません」と言つた。それでも念のために書面を遣つて問ひ合せて見ると、矢つ張り其の人だつた。

「此の兒は繪師にしたらいゝだらう」

と以前からさう云つて見たことも度び／＼あつた。が、市郎兵衛にしてもお縫にしてもまだ本氣にさう考へて見たことはなかつた。矢張り世間の親のやうに、子供が繪など描いてると叱

る位のものだつたが。併し、今度[illegible]一度も程それもよからうだ」といふ氣になつた。本人の虎之助は、折角今迄親しんで來た書物と別れることは辛かつたが、同時に繪を習ふといふことにも强く心を惹かれた。家内の相談がきまつて、隣の鷹見星皐の處へ相談に行くと、星皐も大いにそれに賛成して呉れて、虎之助の師匠として、白川芝山といふ畫家を紹介してくれた。芝山は芝に住んで、南蘋風の畫を描いて、相當に門戸を張つてゐた。

日本一の學者にならうといふ虎之助の空想は斯うして破れてしまつたが、其の代りに彼は芝山の許へ入門することが出來た。それは虎之助が十六歳の時だつた。

貧しいので束修も人並みには納められなかつた。入門の日に虎之助は、母から紙代を十六文貰つた。

四

其の年虎之助は元服して、藩主康友の命名で、登と改名した。同時に藩侯の近習に擧げられて少しの俸米を給されるやうになつた。が、父の病氣が十年一日の如く變らないので、そんな事では窮迫は救はれなかつた。登は勤めの餘暇を用ひて一生懸命繪を習つた。畫を習つてそれで大名をあげたいと考へるよりも、一日も早く[illegible]い——さういふ氣持で繪を習つた。

師匠の芝山は餘り親切には教へて呉れなかつた。が、或は最初は、「繪の先生といふものはかういふものなのかも知れない」と思つてゐた。さうかと思ふと他の弟子に對しては隨分親切に教へてゐるやうなこともあつた。登は畫を直して貰はうと思つて持つて行つても、何時迄も玄關の側へ打つちやつて置かれて、師匠は容易に見て呉れなかつた、漸う見て呉れたと思ふと「まあいゝだらう」くらゐで碌に直しては呉れなかつた。登が自分の方から不審の處に就いて何か質問して見ても「そんな事は獨りで解つて來る」と云つて師匠は直ぐに蒼蠅さゝうな顔をした。それは師匠に對して碌々謝儀をしないので、それで師匠が氣に入らないのだといふことが虎之助にも追ひ〲分つて來た。登は辛かつた。併し、紙を買ふにも困つてゐる身分ではどう思つても仕方がなかつた。彼は只自分の熱心に依つて師匠の見出しに預るよりほかはないと考へた。で彼は益精出して繪を描いては持つて行つた。さうして一年位過つた。

年末だつた。例に依つて登が繪を持つて師匠の家へ行くと相弟子で塾頭のやうなことをしてゐる男が登を物陰へ呼んで、氣の毒さうな顔つきで、

「實は先生から僕までお話しがあつたので傳へるのだが、誠にお氣の毒だが、何か御都合があつて、君だけは教授を斷るといふお話だから、どうかさう思つて貰ひたい」と言ひ渡された。

登は吃驚して、自分で師匠に會つて事情を語つて哀願して見たけれども、芝山は承き入れなかつた。芝山は何處迄も冷淡だつた。

「お前の方にも事情はあるだらうが、私も大勢弟子があつて忙がしい體だ、弟子としての禮を盡して貰へぬ者の面倒までは見られない」と露骨に言ひ出された。

登はスゴ／＼と師匠の前を退つて、そして我家へ歸つた。彼は暗憺とした氣持になつてしまつた。十二の年に日本橋で屈辱を受けた時には、悲しいとは悲しかつたけれど、反つてそれが爲めに發奮の勇氣も出て來たのだつた。併し今日の氣持はあの時とは大分異つてゐる。有らゆる燈火が一時に滅したやうに、前途の望みは悉く消え失せてしまつた。幼少の時から貧しい家庭に育てられて貧苦の味はつぶさに嘗めて來てはゐるが、今日程貧の辛さをしみじみと經驗することはないのだつた。

登は悲觀し切つて我家へ歸つて來て、隱してはゐられないので病床の父に向つて一伍一什を話した。すると市郎兵衛は案外騷かなかつた。

「さうか——已むを得ない事だ。先方の御都合とあれば仕方ない。それしきの事でしよげては駄目だぞ、君子は固より窮するのが常だ、恥でも何んでもない、只自分の不運だと斷念するよりほかはないのだ」

折よく高橋文平が來たので其の事を話すと、文平も驚いて、憤慨して見たけれども仕方がなかつた。市郎兵は何か考へてゐたが、やがて

「金子金陵といふ畫の先生がある、此の人は大森勇三郎殿の家來だが、矢張り南蘋風の畫で高名の人だ。わしもずつと以前のことだが詩會などで二三回會つたことがある、多分先方でも覺えてゐるだらうと思ふが……此の先生にわしが手紙を書いてやるから、一つ行つて賴んで見てはどうだらう。高橋、貴公にわしの代理に悴を伴れて行つて賴んで見て賴ひたいが」

「承知致した。金子金陵を御存じとあれば好都合です、芝山などより遙かに大家だ」

「いや、今も云ふ通り二三回の交際だから、果して承いて吳れるかどうか分らないが、其處は一つ貴公の口でよく賴んで頂き度い」

市郎兵衛は直ぐに書面を認めた。高橋は登を同道して金子金陵を訪問した。金陵に會つて手紙を渡した上になほ口上で賴む

と、金陵は一も二もなく承知して呉れた。

「巴洲君の御子息にそんな立派なのがあるとは知らなかつた。いや、貴殿の事は、吾等とても人の師たる器量はないが、多年研究はして居るから御相談相手になりませう。弟子師匠の禮儀などは改まつてなさらずとも、自由に遊びにおいでなされ。芝山は繪を描くことが商賣で御座るから、束脩月謝などを受けるであらうが、吾等は御扶持を戴いて居るから食ふことには困らない、左樣な心配は御無用々々々」

其の日から登は金陵の處へ通ふやうになつた。金陵は心底からの親切で登を誘掖して呉れるのであつた。登の天賦の畫才はメキ〳〵と伸びていつた。二年經つと彼は繪を描いて多少の收入を得るまでになつた。それは主に燈籠、團扇、紙鳶などの繪だつた。畫料の相場は百枚描いて一貫文位だつたが、それでも大きに生活の足しになつた。經學の師鷹見星皐は登の爲めに『華山』といふ號を撰んで呉れたのだつた。其の星皐も崋山が十九歳の時病沒してしまつた。星皐の沒後は、彼は碩儒佐藤一齋の門に入つて經研與の志を滿した。

文化十一年、登は二十二歳の正月、納戸役を命ぜられた。彼の體は非常に忙がしくなつたけれども、公務の餘暇は寸刻の時間も措んで學術繪畫の研究に費した。其の頃は繪畫の友人も澤山出して來て、[illegible]山は友達と語つて一緒に研究[illegible]といふ[illegible]作品を持ち寄つて一緒に批評しあつたり、意見の交換をしたりして、相互の進歩を促がすのが目的であつた。其の評判を華山が批評した。

間もなく登は、自分の號の華山の華を崋と改めた。父の市郎兵衛も病氣が餘程快くなつて出仕が出來るやうになつて、文政元年の正月家老職に擧げられ、知行も百石四人扶持に上つた。登の畫名も益高くなつて畫の依賴が諸方から集まるやうになつたので、初めて渡邊家の暮し向きも樂になりかけたと思ふと、今度は登が大病に罹つて久しい間床について了まつた。

文化十二年には恩師金子金陵が沒した。其の翌年には、子供の時から世話になつた恩人高橋文平の訃に遭つた。登は一時茫然としてしまつて仕事も手につかなかつた。彼は金陵の沒後は他の師匠をとらずに、亡師の遺していつた粉本だけを賴りにして研究を續けてゐた。

同門の友に椿椿山があつた。椿山は享和元年の生れで崋山に比べると九つ歳下だつた。彼は名を仲太と云ひ、小身の旗本の子として生れたが、七歳の時父を亡ひ其の後other

育せられたのだつた。仲太は一人の母に仕へて非常に孝行であつた。親孝行のかどでお上から褒美を貰つたとも度び〳〵だつた。親の云ひ付けならばどんな事でも守つた。外出する時母が「今日は降るかも知れないから雨傘を持つて行くがいい」と云へば、どんな上天氣になつても正直に傘を持つて歩いた。また反對に母が外出して少し歸宅が遲れでもすると非常に心配して食事もしなかつた。椿山の家の東隣りに西村某といふ酒屋があつた。其の家の主は椿山の親孝行にほと〳〵感心させられて、或る時椿山に向つて

「私は明き盲であなたの繪のよしあしはわからないが、あなたの孝行には感心しましたから一つ畫いて戴き度いものです」

と言つた。椿山は感激して「名花十友圖」を作つて西村に贈つた。

椿山は、師の金陵が沒したので、いまは崋山の外には師とすべき人は無いと云つて崋山の教へを受けた。併し崋山は、何處までも椿山を弟子としては見ず、友人として親しい交りをしてゐた。

登は、納戸役の外に刀番兼務を命ぜられたので、藩主が外出する時は供頭として隨從した、彼は忠勤無類だつたので、非常に君侯の寵愛を蒙つてゐた。併し、當時の家中の風習は甚だしく頽廢してゐた。上役は賄賂を取り、藩の財政は紊亂れて、藩士は遊所へ出入したり、或ひは權門富家に媚びて書畫骨董の周旋をしたりなどして些かも恥ぢとしない有様だつた。遂には家中で三絃の研究會さへ起される程だつた。藩主康和は、忠直な登等を信任してゐると同時に、一方ではさういふ軟派の家臣をも寵愛して、自身でも遊藝を習つたりするのだつた。登は心中不平でたまらなかつた。或る年の正月元日の諸士集會の席上で登は、藩政刷新の必要を大いに説いたけれども、誰一人耳を傾けてくれる者はなかつた。

　見よや春大地も亨す地蟲さへ

それは登が其の席上で吐いた句だつた。彼の意見は少しも用ゐられなかつた。登の不平は押へることが出來なかつた。彼は一度は家を末弟に讓つて長崎に出奔しやうと決心したのだつたが、父の諫めに依つて漸く思ひ止まつた。

　莫レ嗤鴳鷄試二鵬雲一。決起槍楡初見レ分。
　游子何知風木嘆。花鳥月夕何忘レ君。

それは、登が出奔しやうとした刹那の感懐の詩であつた。

五

文政元年正月十六日のとだつた。崋山は初めて文晁を訪問

た。文[illegible]て昼から酒を始めて、来客や門人を相手に飲つてゐるやうな話を聞いてゐた。其處へ崋山が名刺を通じると、文晁は何んと思つたか

「崋山先生が見えられた」

と言つて、弟子達に命じて盃盤を取り片付けさせ、威容を改めて崋山に對面した。人々は不思議に思つた。大概の人が來ても文晁は無造作に席へ通して「先づ一獻召し上れ」と持ち合せの盃を突き付けると云つた調子であるのに、かう改まつて引見する崋山といふ人は一體何者なのかしらと思つた。

崋山が初對面の挨拶をすると、文晁も禮儀正しくそれに應へて、

「御高名はかねて承はつて居ります、ようこそお訪ね下された」

と慇懃にもてなし、酒盃をあらためてそれへ持ち出させ

「先生、初めての御入來である、何はなくとも先づ一獻召し上つて下さい

「いえ、私は……」と崋山が言ひ掛けると

「兎も角もお受けなされ、一代に名を成さうとする者が、酒にひけを取るやうでは相成らん」

崋山もいける口なので快く盃を受けて數行を重ねた。文晁は[illegible]一時に[illegible]目をする」

崋山は喜んで

「誠に本懐の至で、お目に掛けるも恐れ多いことで御座いますが、お言葉に甘へて恥をさらします。何卒御指導に預り度う存じます」

彼は風呂敷に包んで來た自作の畫を數幀取り出して其の場へ展げた。すると文晁は熟々ながめて

「實に佳く描けました。山水の方も人物の方も申し分のない出來です、文晁ほと〲感服致した。コレ〲、お前達も崋山先生の御作をよく拜見するがいゝ」

と弟子達を顧みて言つた。崋山は恐縮して

「先生、其の様なお言葉では反つて痛み入ります。私は元來貧家に育ちましたので、せめて燈籠の繪でも描いて家計を助け度いと思つて畫を習ひ始めましたのです、それが金子金陵先生の御教導に依つて今日では幾らか繪筆の持ち方をおぼへましたが、金子先生がお亡くなりになつた後は、暗夜に燈火を失つたも同然で何んの頼る物も御座いません。で、ぶしつけで誠に失禮とは存じましたが、先生の御教導に預り度いと思つて本日は

參上致した次第で御座います。何卒今日から門下の列にお加へ下さいまして御指導を戴き度く、ひたすらお願ひ仕ります」と赤心を面に現はして言つた。

「いや〳〵私には貴下をお教へする資格はない。併しさういふお話しであれば折り〳〵御相談相手位にはなりませう。此の畫を拜見した處では、人物の方は十分御修業が積んでゐる、殊に意匠が優れてゐて其の點では私も遠く及ばないと思ふ。が、山水はもう一層御研究の必要があらうかと考へる。――處で、貴下に一つ良い師匠をお世話しやう」

然う言つて文晁は起ち上つて戸棚の中から一部の畫帖を取り出して來てそれを崋山の前に出した。

「是れはお聞き及びであらうが、私がさる諸侯から拜領した珍品で、淸人顧方樂の西廂圖で御座る。御存じかは知らぬが、顧氏は名は愷、字は方樂、乾隆年中の人で、人物山水は、仇英、唐伯虎などを則つてゐる。誠に以て師とするに足りる畫人で、私も是れに依つてどれ程利益を得たか知れない、門外不出の品ではあるが、貴下の運筆に感服致したから暫くお預けして置く。よく此の師匠にお尋ねなされたら、やがて大いに御發明になる處があるでせう」

文晁の家に顧方樂の西廂圖があつて天下の珍とすべき物であるといふ事は隠れもないことだつたから、崋山も豫々其の話だけは聞いてゐた。然るに今初對面の自分、一介の貧士に過ぎない自分に對して文晁が此の深切を示して呉れるのである。崋山は感激しないではゐられなかつた。彼は畫帖を押し戴いて、それを借りることにして其の日は歸つた。顧方樂は崋山に取つても此の上ない師だつた。彼の畫は確かに一生面を拓いて來た。彼は其の後も度び〳〵文晁の所へ畫を持つて行つて觀て貰つた。文晁は何處迄も謙遜して崋山に門人としての待遇は與へなかつたが、山水畫の描法に就いては深切に教導して呉れた。

崋山は其の年二十六歳だつた。新進畫家として彼が多少江戸で認められて來たのも其の年からだつた。それには文晁の後援が大いに與つて力があつたことも勿論だが、其の時分から崋山はさかんに諸派の畫を研究した。土佐や狩野をも獨學で研究した。其の時分のこと或る日麹町の骨董屋で宮本二天の畫を見て、價を尋ねると高くて到底貧乏人の手の出る品ではなかつたが、登は欲しくて堪らぬので早速百方奔走して金を調達して到頭それを手に入れた、なぞといふこともあつた。

風俗畫といふ物に就いて崋山は日頃から考へてゐた。畫家が、古への偉人の圖や歴史畫を描くことは勿論よいことであるが、同時に我れ〳〵が日常見聞してゐるところの市井の風俗

を描くことも必要なことであつた。そして其の時代々々の風俗の有様を後世に伝へることは学問の上からも必要であると思はれるが、然るに今迄世間では風俗画と云へば直ぐ市井の俗画のやうに思つてゐる。描く者にもまたそれだけの見識が無い。是れはどちらもが誤つてゐるのだ、と崋山は考へてゐた。そこで彼はほんたうの見識を以て風俗画を描いて見やうと決心した。彼の此の計劃は其の年の冬上梓された「一掃百態」となつて現はれた。

文政三年の春、崋山は日本橋浮世小路百川楼で初めて書画会を開いた。其の会へは文晁を初めとして有名な文人墨客は悉く出席して幇助してくれたので、来会者が非常に多く、近来にない盛会だといふ評判だつた。

翌文政四年六月、登は公用で相州辺使に行つた。其の序でに江ノ島鎌倉の名所を見物して帰つた。そして彼は「使相録」といふ紀行文を書いた。

或る日登が窓際で机に向つて書見をしてゐると、窓の下へ七八つ位の男の児が来て「小父さん何かお呉んな」と言つた。見るとボロ着物は着てゐるけれ共普通の乞食の児とも異ふやうなので、登は一寸不思議に思つて

「小僧、お前は独りか」と言ふと

「うゝん、父(ちやん)が一しよなんだ」と小僧は答へた。

[illegible]
働き盛りと見えるのに、[illegible]く窶れて、既に老いこんでゐた。

「これ〳〵、一寸此処へ来い」と登が呼ぶと、男はおづ〳〵[illegible]へ這つて来て、ペコ〳〵頭を下げ乍ら

「これは若旦那様で御座いましたか、こんな処へ参つて申し訳は御座いません」

「何もあやまる事はない。時に、貴様は何んだか見たやうな顔だが、何処の者だ」

「へえ……私は平吉と申しまして、四谷の荒木町に住んで居ります魚屋で御座いますが、お屋敷うちへも時々商ひに参りましたので、私の方ではよく存じて居ります」

「道理で見覚えがあると思つた。して魚屋であり乍ら、なんでまた乞食の真似なぞして歩くのだ」

「誠にお恥かしい事で御座いますが、実はわたくしの女房が三年越しの永病ひの揚句に半年ばかり前に死んでしまひました、すると其のあとで今度は私が大病を致しまして、漸う此の頃全快は致しましたが、其のために商売の元手も何も無くしてしまひ、差し当り食ふに困ります処から、こんなざまをして人様のお情にすがつて歩きますやうなわけで御座います」

「左様か、それは氣の毒な事だ、併し、幾ら困つたと云つても乞食をしては不可んな、一寸待つて居れ」登は机の抽出から貰つたばかりの書料の包みを取り出して「是れを貴様に遣はす、幾許はいつてゐるかまだ改めては見ぬが、小魚を仕入れて商賣を始める位の元手はあるだらう、持つて行くがよい」

「いえ旦那様、そんな大金を戴いては濟みません」

「よいから持つて行け」

「左様で御座いますか、ではお言葉に甘へて頂戴致しますで御座います。此の御恩は生涯忘れは致しませぬ」

魚屋は涙を流して喜んで小供をつれて歸つて行つた。それから十日程經つと或る日其の魚屋が石首魚を十匹ばかり持つて禮にやつて來た。

「商賣を始めたのか」

「へえお蔭様で、先日旦那様から戴いたお金で、道具も調ひ、魚も仕入れて、毎日商賣に出て居ります、本日は御近所迄參りましたので一寸お禮に上りましたので。此の石首魚は新らしいだけはお引受け致しますから、どうか召し上つて戴き度う存じます」

「左様か、それはよく來てくれた、私も喜ばしい。成る程よい石首魚ぢやな、是れは父上が好物だからお喜びになるだらう」

それから登は若干の錢を持つて來て

「平吉、是れは魚の代金ぢや」

「旦那様、それぢやあ何んにもなりませぬ、是れはほんのお禮の心持で差し上げましたので」

「それは分つてゐる、其方の心持は己れも嬉しく受けたのだ。併し、自分よりも貧しい者から物を只貰ふといふ法はないから、禮だけは受けるが、魚の代は持つて行け」

と言つて登は無理に平吉に錢をおさめさせた。平吉は追ひ追ひ仕出して以前通りの立派な魚屋になつた。

六

文政六年の春、登は、同藩の士和田傳の女たか子を妻に迎へた。登は三十一、たか子は十七歳だつた。

崋山の畫名は漸く騷がしくなつて來たけれども、家計は依然として困難だつた。其の前年田原の領分は旱魃の爲めに非常な凶作に遭つた。其の結果たださへ窮乏を告げてゐる藩の財政は益困難に陷つて、一藩中の者が極度の儉約を勵行しなければならなくなつた。渡邊家では、家長の市郎兵衛が一時は病氣も快くなり、出仕をして家老職にまで擧げられたのだつたが、その時分から又もや病氣が再發して以前にも増して重態に陷つてし

きつた、親孝行の登は、病苦に悩む父を見捨てゝ毎日出勤するのが何よりも辛かつた、餘命幾許もない父の枕邊に附き添ふて朝夕看病をしたいと思つて再三致仕を願つたけれども許しが出なかつた。丁度折も折、お縫の里方の父河村彦左衛門が仔細あつて主家を浪人して、多数の家族を伴れて渡邊家へやつて來て居候を始めた。只さへ貧乏な處へ此の有様で益火の車になつた。併し今では登の繪が賣れるのでそれだけが唯一の力綱だつた。登は、勤務と看病の僅かの餘りの時間を利用して一生懸命に畫作に從事した。彼の勉强は駭くべきものだつた。彼は日省課目を制めて毎日それを勵行した。彼は午前四時に起きて讀書をした。彼はいつでも一冊の手帖を懐ろに入れてゐて、役所へ行つても手放したことはなかつた。道を歩き乍らでも、駕籠へ乘つてゐる時でも、耳目に觸れる物があれば直ぐに寫して置いた。記事も繪もごつちやまぜだつた。此の習慣は晩年迄繼續して、帖面が丈の高さ程に溜まつた。學問畫事のほかに武士の表藝であるところの武術の修業は勿論おろそかではなかつた。淸水俊藏、沼田棠太夫等の當時有名の劍客とも親しく往來してゐた。其の頃崋山が親しく交際してゐた人々は、文晁、米庵、坦齋、杏所などをはじめとして、佐藤一齋、本多思齋、屋代臨池、北靜廬、瀧澤馬琴などが主なるものだつた。故人の中では熊澤蕃山に最も信を置いて居た。

文政七年藩主對馬守康明が歿して、[illegible]が家督を相續した。三宅家では同列の諸侯を招待して饗宴を開いた。其の折登は賓客達の接待に依つて席上揮毫をして興を助け、一座諸侯の賞讃を蒙つた。

其の頃から崋山の畫風は大いに變化した。それには西洋畫の影響が最も與つて力があつた。彼は洋畫の陰陽遠近色彩の方法を觀て大いに悟る所があつて、それを自身の畫に應用して一新機軸を出した。だから彼は特に肖像畫を描くことに妙を得て、諸方から其の依頼を受けた。其の頃製作の中では佐藤一齋と市川米庵の肖像が最も優れてゐた。米庵の肖像を依頼された時、崋山は日々米庵の入谷の宅へ通つて行つて、數日丹精を凝らして描き上げた。米庵は大いに喜んで潤筆料を贈らうとした處が崋山は固辭して受けなかつた。

「それでは困る、僕は書を揮毫して人から潤筆料を取つてゐる。貴下は畫家だから、畫を描いて畫料を取るのに不思議はないではないか」

「成る程拙者は生活を補ふ爲めに畫を賣つて居る、併し拙者は知己の爲めに畫を描いて潤筆料を貰ふ氣は御座らん、此の儀は平にお斷り申す」

「それにしても幾日も働かせて只といふ理屈はない、ではかうして下さい、金で差し上げるのは止める代りに、僕が持つてゐる物で何でも貴下のお氣に入つた物があつたらそれを差し上げやう、どうか御遠慮なくお望み下さい」

　すると崋山は暫く考へてゐたが

「それならば改めてお願ひ申す事があります、他でもないが先生が御珍藏の鄭濟泉の畫帖、是れこそ拙者が年來渴望してゐる處の物です、若し是れを割愛して下さるならば、拙者に取つてこれ以上の幸福はありません」

「お安い事です、實はあの畫帖は、久しく僕の手許に留め置いても用を爲さないから、誰れかに進呈しやうと思つてゐた處です、あれが貴下のお益に立てば私としても滿足此の上無しです」

　米庵は直ぐ樣畫帖を取り出して贈つた。崋山は喜んで持つて歸つたが、それから毎日客がある毎に其の畫帖を出しては見せて

「米庵先生の好意で此の樣な寶物が手に入つた」と云つて喜んでゐた。

　崋山の西洋畫熱は頗る強かつた。洋畫に關する物は斷冊片紙と雖も金を惜まず買ひ集めた。當時洋畫を手に入れることは非常に困難だつた。長崎通詞の幡崎鼎といふ人などを頼んで求めたのだが、多くは銅版畫の類だつた。後に石版畫が舶來したを手に入れてから益西洋畫に心醉して、牡丹花を描いて、其の花瓣が日光を受ける所に丹色を施し、全然洋畫の暈影法を試みたりした。彼は又油繪も描いて見た。油繪で富士山を描いたりしたこともあつたが、何分彩料や筆具が備はらないので是れは半途で廢めてしまつた。

　洋畫の研究が動機となつて崋山は次第に蘭學に興味を持ち始めた。三宅藩に鈴木春山といふ蘭醫があつた。崋山は春山に依つて初めて蘭學の端緒を開いたのだつたが、次第に當時の蘭學者達と廣く交際を始めて新智識を得たのだつた。併し崋山は原書は僅かしか讀む力がなかつたので、多くは他の蘭學者に翻譯させて、それを更に彼が解釋祖述するのが常だつた。思索と洞察の力に富んでゐる崋山は、原語には通じなくても、洋學の特徴、西洋の事情、世界の大勢等に通じてゐる點に於ては他の蘭學者達の遠く及ぶ所でなくなつた。當時の蘭學者に二つの派があつた。泰西の新智識を消化して廣く世務の上に應用しやうとする者と、専ら阿蘭陀語の醫書のみを研究して他に及ばない者とがあつた。前者を山の手派と云ひ、後者を下町派と云つた。山の手派には、佐藤信淵、高野長英、小關三榮、畠井善良、鈴木春山等が居て是れに崋山が加はつてゐた。下町派は、伊東玄

坪井信道、戸塚靜海、杉田立卿なども門下だつた。崋山は親しく蘭人に就いて正則に研究したいと思つてもこれには自分の境遇が許さないので、三英、春山、長英等に、天文、地理、歴史政事、兵術等に關する書籍を飜譯させて、これを聞いては書き、書いては聞きして祖述した。崋山の解釋が餘り透徹明緻なのには三人の者も常に驚嘆してゐた。後には崋山も原書を讀むやうになつて、佛蘭西で出たポーランド滅亡史の如きは悉皆謄寫してしまつた。

崋山は隱然山の手派の首領として目されてゐた。彼は長英等と謀つて尚齒會といふものを設けた。紀藩の遠藤勝助、水藩の立原任太郎等の名士が續々加盟して來た。崋山が推されて會長となつた。尚齒會の表面の趣旨は、泰西の地理歴史を研究することにあつたけれども、事實會合の席で重大な問題となるのは、海防の事や、幕府の政治向きの事柄が多かつた。世間では此の會の事を尚齒會と云はずに、蠻社と呼んでゐた。

文政七年九月、父の市郎兵衞は病が俄かに革つて、つひに死んでしまつた。崋山の悲嘆は云はふ様もなかつた。彼は自分で紙筆を執り、遺骸に對ひ、泪ながらに父の遺像を寫したのだつた。そして師佐藤一齋の著はした葬祭篇に法つて、嚴に儒家の葬禮を行ひ菩提寺の小石川善雄寺へ葬つた。其の後彼は自身で寫した父の像を[illegible]して、[illegible]着けて、用のない時は常に着用してゐた。

崋山は父の遺誡を掲示して家務を精勵した。父の歿後は、母に對する孝養を何よりも大切にしてゐた。若い時から永い年月苦労をし續けて來た母に對して、せめて老後の餘生だけでも安樂に過ごさせてやり度いといふのが登の唯一の願ひだつた。お縫は勝氣で怒りつぽい女だつた。登は日々出勤しやうとする矢先でも、母の顏色がふだんと異つてゐるのを見ると、袴を着けた儘默つて座つてゐて動かなかつた。

「登は何故出勤しないのか」と母が尋ねると、

「母上の御機嫌が麗はしくならぬ間は、登は外出するわけには參りません」

と崋山は答へるのだつた。そして母の顏に笑ひが現はれるのを見ると、彼は初めて安心して出勤するのだつた。

文政九年、崋山は取次役を命ぜられた。其の時藩主が一ツ橋の御門を預かつてゐたので、崋山は更に番頭を命ぜられた。公務が頗る多忙だつたにも係はらず、彼は其の頃から殿木の松崎慊堂の塾に出入して、頻りに儒道の研究をした。

七

田原藩主三宅備後守康明には男の子がなかつた。然るに近年重病で再び起つ見込みがなくなつたので、當然繼嗣の問題が起きて來た。康明には一人の弟があつて友信と云つた。だから無論友信を順養子として三宅家を繼がせるのが當然の順序だつた。處が重役の間には、友信が多病であるといふ理由で、他家から繼嗣を迎へやうとする意見を持つてゐる者があつた。其の事が表沙汰になつたので崋山は默してはゐられなかつた。

「三宅氏は假令一萬二千石の小藩とは云へ、南朝の忠臣備後三郎高徳の後裔である、然るに今日賄を設けて、名聲ある血統を斷絶せしむるのは、臣として君に忠なる所以でない、當然鋼藏君（友信）を順養子に立てまゐらすべきである」

といふのが、崋山を初め正論派の唱へる議論だつた。崋山は同志を募つて連名で一篇の意見書を老臣の手許へ差し出したが、其の裏面にはいろんな事情が纏綿してゐるので、容易に決定しなかつた。文政十年の春友信は田原へ赴いた。崋山は隨行して數十日留まつてゐた。其の間に彼は百方盡力して老臣の意見を飜へさせやうと努めたが效が無かつた。最後の評定の席で、他家から養子を迎へやうといふ意見を有つてゐる者が大多數で勝利を得てしまつた。併し、其の賢友信を斥けることは人々の本意ではなかつた。事變に至つた所以は、當時三宅家の財政が極度の難關に陷つて、補充の途が無い處から、大藩の次男を持參金附きで養子に迎へて、一時主家の財政を彌縫しやうとする窮策に過ぎなかつた。

「財政の疲弊を救ふ爲めならば、冗費を省き、儉約を守つて恢復の途を講ずるがよい。自分は未だ嘗て借金の爲めに大名の家が斷絶した話は聞いたことがない。そんな事の爲めに正統の鋼嗣君を廢して、他家から繼嗣を迎へるなどといふことは忍びない事である」

と崋山は熱心に主張したけれども、遂に彼の意見は通らなかつた。

崋山は怏々として心中平かでゐられなかつた。彼は江戸へ歸つて後は全く沈默してしまつた。其の頃から彼は朝夕酒を飲んでいつでも醉つてゐた。酒を飲んでも不平は拂へなかつた。

或る日藩の家老村松六郎右衛門が、田原へ歸るに臨んで登を訪れて、畫を需めた。太郎右衛門は養子派の頭目だつた。登は筆を執る氣がなかつた、と云つて斷ることも出來なかつた。彼は前日描いた梅に

「世上群葩醉暖風　江頭唯見獨醒公
誰憐一樹寒霜後　直同正兼松柏同」

と書いて贈つた。

文政十年七月藩主山内豊に差出した。老侯達は兼ての計畫通り、友信を隠居させて、姫路城主酒井忠實の六男を迎へて之宅家を繼がせた。それは土佐守康直と云つた。併し康直は至つて賢明の質だつた。彼は友信の爲めに巣鴨に別邸を築いて、其の住居に充て、老侯ととなへて崇敬して措かなかつた。それよりも更に人々の意表に出た事は、崋山を抜擢して側用人とし、併せて友信の傅を兼ねさせたことだつた。崋山が極力養子に反對した一人であることは勿論康直も知つてゐたが、康直は却つて登の忠直を愛し、且つは名聲天下に普ねき崋山の才學を重用しやうとしたのだつた。登は一ケ月の中六日は巣鴨へ出仕すべしといふ御沙汰を蒙つた。彼は謹んで受けて、忠實に勤務を果してゐた。或る人が崋山に向つて「二君に仕へるのは定めて苦勞であらう」と云つた。其の言葉には幾分嘲笑的の意味が含まれてゐた。すると崋山は言下に

「一心以て百君に事ふべし、二心以て一君に事ふべからずである」と答へた。

友信もまた明敏の資であつた。彼は登の言ふことなれば何でもそむかなかつた。友信には正妻はなかつたが、侍女は三人召し使つてゐた。崋山は友信に勸めて其の中の二人に暇を出させ、一人だけを殘させた。それから彼は末太に學問を勸めた。

友信の生母は、お銀と云つて、もとは大番頭の[illegible]衛門の娘であつたが、[illegible]の侍女となつて友信を産むと間もなく大奥御乳母につき御暇を出て、里方へ下つた。其の消息は判らなかつた。

或る時崋山は友信に向つて言つた。

「御前には御生母の事を御存じで御座いませうな」

「顔は覺えて居らぬが、人から聞いて承知して居る」

「御生母様を戀しう思し召されはなされませぬか」

「折り〳〵戀しう思ふのぢや、生みの母の顔は見度いわ」

「お道理で御座ります。就きましては登からお勸め申し上げますが、御生母様を當お館へお引取り遊ばしては如何で御座ります」

友信は少し躊躇して

「それはよいが、きつう下賤な者ではないか」

「御前をお生み申した方で御座ります、下賤なるべき筈は御座りませぬ」登の聲には力があつた「人として親を奉ずる心がなくば、畜類と變りはありませぬ、御前の御父君に對する御孝心には御側の者皆感じ入つて御座りました。それに何御生母への御孝養をお盡しにならぬでは、憚り乍ら人倫の道に缺くるかと思はれます」

友信は泪ぐんで

「もう言ふな、予が悪るかつた。そちに任せるによつて、よきに取り計らつてくれよ」

其の後登は此の事を心に掛けてゐた。併し、公務多端でよい機會がなかつたが、秋になつてから數日休暇を得たので、同藩の高木梧庵を誘つて厚木まで旅行することになつた。江戸を發つたのが九月二十日のことだつた。

途中二泊して、早川村の近くの大塚といふ處へ着いて幾右衛門の事を尋ねると、幾右衛門は酒に醉つて川へはまつて死んだといふはなしだつた、其の娘はと云ふと、小園といふ處に住まつて、清藏といふ百姓の女房になつてゐることが分つた。

柏ケ谷といふ處を通つた。雨降り揚句で道が難儀だつた。戸數がわづかに四五軒並んでゐた。たとへば古寺の蕭々たるありさまにも似てゐた。日なたに席を敷いて脊中をあぶりながらうづくまつてゐる翁があつた。そこでもう一遍此の老爺について幾右衛門の事を尋ねると、老爺は初めのうちはけうとい顏をして返事もしなかつたが、やがて喘息で咳き入り乍ら、

早川といふ處は、此の細道から入つて行くと村家がある。又行けば川がある、それが早川だ、其の邊で幾右衛門とお尋ねになれば、名代の酒好きの老爺で知らぬ人はありませぬ、酒は好きだが、川へはまつて死んだといふのは嘘でござる。齢は八十にもなりませうがまだ達者で暮してゐる、娘は四人あつて、二人は江戸へ出て居ります、姉は早くから江戸へ出て、大名奉公をして、故鄕へ花を飾つて歸つたが、間もなく其の母親が死んで、女ばかりの家だからといふので、姉は小園の清藏といふ者の處へ緣付き、清藏の弟の長右衛門といふ者を幾右衛門の子に貰つて二女とめあはせて其の家を續ぎました。幾右衛門も清藏も誠に貧乏には暮して居るが、正直な人物で、殊に清藏は他村迄も行つて人の世話をして働くといふ性だから、暮しも思ふやうに參りますまい。併し清藏の家は村中での舊家でござる。先祖は大川靫負と申して、北條の家臣でも御座りませう。其の前から此の村には篠吉某といふ昔は大層な武士であつた人が、世をさけて此の村へ來て住んで居た。大川はこの篠吉を頼つて來て共々に此の村に住むことになつた。やがて早川村の長泉寺といふ寺を開いて、名高い豪農でござりましたさうな。小園では草分で、紋は軍配團扇でござります――と事こまかに話して吳れた。

幾右衛門が死なゝかつた事と、娘の行方が確かになつたので、崋山も梧庵も勇み立つて、教へられた細道をはいつて行くと、誠に世を離れた山里で、木ぐさの匂ひばかりが高く、冷氣

は畦に迫つた。[illegible]に[illegible]、代えた
く蜂、[illegible]、すべてが花と咲つた光景に華山は何となく
嬉しくなつた。村落の中程に男の童が群がつて遊んでゐた。子
供に向つて幾右衛門と清蔵の家は何處かと尋ねると、幾右衛門
よりも清蔵の家の方が近いと言つた。では清蔵の家を教へてく
れよ」と言つて小供に錢を呉れて案内をさせた。道の傍らに地
藏堂があつた。前を通りすぎて行くと、栗のいがのやうな頭を
した童が驚いたやうな顏をして立つてゐた。其時案内して行く
童が、栗のいがを指さして

「これが清蔵さん處の子だよ」と言つた。

登がよく見ると、鼻のあたりから眉毛の間が紛れもないお銀
の俤である。

「これ／＼、お前の家は何處ぢや」

と其の童に尋ねると、童は返事もせずに駈け出して行つた。
二人は其の跡からついて行つた。大きな母屋で、便所と木小屋
が左右に並んで、栗を一面に干して、犬と鷄が守つてゐた。椽
の側で訪れると、頭に手拭を冠つた年とつた女が出て來て

「これは／＼、何れのお武家様で御座りますか」と恐る／＼言
つた。

登は、此の老婆はお銀の姑だらうと思つた。が考へて見れば、
[illegible]
いつまでも[illegible]で居[illegible]はない[illegible]
きもつてとみかうみすると、耳の下に大きな[illegible]に
ついた。紛れもないお銀であつた。

「拙者は子供の時分お前様に大變可愛がつて戴いた者です、今
日は其の御恩返しをしやうと思つて、原木迄行く道を遠廻りし
てお尋ね致した。私の面差しを御覧になつたらお分りになるで
せう」と登は言つた。

「滅相な事を仰しやります、此のばゞは左様な事は身に覺えが
御座りませぬ、それは屹度人違ひで御座りませう」

「否々人違ひではありません ではお身様の名は何と云はれる」

「町と申します」

「昔の名は」

「矢張り町で御座ります」

それでは矢張り人違ひだつたのかと登は思つた。が、如何に
しても疣が證據である。

「若しや、お銀と申された事はありませんか」

すると老婆は駭いて

「昔江戸に居りました頃、さう呼ばれた事も御座りました、そ
れでは貴君様は麹町から御越しで御座りますか。これは飛んだ

失禮を申しました、兎に角、奥へお入り下さいませ」

と奥の間へ通したが、何處も板敷きで疊がない。花莚を敷いて座を設け、さて手拭を取りすてたのを見ると、紛ふかたもない其の人である。が餘りと云へば淺間しい變り樣である。お銀は涙にむせぶばかりである。登は、彼女が其の昔裲襠（かいどり）を着て御殿勤めをしてゐた頃の子供心にも美しいものに思はれた其の面影を眼に浮かべながら、人間といふものがかうまで變るものかと思へば不思議といふよりも、果敢ないやうな悲哀が胸に迫つて來るのであつた。彼もおぼへず暗涙を催した。

「さてお銀樣、拙者を誰れと思し召す」

「さあ、上田滿壽美樣で御座いませうか」

「否々、上田殿は十五六年前に亡くなられました」

「では渡邊登樣で御座いませう、まあ貴下樣は何んとした立派なお侍におなりなされたことか、まるで夢のやうな心地が致します。」

それから彼女は自分の子供達を其の場へ呼んで一々客に拜をさせた。二男の幸藏といふのが十九で、夫が元と云つて十一の娘、榮次郎といふのが八歲でこれが例の栗のいが、其の下が三歲の留吉。彼女の夫は止むを得ない用事で他行してまだ戻らなかつた。其處へ長男の清吉といふ若者が原木から馬を曳いて歸つて來た。屈竟な若者で何んとも云へず素朴だつた。

登はお銀に向つて、友信公の思し召しを傳へた。するとお銀はハラ／＼と泪を流して、若君樣の御成長のお姿はわたしも一度拜み度い、それは山々なれど、今のわたしは見る影もない賤の婦、再び金殿玉樓の住ひは思ひも寄らぬこと、かつは、我が身一人が幸せになつては此の子供達が可哀さうで御座ります。若君樣の思し召しだけでもうわたしには十分過ぎた幸福、あすが日死んでも心殘りは御座りませぬ、何卒貴下樣より宜しく御傳へ下さりませ、と言つて又さめ／＼と泣くのだつた。登も此の有樣を見ては其の上云ふ言葉もなかつた。そこで彼は用意の金子を取り出して、それを三つに割り、お銀、清藏、幾右衞門の三人に友信公の名を以て與へた。家内中喜ぶこと譬へやうもなかつた。幾右衞門も來た。お銀は客にそばかきを馳走した。餘りうまくはなかつたが、崋山は二椀食した。梧庵は一椀でやめた。酒も呉れたが濁酒で喉へ通らない。吸物とうで玉子を出したがどちらも味がよくなかつた。お銀は氣の毒がつて今度は梅干しを出したが、是れは江戶の梅干より遙かにうまかつた。すると其のあとで栗餅といふ物を勸めた。が何分腹が裂けさうだつた。崋山は漸う一つ食べたが、梧庵は青い顏をして眺めてゐた。お銀は嬉しさの餘り、何かなと頻りに肝膽を碎くのだつた。

日が傾いてから暇を告げた。清吉が荷物を持つて厚木迄供をすることになつた。一家を擧げて村外れ迄送つて來た。村の人人はみんな椽先へ飛び出して來て眺めてゐた。かの武陵とはかういふ處でもあらうかと華山は思つた。

厚木へ着いたのは日暮れ頃だつた。繁華な町だつた。華山は江戸を發つ時或る人から厚木の溝呂木宗兵衛といふ金物屋の主人へ紹介狀が貰つてあつたので、其の家を尋ねて行くと立派な店だつた。椿椿が手紙を持つて先へ一人で飛び込んで行つたが、暫くしてプリ／＼しながら戻つて來た。

「一先生、馬鹿にして居りますよ、宗兵衛といふ奴は、手紙を讀んでも返事もしないのです、大方貧乏繪師が草鞋錢でもねだりに來たと思つてゐるらしいんです」

「あはゝゝゝ、左うか、では他へ行かう、清吉、何んといふ宿屋がよいかな」

「萬年屋といふ家が厚木一の旅籠屋でがんすよ」

「ぢやあ萬年屋へ行くとしやう」

宿へ着くと華山は亭主を呼んで

「拙者は三宅土佐守の家來で渡邊登と云つて、道樂に繪も描けば詩も作る妙な男ぢや。で、此の土地にわしのやうな人があつたらお招ぎをして、一と晩語り明かさうと思ふ、物を讀む人か、手を書く人か、或は俳句などでも作る人か、其れでもよいから呼んで貰ひ度い、酒と肴は拙者が持つ。拙者は小禄[illegible]だが人の合力を受けて乞食の眞似をする遊歴の先生と異つて、殿様から祿を賜はつて氣樂に世を送る人間だから、安心して呼んで來て貰ひ度い」

と眞面目な顔をして言つた。椿椿はクス／＼笑つてゐた。亭主は華山の立派な風采を見たゞけで安心して、方々へ觸れ廻つた。そこで、齋藤昨非といふ手習師匠、醫者の唐澤蘭齋、提燈屋の内田屋佐吉と云つて長唄の上手、日傘屋常藏これは三味線ひき、なんどの人々が集まつて來た。酒が始まつた。其處へ小商の清藏が喘ぎ／＼駆けつけて來た。宿の小者が菓子を堆く盆に盛つて「是れは小商の清藏といふお人からお客様へ差し上げてくれと申されました」と言ふ後から清藏は人々の間へ來て畏まつて、膝頭を丸出しにした儀徹しく禮拜した。清藏は今日荻村といふ處の叔母が大病なので行つて居たのだが、登が訪ねて來た事を歸るとお銀が話したので、草鞋も解かず其の儘走り出して、道で悴の清吉に逢つた。

「お客様は厚木に御座らつしやるかや」と父が尋ねると、

「とゝ様、早く走つて行かつしやれ、おらは今迄お酒を戴いて、これこの通り足がきまらぬ程たべ醉つて歸る處ぢや、早く

早く」

と悴にせき立てられて、夢中で駆けて参りました、と喘ぎ喘ぎ話すのだが、其の聲は鐘のやうに大きかつた。四角な赫黒い顔、鰐口で、眉は魚尾、鬚は栗毛、起ち居は蝦蟆に似てゐる、傲然たる村丈夫である。崋山は一見して清蔵が好きになつてしまつた。

「それはよく来て呉れた、兎に角皆さんと一緒に飲んでお呉れ、わしは大分酔つてるから、話しは今夜寝てからにしやう」

と崋山が言ふと清蔵は大喜びで、みんなの後ろの方へうづくまつてガブ／＼飲んだ。月楽屋常蔵と、蘭斎の娘で十二歳になるのが三味線を弾いて、佐吉が長唄をうたつた。梧庵と蘭斎が踊つた。崋山も尻舞ひをやつた。人々は笑つた。しまひに崋山は酔ひ潰れて其の場へ寝てしまつた。

三日ばかり厚木に逗留した。其の間に崋山は附近の風景を尋ねたり、人に会つたりした。お銀の問題はそれきりになつた。彼女は決して不幸ではなく寧ろ幸福な境涯であることが分つて崋山は安心した。彼は厚木八景を描いて清蔵の家へ贈つた。

八

新藩主土佐守康直が崋山を信任することは頗る厚かつた。彼の献言で容れられないといふ事はなかつた。康直は一男一女をまうけた。巣鴨の友信にも男の子が一人出来た。それを信太郎君と言つた。康直の意中では、女子は他家へ嫁せしめ、男子を以て世継にしやうと考へてゐた。で或る時内々で重役に其の事を下問した。併し一人として可否を言ふ者はなかつた。崋山は其の事を聞くと直ぐ様伺候して、世子には巣鴨の信太郎君を引き取つて立てゝ、それへ当家の姫君を配するのが道であると言つて憚る所なく献言した。

「巣鴨の御隠居様は、先殿の御舎弟で入らせられ、当然当お家を相続なさるべきお方で御座ります、それにも拘はらず御病気の為め空しく退隠閑散の身とおなり遊ばしました、されば当家の正統といふべきは此の君を措いて他には御座りません、恐れ乍ら我君は他姓より入られて跡を襲がせられたおん方、今若し若君を御世継ぎに立てゝ、他家の姫君を迎へさせられましたならば、南朝の遺臣たる当家の血統も遂に断絶するに至るで御座りませう、祖宗の血統を大切と思し召さば、何卒信太郎様を御引取りの上、姫君を御配せ下さりますする様、左様になされますならば、遠くは御先祖の霊魂を慰め、近くは一家中の人心を帰嚮せしめる事ができるで御座りませう、此の儀切に御許しが願はしう存じまする。もし、登が申し上げた事が、御意に叶ひま

せぬ時は、直々城門を叩いて家老を起こさせた上、追き度う行にしまする」

と崋山は死を決して苦諫した。併し、康直は賢明だつた。

「登、よく予を諫めて呉れた、其方の申す通り、釧太郎を引取つて世継ぎにするから安心致せ」と康直は機嫌よく言つた。

崋山は平伏してたゞ有難涙にむせぶのだつた。

文政十二年八月、崋山は藩主から、三宅家の家譜を撰集すべき内命を受けた。翌天保元年には其の材料蒐集の爲め、三宅家の上祖康貞時代の舊領地である武州幡羅郡瓺尻に赴いて、地勢、風俗、舊跡、口碑、傳説等を調査し、三卷の著述をして、訪瓺録と題して康直に獻じた。

天保二年十月には休暇を得たので、其の期間を利用して毛武地方に旅行した。それは、妹のお元が、桐生の絹商人岩本茂兵衛といふ者の許へ嫁してゐるので、久々で其の妹に逢はふといふのが主なる目的だつた。昔は澤山あつた弟妹も今は誠に乏しくなつてしまつた。板橋の寺へ貰はれて行つた次男は僧となつて定意と云つたが二十五で死んでしまつた。芝の高松寺へ小僧奉公に遣られた三男の喜平次は、其の後堀田某といふ旗本の養子となつたが是れも早世してしまつた、五男と季女も幼少で死んでしまつた。現在では殘つてゐる同胞と云つては、四男助右衛門と次女のおもだけだつた。崋山は、若死をした弟妹達の事を思ひ出す度びに悲痛な氣持がした。其の弟妹達は、一人の總領の崋山を生かす爲めにみんな犠牲になつて死んだやうなものだつた。あの長かつた家庭の貧困時代に、弟妹達が食べるものも着るものもなく捨てられた雛鳥のやうに固まり合つて堪へてゐたあの姿を思ひ出すと、彼の眼には知らず知らず涙が湧いて來た。

茂兵衛夫婦は喜んで、心を盡して崋山を歡待した。崋山は數日此の地方を見物した。歸つて、彼は毛武遊記といふ一篇の紀行文を書いた。

天保三年五月崋山は家老末席に列せられた、食祿百石別に役料二十石を賜はつた。同時に幕府の海防事務官に補せられた。崋山は四十歳だつた。翌年春彼は作譜の用件を帶びて田原へ赴き、領内の各所を巡視して岡崎の城下へ出ると、其處で江戸表からの急使に接し一旦田原へ引返した上、馬に騎つて江戸へ歸つた。

彼の留守中江戸では大事件が起きてゐたのだつた、一體田原藩といふ土地は、三州渥美半島で、外は遠州灘に面し、内に入海をかゝえて、領民の大半が漁業に依つて生活してゐる土地だつた。處が、此の海邊の領民の間には久しい間惡い習慣があ

た。それは名代の遠州灘で難船した諸國の商船の貨物が漂着する毎に隱匿してしまふのだつた。大阪、尾州、紀州邊りの商人が年々それが爲めに蒙る損害は尠くなかつた。すると今度或る者が自家の利益の爲めに其の不正の事實を訐いて、先方の商人を煽動して事を醸し、遂に紀州家の名によつて幕府へ訴へ出るに及んだ。田原藩の漁民の主立つた者數名が召し捕られて江戶表へ差立てられた。事態は容易ならぬ形勢となつた。三宅藩の重役達は周章爲す處を知らず、評議の結果、崋山を呼び寄せて事件を穩便に解決せしめるやう盡力させることになつたのだつた。崋山は一身に替へて此の事件を引き受けることになつた。併し、曲は飽く迄も我れにあつた。だから正々堂々と爭ふ餘地はなかつた、殘されてゐる手段は裏面の運動のみである、そこで彼は平常書畫の道に依つて交りのある權門勢家を訪ふてひたすら憐察を乞ひ、或ひは知友の間を奔走したりして、約三ケ月の間寢食を忘れて此の事にのみ盡力したので、到頭其の効が現はれて、さしも喧しかつた事件も結局僅かの內濟金で事濟みになり、漁民共は釋放された。一家中の者は漸く安堵の思ひをした。領內の漁民達は喜びの餘り、村役人の手で醵金して金八十兩の金を持つて崋山の所へ禮に來た。崋山は勿論それを受けなかつた。

「自分は君命を奉じて職分を盡したばかりだ、領民から謝受ける道理はない」

併し漁民達は、一同の志だから是非納めてくれと言つた。それでは止むを得ないと言つて一旦受納した後崋山は、是れを積み置いて、後年不漁の時取り出して賑恤の用にするやうにと言つて、其の儘大庄屋の手へ預けてしまつた。

崋山が、田原藩の家老として爲し遂げた功績は此の他にも少くなかつた。天保四年九月、幕府は三州渥美郡田原の沿岸に新田を開拓すべき旨を以て、勘定所の役人が實地見聞の爲め出張して來た。そも〱此の入海に沿うてゐる今川村はじめ五ケ村の民は、漁業、製鹽、採藻などすべて海產物に依つて生活をしてゐる者共で、藩としては彼等から雜稅を徵收するといふ利益があつた。殊に其の海岸は田原藩の重要なる要害地で、何れから見ても新田開墾の事業は、藩內の者にとつて容易ならぬ損害となるのだつた。そこで、是れに對して不平を唱へない者はない有樣だつたが、誰れしも幕府の威勢を畏れて敢て爭はふとするものはなかつた。此の時も崋山は敢然として一藩の主張を貫かうと決心して、翌年三月田原侯から幕府へ差出すべき開墾廢止の願書を起草して、老中及び勘定奉行等へ差出した。處が、九月になつて右の願書を返戾されると共に、開墾の事は評議止

みになつた旨が達せられた。

　天保四年といふ年は、春から夏へかけて天候が頗る不順で、晴雨定め難く、寒冷が非常に早く襲つて來た。果して其の年は米穀不作で、殊に奥羽地方は大飢饉となつて、米價は非常に騰貴し、一石金二兩、やゝもすれば二兩二分に昇つた。そこで米商は逸早く買ひ占めをして米を賣らなくなつた爲め、益騰貴する一方で、遂に一兩に四斗一二升の相場を現はした。國々では、五穀が盡きて草の根を食ひ、家畜を屠り、餓死するものが至る處にあつた。田原藩内は幸ひさしたる被害はなかつたが、崋山は前途を憂慮して、藩民を戒むる布令を起草して、藩主の名を以て これを領内に布告した。彼は其の年或る豪商に諭して米數百俵を購入させて萬一に備へた。天保六年に至つて、彼は更に藩主に請うて、庶民萬一の救濟に應ぜんが爲めに米穀を貯藏しておく「お救ひ倉」を造ることを唱導した。一藩の人々は崋山の赤誠と藩主の仁慈とに感激して、百姓、町人、神官、僧侶、山伏に至るまで集まつて來て、材木を獻ずるものもあれば、土石を運ぶ者もあり、鋸鉋を用ゐ、鋤鍬を執り、各々分に應じて力を盡したので、日ならずして倉廩は落成した。藩主はみづから筆を執つて扁額に「報民倉」の三字を書いた。そこで崋山は率先して、繪畫の潤筆料を以て購入した處の米數十俵を納めたので、士民爭つて[illegible]めし、倉は早くも[illegible]として滿たされてしまつた。

　天保七年は春から霖雨が降り續いて少しも晴天を見なかつた。夏になつても冷氣勝ちで、炎暑が更に[illegible]なかつた。八月になると、暴風雨が續け樣に襲來した。あらゆる人々が皆暗い氣持になつた。凶作は目前に迫つてゐた、幕府では屢々布令を發して米價を定めたが、之れに從ふ者はなかつたので、米價は昇騰して一兩に三斗五六升になつた。果して國中未曾有の飢饉に襲はれた、翌天保八年の春になると、菜色野に滿ち、餓莩道に横はり、老幼飢えに叫び、見るも無殘の光景を現出した。其の年田原藩主は丁度在國だつた。彼は此の慘狀に沈んでゐる領民を救ふには到底崋山を措いて外にはないと思つたので、急に登を召し寄せて救荒の策を講じさせやうとした。使者が江戸に立つた。處が折惡しく崋山は重病の床についてゐた、彼は自身の信用してゐるところの用人眞木重郎兵衛を代理にして田原へ急行させた。彼の病氣は危篤の狀態だつた。其の中で彼は書を上つて救荒の計策を述べやうとしたが、手が慄えて筆が運べなかつた。病氣が少し怠つて來ると、彼は友人の農政學者である佐藤信淵や、紀州藩の遠藤勝助等に諜つて、救荒に肝要な書を借り入れ、人に之れを寫させて、藩の救荒に從事する

つて參考にさせたり、或ひは自身で筆を執つて凶荒心得書を起草したりなどした、藩主康直もまたよく臣下の謀を容れて、役人を督勵して日々領分を巡檢して、窮民を訪ね、疾病を施療し、濟廩を開いて焚き出しをするなど、心を盡して救荒の政治を行つたので、天下到る處秋風吹きすさみ、慘話悲報を一日として聞かない日はない中に、田原領内では一人として餓死した者はなかつた。此の年の秋康直は江戸へ參勤すべき處であつたが、荒凶善後策の爲め在國を請ふて留つてゐた。翌天保九年八月三宅土佐守は、救荒の手當の宜しかつた事に依つて特に幕府から褒詞を賜はつた。

　崋山は一藩の尊敬の的となつた、また天下の有志の輿望も崋山に歸せんとする有様だつた。天保八年には世子伯太郎の師範役を命ぜられ、讀書と習字を教へた。かうして彼の聲望は隆々として登つて行つたけれども、其の年の七月彼の家庭は大きな不幸に遭遇した。それは崋山の末弟五郎の病死だつた。五郎は如山と號し、幼より書畫をよくして殆んど崋山の衣鉢を傳へるものがあつた。崋山は心中私かに、五郎を順養子にして家督を讓り、自身は田原の藩籍を脱して一浪人となり、四十年來縕畜せる抱負を天下に試みようと考へてゐたのだつたが、五郎の死に遭つた爲めに彼の野心は立ち消えにされてしまつた。

九

　崋山は偉大な體格を有つてゐた。顔も長く、肉付がふつくりしてゐた。鼻は高く、眼は細長く切れて、慈愛の光に滿ちてゐた、常に長刀を帶び、短袴を着して、市中を濶歩した。其の風采は武骨稜々として、誰れが見ても一個の劍客としか見えなかつた。

　彼は平常溫良恭謙の人だつたけれど、而も非常な威嚴を具へてゐた。誰れでも、崋山と對談してゐると大磐石で頭を壓へられるやうな氣持がすると云つた。彼はどんな場合でも悠然としてゐて少しも慌てるといふことはなかつた。或る年の夏、彼は藩主の客筵に侍してゐた。時しも俄かに大雷暴雨が到つて、轟々として耳を貫き家を倒さんばかりだつた、其の光景が凄まじかつたので、一座の人々は恐慌度を失つてしまつた。其の中で崋山は獨り泰然として座を起たずに、懷中から例の小冊子を取り出して、其の場の有様を面白く寫生して後で衆客に示して興を添へた。

　相州厚木に彦八といふ俠客があつた。性質素朴小兒の如くで、不義を惡むこと甚だしく、よく人の世話をするので厚木へ行くものは誰れでも此の彦八を訪ねて行つた。初對面の時、相

[illegible]するのが彼の手腕だつた。崋山が其の土地へ遊んだ時、彦八の方から訪ねて来た。さしも磊落な彦八も崋山の前では叩頭するばかりで少しも風格が揚らなかつた。座談中に崋山は彦八に向つて

「厚木といふ所は僅かなよい土地だが、足下は何か不足に思ふ事がありますか」

と尋ねた。彦八は俠客だけれども村長を勤めてゐた。崋山が、かう尋ねたのは、政治向きの可否を聞いて見やうと思つたからだつた。すると彦八は

「今日は今日の事をして、明日になれば明日の事を致しますばかり、私は別に思ふ事もありませんが、併し、今二萬兩の金を無利息十年賦で厚木に貸して呉れる人があれば、土地に一人の貧乏人もなく、厚木の町の富も大した物になると思ひます。だが之れは私の夢で、今の殿様は仁慈の心が少しもなく、何の彼のと云つて取り立てばかり厳しいのですから、所謂殿様でも取り替へなければ駄目で御座います」と言つた。

崋山は駭き色をなして言つた。

「成る程百姓が田を造つて居れば、領主が誰れであらうと構はぬやうなものだが、足下の言葉の如きは狗にも劣つて居ると云ふことができる。昔ある百姓が飼つてゐる狗が地面に吠えついた。[illegible]云ふことには、私の[illegible]お地頭様は私の如き人と申す事は存じませぬ故、何卒お差し下さりませと申したので、地頭も感心して、制札を賜ふことを知つて、天下あることを知らぬと云つたのと同じであると云つて、褒美の金を與へて立ち去つたといふ話がある。どうで御座る、厚木の民は此の畜生にも劣つてゐるのだらうか」

彦八は黙然として答へる言葉がなかつた。

崋山は物事に當つて非常に熱心だつた。或る時大橋訥庵と二人で或る人を訪ねて、初めて西洋の地球圖を閲覧した。崋山は殆んど感に入つてしまつた。午前から午後迄地圖と睨めくらをしてゐて、飯も食はねば茶ものまなかつた。訥庵は退屈して弱つてしまつた。

「先生もうそろ／＼いかゞでせう」

「いや、もう少々——」

到頭日が暮れてしまつて、其の家の人が燭を運んで来たのではじめて崋山は止めた。

崋山は和漢洋の學に通じてゐるほか、非常に多藝多趣味だつた。武道は就中彼が重んじてゐるものだつたが、當時諸藩の子弟で武術を習ふ者が、専ら直心流と云つて所謂形剣術の作

するに止どまつて實用に適しない觀があつた。彼は之れを憂ひて其の改革を圖つて、神道無念流の劍客杉山大助、齋藤彌九郎の兩人を採用して、田原藩の子弟に指南をさせた。それがために一時兩派の間に軋轢があつたけれども、忽ちにして藩の武風を一變することが出來た。藩中の者が武器を買ひ求めたり修繕をしたりする場合にも、多くは外觀を飾つて實用に適せぬ惡弊があつた。彼はどうかしてそれを矯正したいと考へてゐたがよい機會がなかつた。すると或る時市中を通行してゐて、とある骨董屋の店に、非常に古くて血痕を留めてゐる甲冑が飾つてあるのを發見して、どういふ由緒の物かと尋ねて見ると、關ケ原の遺物だと骨董屋が答へた。崋山は喜んで直ぐに買ひ取つて、常に座敷の床へ飾つて置いて、藩の子弟達が來る毎に必ず其の製造が實用に適してゐることを丁寧に說明して聞かせるのだつた。

彼の學才はあらゆる方面に應用された。或る時藩の用人某が崋山を訪ねて、藩の財政の事に就いて質問した。

「我が田原藩は、勝手向不如意の處へ、借金が夥しく、利息は年毎に高み、其の上外では公用の費途が多く、內には家中の扶助から國元雜用、江戶屋敷諸入費、道中參勤の入用などで、收納では迚も十分の一にも足りません、そこで年々借金ばかりで繰り廻してゐるから、富國などと申すは覺束なこと、可成程度の御勝手にさへなることは百年の後でも覺束ないと考へます、之れに就いて先生の御存意は如何であるか承はり度い」

「私にも別に存意と申してはありません」

と崋山は答へた。すると某は失望の體で

「それでは迚も可成りにもなる見込みはありませんのですか」

「いや、決して左樣ではない、可成りは勿論、富國にもなれないといふことはありますまい」

「左樣ならば、先生に於て御存意無しとは申されますまい、是非承はり度う存じます」

そこで崋山は徐ろに口を開いて

「さればです、存念といふ程のことでもありませんが、四斗樽を水桶にするには、四斗樽の水で足りますでせう。然るに此の桶に穴が澤山あつて、洩れ水が多い時には、幾ら水を入れても、穴を塞がぬ間は、入れた甲斐が無い事は誰れでも知つた事であります。其の誰れしも知つて居る通りに致す事が富國の基本であらうと私は考へる。處が、其の誰れでも知つてゐる事をしないで、只水を入れることばかりに骨を折つて居ると、益々穴が大きくなるばかりで、終ひには水が桶に滿ちるといふ時は無くなるでせう。だから、目下の處穴を塞ぐ事ばかりを仕事にして、

しい蔵書や書畫を調査してゐる處へ、或る人が遣つて來て、崋山に向つて、

「折角先生が積年の御苦心に依つてお蒐めになられた書畫であるから、少しは家にも殘して子孫にお傳へになつては如何ですか」と言ふと、崋山は

「否、此の書畫は、一枚々々僕が燈前の困苦の餘りに出たものではあるが、それも皆主君の恩澤であるから、私の物で、私の物でない。聊か報恩の心持で今度献上しやうと思ふのです。もし私の子孫に讀書の志のある者があれば、私の苦學に倣つて、自分の力で蒐めて讀めばよい。子孫の前途といふ事も測り知ることができない、保存の力の無い者があつたら、私が多年の辛勞も水泡に歸してしまふわけだ、むしろ公の文庫に納めて僕同樣貧困の者に貸し與へて讀ませる方が、後進の一助ともなつて、私の意志に適つてゐるのだ」と答へた。

崋山は、何人に對しても常に赤誠を以てした。だから彼の云ふ言葉には何時でも眞情が溢れてゐた。初對面の時には威厭を易に人に下らなかつた。長英は文化元年の生れで、崋山に比べると十一年下だつた。剛腹無類、炯々たる眼識を以て常に人を見下してゐた隼のやうな其の高野長英ですらも、崋山に對しては眞の弟のやうな態度で悦服してゐた。或る時長英は崋山を評して

「余は生れて三十六歳、幾百千人に交つたが、未だ崋山程の大人物を見たことはない」と言つた。

崋山は人と交るのに決して墻壁を設けなかつた。訪ねて來る者があれば何人でも慇懃に迎へて、胸襟を披いて談笑した。だから彼の處へは、武人文客は勿論のこと、神官僧侶、百姓町人、其の他あらゆる階級の者が訪ねて行くので、門前常に市をなしてゐたけれども、彼は少しも倦怠の色なく親切に應接懇談した。

彼はいつでも貧困な書生を養つて、自家の窮乏は少しも意に介しなかつた。劍客金子武四郎の如きはいつも崋山の家に居候をしてゐた。門人や食客に對してもまことに寛大だつた。すこ

或る門人が彼の家に寄食してゐたが、此の男は大酒の癖があつたので師匠から戒められてゐたが、持つたが病でどうしても改まらなかつた。時々大醉して歸ることがあつた。或る時も酒氣芬々として歸つて來たが、定めて先生の逆鱗にふれることだらうと思へば醉ひも一時に醒める心地で、恐る〳〵前へ出て、

「先生、誠に相濟みません、又醉ひました」と言つた。

すると崋山はにつこり笑つて

「うむ、只今お歸りか」と言つたばかりだつた。

其の門人は深く後悔して、其の後は決して大酒をしなくなつた。又或る時、崋山は牡丹の大幅を描いてゐた。處が一人の門人が過つて畫幅の上へ墨をこぼしてしまつた。けれども崋山は何んにも其の過失を咎めず、笑つて再び筆を染め始めた。

さういふ風に崋山の言行は非常に道德的であつたが、同時に彼は一面に於て洒々落々たる性格の所有者だつた。明暗化柳の趣味も多分に解してゐた。品川にお竹といふ藝者があつた。崋山は大層お竹を寵愛してゐた。お竹も崋山に對しては勤め氣をはなれて眞情を見せてゐた。二人の仲は可成り世間の評判に上つてゐた。彼のさうした風流韻事の趣味は「つゞれの錦」一名傾城買眞子傳授といふ洒落本の著述となつて發揮された。それは「天保八年あたりより一とせ前なる年のひたいの卯月十九日、居續の退屈に欠伸するいとま、醉さめの冷水に筆を洗つて、よれもたのみもせぬに書す。」と記した自序の終りの文章の通りである。前に高野長英が序を書いてゐる。崋山は是れを書き上げてしまふと、品川の馴染の女郎に讀んで聞かせて處々批評をさせた。

彼は和漢の正文詩歌俳諧のほかに狂歌もやつた。蜀山人と親しく交際してゐたので其の影響を受けたのだつた。或る時中村樓で書畫會を催し、會が果てゝから、崋山、鵬齋、南畝の三人が興に乘じて吉原へ行つた。其の頃蜀山人はわけがあつて禁酒してゐた。それを承知の上で茶屋女が無理に南畝の手を握つて盃をすゝめた。

「南畝先生、そこらで一首ありさうなものですよね」と崋山が言ふと、蜀山は言下に

「我が禁酒破れ衣となりにけり繕いで下さいさして下さい」

十

崋山の畫は飽く迄も寫生に立脚してゐた。それは自然の正しい象を重んじる西洋畫の影響を多分に受けてゐるのだつた。彼は所謂風韻だけで根柢の無い空疎な畫を排斥して、何處迄も物象の眞を寫すことを以て畫の使命とした。彼よりも前既に司馬

江戸は當時の西洋畫を描いてゐた。彼の師事した文晁も種々其の長所を採つて自己の畫に應用したのだつた。それらのものを其の後を受けて出た彼は、蘭學を研究した結果として更にそれらの人々よりも數歩を進めた觀念を有つてゐた。けれども、蘭學以外に、崋山は士道の感化を最も強く蒙つてゐる人間だつた。西洋の新智識に憧憬れると同時に、東洋固有の思想、わけても武士道といふものこそ、彼が生きて行く上に於ての最大唯一の信條だつた。さういふ彼の境遇や思想は、直ちに彼を驅つて西洋畫へ走らしめることをば許さなかつた。そこで彼は支那人の中に憑據を求めて、支那の畫論を精讀した結果遂に、惲南田、王石谷に私淑して沒骨寫生の畫風を自ら大成するに至つたのだつた。南田は淸初の花鳥家で、石谷もほゞ同時代の山水畫家であつた。彼の描いた佐藤一齋、市川米庵の肖像の如きは、泰西の畫法から脫化して、頗る眞に迫つてゐた。かやうに彼は寫生を重じたけれども、しかも筆墨の末に走らず、氣韻の超然たるものがあつて、飽く迄も南宗畫の眞髓を發揮してゐるのだつた。

　崋山の大名は天下を風靡して、其の門下には秀才が雲の如く群がり集まつて來た。門人の數は百數十を以て數へた。就中有名な者が十人あつた。俗に崋山十哲と云つた。それは椿椿山、福田半香、岡本秋暉、山本琹谷、井上竹逸、平井顯齋、金子豐水、永井西山、立原杏所、[illegible]等の人々であつた。其の中でも椿山は最も傑出してゐた。花鳥を得意として、近世に於て彼に追蹤する者を見なかつた。彼は人と爲り極めて溫厚で決して人と爭はなかつた。若年の頃の彼は至つて畫が下手で、同門の者などでも彼を馬鹿にして「あれで繪かきになれるだらうか」と言つた位だつたが、併し繪が好きで熱心なことは到底他の者の及ぶ處ではなかつた。崋山は彼の何處かに見所があつたと見えて、

「否、後來名を成す者は必ず仲太だ」と言つてゐた。

　崋山は非常に瘦せてゐて、一見衣にも堪へないやうな體格だつた。それでゐて勤勉此の上もなく精勵するのだつた。彼は平山行藏に就いて長沼流の兵學を學んで、槍と馬とは印可を得た。熱心な讀書家でもあつた。其の傍ら笙を習つたり、和歌俳諧を嗜んだりした。茶事には殊に造詣が深かつた。

　彼は非常に溫厚な人だつたけれども、然し畫の依賴を受けた時に、先方の氣に合はせやうなどといふ考へは毛頭なく、自分の思ふ儘に筆を執るのだつた。上野の茶商で澤某といふ人があつたが、椿山の畫を好んで常に揮毫を依賴するのだつた。或る時も澤が絹を持つて來て、蘆雁の圖を賴んだが、其のあとで澤は門人に向つて斯う言ひ置いて歸つた。

「先生の雁はうまいことはうまいが、いつもどうも雁が肥え過ぎてゐる、併し私の口からは言ひ悪いから、今度は餘り肥えた雁を描かないやうに、貴下が側にゐてうまくやつて下さい」

正直な門人は其の通り師匠に言つてしまつた。すると椿山は

「よし、よし」と答へたが、約束の雁を描く時になると、いつもよりもつともつと肥え太らせて、てうど牡丹の花か何かのやうな雁を描き上げた。澤が絵を取りに來ると椿山はそれを渡して言つた。

「今度の蘆雁はいつより出來がよいつもりですから御覽下さい」

澤は絵を展げて見て、澁柿を甞めたやうな顏をした。

福田半香は遠州磐田郡見附の人であつた。二十歳前後の時江戸へ出て勾田臺嶺の門に入つた。臺嶺は山水を以て聞えてゐた。半香は從學一年ばかりで一旦歸省したが、家居三年、其の間鳥類の寫生に全力を注いで、日課として一日に百羽の鳥を描いたといふくらい勉强した。再遊するに及んで崋山の門に入つて教を受けるやうになつたのだつた。

半香は初めは郡名を取つて磐湖と號してゐた。處が或る年同國の掛川に遊んで、ある宴席に列した時、一人の藝者からの手紙を其處へ持つて來たが、表書きに「半香さま、まゐる」としてあつたので、半香さまとは誰れの事だらうといふので持ち廻つたが、結局それは磐湖の馴染の藝者が寄越したので、磐湖を誂つてさう書いたのであることが分つて、一同手をうつて其の艶名を囃し立つた。すると上客に松崎慊堂が居て、

「磐湖は平凡だ、半香の方が餘程妙だ」

と言つたので、それから半香と改號してしまつた。彼は山水を得意とした。殊に其の點苔に妙處があつた。彼は點苔を打つ時は、トッチリトンを唄ひ乍ら其の拍子に合はせて打つといふので評判だつた。或る人が彼に向つて

「先生はトッチリトンで點苔をお打ちになるといふがほんたうですか」と尋ねると

「否、それは音曲を知らない者の言ふ事です、トッチリトンでは拍子に乘りません、私は長唄の獅子の曲の三味線――チンチンチン、テレンツトン――あの口三味線で打つのです、緩急の具合は手と心にあるのです」

と半香が答へた。彼は音曲の才があつて、長唄をうたひ、三味線をひき、十三絃の箏曲は雲井の曲まで學んでゐた。點苔の妙處はまつたく此の拍子の緩急伸縮を應用したのだつた。

半香と岡本秋暉とは、同門とは云ひ特に親密に交はつてゐた。或る時半香が秋暉の許へ酒の切手を贈つた。秋暉は喜んで

て來たので
「時に、先日は酒券を頂戴して有難かつたが、實はあの切手の酒屋の名が讀めないので、殘念乍ら未だに君の恩惠に醉ふことが出來ずに居るやうなわけだ。一體あの酒屋は何處です」
と尋ねると、
「いや、あの酒券は、實は僕も他から貰つたのだが酒屋の名が讀めないので、君の處へ呈上したわけさ。君の眼力を借りたら何んとかなるだらうと思つたが、矢つ張り駄目なのかね」と半香は答へた。
　櫻間青崖は崋山の莫逆の友だつた。青崖は三河の人で、岡崎藩に仕へてゐた。藩士本多忠興は繪が好きで自身も幾らか習つたので、青崖を鍾愛して常に側へ呼んで繪を描かせた。世子に畫法を教授させたりした。青崖は初め片桐桐隱に學んで、山水の名手だつた。崋山でさへも「山水は青崖に及ばない」と言つたくらゐだ。それは青崖を流行らせようとする崋山の好意からでもあつた。だから崋山は山水の依頼者があるとよく青崖を推賞

酒が好きで、酒さへあれば苦情はなかつた。そして一生妻を持たずにしまつた。だが多少の家祿もあつて、これでたつた獨り暮しだのに何故さう貧乏してゐたのかといふと、彼には一人の兄があつた、兄の名は綵右衛門と云つてこれまた文雅の士で、詩書をよくしたが、子供が澤山あつて家計を支へ難い有様なので、青崖は自分の受ける俸祿を全部實家へ送つてしまふのだつた。さうして自身は食ふ物も着る物もない境涯で晏如としてゐた。
　某侯から、金と乘物を持たして青崖を迎ひに寄越した。青崖は朝から酒を飲み度くて堪まらないでゐたところへ金の顏を見たので、早速徳利屋を使にやつて何升かの酒を買つて來させて、徳利屋を相手にして飲み始めた。招待の事はとんと忘れてしまつた。一方侯の邸では來賓が既に席に滿ちたけれども青崖が見えないので、更に使を走らせて催促に遣ると、青崖はすつかり醉つぱらつてしまつて氣焔當るべからずである。
「何、繪を描きに來いつて？　青崖はペコ〳〵お辭儀なしに繪な

かせて貰ふやうな畫間繪師ではない、歸つてさう申傳へて下さい」

天子呼來不上船、自稱臣是酒中仙といつた體たらくなので、使の者も手が付けられなくて空しく歸つてしまつた。

崋山にばかりは靑崖も推服してゐた。で、後には彼を崋山の門人のやうに誤り傳へたほどだつたが、元からの友人で、少しも遠慮はなかつた。或る時も崋山が靑崖から何かの粉本を借りた儘忘れて久しく返さずに居ると、靑崖は急にそれが入用の事が出來たので、人を遣つて、手紙で催促したが、封書の表には墨黑々と「渡邊盜大夫」と書いてあつた。

一日崋山が靑崖を訪問した。が、靑崖は例に依つて嚢中無一物で、折角親友が來てくれたのにもてなすことができない。暫らく經つと靑崖は崋山に向つて恁う言つた。

「僕は一寸表迄用で來るから、どうか留守をしてゐて下さい。それから、暫時君の羽織を借して貰ひ度い」

「宜しい、行つて來たまへ」

靑崖は崋山の羽織を借りて着込んで出て行つたが、間もなく歸つて來ると、同時に酒肴が運び込まれた。

「さあ／＼、何んにもないが一つやつて戴き度い」と靑崖は言つた。

「や、是れは恐縮だね」

主客は互ひに盃を酬はせ乍ら旺んに飲んだ。やがて日暮になつたので崋山は歸らうと思つたが、羽織が無い。

「君、先刻貸して上げた羽織は何處にあるんだ」

すると靑崖はヒョコ／＼頭を下げて

「いや何んとも申し譯はない。實は、折角の御光來ゆへ、何かなと思つたが合憎錢がない。で、止むを得ず貴公の羽織を借りて、質屋へ持つて行つて、それで此の酒肴を調へたのです、それも最早飲み盡ひしてしまつたから、君の羽織は我れ／＼の腹中に納まつてゐるといふわけだ、何分惡しからず」

崋山は大笑ひをして

「左うか――、それでは君に禮を言ふ所はなかつたな。ぢやあ、今日のは僕が奢りとして置かうよ」

と言つて暇を告げた。靑崖はゴロリと横になると、肱を枕に雷のやうな鼾をあげ始めた。

崋山は常に門人に向つて、靑崖の人と爲りと、山水に於ける手腕とを推賞して

「お前達も時々靑崖に會つて談しを聽いて見るといゝ、必ず得る處があるから」と言つた。

で、椿山も折り／＼靑崖を訪ねた。靑崖は本郷に住んでゐた。椿山は大名を成して後も靑崖を訪ふことを忘れなかつた、

或る日も椿山が青崖の家へ行くと、日中だのに戸がぴつたり閉めてあるので「病氣をしてゐるのかも知れない」と思ふので、戸を敲いて

「青崖先生、青崖先生」と呼んで見た。

すると家の中から

「青崖は今日は不在です」

と答へたが、其の聲は正しく青崖だつた。すると青崖は素ツ裸で家の中に座つてゐるのだつた。邊りに着物らしい物も無かつた。椿山は「はゝあ」と氣が付いて、戸外を見ると、一枚の單衣物が洗濯して竿に掛けてある。手に觸れて見るともう乾いてゐた。やがて其の着物を竿から外して、裏へ廻ると窓の障子が破れてゐるので其の穴から抛り込んで、

「先生、是れでも御不在ですか」と椿山は言つた。

青崖は着物を取りに起たうと思つたが褌がなかつた。椿山が見てゐると思ふので彼は弱つて、傍らにあつた扇を取つて前に當て乍ら窓の側へ行つて着物を着てしまふと、忽ち大聲をあげて

「これは〳〵何方で御座る、青崖只今立ち戻りました」

十一

尚齒會は、最初は至つて少人數の同志の會合であつたが、漸く會の機運が進み〳〵蘭學に傾いて來るに從つて、會員の數も殖えて來た。もともと秘密結社のことで、會員以外の者の參加は許さなかつた。崋山は自然會長として會の牛耳を執つてゐた。

田原藩の海防事務官としての崋山は、常に其の新智識を應用して成績を擧げてゐた。彼は先づ諸外國の軍艦商船の形状や其の旗幟の圖を作つて、沿海の役所へ渡して置いた。春秋二期には幕府の許可を得て軍事の演習を行つた。農民漁民を徴集して兵卒に用ゐた。彼は夙くから熊澤蕃山に私淑して、其の說く處の兵農合一の論に推服してそれを理想としてゐたのだつた。

又、藩士村上範致を長崎へ派遣して、高島秋帆に就いて砲術を學ばせて、それを一般の藩士に傳へさせて鍛錬怠りなかつた。

かういふ風であつたから、小藩乍らも田原の武名は遠近に聞ゑて、宇和島、西條、大垣、岡崎等の諸藩から、田原へ來て教習を求めるといふ有樣だつた。

崋山は、小關三英、高野長英の兩名を聘して、主人の三宅友信に蘭學を學ばせた。田原藩には進取的の風潮が附物として生れて來た。

併し、恁ういふ程度の事柄は、崋山に取つては兒戯に類するやうな物足りなさ、歯痒さを覺えずにはゐられなかつた。彼の野心は一年一年と脹らんで行つた。二十代の時分、脱藩して長崎へ行つて繪畫の修業をしやうと思つたことがあつたが、其の時は病父の無言の諫めの爲めに目的を果すことが出來なかつた。其の頃からきざしてゐた海外の事物に對する憧憬は年一年と募つて來た。今ではゝや長崎くらゐでは滿足ができなかつた。西洋の事情が詳しく分れば分るほど、廣い世界に向つて駿足を伸ばして見度かつた。イギリスや、フランスや、ポルトガルや、さういふ國々の、發達した文物制度の有樣を想像して見ただけでも、彼は眩惑するやうな氣持になつた。ナポレオンの偉業、ポーランドの滅亡、さういつたやうな歴史上の事件なども只何んとなく彼を引き付けるのだつた。此の狹い日本の國境から一歩も踏み出さずして一生を終つてしまふことはいかにも殘念だつた。ましてや、萬二千石の小藩の家老で、百石ばかりの猫の食ひ料ほどの扶持を貰つて、人間一生を甘じるわけにはいかなかつた。さう思ふと彼は頻りに腕が鳴るのを覺えた。

「予が手は天下百世の公手、唐天竺迄も筆一本あれば公行出來申し候、ナントおしきものに無之や、嗚呼我れを憐む人椿山と足下ばかり也」

藩中隨一の崋山崇拜者である用人の眞木重郎兵衛に宛てた手紙の中へ、そんな文句を書いたりしたこともあつた。

德川幕府に對しては、識者は悉く絶望してゐた。それは因習と積弊の固まりで何等の新しい生命もなかつた。天保の飢饉のあとを受けて、水野越前守忠邦がわずかに政權を支えてゐた。將軍は奢侈淫樂を事として政務を顧みなかつた。老中以下天下の役人は、賄賂を取ることと、收斂誅求を恣にするのほかには何んの能もなかつた。三百諸侯も大部分は同じやうなものだつた。それは例へば病み衰へた老人の肉體のやうなものだつた。

さういふ國情に對して崋山は憂憤せずには居られなかつた。文政の初年イギリス船が浦賀へ來航して以來、海防を急にせざべるからずといふ議論が志士の間に喧しくなつた。海防は勿論緊要の事には相違ないが、西洋諸國を蕃夷と稱して、一概に侮蔑して、外國船と見たら直ちに打ちはらつてしまはふといふ幕府の方針は、崋山等のやうに西洋の事情に通じてゐる者の眼から見ると、哂ふべき愚論で、其の結果は反つて國家を危機に陷れるおそれがあつた。それは畢竟日本の國民が、世界といふ一番大きな存在にすら氣が付かないで居るのが原因であつた。崋山等が洋學を鼓吹するのは、其の蒙を啓かんとすることが第一の目的であり、使命であると信じてゐた。

天保九年三月和蘭甲比丹ニイマンが江戸へ來た。ニイマンはアムステルダムの生れで、今年四十一歳であつた。彼は身の丈七尺三寸、肥え太つてさながら牛のやうな男だつた。非常に讀書が好きで、食事をしながらでも、駕籠の中でも、寸隙でも、書物を手から放したことはなかつた。人に向つて彼は、江戸の町數、橋數、戸口、御城の廣狹、寺社、邸宅の事等を尋ねた。併し一人としてそれに對して滿足な答へをなし得る者はなかつた。ニイマンは笑つて

「日本の人は學問に不熱心だ」と言つた。

崋山は、高野長英、小關三英等と共にニイマンと對談して、西洋の事情を色々と尋ねた。そして其の問答をば崋山が筆を執つて書いた。彼は其の著述に「鴃舌或問」の題を冠した。

其の年のこと、英人モリソンが、本邦の漂流民七名を送つて來航し、直に江戸近海へ來つて通商互市を要求するといふ風説が盛んに傳はつた。長崎奉行久世伊賀守は、事態容易ならずと見て、閣老水野越前守へ右の趣を報告した。此の事について幕府では閣議を開いた。越前守は流石に事理に通じてゐた。彼の意見は、先年オロシアの使者レサノツトが渡來した時の例に則つて穩便に應對しやうと云ふのだつたが、評定所の衆議は全く之れと反對で

「英吉利の愚民共は、しかも本邦の[illegible]ることを[illegible]する、其の本懷は許すべからざることだ、且つ彼等は[illegible]邪宗の切支丹を奉ずるやからであるから、旁々以て近付くべき者でない。彼等が眞に通商を乞ふだけの意志であるならば、長崎へ來るのが當然である、然るに國都近い所へ船を寄せるとは已に[illegible]を失してゐる、漂流民を憐まざるわけではないが、國家の大利害には代えられない、宜しく文政年間に布かれた御法度の主旨に依つて、用捨なく大砲を以て打ち拂つてしまはふ」

と評議が一決した。越前守は再三異議を唱へたけれども彼の意見は通らなかつた。それは十月のことだつた、此の事が傳はると、川路左衛門尉、江川太郎左衛門等からも上書して、其の策の不可なることを論じたけれども採用されなかつた。

それは勿論尚齒會でも問題になつた。崋山は、いつも乍ら爲政者が無識であるため遂には社稷を危ふする機會が到來するであらうと思ふと憂憤に堪へなかつた。

翌天保十年の正月、崋山は「愼機論」の著述をした。それは一氣呵成に一と晩で書き上げたものだつた。彼は此の論文中で、日本へ來航するといふ噂の主人公モリソンの人物に就いて詳しく說明した。モリソンは英吉利能動の人で、廣東の商館にあること十六年、頗る唐山の學に通じ、五車韻府、周易通證

目、東韃錄、西域碑文、地理志等の飜譯又は著述があつて、本國に於ても重要の地位にある人である。斯かる顯名の士が來るについては必ず本國の命を帶びて十分の準備をとゝへて來るに相違ない。それを理非も問はず大砲を以て追ひ拂ふなどとは以ての外の事である――といふ事から、宇内の形勢、西洋の國情に亘つて彼は該博なる智識を傾けて論及した。そして、此の度びの如く、無謀の事を敢てせんとする時には、終に國を亡ぼすに立ち至るであらうと論じた。最後に至つて彼の筆は激して、世人の僻見を井蛙の管見と罵り、

「嗚呼今夫れ是れを在上の大臣に責めんと欲すれども、固より紈袴子弟、要路の權臣を責んめと欲すれども、嫺嫺の倖臣、唯是有心者は儒臣、儒臣亦望淺ふして大を措き小を取り、一々皆不痛不痒の世界となれり。今夫如此束手して滅を待たんか。」

と書いて筆を擱いた。

もとより世に出すべき文章ではないけれど、かうして胸懷を紙上に吐いただけでも心持がよかつた。其の儘机の抽斗に入れて置いて、同志の者が來た時にだけ出して見せた。長英が來たので

「貴公の夢物語の向うを張つて恁んな物を書いて見た一つ讀んで見てくれたまへ」

と言つて出して見せると、長英は一讀三嘆して

「あなたのには文章に力があるから、到底敵はない」と言つた

十二

幕府の目附役に鳥居耀藏といふ者があつた。耀藏は幕府の儒官林大内記衡の次男で、大學頭煌の弟だつた。彼は天保七年の大鹽平八郎の獄を斷じて以來、水野越前守の信用を得て、其の見手となつて働いてゐる人間だつた。

耀藏は、自分の役柄から云つても、また生れた家の立場から云つても、蘭學を排斥しなければならかつた。彼の父大内記が、匿名で流布されて將軍の内亂にまで入つたと云はれた長英の「夢物語」を讀んだ時の驚きは大したものだつた。彼は悴の耀藏を呼び寄せて

「こんな本を書いた奴がある、引つ捕へて首を斬つてしまへ」

と怒りにわなゝき乍ら叫んだ。

父に言はれなくても、耀藏は勿論其の用意は怠りなくしてゐた。彼は密かに閣老越前守に訴へて

「英吉利人來航の噂も、畢竟蘭學者と稱する輩が、些か外夷の事情に通じてゐるのを幸に、無實の事を捏造して、不埒の妖言を逞うし、上を惑はし、下は無智曚昧なる愚民を煽動して天下

の騷亂を促さうとする所存と覺えます、此の際一網打盡に彼等を御召捕になつて、向後一切蘭學を禁止されたならば、國家上最も宜しきかと存じます」と言つた。

越前守も幾分蘭學者を疑つてはゐたけれども、耀藏の進言を容れて直ちに其の擧に出るのも穩當でないと考へたので、その時は聞き捨てにして置いた。

天保十年正月、耀藏は、浦賀海岸を檢分して測量圖を製作すべき役を命ぜられた。當時浦賀の代官は江川太郎左衞門であつた、江川も自ら幕府に頼つて鳥居と共に其の役を勤めることになつた。が、江川と鳥居とは正反對の思想主義を有つてゐた。江川は前から崋山等と親交があつて、略々西洋の事情に通じ、西學の重んずべきを唱へてゐた。外國船來航の事に就いても、攘夷の不得策であることを建白したのだつた。かういふ立場の異つた兩者が共同の勤務に從事するのであるから、其の間頗る意志の疏通を缺いてゐた。鳥居は部下の小笠原貢藏なる者が幾分測量術の心得があるのを幸引き連れて行つて、江川には少しも相談なしで勝手に測量圖を作らせた上で、其の製圖を江川に示した。それは測量式に協はない粗濫杜撰なものだつた。江川は内心駭いたけれども其の場は默つて濟ませて、早速崋山の許へ急使を馳せ、然るべき測量家の周旋を依頼した。崋山は長英と相談して、長英の門人内田彌太郎を推薦した。江川は内田に命じて浦賀海岸の測量を洋式で詳細になさしめて、江戶へ歸つて更に崋山や長英と相談の上で製圖をして、精密な成圖を附けて幕府へ提出した。鳥居も小笠原の作つた測量圖を差し出した。其處で幕府の重臣は此の二通の測量圖を檢查したが、其の精粗深淺は勿論比較になる物ではなかつた。誰れも彼れも江川の提出した物のはふを非常に賞讚して、直ぐにそれが採用になつた。江川は大いに名聲を博した代りに、鳥居は功を江川に奪はれ面目を失したので、それを深く遺恨に思つて、江川の背後に附いてゐる崋山一派の蘭學者達に對する憎惡猜忌の念を一層强めるやうになつて、どうかして此の遺恨を霽さうと密かに時機の到來を待つてゐた。

丁度其の頃のこと、交代寄合福原内匠家來齋藤次郎兵衞、御徒士本岐道平、常州鹿島郡鳥栖村の一向宗無量寺住職順宣、深川佐賀町の蒔繪師秀三郎、其の他を合せて十人ばかりが同志となつて、伊豆南海の無人島を開墾しやうといふ計劃を進めてゐた。そして彼等は尚齒會の人々に向つて其の後援を依頼して來た。尚齒會では評議の結果、其の依頼に應じて、無人島へ出航の際には、崋山、長英の首領株を初めとして數名同行することになつた。就中崋山は此の計劃に對して非常な興味を持つてゐ

た。彼は先年伊豆の代官羽倉外記からも無人島の話を聞いたことがあつた。其の島へは常に外國船が碇泊するといふことも其の時知つたのだつた。彼は今度一行の者と共に無人島へ航行しても、其處に永く留まる考へではなかつた。自分一人は、外國船が來次第それに搭乘して外國へ行く決心だつた。彼は全く日本の國土に對しては未練は持つてゐなかつた。妻子や、殊に年老いたる母の事を考へると不孝の罪に責められて胸が痛くなるのだつたが、併し、恩愛の情にほだされて此の機會を逸しては終生の恨事だと考へた。日本の國内では最早彼のする仕事はなかつた。併しながら彼はまだ幾らでも働ける健康な體と、無限の精力を持つてゐる。此の上はたゞ國外へ脫出して、廣い自由の天地で思ふ存分活動して見度いと考へるばかりだつた。

無人島渡航の事は、誰れからとも知れず外間へ漏れてしまつた。鳥居耀藏は此の事を耳にしたので、部下の小笠原貢藏に命じて探偵させた處が、尙齒會の蘭學者が關係してゐることが分つたので、崋山一味の蘭學者共を一網打盡に滅ぼすべき好機が到來したと大いに喜んだ。彼は尙貢藏に命じて種々の劃策をめぐらしてゐた。すると爰に本丸の庭番を勤めてゐる花井虎一といふ者があつて、虎一も矢張り無人島渡航の同志の一人だつた。貢藏は其の事を探知して、虎一とは懇意の間柄だつたので、私かに彼を呼び寄せて脅迫的の言辭を弄して言つた。

「近頃蘭學者共が相謀つて私かに徒黨を結び、無人島に渡航して異國人と交易をなさう目的で、既に支度をして居る樣子、お上に於ても容易ならぬ事に思し召されて、至急彼等を召し捕つて嚴重に御吟味をなされる筈で、目下專ら御手配り中で御座る。が、實は僅かな筋から聞いた處に依ると、貴殿も其の仲間に加擔して居られるといふはなしだが、果して事實とすれば、貴殿のお身の上に取つて容易ならぬ一大事と存ずるから、日頃のよしみを以て御注告申す次第である、何事も包まずお話しなされよ」

虎一は元來臆病者でもあつた、で彼はすつかり貢藏の脅迫に乘つてしまつて同志の身に關する秘密を悉く喋つてしまつた。そしてどうかして自分だけ助けて貰ふ法はないかと言つて貢藏に嘆願するのだつた。

「實はそれに就いて貴殿に御相談致さうと思つてお呼び申したのだ。惡い事は云はないから有りの儘に訴人なさい、そして貴殿は、彼等蘭學者共の教唆に乘つて一時は同志に加はつたけれども、前非を後悔して訴人致したとなれば格別の御咎めは御座るまい。否、拙者からも鳥居殿まで内願して置くに依つて、其の結果は反つて貴殿の爲めに利益となるで御座らう、其の暁

は決して惡む量には及ばない」と貢藏は言つた。花井は一も二もなく其の氣になつて、お目付鳥居耀藏の許へ訴へて出た。

十三

天保十年五月十四日のことだつた。其の朝崋山の宅を高野長英が訪問した。すると崋山は長英に向つて

「昨日、水野越州の家來で小田切要助といふ人が僕の處へ來て、先生は近々虎の尾を踏むやうな危難に遭はれるだらうから御要心なさいと言ひ置いて言つた。近頃幕府では蘭學者を捕縛して獄に投じやうといふ內議もあるとかいふ風說、之れは足下も耳にして居られるであらうと思ふ。それに就いては例の鳥居耀藏のさしがねが働いてゐることは無論だが、聞き及ぶ所では、最近の事、天文方の澁川六藏からも蘭學取締りの建白書を出したといふはなしだ。小田切の君と云ひ、とにかく我が黨に危險が迫つてゐるらしい、どうも困つた事だ」と言つた。

長英は隼のやうな眼をギラ〳〵光らせて

「そんな風說だけは僕も聞いてゐる、が事實とすれば怪しからんはなしだ、蘭學をするのが何が惡い、我れ〳〵は國家の利益の爲めに蘭學を研究して居るのだ[illegible]いのだから仕方がない。[illegible]しても、我黨としては尋常の事柄だが、頑固な老人の耳には[illegible]說とも怪說とも思はれるだらう、何れの國何れの時代でも、進歩した學說を唱へる者は、常に其の前からも後からも迫害されるものだ。だから我れ〳〵も其の覺悟は持つてゐなければならないのだ」

「それは大きに左うだ」

「とにかく、御同樣少し要心しなければならないよ」

さう言つて話してゐる處へ、三宅家の留守居役から一通の書狀が屆いた。開いて見ると、それは町奉行大草安房守からの呼び出し狀だつた。

渡邊登儀、御尋の筋有之候に付、差添人附添、明刻安房守役所へ可罷出候也。

崋山は長英を顧みて、靜かな口調で

「高野氏、到頭參つた、かうなつては最早仕方がない、足下も氣を付けて居られえ」

長英は緊張した顏付をして、默つて首肯いて見せた。

崋山は、用人眞木重郎兵衛附添ひの下に町奉行所へ出頭した。簡單な調べがあつて直ぐ揚屋入りを命ぜられた。

同時に崋山の家に與力同心が出張して嚴重な家宅捜索を行つた。そして、數十葉の草稿と、蘭書、往復書狀等を取り交ぜて、長持一個に押收して持ち還つた。併し、役人達は、家宅捜索をする時、小藩乍らも家老の末席に列する崋山のことだから、定めて家財衣服什器の類も相應に澤山あるだらうと思つて來た處が、豈計らんや、目ぼしいものと云つては只書籍書畫の類があるばかりだつた。彼等は訝しく思つた。

「衣類等は之れ丈か」

「左様で御座います」

「さうではあるまい、いやしくも家老を勤める身分で之ればかりといふことはない、何處ぞへ隱してあるのだらう」

「決して左様な次第では御座いません、全く宅には是れ丈しか御座いませんのです」

「否々、必ず隱して居つたに違ひない、僞りを申すと爲めにならんぞ」

お絹は弱つてしまつた。しまひに考へて質屋の通帳を持つて來て

「此の通りで御座います、御覽下さい」と言つた。

役人達はそれで漸う納得して引き上げた。

崋山と前後して召し捕りになつた人々は

交寄合榊原内匠家來　齋藤次郎兵衛

道山半左衛門組下御徒士　本岐道平

常州鹿島郡鳥栖村一向宗無量寺　順宣

同　悴　順道

深川佐賀町蒔繪師　秀三郎

本石町三丁目五人組持店旅人宿　彦兵衛後見金次郎

御小人頭御目勝三郎御納戸番　花井虎一

御留居松平内匠守組與力青山儀兵衛地借町醫師　長英

の八人であつた。此の疑獄は天下の耳目を聳動した。蘭學者は一人殘らず召し捕られるといふ風說が高かつた。小關三英は、往復書類の全部を燒いて自殺を遂げた。佐藤一齋は、草稿全部を持つて下總邊へ逃れて潛伏してゐた。

崋山等の取調べは大草安房守役宅で開かれた。吟味掛りの與力は中島嘉右衛門であつた。詰問は非常に嚴重を極めた。併し崋山は、蘭學の問題に就いては

「私儀は蘭學は仕りません、只飜譯物にて吟味致したのみで御座います。其の譯は、私主人の領分が海岸で御座いますので、元文以來嚴しく仰せ出されてある御趣旨に基き、外國の事情を捜索致し、主人の顧問にも備へ度き心底にて、蘭學に依つて取調べました次第で御座ります」と答へた。

「左様なら、[illegible]に就いては[illegible]ただ聞きに其方宅へ参り、既に追々無人島へ渡航して、外国と交通を致さうと企んだ趣き、其の位にござるだ」

「一向存ぜぬ事で御座ります、本岐と申す者は、花井虎一の紹介にて去年一度私宅へ参りました、なれども左様の儀に就いては一言も話した覚えは御座いません」

無人島問題に就いては、崋山が直接関係したといふ證拠は挙らなかつた。他の人々も崋山を庇護して絶対に其の事を否認するのだつた。無人島一件の首謀格の斎藤次郎兵衛は、六十六歳の隠居の身分だつたが、剛毅な性格で意気甚だ旺んだつた。

「無人島へ渡つて未開の地を開拓致し度いといふ事は、私年来の望みで御座います、行けるものなら、今日只今でも参り度う存じて居ります」

と次郎兵衛は公判廷上で悧り気もなく公言した。

「其方渡邊登を訪問致した趣きだが、定めて無人島の事に就いて登と談合したであらう」

「否、何も話しません」

「では何んの為めに登宅へは参つたのだ」

「左様、崋山といふ人は高名な人で御座いますから、顔を見ただけでも見徳だと思つて参りました」と次郎兵衛は答へた。

[illegible]

して、[illegible]崋山と[illegible]があつた。[illegible]人[illegible]つてゐて、[illegible]してゐる一人だつた。[illegible]島は今度の調べでは[illegible]した。[illegible]も崋山に同情してゐたけれども、上からの命令に依つて[illegible]してゐる[illegible]だけにどうすることも出来なかつた。

「登、其方は何人からか賄賂を受けてゐる覚えはないか」と[illegible]房守は尋ねた。

「私事は、他人に賄賂を施しませんが代りに、賄賂を受けるやうな事を致した覚えは御座りません」と崋山は答へた。

家宅捜索に赴いた役人は、崋山の居室の書箱にしてあつた紺表紙の慎機論の一節を剥ぎ取つて押収して来た。それには

思而鎖二其精神一、衰焉殊二其不為一、夫以英國之[illegible]二攻之者非二一途一、易動之哉而内外受二敵、財乏不行其能久矣、

と記してあつた。中島はそれを崋山に示して、

「之れは何時書いた物だ」と尋ねた。

「先年病中慰みの為め、[illegible]慎機論中より抜抄して認めました物で御座ります」

「当今其方の身分は丁度此の語に相当して居るではないか、して見ると其方は大きに先見の明があつた訳だな」と中島は座内

な調子で言つた。

「何心なく面白く思ひましたので、壁書に致しましたが、今日遂に縲紲の身となりました事は、實に不審の至りと申すのほかは御座いません、さるにても蔑り難きは天命で御座りまする」

と崋山は愁然として答へた。

矢張り押收された崋山の藏書の中に蘭文の地理書があつたが、其の中の日本無人島略記の項に、ところ／＼不審の箇所へ紅唐紙が貼り付けてあるのを示して「之れは何の爲めか」と言つて詰問すると、崋山は即座に

「それは多分前所有者の致した事で御座りませう」

と答へたので、人々は彼の頓智の巧妙なのに驚いてゐた。

併し、如何にしても言ひ脱けの出來ないのは、未定稿の儘ながら彼の愼機論の草稿だつた。猥りに蠻夷を崇ぶに似たる言辭を弄して神州の威を輕んじ、剰へ天下の政道を誹謗して「當路大臣は紈袴子弟、在官權官は賄賂の倖臣」と罵り「今夫如此束手して斃を待たん」と云へるに至つては、其の罪甚だ輕からさるものと見られてゐた。

判決は容易に決し難くて、延引に延引を重ねてゐた。一方では、事件發生以來崋山の助命運動の爲めに多くの有志が奔走してゐた。藩主三宅土佐守や隱居の三宅友信は一方ならず痛心して、どうかして崋山を救ひ出さうと、臣下を四方に馳せて を窺はしめたり、平素親交のある諸侯の盡力を乞ふたりした。門人知友の人々も、死に物狂ひになつて運動した。さうして百方手段を構じたけれども、効果が現はれなかつた。それは幕府の方針が極端に蘭學排斥に傾いてゐたからだつた。

夏が來ても、崋山は獄中で暮らさなければならなかつた。其の牢屋は、三間に四間位の廣さで、板敷の上に疊を敷いて、崋山は特別扱ひで一疊を一人で占領してゐたが、他の者は牢役を持つてゐる者でも一疊に二三人位、平のものは一疊に六人位座らせられてゐた。多くは博徒、小盜の類だつた。牢名主までが崋山を「先生、先生」と崇めて、日常の小用はすべて、小座といふ平の罪人の者が召使ひのやうに働いてくれた。中島嘉右衛門の好意が牢内へよく行き屆いてゐたので、牢屋にゐても世間と秘密に文書の往復も出來た。椿山や眞木重郎兵衛からは數回の書面が來た。けれども、不潔なのと光線の不充分の爲めに健康を害するので弱つた。彼は濕疫を病み、疥癬に惱んで、一時は死にさうに苦しんだ。

それも中島の親切な手當のお陰で、露命をつなぐことが出來た。

或る晩牢獄の中で沈思默考して、行末越し方の事など思ひ耽

つてゐると、何處で啼いてゐるのか秋蟲の音が直ぐ傍まで來た。

秋むしはおのが草葉に音を啼きて我のうちにきく身こそ悲しき

と崋山は口ずさんだ。

十四

崋山の助命運動が遲々として容易に効を奏さないのを見て、最後に奮然として起つた人があつた。それは當代の鴻儒で、崋山のためには二十年來の恩師である松崎慊堂であつた。

慊堂は肥後國上益城郡木倉村の生れで、農夫源藏といふ者の孫だつた。父は惠芳と云つて何處の者とも知れぬ行脚體の僧だつた。源藏に二人の娘があつて、姉はげんと云つたが、聟養子をして女子を一人儲けてから事情があつて其の聟を離緣して獨身で暮してゐた。其處へ惠芳が藥を賣つたり灸點などして旅をして來て、折り〳〵源藏の家へ泊つたのが緣となり、何時となくげんと夫婦になつて暮すやうになつた。そして夫婦の間に出來た松次郎といふ子が、後年の松崎慊堂だつた。慊堂は十一歳位の時或る眞宗の寺へ小僧にやられたが、性來讀書が好きだつたので學問で身を立て度いと思つて、十三四歳の時國許を出奔して江戸へ出て來た。其の後非常な艱難辛苦して林家の門人となつて[illegible]行つたが、日が暮れたので同家へ泊つた。夜中に[illegible]めたので、起き上つて廊下で書物を讀んでゐた。すると[illegible]女がそれを見て「貴方は何故寢ないで本を讀んでゐるのです」と言つて尋ねた。慊堂は「自分は苦學の書生で晝の間は讀書の暇はない、で夜ばかり讀書をすることにしてゐるのだ」と言つて自分の境遇を話した。すると女は

「貴方が一と月學問をするにはどれ位のお金が要るのですか」

と尋ねた。

「二分あれば十分一ケ月の學資は足りるのだが、僕はなか〳〵それ程は使へない」

女は、慊堂に餘程惚れ込んだらしかつた。

「二分位のお金は、妾が少し白粉代を儉約したら出來る事ですから、これから毎月妾が學資金を送つて上げませう」

と言つて、女は其の後月々缺かさず二分宛慊堂の處へ仕送つて呉れた。其のお蔭で慊堂は學問にばかり勵むことが出來た。學業が成つて慊堂は、掛川藩太田備中守に召し抱えられて儒官となつた。其の頃は品川の女も年が過ぎ色香も衰へてゐたけれども、彼は其の女を落籍して妻にした。慊堂の名聲が高くなつたので、細川侯が、元來其の封內の民であるといふところか

ら、慊堂を召し還して太田家に數倍する高祿で抱えやうとして、掛川侯へ交渉した。其の時慊堂は

「出女は改めて娶ることが出來るが、盤婦は再び嫁すべからざるものである。君臣夫婦は其の義が同じものである。自分が掛川に歸してから十年の間に、三君が簀を易へられた、是れ三變び所天を褒つたのである、決して他に移ることはなりません」

と言つて應じなかつた。

慊堂は學問博大胸中幾萬卷の蘊蓄があるとも知れなかつた。文政天保の間に、佐藤一齋と慊堂とを大儒と稱した。併し乍ら實際の學力に於ては一齋は慊堂の敵ではなかつた。たゞ一齋は人物が聰敏で、世事に錬通してゐた。それがために慊堂と同等の名聲を維持することが出來たのだつた。

天保十年の此の年慊堂は七十有餘の老齡だつた。加ふるに彼は此の頃瘀亂を病んで衰弱を極めてゐた。其の病氣がどうやら鎭まつて、まだ外出は出來ないけれども、床の上に座つて居られる程になつた。彼は崋山の事が心配に堪へないところから、病を勉めて筆を執つて、閣老水野越前守へ建言書を起草した。そして門人小田切要助を介して忠邦の手許へ提出した。慊堂の建言書はまことに千古の文章と云ふべきものだつた。彼はそれに依つて、先づ崋山の人と爲りを說き、憐憫を加ふべき情實の存在を縷述し、一轉して、彼の愼機論が朝政誹謗の罪に問て居ると云ふことだが、元來政治誹謗の罪なぞといふものは

實の世に於てはあるべき道理が無いといふ理由を、春秋戰國、唐明、淸の諸律に對照して說明し、飽く迄も其の無罪を訴へ、若し世に公にせざる反古を證據に罪を問はゞ誰かは罪人ならざらんやと辯護し、更に一轉して、親友の義を破り、已れの榮曜を謀る讒訴人花井虎一の言が果して行はれたならば、恐らくは天下の物議を生ずるであらう、宜しく花井を誣告罪に問ひ、反座せしむべきであることを論斷した。條理明晰で十分に慊堂の識見を發揮すると同時に、崋山の性行を敍し得て遺憾がなかつた。

慊堂の建白書は、崋山を救助する上に非常な效果を及ぼした。それまで幕府有司の意嚮は絕對に崋山死刑に一致してゐたのだつたが、慊堂の建白書に由つて先づ越前守が動かされた。

其の年の十二月十九日に至つて、崋山に對する宣告が漸く下つた。崋山は死一等を減ぜられ、於在所蟄居を命ぜられた。

崋山は八ケ月の牢獄生活から漸く脫して我家へ歸つた。老母や妻子の喜びは云はふやうもなかつた。一齋の人々も初めて愁眉を開いて吾が事のやうに喜んだ。友人門弟をはじめ、曾て出入した諸侯旗本の使者、或ひは出入の商人などまで、喜びを演べやうとして訪ねて來る者が引きも切らなかつた。併し崋山は

「[illegible]ないが、自分は今も尚罪を負つて重罪人の身の上であるから、お目に掛る事だけは出来ない」

と言つて暇れにも面会しなかつた。愈々田原へ出發の前夜に なつてから、彼は潜かに與瑞の別邸へ伺候した。それは、或ひは一生の訣別になるかも知れないから、友信公にだけは一と目お暇を申し上げようと思つたからだつた。友信は歡んで、側近く呼んで細々と物語りをした。崋山が、明朝未明に出發する旨を申し上げると、友信は潸然として涙を浮かべて

「予は父に別れるような心地がするぞよ」

と言つた。

崋山も涙に暮れ乍ら、惜しき暇を申して立ち歸つた。

命の親の松崎慊堂にも、感謝狀を送つたのみで、わざと對面はしなかつた。

天保十一年正月十三日の拂曉、崋山は警固の役人に衞られて、乘物で田原へ向つて護送されることになつた。三宅家よりの附添として鈴木採助、門人總代として福田半香、その二人が駕籠脇に附いて行くことを許された。崋山の出發を知つてゐる人々は、せめてよそ乍らでも今生の暇を告げやうと思つて、未明から其の家の門前に集まつて來た。崋山の乘物が出發すると、人人も其の左右前後に附き添つて歩き出した。高輪の大木戸迄行[illegible]た時、崋山は駕籠の中から暮れ[illegible]人に告別の[illegible]た。

道中の警固は厳重を極めた。宿付の駕籠で、附使も共の内で便じなければならなかつた。

だから其の苦痛は名狀し難かつた。永い牢獄生活で身體が衰弱し切つてゐる上に、例の淋疾がまだ全快しないので、堪へられない苦みだつた。箱根山では劇しい風雪に遭つた。身體の冷えから腹痛を催して、甚だしく下痢した。それでも休まずに進んだ。病苦は刻一刻と募つて來た。遠州掛川で泊つた日には、總身から冷汗が流れて、氣絶してしまつた。戸塚隆伯といふ醫者を頼んで服藥をして、一日逗留した。さういふ中でも彼は例の帳面を手に持つてゐて、面白い沿道の風景を見ると寫生することを忘れなかつた。

一月二十日に漸う田原へ着いた。一時預り人某の宅へ落ち付いたが、依然として晝夜とも警戒が厳しかつた。家族の者も後から江戸を引き上げて來た。二月十六日に居宅を與へられ、はじめて一家團欒の生活をすることができるやうになつた。

十五

其の家は田原の城下を北の方へ三四町距つた處にあつた。池の原といふ處で、藁葺き家だが、屋敷は可成り廣く、畫室にする離れもあつて、周圍には田や畑が續いてゐた。

江戸で暮しつけた崋山には、かうした田園の生活が珍らしく感じられた。彼は非常に落ち付いた心持で日を送つた。漸く物心が付き始めた頃から貧乏の苦を味はつて、其の後は四十年の永い年月を彼れや是れやと追ひ立てられ、一寸の餘暇もなくて暮らして來た過去の生涯を振り返つて見ると、さながら夢のやうな氣持がした。夜半に風が荒れて濤の音を枕べ近く聽いたり、淋しい入り日の影が障子に寫されたりするのを見ても、崋山は幽居の身の上を悲しくは思はなかつた。彼は悠々として易書なぞを讀んでゐた。

崋山のあとを逐つて、鈴木春山だの、砲術家の村上定平なども田原へ歸つて來た、其の外劍客杉山大助、儒家伊藤大三郎等も前後して田原へ來て居をトした。門人平井顯齋、山本琴谷の兩名は、師匠の家族を送つて江戸から來て其の田原に留まつてゐた。それらの人々は、夜となく晝となく訪ねて來て、學術技藝の話に耽つたり、繪事に就いての教へを受けたりしてゐた。

生家から扶持は貰つてゐたけれども、それだけでは生活が出來なかつた。それに去年の事件發生以來貰へた金も少くなかつたので、現在の生活は一層苦しかつた。で折り〳〵は依頼繪を描いて其の收入で僅かに支てゐたが、これとても高の知れたものだつた。

其の頃崋山はある人の依頼に依つて、醫聖ヒポクラテスの肖像を描いた。それは崋山の肖像畫の中でも最も傑作だと云はれた物だつた。崋山は、田原へ幽居後の畫には皆天保二三年の年號を入れた。幽居の身分を憚つて殊更に年代を變へて記したのだつた。

其のうちに幕府の壓迫が日に増して加はつて來た。家中の人々に對しても、崋山の處へ往來することは宜しくないといふ沙汰があつた。崋山自身が他へ文通をする事にまで干渉するやうになつて來た。併し崋山は別に不平もなかつた。

六月に入つてから半香が忽然として再び訪ねて來た。其の時ばかりは崋山も喜んだ。病身であるので旅が出來ないと言つて殘念がつてゐたといふ椿山や、其の外いろ〳〵な人達の言傳てやら、消息を聞くやらで、夜は更けても談は盡きなかつた。と、半香は笑ひ乍ら一通の手紙を出しかけて

「それから先生、もう一つお樂みの手紙を持つて參りましたよ」

と言つた。

「何んだ、お樂みの手紙とは」

「是れで御座います、どうか御覽下さいまし」

と言つて半香は其の手紙を崋山に渡した。見るとそれは品川のお竹からの文だつた。さすがの崋山も思はず笑顔を作つた。

半香は半月餘り師匠の家に逗留した。が、其の間に、崋山の家計が餘り苦しいのを見るに見兼ねて、

「先生、是れでは御老母や奥様が續きますまい。で、如何でせう、私が江戸へ歸つて、先生の畫會を興さうと思ひますが、お許し下さるでせうか」

と或る日崋山に相談した。崋山は、自身の現在の身分から云つても畫會なぞといふ華やかな事をして貰はふとは夢にも考へてゐなかつたことだが、半香にかう言はれると心が動いて來た。半香は熱心に畫會の方法などに就いて自分の考へを話すのだつた。

「ではまあ、成る可く目立たぬやうにやつて貰ひ度い」と崋山は言つた。

半香は江戸に還ると直ぐ秘密に畫會の運動に着手した。幽居の崋山を慰藉するといふ目的の其の畫會は忽ち多數の賛成者を得た。其後崋山は月々畫會の幅を揮毫してゐた。

其の年、三宅家では土佐守が隱居して、養子伯太郎君が家督を相續した。

頭包、[illegible]は商人の身の不利益であると言つて、崋山は[illegible]品川へ上らせることになつた。愈々明日は出發といふ晩には、[illegible]人は酒を酌み交して名殘を惜んだ。其の時崋山はふと思ひ出したやうに、

「平井、お身に一つ頼む事がある」

「何んで御座いませう」

崋山は起つて書棚から一枚の書き卸しを持つて來て

「頼みといふのは是れぢや、まづ一覽せ」と自分で展げて見せた。それは藝者姿の若い美人を描いた風俗畫だつた。髪のかたちや、容貌がさながら生きてゐるやうに描かれてゐて、黒の紋服を着た裾模様には雪持竹が描いてあつた。

「之れは先生誰れの姿で御座います」

「お身も噂には聞いてゐやう、之れは品川のお竹の姿ぢや」

「あ、いかにも承はつて居ります」

「處で、お身に托するから、彼の手に屆けては呉れまいか」

「お易い御用で御座います」

「併し、強いて屆けるにも及ばぬ、序でがあつたら與へて貰ひ度い、序でがなくばお身の所持に致しても差し支えない」

「委細承知致しました」

「では、一寸題詞を書かう」

崋山は直ぐに筆を執つて其の畫の餘白へかう書いた。

與可之竹、思肖之蘭、花光之梅、皆爲レ所レ愛自發二抒性情一、遂以贈レ人也、然人之好惡不レ一、王衍忌レ泉、歐陽公憎レ蠅、眉山翁惡レ棋、雖レ欲三與レ我同好一得哉、予有二六如老之癖一、佐レ酒非レ肟、肟不レ樂、同レ夢非二蓮香一不レ眠、故情所レ鍾、能發二揮其所一レ思、夫人生無二飲啄牝牡之欲一者非レ人也、是以予所レ好者、天下公道而與可思肖之所レ愛、一人之私淑也、因寫二予愛妓一寄二顯齋一、顯齋與レ予同好也否、時天下禁レ奢、我妓徹レ王、梳二金釵一、素面輕羅如二雨後荷蓉一

崋山併題

半香が肝いりの畫會の事は何時となく世間へ知れてしまつた。中にはそれをよく言はぬ者もあつた。

「崋山は蟄居謹愼の身を以て、交りを世間に求め、有志と交通し、剰へ門人を驅使して畫會を催し金錢を集めなどするのは、上を畏れぬ振舞ひである」

と言ふ者もあつた。其の事に依つて近々幕府から改めて御咎めを蒙るだらうといふやうな風説さへもあつた。それらの蜚語は崋山の耳にも入らずにはゐなかつた。崋山は自分がさういふ惡評を蒙るのも道理だと考へた。彼は畫會の絹は三月分ばかり書いたゞけで中止してしまつた。

明くれば天保十二年であつた。崋山の一家の者は今年も淋しい元日を迎へた。

辛丑元日早起自汲盥、拜二家廟一進二辛盤一、獻二壽盃一、賀二慈親一、慈親榮壽七十、予四十九、婦三十六、兒立十、諧七、女苟十六、闔家無故、誠天樂也、此日詩一首。

萬甍煙裏海暾紅、投刺飛轎西又東、
滾々馬塵皆醉夢、今朝眞個迎春風。
四十九年官道梏、昨非不レ改恥二銜遂一、
誰知樂有二超人處一、七十萱堂數架書。

と崋山は雅箋紙に書いて壁に貼つた。

其の年は一層淋しい生活を崋山は送つた。其の筋の監視は益々嚴重になつて、何事につけても不愉快で不自由な思ひをした。近頃ではそれが爲めに訪問客も滅多になかつた。彼は、此んな慘めな思ひをしてまでも餘命をむさぼり度いとは思はなかつた。自分の生涯は、天保十年の正月迄で終つてしまつたのだと彼は考へてゐた。けれども、老母の事を思ふと、子としての孝養を一日でも長く盡し度いと思つた。唯それだけだつた。

處が、彼は近頃思ひも付かなかつた風評を耳にした。それは三宅家の新藩主が、家督相續をして最早一年餘りにもなるい

に、いきたに、[illegible]
のやうな男人を出してゐる役であるといふ[illegible]
さういふ風評が家中でも可成りにもあらしく傳へられてゐたのだ
つた。それを聞いた時ばかりは、崋山は胸に釘を打たれるやう
な心地がした。彼にはじめて最後の決意をしたのだつた。

併し、此の期に及んで、何か一枚畫を殘さうと考へた。其の
時彼の胸裡に湧いた感慨は、四十九年の人生の夢であつた。

彼は、蔗生炊夢之圖を描き上げた。

それから二日ばかり經つた。朝のうちから、懇意にしてゐる
南坊流の茶人奥田某といふ者が遊びに來て、世間噺しをしなが
ら茶を飲んで、丁度時刻が來たので一緒に晝飯を食べた。それ
から直ぐに崋山は席を起つて

「奥田さん一寸失禮する」

と言つて離れの方へ行つた。が、何時迄經つても崋山は戻つ
て來なかつた。妻のたか子が不思議に思つて見に行つた時に
は、崋山は短刀を喉に突き立てゝ死んでゐた。たか子の叫び聲
を聞いて母も其の場へ馳つて行つた。が、母は倅の死に態を見
て

「登、お前は何故腹を切らずに、喉を突いたりして女のやうな
死に方をしたのだ」と叱るやうに言つて、死骸を抱き起して見

[illegible]
襟を正しく合はせた上で、暫く[illegible]いてゐるのだつた

「矢つ張りわたしの子だつた」

と、母は哀しい淚に滿足さうな表情を浮かべて言つた。

それは天保十二年十月十一日の出來事だつた。

人類及び地球の運命

石井重美

A　地球上に於ける人類

（人口の問題）

一、人類の發現

基督教徒は、聖書の記載に據つて、今から約六千年以前に、神が、總ての宇宙萬物とともに、人間をも創造したと信じて居るが、それが、殆んど一顧にも値しない迷妄虚説であることは、あらためて架説するまでもない。

吾々の地球上に、始めて人間らしい動物の現はれたのは、地史學の敎へるところに從ふと、實に、約五十萬年前の昔である。

此の動物の化石は、西暦千八百九十二年に、當時和蘭の陸軍軍醫であつたヂュボアによつて、ジャワのベンガワン河畔で發見されたもので、「ピテカントロープス・エレクトゥス」（Pithecanthropus erectus）（「眞直に立つて歩く猿のやうな人」といふ意味。）といふ名前をもつて居る。

勿論、此の「ピテカントロープス」が、吾々人類の直系の祖先であるといふのではない。即ち、現在の人類が、直接に「ピテカントロープス」から下降したものであるといふのではない。しかしながら、此の動物が、本來の猿よりはよほど進化した、いろ〳〵の點で眞正な人類に似通つた處のある、所謂人猿中間の動物であつたことは爭はれない。

「ピテカントロープス」以前の地層からは、今のところ、まだ人間らしい動物の遺跡が發見されないが、その以後の地層からは、いろ〳〵の、人類的な動物の遺跡が見出される。さうして、つひに、今から數萬年前に於て、生物學上、吾々と全く同一種類に屬すべき、眞正人類（「ホモ・サピエンス」）が、此の地球上に出現するやうになつた。

つまり、吾々人類は、前記の「ピテカントロープス」の現はれた前後の年代に於て、猿のやうな一種の哺乳動物から、次第

[illegible]に達し[illegible]

二、過去の人口增加率

兎に角、上のやうにして此の地球上に現はれた人類は、その旺盛な蕃殖力と、優秀な智力とのために、發現以來、非常な勢でその數を增加し、今では、全世界の人口約十七億に達して、南北の兩極地方と、僅少な高山や沙漠地方を除くのほか、到るところとして、特異な二脚動物と、その事業の跡を見ないところはないまでになつた。

さうはいふものの、過去に於ける人口の增加率は、之を近代の狀態に比較すると、まだ極めて低小なものである。時代の新しくなるとともに、その率は次第に上騰して來た。先年、(千九百十九年)オーストラリアのニップスは、世界の人口問題について興味ある計算をなし、その結果を雜誌「シェンチア」の上で發表したが、それによると、假りに、人類が、何時も、平均一パーセント(即ち人口百人について一人)の割合で增して行く場合には、(千九百十一年を終りとする五年間に於ける世界の人口增加率は、一・一六パーセントであつた。)一萬年の間に、最初の二人から、三千二百七十一萬六千四百九十四に十の三十六乘を掛けただけ (32716494×10^{3}) の人ができることになる。と[illegible]なもので[illegible]、今、[illegible]と、(人一人の目方を[illegible]とし[illegible])これ[illegible]に、[illegible]凡二千二百六十五に十の十八乘數をかけただけの[illegible]の人の目方と同じであるから、上に掲げた[illegible]の人が棲息するには、今のやうな地球が何億あつても到底足りないわけである。

然るに、最初の眞正人類が現はれてより此の方、既に何萬年といふ長い年月を經過して居る今日、世界の全人口は僅かに十七億に過ぎないのであるから、過去に於ける人口增加率は、平均して、現在に比較し、甚だ低かつたものといふことができる。即ち、假りに、人類最初の一對の祖先が、今から十萬年前に現はれたとすると、過去の平均人口增加率は、約〇・〇二パーセント(五千人について一人の割合。)といふことになる。

三、將來の人口

ニップスは、更らに進んで、將來の人口がどんなやうになるかといふことを計算して居る。即ち、現在の人口增加率を假りに一割とし、(歐洲大戰前の狀態より少し控へ目に見て、)さうして、今後もほゞ其のくらゐの率で進んで行くものとすると、目下の十七億の人口は、五十年後には、約二十七億九千六百

となり、百年後には、約四十五億九千八百萬となり、百五十年後には、約七十五億六千二百萬となり、二百年後には、約百二十四億三千七百萬となり、二百五十年後には、約二百四億五千五百萬となり、三百年後には、約三百三十六億四千萬となり、三百五十年後には、約五百五十三億二千六百萬となり、四百年後には、約九百九億九千一百萬となり、四百五十年後には、約一千四百九十六億四千七百萬となり、五百年後には、無慮約二千四百六十一億一千四百萬といふ大きな數になることになる。

そこで、ニツプスは食糧の問題に頭を振り向けて行つた。彼に從ふと、現下の小麥の收穫高は、約一億一千九百萬エーカーの耕作地に對して、約十六億八千七百萬ブツシエルであるから、平均一エーカーに付て十五ブツシエルに相當する。それから、全く耕耘の望のない南北の兩極地方を除くと、地球の全面積は約三十三億エーカーになるが、これだけの地面が全部耕地となつて、前記したやうな割合で小麥を産出するやうになると、その全産額は、一ケ年約四千九百五十億ブツシエルに達する。

一方、一人の人が、その生命を維持するために、直接間接消費する小麥の量を、一ケ年約五ブツシエルとすると、上に記したやうな小麥の産額は、やうやく九百九十億の人口を支へるに足るだけのものであるが、そのくらゐの人口は、前出のによつて、今後四百八年以内に達せられることになる。たとへ農業上の技術の進歩によつて、小麥の收穫率が今の二倍になつたところで、その年數は、僅かに七十年ばかり延長するだけである。更らに、收穫率が四倍に向上したとしても今から約五百五十年もたつと、地球の全表面から産出する小麥は、最早やその當時の全人類の口を糊することが困難なやうになる。つまり、現在のやうな率で人口の増加が進んで行くと、農業上の進歩は豫想しても、今後五六百年の間に、人類は、重大な食糧上の行き詰りに遭遇しなければならないことになるのである。

四、前途の暗雲

ニツプスの如上の所論は、一種の新マルサス説ともいふべきもので、明らかに著しい悲觀説である、しかしながら、それは、「人口問題」(The population problem, 1922)の著者カール・サウンダースが云つたやうに、單なる「根據のない悲觀説」であらうか。自分は決してさうは考へない。勿論、ニツプスの採用した一パーセントの増加率は、比較的短期間の統計から假定したものであつて、それが、果して、將來に於ける長期の平均増加率として、同樣に用ひらるべきであるか否か、その

點に疑問を挾む余地はあるが、また、食費の高低及びその性質、分配方法等に關し、ユップスが想像した以上に改善の途が開けたとしても、究極するところ、後年に至つて、次第次第に世界の人口が稠密となり、そのため、全人類が、いろ〳〵の關係で、（單に食物の關係ばかりでなく、住居及びその他の關係で、）生活上の艱難困難な問題に當面すべきことは、火を見るよりも瞭であると云つて差支ないであらう。此の點に付いては、自分は、寧ろ、アーサー・トムソンが、その近著「人とは何であるか」のうちで云つて居るやうに、吾々人類の進む前途にあたつて、「恐ろしく激烈な生存の戰の凶兆ともいふべき暗雲の閉して居るのを認める」ものである。

五、生物の多産性

アダム・スミス其の他、多くの經濟學者達が云つて居るやうに、人口は、その當時存在する食物の多寡（これは寧ろ使用せらるべき食物の多寡と云つた方が妥當である。何故といふに、たとひ、どんなに澤山な食物が存在して居たところで、若し、それが、私有財産制度の下に於ける或る種の財産のやうに、一般に使用を許されないやうな性質のものであつたら、實際、それは、何も其處に無いと何の選ぶところがないからである。）によつて一面支配されることは事實であらうが、即ち、食物が多ければ、人口も多く、食物が少なければ、人口もそれにつれて少なくなるべきことは勿論であらうが、併しながら、他の一面から觀ると、恰度、それと反對に人口が食物を支配するとも云ひ得る。即ち、今までは十の人口があつたために十の食物が在つたとしても、（或ひは使用されて居つたとしても、）人口が増して十五になると、（其の増加した人類の活動により）、食物の方もそれにつれて十五に増して行く傾向があるのである。食物のみが人口を支配し、調節するのではなく、食物と人口とが、循環的に双方を支配し、調節するのである。

そのやうに、人口と食物とは、相互的に非常に、密接な關係のあるものであるが、經濟狀態（即ち食物の如何）と、人間の蕃殖性と、何れが根本的の性質を有つて居るかといへば、どうしても蕃殖性の方が根本的のものといはなければならない。此の點は、一般に、經濟的狀態の好良でない貧困者の方が、富者よりも寧ろ多くの子供の持主であるといふ世界的の一事實からも容易に察知することができる。

生物は、その周圍に食物のあるなしに拘らず多産するものである。これは生物界全般に通ずる根本的な事實であつて、人間も勿論その埒外に立つものではない。

六、多產の結果

多產の結果は、自然の勢として、食物と場所とを獲得せんが爲の鬪爭（即ち生活の爲めの鬪爭。進化論者の所謂生存競爭。）が誘起されるやうになる。これは、生物の第一次的特質である生活意志を備へて居る各個體が食物と場所とについて或る限定された環境の下に置かれるといふやうな場合に、必然招來せらるべき事柄である。

前にも云つたやうに、人口が增加すると、食物もそれにつれて增加する傾向はあるが、その食物の增加は、勿論、決して、易々として行はれるものではない。それには、非常な奮鬪と努力とがいるのである。さうして、その努力が、とりも直さず、上記の生存の戰の主因となるのである。

七、受胎調節と人口

尤も、人間には、古くから、或る種の人爲的人口制限が行はれては居た。墮胎や、嬰兒殺戮や老人殺戮などもそれであるが、ことに特記すべきは、近來やうやく世人の注意を喚起するやうになつた受胎調節の問題である。（例のサンガーは、しきりに、婦人の自由とか、婦人精神（フェミニンスピリット）の發揚とかいふことを唱へ、受胎調節を、主としてさういふ方面から論じて居るが、しかしながら、これは、どうしても、人口問題との交渉に於て、もつと深く且つ大きい意義を有つて居るやうに自分は思ふ。）

それから受胎調節は、先年英國優生教育學會の此の問題に關する討論會の席上に於てミラードも云つたやうに、まさしく、「人類によつて成された最も主要な發見の一つ」であつて、一般の人口制限上非常に有力な方法であるには相違ないが、さらばと云つて、それを以て徹底的な人口制限が可能であると思惟するのは大いなる誤謬である。

八、窮極の結果

此の間の消息を十分に理解するためには、あらかじめ、人間といふものゝ本性がどんなものであるかを明らかにしておく必要がある。人間は、一面に於てはなか〳〵勤勉な動物であるが、一面に於ては、またロッスの云つたやうによほど無精な、橫着な動物である。此の後半の性質が、人生の上に種々なる苦惱をもたらす一つの重大な原因であり、所謂社會的骨化（Ossification）といふやうな現象の起るのも、共處に深い根ざしをもつて居るのであるが、自分は、上記したやうな、徹底的人口制限の不可能といふことも、矢張り、さういふ人類の根本的特

性（不精性）に經由するものではないかと思ふ。

何故といふに、嬰兒殺戮や墮胎は勿論、比較的その所作が簡易である受胎調節に於ても、之を實行するには相當の手數がいる。ストープスの近著 Contraception（之は恐らく「反受胎」或ひは「避妊」と譯すべきもので、ストープスが本書の別名として記した "Birth Control" とは嚴密に云ふと意味が違ふ。ついでに、Birth Control を「産兒制限」と記すのは假りにいゝとして、今一般に行はれて居る此の言葉の内容を吟味すると、それは寧ろ受胎調節といふ方が適當であるやうに思ふから、此處では、此の後の方の言葉を用ひることにした。）には、それに關するいろ〳〵の實行方法を列擧してあるが、藥物使用にしても、また器具使用にしても、何れも多少の手數を要することは事實である。それゆゑ、元來無精な人間は、調節の必要をば感じながらも、一層深い根柢をもつた性の衝動の爲めに引きづられて、しば〳〵、不要若しくは希望に反する受胎をなし、産兒を得るといふやうな結果に立ち至ることがあるに相違ない。

斯様にして、兎に角、人口は、或る點までは、人類自身の理性によつて制限調節をなし得るであらうが、結局は生殖本能が勝利を制して、次第〳〵にそれが増進し、其結果、あまり遠く

ない状態に於て、全人類の生活の上に、一種の一大、特[illegible]も來すやうになることと思はれる。

此の一大轉換をなすに際しては、前文に於ても記しておいたやうに、人類は、小々ならぬ困厄を經驗しなければならぬ、さういふ困厄を預知せしむるやうな暗雲の低迷して居るのを既に前途に望み得るのであるが、しかしながら、吾々はまた、その重苦しく閉せる暗雲の彼方に、朧ろげに輝いて居る一道の光明をも認めるものである。

B、世界人類の合同

一、人類の接近

上のやうにして、人口が著しく増加すると、自然に、人類と人類とが接近するやうになる。さうして、その結果、いろ〳〵の厄介な問題が起つて來る。一例をとつて言つて見ると、現在、我日本とアメリカとの間に起つて居る忌はしい移民問題の如きもその一つである。

紳士協約などいふが既によほど無理なことであるが、たとへ日本がそれを忠實に守つて居たところで、先にアメリカへ移住して居る日本人の子供が殖えると、今度は、歸化權の制[illegible]

や絶對移民斥排といふやうな事が起つて來る。一議員のロッチが、どんなに、「米國の統治權に關する最も重大な問題である。」と叫んでも、また學者のワードが、優生學上の立場から、「我が國の住民は、世界の諸地方から抽出せられたものから成り立つて居る。從つて、適當な法律の制定により、將來國民の父母たるべきものをして、各人種の最も良好なる個人たらしむることができる。此の問題に關して我が政府の負ふべき責任は極めて重い。」などと論じたところで、自然の事實は、そんな主張や議論にはお構ひなく、どん／＼進展して行く。

人間が、人口の增加といふことを絕對に封じ得ない限り、さうして、今のやうに、世界の各國が、云はば猫の額のやうに狹い地球の上で、勝手にてん／＼の繩張をとりきめ、我儘な私有權を振り舞はして居るやうな狀態では、さういふ葛藤の起つて來るのが、むしろ當然すぎるほど當然なことである。

かりに、今一時、例の外交上の辭令を用ひて、此の問題の彌縫に成功したところで、近い將來に於て、何時かまた、必らず、更らに一層の「重大」さをもつて爆發するに相違ない。北米合衆國にそれが起らなくても、南米の方に起るかも知れず、またオーストラリアの方に起るかも知れない。或ひは、つひ近い東洋の中に起るかもしれない。それは恰度、次第に嵩の增しつゝある桶の中の水のやうなものである。だん／＼增しばいになると、その水は、最初桶の緣の一ばん低い處から外へ溢れ出るが、其處を塞がれると、今度は、他の低い處から溢れ出る、更らに其處を塞がれると、また外の處から出る。さうしてつひには、緣全體から非常な勢で流れ下るやうになる。

三、排他的感情と自己優越の幻想

人類が接觸すると、一方に於ては、國家主義、帝國主義が發達するが、他の一方に於ては、國際主義が頭を擡げて來る。

國家主義（對他關係方面から見ての）の發達は、人間の心の中に古くから潛んで居る一種の排他的、鎖國的の感情（これはまた、恐らく、或る動物の他の動物に對する所謂「恐怖本能」に基づくものであらう。）に胚胎する。

東京に住つて居たものが、たま／＼郊外の方へ居を移すと、少なくとも、その移つて行つた當坐、地着の者は、一種の小さな排他的の眼を以つて彼等を眺める。外國人などが來ると、殊にさうである。地方へ行くと、此の關係は一層著しい。また、今より以前の方がさらに一層甚しかつた。吾々は、其處に、明らかに、國家主義の萌芽を見出すことができる。

勿論、此の排他的感情の裏面には、それと何時も影のやうに

なつて貰つて居る自己の[illegible]があ[illegible]、[illegible]ても、他人よりは自分の方が優いやうに思つて居る。少くとも、何處か優いところがあるやうに思ひたがつて居る。長い間北海道に居て、アイヌをよく研究したバチエラーの語るところによると、あのアイヌのやうに衰頽萎微した人種ですら、日本人が彼等を輕蔑すると同じやうに、彼等もまた日本人を蔑視するばかりでなく、彼等自身、世界に於ける最も優秀な人種であるやうに信じて居るといふことである。またアラスカのノートン・サウンド地方に住んで居るエスキモー人は、自分達のことを「ユーピク」と呼び、附近のアメリカ土人のことをば「インキリク」と呼ぶが、此の「ユーピク」といふのは、「立派な、完全な人」といふやうなことを意味し、「インキリク」といふのは、「蝨の卵子」といふ意味の言葉であるさうである。「蝨の卵子」とはいかにも皮肉な云ひ方である。以てエスキモー人の矜持性がどんなに高いものであるかを推知することができる。

三、土地に對する執着

かういふ人類の排他性と矜持性とは、他種族に對する遺傳的の恐怖觀念や、その背後に潜む自己肯定乃至自己實現の無意識的な要望や、それから當該種族内に於ける言語、風俗、習慣等が[illegible]一つであつて、[illegible]居るといふことや、さらにまた、彼等がその[illegible]する[illegible]に[illegible]して、一種の深い執着を持つて居ることに基因するものであるが、こゝには、土地に對する執着心の例を一二掲げてみる。

曾て、佛國の南部、アヴェーロン附近の森林中に、長い間全く人間の社會から隔離されて生活して居た一人の青年があつたが、後ちに巴里の方へ連れられて行つた。ところが、或る時、賑やかな巴里の町から出て、モンモランシイの谿谷へ出掛けて行つた折、突然、此の青年の身體に、著しい變化が起つた。昔住んで居た故里の地を偲ばせるやうな、美しい森や丘が眼前に展開して居るのを眺めた彼は、これまで全く表はしたことのないやうな落着きのない、そはそはとした態度を示し、眼も瞬動も、悉く喜びを以つて耀いた。さうして、彼に向つて、十分の好意と注意とが拂はれたにも拘らず、彼は、たゞ一心に、其處を逃れ出て、その懷しい森林の中に走り込み度いやうにみえた。

更らに興味のあるのは、アフリカ東海岸のマダガスカル島に住んで居るホーヴアといふ土人の思郷心である。即ち此の人種が、郷土を離れて他國に旅行する場合には、その郷土の土を[illegible]々掬つて旅先の方まで携へて行く。さうして、時々それを取り

出して眺めては、その守護神に、再びその土を、掘つて來た鄕土へ返すことができるやうにと熱心に祈りをさゝげる。

こんなやうな面白い話は、エドワード・ウエスターマークの「道德觀念の起源と發達」を見ると、まだ澤山にある。

四、宣傳の効果

それから、もう一つ此處に述べて置かなければならないことは、宣傳の効果である。

上に列擧したやうないろ〳〵の要素によつて、國家主義の基礎は置かれるが、しかしながら、これに統一と、力と、組織とを與へ、それを完成せしむるものは、一部支配階級の宣傳である。即ち彼等は、種々なる方法を用ひ、あらゆる機會を利用して、外敵の恐るべきこと、憎むべきことを教へ、その鄕土や民族の善美にして優秀なることを教へ、しかも、多くは、感情的の言葉を以つてそれを高調する。教育もそのために利用され、宗教もまたその走狗となる。

かういふ支配階級の宣傳が、眞に國家民族を思ふ至醇な心から出たものなら兎に角、(かりに、斯樣な思想の、多くは一種の迷妄に過ぎないものであることは措いて問はないとして、)若し、それが、彼等自身の虛榮や、利己心の傀儡であるやうな場合には、一般國民こそ全くいゝ迷惑である。

五、激烈な葛藤

兎に角、斯樣にして國家主義が成り立ち、それからさらに進化豹變して、帝國主義のやうなものに移行する。さうして、それは、人口が稠密となり、人類の接觸が密接となればなるほど惡性なものとなつて行く。吾々はその結果の一端を、日露戰爭に於て見、歐洲戰爭に於て見、更にまた、小さいながら、今回の日米關係に於て見ることができる。その他到る處に、此の種の葛藤は摘出し得られる。今後將らくの間、さういふ葛藤は、ます〳〵增大する險惡さと激烈さとを以つて繰り返へされるであらう。

これは、前にも一寸言及したやうに、國家といふものが分立して、環境の推移を無視し、(或ひはそれを感知せず、)單なる傳統的の關係から一定の國土を領有して、その上に勝手な權利を行使するといふやうな現狀の下では、全く不可避的に起らなければならない必然事である。

またアメリカの例をとるが、なるほど、今から百三十五年前(即ち、西暦千七百八十九年)に、合衆國が國を建てた折には、世界の人口が今のやうに稠密でなかつたから、東西二千

百里に亘り、南北千里・千六百里にも及ぶ広大なものであるこれは、己が先に來て繩を張つたところだから己の土地だ、範に入らない他國人は一切入つてはならない。と喧いたところで、別に大した差し障りのないかぎり、何處からも文句は出ないであらうが、しかしながら、昔もさうだつたから、今も、また、之から後ち末代までもさうだなどといふ段になると、理窟や感情はとにかく、（誰も、自分が得たものを自分が自由にするのは差支ないと思ふだらうし、また、既に持つて居る良い物を失ふのはいやであらうが、）それでは自然が承知をしない。

環境とともに世事が推移すれば、事は起らないが、さうでなければ、必らず其處に行き詰りが生じ、無理ができ、爆發が起る。然るに、一般の環境は絶えず推移し、流動するものであるのに、人世の個々の相は、ロッツの道破したやうに、とかく停滯しがち、膠着しがちなものであるから、兩者の衝突爆發は避け難い傾きを持つことになる。

かういふ理由から、吾々は、狹隘な地球の表面に生活すべく運命づけられた人類の將來に關し、一面大きな不安を感ずるものである。さきに人類の前途にあたつて暗雲が低迷して居ると云つたのは、此の事である。

六、世界主義の發達

國家主義及び帝國主義は、一面利己心の發露であるが、一面また經濟的の所産である、土地は狹くて、自己に閉ぢた國家は、多くは、眼を我のみに向けて、他を見ないため、或ひは知らないため、或ひは十分に理解して居ないためである。それゆえ、他に接して、よくそれを知り、それを理解すれば、本來、自由と活動と發展とを喜び、拘束と無爲と萎縮とを厭ふ人類は、自然に國際主義（インタナショナリズム）、世界主義（コスモポリタニズム）を迎へるやうになる。

古代に於ても、勿論、世界主義的の思想はあつたが、それは何れも、著しく卓越した智者によつてのみ唱へられた。釋迦でも、基督でも、孔子でも、皆一代の智者であつた。少なくとも、人間といふものを廣く、深く知つて居る智者であつた。人間を廣く深く知つて居る者に、小さな、狹苦しい、國家主義や帝國主義の思想が持てるものではない。智者の多かつた古代の希臘にも、世界主義はよく發達した。今、その二三の例を、ウエスターマークから引用し下に掲げてみる。

所謂「原子論」の完成者であつて、「笑ひ哲學者」と呼ばれたデモクリトスは、「善良なる人の故國は全地球である。」と言つた。キレーネ學派のテオドールスも、デモクリストと同じや

うな見解を所持し、國家に對する奉獻的の精神を嘲笑すべきものとさへした。また、キニーク學派は、特殊なる小國家の市民であることには價値を置かず、彼等自身世界の市民であると稱した。それから、ストア學派に屬するセネカは、「吾々は、すべて大宇宙の一員である。」と云ひ、マルクス・アウレリウス・アントニウスは、「若し、理性といふものが人類に共通なものならば、理性は、吾々に、爲すべきことと、爲すべからざることとを命ずるから、人類の生活には共通の法則があるわけである。それから、若し、共通の法則があるとすると、吾々は、悉く、同胞であるべきであり、さうして、さらに、或る共同なる政事的團體の成員であるべきである。即ち、世界は、一箇の大きな國家と見做すべきものである。」と云つた。

七、愛國心の進化

後代に至つして、人類の接觸が益す／＼緊密になり、相互の理解が進むに從ひ、此の世界主義的の思想はいよ／＼廣く廣まり、深くその根を下すやうになつた。一面から見ると、これはたしかに愛國心の進化といふことができる。

自分の生れた故郷にのみ留つて居る者は、その故郷を愛することより外知らないが、其處を離れて都會へ出ると、始めのうちは、故郷が戀しくても、しばらくして都會に馴れ、知人や友人などができると、何時とはなしに思鄕の念が薄らいで、現在住まつて居る所謂第二の鄕里ともいふべき廣い都會の方が懷しいものになる。恰度、それと同じやうに、原始時代に於て、生活團體の形式が、相互に交渉のない、個々別々の、移動的な小さな族であつたやうな場合には、まだ愛國心といふやうなものは出來上らず、たゞその族を愛する原始的な感情があつただけであるが、それ等の族が、或る一定の土地に定着して、互に交渉を開始し、ついに融合して一層大きなを團體を形成すると、以前、個々の族だけを愛して居た感情は、少しく發達して、新たに産れた大きな團體を愛するやうになる。それ等の團體が更らに合一して、結局國家と言ふやうなものができると、以前の團體心もまたそれとともに進化して、所謂愛國心なるものが完成する。

それから、人口の増加と交通機關の發達とにより、人類と人類との接觸が次第に密接になつて、全世界の人類の間に實際上人種の混淆が起り、言語も、風俗も、思想も類似して來るやうになると、何時か、自然に、國家の分界が不鮮明になつて、愛國心が次第／＼に、所謂「國際心」（インターナショナル、マインド）或は世界心（コスモポリタン、マインド）といふやうなものに移り變つて行く。吾々は、近來、殊に歐

[illegible]思想の甚だしく顕著になつたことを裏書する。この世界的表現の一例として挙ぐべきは、いふまでもなく、かのウイルソンによつて提示された國際聯盟の運動である。マルクス派の經濟學説や社會學説から胚胎勃興して來た勞働運動や、ボルシェヴィズムの運動なども、よほど特異な分子を含んでは居るが、矢張り、世界的色彩の濃厚なものである。

斯くの如くにして愛國心は進化する。愛國心が進化するなどと云つたら、國粋論者から抗議でも申しこまれるかもしれないが、さういふ事柄に對する是非の批評は別問題とし、それが善い事であつても、惡いことであつても、たゞ、事實がさうなつて行くのである。事實は批評を超越する。

八、一大轉換の時機

上に述べたやうにして、一方には國家的の愛國心が發達し、他方には、また、それと平行して、超國家的の世界心が發達する。しかし、此の兩者は、内容の相反することは勿論、その發生上、全く性質を異にするものである。即ち愛國心は、前にも云つたやうに、最初は兎に角、時代が經過して、環境の推移が進めば進むほど、それと（即ち、その環境と）相乖離反撥する[illegible]傾い、その[illegible]推移が進めば進むほど、自然にその[illegible]を増し、また[illegible]性を增して行く。前者には無理があり、後者にはこれがない。

倘ほ、此處に注意すべきは、これまで云つた愛國心は、名こそ立派な愛國心であるが、それは本統の愛國心ではなく、實は脱殻の愛國心であることである。ロッツの所謂骨化せる愛國心であり、迷妄の愛國心であり、自惚の愛國心であり、宣傳にあやまられたる愛國心である。表面國家を思ふが如くにして、内實は却つて國家を傷ふものである。殷鑑は遠からず獨逸にある。眞正な愛國心は決して世界心と背馳するもので無い。

それは兎に角、愛國心に依つて發達する國家主義や帝國主義には、前述の如く、根本に於て無理があるから、その無理が時とともに次第に鬱積し、激成されて、遂に爆發するやうになるが、かういふ帝國主義の行き詰りが、却つて、遂に、世界主義の發達を幇助するやうな結果を生むことになるのである。歐洲戰爭は、明らかに此の間の消息の一端を吾々に例證し、指示して居る。

智者は、さういふ結果を未前に察知するのであるが、非知者は、いよ／＼といふ最後の幕まで行かなければこれを覺らな

い。然るに、人類の大部分は斯樣な非知者によつて占められて居るから、自然のまゝに放置しておけば、勢ひ、事態は、其處まで進展して行くことになる。さうして、其處に至つて始めて一大轉換が可能となり、世界合一の機運が熟することになる。

九、人種別的超國家

世界合一の前に、人種別的超國家（即ち、有色人種の聯合國家、白色人種の聯合國家といふやうに、）といふものの成立も考へられないことはないが、しかしながら、それは、現在の國家分立の狀態以上に危險なことであり、從つてまた困難なことである。尙ほ、一般人類の間に於ける世界心の發達は、そんなやうな經路を經なくとも、直接に世界合一の狀態に到達し得るものと觀る方が妥當のやうである。

ラムゼー・ミュイアが、その近著「國家主義と國際主義」のうちで云つて居るやうに、「人種主義」（"Racialism"）（或る一人種が、系統的乃至本質的に他の人種より優良なりと思惟し、また、異なれる人種の間には、拔くことのできぬ根本的の反撥性が存在するものと信ずる主義。）は國家主義（Nationalism）よりも、より多く平和の攪亂者である。それ故、既に著しく覺醒しかけて來た人類の世界心は、人種主義を驅つて人種別的超國家を作成せしめ、それに極端な暴威を振はしめるやうなことを許さいであらう。

一〇、進化の歸趨

更らに之を、生物進化の歸趨の上から考察しても、世界の人類が、結局一つの渾然と統一された團體に融合すべきことの合理性を見出すことができる。

一般に、生物の個體には、著しい進化の極限性がある。始めは、非常な勢でその進化が行はれても、直きにそれは行き詰り、停息して了ふ。その例證はいくらでも擧げることができるが、さういふ現象の起るのは、元來、個體なるものが靜的に限定された小さなものであつて、從つて、その進化的の活動範圍もまた自然に極限されて居る爲めであらう。

そこで、個體（特に、結社會性の人類についていふ。）が、何時も活潑に進みつゝある行き詰らない進化を望むならば、どうしても團體を形成することによつて共目的を達すべきであるが、人類には勿論斯樣な希望要求があるので、さういふ關係からも、團體の形成進化が行はれるやうになる。

團體にもいろ〳〵の階級があるが、いま記したと同じ理由で、小さな團體の進化は直きに行き詰るから、人類は、次第次

[illegible]的に、小さな分裂から大きな合体へと移り、つひには、結局、[illegible]である世界国家といふやうな組織を建設することになるの
である。

二、國家分立の不利

尚ほ、文化主義の上から觀ても、國家が分立して對抗するといふことは非常に不得策である。國家が分立して居れば、どうしても、各自に十分の軍備をととのへなければならない。どんなに軍備縮少會議を開いて新たな協定をしたところで、それは、實戰の場合に國際公法が反古であると同じやうに、また、ウエルズが「ワシントンと平和の希望」の中で喝突して居るやうに、實際上は、殆んど何の役にも立たない。しかも、その軍備は、競爭によつて必要以上にいくらでも擴大膨張する。さうして、臆病な武士が無暗に丈夫な鎧を着て動きがとれなくなると同じやうに、國家もまた、その過重な軍備の爲めにすつかり疲弊して了つて、文化的の片輪者になるより外はない。

分立國家の狀態では、文化の進運が著しく阻害される。それは、それ〴〵の國家が、恰度八百屋のやうに、いろ〳〵の方面（其のうちでも殊に軍備）に徒らに勢力を分散濫費しなければならないので、自然に仕事が粗雜散漫となり、その集成的の能

[illegible]客觀的に於て、個人が、[illegible]

消化し、一般文化的に何等裨益する所がないと云ふ同一轍である。

しかし、若し、これに反して、人類が、相互の間に於つて居る不信や、猜忌や、侮慢や、野望を取り去り、逆茂木や鐵條網で固めた國境を撤廢して、握手を交換し、一意文化の向上の爲めにいそしめば、その進展は、眞に端倪することも出來ないほど目覺ましいものであるに相違ない。ウエルズは、その興味ある著書「文明の救濟」（The Salvaging of Civilization）のうちで、人類のかういふ境涯を叙して下のやうに云つて居る。

「全世界は吾々の棲家となり、闘爭から解放された人類の勢力は、科學的智識の蓄積と應用、別言すれば、人間自身の精神的及び肉體的健康、その能力と福利との增進の爲めに、ます〳〵多く使用されるやうになるであらう。云々。」

三、積極的な努力

これまで叙述したやうなわけであるから、地球上の人類は、何れにしても、結局、自然に、相接着融合して、一箇の統一された團體となるべきものである。前文に於て、自分が暗示の彼方

に一道の光明を認めると云つたのはこの事である。しかしながら、これを天然の成り行きに放任しておくと、さういふ最後の狀態に到達するまでに、比較的長い時間を要するのみならず、その間、無益危險な鬪爭を繰り返へして、徒らに生命（あらゆる廣い意味の）の浪費をなすに過ぎないし、また、その上、後章に於ても述べるやうに、將來、人類に對する自然の大なる反逆のあるべきことをも豫期しなければならないのであるから、吾々は、無爲な受働的の態度を取るやうなことをせず、積極的に進んで、一時も早く、新らしいエルサレムを地上に持ち來すやうに努力せねばならぬ。

C、人類の進化

一、特殊創造說と進化說

前二章に於て、自分は、世界の人口が、將來次第に增加し、それに因由して、つひに、全人類の合同がなるべきことを說いた。本章に於ては、さらに、生物進化の方面から、人類の將來を考察して見たい。

創造論者は、造物主である神が、天地創造の折、その萬能の力で、今まで何も生物といふもの丶無かつた處へ突然に生物（勿論、人間もそのうちに入つて居る。）を作つた。しかも、その生物は、太初に於て、既に、現在吾々の眼にふれると同じやうな形に作られたもので、其の後今日まで何の變化もなく續いて居る、といふやうに說くが、近代の新しい科學を少しでも學んだものは、誰もこの童話のやうな特殊創造說（Theory of Special Creation）を認容はしない。

總べての生物が、ラマークや、サン・チレイルや、ダーウィンなどの唱へたやうに、他の（一般に比較的下等な、）生物から、次第〳〵に變遷進化して來たものであることは、最早や全く疑ふ餘地もないほどに確かなことである。吾々人類も勿論その例外ではない。

二、二種の進化と二種の遺傳

人類は一方に於ては單獨な個體生活を送つて居るが、他の一方に於て社會生活を營むものであるから、その進化には、自然、個體的の進化と、社會的の進化との二方面が區別される。個體的の進化は、その步調が著しく緩漫であるが、社會的の進化は、非常にそれが速い。

それから進化といふことは、遺傳に密接な關係のあるものであるが、人類の遺傳には、やはり、上のやうな生活の狀態か

ら、コンの所謂生物的遺傳（Organic heredity）と此の一義は、あまり妥當な言葉でないやうに思はれるが、しばらく、假りに借用しておく。）と社會的遺傳（Social heredity）との二種類がある。個體的の進化は前者によつて起り、社會的の進化は後者によつて起る。

三、生物的遺傳

こゝでいふ生物的の遺傳とは、普通に所謂「遺傳」と呼ばれるものを指すので、例へば、音樂的の才能が親から子に遺傳したり、短指や多指といふ畸形が遺傳したり、髪の毛の色が遺傳したり、禿頭が遺傳したり、色盲が遺傳したり、肥胖病と云つて、無暗にでぶ／＼ふとる一種の病氣が遺傳したり、するのは、皆な此の部に屬する。

さて、生物的の遺傳は所謂生物の胚原質（卵及び精子の中にある根本物質）中に存在する一定の遺傳物質によつて支配されるものであるが、此の遺傳物質は、著しく外界の影響を受け難い性質をもつて居るので、或る個體の生物的遺傳は、その個體が、生活の第一歩を踏み出す時に於て、もつと的確に云へば、卵が精子によつて受精されたその瞬間に於て、既に、しつかり基礎をおかれ、決定して了つて居るのである。さうして、

その後に、民族、家庭、社會、等の[illegible]より、さういふ遺傳の根基の發達や[illegible]されるが、その根基そのもの、基礎そのものは、依然として變らない、

四、個體進化の遲緩性

上記の理由によつて、生物的遺傳は、一代ごとに最初の出發點に歸り、再び新たに發足して行かなければならないことになる。もう少し具體的な言葉で云つて見ると、本來一だけの遺傳質量を持つて居る者が、生後、環境の影響で、一•五の發達を遂げたとしても、この後に獲得した〇•五は、たゞ、そこに一時添加されたといふだけで、遺傳の根基に融合し得るものでないから、新たに生じた一•五の個體が子供を産む場合、その子供の遺傳質量は、一•五でなくて、やはり大體元の一だけになるのである。

此の關係は、生物的遺傳が、恰度、交代競走のやうに、前の者の到着點を出發點として順次に遞進して行く社會的遺傳とは、大いに趣を異にするところで、前述の如く、生物的遺傳に依據する個體的進化の遲々として進まないのは全くその爲めである。（ちなみに言ふが、此處に記した個體的進化の遲緩性と、前章「進化の歸趨」の項下でのべた個體進化の極限性とは、互ひにそ

の性質を異にするものである。）

五、社會的遺傳

つぎに、社會的遺傳は、人類が社會生活を營むために起る一種の遺傳現象であつて、その最も簡單なものは傳承（トラディション）である。人間が、生れて直ぐに親と離れ、その後また、他の人間と全く接觸する機會を持たなければ、その人には、所謂社會的遺傳なるものゝ發達する余地がない。しかし、人類は、哺乳動物のうちでも、その發育が殊に著しく遲く、從つて、無力な幼兒時代が長期に亙るので、親の厄介になることが非常に多い。また、そのため、自然に家族生活の發生を促がし、親や同胞から、いろ／＼の智識を見聞修得することになる。

斯樣にして、他から修得した智識に、更らに、一生中、自己の經驗によつて集めた智識を追加し、そこに或る個人の智的內容が完成するのであるが、さういふ集成的の智識は、また、前のやうにして、その後裔に傳へられて行く。これが、社會的遺傳なるものゝそも／＼の發端である。

後代に至り、人間の互に相交涉する範圍が廣くなればなるほど、卽ち、その社會生活が、大きく、複雜になればなるほど、此の社會的遺傳もまた大きく成長する。文字や印刷術が發見されたり、交通機關が進步するやうになれば、ます／＼その發達が盛になる。

六、迅速な進步

なほ前にも一寸言及したやうに、社會的遺傳は、生物遺傳とは全くその趣を異にし、前代に到達した最後の處を出發點として進行するものであるから、その進步は非常に迅速である。親が一生涯かゝつて、やつとの思ひで獲得した財寶を、（それが精神的のものであつても、また物質的のものであつても。社會的遺傳のうちには、いふまでもなく、精神的のものとゝもに、物質的のものも含まれる。）子供は、產れながらか、或ひは、少し成長すると、もうそれを承け繼いで自分のものにする。さういふ關係から、今の小學校の子供は、アリストートルとか、ガリレオとか、ニユートンとかいふ昔の大學者が、腦漿をふり搾つて考へ出した六かしい學理を、十か十一でちやんと知つてゐる。いや、それればかりでなく、それ等の哲人の知らなかつた事柄をも澤山に知つて居る。

それから、人類の系統的年齡はこれを他の動物に比べると、極めて若少なもので、眞正人類が此の地球上に現はれてからまだ數萬年にしかならず、歷史以後の年齡は、僅かに數千年に過

きない。(淺海の砂泥中に棲んで居るシャミセンガヒといふ腕足類に似た小さな動物は、何千萬年といふ遠い昔から、連綿としてその種的壽命を保つて居る。)系統的に、見て、そんなに若い人類が、現在吾々の眼に映ずるやうな立派な文明を築き上げたのは、全く、此の社會的遺傳の賚である。それゆゑ、文明は主として、社會的遺傳によつて進歩するといふことができる。

さういふ次第であるから、將來、世界の人類が合一して、相互の交渉が、好良な狀態に於て、いよ〳〵緊密となり、エナーヂーの濫費が消滅すれば、社會的遺傳は、現在よりも、もつともつと急激な勢で、進展し、人類の社會進化の上に、吾々の想像することもできないやうな、革命的な變化を打ち來すに相違ない。

七、優生學の使命

今、自分は、人類の個體進化はその歩調が緩漫であつて、文明の進歩は、主として、歩調の急速な社會的進化によつて行はれると云つたが、しかしながら、將來、若し、吾々が、恰度、園藝家や畜産家が、野菜や、果樹や、家畜の類を改造するやうに、人類自身の根本的素質を改造することができれば、此の方面に於ても必ずしも悲觀する必要はない。いや、吾々は、その[illegible]園藝家や畜産家は[illegible]新たに自由に[illegible]物の改造を行つて居る。一例を擧ぐれば小麥のうちには、善い穀物をば供給するが、しかし、「ラスト」病と稱する一種の菌類に因る疾病にかゝりやすい性質のものと、穀物の點からは善くないが、「ラスト」病に對する抵抗力の強いものとある。ところが、ビッフェンは、此の兩者をかけ合せて、たうとう、一方に於ては善い穀物を實らせ、他方に於ては、同時に、「ラスト」病に對して强い抵抗力をもつた、理想的の小麥を作り出すことに成効した。その他、例はまだ澤山にある。殊に、オーストリヤの僧侶のメンデルが發見した遺傳學上の所謂「メンデル法則」が、廣く學界に紹介されるやうになつてから、農業上に於ける原種改良の方法は理論的の基礎を得て、目覺ましい進歩をするやうになつた。

人類も生物の一種である以上、理論上、上のやうな選擇、雜交、淘汰の方法によつて、その改造を期し得べきことは明らかである。こゝに近來やうやく人の注意を引くやうになつた優生學の立場があり、またその大きな使命がある。

八、人類素質の低下

現在、吾々人類の狀態が、優生學的に觀てよほど憂ふべきものであることは、すべての專門學者の一齊に唱へるところである。一々の場合については、必らずしもさうとは云へないが、概括的にいふと、優生學上比較的に優良な素質を持つて居る者（即ち、一般に、社會の表面に立つて働いて居る者。殊に智能のすぐれた有爲な者、）は、その持つて居る子供の數が少なく之に反する者はそれが多い。アメリカでは、曾て、一家庭に於ける子供の平均數は八人であつたが、目下、大學卒業者の家庭に於ける子供の數は僅かに二人である。英國では、上及び中流階級の子供の數は一・九人の割合であるのに、不熟練職工の家庭の子供數は二・三になつて居る。日本でも、どん底生活をして居る貧民窟へ行くと、子供の多いのが殊に眼につく。トムソンの云つて居るとうに、「部屋の形が小さければ小さいほど、其處に住つて居る家族は大きい。」といふ矛盾な現象が見られる。

それは何故であらうか。その原因は、一概には言ひ得ないかもしれないが、多くの專門家が信じて居るやうに、主として・・方（即ち優良な素質の者の家庭）には產兒制限（必らずしも受胎調節とはいはなくとも、）が行はれ、他方にはそれが行はれて居ない爲めであらう。

兎に角、さういふ狀態であるから、これを現在のまゝに放しておくと、英國優生教育學會の會頭であるレオナード・ダーウエンも憂いたやうに、將來の人類は、優生學的に不良な個體によつて多く代表され、その一般的素質が著しく低下して行くに相違ない。これはたしかに、一種の所謂「人種的自殺」であつて、決して輕々に看過すべき事柄ではない。茲に於て、優生學は、非常な要緊性を帶ぶることになる。

九、素質の改善

優生學は、その鼻祖ともいふべき英國のフランシス・ゴールトン（進化論の完成者チャールズ・ダーウインの從弟）の云つたやうに、「將來に於ける人種の、肉體的及び精神的性質を改善若しくは毀損すべき種々なる事柄――それは、社會的制約のもとにあるもの――を研究」し、人種の一般的素質の向上に資する學問である。もつとも、此の文中にある「人種の性質」といふ言葉は、それよりもつと廣い意味の「人類の性質」といふ言葉に置き換へらるべきものだと自分は思ふ。

ついでにいふが、優生學は、一部の者が誤解するやうに、決して環境（Nurture）を無視するものではない。たゞ新らしい遺傳學の研究により、從來、比較的に閑却されて居た素質（Na-

[illegible]の劣惡進化の不可能な所以を知つて、素質の改造を高調するのである。人類の生活を主として經濟學的に觀察し、從つて、環境の改善のみを以て總べての社會問題を解決し得るやうに信ずる傾向のある社會主義者は、よく、優生學を、共不倶戴天の敵であるブールヂュワ階級の宣傳か提灯持であるかに考へるやうであるが、これはいふまでもなく甚だしい謬見である。

環境の改善と素質の改善とは、どこまでも、相寄り、相扶けて、人類を最終のゴールまで導いて行くべきである。

一〇、優生學の實際

前すでに述べたところからも分ると係り、人類の性質は遺傳物質によつて支配決定されるものであるが、その遺傳物質は、胚原質（即ち卵及び精子を構成する根本物質）のうちに存し、しかもそれは、外圍の影響を受け若いものであるから、一方、優良な胚原質を選んで適當な配合をするとともに、他方また不良な胚原質の削除消滅を期さなければならない。

こゝに於て、問題はおのづから二途に分れる。一つは、優良胚原質の保護增殖を計る積極的な方面であり、他は、不良な胚原質の除去を計る消極的な方面である。

[illegible]ふに、これは消極でなくて却つて積極である。[illegible]計るといふことも勿論等閑に附すべきではないが、これよりも緊急な事柄は、惡質者の處置である。

惡質者の處置については、いろ／＼の方法があるが、目下、優生學者の間に一般に認容されてゐる最も合理的な方法は、こ[illegible]の隔離である。即ち、優性學的に劣惡な素質の所有者と認められる者を適當に隔離して、これから産兒の可能性を完全に取除くことである。かういふ思想の萌芽は、希臘の古代に於て既にプラトーンが懷いて居たのであるが、しかしながら、それには、勿論、今のやうな、優生學的の堅固な基礎があつたわけではない。いはば、それは、一箇の漠とした常識的な思想であつた。それで、彼が、社會から削除すべしと唱道した弱兒も、優生學的に見ての惡質者でなければならないのはいふまでもなく、またその削除も、隔離といふ意味に於て始めて認容すべきである。

一一、超人の世界

社會主義が、環境の充實善美を理想とするやうに、優生學は所謂「超人」の世界の出現を理想とする。此の點に關し、一[illegible]

は、超人の產出を企圖して行はるべきである。」と云つたニーチエは、たしかに一箇の優生學者であるが、しかし、ニーチエの唱へる超人は、生物學的にいふと、一種の所謂突然變種的の人物であつて、比較的、極めて稀に現はれるものであるのみならず、また、それは、よほど動物的色彩の濃厚なものであるから、將來に於ける人類社會の成員としては、實際的價値の少ないものである。吾々の要求するところは、優生學的に精選された、もつと普通な、さうしてもつと人間的な超人である。

勿論、人間は、いろ〳〵の關係（例へば、その作りあげた道徳や、自尊心や、因襲等）から、他の動物や植物の如く、これを實驗的に取扱つたり、また、人爲的淘汰の對象としたりすることが困難である。此の事實は、優生學の一つの大きな弱點であり、從つて、その發達の遲れた所以でもあるが、しかしながら、本家の英國ではいふまでもなく、殊に歐洲大戰後、獨逸などでも盛んにその必要を說き、また、米國あたりでは、疾うから優生學的の法律さへつくり、移民問題をもその立場から論ずるといふやうな有樣であるから、今後、世界の人口が漸次增加するに從ひ、優生學は、ます〳〵その必要さを加へ、理論實際の兩方面に於て相當進步發達を遂げ、結局、人類の根本的改造の上に或る程度の成果を齎らすやうになることは確であらう。

さういふやうに、「優生學的に改造された超人のやうた」が、何時か實現すべき世界國家の成員となつた頃に於ける地の表面の賑はしさを想像すると、何とはなく、ウエルズの「神のやうな人々」の國へでも行つたやうに、一種爽快な氣が胸に溢れて來るのを覺える。

D、種としての人類の壽命

一、生物の生滅

地球上に棲息して居る動物は、之を所謂種（スペシース）の方面から眺めても、一般に、何時までも同じやうな狀態を持續して存在するものではない。殆んどすべての種は、恰度、個體と同じやうに、或る時に生れ、或る時まで發育し、或る時まで榮え、つひに亡びて、無くなつて了ふ。（尤も、此の點については、かならずしも、スペンサー流に種類を一箇の生物（オーガニズム）――個體――と見做し、個體に普遍的の死があるから、種類にもそれがあるべきだと推論するのではない。たゞ、廣い立場から見ると、事實が斯樣になつて居ると云ふのである。）また、たとひ、全く絕滅はしなくても、何か形や性質の異つた他の種類に變化して、結局、その種類としては絕滅したと同じやうな結果になる。さきに掲出し

[illegible]
る者は稀である。

なほ、この事柄は、單に、一々の細かな種類（スピーシス）についてばかりでなく、もつと大きな生物學的の部類についても同樣である。

二、その例證

今、二三の例を擧げてみると、蝦や蟹などに縁の近い節足動物中の三葉蟲（トリロバイト）といふ蟲は、地史學上前生代（プロテロゾイック）と稱する甚だ古い時代（今から何千萬年か前の昔）の海の中で、それよりはもつと下等な動物（恐らくは蚯蚓の類の環節動物）から進化して出來、その次の時代の古生代の初期では、非常に盛んに繁殖して、隆昌を極めたが、そのうち、烏賊や魚類が出現するに及んで次第に衰運に趣き、つひに、同時代の末期に於て全く絶滅し、現在は勿論一つの殘存者も無い。

つぎに、最も著しいのは、所謂恐蜥（ダイノサウレス）と呼ばれる奇異な爬蟲の消長である。恐蜥は、その巨大な體や、怪異な形のために、一般の興味を引いた面白い動物であるが、それは、古生代の次にあたる中世代初期の三疊紀と稱する時期（今から一千何百萬年前）に、その初發性のものが初めて此の地球上に現はれた。

現はれるとほどなく、此の動物は、忽ち熾んな發達をして、[illegible]

[illegible]「[illegible]」の時代[illegible]といふ[illegible]くのもの[illegible]、

次の哲生代に移らぬうちに、悉く滅亡して、一つもなくなつた。

其の他、類似の例はいくらでもある。

三、絶滅の原因

どうして、かういふやうな、大きな、生物の變遷消長が行はれるのであらうか。

古生代の海に於ける無力な三葉蟲の滅亡については、或ひは、活潑で侵略的な烏賊や魚類の發達に、その直接の原因を覓むべきであるかもしれない。

恐蜥類の絶滅については、いろ〳〵の異説がある。或る者は、それは、恐蜥自身のうちに於ける激烈な種類內鬪爭の結果であるといひ、他の者は、當時次第に發生して來た比較的小形な肉性哺乳動物が、彼等の子供、殊に卵を盛んに食害した爲めであるといひ、更らにまた他の者は、氣象上の著大な變化、殊に濕度の激變が、低濕度に對する抵抗力の弱い恐蜥の滅亡を誘致したと稱へて居る。なほ、中世代の末期には、廣範圍に亘る陸地の隆起が起つたが、その爲め、當時內海の[illegible]に被はつて居

た恐蜥類は、その棲息地を失ひ、結局絶滅の厄に遭ふやうになつたと說く者もある。

何れにしても、之等の諸說は、恐蜥絶滅の原因を、周圍のうちにもとむるものである。一般にいふと、生物絶滅の原因は、恐らくは、何時も一定せるものでなく、時によつて區々であり得るであらう。また、その原因は、たゞに外的なものばかりでなく、生物自身の裡に潛んで居る內在的なものもあるであらう。

しかし、たとひ、その原因が何であらうとも、地球の表面に於ける一々の生物の種的生命が、決して無限に永續するものでなく、地史學的に見ると、多くは、寧ろ、比較的短かい期間內に限定されて居るものであることは、明らかな事實である。

四、人類の場合

然らば、此の點から見た人類の壽命はどんなものであらうか。

人類は、本篇の冒頭に於ても一言したとほり、地史學上の最新時代である新生代に至つてやうやく此の地球上に形を現はしたもので、假りに、人猿中間の動物である「ピテカントロープス」をその初發性のものとしても、發生後僅かに約五十萬年にしかならず、總べての動物のうち、系統的に最も若い者であるといつて差支へない。

それゆゑ、廣い、種的壽命の上からいへば、人類は、まだほんの、産れたばかりの嬰兒の狀態であつて、近く外圍からの致命的打擊が無いかぎり、今後なほ、かなり長期に亘つて、それが繼續するであらう。（恐蜥にしても三葉蟲にしても、その壽命は、何百萬年も、或ひは一千萬年以上も續いたのである。）

五、人種滅亡の實例

人類全體の壽命は、そのやうに、まだよほど長いものと見て差支ないが、しかしながら、人類中の小區分である人種（所謂Raceのみを意味するのではない。）の壽命は、必らずしもさうでない。有史以前の太古時代に於てすでに絶滅して了つたものが澤山あるし、有史以後になつてから絶滅したものもあるし、また、現在、絶滅しかけて居るものもある。

即ち、假りに、「ピテカントロープス」を一種の人類として取扱ふならば、それは、ジャワから化石が一つ掘り出されただけで、その後再び發見されず、勿論、目下その代表者と見做すべき者も生存して居ないから、此の種は、新生代中の所謂第三紀と第四紀との中間頃に一寸現はれ、程なく亡びて行つて了つたものと見なすことができる。

今から約二十萬年乃至二十五萬年前に生存して居た「ハイデルベルヒ人」についても、類似のことがいへる。それから、今より約十萬年前の「暗人」は、所謂第四紀大氷雪時代の終り頃に、(恐らくは、その沍寒な時代の困危に堪へることができなくて)、絶滅して了つた形跡がある。

それより更らに後ちに現はれ、洞窟の中などにいろ〳〵の遺跡を殘した「原人」も、今から、約三四萬年前、吾々の本統の祖先である眞正人類が現はれると、これまたその跡を斷つて了つた。

六、タスマニア人とアイヌ

有史以後に絶滅した人類には、有名なタスマニヤ人がある。此の人種は、吾々と同じやうに、眞正人類に屬する一小分派であるが、早くよりタスマニヤのやうな僻遠の島に移つて、他人種と接觸せず、全くの隔離狀態にあつたので、その文化程度は極めて低く、西暦千六百四十二年の十二月一日に、和蘭のタスマンが始めて其處を訪れた時、彼等はまだ太古のまゝの原始的な石器時代生活を送つてゐた。

その後、同島が始めて英國の領土となつた時の統計によると土人の數は總べてで五千人もあつたが、それから次第に減少しつひに、今から[illegible]年ばかり前に、[illegible]の最後の一人が息を引取つて以來、地球上から、タスマニヤ人の影は全く拂拭されて了つた。

次に、現存して居る人種のうちで、絶滅の運命に瀕して居るものゝ適例としては、吾々とは特に親しみの深い、あのあはれなアイヌを擧げることができる。彼等は他から何等の攻擊や虐待を受けて居ないに拘らず、年とともに次第に衰微縮小しつゝある。さうして、早晩、タスマニア人と同じやうな運命に逢着すべきものであることは推知するに難くない。

七、生物學的歷史觀

歷史家は、民族の興亡について、その原因を、よく、文弱遊惰な文明と、質實剛健な文明との衝突といふやうなところに覓めるが、近代の生物學者は、(少なくともその或場合に關し、)もつと具象的な、生物學的說明をそれに試みようとする。即ち、或る民族の衰亡するのは、しば〳〵それが、他の民族と接觸して、それから、彼等にとつては、致命的な、所謂「民族的毒物」("Racial poisons")を輸入する爲めである、といふのである。

民族的毒物とは、その民族の一般的退化衰亡を誘致する

な物質乃至疾病を指すので、例へばアルコールであるとか、阿片であるとか、結核であるとか、黴毒であるとか、その他廣い範圍の傷害を民族の上に及ぼすいろ〳〵の傳染性疾患などは、皆な此のうちに含まるべきである。

しかし、此處に注意すべきは、之等の毒物も、その總てが、總ての種類の民族にとつて、一樣に有害に作用するわけではないといふことである。例へば、マラリアの病毒は、西部アフリカの黑人には、殆んど何等の傷害をも與へないが、白人に對しては、それが著しく猛威を振ふ。これに反して、白人は、痲疹の毒に對して強い抵抗力を有つて居るが、アラスカに居るインデアンは、直ぐその爲めに仆れて了ふ。勿論、かういふ差別的抵抗力の存在は、それ〴〵の民族が、當該毒物に接觸する機會の多寡に關し、それによつて受けた自然淘汰の緩嚴に原因することであらう。

それは兎に角、生物學者は、斯樣にして、民族の興廢が起る場合があり得ると說くのである。サリービーなどもしきりにそれを唱へ、コツケレルなどもそれを力說して居る。

なほ、ロナルド・ロツスは、古代希臘のあの輝くやうな文化が衰退して再びまた還つて來ないやうになつたのは、希臘人が戰勝の結果、他國から連れ來つた劣質民族が、マラリアの病原蟲を移入し、一方、抵抗力の弱い純粹な希臘民族を仆すと[illegible]に、他方に、それ等劣質民族の混血兒（それはマラリアに對し抵抗力の強い）を殘して、一般希臘民族の素質を著しく低下したためであるとさへ云つて居る。

八、自然は種を愛護する

さういふやうに、人類の內部に於ける小區劃である人種民族には、比較的短期間に表はれる興亡盛衰があるが、それは人類全體としての壽命にはあまり影響を及ぼさない。每年〳〵、到底數へつくすことのできぬほどの澤山な鰯や鰊が人間によつて捕へられ、更らにそれ以上の澤山な者が自然の狀態で死につゝあるが、鰯や鰊の種類は、そのため決して盡きないと同じやうに、戰爭や、病氣や、避姙などで、人間の數が、一時、積極的若くは消極的に減らされたところで、人間といふ生物學上の種が、その爲めに全く無くなつて了ふやうな虞れは斷じてない。自然は、個體をばかなり殘酷に取扱ふが、種類をば著しく愛護するものである。

九、人類以上の動物が現はれるか

人類の種的壽命を述べたついでに、將來、人類以上の動物が

現はれるかどうかといふことを推察してみ[illegible]
かういふことは、一寸考へたところでは、殆んど問題にならない事柄のやうにも思はれる。多くの人達は、恐らくは、「そんな馬鹿な事が」と云つて、一笑に附せられるであらう。しかしながら、それは、物事を、たゞ眼前の短少な知見から推斷し、批判するからであつて、もつと廣い立場から觀察すると、決してそれが、それほど荒唐不稽な問題でないことが明らかになつて來る。なぜといふに、古生物學の教へるところに從ふと、長い地質時代の間には、次から次へと、絶えず新らしい違つた生物が現はれて、古い者と置き換つて居るし、また、進化説は、他の方面からも、生物の變異性、進化性について、決定的の權威ある論證を吾々に提供するからである。

つぎに、此の問題は、おのづから左の二つに分れる。即ち、その一つは、さういふ動物が、人類以外の動物から進化して出て來るかどうかといふことであり、他の一つは、それが、人類自身のうちから出て來るかどうかといふことである。

まづ、最初の方から考へる。

一〇、人類以外の動物から出て來るか

生物は、概して、下等の者から高等の者へと進化するもので[illegible]何時も一本の道を進んで、先から先へと進んで行くのではなく、多くは、途中から、二叉したり、三叉したり、思ひ〳〵に別な方向を取るので、結局、それは、複雜した樹の枝の有様な形を示すことになる。從つて、高い處から先に出た枝が、何かの原因で、十分に發育しなかつたり、枯れたりするのに、後ちに下の方から出た枝が、どん〳〵と伸びて、先の枝を追越したりすることは勿論あり得る。例へば、動物學上、鳥類は、爬蟲類より高等であり、哺乳類は、また鳥類より高等なものであるから、進化の經路が若し眞直なものとすると、哺乳類は鳥類から進化して出來べきであるが、化石の示すところによると、實際はさうではなく、哺乳類も鳥類と同様に、(その分派出限の時代は互ひに相異するが)爬蟲類から進化發達したものである。それゆゑ、さういふ關係からいふと、將來人類以外の動物から、人類以上に高等な動物の現はれる可能性の絶對にないわけではないが、しかしながら、豐かな社會的遺傳をもつて、異常な進歩を遂げた(また將來も遂げべき)人類は、たとひ斯様な動物が現はれかけて來たところで、恐らくは、その十分な發達を許さないであらう。從つて、此の方面からの高等な動物の出現は、まず無いと見て差支あるまい。

一一、人類中から出るか

次は、人類自身のうちから、今の人類に比べると、生物學上全く別種と云つてもいゝほどに高等な動物が出來はせぬかといふ問題であるが、此の點についても、コンクリンが、その著「人類進化の方向」の中で説いて居るやうに、やはり、大體否定的の推論が導かれるやうである。

生物界には、ド・フリースの所謂「突然變化(ミューテーション)」なる現象があつて、或る種の生物が、突然に著しく變化し、今まで無かつた新らしい種類を起成せしめることがある。(ド・フリース派の學者は、ダーウイン派の者に對して、これこそ、生物進化の主要な根本條件であると云つてゐる。)此の種の突然變化は、人類にも勿論起り得るものであるが、しかしながら、それを捕へて一箇の永續的な獨立種を作る爲めには、その當該個體に、非常な注意を拂ひ、干渉をして、嚴重な隔離や淘汰を强ひなければならない。ところが、人類は、著しく雜交性な動物であるから、折角起つたさういふ突然變化も、それを完成したり、またその純粹性を維持したりすることが、よほど困難である。

なほ、これまですでにしばしば述べたやうに、將來、人口の增加にともなひ、人類相互の間の關係がますます密接となるので、雜交の機會も從つて多くなり、如上の變種確立は、いよよ困難になつて行く傾きがある。

さうはいふものゝ、また、自分は、此の問題について、コンクリンほど悲觀して居るものではない。(コンクリンは、「人種の水準は、將來に於ても、現在のまゝの狀態を保つて、それ以上にはあまり出ない。」と言つて居る。)將來の人類は、人口の增加に因る一般生活の逼迫と、莫大な社會遺傳の蓄積に因る著しい社會進化とに促がされて、相當な、優生學的の改造を遂げ得ることと自分は信ずる。

之を要するに、今後、地球上に、人類以上に著しく高等な、別種の動物の現はれるやうなことは萬々あるまいが、しかし、社會進化の結果、外面的に、現在の人類とは全く別樣の觀を呈する者や、また、優生學的に向上せしめられた一種の超人的人類の出現は、これを豫察することができる。

E・自然の反逆と人類

一、流轉する宇宙と人生

宇宙の相は、一刻として、靜止して居るものではない。次から次へと、限りなく變化し、流轉する。吾々がちよつと瞬きを

するその期間に於ても、地球と太陽との位置的關係にもまた變つて行く。流星や、彗星や、恒星との關係も變つて行く。その他、宇宙間に存在するあらゆる天體との關係も變つて行く。さらに、地球自身のうちを見ても、同じやうなことがいへる。絶え間なき相互關係の流轉、それが宇宙の實相である。

地球上に於ける吾々人類の生活も、さういふ宇宙の相の一片鱗であるから、それのみひとり恒久不變であり得る道理はない。人生が、何時までも今のやうな狀態を持續するであらうと思ふのは、大なる迷妄であり、誤謬である。

二、地球自身の變化

自分は、前數章に於て、人類自身が、今後どんな變化をすべきかについて概略をのべた。本章に於ては、さらに、地球自身のうちに、將來どんなやうな變化が起り得るか、さうして、それが、人類に對してどういふやうな影響を及ぼすかを考へて見る。

もつとも、此の方面の問題は、拙著「世界の終り」のうちで特別にそれを取扱つて居るから、こゝでは、反復を避けるために、たゞその梗概を抒べるだけにとゞめておく。

三、地殻の震動と火山活動

地震は、昨年の災變があつてから、著しく一般世間の注意を引くやうになつた。専門家でさへ、近くまたそれが起るといつたり、起らないと云つたり、大分に騒いだが、しかし今のところ、畢竟、それは、皆な一種の推察であつて、的確な斷定ができるわけはない。併し、廣い立場から見て、これだけのことはたしかに云ひ得る。即ち、ずつと遠い未來に於て、地球が全くの死塊になつて了つた時には、最早や、地震も火山爆發も永久に跡を絶つであらうが、その内部に活動性の熱火の包藏されてある間(その期間はまだかなり長く續く。)は、地殻の動揺は繰り返されると。(地殻の動揺は、必らずしも、直接皆な地心の熱火に原因するといふわけではないが、その著大なものは、直接間接、恐くそこにその原因を有つて居る。)

此の種の地殻的動揺のうち、吾々人類にとつて最も恐るべきは、大規模にして突然な水陸兩界の位置轉倒である。さういふ大規模な地殻の動揺は、地質時代に於て既に起つた證跡があるが、今後もまたその絶無を期することはできまい。

四、陸地の消滅

今、地球の表面は、水陸の二部に別れ、しかもその海には、著しく深淺があり、陸にも甚だしい高低があつて、形が非常に不規則であるが、曾ては、其處に、未だ顯著な陸地なるものがなく、地球全體が、ほゞ同じやうな深さの（勿論比較的に淺い）水を以つて、一樣に被はれて居た時代があつたやうである。陸界の出現は、後ち、主として地球の冷却收縮につれ、地殼に皺襞を生じたのに基因する。かういふ點から、水陸の分離確立は、地球進化の一道程であるといふことができる。

しかし、また、現在陸地の表面をなす土壤や岩石は、雨や、風や、霜や、氷や、乃至はいろ／＼の生物などの働きで、絶えず少しづつ侵蝕され、河水によつて結局海へと運ばれて行く。之等の個々の作用は勿論小さなものであるが、長い間、間斷なくそれが働らくので、その集積的の力は非常に大きい。北米合衆國の河川が、年々陸から海に運んで行く砂泥だけでも、その目方が、七億八千三百萬噸といふ莫大な量に上るといはれて居る。

それゆゑ、若し、地殼が、何時までも、内部からの原因によつて變化しなければ、此の方面の作用の爲めに、陸地は次第／＼に鎮磨せしめられて、その容積を縮小するのみならず、同時にまた、砂泥の逐次堆積の結果、逆に、海水の氾濫をも蒙つて、結局、地表悉皆水といふ太初の狀態に復歸するやうなこともあるかもしれないが、しかしながらかういふ變化は、極めて徐々にくるものであるし、また、地球が全然枯死せぬうちは、陸地の隆起が行はれて、それを調節する機會もあるから、此の問題は、人類の生活にとり、さして關心事とするには足らない。

五、水及び空氣の凍結

一般に、天體の周圍には雰圍氣が發生するものであるが、天體の形が小さくて、それを引き留める力（引力）が弱ければ、その雰圍氣の分子は、本來の性質により、一つ／＼空間に飛び去つて無くなつて了ふ。さういふ理由で、體形の小さな吾々の月や水星には、殆んど、或ひは全く、空氣といふものがなく、火星には、比較的に稀薄な空氣があるばかりであると信ぜられて居る。

吾々の地球は、幸ひ、空氣の散佚を制御するだけの大さ（質は質量、目方）を有つて居るので、將來それを全く失つて了ふやうなことはあるまいが、しかしながら、太陽衰微の結果、地球表面の溫度が著しく下降すると、まづ、氣層中に包合されて居る水分が凍結して堆積し、再び溶融することがないから、水界の循環が停止して、流動體及び氣體の狀態に於ける水がな

くなつて了ふ。

それから、さらに極端な寒冷が襲つて來ると、空氣自身がつひに凝結して、呼吸の用をなさないやうになるであらう。

此の點は、陸地の消滅と反し、人類の生活にとつて、致命的の脅威である。

六、氷雪時代の再現

これまで、地球は、何遍も〱、所謂氷雪時代の來襲をうけたことを地質學が吾々に教へる。その都度、地球の表面は、廣大な地域に亘り、長い歳月の間、何百尺、何千尺といふ厚い厚い氷雪の層に閉されて、當時の生物界は、そのため、勿論、革命的の大變動を蒙つた。

此の氷雪時代の起因については、今のところまだ確定した說はないが、それは、前項に記したやうな太陽の一般的衰頽に因るのではないから、比較的近い將來に於て、再びそれが起つて來るかもしれない。いや恐らくは起るであらう。

氷雪時代の來襲に依つて受ける人類の困厄は、今から十分に之れを想像することができる。たとひ、（從來もさうであつたやうに、）地球の表面の一部に、氷雪を以て被はれないやうな處があるとしても、增加せる人口と、利用地域の激減と、一般氣温の低下とは、甚だしい苦しみを我々人類の上にもたらすに違ひない。人類のうちの多くの者は、その際、此の自然の大きな淘汰者の手によつて淘汰されて了ふであらう。

さらに、マツケーブの所謂「永久的氷雪時代」（Permanent Ice Age）が現はれるやうなことがあれば、（その出現は疑問であるが、）それこそ、人類にとつて、たしかに最後の難である。

七、衝突の危險

次には、地球と天體との衝突が考へられる。

地球は、恐ろしい勢で空間を疾走しつゝある宇宙の旅人のやうなものであるが、その空間の中には、地球の外に無數の天體が散在して居るから、自然、その旅路の上で、それらの天體と邂逅衝突する機會があるわけである。

此の種の衝突のうちで、最も恐るべきは、惑星型以上の大形の天體及び星雲との衝突である。衝突の結果は、人類は勿論、地球自身がまた、完全に破壞されて了ふ。

かういふ出來事は、天文學者のいふやうに、非常に稀なことであるには相違あるまいが、しかし、長い期間のうちに、絕對にそれが無いとは誰も斷じ得ない。

八、全地球的爆發

地球はまた、將來、その內部に鬱積して居る所謂「原子力」の爆發によつて、微塵に粉碎されるやうなことがあるかもしれない。

原子力は、物質の基礎をなす原子の中に潛んで居る偉大な力であるが、その研究の歴史がまだ比較的に淺いので、知見も十分でなく、從つて、今こゝに記したそれに因る地球の爆發といふことも、勿論一個の想像ではあるが、しかし、また、それは、單なる架空な想像では決してない。

しかも、此の爆發は、その時期の不明である點が、自然に一層の不安を伴ふことになる。それから、それによる地球の破滅は、他の天體との衝突の場合と同樣、或ひはそれ以上に、徹底的なものである。

九、絕對寒冷の支配

終りにのぶべきは、太陽の衰滅に緣由する宇宙的寒冷の地球支配である。

太陽は直經約八十六萬哩、その表面の溫度が攝氏の六七千度にも達する（內部は更に甚だしく高溫）巨大高熱な火球であつて、何千萬年といふ遠い昔の地質時代以來、殆んど同じ熱さで爛々と打ち輝き、全く無盡藏の光熱を包藏して居るかに見えるが、しかしながら、窮極するところ、その光熱も、發散の結果、次第に衰退して、つひに一個の暗黑な死星となるべきは、疑ふ餘地もないほどにたしかなことと云つて差支ない。

宇宙の間には、そんなやうにして死に瀕して居る星や、また、すでに全く死にはてゝ、吾々の視界に入らないやうな星が澤山にあるのである。

それから、天體と天體との間の廣い空間には、恐ろしい、絕對無熱な、宇宙的寒冷の狀態が支配して居るが、太陽の活力が衰へて來ると、（實は、さういふ太陽活力の最初の衰微もまた、此の寒冷の執拗な攻擊の結果である。）侵略的なその寒冷は、忽ちその猿臂をさしのべてこれを捕へる。

盟主である太陽が、斯樣にして宇宙寒冷のために征服されるやうになれば、それに隷屬する小さな地球も、勿論同樣に、その支配下に立たなければならない。しかも、此の事の起ると否とは、たゞ時間の上の問題であつて、その必至を誰も否認することはできない。

そんなやうな狀態になつた地球は、いふまでもなく、最早や全く、その懷に生命をはぐくむ力を失つて居る。その他の、比

較的小規模な自然の反逆をたくみに切り拔け、或ひは避け得て來た生物も、こゝに至つて、悉く、一樣に、その生命の放棄を餘儀なくされる。これが、地球上に於ける生命に對する自然の最後の反逆であり、同時にその一切の終りである。

一〇、宇宙的の意義

上のやうにして、吾々の地球が、完全に破壞若しくは枯死しその上に榮えて居た人類が、一切の他の生命とともに滅絕するといふことは、宇宙的にどんな意義を有つて居るのであらうか。

よく、吾々は、感情的な思想家の口から、「世界は人間のために造られたものである。」「萬物はたゞ、人間に奉仕することによつてのみ存在の意義を有する。」「人類の完成が神の唯一の意思だ。」などといふやうなことを聞くが、しかしながら、それは、別に、贅言を費やすまでもなく、極端に人間中心的な(アンスロポセントリツク)、さうしてまた、同時に偏事狂的な(モノマニアツク)、誣言妄說である。

人間は、他の生物と同じやうに、たゞ、或る自然關係が、偶然その出現を條件づけるやうな狀態になつた折、此の地球上に現はれたものであつて、同じ自然關係が、その存在を許さないそうなつた[illegible]に、[illegible]い、或る程度まで、人間に、自然を利用し、これに打ち克つこ(或ひはそれを征服する)ことができるが、少し自然が[illegible]曲げれば、もうそれが彼等にとつての最後である。

それから、たとひ、此の小さな地球の表面から、人間といふものが消えて無くなつたところで、宇宙全體としては、勿論、全く何の痛痒をも感じない。それは、恰度、田甫の隅の溝の中で、メダカが一匹死んだところで、日本全體がその爲め何の影響をも蒙らないのと同樣である。

つぎに、宇宙のなかには、何億何十億といふ澤山の太陽があるが、それ等の太陽には、吾々の太陽に八つの惑星があると同じやうに、それ〴〵幾つかの惑星が附屬して居るに相違ない。さうして、その惑星(少なくとも、そのうちの或る者)の上には、(なほ、既に死星となつた太陽の上にも)、恐らくまた、何等かの種類の生物が棲息して居ることであらう。

それゆゑ、吾々の地球の表面から、生物が拂拭し去られたところで、外にまだ、宇宙の何處かしらに生物は殘つて居るに相違ない。しかもさういふ生物のうちには、いろ〳〵の點に於て、吾々人類よりもはるかに進んだ狀態に達した者があるかもしれない。また、或る天體からは生物が消え失せても、他の天

上では、新たにそれが造られつゝあるに相違ない。
そんなやうにして、生物は、果てしもしれぬ廣い宇宙のなかで、物と物との複雜した相互の關係から、生れたり、榮えたり衰へたり、死んだり、更らにまた生れ變つたりして、りかへして居るのである。

露鷲の脅迫を受けた頃

生方敏郎

一

赤色露西亞は二十世紀に於ける世界の脅威である。世界の總ての國々が、悉く資本主義萬能の時代であるのに、獨り露西亞に於てのみ共產主義が榮えてゐる事は、世界の總ての資本主義國にとつて薄氣味惡い事である。共產主義共の者が、資本家達によつて、恐れられるのはもとより解りきつた事ではあるが、單に資本家ばかりでなく、我々貧乏人と雖も勝手不案內な所から共產主義は何となく薄氣味惡く思はれる。陸路を通れば廻りになる所を、船で行けば大變近い。風は無し、波は立たず、船もしつかりしてゐるから大丈夫だ。船で行き給へとすゝめられても、船に乘りつけない者は、船旅は怖ろしい。廻り道でも、まあ〳〵陸路で行く事にしよう、と答へるであらう。赤色露西亞の場合は更にそれよりも惡い。陸の上から見てゐる人達は、誰も皆其船に乘つた經驗が無いばかりか、其海を疑ひ其船を疑ひ、其船員達を疑つてゐて、船で行くとは飛でもない話だ昨日も海が荒れて、此處を出た大きな船は一艘も殘らず轉覆しましたよ。又あの船員共と來たら、實に人か鬼か解らない奴等で、乘客の財布はまき上るはおろか、婦女子と見たら凌辱するし、誰も皆素裸に剝いた上で、海の中へ抛り込んで、鮫に食はして仕舞ふ相です。と一人が云へば、又他の一人は、いやいやどうしてそれ處じやない、此の船の船員共と來たら、客を料

現して酒の肴にして食べたかも知れぬ

貌は遠方にゐるからどんな荒くれ男が來つてゐるやら、我々の眼には、はつきり見えないが、さう云ふ噂を聞いてみると、成程如何にも薄氣味悪い。米國でも、英國でも、更に何資本家國の人々は實際自分でも赤露を怖れ、怖れてゐる上に疑心暗鬼を生じてこう云ふ宣傳をお互にし合ふのであるから、益々怖ろしいに違ひない。レーニンなんて男は、眞實に死ぬ迄に、噂の上で、新聞の電報欄の上で、一體何度死んでゐるだらう。猫は九つの魂を持つと云ふが、レーニンは實際それ以上だつた。共魂が一つづゝ死んで、此の春やつと九つ目の魂が死に、遂々眞實に葬られた様だ。これでレーニン丈けは片附いたけれど、まだそんな薄氣味悪い男が、露西亞には何人居るか不明だ。一體九つも魂を持つてゐるなんて男は、日本なぞには一人もゐはしない。昔楠正成は湊川で戰死する時、七度人間と生れ代つて國賊を誅せんと遺言したが、實際は一度も生れ代らなかつた様だ。其生れ代らなかつた證據には、正成の戰死以來大正の聖代の今日に至る迄、悪い奴らばかり榮えてゐる。だからどうも日本人の様な高天原から降つて來た天孫人種には、さう云ふ何度も生れ代ると云ふ様な氣味の悪い化物じみた藝當は打てないと見える、まして、レーニンの様に一生の中に一人で何遍となく死ん[illegible]は日本ばかりでなく露西亞でも[illegible]たら、恐らく何處にも[illegible]ないだらう。全く露西亞は魔の様な國である。

露西亞は共産主義なるが故に、かうも薄氣味悪く人々から見られてゐるのか。さうでは無い。むしろ其反對に、共産主義が、露西亞なればこそあんな薄氣味悪く、人々の眼に映じるのであらう。共産主義的思想は、昔から何處の國にもあつた。思想ばかりでなく、共産主義の實行は、西洋人が何よりも有難がつてゐる所の新約聖書の中にもある。其「使徒行傳」を讀んで行けば、キリストの弟子達何れもセーントとか何とか尊稱され、御光が頭の上の所についてゐる様な小羊の様に優しく柔順である聖徒達が、夫れ〱皆の持ち寄り世帯を持つて生活してゐる有様がよく書いてある。

聖書の中に現はれて來ると云ふと、同じ共産主義でもちつとも薄氣味悪くないばかりか、大變長閑な面白い生活の様に思はれる。お前さんの家にはパンがありますかえ。若したんとあるのなら皆持つていらつしやい。此處で皆さんで食べませうよ。私の家には葡萄酒のいゝのが此の間一打ばかり取り寄せたのがありますよ、使をやつて此處へ取り寄せて下さいませんか、そして皆で飲みませうね。などと來ると共産生活もあんまり嫌や

な氣がしない。殊に我々食ひ辛抱の者は、一人でこそ〳〵食べるよりも皆で美味いものを持ち寄つて、一緒に食べ一緒に飲むならば、どんなにか美味しいだらうと思はれる。寄宿舍にゐる時分になぞ、皆で阿彌陀の籤を引いて金を出し合ひ、パン菓子などを買つて來て、よくコンパニーをやつたものだ。あゝ云ふ寄宿舍に於けるコンパニー即ち共産生活的寄り食ひの樂しさは、何年經つても忘れる事が出來ない。

こう云ふ結構な生活も一度彼の露西亞人が營む事となると、遠くから見てゐてさへも、何となく物凄く、青鬼赤鬼が寄り集つて賽ころを振り、人間の生命を賭けてでもゐる樣に見えるのは、どうした譯だらう。露西亞と云ふ國は、損な國か得な國か知らないが、兎に角昔から小氣味惡く人々から見られて來た事は事實だ。

何人もまだ記憶してゐるだらう。あの帝政時代の露西亞、あの白色露西亞が如何に氣味惡く怖ろしい國として、世界各國から見られてゐたかを。そして今日あの白色を塗り變へて赤い色にして見ても矢張り世界の脅威となつてゐる。

二

日露戰爭前後から米國で排日と云ふ事が始まり、其氣勢が段段強くなつて、遂々最近に排日移民法案が上院を通過、[illegible]領の調印ともなつて了つた。其間に日本の感情も少し氣[illegible]なつて居り、恰も米國は目の上の瘤の樣な氣がしてならないが、それにしてもまだ目の上の瘤であつて、それ以上のものでは無い。然るに私の子供の時分、米國が親切なアンクルサム叔父さんとして、ジヤツプ坊やの頭を撫でて呉れ手を引いて世界の舞臺を歩く稽古を敎へて呉れた時分に於いて、日本に取つて何とも云へぬ恐怖の感を與へたものは、露西亞と共に英吉利であつたらう。今の小學校へ行く子供達は幸にして、そんな苦みは知らない。日本を一等國だと信じ、世界の强國だと信じてゐる、云はゞ大家に生れたお坊ちやんが、帽子を被り、ランドセルをしよつて、學習院へ通つてゐる樣なものだが、私達の子供の時代には日本の子供は、まるで裏店住ゐの貧乏人の子供が猛烈に埃を上げて走つて來る貨物自動車や圓太郎自動車の前をよけ〳〵惡い路を學校へ通ふ樣なものだつた。勿論日本が神國である事や、萬世一系の天皇を戴いた世界唯一の神聖な國である事や、世界一形の美しい富士山を持つてゐると云ふ事や、神功皇后が三韓を征伐した事や、蒙古十萬の兵を神風によつて玄海灘の底の藻屑として仕舞つた事や、太閤秀吉の朝鮮征伐等、國の誇となるべき數々を學校で敎へられ、ナシヨナルプライド

と云ふものを韓國に植ゑつけられては堪らないし、又一方からは英吉利が我儘で困る、露西亞の野心は何時我國を併呑するとも限らぬなどと云ふ怖ろしい話を、直接聞かされもし、又は年上の子供がこんな事を話し合ふのを聞いて、私達はおど／＼してゐたものだ。こんな事は全く日露戰爭後に生れた人達の夢にも知らない事だらう。

私が、或る日學校から歸つて來ると、父は新聞を見ながら母と其日の出來事を話してゐた。

「どうも飛んだ事をしたものだ。滋賀縣の大津で津田三藏と云ふ護衛巡査が、露西亞の皇太子殿下に切りつけたと云ふんだが一體此の後どうなるものだらう。飛んでも無い事になつて仕舞つた。」

と父が云へば、母は

「ほんとうに馬鹿程恐いものはありませんね。」

と答へた。

それから後暫時は世間は其心配話で持ちきつてゐた。子供同志ですらも其話をした。

それも其筈だ、後になつて其時分の事を書いたものをしらべて見ると、此の大津事件と云ふのは、天下を震駭させた出來事だ。松方內閣が成立して僅かに五日目の事、恰度出來掛つてゐたシベリヤ鐵道の、[illegible]つゝあつた露國皇太子ニコラス殿下を、津田[illegible]事として切りつけたのだ。露西亞がシベリヤ鐵道を布設するのは、專ら東洋侵略のためだと一般の人々が疑ひ怖れてゐた折柄なので、此の皇太子の息の根を止めれば、露西亞の慾がのぞけるとはきちがひをした事から彼はこんな間違をしたのだ。昔も今も同じ事で、巡査には兎角かう云ふ馬鹿者があつて困る。又かう云ふはき違をした愛國者程怖ろしいものはない。其の時は幸にして殿下を乘せてゐた車夫が、自分の身をすてゝ適つたために殿下にはわづかに怪我をさせた位で納まり、國交上何んな事になるかと危ぶまれたにかゝわらず、露西亞の方では、案外寛大な對度に出たので其場は何でもなく濟んだが、政府は申譯のために滋賀縣知事及び護衛の任に當つた警部を免職し、內務大臣西鄕從道と、外務大臣青木周藏とを辭職させて、露西亞に向ひ謝罪の意を表した。だが、津田三藏を罰するについて、司法大臣山田顯義は死刑に處すべしと云ひ、大審院長兒島惟謙は、日本の法律にはまだ外國の皇族に對する犯罪の刑法がないから、之は單に謀殺未遂として罰する他に道がない。宜しく無期徒刑に處すべしと云ひ張り、とう／＼司法大臣の方が負けて、山田顯義は辭職した。こんなえらい騷ぎはあつたが、心配した

程にもなく無事に治まつた。

　私達が小學校にゐる間に、日清戰爭が始まり連戰連勝で國民は有頂天になつてしまひ、恰もモルトケが巴里を圍んだ時の樣に注文通り清國をして城下の誓をさせ樣とまで意氣込んだが、其處まで漕ぎつけない中に、先方から李鴻章がやつて來て、廣島で講和談判を開き、償金の外に臺灣と遼東半島とを割讓する箸で兎が付いたが、思ひがけなく、獨佛露、三國聯盟の上で、東洋平和のために遼東を清國へ還付すべしと、忠告して來た。

　恐い叔父さんが、恁う三人も揃つて忠告して呉れたのだから我國でも此れは嫌やと云ふ譯にいかぬ。遼東半島を占領したのは、全く若氣の至りでした。と云ふ樣な事で、折角頂戴したものを又清國へ戻さざるを得なかつた。此は官民共に悲憤やるかたなかつた干渉であつて、これによつて初めて日本國民は、外交と云ふものの本當の味を覺えたのだ、戰爭とは、敵國だけを相手にするのでは無く、常に周圍の第三國を計算の中に入れて置かねばならぬ。戰爭に勝つても、外交に負けると云ふ事がある。世の中は思つたよりも複雜な、面倒なものだ。と云ふ事を我々は教へられた。臥薪嘗膽と云ふ言葉が、此の時以來盛に用ひられる樣になつた。

　小學校の教室で、私達は先生から細々と先生が新聞で見て來た外交談を聞かされた。ついでに日露の昔からの外交史をも、話された。徳川時代に樺太へ日本人が多少移住してたのだが、そして日本の領地であると云ふ棒杭までも一度は立てられたのだが、其境界線が曖昧になつてゐた事や、其後千島と樺太と交換した顚末や、を聞かされた。先生は世界地圖をかけて、鞭で露西亞、西伯利の廣大な土地を指し示しつゝ、日本の廣さと比較して嘆息した。そして露西亞の如何に怖ろしい國であるかと云ふ事を、私達に說き聞かせた。

　これより先、まだ日清戰爭以前に郡司大尉が、日本の國境を守る爲めに軍職を棄てゝ自ら同志をつのり、千島へ移住した時分の壯烈な噂、それは新聞にも盛に書き立てられ、又我々の見てゐた幼年雜誌にも、やすつぽい石版繪にも、子供の使ふ扇子の繪にも描かれたものだつた。それも確に露西亞に對する日本の先覺者としての何等かの感情を語るものだつた。又福島中佐が、まだ鐵道の無い雪の西伯利を、一人で騎馬に乘つて橫斷した事がある。それは、其當時大變な評判で、流行唄などにも唄はれた位だ。どんな田舍の子供でも、郡司大尉と福島中佐の名を知らぬものは無かつたであらう。それも後になつて考へて見れば、露西亞に對する何物かであつたのであらう。

三

明治三十年は、中學校が日本全國に殖えた年だ。私の田舎にも初めて中學校が出來、私も狩り出されて俄中學生となつた譯だが、其校長が非常に熱心な尊王攘夷主義者であつたので、私達はよく教室でオロシヤと英吉利との恐るべき事を聞かされた。又其時分は日本の文學は極く幼稚で、雜誌なども恰度中學生位を相手にした投書雜誌が頗る多かつたが、さう云ふものを見ると、何れも慷慨激越なる漢文口調で、「熟々宇内の大勢を察するに北に露鷲あり、西に英獅あり、虎視眈々として常に我後を窺う。先にはポーランドの分割さるゝあり、近くは印度の併呑さるゝあり。」などゝ云ふ文字が殆んど毎號出てゐた。此等は大人の口眞似かも知れないが、兎に角其頃の少年は活動や野球のファンなどになつてはゐられなかつたのだ。何れも憂國の志士氣取りでゐた。

明治三十六年の春頃に、米國の大統領マッキンレーが、或無政府主義の女に殺された。其女は米國人であつたが、併し此時も無政府主義の本家本元は露西亞であつて、又露西亞と云ふ國には虛無黨と云ふものが在り、秘密結社を作つて、地下室などに會合し、誰でもかまはず暗殺すると云ふ話もあつた。國としては、侵略主義を標榜するもの、專制政治の極に實用するのを國是としてゐると云ふ事であるのに、人民の中には虛無黨など云ふ怖ろしいものがあつて、人殺しを主義目的としてゐるのだと云ふのだ。まあ、こんな怖ろしい國が世界の何處にあるだらう。私は其頃初めて東京へ出て來て、神田の錦町にゐた、從姉の家に泊つたが、其時突如として起る怖ろしい鐘の音を聞いた。ギャン、ギャンギャンギャンギャン亂打される、これは勇まし半鐘の音でも無ければ諸行無常とつげ渡る寺の鐘の音でもない。噛み付くやうな激しい金屬の音だ。私は驚いて、あれは何だと訊くと、それこそ、ニコライの教會堂で打つ夕暮のお勤の鐘だと云ふのだ。

震災前にこそ東京には、至る所に大厦高樓が出來たから、ニコライを見て左程驚くものも無くなつてゐたであらうが、其時分には東京の家は、皆川合町の家も同樣に純日本風で、そして小さかつた。小石川へ來れば遠くの方から傳通院が大きく見え、淺草へ行けば本願寺が、遠くから見えた。たがニコライに至つては、ほとんど東京中の何處からでも見えるかの如く、恐ろしく大きく、その高い丸いキューポラは、全東京を睥睨するかの如く、駿河臺の丘の上に天を摩して屹立してゐた。人の噂にはニコライは、露西亞の國事探偵であつて、日本の行

を偵察するために露西亞政府が建てたものだと云ふことだつた。

明治三十二年私が初めて東京へ出て來て、芝の學校へ這入つた時分の東京の學生氣質は、文化的でもなければ、不良少年的でも無く、何れも帝國主義的愛國志士的だつた。風俗もバンカラなれば、思想もバンカラだつた。外國文學の樣なものも、殆んど學生の間に讀れてゐなかつたから、外人を理解する程度も今のやうなものでは無かつた。學生の唱ふ流行唄の中に、ノルマントンの唄と云つて、頗る排外的な慷慨淋漓たるものも在つた。其夏の初めから南亞弗利加共和國で、ブーア人と英國との間に戰爭が始つた。所謂南亞戰爭だ。ブーア人は僅に、二千か三千であるのに、英軍は十五萬人もそれを征服するために向つたが、初めの間は連戰連敗だつた。我々學生は、大いに南亞軍に同情し、其の戰勝の報を聞く毎に、嬉しくてたまらなかつた。だが其戰爭も遂に英軍の勝利に歸して終つた。

其前年、北淸事件以來支那が、列國の問題の中心になつてゐた。獨逸が膠州灣を租借すれば、英吉利は威海衞を手に入れ、露西亞は旅順口を、佛蘭西は廣東に食ひ入つた。そして日本だけが指を銜へ手を束ねて傍觀してゐたのだ。支那分割と云ふ樣な文字が盛に新聞に見えたのは此の頃だ。私はまだそんなに新聞をよくも讀まなかつたし、殊に政治面などは滅多に見ななかつたが、毎金曜日に催される、學校の文學會の折りたに、屢々此の支那分割と云ふ問題が持ち出されて討議された。私達學生の若い身空では、支那が列國に分割されての後の如何に怖ろしいものであるかと云ふ事は考へないで、我日本も當然其分割の分け前にあづかれる事と豫想し、樂んで取らぬ狸の皮算用をやつたのだつた。だが列國は支那を租借した丈けで終り、日本は遂に一物を得ずして鬼がついたのはよかつたが、義和團の内亂に際して、出兵して來た露西亞軍が、何時迄しても滿洲から撤兵しない。確に遼東より朝鮮へかけて侵略的野心を抱いてゐる事が、明になつた。それからの二三年間日露戰爭の愈始まる迄の間、其長い間新聞に絶えず此の問題が出てゐた。

一體露西亞人は、小說を讀んで見ても解る通り、個人としては極く正直で、お人よしであるが、どう云ふものか外交の掛引きとなると、殆んど傳統的に高飛車に出て來て、恫喝的である。向ふから談判をしかける時は高飛車であるが、此方から談判を持ちかけられた際には、空嘯いて相手にしない樣な態度を取り、長引くだけ長引かせて、相手方をいら立たせるのが常である。國體が變つて、共産主義の赤露となつても此の外交振り丈けは少しも以前と變らない。去年ヨッフェ君が出て來た時で

も、[illegible]にしても、[illegible]
も同じ事だ。殊にあの時代は強大なる歐亞の大帝國として、立つてゐる時であるから、其倨傲振りは一層甚だしかつた譯である。日本で掛合ふ事などは、てんで相手にしないと云ふ態度であつた。日本からいくら滿洲撤兵を催促されても、新聞記者の家へ差配が家賃の取り立てに向つた程にも感じない。日本の輿論は既に八釜敷くなつて來た。政府の態度が餘りに腰が弱いと云ふので、それを攻撃する聲が段々大きくなつた。そして、遂いには、議會の召集された日に衆議院議長河野廣中が、奉答文に事寄せて内閣彈劾の決議文を讀み上げ、其の爲め議會が解散されたと云ふ事件が、殆んど晴天の霹靂的に突發した。市中は鈴を鳴らして號外賣りが走り廻つた。解散された議員達は餘りの事に驚きもし、忌忌しくもあつたらうが、輿論は河野廣中の此の脱線的政府攻撃を非常に嬉び激賞した。河野廣中の人氣は素張しいもので、何だか解らなかつたが私達でさへ、新聞を見て感激の涙が無性に出た。それからもう明治三十六年の初め頃には、露西亞と戰ふ可しと云ふ議論が段々盛んになつた。政府の態度が定らないので、戰爭の始まる迄には、輿論があつて後、一年以上も間が有つたが、其間毎日の様に新聞には滿洲の風雲急なる事が、繰返し〳〵報ぜられた。明治三十六年の春、私が

[illegible]
國を賣つて東京へ出て來て、[illegible]に[illegible]た。[illegible]してゐたが、商賣の事などよりも滿洲の事ばかり心配して、[illegible]新聞を讀んでは「いやあ、此の分では愈々露西亞と戰爭になるかなあ。早く戰爭をおつ始めて、露西亞軍を敗北させ、セントピータースブルグへ攻め上つて城下の誓ひをするがいゝんだ。そして西伯利はどうしても日本のものにしないと云ふ事は間違つてるよ。」

などゝ私達を相手に、元氣よく吹きまくつた。帝國大學教授法學博士戸水寛人氏を初め七人の博士が硬論を主張して政府に建白したのも此の頃の事で、所謂七博士の名は世間に喧傳された。戸水氏の議論は私の伯父である植木屋の老人程に遠大では無かつたが、それにしてもバイカル以東を割いて我が有となすべし、と吹きまくつたので、バイカル博士と云ふ綽名を得た位だ。

だがこんなにメートルの上つたのは、必ずしも七博士ばかりの事ではない。誰も皆一般に人々の鼻息が荒くなつてゐた。先には、ニコライの夕の祈の鐘の音を聞いてさへも、國難探偵では無いかと、びく〳〵してゐた者がどうして僅かな間に、こんなに氣が強くなつたものだらう。それは他でも無い、凡そ三つ

の理由が有つたと私は思ふ。其一つは、日英同盟だ。日英同盟が、三十五年頃に締結された。此の時は誰も一人として心から嬉ばなかつた者は有るまい。あの時代の日本と英國とでは全く提灯に釣鐘と云ふ緣組だつた。此の同盟は誰にも氏無くして玉の輿に乘つた樣に感じられたのだ。一體明治初年から日本は英吉利に對して全く盲從的に服從してゐたけれども、英吉利の方は又實に暴戾なる狼が、從順なる小羊に對するの態度だつた。彼の英國全權公使ウイリヤム・パークスを見よ。傲慢不遜、常に我が大臣參議を子供あしらひにして、何事にも、横車を押し我意を通してゐたものだ。私は大正十年三月號の『我等』誌上に於て、「維新當時の滑稽外交」と題し、余りに悲慘な極、殆んど滑稽に近き英國の暴狀につき述べて置いたから此處にははぶく。日清戰爭に際しても、世の噂では英國軍艦が黃海に於て探海燈を照し常に我海軍の行動を阻害したとも傳へられた。但し遼東還附に付いては、其干涉の同盟に加はらなかつたと云ふ迄で、何も此の事が決して我々をして、英國を親切な友邦と思はしめるには足りなかつた。所が俄にこんな目出度い緣組がきまり、それが公表せられて、日英の國旗が見渡す限りの家々の門口に交叉してかけられた日の愉快さは、どんなだつたらう。私達はまだ、ほんの學生で外交の事も何もよくは解らなかつたけれども、それでも嬉々した心持ちといゝ後楯が出來たと云ふ安心とが出來た。これが背景にあつたから皆が露西亞に對して恐らくメートルが上つた譯だらう。他のもう一つの理由は、人々が誰も今度の戰爭は當底避け難いと思つた所から來てゐる。其當時としても、日本が露西亞より富國強兵だとは誰も考へ無かつた。只空敷く手を束ねて併吞されてしまう位ならば、我等は全滅する迄も戰はねばならぬ。先方が國富み兵強ければ、此方には大和魂と、天祐とがある。日本は神國だ。いざと云ふ場合になれば、奇蹟的の勝利を得て見せやう。と云ふ感傷的信仰から發した勇氣だつた。此れを客觀的に見れば、窮鼠が猫を嚙むの狀態であつたかも知れない。覺悟は出來てゐながらも、まだ多少の不安が一抹の暗影を人々の心に投げてはゐたのだ。

四

輿論は前にも云つた通り、三十六年の春の初めから主戰論に傾いて、其氣勢は徐々上つて來た。けれども政府は滿を引いて容易に放たなかつた。此れが如何にも腰拔外交に思はれたので、國民は徐々躍氣となつた。明くれば明治三十七年、もう一月頃から戰爭の不安と緊張味とが、ずつと濃くなつて來た。陸軍では、もう已にひそかに、兵を動員してゐる。某旅團は已に

[illegible]の友人の中にもあつた。時々ジャパンタイムス社へなど遊びに行く男で、何かしら新事實を聞き出して來ては、僕等の前に鼻高々と吹聽するのだつた。

「君、動員と云ふ英語を知つてるか」

「そんな字は知らないね。ワーズワースの詩集の中には無いからな」

「Mobilization　さ。福知山の聯隊は已に動員したんだよ。困るな君等は、危急存亡の場合になつても、まだ星と菫より外は知らずにゐるんでは」

など丶彼は自慢らしく語つた。

其時分、私は小石川同心町に今は洋畫家として知られてゐる正宗得三郎君と、神戸の方で新聞記者をしてゐる吉岡梢風君と、三人で小さな家を一軒借りて、前の家のお婆さんの處で食事をさせてもらひ、早稻田大學へ通つてゐた。又正宗君は、上野の美術學校の學生になつたばかりの事だつた。あの時分の事を追憶して見ると、隨分面白い話が澤山出るが長くなるから此處にははぶく。其家は恰度第二高等女學校の向ひ側に琴の師匠があつたが、其露路(ろぢ)を這入つてずつと奥の方にある家で、塀の外は寺の墓地になつてゐた。憚りへ行く時など緣側を立つて歩くと、[illegible]の卒塔婆やら[illegible]白張りの提灯やら[illegible]竹に花をさしたのやりが、まざ／＼と見えて、[illegible]なれつこになることもあつた。併しあの通りにはまだ電車が無く、至つて靜かで勉強するには都合がよかつた。吉岡と僕とは、其墓地に向いた南の六疊を占領してゐたが、夜などまだ電氣が市内に余り行き渡らず、薄暗い洋ランプを、各々机の上に立て丶本を讀むのだが、やゝもすると學校の事などはそつちのけにして、議論を始めた。議論が始まると東向きの二疊の部屋の、ごた／＼取散らした物置の樣な中に陣取つてゐる正宗もやつて來て、此れに加はり、議論に花を咲かせた。私の方の友達も時々來る。秋田雨雀君等も近所にゐたのでよく來た。私の妻の兄なども外國語學校の學生だつたがよくやつて來た。正宗の所へは、死んだ青木茂君や、森田恒友君など今では有名になつてゐる人達が、繪具と油で雜巾の樣に汚れた小倉袴をはいて、よくやつて來ては、叫ふやら騷ぐやら、議論するやら、賑やかなものだつた。今思へば此も黄粱一炊の夢に過ぎない。此の樣に樂しくして我々三人は喧嘩をしたり仲[illegible]りしたりして暮してゐたが、滿洲の雲行きが段々險しくなつ[illegible]ると共に、正宗の額に陰鬱な色が見出した。

「僕は第一補充だから、始まればぢきに引つ張り出されるか

知れない。つまらんとみい」

などと歎息してゐた。

二月十日の朝、私は世田ケ谷の砲兵聯隊に居る友人から、もうぢき僕等も出征するかも知れないから、其前に一度遊びに來て呉れと云ふ葉書を受取つた。で私は二月十一日の朝世田ケ谷へ尋ねて行つた。どの電車に乘つて、どの道をどう行つたか、今はつきり思ひ出す事が出來ない。同心町の前を通つて大塚へ行く線路はまだ出來てゐなかつたし、山の手の省線電車もまだ無かつた。私は多分牛込へ出て、飯田橋から外堀線に乘り、赤坂見附で乘り換へて、青山へ行つた事と思ふ。其青山の線も、一丁目迄しかなかつたか、それとも四丁目迄も延びてゐたか、はつきりした記憶が無い。其秋にはたしかに四丁目迄延びてゐた。兎も角も私は青山の通りを行つて、青山學院の側を通り、坂を下ればそれからは淋しい田舍道であつたが、前にも二度ばかり此の友人を訪ねた事が有るので、道にまごつく事は無かつた。もう青山の通りで、ぽつぽつ兵隊さんに會ひ始めたが、段段先へ行くと段々兵隊が多くなつて、終ひには、會ふ人は悉く兵隊さんだつた、それも列を作つてゐるのでは無く、皆個人として、それ／＼用事があるらしく、世田ケ谷の方へ行く者、市内へ向つて來るもの、入り亂れてゐた。其兵隊さんの中の一人から、私は不意に呼び掛けられた。

「敏ちやんぢやないか。どうも暫くだつたね」

向ふも此方も立ち止つた。それは私と同じ町内の料理屋の息子で、私よりは二つ三つ年上の男だつた。國に居た時分は、色の白い呉服屋の番頭さんの様な柄の優しい美男子で、私と同級の友人だつた女を、妻にした。それは戀愛結婚だと云ふ噂さへ私は聞いてゐた。其人に殆んど八年振りで合つたのだ。彼は昔の面影も無く、日に燒けて黒くなり、帽子をぬぐと額だけが、くつきりと白かつた。彼は私に、

「愈々僕も出征する事になりました。僕は討死にの覺悟で行つて來ます、どうぞ宜しく」

と云つた。私は彼に何と答へてい丶か解らなかつたから、

「運命だから先の事は解らないが、鐵砲丸なんて滅多に當りやしない相だから、大丈夫だよ。健在で凱旋して來るのを待つてゐるよ」

と私は彼を勵ました。彼は私に

「僕は自分の事はなんとも思はないが、子供が一人あるんでね」

と云ひ掛けたが、急に氣を變へて、

「併し國家の爲めだ、僕が犧牲になる位何でも無い」

それから暫く忙し相に兵隊の往き來する道傍に立つて話して、

分れた亡少し行つてから、私がふり返つて見ると彼も未だ私の方を振り向いてゐた。私は只何と云ふ事無しに、熱い涙がじくじくと出て來て、眼鏡が曇つて先が見え無くなり、それを拭く様子をして、そつとハンケチで眼を拭いたが、又後から止め度無く涙が出て、これを歩いてゐる兵隊さんに見付けられ相なので、きまりが惡くて非常に困つた。

桐屋の久さんと分れて間もなく、號外賣りが私の後の方から鈴を鳴しつゝ忙しく走つて來た。それを私は呼び止めて一枚買つて見ると、それは露國に對する宣戰の詔勅であつた。私は歩きながらざつとそれを見て

「んゝ、愈々戰爭になつたな」

ともう已に豫期した事であるから、今更驚きもしないが、先刻の久さんの、言葉が確められたと思つた。營所近くなつてから、兵隊が大勢寄つて電信柱に張つてある號外を覗いて見てゐた。私も兵隊達の隙間からそれを見ると私が先刻買つたものと同じものだつた。

營門を這入つて、友人に面會を求めると、彼は間も無く出て來た。そして自分達の應接間の様な所へ連れて行つた。粗末な大きな火鉢に炭が、かんかん起つてゐた。それを取り卷いて五六人の兵士が、粗野な言葉で話すのは矢張り戰爭の事ばかりだつた。私はポケツトから先刻買つた號外を出して[illegible]に居た兵士も皆寄つて來てこれを見た。私は此の前にも何日も彼を訪ねる時には、新聞を持つて行つてやつた。兵營の中では新聞を見せないので、私が持つて行つてやると彼等は何時も喜んだからだ。宣戰の詔勅を見ると其處にゐた兵士等は皆興奮した。そして皆大聲で喜んだ。

「面白いなあ」

と云ふ者も有つた。

「さうよ、こんな所に愚圖々々してゐるより早く出掛けて、大砲の音でも聞いたらどんなにさつぱりするか知れやしない」

「行きたいなあ」

と皆大聲でわめいた。それは此人達の愛國心を誇るためでも無ければ、勇氣を見せびらかすためでも無く、眞實に行き度くて行き度いと云ふ心からの聲である様に思はれた。私が金子君に――私の友人の名前だ

「どうだ、君も行き度いか」

と訊くと彼は冷靜な顔付きで

「當り前よ、此んな處に愚圖々々してゐて、垢切れを切らして雜巾がけをさせられた上に、何の彼のと下らない小言を馬鹿な奴等から云はれてゐるより、敵を相手に戰爭した方がどの位

快か解らないぢやないか。それに戰に行けば被服だつてこんな薄汚れたものを着せられてゐやしない、新調だぜ、お〻其處に居る先生はもうすぐ出掛けるんだから新しいのが下つた所なんだ。おい、君は何時出征だ」
「もう直きだらう、二三日の中だよ」
　と此の兵は、今更らしく自分の新しい服を見廻した。私は先刻桐屋の息子に會つた話をして
「君等は偉い元氣だが、久さんなんかは氣の毒の樣な氣がしたよ。あの人も國家の爲めに死に〻行くのだなど〻云つてゐたが、君等と違つて妻子があるんだからなあ」
「全くだあ、あの人なんかは惚れた女を女房にもらつて、可愛い〻子供の二人迄もあるのに出掛けるんだ。人生の幸福を棄て〻出て行くんだ。あの人が戰死するとすれば、全く只國家の爲めより外は何も無いんだ。所が僕等はさうで無い。少くとも僕は、一年志願をするだけの金も無く、學業半ばにして兵隊屋敷へぶち込まれてるんだ。だから僕が戰死するのは國家の爲めぢや無くつて貧乏の爲めなんだ。だが君、國家の爲めに死ぬ者より、貧乏の爲めに死ぬ者の方が一層諦めがい〻ぜ。貧乏の爲めに死ぬのは、自分の不幸の終結をつけて與れるんだからな」
　と如何にも彼は棄鉢な調子で云つた。一體どんな場合にでも此の男は、棄鉢な考へで物を云ふたちであるのを、私は前知つてゐたから驚きもしなかつた。併し私は
「そりや今迄の生涯丈けでもつて、久さんと君と比べると、久さんは國家の爲めに死に〻行き、君は貧乏の爲めに死に〻行く事になるけれども、將來君だつてどんな偉い幸福が待ち受けてゐる身の上だか解りやしない。だから君の不幸の終結をつけるのだか、將來の幸福を見せずに棄てさせてしまうのだか解らない。さうとすりや君だつて國家の爲めに死ぬ事になるんだよ」
　すると彼は大きな口を開いて、天井の方を見上げて、腹の底から笑ふ樣に、無遠慮に聲高く笑つた。そして
「そりやどつちでもい〻、國家の爲めに戰死したと云はれても、不名譽な事にはならないからな。だがまあ死なかつたら、うんとこさと、ぶんどりでもして歸つて來るよ。ドタツ兵の身の上ぢや立て樣たつて碌な手柄も立てられなからうし、立てたとて其奴は上官に失敬されちまう。一將功成り萬骨枯るだ」
「ぶん取りつたつても、さう矢鱈勝手にさせはしなからう。」
「うむ、勿論見付かれば惡るい事になつてるんだから余りうまい事は出來まいが、やれたらやると云ふ丈けの話しさ、命さへ棄はうと云ふ戰爭の最中に、物品位失敬したからつてそれが何だ。その代り、まかり間違へば此方もお陀佛だ。併し僕なんか

は、貴を云ふ[illegible]戰爭に行つて[illegible]ば百にもならない體だが、戰爭で死ねば幾許かづゝは國から[illegible]の養老金になる譯だからなあ」

彼は此處迄來て一寸センチメンタルな調子になつた。私も彼が人並以上に親孝行であるのを知つてゐるので、此の言葉を聞いた時彼の言ふ事が捨鉢的な放言でなく、さう云ふ言葉の中にも矢張り親の事を心配してゐる事が解つたので、私の心も動かされた。今朝から私はひどく感傷的になつてゐたので、此の時もすでこそ泣き出さうとする所だつた。

二人の間には同級生の皆の事が話題に上つた。國の中學の分校で、十一人の卒業生の中二人は士官學校へ這入つて、今年の中に卒業する筈だ。彼等もどうせ此の戰爭に出征するに違ひない。又もう一人別に一年志願をやつた者がある。彼も大方引張り出される事であらう。それから金子を加へれば十一人の中四人迄は出征する事になるのだ。金子は例の冷笑する態度で

「奴等は馬鹿な爲に職業軍人を志願したんだが、案外早く戰爭が突發して奴等共大儲けだ。戰死しない限りは、さうして上の奴等が戰死するから屹度出世するに極つてゐる。又若し奴等が戰死すれば、それも犬死よりや意味がある。」

などゝ語つた。それでも戰爭の先で偶然な機會で、會ふ事でも[illegible]んでしまふかも知れない。[illegible]どう世話をやりに行くものか」

などゝ、金子は又冷やかに笑つた。

私が歸る時彼は門まで送つて來た。そして私の手を握つて

「君はまあ體を大切にして物になつて呉れ。歸つて來て互に會ふ事が出來るかどうかは解らない。」

私は其言葉を聞くと直覺に、ことによつたらもう再び彼と會ふことが出來ないのではないかと云ふ懸念がした。。で何も云ふ事がないので

「向ふへ行つたらちよい〳〵手紙を呉れ給へ」

さう云ひながら之が此の世での見納めかと思ひ彼の顏をぢつと見守つた。

彼に別れて兵營の門を出てから、五六町も來たかと思ふ所で、私は又幼な友達の砲兵宮澤君に會つた。やあ、と聲を掛けて兩方から近寄つて立止り、道の端へ寄つて私は

「君も此方へ來てゐるのか。軍隊へ這入つたとは聞いたが、君の方も出征するのかね」

「さうだ。それでもう此處迄出掛けて來たんだ。君とは隨分久し振りで會つたんだが、今日は急いでゐるので話しも出來

い。戰地へ行つてから詳しい事は手紙で話さう」

それでもお互に暫くお互の父母や兄や妹などの安否を語り合つて別れた。別れてから私は、此の僅かな道を歩いてゐる間に往きにも歸りにも岡の人に會ひ、殊に幼稚園時代から中學迄、一番仲の良かつた二人に會つた事は何か不思議な神樣の攝理の樣に考へられたので、私は一人心の中で默禱を續け神に感謝した。

五

家へ歸つてから、世田ケ谷の友達に會つて來た事や、軍隊の樣子などについて、正宗に話した。すると彼は

「では僕も其中召集されるかも知れない」

と心細がつてゐた。彼が美術に志して岡を出て來てから、まだ一年位にしきやならないのに、學業を半途に廢して出征しなければならない事は、同じ學生である私には身に引比べて其心痛の程が推察された。彼は夜になると、前に寺崎廣業の家へ暫く通つて、日本畫を稽古した事があるので、夜になると毎晩女の畫などを書いたり、又は其頃丸善へ來てゐた、ネーションピクチユアスを買つて來てそれを操返し〱ながめたり、殊にボツチセリーの畫集を好んで、それをも飽ずに毎晩見てゐたのだが、近頃は唐詩選などを持ち出して來て、長安一片の月だの、又は

葡萄美酒夜光盃　欲飮琵琶馬上催
醉臥沙上君休笑　古來征戰幾人歸

などを朗吟したりなどした。

「眞實に其詩にある通りだ。古來征戰幾人か歸る、とある通りだ」

と私も同じ心になつて云つた。

さうしてゐる中に、一週間ばかりすると彼の郷里から手紙が來た。それは果して召集令の通知であつた。

「愈來たよ。僕のは輜重輸卒の第一補充兵だ」

「輜重輸卒が兵隊ならば、電信柱に花か咲く。輜重輸卒が兵隊ならば、蝶々蜻蛉も鳥の中といふ所だな」

と吉岡が揶揄つた。私もどうせ兵隊に行く位なら、騎兵か何かよささうに思ひ、輜重輸卒とはつきらない樣な氣がした。併し彼は戰線に立つよりも、輸卒の方がいゝと云つてゐた。同心寮——さう我々の家を呼んでゐた。——の主人で傳通院前の牛肉屋の二階で正宗の送別宴をやつた。

正宗は手紙が來てから一週間目位にもう東京を立つた。同心寮も二人きりになると、隨分淋しくなつた。夜など吉岡が學校

の周りに竹所へ廻つて遊んでゐて、早く遊びたいことであると、家の中がしんとしてしまつて私は淋しくてたまらなかつた。殊に晝間縁側から見れば隣の墓地に新佛の、白張りの提灯などが見えるので、それを夜一人で空想すると、どうも怖ろしくてたまらなかつた。時には幽靈が散歩しに向ふから此方へ手を伸ばしてゐる所などが目に浮んだ。私は吉岡に頼んで、夜は一緒に出るか一緒に歸るか、行動を共にする事に約束した。

さうしてゐる中に、もう戰捷の報知は毎日の樣に新聞に出て來た。日淸戰爭の時の連戰連勝の經驗も有るものだから、今度も何と無く同じ運命のもとに戰爭が進で行く樣な氣もしないでは無かつた。併し相手が露西亞だと云ふ事は、いくら勝ち續けても私達に絶對の安心を與へる事は無かつた。此は殆んど戰爭の終極迄さうであつた。兎に角ナポレオンさへも、最後には打ち破つた露西亞であるから、さうして人間が粘液質で、怖ろしい耐久力を持つ國民であるから、決して油斷は出來ないと何時迄もさう信じられた。

戰爭に行つた友人達から、それぞれ葉書が來た。軍事郵便としてあつて、只の葉書とは違つてゐるのも何か特別の感じを與へた。正宗は手紙で戰地の寒い事、荷物を積んで車を引いて行く時はさう苦しくも無いが、空車になつてから歸る時の寒さが身にしみて辛いと書いてあつた。[illegible]ら何故露西亞と戰をしなければならないか、其れ迄さへ解らずにこんな苦勞をする事は實に馬鹿らしい、と云ふことも書き添へてあつた。

これを見て吉岡と二人で無理もない、車を引く事は生れて初めてだらうし、今迄の生涯が滿洲で車を引く樣に準備されてゐなかつたのだから。それよりも軍隊では、繪が書けると云ふ樣な一技一能ある者はその樣な道をつけて用ひたらよさゝうなものだ。金子なんぞは醫學の書生だから、負傷者の手當で位は出來ない事も無い。それに大砲を引摺らせたりするのも勿體ないものであつた。もう少し上手に人の使ひようも有りさうなものだ。などゝ語り合つた。所が陸軍の方でも矢張り我々と同意見と見えて、間も無く正宗は輜重輸卒を免ぜられ、繪圖なぞを引く方へ廻されたと云つて來た。そして以前の不平も何處へやら無くなり、我々は祖國の爲めに戰ふのを心から嬉んでゐる、などゝ云つて來た。吉岡が皮肉な笑ひ方をして

「矢張り妙なものだ、軍隊の空氣の中に浸つてゐると正宗みたいな男でも、すつかり愛國者になるからた[illegible]」

などゝ云つた。金子の方も間も無く砲兵を止められて、看護卒に廻された。もしあの男を參謀本部にでも廻したら、それ

こそ眞に適材適所で、彼は水滸傳の智多星吳用の樣な男なのだが、それでも醫學書生だから砲兵よりはまだ看護卒の方がよく用ひて吳れた譯だらう。などゝ私は吉岡に話した。

六

戰爭の中にも春が來れば花が咲いた。私は近處に居た秋田雨雀君と誘ひ合つて、二人で上野へ花見に行つた。今の樣に雜沓することは無かつたが、それは戰爭の影響では無く、其時分は今程人がさう云ふ所へ澤山出なかつたのだ。それでも恰度いゝ位に賑はつた。毛氈を花の下に敷いて三味線を引き、踊りを踊つてゐる樣なのも幾組か有つた。

四月中に、政治經濟科に居た友人澤豪君が訪ねて來た。澤君は明治學院では私達のずつと上の組に居たので其頃からの知り合ひだつた。私は友達が來るとよく誘ひだして傳通院あたりを散歩するのが常だつた。そして傳通院前の文房具屋樋口の店に坐つてゐるお內儀さんを遠くの方から友人に教へて、

「あれが君、樋口一葉の妹さんだよ。一葉の寫眞によく似てゐるだらう」

などゝ囁いた。それから傳通院の中を步いた。そんな案內をする以上にあの邊には別に訪ねて來る人に御馳走のし樣も無かつたからだ。傳通院の境內に釋尊の足跡を描いた大きな平石がある。其の足跡と云ふのは、隨分大きい足の裏の形で、そして中に魚だの卍だの其他色々なものが描いて有る。不思議な足跡も有るものだ。私と澤君とは其石に腰掛けて話した。澤君が云ふには、

「僕は此の間迄奧州の白河へ行つて、中學の教師をして來た。」

「では君、學校を休んで教師をして來たんかい」

「先輩の石井佐助君が白河程の町に一つも中學校が無いもんだから、自分の金で土地の爲めに中學を建て樣としてゐるんだ。まだ縣廳から認可が下らないので中學にはならないが、もう生徒がかなり來る。先達て中は二月ばかり明治學院の坂本君に行つてもらつて、其後僕が三週間程手傳つて來た。今度は君行つて見て吳れないか。二週間でも三週間でもいゝが、居られたら夏休迄居て吳れ給へ。學校の試驗は九月になつて、追試驗を受ければ差支は無からう」

白河と云へば私は、秋風ぞ吹く白河の關で其名を知り、又松平樂翁公の城の有つた所として、好奇心を持つた。それに學校の方は、毎日つまらなくもう止し度いと思つてゐた位であつたから、遊び半分に行つて見る氣になつた。同心所が淋しくなつたのも一つの原因だつた。私はすぐに行く事を承諾した。二人で

釋尊の足跡の緒を見るうちに、ふと[illegible]の[illegible]の側面を見ると、面白い文句が刻んであつた。初めに佛[illegible]壽經に云ふとあつて、佛所遊履、國邑丘聚、靡不蒙化、天下和順、日月清明、風雨以時、災厲不起、國豐民安、兵戈無用、崇徳興仁、務修禮讓、と云ふ言葉があつた。私は澤君にそれを見ろと注意した。澤君は

「うむ、面白い文句だ、絶對平和論を佛教ではもう此の時代から唱へてゐたのだ。宗教の立場としては、無論こうなくてはならぬ。舊約のイザヤ書の中にも、これと同じ意味の豫言がある。」

と語り、それから二人で今の宗教家共が平和論を唱へず、世間並に帝國主義的主戰論に雷同して戰捷の祈なぞする滑稽さ醜さを、盛に憤慨した。

「ヤソ坊主もヤソ坊主、佛教徒も佛教徒だ」

二人はそんな事を云つて別れた。

私は澤君から旅費として十五圓ばかり渡されたので、旅に出て必要と思はれる品々を買ひ整へ、先方に行つてゐる間に讀むべきものを買はうと思ひ丸善へ行つた。丸善は昔の舊式な日本風の店から、洋館に變る過渡期で、店先はまだ日本風に疊など敷いてある。二階は西洋風に本棚に書物が澤山並べてあつた。其處で偶然にも第一に私の眼を引きつけたものは、小形の青い[illegible]

[illegible]ナといふのであらう。[illegible]く思はれた。私は其[illegible]年前に、宗教家にはハイカラな[illegible]て各教會では夜も晝も大勝[illegible]を唱へて、[illegible]に[illegible]した時代に、他の多くの學生青年達と同じ樣に洗禮を受け、其信仰は尚續いてゐたので、それも其書物を買ふ動機となつた。

其月の二十八日の夕方に私は白河へ行つた。町は東京と違つて殆んど眞暗であるのに夜風が山の中だけに、中々寒く、佛の上にゐてぞつとする程だつたので、私は寂しく物悲しくなり其儘すぐ東京へ引き返さうかとも思つた位だ。併し石井君に會つて見ると、彼が如何にも好人物で、腹臓なく話し歡迎して呉れたので止る氣になり、とう／＼夏休の終近く迄白河に居た。其家は愛宕町と云ふ所に在つて、すぐ道を隔てゝ向ふにギリシヤ教の教會が立つてゐた。石井君の家は、かなり廣い二階家で中庭を隔てゝ藏があり、藏の二階は坐敷作りになつてゐた。それを私の居間として與へられた。生徒は朝八時頃からぽつ／＼來るのを待せてをいて、十時から教へ始め十二時迄で片付く、教場は二階も下も使つたが一人々々皆本も違ひ、個人教授で規律も統一もなく、全く昔の寺小屋と云ふものそつくりだつた。一人について五分位づゝしか教へないが、それでもおそき十二時にな

てしまう。其間少しも休む暇が無いが、どの子もナショナルの一位の程度なのだから、さ程骨も折れず、全く鳥なき里の大先生で面倒な質問なぞ受ける心配もないから氣樂は氣樂だつた。女の生徒もかなり澤山來た。中には小學校の女教員なぞも混つてゐた。色々面白い話もあるが、それは他日に讓り、成るべく戰爭に關した事を此處に語らう。

生徒達の多くは小學校の子供だつた。無論大人もかなり居たが、小學生が大部分を占めてゐた。或る日私が窓から往來を見てゐると、十二時に私の學校から引けて歸る子供達が、道を越へて向ふ側へ行き、ギリシヤ教の教會堂の前へ並んで小便をしてゐた。それが一人や二人で無いので私は變に思つて、翌日生徒達が來た時、あんな處へ小便をしないで、家の便所でして行けと云つた。すると生徒は

「いゝえ、僕達は學校の先生から教會の前で小便をする樣に云ひつかつてゐるのです。」

と云ふから私も實に妙な事を云ふと思つて

「何故先生は、そんな事を教へるのだ」

と訊くと

「向ふはヤソ教だからです」

と答へる。私は

「ヤソ教の事なら私だつてヤソ教だ。此處の石井君だつてヤソ教だ。ヤソで惡かつたら學問なぞ教はらぬがいゝ」

と私は大いに腹を立てゝ叱ると生徒は

「いゝえ先生のヤソ教はいゝんです。向ふの教會は露西亞のヤソ教だからです」

と答へた。小學校の教師たるものが餘りと云へば不埒な事を教へるものだと私は思つたが、併し田舍の人の敵國に對する敵愾心としては、此の位は恰度相當した所だつた。まだしも教會堂に大人が闖入して暴行を加へないのが不思議な位だつた。其教會の牧師さんの名前は今思ひ出せぬが、石井君とは心安くしてゐて、時々夜になると遊びに出た。彼が夜世間を憚りつゝ遊びに來るのは、石井君をも自分と同じやうに町の人々から憎ませぬ樣にとの遠慮からだつた。併し石井君の方は全く無頓着で此の牧師さんから露西亞語を稽古したり、又禮拜のある日に、式を見に行つたりした。私もニコライ宗の儀式は面白いと聞いたので、二度ばかり見に行つた。だが其集つて來る信者達の世間へ氣兼ねする樣子を見るのもいじらしかつた。ニコライ教司は、世間の疑惑を解き、併せて信徒達の考へ違ひをせぬ樣にとて、長い教訓の文章を起草し、之れを印刷したものを此教會にも配つて來た。私もそれを一枚貰つて讀んでみたが文章も中々

宗派なもので、今手元に殘つてゐるなら除名したいと思ふ位になつてしまつたらしい。小學校の先生達は、私達の家の前に遊ぶ小便する様には生徒に命令もしなかつたが、併し私達のヤソ教に對してもかなり反感を抱いてゐたさうだ。町の人々にも私達の事業に同情して呉れた人々もかなりあつたが、又反感を抱いた人々もかなり多かつたらしい。それが只ヤソ教であるが爲めだつた。其ヤソと云ふのも、宗教的の意味から嫌やがるよりは、外國のもの、西洋のもの、露西亞人も矢張り信仰する所のものと云ふ意味からの反感らしかつた。さう云ふ事は教はりに來る女教員や、又は大人の生徒達から聞いた所で私は判斷するのだ。白河私立中學校と認めた看板は夜の中に何度も盜れて、溝川の中へなぞ投げ込まれてゐた。それを生徒が何時も見付けて來た。

日曜は無論休みであるし、平日も十二時から先は教授しないのであるから、私の暇は充分あつた。生徒達に案内されて、金聖寺の田圃の方やら阿武隈川の方やら、又は城跡やら、又は南湖の方やら、午後は毎日遊び歩いた。又或る時は町のブルジョアに招かれ、又或る時は河や堀へ水泳ぎにも行つた。ステーションも亦こういふ田舍では毎日一度位遊びに行く場所になつてゐた。停車場の助役とも懇意にしてゐたので、私は乘り降りの客を[illegible]たり、又時には汽車に[illegible]込んだりした。時々[illegible]から、戰地へ赴く兵士を乘せた列車が來た。さう云ふ時には小學校の生徒は勿論、町の人々も澤山ステーションへ來て、プラツトホームには人を以て埋められ、皆が小い旗を振り、口々に萬歳を叫へた。さう云ふ事も戰爭中でなくては見られぬ光景だつた。

夜は暗くて散歩も出來ないし、人の家へ遊びに行くのも億劫だつたから、毎晩本を讀んで暮した。先ず一番に持つて來たトルストイの著作を讀んだ。すると其内容は、人が人を裁判すべからざる事、即ち裁判所無用論、人の加へた害に抵抗せぬ事、悪を以て悪に報いぬ事、即ち軍隊無用論、さう云ふ事が細々と說かれてあつた。そして最後にトルストイの理想とする所は、地國を來らせ給へと云ふイエスキリストの祈りの一節の實現と云ふのだつた。即ち天國を此の世に打ち建つべしと云ふのがトルストイの主張だつた。人は人と爭はず、只愛のみを持つて交はる、そして其處に絕對的の平和が來ると云ふのだ。こんな結構な話があるものか。若しこれが眞實に實現されるなら、我々人類に取つて此程幸な事は無い。讀んでゐる中にさう云ふ幸福は人々の覺悟次第で實現出來ない事は無い、と私には思はれ出した。「それから私は毎日の様に此の無抵抗主義を持ち出して、[illegible]

心にメートルを上げた。メートルを上げると云ふ言葉を使ふとしては、私の態度は眞面目すぎたであらう。教會の人達でも、又生徒達の父兄達でも私の平和論に對して反感を持つたり、又は反對したりした者は無かつた。贊成する者もあり、又は餘りメートルを上げるので、しやれなどを云つて私をからかふ者もあつた。

六月の末に、石井君が奔走して郡會議事堂を借り私達で學藝講演會をやる事になつた。石井君は何かの法律問題について語つた。次に私が語つたのは無論胸に滿ち溢れてゐたところのトルストイの平和論だつた。そして最後に白鳥牧師が、何かヤソ教のお話をした。入場料は一文も取らなかつたので、聽衆は堂に溢れてゐたから、五六百人位はあつたかも知れない。其聽衆は石井君が前坐を務めた時には、大變おとなしく聞いてゐた。石井君は中々雄辯だつたからかも知れない。私もかなり雄辯に語つたのであるが、まだ餘りに小僧々々してゐた爲めであるか、それともトルストイの受け賣りを戰時中である時節柄をも考へずにやつた爲めか、聽衆は煙草を吸ふやら、咳をするやら、ノー／＼などゝ叫ぶやら、段々騷しくなり、私が最も佳境に入つたと思ひ自分では得意の絶頂で雄辯を振ふ時分になると、もうがた／＼音をさせてどん／＼歸つて行く人があつた。私はひどくてれてしまつて、話し度い丈け話さずに演壇を下つた。

翌朝起きて見ると私が英語を教へる教室に當てゝある路へ向つた廣い部屋の窓硝子が澤山割れて落ちてゐた。

「誰の惡戯だらう。又誰かヤソ教退治に來たのだな」

などゝ石井君は怒つてゐた。その癖石井君も亦石井君の家族の中の二三人も此の部屋へ寢たのに、熟睡してゐて誰に惡戯されたのか知らなかつたのだ。併し後で聞けば私の演説が祟つたのだと云ふ。私は決して非戰論を唱へて、日露戰爭を眞向から攻撃した譯では無かつた。そんな事はトルストイの本には書いて無かつたから。私は只トルストイの受け賣りをして、無抵抗主義の平和論を唱へたのに過ぎなかつたのだが、それ丈けでも戰爭に狂熱してゐる地方民の感情を害したらしかつた。

七

新聞は毎日我軍の戰捷を報じ、國民の意氣は益々上つてゐたが、併し新聞の記事も仔細に觀察して深く考へれば憂慮すべき所が無いでも無かつた。旅順港の閉塞でも又掃海でも決して容易の事業では無かつた。廣瀨中佐が閉塞に行つて戰死したのは、私が恰度白河へ行つた日頃の事で戰爭が始つてまだやつと二月經つか經たない間の事だつた。此時の廣瀨中佐の人氣は實に素

要らしいもので、意に新聞の[illegible]にあの[illegible]が出來たのだけだ。いつもさうだが戰爭の初期に死んだものは、人氣がある。給費學校の第一回の卒業生が世間へ出て比較的大事がられるやうなものだ。五月十五日には帝國軍艦吉野が濃霧のために過つて春日と衝突して沈沒した。而も同じ日の夕方に初瀬は旅順港沖で敵の機械水雷にかゝり沈沒した。こう云ふ記事が新聞に出て來ると、實際此の先どうなるかと云ふ樣な心細さを感じない譯には行かなかつた。併し田舍の人は割合に鈍感なのか、それとも強がつて見るのか、こう云ふ記事を見ても殆んど悲觀せずに、只敵愾心を增すばかりだつたらしく私には見えた。それ程悲觀しない人でも矢張り此の時分は、一喜一憂で何事も只新聞を頼りに、勝てば喜び不吉の報知を見れば幾分か氣を腐らせた。それより前にも、金州丸と云ふ運送船が擊沈され、士卒がかなり多數捕虜にされた。それで此の金州丸と云ふのは戰爭の終迄評判が惡かつた。

金州半島に上陸した陸軍は、金州を取りそれから南山を陷落させた。此れが古今未曾有だと云はれる程大激戰で、我軍の死傷もすばらしく多かつたが、兎に角勝利に終つたので此處にやゝ愁眉を開いた。併しこれで日本軍の實力も分つたが、同時に敵軍のお手並も拜見した譯だ。露助も中々頑強だ、と云ふ樣な[illegible]を擧げた。常陸丸の外にもまた幾つもの船が[illegible]。よく濃霧に包まつてゐるのに常陸丸の[illegible]な最後だつた。これには大分者が心配した。陸軍輸送の船の妨害されるのが、其度に[illegible]當る上村中將の手落ちか無能だと云ふ樣な非難が盛に起り、上村さんの留守宅へ暴れ込んだ暴漢もあると云ふ樣な事も新聞に見えた。上村さんが態々知らぬ顏をして此方の船を敵に沈めさせた譯ではあるまいし、濃霧の爲めに遮られてこんな事になつたのは全くあの人の運が惡いと云ふものだ。と上村さんを辯護する人々も少くなかつた。さうかと思ふと又敵の軍艦が大部此方の水雷にかゝり、戰術家として世界に有名なマカロフ大將が戰死した。こうなるともうどつちが勝つてゐるのだか、どつちが負けてゐるのだか、混沌として一寸見當がつかなくなつた。併しそれにしても此方が一足一足前進し、先方が一足一足退いたのは事實だ。併しまだ滿洲からさへ敵軍を追ひ拂ふ事が出來ないのに、敵に根本的の止めを刺すのは、どうしてもウラル山を越えてからの事だ。一人でも人間が生きてゐる限りは、決して敵國に降參しないと云ふ意氣地を持つた日本人の考へからすれば、敵だつてさう簡單にへこたれ樣とは思はない。さうして見ると前途はまだ中々遼遠だ。それだのに尚旅順港が殘つてゐる

る。旅順港が難攻不落の要害で、どうにも我軍で手古摺つてゐると云ふ噂は秋から冬の初めへかけて段々人々を心配させた。

私は八月下旬迄白河にゐて、それから眞直ぐ東京へ歸らずに、八月三十日かに一旦自分の鄕里の上州沼田へ歸つた。國でも話と云へば、もう戰爭のことで持ち切つてゐた。私が小學校にゐた時分の友達も、中學で一年か二年私より遲れた人だが、已に戰死したと云ふ事だつた。戰地へ行つてまだ鐵砲を一つも打たない前に、進軍中に敵の彈丸に中つて討死した、何うせ死ぬにしても、せめて一發でも打つてから殺したかつた、と皆が殘念がつてゐた。又中學を一緒に出た中の一人で林秀作君は其後一年志願兵であつたが、此れも南山あたりで戰死したとの事だつた。神社などで丸避のお守りと云ふ不思議なお札を賣り出した神社もあつた。

私の鄕里から出た兵隊は高崎又は東京の聯隊に入營するのだから、多くは旅順口に向けられ、好戰術家として又軍神として後に名高く成つた乃木將軍の部下の中に加へられた有りがたさには、ずいぶん多く戰死した。そして土百姓の子から一躍して招魂社の神さまと迄出世するの光榮に浴した者が仲々多い。

私が歸省した翌日かに鍛冶町とか坊新田とかいふ場末の町から出征して旅順で戰死した兵卒の葬式がある故、會葬せよとで觸れて來た。町の何の家からも大抵一人は、多くは主人がく禮服を着けて出かけた。式は田舍に珍しい神葬祭で神官が祭辭を讀み、郡長町長中學校長警察署長等、町の豪い人々が弔辭を讀み、皆々玉串を捧げて禮拜した。小學校中學校の學生たちも恐らく全部會葬したことであらう。殆んど町葬だ。

戰死して其日葬送された兵士は貧しい馬方の子か何かであつた。

「奴もこれぢや浮ばれるだんべえ。そして此から先は九段の神樣だな」

などと馬方の子の幸福を人々は羨んだ。

世間の人は現金なもので、戰爭がすむでだん〴〵時が立つと軍人の有りがたみを忘れ、近年では次第に輕蔑するやうにさへ成つたが、戰時中軍人のモテた事は實に想像以上だつた。誰も皆戰地から便りでもあれば誇り顏に人に示し、戰地へは樣々の物品を郵送して兵士を勞つた。

或日、店にゐて外を眺めてゐると、旗を幾旒も先頭に立たせお百姓さんの行列がつゞいた。又何村かの兵士を送るのだな、と思ひつゝ戶外へ出て見ると、衆に圍繞され百姓馬に跨り揚々として街路を練つて來る者がある。近づいてから尙よく見れば中學に於ける私の友人石田孝平君で、當時まだ江田島の軍兵海

學校生徒であるか、私も昔[illegible]九段中ヶ坂の友人の下宿で[illegible]校友命を催した廊りに會つたままなので、彼しさに「やあ」と思はず叫ばうとしたが、彼は私の路傍に佇むをすら知らず悠々として過ぎた。彼はまだ兵士ではないのだ。彼はその日戰地へ赴くのでなかつたのだ。彼は將來の海軍將校の卵であると云ふにすぎぬ。暑中休暇か何かで歸村してゐたものにや、兎に角之から江田島の兵學校へ行くところなのだ。それにも拘らず、全村のお百姓さんは一日の仕事を休みこぞりて旗を立て見送りつつあるのだ。彼の村から私の町まで二里へだつたてゐる。村人たちはすでに二里を送つて來て、この先何處まで送つて行つたであらう。實に壯んなることであつた。

爾來、夢と過ぎし二十春秋、烈風と戰ひ怒濤を凌ぎ、ヨソモン排斥主義者たる薩摩人種の間に小さく成つて窮屈な規則的生活を忍び來つた彼の勤勞に對し、村人は如何にして彼を搾つたか？　一朝軍縮の血祭に上げられ、退職少佐として歸省するの時、又旗をかゝげて行列を作つて二里も三里も出迎へに來る村人ありや。人情の輕薄常に斯の如し。郷黨にモテ世間にモテるといふ如き、天下之より以上當てにならぬものは無いであらう。

若し男を生まば當に軍人たらしむべし、若し女を生まば當に

[illegible]人の家だつたりしたが、[illegible]今の事ではない。

それは倂て置き、私は郷里に十日ばかりしかゐないで、又九月の初めに上京した。深谷迄來ると汽車が止つて中々動かない。そしてゐる中にプラットホームは一杯の人になつた。其群衆の中には旗を持つた小學生徒も澤山混つてゐた。出征軍人を送るのだなと云ふ事は、白河で何度も見てゐたから私には直ぐ解つた。汽車は此處で時間に遲れて來る出征軍人を待ち合せてゐたのだつた。軍人が大勢の有志に送られ、旗を立てゝねり込んで來ると、天地にどよめく萬歲の聲と共に、すぐ汽車が動き出した。

私のすぐ前に若い學生と其の親父さんと並んで腰掛けてゐたが、汽車が何時迄も動かなかつたので、親父さんの方は立つてブリッヂの後ろにある憚りへ行つた。そしてまだ歸らぬ中に萬歲の聲と同時に汽車が動き出したので、親父さんはとう／＼プラットフオムに取り殘されてしまつた。私は兵隊を送る人々の方にばかり氣を取られてゐたが、汽車が動いても親父さんが扉へ戻つて來ないので、息子はひどく心配して次の驛で降りて、深谷の驛迄電報を打ち、そして親父さんを待ち合せるから此の荷物を上野驛で降して、保管して呉れまいかと私に頼んだ。

は其人が見ず知らずの他人であつたけれども、戰爭の時には妙なもので、恰度去年の地震の時の樣に誰を見ても日本人でさへあれば、皆兄弟の樣に思はれた。頼む方もそれだからこそ頼んだのであらう。私の方も何とも思はず其荷物を引き受けた。そして上野へ降りてから一汽車待つと次の汽車で親子の人達は無事に着いた。翌日私の所へ禮狀をよこして呉れたので見ると、其人は一ツ橋の高等商業學校の生徒で、川端某と云ふ青年だつた。もうあれから滿二十年過ぎた。

恰度此の時分、八月下旬から運動を開始した我軍は九月初めに遼陽を陷落せしめた。此の時の我軍の損害は實に夥しく今書物で調べて見ると一萬七千五百三十九人となつてゐる。非常な激戰で敵も其割合で死でゐる筈だ。兎に角此れで此の戰爭にやや目鼻がついて來た樣に思はれる。沙河の大戰に又勝つた。そう云ふ事のある度に東京市民は戰捷祝ひをやり、郵便局では戰捷記念繪葉書を賣り出した。元來繪葉書と云ふものは、其二三年前から學生なぞの間にやり取りされたが、それは其時代の文學に現はれた星よすみれよと云ふ樣な趣味の繪が多く、一般的にはなつてゐなかつたのを此の戰捷記念繪葉書を以てとうとう繪葉書の流行を來し、誰でも繪葉書を買ふ事が珍しくなくなつた。兎に角此三枚一組の戰捷記念繪葉書の景氣は素晴しいものので、郵便局へ早く買ひに行かないと、ぢき賣れ切れてしまふ。熱心な連中は、明日賣り出す事が知れると、まだ夜の明けない中からおしかけて、郵便局の事務の始まるのを待つと云ふ騷ぎだ。誇張で無く江戸橋の郵便局では、押すな押すなと押しかけた群衆の中に、窒息して死んだ少年が二人迄もあつた。

多分此秋の初めの頃かと記憶する。煙草が官營に成り惡質に成り而して俄かに高價になつたのは。前から卷煙草といふものは有つたけれども、皆舶來若しくは舶來まがひの兩切で、價は大抵安くフオークの如き一箱一錢、サンライス三錢位ピンヘツト、オールドゴールド、ブツキス等何れも四五錢だつたが、それでも之を吸ふものは學生または醫師官吏教員などに限り、一般の人は多く刻を用ひてゐた。商人は誰でも大抵矢立(今日なら萬年筆)と煙草入とを腰にさしてゐた。然るに日英同盟ごろから菊世界、村の川、常盤といふやうな口付の卷煙草が生れ、それが大變に賣れて次第に一般人が好むやうに成つた。ことに菊世界はよく賣れた。一袋四錢五厘でマッチが付き赤い暖簾をかけた店に若い美人が必ず座つてゐるのが煙草屋だつた。

煙草が官業に成り從來の物が無く成ると聞くと、菊世界と別れるのが名殘惜しく一方に澤山買ひだめをしつつも、また新らしい官製の出るのを好奇心を以て待ち迎へた。敷島大和朝日山

ほリリーなどが賣り出されたら値は敷島が八錢で、それが時世界などにしか吸へぬ。一躍倍額に成つたやうなものであつた。之は堪らぬといふので卷煙草を止めて刻みに代へ豆煙管など拵へて學校の生徒控所でスパ〳〵やることが一時流行つたが、その一袋四錢の「あやめ」も以前の二錢の「雲井」に及ばず、第一、袋の文字からして雲井といふ名の花魁が揚子で書いたといはれてる共細そい煙のやうに飾り無さ相な品のいい文字は、あの俗惡な實用一方の官製煙草とは比較に成らぬ。秦野と云ひ茂木（モトギと訓む）と云ひ館（だて）と云ひ大鹿と云ひ、各々飲む人の好みによつてその産地の煙草が吸へたのに、そんな事も何だかメチャ苦茶に成り、何處の産だか分らずに敷島を吸ふ風情なさと云つたらない。それですら、誰も之は水雷艇その他を建造するための軍費としての間接税だと聞いては、不平も何も言ふ者はなかつた。擧國一致は良い事にちがひない。併し如何に戰時中とは云へ、あんなまづい煙草をこんなに高價に賣るやうに成ると分りきつてゐるのに、一も二も無く桂太郎の軍閥内閣になめられて、之を官營にする可く承諾してしまつたあの當時の代議士どもは、眞に愛煙民族たる日本人を賣つたものであつて、醜名を千載の議會史に垂れるものと謂つ可しだ。

十一月三日の觀兵式は例年の通り青山練兵場に催された。ただし天皇陛下は此時廣島の大本營にいらせられたか、それとも親しく御閲兵遊ばされたか忘れてしまつた。唯、私は友人と共に早くから家を出て觀兵式を見に行つた。埃を浴び人に押されつつ永く立つて見物した。戰時中のこととなればとて、士官も兵も戰場へ出る時のカアキイ色の服裝で至つて質素なサツパリしたものだつた。こんなことまで平和の時とは變つてゐた。

八

秋から先きは旅順口攻擊の困難とバルチック艦隊の東航とが常に話題に上つた。旅順の落ちない中にバルチック艦隊が來てしまへば、敵の勢ひが大いに盛り反して、大變な事になると云ふ不安があつた。所が旅順が中々落ちない。遲くも九月初めには落ちるだらうなどと云はれたものだつたが、二〇三高地の攻擊が九月になつてやつと始まつた。そしてそれが、どうにもこうも落ちない。十二月末になつて漸く落ちた。其三ケ月の間人々の話は、明けても暮れても二〇三高地だ。二〇三高地と云ふ名は、耳に蛸が出來る程聞いた。

十二月初めの事だと思ふ。外國語學校の生徒だつた岡の中學校の同級生、スモール竹川が當時私のゐた若松町の下宿へ訪ねて來て

「僕の兄が脚氣になつて旅順から廻送され、今澁谷の戰時病院へ來てゐるから行つて見ようと思ふが君も一緒に行つて吳れないか」

と云ふ。其處で私も一緒に出掛けた。青山四丁目迄電車で行つて、水菓子屋でまだ少し青味のある蜜柑を風呂敷に一つ買つて、二人で代る〳〵ぶら下げ、青山高木町を過ぎ脊の高い並木や、枯れかゝつた草で蔽はれた丘の間の道などを過ぎ、そして其病院へたどり着いた。大分うろ覺えになつてゐるが、バラックの樣な建物であつた思ふ。白い寢着を着た病傷兵が澤山ベットを並べて寢てゐるもあれば、ベットの上に起き直つてゐるのもあつた。其中に友人の兄さんが居た。二人で蜜柑をむいて食べながら戰地の話を聞いた。二〇三高地の要害のえらい事、速射砲と云ふ驚くべき武器が先方にはあつて、突貫して行く我軍は、忽ちの中に死傷者の山を築くと云ふ樣な話、鐵條網の話、實際何時になつたら旅順が落ちるかと云ふ樣な話しも聞いた。

之より先明治三十五年の春頃から、女學生の間に前髪を廣く取つた束髪がはやり出したが、暫くするとそれは少し變化して廣く取つた前髪を更に前の方へ突き出した妙な形の束髪になつた。それを俗に庇髪と稱へて、女學生の間に流行し、袴は蝦茶色の行燈袴、そして今の樣にお白いも塗らないし、化粧も下手であつた爲めに田舍出の女學生などは、其健康のために肉が頰邊が丸く赤いから、世間で女學生の事を日の丸行燈と呼び、又は蝦茶式部庇髪などと呼んでゐた。所が其の前髪が前に突き出てそして高くしてあるので、此の時分から庇髪を洒落れて更に二〇三高地と呼ぶ樣になつた。其位皆の頭は二〇三高地に支配された。こうしてゐる間に年末へ來て二〇三高地が陷落した。するとそれに余日を得て、椅子山、二龍山、松樹山、東鷄冠山等の砲臺が、どん〳〵陷落した。そして時も時、一月三日に旅順が開城した。敵將ステッセルが降參した。併しよく戰つたと云ふので、ステッセルは大部其當時評判がよかつた。戰爭といふものは實に妙なもので、敵が强ければ强いだけ、此方はひどく惱まされるのであるが、それにもかゝはらず强い敵は常に評判がいゝ。日清戰爭の時、左寶貴が小バカにされたやうにクロパトキンは輕蔑され、丁汝昌が評判がよかつた樣に、ステッセルは日本人の間に尊敬された。

旅順口開城の捷報が來た時の東京市民の感動はどんなだつたらう。私は冬休を田舍の實家に過したのだが、田舍でさへも殆んど狂氣の樣に皆が喜び騷いだ。私は白河にゐる時分平和論者であり、從つて非戰論者であつたが、トルストイもあのまゝ繰返して讀みもしなかつたので、段々付け燒き刃がとれたものか

それと云ふ事も[illegible]で私には[illegible]。いつしか一般人とは[illegible]戰時國民と成りおほせ。旅順攻[illegible]の[illegible]しなら狙ひを心配した程度も強かつたし。又今度の開城を語ふ程度も決して人後に落ちはしなかつたと思ふ

國元にゐる間に、中學の舊師を訪ひ、同期生の木條喜一郎君――士官學校を出て北海道の方の隊附きに成つてゐた陸軍少尉の――が旅順で戰死した事、又直ぐ上級の校友木檜謙次君――之は外國語學校露語科を出てゐたので通譯官として矢張旅順の方にゐたが、腸チブスに罹つて病死した事、又私と同期生で矢張士官學校を出た陸軍少尉ビツグツノダこと角田政之助君が乃木さんの旗手と成つて從軍し、之はまだ健在であるといふ事などを聞いた。同期生の金子伸三君は砲兵だつたが今は看護卒に成つてる、彼からも私の兄へ宛ててハガキが來てゐたそれには相變らず飄輕な超然たる洒落交りの文句が書いてあつた。

三十八年一月九日、私は瀧川まで歩いて瀧川から高崎行の鐵道馬車に乘り、金子まで來たところで、之は兩木檜君の村であることを知つて居たから墓參をしようと思ひ一寸下車した。謙さんの方の家は大へん立派な目に附くお大盡らしい家だつたから、先に知れたので先に寄つた。私は家の人々と合つて哀悼の意を述べいろ〳〵故人の話など聞いてゐる中に時間がたつたの

て、我々なども[illegible]ニヤつと高等學校の[illegible]になつた[illegible]學校で學生生活をやつた時、ゴーゴリの何とかいふ芝居の中に謙さんは出たが、死んでしまふ役だつた。國難を抱へて舞臺に倒れ、

「クルチイ〳〵」と叫ぶのだ。私が後で謙さんに

「君、死ぬ時になつて急に日本人に成つてしまうのは可笑しいね。クルチイ〳〵なんて」

といふと、謙さんは笑つて

「ウン、あれかい。クルチイといふのは露西亞語で錢といふことなんだ。あれは怖ろしい欲深親父なんで死ぬ時になつてもまだ錢々と叫ぶところなんだ」

と云つた。謙さんはそんな欲深爺さんではなかつたが、あれが讖をなしたものか、とう〳〵若い事になつてしまつた。あの芝居で見たのがあの人の最後だ。喜一郎君も私とは仲よしだつたが、卒業式に一緒に寫眞をとつたのが一生の別れとなつてしまつた。

一月半ばには明治學院で同級生だつた黒川孝平上等兵が、私の下宿へ來る筈なので同期生の八友仲の連中が集まつて來て、旅順で負傷して歸つた此上等兵をかこんで祝盃をあげ五目飯を

食べつゝ戰地の話を聽いた。

「僕も負傷しなけりや、もうとつくに死んでゐるんだ。負傷したんで助かつた。創が治つたら又行くんだ」

といつて額のかすり創と、肩の貫通傷と、股の大きい創痕とを見せた。股のは彈が中に止つたのだ。彼はそこへ昏倒して數時間たつて眼覺めた時には、戰友は死んだ骸より他に誰も殘つてゐなかつた。彼の隊は殆んど全滅したのだつた。

私たちが中學時代の愛讀書「日本風景論」の著者として知る志賀重昂氏は、當時早稻田大學で私たちのクラスに地理學を教へてゐられたが、此戰役が初まると乃木大將に從つて旅順攻圍軍の中に在り、親しく其戰況を目擊して丁度此頃?に歸朝し、その陣中の模樣に就いて私たちを集めて講話された。志賀氏は乃木將軍の隣室に起居してゐたところ、或夜乃木さんの部屋へ乃木さんの息子さんが訪ねて來た。それを乃木さんは戰時中に親の許へ勝手に來るといふ事があるか、早く往つて自分の部所を守れ、と叱つて歸した。するとそれは南柯一場の夢であつたので、將軍は隣室の志賀氏のところへ來て、今これ〳〵の夢を見た、私も年老いたので不覺にも子供の夢を見たと語つたが、すると不思議にも令息戰死の報知がそこへ來た。夢にも正夢といふのがあると昔から云ひ傳へられてゐるが、あれは確にその正夢であつた、などと私達に語られた。

志賀氏は圖體が大きく聲が大きく更に話が大きいので、私たち生徒から悦ばれてゐたが、これらの戰話はことに面白かつた。

九

二月半ばに國元の兄から長い手紙が來た。それには、自分は第二補充兵の三番くじである。然るにもう二番くじの者迄こないだ召集された。今度來れば俺の番だ。さうしたら自分は出征しなければならぬから、貴樣は歸國して母上のお守をせよ。今からその覺悟でゐてもらひたい。とある。

手紙を持つ私の手は思はずがた〳〵ふるへた。胸はわく〳〵した。兄は此一月に結婚したばかりだ。又私は私でここまで來て學校を中途で止めて歸る、さうしてもう二度と東京へ出て來る事が出來ぬかも知れぬ。兄は戰爭が終らぬ限りは歸るまいし、終つても場合に依つては歸らぬかも知れぬ。勿論此戰爭は自分たちの國の戰爭とは思つてゐたもの丶、かうも直接に自分たち自身の國の戰爭とは思はなかつたのに。そして矢張いくらか見物氣分でゐたのに。

何だか、人身御供の白羽の矢が立つたやうな氣がした。其日

ちやもう何う手につかなくなつた。戰捷を祝ることとはかり考へてゐた。さうしてゐる中に、私達は又奉天の大捷報を受取つた。

奉天の戰鬪は平原の戰で戰線廣く、三十里に亘り、彼我の兵數九十萬と註する頗る大規模のものだつたから、奉天ふたを切つてから僅に二週間もかゝつた。既に旅順口が陷落した後であるから、我陸軍は全力をここに傾注した。黑木大將の第一軍、野津大將の第四軍、奥大將の第二軍、乃木大將の第三軍、それから全軍をあげて右から左へ連なり奉天に集つた敵の主力を包圍攻擊した。三月三日頃にはすでに勝利はこつちのものと思はれたが、全然片がついたのは十日ごろだつたらう。

その時には敵の少將ナヒモフ以下四萬人を捕虜とし、分捕品は又ドツテモ澤山あつた。敵の遺棄した屍體だけでも三萬に近く、その他の死傷約九萬を以て註せられた。馬匹軍旗火砲小銃彈藥糧食その他の物品、何の位澤山あつたか分らない。雜穀が約一萬五千石、馬料五萬五千石、パンが百萬食、燃料が一千八百萬貫と云ふやうな數字なのだから、他は推して知る可しだ。兵卒や士官の捨てて置いて逃げた物品、聖書だの聖像だの、さうかと思ふと酒罐だの、人々が凱旋の時滿洲土産になつたのである。世田ヶ谷の砲兵隊で私が別れに行つた時の金子上等兵の注文以上のものであつてし、如何に彼のポケツトが大きくても迚もこの分

持ぎは入りきたなついたでらう。捷報を得た時に市民は驚喜して祝を祝つた。我々もそれにならうとして、あんまり急いで何時迄かふところは落ちへてもまはの知人のうちにあつた。

早稻田大學では提燈行列をやつた。慶應大學でもカンテラ行列をやつたのも多分此時だつたらう。

私たちは夕刻學校の廣場に集ると、それ〴〵注ぎつき提燈と蠟燭とを渡された。「都の西北」を唄ひ乍ら神樂坂から牛込見附に入り、九段坂を下りて牛ヶ淵から濠ばたを迂迴して二重橋前に到り型の如く萬歲を三唱して日比谷で解散した。

私は皆と笑ひさゞめき乍ら、時々兄の手紙の事を思ひ出しては沈み込んだ。戰に勝つのは嬉しいが戰線がだん〳〵擴がつて、兵がだん〳〵徴集されるのは心配の種だつた。私は嬉しさと苦しさと交つた妙な氣持で歸した。

＋

奉天の大捷は私たちを悦ばせた。しかしまだ此位の勝利では我々に安心を與へるところまでは行かなかつた。却つて戰爭の初期には敵の様子が分らないから、一面恐れもしたけれども亦他面大に盲蛇のところもあつた。殊に田舎の人々などは怖い

が荒かつた。私もその田舍人の中に行つてゐたから自然氣强い傾きがあつた。しかるに此時分に成つて、即ち旅順が陷落する前後になつてから、戰地から歸つた人々の口を通して、我々は初て鐵條網の怕ろしさを知り、速射砲の怪力を知り、要塞戰の如何に困難なるかを知つた。又日本人に大和魂がある如く又ロシヤ人にも露助魂のある事を知つた。

かてて加へて遼陽沙河奉天と進めば進むほど戰線は擴がるばかりで、且つ北へ進めば進むほど氷雪積んで深く、何處が川やら道さへ知れず、むすび飯の米は氷つて針の如くといふやうな愚痴が出はじめた。遼莫家鄕憶遠征が思はず口から洩れるやうに成つた。之に反して敵軍は退くに從つて故鄕に近く、糧食の輸送力は次第に殖える、寒さに對しては不死身なり、生一本の日本人は退く時は罰せられるところを、耐寒性に富むロシヤ軍では巧みなる退却をすれば常に賞せられるのだ。勝つのは結構だが、だん／＼深入りした結果、何う成ることか？

旅順陷り奉天を占領するにつれ、不安の空氣は却つて前よりも濃く成つた。

バルチック艦隊が東航して旅順港内の艦隊に加はらうとして既に歐洲を出發したといふ噂は、夙に去年の初夏の頃からあつた。戰爭が終つてからだと互に本當の實力が分るのだが、まだ戰つてみない中はスフインクスの謎だ。解きそくなへば命を失ふ、のだから怕くないことはない。バルチック艦隊の旗艦クニヤッツ・スウオロフに司令長官ロゼストウエンスキーと共に乘り組んでゐたところのセミヨーノフ大尉が著はした「ツシマの戰」で見ると、該艦隊の艦數は多いが何れも古い船で、仲にはヨボ／＼のものもあり、速力は遲く石炭は乏しく武器も惡く將卒は訓錬を缺き、何一つ取り柄のないものであつて、從つて向ふでは東鄕大將を怕れること非常なものだつた事が記して有る。併し、戰爭前に私たちは何うして此事を知らう。東鄕大將でも恐らく知らなかつた事だ。

私たちはたゞその艦數の多きを知り——東鄕艦隊の約三倍——その實力を知らずに氣味わるく思つてゐた。さて夫れがいよ／＼近づいて來る。

シンガポールを何日に通過した、上海を何日に出帆した、と樣々の噂を聞く。いよ／＼だ。いよ／＼之で此戰爭の雌雄が決せられるんだ。

さうしてゐる中に、五月末の正午頃、私は喜久井町の下宿にゐて、あの日本海大海戰の捷報を得た。號外賣りを呼び止めて求めたわづか一錢の號外に、あんな大吉報を得ようとは、全く思ひがけなかつた。見た後でニツケルの一つも叩き付けてやれば

とかつた、などと云つた位だ。

續いて詳報が來た。敵艦三十八隻の中、旗艦クニヤツヅ・スウオロフを初め二十隻を撃沈し、ニコライ一世等五隻を捕獲し、その他はこと〴〵く遁走させた。

主力隊全戰艦隊「東郷大將直率」裝甲巡洋艦隊「上村中將直率」瓜生戰隊及び各驅逐隊は、正午頃すでに沖の島北方約十里に達し、敵の左側に出でんがため、更に西方に針路を取りしが、午後一時三十分頃、出羽戰隊巡洋艦及び東郷（正路）戰隊等も敵と接觸を保ちつつ、相前後して漸次に來り合し、同時四十五分に至り正に我左舷前方數海里に、始めて敵影を發見せり。敵は豫期の如く其右縱列の先頭にボロヂノ型戰艦四隻の主力戰隊を置き、ヲスラビヤ、シツソイベクキー、ナワリン、ナヒモフより成る一隊左縱列の先頭に占位し、ニコライ一世外海防艦三隻より成る一隊之に次ぎ、ゼムチユーク、イスムルドの二艦は兩列の間に介立して前方を警戒せるものの如く、尙ほその後方濛氣の中にオレグ、アウロラ以下二三等巡洋艦の一隊、ドミトリ・ドンスコイ、ウラジミイル・モノマフ、其他特務艦船數浬に亘りて連綿續航するをほのかに認め得たり。是に於いて全軍に戰鬪開始を令し、同時五十五分視野內に在る我全艦隊に對し

帝國の興廢此の一戰に在り、各員一層奮勵努力せよ

との信號を揭揚せり。而して我戰艦隊は此時南西に向首し、敵と反航通過すると見せしが、午後二時五分に東に折れ、其正面を壓して斜に敵の先驅を壓迫し、裝甲巡洋艦隊も續航して其後に連り、出羽戰隊瓜生戰隊巡洋艦隊及び東郷（正路）戰隊は豫定戰策に準じ、孰れも南下して敵の後尾を衝けり。

恁ういふ號外の文章は可也讀みにくいのだけれども、一氣に讀むので文字が眼の中へ溶ろけ込んで一人でに腦の中に消化されて行く。

此號外を讀みおはると、私は急に胸がぽか〴〵して家におつとしてはゐられなくなり、直ぐに家を飛び出して市ケ谷仲ノ町の友人の家へ行くと、もうこゝに連中が集つて號外を中に置き壯んに戰爭談に耽つてゐた。恁ういふ時にはつい聲が大きく成り言葉が荒くなるが、それでも流石喧嘩はしない。夜まで語つて語りつきず、つひに晩飯の馳走に成つておそく迄遊んだ。

此海戰の後は不思議な位安樂な心持が來た。よく考へて見れば戰はこの位な事で勝敗が決した譯ではない。やればまだ幾らでもやる餘地がある。海軍は東洋に敵の隻影を認める事が出來ないのだから、まづ戰をしたいにも對手がない、として、陸軍の方は滿州萬里長驅したければ出來ぬこともない。併し之れ目

下差し當つて敵が無い。敵無にあらねど向ふから逆襲して來るほどの、そして憂慮に價ひするほどの大敵は無い。捨てゝ置いたらまた敵は盛り返すかも知れぬが、差し當つて其模様はない。

あだかも永い間東亞の一角に蟠結してゐた密雲が雨を呼び風を起し雷霆相打つ大暴風雨に成つたけれども、今や低氣壓が何處へか去つてしまひ、大空は平靜に落ち着かうとするらしく見えて來た。

此頃ロシヤでは政府が日本と夢我夢中に成つて戰ひ國内の警戒がお留守に成つたのを見濟まし、左傾派が漸次手を都會の工業地に伸ばして、從來田舍の農奴を煽動して運動を起しかけては失敗してゐたのを、今度は都會の職工の間に宣傳して革命運動を起し、それが稍や成功しかけてゐた。こんな事情があの時こつちに知れてゐたら我々は一層メートルをあげるところだつたが、その時は知らずにゐた。だが、東洋からは略敵軍を驅攘して了せた心持に成り、もう講和を先方から申し込んで來さうなものだといふ氣がした。そしてそんな噂も立つた。

果せるかな。幾干も無くして六月中に時の米國大統領ルーズヴェルトから日露兩國に對し東洋平和のために世界人道のために講和しては如何とすすめて來た。まだ早い、といふのが民間一部の輿論だつた。しかし又之でホッと息ついた者も鮮くた

もう殆んど休戰氣分に成つてしまつた。併し海軍の方では拔かり無く樺太島の占領に着手し、さながら無人の境を行くが如くた忽ちの中に樺太全土を完全に占領した。

講和の時に樺太割讓を持ち出す下心だなと誰にも讀めた。樺太攻擊軍が北方に向ひ出發したのと略々同時に外務大臣小村壽太郎は自ら講和全權委員として米國に向ひ横濱から船出した。

さて之からは皆な寄るとさわると講和の話で、その條件など當推量にきめて下馬評を試みるのだつた。

「バイカル以東を割讓するかな」

「そいつは無理だ。まあ既に占領しただけの土地の外は、こちらからも要求せぬだらう」

「たつた樺太だけかい」

「いゝや、樺太だけぢやない。遼東半島租借權の讓渡。東清鐵道全線の讓渡だ」

「まだ有る。滿韓に於ける露國の一切の特權の放棄だ。それから償金だ。」

「償金は何の位」

「さあ、少くとも五十億かな」

一ダメだロシヤがそんな注文に應じるものか一

「應じなけりや、談判を破裂させるまでのことよ。戰をして此方はさんざつぱら金を使はせられて、償金を得なくつて、この後何うするものだ。日本は破産する」

人に依り程度の差はあるが、誰しも大きなことを空想し、又はその空想の實現を氣づかひもした。

さうしてゐる中に暑中休暇になつたので、私は歸國した、田舍にゐると、田舍の人は世界の事情に暗いから、それだけにまた日本の勝利を大袈裟に考へ、要求することが大きい。

しかし、毎日みんなが新聞を見てポーツマウスに於けるウヰッテ伯と小村との會見を注視し、仲々その談判がはかどらぬのをやきもきしてゐた。

小村委員はウヰッテ伯と會見に會見を重ねて、談判に約一ヶ月半を要しやうやく解決したが、其内容はわずかに露國が朝鮮に於ける日本の宗主權を承認すること、滿洲撤兵、還附及び特權放棄の聲明をする事、遼東半島租借權及び附屬の權營造物の移轉讓渡サガレン島の南部割讓といふに止つて、償金の事などには一言も及んでゐない。況んやバイカル以東をやだ。

さあ、そこで少くともウラル以東を得償金何十億をせしめやうと簡單に考へてゐた國民は、全く期待を裏切られて口あんぐ

りといふ事は、[illegible]得はなければならないといふ様な[illegible]たるソロバンを置いたわけではないか。戰爭は素より商賣ではなくして賭博である。勝ちさへすれば幾ら澤山取つてもいい筈である。それ故國民が大に期待したのも無理はない。

ところが政府の方では此時分に成つてもまだ餘程ロシアを怕れてゐたらしく、小村全權に訓電を打ち、如何なる犠牲を拂つても早く講和を結べといつてやつたとの噂がある。成程今まで勝つたとは云ひ乍ら、まだウラル山を越えたわけではなし、ぐづぐづしてゐる中には又盛り返して來ないとは限らない。國は大きく人は多い。我も相當の威力を示したところだから、味噌を付けない中に此所らで切り上げた方が策の得たるものであらうとは、少し常識の有る者なら考へ及ぶ。併し政府としては更にもう少し深く敵國の事情を知つて置いてもらひたかつた。ロシヤでは已に革命が勃發しかゝつてゐた、あの戰爭がもう少しつづけばレーニンみたいな連中が舞臺に飛び出して來たにちがひないさ。さう成れば敵は内憂外患だ。そういふ隱れたる第三者の力、それを數の中へ入れることが出來たら、あんなヘマな講和條約は結ばなかつただらう。それといふも政府並びに政事家が常に形而下の勢力ばかりに着目してゐて、思想の力の更に[illegible]

れより偉大であることに氣がついてゐなかつたからだ。全く殘念な話さ●

民間の輿論と新聞の外交論は考へは如何にも幼稚で盲蛇の勇氣にすぎなかつたのだが、今となつて見れば其方がよかつたので、あの時分には政府の方が輿論よりは賢明だつたのだが、敵國の革命思想を計算しなかつたところから出發した腰拔け外交は、恨を千載に殘すものである。

新聞で盛んに政府攻撃をやり其れが一般の輿論と成り感情となると、何時もさういふ機會を見計つて必ず飛びだして來るところの慷慨家煽動家彌次馬家といふ様な人々がごちやに成つて、講話條約の調印される九月五日を期し、日比谷公園に國民大會を開いた。國民大會と號して少數の彌次馬が何かといふと騒ぎ立てる柄は、實に此時に初る。併し此時の大會は眞面目で而して狂熱的だつた。河野廣中、大竹貫一、小川平吉、櫻井熊太郎などの面々がお先棒を振り、彌次やら見物人やらを交ぜて公園の内外に雲霞のごとく集つた。そこでお定りの警官との大衝突があつて、更に新富座に演説會を催さんとし、群集はゾロ〱その後について行つたが演説會は禁ぜられたので、激昂せる群集は、當時政府の御用をつとめた國民新聞社へ取つて返して之を破壊しやうとした。社の中からもピストルを打ち出す者あり、双方に怪我人も出來た。之では益々群集が治らず内務大臣の官舍に放火した者もあり、警官に投石する者もあり、警官の方でも拔劍して盛んに群集を切り殺した。夜になると民衆はまづ日比谷附近の電車を停めさせて火をかけ、之で氣勢を揚げて一層狂熱的と成り、全市に亘り、殊に下町に於て警察署を燒き交番を往來の眞中に引き出して燒き、まだそれで治まらず所在のヤソ教會堂を燒いた。人民にも警官にも双方五六百人の死傷者を出した。

私は九月初めに上京しようと思つてゐたが、新聞に右の様な記事が毎日出てゐるので、母が心配して出懸けるのを許さない。少し世間が鎮つてからにするがよからうといふので九日ごろまで國にゐた。

私の家では古くから續けて國民新聞をとつてゐたのだが、町内の人々はこれを知つて、有志が四五人揃ひ開き直つた大マジメで北購讀を止めて貰ひ度いと勸告して來た。ところが私たちにはまた煽動的盲目的な他新聞と較べて「國民」の方が穏健でいいと思はれたので、折角だが有志の勸告に應じられない。議論してはさういふ愛國的志士は私にとつて赤子の手を捩る様なものであるから、そのまゝにしてゐると、其晩から新聞屋が、「國民」を配達しない。熊野屋といふ取次店へ掛け合ひに行く

と、有志たちが營業停止を勧告してゐたつて、もう、おつかなくて取り次げません、といふ。

暴動の流行は田舎までも延びて來た。町内では早速国民大会をやり内閣彈劾軟弱外交條約取消しの決議文を型の如く讀み上げた。けれども流石に警察署を襲ふ者はなかつた。ヤソの教會は焼き捨てようといふので其の前の畑まで押し寄せたが、誰かが、焼くのは止して萬歳を唱へようと發議したので、天皇陛下萬歳を三唱して解散した、といふことである。

私はこの田舎国民大會のある前日に上京した。その晩は神田の親戚に泊り東京の暴動に就いて細かい話を聞いた。

翌朝、神保町通りで書物などを求め、自分の喜久井町の下宿へ行かうとして牛込見附を通ると其所には灰色のテントを張つて兵隊が屯し、剣附鐵砲を持つた兵士がテントの外に立つてゐたが、私を見ると誰何した。餘りに不意だつたので私は慌てて自分の住居について直ぐハツキリした答が出來なかつた。といふわけは、今度今迄ゐた下宿をかへて何處か他に居所を求めようとしてゐたからである。それ故、國元から持つて來た荷物も神田へあづけて來た。手にさげてゐたのはたつた今買つたばかりの唐詩選だけである。

「その包みは何か」

本であると答へれば一時的でもことがすむのだけど、上つてゐるから

「唐詩選です」

と答へた。

「トウシセンとは何か。一寸開けて見せろ」

剣附鐵砲の前で私は不器用な手つきで新聞の包みを解き詩集を示した。

戒嚴令が布かれてゐたのだ。

喜久井町へ行つてみると、話は新聞以上で、あの辺の下宿はまだ學生が歸つてゐず女中ばかりなのを倖とし、日中强盗が入つて學生の行李など悠々と運びさつたものがあるといふ事だつた。

東京に殘つた友人、または少し早目に上京した友人たちから暴動當夜の物凄い話を大分聞かせられた。中には逃げそくなつて巡査の剣が殆んど背中に觸つたといふものもあり逃げてドブへ落ちた者もあり、見物に出て捉へられ拘留所に泊められた者もあつた。

それから間も無く世の中は平穏に成り、壯大なる凱旋式があつたり巍峨たる凱旋門が諸所に建られたり、花やかな目出度い事が翌年の春までつゞいた。

ただ交番を燒かれた巡査ばかり、當分の間何もない四辻などにボンヤリ立つてゐる光景は、氣の毒だつた。

三十九年の三月の初め品川の停車場で、馬を汽車から降ろすところを見た。征戰から歸つた馬だといふ。馬にしても故國の春は嬉しいかと私をして感ぜしめる如く、彼等は高く嘶いた。

軍人は漸次歸國して親族故舊の大歡迎を受け、振舞酒に毎日醉つて手柄談を繰り返した。銀の十字架やらロスケの毛皮の帽子やら、さまぐ\の分捕品が私たちの眼を喜ばせた。

友人たちが戰場から歸つて無事の顔を見せたのは、三十の三四月頃だつた。さうすると益々永久に顔を見せない友ことが忍ばれた。

乃木さんの評判は其後ますく\よく、東郷さんの人氣は天に沖するの概があつた。

尤も不人望の絶頂と成り歸朝したら暗殺されはせぬかと心配された小林金權は伯爵を授けられ、其の他桂太郎の公爵をはじめとし、手盛の八杯的に閣員それぐ\出世した。

維新當時の激徒と其犧牲者

田中貢太郎

序話

いつの世でも新しい勢力が擡頭して、舊い勢力が崩壞した時には、社會が紛糾し淆亂する。幕末から明治の初年にかけても、その紛亂にともなふ暗い恐怖に怯かされたものだ。

櫻田門をはじめ坂下門の激擧、外人に對する暴行、禁門の變、長州征伐、十津川生野筑波山の擧兵、伏見寺田屋に於ける騷擾などは、世人の熟知してゐるところであるが、その他にも暗殺暴動の類は、數へるにいとまがないほどである。

文久二年十二月二十二日には、盲學者として有名な彼の塙保己一の子の塙次郎と云ふのが九段坂で暗殺せられた。暗殺者は伊藤博文の伊藤俊輔一派であつた。激徒はその時、日本橋に塙次

にの事を記した立札を建てたか、それによると天下に[illegible]の介を受けて、廢帝の古例を調査してゐたと云ふ事であるが、古實調査してゐたものであるか、單に噂だけのものであつたのか、それとも全然誤解であつたのか眞實のところは判然しない。由來崩壞した舊勢力の事實は、新興の勢力の都合の好いやうに改竄せられるのが歴史上の事實である。彼の勤王家の理想的人物となつてゐる竹内式部の寶暦の事件でも、明に後世勤王家の創作と云ふことが立證せられてゐる。塙次郎の事件でもこの新興の勢力の誤解捏造が遂に事實とならないこともないと云ふことを何人か斷定することができやう。私は昨年の十一月、東海道の蒲原驛に老を養ふてゐる青山先生田中光顯伯に逢つたところで、明治維新の新興勢力の志士として名のある青山先生は、塙次郎の廢帝の古例調査の事件を肯定して、『これは、伊藤の生涯中、もつとも光彩のある場面であるが、伊藤の傳記にこれが無いのはけしからん。』と云つたが、私は伊藤の傳記がこの事件に觸れてないのは、史家用意の存する所ではあるまいかと思ふのである。

文久三年正月二十三日には、池内大學と云ふ者が大阪で暗殺せられた。大學は京都の儒者で、安政戊午の獄には勤王の志士として幽閉せられてゐたが、赦された後は大阪へ移つて、時事を口にすることもなくなつてゐた。しかし、その頃のことがあつての秘密を探偵することができたので、土佐藩主山内容堂は大學を通行する途中、大學を旅館に招いて酒食の饗應をなし、いろいろの話をしたが、三四人の激徒はその歸りを途に待ちぶせてゐて、その輿を襲ふたのであつた。激徒は大學の頭を難波橋に梟して、捨札にその罪狀を掲げて、

池内大學

従來高貴の御方方の[illegible]恩顧、戊午年の頃は、正義の士に從ひ、種種周旋致し居候處、遂に致反覆、奸吏に相通じ、諸藩誠忠の士を陷し、剰へ自ら招く罪惡、不可容天地、加誅戮令梟首候也、

としてあつた。激徒はその翌日、大學の兩耳をそいで箱に納れ、一つを議奏正親町三條大納言、一つを議奏中山大納言の邸に投げ入れたが、それには、戊午以來、千種岩倉に同心して、酒井若狹守を輔け、賄賂を貪り、國内騒動を下すの罪あり、三日間に現職を退かれずば、此耳の如し、と添書をしてあつた。これには滿廷の公卿が色を失ひ、三日の後には正親町三條、中山の兩議奏は職を去つた。

復たその二十九日の夜には、京都下立賣にある千種家の臣賀川肇と云ふ儒師の宅へ数名の激徒があらはれた。肇

れと知つて二重壁にした壁の中へ匿れた。激徒は妾を執へてその居所を言はさうとしたが口を開かない。そこで激徒は女を裸にして縄で縛り、刀を頸にやつて嚇したが、それでもまだ云はない。で、今度は天井につるして拷問したが、それでも頑として何も云はないので、傍にゐた肇の小兒を捉へて、その頸に刀をやつた。肇は我が子の愛に牽かされて出て來て、『どうか何も知らない小兒は助けてくれ。』と云つて、激徒だちにその頭を授けた。激徒だちはその頭と兩手を切斷して持ち去つた。が、去る時壁上にその罪狀を題して行つた。

下立賣千本東へ入町千種家之臣

賀川　肇

罪狀

一獻毒之事、
一叡山之僧呪咀之事、
一若州引留に付三浦七兵衛藤田權兵示談之事、
一兩嬪之事、
一島田之事同老婆近浦之事、
一岡本肥後守之事、
一手先文吉之事、
一賀川肇罪惡總て文吉白狀之旨拷問白狀之事、
一與力加納繁三郎渡邊金三郎初より申合之事、
一正月十五日前兩嬪三奸再出之内願書差出候處、御下げに成候事、
一十二月二十九日夜大炊御門殿千種殿同道にて高畠式部女の宅へ參候事、
右に付令誅戮者也。
一此家の下女共儀は其節以死主人の在所を隱し候段感心の至に候也。
一小兒有志操也。
右一町内入用一切相懸け申間敷者也。

二月朔日の夜になつて、激徒七八人は千種家へ行つて、雑掌に生生した手首と封書を出して、これを入道殿に傳達してくれと云つた。封書には『此手は國賊賀川肇の手に御座候、肇儀は其主人千種殿と久敷御奸謀有之、別て御親敷候事故、定て御惜敷も可有之進上仕候、直に御屆可給候、一昨夜踏込詰問實情承屆候。且又少將衛門兩嬪復位の事、世間共沙汰有之、萬一右樣之筋相立候樣にては、不得止屹度處置可仕候、此旨兩嬪へも早早御通可給候。』としてあつた。

この夜岩倉家へも四五人の激徒が行つて、千種家へしたやうに切斷した肇の片方の手首と封書とをさし出した。激徒は又そ

の夜一橋中納言殿宿の門前へ行つて、白へぎに載せた奉書紙に包んだ生首に一封の書を添へて置いた。その書は小笠原圖書頭、閣部駿河守、澤勘七郎の三人に宛てたものであつた。それには、「今般攘夷御遵奉に相成候上は、一日も早く御拒絶に不相成候ては不叶義に候處、兎角姑息偷安の御廟議に被爲渡、畢竟御遵奉は名而已にて、御内情は是非開國通商に御說得の御手段に相違有之間敷、天下擧て御疑惑申上居候事に御座候、愈左樣にては朝命御輕蔑の處何と御申開可被成哉、天下有志の者屹度御許し申間敷候、願くは眞實の御遵奉に相成、破壞の期限早早御定被成候はゞ、天下擧て御疑惑申上居候事氷解に至り、御處置今日の御勉强と奉存候、此首昨年粗末攘夷の血祭、御祝の驗迄に奉進覽候、各方より早早一橋殿へ御披露可被下候也。」としてあつた。これには館中の者も驚いたが、武田耕雲齋は翌日一條中納言に淸酒を獻じて、『攘夷決定の時にあたり生首を獲るは、是れ攘夷の吉兆なり。』と云つたと云ふことである。

二月の七日、山内容堂の止宿してゐる土州邸の門前になつた高瀨川の橋の上に、風呂敷に包んだ首級を置いて封書を添へてあつた。『右は年來千種家等へ出入致し、奸謀相助候者に候、今般攘夷の勅諚被仰出、大樹公御上京に付ては太平遊惰の弊を一洗し、皇國の武威を八紘に輝候儀今日の機會不可失、老公樣御上京御滯留に付ては、實に[illegible]、遂に攘夷の期限を決し、人心の向背を定め、[illegible]醜夷を一時に御退治被爲在度、天下萬民の所望此に候、依て此首一、是賊の首級に備候ては不足に候へ共、加茂行幸に付き先血祭の印し候門に奉備候、宜御披露可被給候也。』とした封書であつた。

復た二月二十三日中の下刻、激徒の一團は等持院へ入つて、足利尊氏、義詮、義滿三人の木像の頭を拔き、その位牌も持つて出たが、やがて三條河原へ行つて、石を積みてそれを趾てかけ、傍に標札を打つた。

逆賊　足利　尊氏
同　義詮
同　義滿

正名分之今日に當り、鎌倉以來の逆臣、一一遂吟味可誅戮之處、此三賊巨魁たるにより、先は醜像へ加天誅候也。
文久三年亥二月二十三日

五月二十日の夜亥の刻、姉小路少將公知が退朝して、朔平門の東まで來たところで、後からつけてゐた三人の激徒に襲はれた。激徒の一人は先づその提灯を切つた。少將は驚いて從者に持たしてある刀を取らうとした。鐵輪右近と云ふ太刀持ちの

者は刀を持つたなり逃げてしまつた。少將は面部と胸部に重傷を負ふて斃れた。他の一人の中條右京と云ふ從者は、激徒に躍りかかつてその刀を奪ふて戰ふたが、これも刀傷を負ふた。激徒は隙を見て逃げてしまつた。姉小路家では少將はまだ死なないことにして、少將の名で傳奏に報じた『昨夜亥の刻頃退出懸け、朔平門東の邊にて武士體之者三人、白刃を以て不慮に及狼藉、手疵爲相負逃去候に付、直に歸宅療治仕候。但切付候刀は奪取置候。依て此段御屆申入置候へば、急に御通達、嚴重御吟味願入存候。以上。』

現場には激徒の穿いてゐた木履も捨ててあつた。奪ひ取つた刀は薩州鍛冶の製作で、頭に藤原、緣に鎭英と金の象眼がしてあつて、木履と一緒に薩州人の用ゐるものであつた。そして、その刀は薩州人田中雄平の所持品であると云ふことが判つたので、東洞院蛸藥師の旅宿に居た田中は、二十五日の夜、町奉行所に監送せられたが、その夜自殺してしまつた。田中の刀は數日前、祇園の妓樓に遊びに行つた際に竊まれたものであつたがその事を明にして武士としての體面を傷づくることを耻ぢて、自殺したと云ふものもあつた。姉小路は年少氣鋭の士で、口舌を以て浮浪の士の心を得て、その權威は三條中納言實美に次ぐほどであつた。暗殺の原因に就いては判然しないが、老中小笠原圖書頭長行が、外國掛水野痴雲、町奉行井上信濃守等て、外國船數艘を雇ひ、二大隊の兵を載せて、海路大阪にり姻戚の緣ある姉小路と内外呼應して、攘夷論者を一掃し、公武合體の實を擧げやうとしたのを攘夷派に知られたがためであると云ふ者もある。

激徒の暴行は文久二年から三年がひどかつた。塙次郎を暗殺した年の七月二十三日の夜九條家の家臣島田龍章の前に激徒があらはれた。そこは木屋町二條上る町の妾宅であつた。島田は美濃の國の修驗者の子で、京都へ出て彼方此方の公卿の家へ奉公してゐるうちに、九條家貫付所の下役になり次第に登用せられて左兵衛權大尉まで行つてゐた。前名は左近。彦根の藩士長野主膳と親しい關係から、堀川閣老が開港奏聞のため上洛した際、長野主膳を以て九條關白へ、外夷の處置は一切關東へ委任するやう取計はれたしと内請した時には、島田が傍から關白を說いたものであつた。井伊大老が安政戊午の大獄を起した時には、島田はこの間諜となつて在京の志士を探索した。又和宮降嫁の事に就いても周旋して、關東へ供奉した功によつて幕府から五十人扶持をもらひ、公武の御用掛を命ぜられてゐた。それは殘暑のきびしい晩であつた。島田は行水をして椽側に坐り、祇園から大金を出して連れて來てゐる君香と云ふ妾に團扇で煽が

していた。これを見た二人の激徒は、刀を[illegible]つて來た。島田は驚いて庭におりて裏の切戸を開けて逃げやうとした。と、そこにも四五の激徒が身を伏せて待つてゐた。島田は忽ち捕へられて曳きずつて行かれたが、その翌日の朝四條河原に建てた竹の先にその頭を見せてゐた。そして、その死體は片腕を斬り落して高瀬川に棄てゝあつた。後で島田の貯蓄を調べると十五六萬兩もあつた。これが京都に於ける暗殺のはじめであつた。

復たその二十日には、本間精一郎と云ふ勤王家として知られてゐた有志の一人が暗殺せられて、これ又四條河原に梟首せられた。その本間の標札には、『虚喝を以て衆人を惑はし、高貴の方々へ取入り、佞辯を以て勤王十三藩を讒訴し、有志を離間し、或は非理の貨財を貪る等その奸曲筆に盡しがたし、』と云ふやうなことを書いてあつたがこの事件はその當時にあつても誤解とせられた事件で、これも新興勢力の犠牲の一つであるらしい。

その二十二日の夜には九條家の諸大夫宇鄉玄蕃頭の許へ、小提灯を點けた一人の武士が來て、『九條家から急用の使にまゐつた』と云つた。そこは九條家の砂川の別邸であつた。門衛は疑はずに潜門を開けた。その武士の後には四人の同志がゐた。彼等はとつさの間に門を通つて、玄關から押入り、臥床にゐる玄[illegible]きさげて行つたが、これは[illegible]の後に[illegible]いて[illegible]あつた。

そして、九月朔日には目あかし文吉と云ふのを三條河原に、同二十四日には、町奉行組の與力渡邊金三郎、及び同組の同心二名を粟田口の刑場に梟首した者があつたが、皆島田左近に隨從して奸謀を助けたから天誅を加ふと云ふやうな立札をしてあつた。

私は嘗て維新史料の岩崎鏡川先生の許で、島田左近をはじめ賀川肇などの梟首の場面を寫生した畫筆の繪卷を見たことがあつて、今に島田の首を突き刺してあつた竹の青々とした色が心象に殘つてゐるが、私はさうした恐怖の中にゐて悠々と寫生の筆を手にしてゐた畫家の靜な世界を非常に面白く思つたことがあつた。

一　犠牲者の話

奸徒と云ひ志士と云ふも、いづれは同じ時代の犠牲者であつた。さうした犠牲が堆積して明治維新の改革が成り、新日本は生れたのである。私は俳人服部耕石翁の家に傳つてゐる「犠牲者の話」を知つてゐる。それは下總の千潟の話である。

當時千潟には上州安中の板倉伊豫守の陣屋があつた。その千潟の割元名主の服部治一郎の許へ、ある日、江戸から飛脚に托して送つて來た一封の手簡が屆いた。

治一郎はちようど自分の室で、机に向つて古い厚い帳面を調べながら算盤をはじいてゐたところであつたが、下婢からその手簡を受け取ると、ちよと差し出し人の名に眼をやつた。それはべつに好奇心を動かすやうなものでもなかつた。彼は寧ろ面倒くささうにしてそれを開けた。

それは半紙へがさつな文字で走り書きに書いたものであつた。治一郎はそれを讀みだしたが、讀んでゐるうちにその文字にひきつけられるやうな眼付になつた。そして、ほう、ほう、と何かに感じたやうな聲を出した。

治一郎は澄んだ柔な眼を頭の中へ向けたやうにして、ちよとぢつとしてゐたが、また思ひだしたやうに手簡のはじめから讀みだした。そして、讀んでしまふと手簡を算盤の上に乘つけて手を叩いた。

『何か御用でございますか、』

青ぶくれた女の顏が見えた。それは今手簡を持つて來た下婢であつた。

『あれを呼んでくれ、座敷にゐるのか、』

『旦様でございますか、』

『あゝ、珍しい話があるから來るやうに云つてくれ、』

『はい、』

下婢が行くと治一郎はまたその手簡に眼をやつたが、その顏には或る物に滿足したやうな表情が浮んでゐた。

『珍しい話つて、どんな珍しい話がございます、』

痩せぎすな治一郎の女房が入つて來て、その右斜に坐つた。

『たいへんな話だ、別家の弟だ　あの別家の……』

『別家の弟と云ひますと、あの勇さんですか　それがどうしました、』

『あれやお前、江戸で旗本になつたぞ、』

『旗本になつたつて勇さんが、』

『さうだよ、勇次が旗本の養子になつたつて、云つて來たんだよ、』

『勇さんが　旗本の、……豪い出世をしたものぢやありませんか、』

『出世ぢや、あれや劍術ができたから　そんなことで見込まれたかも判らない、』

『さゝでございますわ、ね、え、』

『あいつ、好く、江戸へ出て、侍になるなるつてたぢやない

か、云つたとほり侍になつた、あいつぢやいで、」

「妾うございますわ、ね、え、それを云つて來ましたが、」

「旗本の養子になるについて、醫者坊主の弟では都合がわるいから、俺の弟分と云ふことにして入つたから、どうか承知してくれと云ふ手筋ぢや、」

「なるほど、ね、え、百姓ぢや都合がわるうございますか、ね、え、でも、まあ親類のことでございますから、ね、え、」

「いいとも、あれが旗本になれや、親類の肩身も廣いわけぢや、あいつなかなか、そんなことは利巧ぢやから、」

二人の頭の中に別家の肩を怒らして歩いてゐる若い男の姿がはつきりと浮んで來た。下男の代りに藥籠を持つて行く姿も、春の田に黄ろな牛を追ひ入れて耕してゐる姿も、裏木戸の口で薪を割つてゐる姿も、篝火の傍で竹刀を揮つてゐる姿も、月の下で大きな石を抱きあげてゐる姿も、さうした姿がごたごたとなつて浮んだ。

「これから行つて、あれに知らしてやらう、」

「ああ、兄さんにでございますか、……喜びませう、」

「知らしてやらう、」

割元名主名主、總代として苗字帶刀を許されてゐる治一郎は、平生のやうに一本の脇差を腰にして別家の醫師の父へと出かけ

て行つた。

勇次の噂はその日の中に附近に擴はつた。村の若者たちが寄つたり何か、寄ると一席を囁いて、侍になりたいと云ふのがその村の農民の理想であつた。剣術が好きで武士になりたい、侍になりたいと云つてゐた勇次が、かなしやらに江戸へ飛びだして行くのを見ると　さすがに笑つてゐた土地の者も遂にその目的を達して旗本の養子になつたと聞いては、若い血を湧きたたさずにはゐられなかつた。

「勇次が侍になつた、」

「勇次は劍術ができたから、旗本に見込まれて養子になつた、」

劍術が土地の若い男の間に盛になつた。治一郎はそれを見て勇次の親類としての好い氣持ちを味はふと共に、勇次の將來の幸福を希ふたのであつた。

その勇次の幸福を希ふてゐる治一郎の耳に、まもなく好ましからぬ噂が聞えて來た。それは勇次が養家を放逐せられたと云ふ噂であつた。

「薪を持つて養父に手向ひした、」

それは江戸へ行つてゐた者のまたぎきの報告であつたが、それつきり勇次の消息は絶えてしまつた。

そのうちに幕末の騷擾となつた。佐幕討幕、開港攘夷のやかましい議論の一方には、諸國の浮浪があふれ歩くやうになつた。下總方面にもその血なまぐさい噂が傳はつて人々の心を怯えさした。

　京都から來た公卿が干潟附近を徘徊して、村の豪家や名主の家へ來ると云ふ噂が傳はつて來た。關八州總取締、俗に八州と云ふ警備員が頻く村から村を巡視するやうになつた。

　萬蔵の名主は、或る日の夕方、晩飯の膳に向つて晩酌をやつてゐたところで、玄關へ人が來て案内を乞ふので、仕方なしに紙燭を手にして出て行つた。

『京都から來たものだが、御主人から内密にお耳に入れたいことがあつて、推參いたした次第だが、』

　紙燭の光はみすぼらしい風采をした角顔の侍の姿をちらちらと見せた。名主はすぐこれは近頃噂のある公卿の一行であらうと思つた。彼は庭のほうへと眼をやつた。

　夕月の射した庭先には一挺の輿が据えてあつて、棒の前になつた輿昇がちやうど背のびをしてゐるところであつた。名主はいろいろの噂のある公卿に逢ふのが恐ろしいやうな氣がしたが、それかと云つて斷はることもできなかつた。

『では、どうぞ、お通り下さいますやうに、むさくるしい所でございますが、』

『では御主人に申しあげやう、ある御身分のある方だから、』

　侍は輿のはうへ歸つて行つたが、そのまゝその右の方へ行つて、垂れ越しに覗き込むやうにした。と、垂れがあがつて内から出た者があつた。名主はそれを見ると座敷のことに氣が注いた。

『おい、座敷へ灯を入れてくれ、』

　後には女房と下男が立つてゐた。二人は表座敷の方へと行つた。そこへ輿の中から出た者が近づいて來た。その後には彼の侍が隨いてゐた。

『ゆるせ、』

　それは黒か紫か判らない道服のやうな物を着た若い男であつた。

『むさくるしい所でございますが、どうかお通りくださいませ、』

　名主は後のはうに體を引いて二人のあがるのを待つてゐた。若い男は鷹揚に靴を脫いてあがつた。

『それでは、どうか此方へ、』

　名主は先に立つて紙燭を後に見えるやうに横に差し出しながら導いた。

長屋敷には燭臺の灯が點つてゐた。古い農家の床柱には人間大卿の顔がぼんやり浮んでゐた。若い男はその床柱と中段との間にある黒い柱の方を背にして座ると、随從の侍はその左手に座つた。名主は紙燭を消してその前に向き合つた。

『これは、ようこそお出で下さいました。私どもへ何用と申しますと、どんな御用でございませう、』

若い男は名主の詞をおし伏せるやうにして云つた。

『うむ、それは禁廷の御用ぢや、』

『は』

『わしは京都の公卿じや、名は憚るところがあつて、云ふことは出來ないが、禁廷のために、折り入つてその方に頼みたいことがあつて、まゐつたのじや、』

『は、』

『その方は、この頃の世の相を何と見る、これは一天萬乘の君が、これまで武門武家に奪はれてゐた天下の政を、おほみづからでなさるる前兆じや、ついては、禁廷に弓を引く者どもを征伐するために軍用金を作る必用がある、わしはそれを募りに來たものぢや、その方も分に應じて、軍用金の獻納をしてもらひたい、』

『は』

『わしが禁廷から來た者か、來たものではないかを知らすために、その方に見せる物がある、』

若い男はさう云つてから右の手を内懷へひつ込めたが、やがて衣の捲いたのを取り出して、それをそろそろと相手の方に向けて繰り擴げた。それは白い綸子のやうな物に金絲で菊の紋章を刺繍したものであつた。名主は噂に聞いてゐる錦の御旗と云ふものであらうと思つた。

『これだ、』

『は、』

『これなら疑ひはなからう、應分の獻納をしてもらはふか、』

若い男は旗をまたそろそろと捲いた。

『いたつて貧しいものでございますから、それに見らるるとほりの土地でございますから、手本に置く金がすくなうございまして、』

『それでは、今、手本にいかほど所持いたしてをる、』

『は、い、手本には、手本には、その、え、エ、二十兩位しかございません、』

『五十兩か百兩、獻納させよやうと思つてをつたが、無いとなればいたしかたがない、今回はその二十兩を獻納するがよからう、』

若い男はもう旗を入れてしまつた。

『は、』
『それではすぐ受け取らう、で、けつして、この事を他人に口外してはならん、もし口外して、わしに難儀がかゝるやうな事があるなら、氣の毒だが、そのまゝには差し措かん、』
『はい、それでは獻納金を持つてまゐります、』
名主は恭しくお辭儀をしてから、消してあつた紙燭に燭臺の灯を移して、納戸のはうへ金を取りに行つたが、その金を出すのが惜しいうへに、禁廷のための軍用金と云ふことが恐しくて仕方がない。しかし彼は公卿の威嚴に厭せられてゐるので、口實を設けて斷はらうと云ふやうなことを考へる餘裕がなかつた。彼は金箱にしまつてあつた數十兩の金の中から二十兩を數へて持ち、座敷の方へ引返して行つたが、行つてゐるうちに江戸に弓を引く軍用金に奉加したことが陣屋あたりから知れてはたいへんなことになるから、名主同士で相談して、脅迫せられて仕方なしに出したと云ふことを訴へ出やうと思ひだした。彼は若い男の前へ引返して、その手にした金を出した時に、若い男の顔にそつと眼を注けた。
それは面長な、眼の鋭い、かぎ鼻になつた鼻の大きな顔であつた。その顔は名主の頭の中に殘つてゐる或る顔であつた。名主はその顔に親しみを感じたが、しかし何人の顔と云ふことは思ひだせなかつた。若い男は名主の出した金を取つた。
『確に受け取つた、禁廷に奏上することにする、』
『は、』
『それでは、これで暇をする、けつして、この事を他へ漏らしてはならんぞ、』
『は、』
若い男が起つと傍にゐた隨從の侍も起つた。名主は復た紙燭を手にして先に立つたが、二人が玄關からおりて月の光の下に立つた時、ふと頭の中にある一人の若い男の名を記憶の中から呼びおこした。それは江戸に行つて旗本になつてゐた勇次の名であつた。勇次の顔と公卿の顔とは一つになつて見えた。
『勇次ぢやないか、』
名主はふとさう思つた。そして、彼は待てよ、と自分で自分の動きださうとする考へを押へるやうにした。
輿はその時舁きあげられて門の外へと出て行つた。
名主はその夜、復た勇次と公卿のことを一つにして考へて、もし公卿が勇次であつたなら、干潟の割元名主の許へ行くであらうか、と思つた。それはとても行けるはずのものでない。彼は公卿が干潟の割元名主の許へ行くか行かないかによつて、勇次であるか無いかが判ると思つた。

名主は附近の二三の名主と相談して、秘に公卿のことを干潟の陣屋に來てゐる八州の許へまで密告する一方で、公卿の行動を注意してゐた。

公卿は暫くしても干潟の割元名主の許へ行つたやうな形跡がなかつた。

そのうちに萬蔵の名主は、怪しい公卿が旅館に泊つて湯に入つてゐるところを八州に囲まれ、短刀で壁を斬り破つて逃げたと云ふことを聞いたが、それ以來公卿の消息は絶えてしまつた。

幕末もおしつまつて水戸藩の内訌が起り、藤田小四郎一派が筑波山に兵をあげたので、下總あたりも隣接地として非常に騒擾した。その時分のことであつた。割元名主の服部治一郎は、ある日、出入の農夫から不思議な話を聞かされた。それは初夏の風の靜かな午休みの時であつた。農夫ははしりの胡瓜を十個位蕗の葉に包んで持つて來たところであつた。

『旦那、みやうな話がございます。』

と、農夫は縁側に腰をかけながら云つた。

『なんじや、どんなことじや、』

『あの、こちらの別家の醫者どんの弟さんでございますね、あの勇次さんね、』

『あア、勇次、勇次がどうかしたと云ふのにや、』

『おかしなことがございますよ、私の村の藏馬の奴が、あの極道が、昨夜いつにない、まじめな顔をしてやつて來て、叔父さん、いろいろ厄介をかけたが、私もこれから江戸へ出て侍になることになつたから、安心してくれと云ふんですよ、いくら腕節が強いたつて、百姓の忰がさうさう手もなく侍になれるもんぢやございません、私は氣でも違つたかと思つて、聞いてみますと、人を募りに來てゐる者があつて、それに逢つて約束したと云ひますが、それがどうも勇次さんのやうでございますよ、』

『さうか、何所へ來てゐるだらう、』

治一郎は勇次なら逢ひたいと思つた。

『それが何所にをるか判らないさうでございますよ、忍んで來てゐらつしやるから、居所は隱してゐるさうでございますよ、』

『さうかなア、』

治一郎は萬蔵の名主から宮川金を探りに來た公卿の顔の勇次に似てゐたことを聞かされてゐた。彼は彼の公卿は確に勇次であつたと思ひ出した。彼は暗い影を曳いて何かやつてゐる親類の小供の身のうへが心配になつて來た。

『勇次さんは江戸で何をしてをりませう、』

『養子に行つてて、養子先を出たと云ふ噂は聞いてゐるが、さつぱり判らないよ、』

『さうでございますか、しかし豪い方じやございませんか、』

『何をしよるやら、兄弟や親類に迷惑をかけなければいいが、』

治一郎はそれから三四日して、隣村へ行つてやつ頃歸つて來たところで、玄關口に八州の一人が立つて、そこの左の柱にとり繩の一端を縛りつけた罪人のゐるのを見た。それは地べたに寢かしてあるものであつた。罪人を陣屋に伴れて行くまで其所に縛つて置くことは珍らしいことではなかつた。治一郎はどうした罪人だらうと想像しながら行つた。

それは血と土とに塗れた小袴を穿いた若い男で、兩手を背後にぐるぐると縛られて投り出されたやうに仰向けにさせられてゐた。見張の八州は見知りごしの顏であつた。

『留守をしてすみませんでした、どうした奴ですか、』

『これですか、これはこの頃お尋ね者の盜賊の片破れでさあ、裏の麥畑の中で捉へたんですよ、腕の強い奴でしたよ、今、皆が引きあげて行つたから、ぢき戸板を持つて取りに來るんでせう、皆にさんざやられたんだから、助かりつこはありませんや、』

『さうですか、』

若い男の白い額にも斫り傷があつて、それから出た血がべつとりと顏一面を染めてゐた。治一郎はふとその顏にひきつれた。

『ちよと頼みますよ、動きはしませんが、小便して來る間、』

『よろしうございます、』

八州は右の勝手の方へ行つた。治一郎はつかつかと若い男の傍へ行つてその顏を覗き込んだ。それはかぎ鼻の勇次であつた。治一郎は八州の背後姿に眼をやつた後に、耳の傍へ口をやつた。

『勇次、勇次、』

血の中にある罪人の二つの眼が動いた。

『勇次、判るか、治一郎じやが、』

『お、お、ぢ、さん、ほん、けの、お、ぢ、さ、ん』

『判つたか、どうした、その樣は、』

『かん、が、へ、が、あつたが、もう、だ、め、だめ、』

『いや、大丈夫だ、が、けつして、親や兄弟の名を云ふな、よいか、』

『い、は、な、い……』

さう云つてから勇次の詞はきれてしまつた。血の中の眼はもう合してゐた。

世界史及び日本史に現はれたる
スツルム・ウンド・ドラング時代

高須芳次郎

一　文藝上のスツルム運動

スツルム・ウンド・ドラング時代（Sturm und Drang period）について誰れも思ひ出す文學史上の著しい出來事が二つある。その一つは、西紀一八三〇年二月二十五日、パリイのフランセエズ劇場で、ユウゴオの『エルナニ』が上演された夜の恐しい光景である。今一つは、西紀一八八九年十月二十八日、ベルリンのレッシング座で、ハウプトマンの『日出前』が上演された際、文學上の敵身方が主義の上に於ける必死の爭ひのために一大修羅場を現出したことである。

『エルナニ』が上演される時、ユウゴオに身方したロマンチシズム派の人々は、各自赤色の小さな紙片に"Hierro"の一語――イスパニヤ語で「鐵」の意味――を記した招待狀を懷ろにして續々詰めかけた。その音頭取となつたのは、猛獅のやうに長く頭髮をのばして、燃ゆるやうな赤い胴衣を身に着けたゴオチエであつた。それに對して、クラシシズム派の人々はすさまじい勢で劇場の一方に割據してゐた。

程なく『エルナニ』の幕が開くと、最初登場した女主人公の臺詞が、クラシシズムの手法、慣例を無視したといふので、同派の人々は激昂して、盛んに怒罵の聲を放つた。それに對して、ゴオチエらは『エルナニ』の作者を擁護して、舞臺へ好意ある拍手を浴びせかけた。かうして新舊二派の爭ひが幕毎に開かれて、次第に殺氣立つた。その鬪爭のあとが、その後三年間、劇場の椅子に名殘を印してゐたといふ一事だけでも風のやうな爭ひの烈しさが思はれる。けれども『エルナニ』の美しさは、劇の進行につれて、クラシシズム派の人々にも宜い意味での感激を與へたので、もう怒罵の叫びを發するものがなくなつた。ロマンチシズム派は勝つた。それはフランス文學史上に於ける

ツルム運動として一般によく知られた事實である。

『日出前』が上演された時の光景も亦略ぼ以上に似てゐた。作者ハウプトマンに共鳴する自然主義派の人々とそれに反對した人々とが劇場内で對峙して、未だ幕が開かれぬ前から、殺伐な空氣を濃厚に漂はしてゐた。さて作者が舞臺へ出て挨拶すると、非自然主義派は、作者に向つて冷笑を浴びせかけ、嘲罵の言を放つた。自然主義派は作者を讃歎して、懸命に熱狂的な喝采をした。

『日出前』の劇が進行するにつれて、序幕よりは二幕目の方が一層見物の爭鬪の度を加へると云ふ風で、口笛を吹くもの、靴で床を踏み鳴らすもの、罵聲、笑聲を發するものなどが一つになつて、俳優の臺詞は殆んど聞えなかつた。時に非自然主義派に身方したカスタン（醫師）は折を見て、衣嚢から胎兒を引き出す産科の器械を取り出して、自然主義派の新人を横眼で睨みながら、旺んにそれを振り廻はした。同派の人々は「私らを侮辱したものだ。」と怒つて、カスタンを劇場の外へ突き出さうとした。ところが、カスタンの身方は一齊にそれを遮つて、一時大動搖を生じた。けれども『日出前』はこの爭鬪の嵐を凌いで、事なく演了された。これはドイツ文學史上のスツルム・ウンド・ドラングとして知られてゐる。

一體、スツルム・ウンド・ドランゲとは、何を意味するか、その名稱は何から起つたか。先づ名稱について云ふと、ドイツの劇作家クリンゲルが、西紀一七七六年に發表した音劇『飈興勃起』（スツルム・ウンド・ドランゲ）にもとづいて起つたのである。クリンゲルは、創始者（Original）と稱した若い詩人團體の一人で、思想、藝術、生活などの上に於て在來の習俗に反抗した。彼れはさうした精神によつて在來のフランス趣味に囚はれた生氣のない文學を打破るために『飈興勃起』の一篇を書いたのである。

クリンゲルらは「青年の性質は噴火山と月光とから成つてゐる。その力は噴火式に突發的だ、その情緒は月光のやうに美だ。私らは時に絶號し哀泣し、時に突發し溶漉する。それは天才の眞の吐息だ。私らは須らく慟情であるべきだ、天才は慟情でないと何も書けぬ、何も話せぬ。私らは、規則に囚はれないで、狂暴で自然の儘でありたい。」といふ意味を旺んに呼號した。彼等の言動は稍激に流れたけれども、そこには、ドイツの新國民文學を打建てようとする意氣、熱意が猛烈に渦卷いてゐた。この一事によつて、スツルム運動の意味が略ぼ察せられよう。けれども茲には、も少し遡つて、當時のドイツが思想、藝術などの上に於て、どんな狀態にゐたかを略述して、スツルム

運動の意義を明かにしたい。

十八世紀初頃に於けるドイツは、すべての上でフランス化してゐた。これはフレデリック王が、ルイ十四世治下の華麗なフランス文化に傾倒して、同國の風俗、文藝などを盛んに宮廷のうちへ取り入れたからである　フレデリックの寵遇を受けたヴオルテエルの手紙の一節に、「私はドイツの宮廷にありながら、フランスにゐるのと何の差別あるとを感じない。宮廷の人たちは、すべてフランス語を操る、ドイツ語が通用するのは、唯馬と兵卒とに向つて話す時だけである。」といふ皮肉な意味を述べてゐるのを見ても、ドイツ宮廷の徹底フランス化がわかる。

當時、ドイツの學徒は、フレデリックに媚びて概ね自國語を輕蔑した。彼等はフランス語、ラテン語などを用ゐて、その思想を表現した。文學界は概ねフランス流の擬古典劇に共鳴し、ヴオルテエルらが尊重した三一致の法則に拘泥して、フランスかぶれの造花的な文學が勢力を占めた。この時弊に對して、一部の若い文學者は目ざめた。彼等は文學を生氣なき宮廷學者の手から取返して、社會的、國民的基礎の上に置かうと志した。その先頭に起つたのは、叙事詩『救世主』を書いて詩壇革新の新聲を齎らしたクロップストックである

彼れは『聖書』を熟讀し、ミルトンの『失樂園』に共鳴して[illegible]を歌つた。また彼れは『[illegible]』に於て、[illegible]た自然の[illegible]を[illegible]表現した。そして彼れは[illegible]ドイツの、[illegible]を[illegible]して『ドイツ語の獨立、純粹、その比類なき優越』を論証した。彼れの新運動によつて、文學は次第に宮廷學者の手を離れた。彼れの感化によつて、センチメンタリテエト（情感主義）は文壇を風靡して、一方では、ゲッチンゲン詩社の人々を生み、一方では、レッシング、シラア、ゲエテ及び『創始者』一派らの出現を促がした。それらから考へると、ドイツのスツルム運動は、文學上、源をクロップストックに發したと云つて宜い。彼れは新時代の豫言者、先驅者の役を勤めたのである。

以上は、ドイツに於ける文學上のスツルム運動である。ところが、もつと限界を廣くして見ると、その運動はひとり文學上に限られないのみならず、その現象は人類進化の原則を基調として度々起つた。それは政治上、社會上、乃至思想、藝術の上に於ける生命力なき沈滯、行詰つた枯死状態を打破る大きな洪水であり、また颶風である。これを十八世紀史及び十九世紀史に徴すると、アメリカの獨立戰爭の如きも、一種のスツルム運動と云へよう。イギリスに於けるロマンチシズムの勃興、フランスに於ける大革命なども亦一つのスツルム運動である。これは[illegible]

命から新生命へ轉向するためのすさまじい風だ。十九世紀初期のドイツに於ても、フランス文化心醉から解放されようとする若き有識者の熱意が、茲にスツルム運動となつて現はれた。要するに、人類進化の歴史には、幾多の曲折があつて、動反動の法則に伴ふ停滯と躍進、固着と突進とが繰返される。スツルム運動はその躍進や突進である。文化革新乃至社會革命の前提として、時々勃興する暴風だ。政治が行詰つた時、文藝が頽廢した時、思想が枯死した時、社會が固定した時、國民の元氣が萎靡して居ない限り、それを打破るために必ずスツルム運動を生ずる。それには、勢ひ強い反抗氣分が伴ふ。不安や恐怖の心持をも伴ふ。烈しい動搖、混亂、破裂などをも伴ふ。殊にそれが社會上に發生した時は、一種の恐怖時代を現出する場合がある、フランス革命やロシヤ革命の場合がそれである。

二　古代ギリシヤ及び支那に於ける　スツルム運動

私は茲に文藝上のスツルム運動よりも、社會上のスツルム運動についての史的考察を述べやうと思ふ。この方面に於けるスツルム運動を歴史の上に徴すると、日本では、大化革新の事業平安末期から鎌倉時代へかけての宗教改革運動、室町及び安土桃山時代に於ける民衆運動、江戸文藝復興期の新現象明治維前後に於ける革命運動などの上にスツルム期の特色を見ることが出來る。支那では、春秋戰國時代や清朝沒落前後に於ける革命運動にスツルム・ウンド・ドラング・ペリオオデを見る事が出來る。歐米に於ては、ドイツの宗教改革を始め、イギリスに於けるクロンヱルの革命運動、アメリカの獨立戰爭、フランスの大革命、パリイに於けるコンミユンと二月革命、イタリの獨立戰爭、イギリスの産業革命及び、ロシヤの農奴解放や現下の赤化政治やヨオロツパの大戰前後などの上にもスツルム期の特徴を見る。以上は主として、近世から現代にかけての主要なスツルム運動を擧げたに過ぎない。その他の諸國にも、無論同樣の意味に於ける運動が起つたが、それらは茲に數へ入れない。

右のスツルム運動のうちには、政治を中心としたもの、產業を中心としたもの、思想を中心としたものなど、それぞれの特色があるが、結局、その影響は全體に波及する。云ひ換へると、一國の文化の樣相を一變する。場合によれば、大きく世界を動かすことがある。勿論それは宜い影響ばかり傳へるものとは云へない。わるい影響をも伴ふことがある。そしてそれらのスツルム運動が、概して一國の上に或は世界の上に光りと望みとをもたらすとしても、一時恐怖、不安の渦卷を社會上に見

せる場合が多い。それが政治、産業、生活などのスツルム運動となると、殊に暗黒的狀態を示して國の内外を攪擾することがある。

ヨオロッパ大戰前後の世界は、正にスツルム期に入つたものである。即今世界を見渡すと、どこに安心の光りがあるか、幸福の望みがあるか、怡悅、歡樂へ導く淨罪界があるか、生々開展の常住樂地があるか。ヨオロッパでは頻りに平和を求めながら、平和を得ないでもがいてゐる、アメリカは、マンモニズムに中毒して、獅子身中の蟲に苦められてゐる。支那は統一を欲して分裂に惱みつゝある。日本は進步、保守の思想的葛藤や社會的暗鬪によつて呻吟しつゝある。どこを見ても動搖の影がある、不安の色がある、恐怖の暴風がある。けれどもこの動搖、不安、恐怖はいつまでも無限に續くものとは思はれない。將來、世界の國々が、眞に合理的共存の基礎の上に起つて互ゐに絕對平和に近い生命を把握するならば、必ずそこに安心がくるであらう、怡悅が生れるであらう。幸福の花、歡樂の星に親むことが出來るであらう。この意味に於て、スツルム・ウンド・ドラング・ペリオオデ、私はらに絕望を與へないで希望を與へる。

さて私が茲に世界史及び日本史に現はれたスツルム期の一面を叙論するについて一言して置きたいのは、スツルム・ウンド・ドラングについての譯字である。それには、疾風怒濤時代とか、疾風勃起時代とか、颶風時代とか、突進躍進時代とかの譯字がある。私は字義に拘泥しないで、暗躍進時代若くは颶風時代といふ丈で宜いと思ふ。茲では一番呼び易いやうに、簡單にスツルム期或はスツルム運動といふ事にした。

世界史を繙いて、誰も最初に氣付くのは、ギリシヤ及び支那や印度などに於けるスツルム期であらう。ギリシヤでは、紀元前第五世紀の中頃から末葉にかけて、所謂「開明時代」の幕が開けて、アゼンスを中心としたギリシヤ文化は爛燗たる光彩を放つた、人口の增加、都市の膨脹、商工業の進步などは眞に目ざましいものがあつた。政治上に於ても、民本主義の基礎が漸く定つて、才幹ある人々は、政治家として公共事業に與るのを榮譽とした。それには、法政、經濟、兵事及び雄辯術などに關する知識を要した。この知識を供給する目的でソフイスト(詭辯派)が現はれた。

いつでも道義的見地に立脚するものは、ソフイストを好まないけれども、事實上、ソフイストはギリシヤにスツルム運動を起した主動力であつた。當時ギリシヤの哲學界は、物界研究時代から人事研究の時代に入らうとして、動搖不安の空氣に包まれて、盛んに懷疑の風潮を生じてゐた。この機運に乘つて、

面打開のため大膽な破壞的言說を試みたのは、ソフイストの一群である。その代表者は、プロタゴラス、ゴルキアスらであつた。プロタゴラスは「私等の知識は個々の時と人に懸れる關係的、對待的のもので、萬世不易の眞理を闡發すべき力はない。」といつて、一種の懷疑說を唱へた。その結果は皮相な便宜說を生じて「一切の風俗、制度、慣習は、時人の便宜のために存するのであるから、時宜によつて、すつかりそれを破壞して取替えても宜い。個々人も亦その願欲を基礎として便宜的にその行動を決すれば宜い。」といふ風に傾いた。彼等は、かうして神々の存在を疑つた。既成文化の價値をも疑つた。その末流になると、「社會に勢力あるものは、その所欲に從ふて、どんなことをしても差支えない。」と放言した。中には、功利的に神を解釋したり、有神說を否定したものもあつた。そこには、破壞的、革命的色彩が鮮明に浮び出てゐた。それは一見、餘りに矯激である、亂暴である、輕浮である、疎放である。またさうした言說が、人心を誘惑したり、政界を毒したりした。けれども他の一面から見ると、それらのスツルム運動があつた爲めに、知識、道德の新研究が緒に就いた。行詰つた思想界は、玆にその新しい希望と到着點とを見出した。結局、ソクラテスの道德哲學の建設を導き出した。が、一時アゼンスの人々は、思想上の大嵐に吹き惱まされたのである。そしてその惱みは、無意味になかつた。

支那の春秋戰國時代でも、矢張、ギリシヤ同樣スツルム運があつた。春秋二百五十年間は、孟子が「世は衰へ、道は微だ。邪說、暴行が度々現はれて、君を弑する臣がある、父を弑する子がある。」といふ意味の嘆聲を發したのが當時に於ける時代相の一面であつた。孔子の意を祖述する孟子が當時の樣子を判斷して、かうした嘆聲を發したのは當然である。それは日本の室町時代、安土桃山時代と同樣實力本位の世の中で、利權のためには、道義を無視して父は子と爭ひ、臣は君と爭つた。そこには春秋五覇——齊桓公、宋襄公、晉文公、秦穆公、楚莊公——が周室の衰微に乘じて起つた。それが戰國の世になると、形勢一變して、秦、楚、燕、韓、魏、趙、齊七雄分爭の時代となつた。それらの諸侯は、その勢を張るために四方の志士や學者などを招聘した。それに應じていろいの策士や思想家などが現はれた。それがために思想上、學問上の自由討究が行はれたり、國策樹立の方針が決定されたりした。同時に異說百出の有樣をも生じた。

孟子は、當時の思想界の四分五裂した有樣を見て、邪說が橫行すると憤つたが、それは孔子流の立脚點からの判斷で、必ずし

[illegible]分裂に伴ふ不安、動搖は確かにあつたけれども、この分裂を促がした諸說は道德上の反省や懷疑や苦悶、各家の方法を自由に思索し講究した爲めに生れたものである。そこには、ギリシャのソフィスト流の詭辯がないわけでなかつた。また老子のやうに「聖人にならず」と叫び、「仁を絕ち、義を棄てると民は孝慈に復する。聖を絕ち、知を去ると民利百倍する。」と云ふやうな一見破壞的な言說を吐くものもあつた。けれどもその言說の所由は惱して濟世の心から出てゐた。かうして支那の思想界では、老子及び諸子百家によるところのスツルム運動が起つた。

元來、周代では禮儀三百、威儀三千と稱したほどで、文化の進歩と共に、ひどく虛文、虛禮に陷つた。學者も亦形式主義の弊に囚はれて、唯典故を暗記するだけで、眞理についての自由討究が少しも行はれなかつた。それがため社會生活に於ても、思想上に於ても、停滯を生じて行詰つてしまつた。この行詰りを打破つたのが、春秋戰國時代に於ける學者、思想家らのスツルム運動であつた。そしてその先頭に起つたのは老子であつた。

老子の態度は何處までも反抗的であつた。彼れは利益本位の戰爭——孟子は「春秋に義戰なし。」と歎いた——を排した。世

[illegible]つた、不自然な人爲的技巧を[illegible]なかつた。[illegible]道廢れて仁義がある。智慧出でゝ大僞がある。六親和せないで孝慈がある。國家昏亂して忠信がある。」と逆說的なことをいつた。或は「善者は辯じない、辯者は善でない。」とか「學を絕つと憂ひがない。」とかいつた。彼れは、政治上でも、社會上でも、人間それ自身に於ても、人爲的な小刀細工をひどく嫌つたので、ルソオが「自然に歸れ。」と叫んだやうに、すべての人々に「嬰兒に歸れ。」と勸めた。我欲主義の時人に向つて、彼れは「虛無であれ、恬淡であれ、無爲であれ、無欲であれ。」と呼びかけた。彼れの說は莊子によつて一層擴張せられたのである。かうした言說は、當時にあつて、正に破天荒だといはねばならなかつた。

老子の他に博愛、非戰の說を唱へた墨翟や利己的快樂說を打建てた揚朱や性惡說を高調した荀卿や實利一點張の法家者流や兵家（孫武、吳起、）縱橫家（蘇秦、張儀）などが續出した。彼等はいづれも率直にその所信を述べた。その言辭は概して巧妙であつたので、その說を聞いたものは、どの方に適從して宜いかわからなかつた。多くの人々はその歸趨に迷つた。そこに動搖が起た、懷疑が生れた、虛無的、破壞的な考へが湧いた。それは

つまり正大な道德思想の確立へ急がうとして、當然起つたスツルム期の現象にほかならぬのであつた。この風潮に應じて、ギリシヤのソフイストに對するソクラテスのやうに孔子が現はれた。孔子は先王古聖の道を明かにして、正大な道德思想の根本を打建てた。孔子の意は孟子によつて一層擴張せられた。云ひ換へると、孔子はスツルム期に於て分裂し動搖し變化しつゝあつた道德思想を整理し統合して、正しい歸趣の道を與へたのである。スツルム運動がなくては孔子も現はれなかつたかも知れない。要するにこの新運動が偉大な孔子を生んだのである。それから茲には說かぬが、釋迦出現前の印度思想界にも、同じ趣が見られた。

三　ドイツを中心とした宗教上のスツルム運動

ギリシヤ以後のスツルム運動を擧げると、第一にルウタアの宗教改革を數へねばならぬ。近代ヨオロツパのスツルム運動はすべて源を宗教改革に發してゐるといつて差支えがない。宗教改革は、キリスト教の俗化を防ぐと共に窮屈な中世的思想に囚はれてゐた個人の內的生命を解放した。博愛、平等、禁慾などを主としたキリスト教は、曾つて罪惡のヨオロツパを救つた。けれどもそれがヨオロツパ化され、更にロオマ法王のために化せらるゝに及んで、キリストの眞意から遠ざかつたものとなつた。かうしてヨオロツパの中世紀時代は哲學さへも、キリスト教の前に俯伏して、個人の內的生命をひどく壓迫した。それが極端に流れると、勢ひ有識者の覺醒を促がすべき狀態を導き出すに至つた。

元來、ヨオロツパ文化は、ギリシヤ精神の影響を受けて發達したのである。ギリシヤ精神の特徵は、生々光明的であつた。それは現世的、樂天的、自然的で、殊に知識尊重の風が著しく、自由討究の心を愛したのである。ところが、キリスト教が、ヨオロツパを風靡するに及んで一時、ギリシヤ精神が閑却された。そしてキリスト教が中世紀の思想界を支配すると同時に、プラトオンの厭世哲學などを教理中に加へて、著しく出世間的傾向を帶びた。禁慾とか隱遁とかいふことが重んぜられた。また自由討究を排し、知識尊重の精神を斥けた。

それが久しきに亘ると、本來生々光明的で知性の伸張や精神の自由を愛したヨオロツパ人は、次第にキリスト教の壓迫を嫌ひ出した。それにロオマ法王及びその周圍の墮落は殊に彼等の目ざめを强く促した。その傾向を早く感知したのは、イギリスのジョン、ウイクリフ及びボヘミアのジョン・フツスらであ

る。ウイクリフに、オクスフオオド大學の神學教授であつた。彼れの烱眼は、逸早く教會の腐敗や僧侶の墮落を見逃さなかつた。彼れはこの腐敗墮落を排するためにロオマ法王を罵つて「驕慢な俗僧よ。」と云つた。かうして彼れは萬人に率先して、法王に反抗して、キリスト教會の廓正を計つたけれども、時機が未だ熟しなかつた爲めに却て異端者視せられて、オクスフオオドから追ひ出された。それは西紀一三七〇年頃のことである。

ウイクリフの次ぎには、フッスが宗教改革の熱意を抱いて起つた。彼れは、プラアグ大學の講師で、ウイクリフの失敗を知らぬわけではなかつたが、一身を投げ出して、ロオマ法王に反抗した。彼れは熱烈に教會の改革を唱へた、また僧侶の非行を痛擊した。それがため西紀一四一三年、法王から破門され、その翌年、コンスタンツの會議へ呼び出されて、焚殺の刑を强ひられた。フッスの弟子チスカは、それを憤つて、西紀一四一九年、兵を擧げて亂を起したが、結局、宗教改革の目的は達せられないで終つた。蓋し時運が到らなかつた爲めである。

ところが、その後ヨオロッパ人の精神的發達は、最早、ロオマ法王の俗的教權の前に拜跪することを許さなくなつて來た。また目さめた人々は形式化せられたキリスト教の拘束に甘んずることを不滿とするやうになつた。かうした形勢が漸く醸し出されつつあつたところへ、西紀一四五三年コンスタンチノオプル陷落のためにそこを逃れ出て、イタリイをはじめ、フランス、イギリス、ドイツなどに流寓したギリシヤ、ラテンの哲學者、文士らは、今まで閑却せられてゐた古典文學の趣味を人々に傳へた。これはやがて、ギリシヤ精神の復活を促がした。そこに反キリスト教的思想の點火があつた。それに自由都市の發達や新大陸（アメリカ）の發見や封建制度の崩壞や印刷術の進步やガリレオ、コペルニクスらの新天體論地動說などが智識の伸張の上に好影響を與へた。かうして有名なルネサンスの時代が來た。それは畢竟、久しくキリスト教に拘束されてゐたヨオロッパ人の擴大し伸張しようとする心そのもの丶反映にほかならなかつた。茲に至つて、鬱屈してゐた個人の內的生命は、はじめて自由に解放さる丶域に達しやうとした。

この個人の內的生命に於ける解放は、南歐イタリイでは藝術上の新運動となつて現はれたが北歐（ドイツ、イギリス、フランス）では宗教改革の形を取つて現はれた。そのいづれも、內在的意識の上に變りはないが、國民の氣質、傾向によつて、運動の傾向や主點を異にした迄である。そして、ドイツでは、宗教改革の偉人ルウタアを出した。

當時知識の進步につれて、反ロオマ法王熱は次第に昂じつ

ゝあつた。それは學者の言論、著述などの上に明かに反映せられてゐた。フランソア・ラブレイは『ガルガンテユア』に於て、教會の禁欲主義や僞善に向つて、はげしい鐵槌を下した。そして彼れは自然科學を土臺とした現實生活を高調した。トオマス・モアも亦『ユウトピア』に於て、その理想的社會を描いて時人を警醒した。それから、ミシエル・ド・モンテイヌも中世紀の不自然な禁欲主義、詰込主義などを排斥して、「神は自然のうちに光つてゐる。」と叫んだ。その他、エラスムス・ロイヒリンなどの人々も、頻りに僧侶の反省を促してやまなかつた。かうして宗教界に於けるスツルム運動が捲き起つた。

　ところが、ロオマ法王やその周圍の僧侶は俗權に執着し、浮世の榮華に溺れて容易に目ざめなかつた。その時分、ロオマ法王（レオ十世）は啻に俗事に關係したのみならず、聖ペテロ寺院の建築費が足らないので、免罪劵を販賣して金をあつめた。元來、免罪劵は著しく罪を改悛した教徒に授けて遷善の一方便としたのであるが、後には教會が賄賂を受けた際にも免罪劵を賄賂者に與へることにした。或は罪の大小に應じて相當の値段で免罪劵を販賣して、少しも恥ぢなかつた。レオ十世もそれらを當然の事だと考へてゐた。

　ところが、ルウタアは法王の使者が各地を遍歷して、免罪劵を人々に强ゐつゝある樣子を見て、ひどく憤つた。彼は一七年十月、有名な九十五條の非難文をウイテンベルヒの寺門に掲げて、免罪劵の販賣を痛撃した。ルウタアの言動に對して賛否の聲が大に起つた。名僧エツクは、ロオマ教會を辯護して、ルウタアの說を非難した。ルウタアは、それに對して公開討論を要求して、ライプチヒで、エツクと論戰した。この時、ルウタアは「免罪劵の非難ばかりでは埒があかぬ。教會全體に向つて攻撃を加へなければ、宗教改革の目的は成就しない。」と痛感した。それで彼れは攻撃の鋒先を鋭く法王に向けて「聖書の旨意は博愛、平等を尙ぶ。この旨意に背きつゝあるロオマ法王の存在は全く無用だ。」と主張した。かねて法王及び教會に反感を抱いてゐた人々は、茲にその代辯者を得てそれに呼應したものが少くなかつた。宗教改革の新聲は四方に傳はつた。

　法王は「ドイツの一貧僧に何が出來るものか。」と侮つてゐたが、ルウタアは自分を非議するものを見て憤怒した。法王は從來、ロオマ法王に反對したものは、たとひ帝王でも一片の破門狀によつて、自分の前に拜跪せしめることが出來る。ましてルウタア一輩の徒に至つては何でもない。」と傲語して、ルウタアを破門した。ところが、それは法王の皮相な見方に過ぎないことが直ぐわかつた。剛毅なルウタアは、進んで公衆の前へ出

て、おそらくは、破門状をずた〳〵に引き裂いてしまつた。彼れは「法王が何だ、破門状が何だ、どれも私らの前に權威がないではないか。」といふ旺んな意氣をはつきり示した。彼れはキリスト教信仰に於て[illegible]。けれども[illegible]の法王を否定しなかつた。

ルウタアの宗教改革運動に共鳴して彼れを援助したのは、サクソニア選擧侯フレデリック及びウイテンベルヒ大學のギリシヤ語教授メラヒトンらであつた。ルウタアはこの二人の協力を得て、心強くその運動の步を進めることが出來た。それから、間もなく、ルウタアは、ウオルムス會議へ呼び出された。この會議は、ドイツ帝カロロ五世が一五二一年、諸侯その他の有力者を招集して開いたのであるが、ロオマ法王は、ルウタアをそこへ召喚して、頭から抑へ付けて平生の持說を撤囘しめようと考へてゐた。ところがルウタアは、帝王、諸侯の前へ出ても、一大喬木のやうに屈撓しなかつた。彼れは徹頭徹尾、法王に反對した。そこでウオルムス會議では、ルウタア及びその派の人々を異端者と見做して、その著書の發行を禁止した。またルウタアに法律上の保護をも與へなくなつた。ルウタアは危險と直面した。

が、彼れは、さうした迫害にも驚かず、尙ほその意氣を沮喪しなかつた。彼れは、フレデリックの好意によつて、ワルトブルク城内に起臥しつゝ靜かに聖書制譯に全心を傾けた。それは

統一なドイツ[illegible]つた。また[illegible]には、ドイツ教會の[illegible]にも力を入れた。

ルウタアによつて、烈しく點火された宗教改革の焔は、益々旺んになつた。ルウタア派の新教徒は、頻りに極端な行動を敢つて、ロオマ法王を排撃したばかりでなかつた。一五二二年、その一團の人々は、カルルスタットらの煽動によつて、不意にサクソニアの首都ウイテンベルヒにある舊教派の寺院を襲うて、手當り次第に偶像を破壞したり、狼藉を働いた。その事がルウタアの耳に入ると、驚いて現場に驅け付けて、漸く彼等を取り鎭めた。畢竟、それは改革熱の餘波であつた。

四　全歐に於ける宗教戰爭の意義

結局、ルウタアが勝利を占める時が來た。第一次スパイル會議に於て、ドイツの諸侯は、宗教改革の旨意を是認した。彼等は（一）教會をロオマ法王の手から離れさせて諸侯の監督の下に置くべき事（二）教會の所領、財産を官沒してそれらの全部で學校及び貧民病院を設けるべき事（三）僧侶には相當の給料を與へて教務を處理せさる事などを決議した。この決議によつて、サクソニア侯ジョン（フレデリックの弟）などは、ルウタアの旨意を實現した。

ところが、ドイツ帝カロロ五世は、フランス王フランシス一世と戰つた後、和議を締める時、「わが國内の宗教改革は必ず抑壓して了ふつもりである。」と盟つた。そのため、カロロは一五二九年、第二次スパイル會議を開いて、ウオルムスでの宣言を復活させた。この事を聞いた宗教改革派の人々は、ひどく激昂して、「信仰は個々人の自由意志によるべきものだ。外部から抑壓的に發せられた政府の命令などのために輕々しく左右せらるべき理由がない。」と傲語した。そして極力、ウウオルムスの宣言に反對してやまなかつた。プロテスタント（反抗の意味）の名稱は、そこから生じた。

けれどもカロロは、尚ほ自己の所思を貫かうと考へて、一五三一年、アウグスブルグ會議を開き、舊教及び新教の有力者をそこに會合させた。その時、カロロは、多數の力によりて、不合理にも新教（改革派）を禁止しようと計つた。ところが、當時ルウタアに代つて出たメランヒトンは新教徒を代表して、勇敢にその主張を固持した。彼れはアウグスブルク宣言を掲げて、「私らの新運動は、すべて聖書の教へを守つたものである。舊教派が想像するやうな邪説を唱へるのではない、また異端的なものでもない。」と辯明した。けれどもカロロは、メランヒトンの言葉に耳を傾けなかつた。豫定の通り、新教禁止のことを決議した。この不合理は火のやうに新教徒を怒らせた。彼等はシウマルカルデンに集つて同盟を造り「今後、政府が不法な事を强ゐるならば、止むなく腕力を揮つて最後まで反抗しよう。私らは永久にその主義に殉じよう。」と誓約した。それらの事を知りながらカロロは尚ほ新教を迫害したので、ルウタアが歿した年（一五四六年）に到頭、新教徒は干戈を執つて、カロロの抑壓に抗した。それがため、シウマルカルデン戰爭が起つた。この事は、ルウタアの本意でなかつたと傳へられる。蓋しルウタアは、何處までも、その改革を平和手段によつて實現しようと期したのである。

けれども北歐民族の個人の内的生命を尊重する意氣が熾烈で、その信仰の自由を熱愛する心持が極めて深酷であつた以上は、カロロ五世が自ら内部生命に目さめてその心を飜さない限り、戰ひは避けられなかつた。新教派は、たとひ、その生命を失ふとも、信仰の自由を失ふまいとした。またどんなに悲慘な血を流すとも、内部生命をあく迄も保たうとした。それは心の自由、心の獨立のための戰ひであつた。靈魂の救濟、精神の解放のための眞剣な戰ひであつた。またそれは宗教界に於けるスツルム運動の一象徴であつた。

以上、述べて來たところを見るとヨオロツパの宗教改革運動

は、ルウタアによつて代表された時になつてゐるが、このスツルム期の渦卷は一大洪水のやうに全歐に漲つたのである。それらを見るとイギリスでは教會がロオマ法王の手から離れて獨立する事になつた。スイスでは、ルウタアの影響を受けないウルリツヒ・ツウイングリ（牧師）が別個に宗教改革を唱へて、一時稍成功したが、後挫折して世を去つた。またスエエデンでは、國王グスタフが政策上から、ルウタア主義を採用して、新教普及に力めた。デンマルクでも矢張同様の傾向があつた。殊にジユネエブルを中心として、ジヨン・カルビンが政教一致の新社會組織を實現した事は、新教の勢力を傳播する上に大功があつた。カルビンは『キリスト教組織論』の著者で、夙に新教主義を高唱してゐた。その書は、現世の虚榮、快樂を排して、神の眞意を闡明したもので、廣くヨオロツパに行はれた。殊にカルビンの影響は、イギリス、フランスなどに強い印銘を與へた。フランスに於けるカルビン派は、それに加盟するものが先づ盟を立てることになつてゐたので、ユグノオ派（誓約の意味）と稱せられた。イギリスのカルビン派は清教徒などを生んだ。

が、宗教改革の大波は、もつと多くの波紋を劃るところに殘した。新教、舊教の衝突はドイツのみならず、イスパニヤにもあつた。オランダにも起つた。イギリスにもあつた。[illegible]にもあつた。すべてこれらの國々には新しい宗教が起つた。イスパニヤは新教に反對したために國勢が衰へた。オランダの如きに、その隙に乘じて獨立した。イギリスは新舊教徒の爭ひで一時動搖したけれども、エリザベス女王の時代に入つて新教主義が勝つた。フランスでは、一旦、新舊兩教の調和を見たけれども、太后カタリナが政策上、新教徒を迫害したので、内亂を醸した。かうした宗教上の新舊主義の爭ひは、三十年戰爭に至つて漸く終結した。その大鬪爭は、ヨオロツパ列國會議の嚆矢と稱せられたウエストフアリア會議で、正式に新舊兩派の信仰をひとしく是認せらるゝに至つた。長い間全歐に亙つての動搖、爭鬪や種々の悲劇を經過した後、はじめて心の自由、心の獨立、内部生命の充實を得ることになつた。フランス大革命及びヨオロツパ大戰などを除くと、かうした偉大なスツルム運動を見ることが出來ない。

當時、三十年戰爭の本源地であつたドイツの如きは、日夜、内訌があり、爭鬪が續いて人々は殆ど生きた心持がなかつた。フランスも亦可なり手ひどい痛みを受けたので、各國とも擧げて、平和を欣求する念が強かつた。恐らく、思想上の戰亂を主としたもので、これほど廣く、これほど久しきに亙つたものは、

古今極めて類例が少いであらう。單なる小紛爭を演ずる文藝上のスツルム運動の如きは、この大思想戰にくらべると、少くとも、形態の上では、最も平和に近いといつて宜い。

五　イギリス政界のスツルム運動

三十年戰爭の後に程なく現はれたのは、イギリスに於けるクロンヱルの共和運動である。私が學生時代に西洋史を讀んで、クロンヱルの事蹟に接した時、クロンヱルが一種不可解の人物であるやうに思はれた。それにその共和運動が、突如として起つたやうに感ぜられて腑に落ちかねた。私は當時「クロンヱルも極端に思ひ切つたことをやる人物だ。彼れはチヤアルス王を餘り苦め過ぎた。カアライルは、頻りにクロンヱルを推讃してゐるが、私には、カアライルの氣が知れぬ。カアライルは兎も角、クロンヱルの氣が知れぬ。」と呟いたことがあつた。それは、畢竟、イギリス人そのものを理解してゐなかつた爲めである。クロンヱルを理解するには、先づイギリスの國民性を知る必要がある。

普通の西洋史では、クロンヱルの共和運動を唯反帝王神權說の所産だと記してゐる。それに相違ない。それは確か過ぎるほどの事實だ。クロンヱル自身も、勿論それに太鼓判を捺すことであらう。けれども少し深く突込んで考へると、それだけ濟ますことが出來ない。少くとも、その思想的背景を知ることが先決問題とならざるを得ない。

一體、イギリス人は、個人的意識をはつきり持つてゐて、萬事、合理的であることを尙んだ。殊にルネサンス以後のイギリス人にはこの傾向が強かつた。『ノヴ・アトランチス』を書いた、ベエコンは、自然科學の歸納的硏究法を唱へて、事實の蒐集に重きを置いた。それは合理的精神を尊重した結果にほかならぬ。また斷案の上では一見、極端な君主政を主張したやうに見ゆるホッブスもその胸底には、民本主義的傾向と純一な平等觀を把持してゐた。それらから考へると、ジエエムス王父子の帝王神權說は、到底イギリス人と相容れない性質のものであつた。

當時、帝王神權說の權化と目せられたルイ十四世は、フランスに於て、大に威力を揮つたが、チヤアルスが、ルイと同樣に振舞ふべきとは、イギリス國民の贊同しかねたところであつた。チヤアルスの父ジエエムスは、帝王神權說を信じて、『君主政の新義』と題する一書を著はしたことがあつた。それに於て「王者の統治權は、神から授けられたものだ。それは人民が王に捧げたものではない。だから、世襲君主制は、上帝の嘉みし給ふところで、その繼承法は神令によつて規定せられる。それで王

[illegible]は、何人もこれを犯すことが出来ない。國王の行爲を非難するものは、神を非難するのと同樣だ。」といふ意味を述べた。それはルイ十四世が「國家とは即ち朕だ。」と揚言したのと少しも異らぬのである。

　からした思想は、個人的意識に目ざめてゐて、合理的精神を重く見たイギリス人に受け入れられさうにもなかつた。けれどもジエエムスは、何でも彼でも、自己の信ずるところを國民に強ゐなければやまなかつた。それがために、ジエエムスは度々議會と衝突した。また外交上に於ても、國威を失墜した。そして一六二五年、王は寧ろ失意のうちに世を去つた。その後を繼承したのが、チヤアルス一世である。而もチヤアルスは、父王の失敗に懲りないで、矢張りイギリスに於て、時代錯誤に近いと見られてゐた帝王神權說を頑強に把持した。禍機は既にそこに伏在してゐた。

　が、歷史上に於ける重大事件の展開が、極些細なとから起る例はいくらもある。事實に即していふと、チヤアルス王の不幸は、その端を王の求婚事件に發してゐる。元來チヤアルスには、ヘンリイといふ兄があつたが十八歲で世を去つたので、位を繼いだのである。父王は、最初、ヘンリイのためにイスパニヤの一王女を妃として迎へようと思つたが、ヘンリイが夭死したので、更にチヤアルスのために[illegible]と思つた。ところがこの求婚はなか／＼まとまらなかつたので、王も、チヤアルスも焦慮した。その結果、寵臣バッキンガム侯（ギリヤアズ）の說を採用して、チヤアルスはイスパニヤに赴くこととなつた。バッキンガム侯も隨行した。

　ところが、チヤアルスは、途中、パリイに立寄つて、そこでフランスの王女アンリエットに懸想した。もうイスパニヤ王女のことはどうでも宜いと思つた。それから、チヤアルスが、イスパニヤに行くと、同國王は心からチヤアルスを歡待したが、ある日、チヤアルスが無作法にも、バッキンガム侯と塀の上に攀ぢのぼつて、そつと王女の樣子を眺めたことが知れたので、イスパニヤ王は、ひどく感情を害した。それにバッキンガム侯の擧動が放恣に流れたので、それらもイスパニヤ宮廷に好感を與へなかつた。當時偶まロオマ法王が舊教徒（イスパニヤ側）は新教徒（イギリス側）と結婚してはならぬといふ禁制を發布したのを幸ひ、イスパニヤでは、チヤアルスの求婚を拒んだ。それでチヤアルスは、フランスの王女アンリエットと結婚した。が、イスパニアの行動は、バッキンガム侯を憤らせた。彼れは、私的感情の動く儘に新王チヤアルスに勸めて、イスパニヤと戰端を開いた。ところが、連戰連敗の有樣で、總督バッキ

ンガム侯の信用は地に落ちた。かうして求婚一件が意外な處まで發展して了つた。

當時、議會は軍費支出のことについて、チヤアルス王と爭つた。議會は總督を變へなければ軍費を出すことを拒む旨を公示した。ところが、王はそれを聞き入れないで、幾度も議會と衝突した。王は次ぎにバツキンガム侯のために誤られて、またフランスにも宣戰した。この方も非常な敗北に終つた。議會は王の專恣を憤つた。その無法を怒つた。結局、一六二八年議員は權利請願(Petition of Right)を議決して、「議會で贊成しない課税は悉く不當で承服出來ぬ」と宣言した。が、王はイスパニヤ及びフランスと戰爭を續行する必要上假りに議會の意志を尊重する風を裝ふた。その翌年(一六二九年)王は課税のことで更に議會と衝突をすると、斷然それを解散して、爾後十一年間、議會を開かないで恣まに專制政治を行つた。この間、王を助けて、政治の局に當つたのは、ストラフオオド伯(ウエントウヲオス)及びカンタベリイ僧正ウイリアム・ロオドの二人であつた。バウキンガム侯はその以前、國賊視せられて、ジヨン・フエルトン(陸軍中將)のために刺殺された。

王の周圍に二人の補佐はあつたが　政治はうまくゆかなかつた。ロウドが勸めた教會統一策は、スコツトランドの清教徒の反抗をよび起して騷動の嵐を生じた。王はそれを鎭定するために軍役の必要に迫られて一六四〇年四月——議會解散後十一年目——議會を召集した。が、久しく不平を抑へてゐた議院は熱狂して最初から王の不法を攻撃してやまなかつたので、王は僅々二日で議會を解散した。けれどもスコツトランドの騷擾が向やまぬので、貴族會議を開いた結果、その翌年冬再び議會を召集した。それは長期議會と稱せられた。

この議會は先づ「議會それ自身に於て多數の贊成を得ない限りは斷じて解散しない。」といふ議決をした。そして國家の大權を主として議會の手に收めようと力めた。次ぎに平生最も憎んでゐたストラフオオド及びロオドの二人を手厳しく彈劾した。そして彼等を國事犯人として、ロンドン塔に押込めた上、ストラフオオドを死刑に處した。これらの出來事は、王と議會との間に大きな隔りを作つた。それにつれて、王に身方するものと議員に身方するものとが、イギリス國内で截然と二つに分れた。王黨は國教派、貴族、富豪、大地主などであつた。民黨は非國教派、市民、町人、農工商の人々であつた。前者はトオリイズ(王權黨)の祖、後者はホイツグス(民權黨)の祖となつた。

かういふ形勢になると、王と議會との衝突は當然急激の度を

加へざるを得なかつた。王は怒つて議会の指導者たちに、国教派と専制を通じて、民党の領袖ジョン・ピムを始めた五名の有力者を逮捕しようと計つたが、議会は五名の人々を保護して、どうしても王の手に渡さなかつた。王は益々怒つて、二百人の兵士を率ゐて突如、議会に臨んだ。そして議場から姿を消したピムらについて「飛去つた五羽の鳥が帰り次第、直ぐ取押へてそれを私の許へ送れ。」と命じた。王が議会を去つてからも、議員は王の心事を疑つて少しも安心しなかつた。民党は武装して萬一の場合に備へた。殺気は漸くロンドン全市を蔽ひ始めた。この有様を見て今度は王が驚いた。そして急いで郊外のハンプトン宮に移つた。それは豫め危難を避つた為めであつた。

革命戦争は一六四二年八月に至つて到頭勃発した。王党が勝つか、民党が勝つか、最初の間は、判断し難かつた。全国到るところの市町村は王軍と民軍とに分れて、各自武器を手にして蹶起した。灰色の戦雲はロンドンに漂つて、不安、恐怖の色が巷に満ちた。民軍の根拠地は、ロンドンであつた。その軍容、武器などは確かに王軍よりも立ち優つてゐたが、総帥には適材がなかつた。それに烏合の集——貧民、浮浪者——が多分を占めた。それらは傭兵として用ゐられたのである。それに対抗した王軍の兵士は、ヨオマン、オクスフオオドなどによつた士官には貴族種族が多いので、軍容も訓練によつて常備の必要を満した。それに武器にも不足した。けれども総帥には、名将ルパアト公などがゐて、士卒を亦多く訓練せられてゐた。それらのために、最初王軍が頻りに勝つた。民軍の旗色は次第にわるくなつた。

六　武断政治から名誉革命へ

ロンドンでは非常に不安を感じた。敗報が到る毎に動揺した。媾和、調停のために奔走したものさへあつた。殊に平和を希望した婦人は、ある日、五千人以上一群となつて議会に押寄せ「私らに平和を与へて下さい。平和！鳴呼平和！それは私らが切に求めてゐるのです。もし私らに平和を与へて下さらないなら、それは叛逆者です。」と叫んだ。議長は漸く一隊の兵士を以て彼の女らを追ひ拂つた。

この時、民軍に大きな力を加へた偉大な一人の田舎議員が現はれた。それは、オリバア・クロンウエルである。彼れは民軍の不振を慨嘆して、議会の一領袖ハムデンと計つて、断然、鉄騎隊を組織した。当時、クロンウエルは四十五歳の壮年で、清教徒の典型に近い資質を持つてゐた。王党の一人が、議会に於ける

クロンエルの樣子を描いたものを見ると「彼れは田舍裁縫師が仕立てた質素な服を着てゐた。その素地は汚れた麻布で、彼れの細帶には、一二點の血痕が印せられてゐた。またその帽子には帽紐が着いてなかつた。その劍はしつかり腰に着いてゐた。體格は可なり偉大で、その容貌はふくれて赤かつた。彼れが演說するのを聞くと、その聲は亂調子で鋭く、いかにも不快だが、頗る熱心らしい風が見えた。」と記してゐる。好意の眼で見たのではないが、それでも クロンエルの剛健、質朴な樣子だけは略ぼ想像することが出來る。

クロンエルが率ひた鐵騎隊は、新しい十字軍だといつて宜かつた。その隊員には矢張り田舍出の清教徒が多かつた。說教者、傳道師などを勤めた人たちが要部を占めてゐた。彼等は强い敬神の念を抱いて、飮酒、賭博などを罪惡として排斥した。その日常生活は嚴肅であつた。かうした素質のものが、鐵騎隊を作つたのであるから、向ふところ、敵がないのは當然であつた。クロンエルはこの精銳な軍隊によつて、民軍の頽勢を盛り返した。彼れは一六四四年、マアストン、ムウアで見事に王軍を破つた。その翌年六月、ネエスビイの一大決戰に際して、クロンエルは大勝を得た。名將ルパアト公も、クロンエルの前に出ると、まるで顏色を失つた。

爾後、王軍は不振に陷つた。王は進退に窮して、一六四[illegible]コツトランド軍の陣營に驅け入つて民軍に向つて降服を[illegible]だ。それには國王自身に多少の魂膽があつたのである。當時[illegible]會は清教徒派とプレスビテル派との二つに分れてゐた。清教派はその議員が五十名に滿たなかつたが活氣があつた。その首領はクロンエルであつた。プレスビデル派は議員數の上で議會の多數—三分二以上—を占めたが、クロンエルのやうな力强い首領がないので、その活氣を欠いでゐた。彼等は王を擁して、プレスビテル敎を以て、國教としやうとした。王はこの傾向を利用しようと思つて、降服したのであるが、スコツトランド軍は議會から四十萬ポンドの金を得て惜し氣もなく、王を議會に渡した。その四十萬ポンドは王の歿後「血の價」と呼ばれた。

爾後、王の運命は悲慘であつた。クロンエルの下に清教徒の人々で組織された獨立黨議員は、王と妥協することを好まなかつた。彼等は兵力を用ひて、多數派を威嚇して、臨時高等法院に王を死刑に處すべき宣告を下した。その理由は王に謀叛の罪があるといふにあつた。この事は王が全く豫期しない點であつた。王はニユウ・カツスル城內に於て、イギリス議會の手に引渡される旨の通知書を受取つた時でさへも、その運命を樂觀して恐しい死の運命が眼前に彼れを迎へようとしつゝあるのを知

うら手に至要、[illegible]してゐた[illegible]である。王を死刑に處する事については、オランダ及びスコットランドの干渉や抗議が、クロンエルの許に殺到したけれども、クロンエルは一顧だもしなかつた。そして王は一六四九年一月、斷頭臺上の人となつて悲痛のうちに世を去つた。間もなく、クロンエルは、イギリス共和政治を布告した。けれどもその共和政治は、名のみであつて、その實がなかつた。君主政の後にクロンエルの専制的武斷政治が生れたのである。

蓋しクロンエルは、最初形式だけでも共和的に進もうとする傾きを見せた。けれども大動亂の後には、専横的な一人の偉大な果斷家を要したので、クロンエルも勢ひ時勢の要求に適應しようとして、専制的武斷政治の實現者となつた。が、彼れの政治上に於ける特色はその清教徒的宗教信念を政策の上に現はさうとした事だ。それがために彼れは一六五三年全國の清教徒派中の代表者百二十名を選んで、小議會 Little parliament を組織した。かうしてクロンエルが平生夢想してゐた一種の宗教的議會が出來上つた。

が、この議會ほど、國事に迂遠な議會は前にも後にもなかつた。彼等は眼前に國家重大の問題を控へながら毎日、祈禱や聖書研究のために空しく日を費した。偶ま議案を提出すると、祈ま[illegible]の方法、[illegible]であつた。そして當時[illegible]議員は俄かに一變した[illegible]クロンエルはひどく幻滅を感じた。彼れは兵力を用ゐて小議會を解散した。

かうした結果の後、クロンエルの護國官時代が來た。彼れは自ら新憲法を作つて、その賦與の下に護國官（Lord protector）に選任せられた。それは日本の攝政關白といつたやうな位である。彼れはこの地位にゐて、表面上、國事評議會及び一院制の議會を組織して、國事を諮問すべき形式を示したけれども、内實、彼れは國王同様の實權を握つてゐた。彼れの執政は頗る峻嚴であつた。彼れは國民の奢侈、享樂を嚴禁した。浮華、虚榮は、彼れが最も憎惡したことであつた。そこに寛容なところがなく、また餘りに専斷的に流れたので、反對者が少くなかつた。王黨も亦クロンエルを呪つた。彼れの身邊には、暗殺者が時々現はれて危險であつた。が、彼れは精勵、嚴格に國務に執掌した。その外交は大體に於て成功した。殊に海外貿易の上で、オランダを凌ぐべき基礎を作つた。クロンエルの政敵、クラレンドン伯は『英國内亂史』で「國内に於けるクロンエルの勢力は彼れが海外に於て有する虚聲の影に過ぎない」

と極言した。

クロンヱルの過度の動勵は、彼れの上に熱病をもたらした。普通人ならば、單に彼れの如き身邊の不安だけでも堪へきれなかつたかも知れぬ。彼れは平生、暗殺の危險を避けるために、衣服の下に甲を着けて、短銃を隱し持つてゐた。そして成るべく獨居した。他人と話す時は、始終、相手の言動に鋭い注意の眼を向けた。彼れの外出時は誰れにも知らせないで、數人の從者を馬車中に同乘させ、全速力で疾驅した。往復の路さへも一定しないことにした。また彼れの邸内に夜番を配置して、寢室なども毎日處を變へた。神の力を信じ、鐵騎隊の首領として度々戰場で死を賭した彼れが、以上のやうな警戒をしたのを見ると、當時いかに危險が彼れの身に絶えず迫つてゐたかを想像することが出來る。かうして彼れは不安裡に一六五八年九月、世を去つた。彼れが病中、口にした言葉のうちには「私は最も憐むべき僕だ。けれども私は心から神を敬愛する。否、寧ろ神から愛せられた。」といふ語があつた。また侍者に聖書中のある一節を讀ませて、「予は予に力を與へるキリストによつて百事を爲し得る。」といふ意味の語を再三繰返へさせ、ちつと聞き入つた後、「パウロのキリストは、即ち私のキリストだ。」と獨語した。

クロンヱルの時代は、イギリスの政治上に於けるスツルム期であつた。この大きな嵐は一時、イギリス全體を震撼した。そしてチャアルス一世を死刑に處したやうな不祥事を生んだ。が、クロンヱルの歿後、王政復古があつて、次ぎに平和な名譽革命（Glorious Revolution without Blood）の時代が來た。國民はオレンジ公ウイリヤム三世の治下に、民權案（Bill of Right）を議決して、帝王神權說を一排した。イギリスの憲政史上に於ける黎明色は玆に見え出した。そして思想上にも、啓蒙期が來て、ロックの哲學の上に政治上の自由主義を反映した。

ロックの思想は、後のフランス革命に影響してゐる點に於て、重要視すべきものである。勿論、ロックは一面に於て、ホツブスの社會契約說に教へらるゝところがあつた。ホツブスの說によると、國家は多數人が自衛の必要上、人爲的に作つたもので、權利、義務の約束から成立つたのだと見た。ところが、ロックはそれから一歩を進めて、「社會及び個人間の權利、義務關係は、ホツブスのいふやうに各個人間の約束が結ばれた後に生じたのではない。固有的に約束の成る前から既存してゐる。私らは政府が出來るのに先立つて平等に財産權を有つてゐる。財産權の依つて來るところは各個人が土地や物件にその勞力を加味した事の上に存する。たとひ多數人の約束に成る政府の力

に[illegible]ない[illegible]個人[illegible]一八九[illegible]

有[illegible]である。この點から見ると權利義務は政府のものだ。社會、個人間の約束はその所有權を確めるために合意的に結ばれ、各自の幸福と平和とを維持する目的で政府が成立つた。」と考へた。

またロックは、ホッブスが君主の權力を過大視したことに反對して

「元來、政治上の主權は人民にある、人民が政治の主體である唯各個人が少しも自制することなしに、その權利を主張し合ふと、紛亂を免れないから、方便上、人民合意の契約によつて、國家統治の大權を君主に托したに過ぎない。若し君主がこの點を無視して、人民の幸福、安寧に力めないならば、さうした君主とは手を分つよりほかがない。君主は人民の幸福を計るために設けられたので、國法の力によつて、君主の尊嚴が維持せらる」。それで國法に背くやうな君主は、何の尊嚴をも認めることが出來ない。それは人民に取つて無用であるから主權は人民それ自身の手に歸るべきである。」と主張した。以上 ロックは個人の財産生命及び人の權利を固有的平等のものと解し、個人の自由、政治上の合理的民本主義を闡明した。この思想は、やがてフランスに波及して、天賦人權説となつた。イギリスに於け

[illegible]ない。

七　フランス革命前の頽廢的社會相

イギリス革命の風潮や、ホッブス、ロックなどの考へが、アメリカに流れ入ると、獨立戰爭となつて現はれた。更にそれがフランスに流れ入ると、大革命の渦卷を描いた。この二つは同一系から分流したものである。勿論、フランス革命の意義、内容の方が遙かに重大なところがある。私はアメリカの獨立戰爭については、茲に記すとを略する。唯『世界の革命』の著者ウンタアマン氏の獨立戰爭觀を簡單に紹介するとに留めよう。

私は『世界の革命』を赤松克麿氏の意譯『社會革命史論』によつて知つた。ウンタアマン氏は社會主義者で、唯物史觀に立脚し、主として第四階級に身方した點から、アメリカの獨立戰爭を解釋してゐる。それで在來の史家とは、すべての上で、まるで云ふとが異つてゐる。彼れば先づアメリカに移住したイギリスの清教徒を罵つて、他の宗派を壓迫したこと、印度人を苦めた事、偏狹で利己的であつたとを皮肉に攻撃してゐる。また彼等が種々の階級的差別に執着したり、勞働を奴隷に任せたりして、逸樂、奢侈の生活をしたことを指彈してゐる。

ウンタアマン氏は、以上の事を叙し、アメリカに於ける清教徒が、デモクラシイの精神を有たなかつたことを嘆じ、次ぎにそれらの人々によつて、企てられたアメリカ獨立の義戰は、彼等の不當な富——主として密貿易によつて得た——を擁護するために起したので二百萬の民衆は與り知らぬのだと解釋した。その中心人物であるところのワシントンは、檢査官時代に政府の土地三萬エエカアを掠め取り、且つその所有地が、クエベツク條例のために危くなると、フランクリンをロンドンに特派して巧みにその保持を計つた。その他ジエフアアソン、ハミルトンらの諸名士も亦不正な人々で、いづれも土地掠奪者であつた。といふのが、ウンタアマン氏の説である。この點は、どれも正確な史實に照らして見ないと容易く判斷が出來ない。が、在來の史家とは、まるで見方を異にしてゐる點に興味がある。

私は以上のことが、假りに事實だとしても、アメリカ獨立戰爭の背後には、ホツブスの社會契約説や、ロツクの天賦人權説などが、潜んでゐたと思ふ。また一面に於て、清教徒的な心の閃きが、確かに一部人士の上にあつたと思ふ。それらの精神思想が一方の主要素となつて働いて、イギリス政府の不法に反抗せしめたのだと見る。この解釋とウンタアマンの説とを對照して見て、獨立戰爭の意味を考へると、そこに新しい發見が出來よう。私は、パトリツク・ヘンリイが「私らに自由を與へでなければ死を與へよ」と叫んだ言葉や、ジエエムス・オオテス（檢事總長）が、英政府の逮捕令状に反抗して「人間の權利はこれを上帝から受けたのだ。他から侵害を受けるべきではない。」と傲語した意氣のうちに、ホツブスの影、ロツクの姿を見るやうに感ずる。

さて私は本題に入つて、フランス革命の眞相を一瞥しよう。フランス革命の源流がイギリスの合理思想にもとづくところがあるのは云ふを俟たぬが、革命の種子そのものは、フランスがその全盛を誇つたルイ十四世の時にそつと蒔かれてゐた。表面から見ると、ルイ十四世の時代は賢相リシユリウ、マザレン、コルベエルらの力によつて、國富を増し、國威を張り、文藝、學術なども非常に旺んであつた。評論家ボシユエエ、フエネロン、神學者で文人を兼ねたアルノオル、劇作家ラシイヌ、コルネイユ、モリエエル、畫家ルブラン、リゴオ、ミニヤアル、彫刻家ピユジエエなどが輩出した。その他金具類裝飾の名人にはブイイユ、青銅細工の妙手にはコアズヴオア、鏡の飾に長所を有つたキユツシイらがゐた。この時期をフランスでは「大時代」（Grand Siècle）と稱するのも無理でない。

けれどもルイ十四世以來三代に歴作したマレエシヤル・ド・リ

シウリウウがルイ十六世に向つて、「十四世の時代には、人々お饒舌を謹め、十五世の治世には、人々が私語し始め、陛下の治世に入ると、人々が高聲に談笑いたします。」といつたやうに、見方によつては「大時代」だといつてもそこに暗面がないとは云へぬ。當時の社交界を見ると、自ら放從家、享樂家と稱したサン・テヴルモン、ニノン・ド・ランクロオ夫人などがゐた。次ぎに社會生活を見ると、ブルジョアジイ（中產階級）及び農民は貴族や寺院のために壓倒されてゐた。それはルイ十四世が宗教家を優待した事、政治上で貴族の權利を取りあげた代りに社會上に於ける特權をその儘許した事などに基づいた。貴族は一般民衆と隔絶してその間に於ける貧富の差が甚しくなつた。

それにルイ十四世は儀禮を喜び、虛飾を愛し、豪華な生活を續けて金錢を湯水のやうに費した。晚年、オランダと戰ひ、イスパニヤと爭つて巨額の軍費を支出した。その治世の終期は財政困難に陷り、宰相コルベエルが償還した國債は二十四億萬ソランに上つた。そこに時代の暗い影がさしてゐた。殊に王は「私は即ち國家だ。」といつた人だけに、中央主權を實現して、君主專制政治を布き、國家の大事を獨裁したことなどは、心ある民衆の憤怨を招くべき一因となつた。それは、當時の一傾向となつた民本主義的な政治思想と相容れないからであつた。パリイ

市民は彼の死を聞いた時、曾て三つのことに…性の死を嘲いて笑つたやうにまた同じ笑を繰返した。淺薄に王を諷し、悲惜は王を嘲つた。フランスは既に救ひ難い破綻の上にあつた。

王の死後、時代の風潮は漸く險惡になつた。社會生活の階級は大節に濃くなつた。その心腹の病は封建制度の遺物ともいふべき不自然な階級的差別及びその慣習の上にあつた。第二の弊害は王を中心として上中流社會の人々が國家の深憂を忘れて享樂生活に耽つた點にあつた。第三の弊害は國家財政の紊亂にあつた。フランスでは、社會に三つの階級があつて、僧侶はその第一級を占めた、貴族は第二級を占めた、平民は第三級を占めた。が、この關係は封建制が壞はれて、郡縣制度の時代に入つても、僧侶、貴族の手に固く保持せられた。彼等は依然として廣大な土地を所有した。また高位、高官の地位を專有した。そして態々租税をも拂はなかつた。その數は全國民の百分一——三十萬人——に過ぎなかつたけれども、その所有地は百分四十程度に達した。當時、ストラスブルグ大司教ロアンは百萬リイブルの收入があつた。オルレヤン公は百十五萬リイブルの收得があつた。そして彼等の眞の役務は唯戰爭のある時に出征する位のものであつた

それらに對照すると、農民の生活は悲慘たるものであつた。

ひとしく、第三級にゐても、ブルジョア出身者は、學術や商工業の方面に築進の道を開くことが出來た。また企業によつて巨富を蓄したものがあつた。ルツオ、ヂデロオ、ヴオルテイルらは、いづれも第三級中のブルジョア出身者であつた。ところが、最下級にゐる農民になると、唯貧しく働いて僅かに生きてゐるといふだけであつた。イギリス人アアサア・ヤングのフランス旅行日記を見ると、その一節に「私が到るところの村落で逢つた人たちは、大抵身體が屈み、顏色が青くて、病前、病後のやうな有樣を示してゐた。」と記してゐる。それもその筈だ。彼等は一方に於て、地租、國税、教會税などを嚴重に課せられ、他方に於て、コルヴエ（Corvée）といつて、毎年無報酬で數日間の賦役を命ぜられた。その上、蛙の聲止め（Silence des grenouille）と稱して、貴族の妻が姙娠した際、蛙が鳴くと安眠を妨げるので、その領内の農民に向つて、終夜交代で畑を叩かせ、蛙が鳴かぬやうにさせたとさへあつた。要するに當時の農民は貴族の奴隷で、貧乏な上に負擔が至極重かつた。それは健全な社會狀態ではなかつた。

次ぎに王を中心として、僧侶、貴族が享樂的となつた傾向が殊に烈しかつた。それを著しく象徴したのは當時のサロン生活であつた。ヴオルテイルは、サロン美を說いて「こんな愉快な生活はない」といつたが、それは表面だけを見て、裏面にしないからだ。サロン生活は一種の倶樂部で、それはルイ十世時代の儀禮づくめの窮屈生活に困り切つた反動として起つた。最初、貴族の一團がルイ十四世の晩年にそれを試み、漸次流行して中流社會にも波及した。その背景には、當時の自由思想が潜んでゐて、交際の自由、社交の快樂を味はうとする傾向が著しかつた。

元來、サロンの意味は客間や座敷といふほどのことで、さうした場所で社交を樂むといふわけである。その主人役は家庭の主婦で甘言や美辭が主婦を中心として交換せられた。趣味の優美、言語の洗練、頓智頓才の素養などが、サロン生活をする人々の必要な道具であつた。そして主婦は必然、親切と愛嬌とを以て客に快感を與へるやうにつとめねばならなかつた。かうした風であるから、一度、サロン生活に觸れると、一種のエクスタシイを感ずるほどであつた。恍惚、吾を知れて快い夢幻境を彷徨するの感を人々に起させた。

けれどもそれは表面の事で、裏面には、いろいろ弊害があつた。それは（一）虚榮、虚飾を追ふ風を生じた事（二）サロン生活に熱心なため、夫婦間の交情が冷却した事（三）男女の交際が淫蕩に傾き、放縦に流れた事（四）夜遲く迄、騷ぐために

男子は病的遊蕩になり、婦人はヒステリックに傾いた事（五）貴族中、上級のものは上級、下級のものは下級のみ集つた爲め分裂的、孤立的になつた事（六）享樂的風習に馴れて下層民に對する同情を冷却した事などであつた。それらの結果、貴族はいつも華奢、風流に耽つて、法外な金を饗宴に費したり、數人の情婦を拵えたり、男子でありながら、紅白粉を顏に付けたりした。そして一方に不眞面目な空氣を釀し出し、また他方では織巧、輕快の趣味を作り出した。かうなると相當巨額の收入があつても足らぬので、貴族も割合に貧乏した。中には、一攫千金を夢みて頻りに投機事業に熱中したものもあつた。一大投機師ジョン・ロオなどが跋扈したのは、この風潮を巧みに利用したからであつた。

かうして貴族が、自己享樂に耽つて、まるで國家のことを念頭に置かない時に當つて、政府の財政は困難を極めた。而もルイ十五世はこれが整理について顧慮しなかつた。彼れは頻りに女色に耽つて、マリイ伯夫人、ポンパヅウル公夫人、チユ・パリイ夫人らを寵した。殊に彼れは多くの美少女を宮廷に集めてその艶色を愛した。また彼れは日夜、宴飲を續けて飽くことを知らなかつた。それだけで、もう莫大な費用を要した。ところが、彼れは頻りに外國の事件に干渉して、屢々失敗を重ね、む

年戰爭には手ひどい損害を受けたので、この方面から來た財政難もあつた。けれども彼れは「今にどうかなるであらう。」と妄信して、一層財政の紊亂を增した。

八　革命に先行した新思想と新學說

以上のやうに、フランスの國勢が險惡になつた時代に一群の新思想家が現はれた。その代表者は、ルソオ、ヴオルテエル、モンテスキユウ、チデロオなどである。が、この四人に先立つて、夙に時代の風潮を感知した二三の人たちがあつた。それは、ピエエル・ベエル、フランソア・フエネロン、セバスチヤン・ド・ヴオオバン、ソオントネルらである。この四人は餘り知られてゐぬので一言したい。

概言すると、フランスの啓蒙期に於ける新思想は、イギリスの哲學に暗示を得たのであるが、フランス人の熱情的、急進的、論理的、夢想的の特質によつて、それらがすべて極度に誇張された氣味があつた。イギリス流の沈着、健實なのにくらべると、突飛で、大膽で、度外れなところが見えた。一つは、當時の壓迫、宗教的僞善などに激昂した反動も手傳つてゐるためと思はれる。そのある種の思想が著しく唯物的であつたり、懷疑的であつたり、破壞的、異端的であつたりしたのも當然で

である。

ベエルは、新教、舊教の徒が妄に論爭するのを陋として、公平な立場から『歴史及び批評辭典』(Dictionnaire, Historique et Critique)を著はした。そこには、彼れの判定が少しも出てゐないが、全體をよく味ふと、合理主義の思想がこの辭典を貫いてゐる。つまり彼れの意に從ふと、すべての思想は妄に壓迫を加ふべきものではない。そこに幾分の眞理が必ず含まれてゐるといふのである。云ひ換へると「判定の準據を理性の上に置け。」といふ意味である。そこに反宗教的傾向を示してゐた。

次ぎにフエネロンは、その著『テレマツク物語』で彼れの經世思想を披瀝した。彼れは帝王神權説に反對して、王が貴族と共に政治を行ひ、重農主義を實施して、質素な生活を開始し、人民の負擔を力めて輕減すべきことを主張した。この點に於て、フエネロンの思想はルイ十四世の思想と一致しなかつた。ヴオオバンも略ぼフエネロンと同一の思想を有つてゐたが、倘ほ進んで積極的に財源を得べき必要に言及した。

フオントネルは、反キリスト教的な點で、ベエルと相通ずるところがあつた。彼れは『托宣の歴史』(Histoire des Oracles)於て、ギリシヤに於けるデルフオイの巫女の史的講究を述べたが、それは表面のことで、その實、信仰の動機を主觀の上に置くべきだといふ意見を發表したのである。信仰は外から強ゐられるものでなくて、内から發するものだとの見解である。結局、彼れはキリスト教を俗化したものが奇蹟、托宣などを妄用して、宗教的魔術で愚民を惑はす事の不當を難じた。彼れの本意は思想の合理化にあつた。

その他、ラ・メトリイ、オルバツク、エルゴシウスらの人々は、以上四人よりも、後に出たのであるが、いづれも、在來の宗教的弊害を嫌つて、それに反抗する態度を示した。その結果、極端な唯物主義、利己主義などを主張して、靈魂とか、來世とか、慈悲とか、博愛とかいふ飾り物――彼等の眼で見る場合――を極力排斥した。ラメトリイの如きは人間機械説を述べた。

以上は、いづれも思想上のスツルム運動で、フランス啓蒙期に見る一特徴であつた。當時フランス思想界に合理主義を宣傳したチデロオ一派の貢獻も亦見逃すことが出來ぬ。それはチデロオを中心としたエンサイクロペヂストらで、ダランベルも有名な一人である。彼等は『百科辭典』に於て、傳說と道理との兩立しない所以を述べ、主として無神論、唯物論を高調した。彼等の眼中には神がなくて、ひとり、道理があつた。靈魂がなくて、唯理性のみがあつた。

かうした時代に際して、人々の覺醒を促がした有力な先覺者は、ヴオルテエルとモンテスキユウであつた。この二人は共に、イギリスに遊學して、その文化や思想から得た新知識を土臺として、政界や宗教界の弊害に抗した。ヴオルテエルは思想家といふよりも文學者であつたから、彼れの思索の上には何等求めることが出來ないけれども、イギリスの政體讚美によつて、フランス政界の病弊を諷じたところにその特色があつた。今、彼れの說を見ると、「キリスト教國のうちで、イギリス人は、王權に反對した爲めに、その賢き政體を立てることを得た世界唯一の國民である。この政體の下で、君主は善を爲すその上に全力をつくし得るが、惡を爲すことには手を縛られてゐる。貴族は大であるが高慢でなく、すべて臣下といふ關係を持たぬ。人民はよく秩序を保つて、政治に參與してゐる。イギリス政府は質實で侵略を事としない その人民は自己の自由と共に他國人の自由をも擁護しようとするのである。勿論此處まで到達するには、大きな犧牲を拂つた。即ち專制の偶像を打倒するために、血を流した。」といふ意味を述べてゐる。結局彼れは「今のフランスはどうだ。まるでイギリスと直反對ではないか。」といふ意味をほのめかしてゐるのである。

更にモンテスキユウになると、ヴオルテエルよりも、もつと

[illegible]。而して、社會精神の[illegible]によると、一社會の法制は社會の精神の表現だ。社會精神の健かなところは社會も亦榮える。社會精神の健かならぬところは社會も亦衰耗する。つまり、健かな社會精神に依據しないと、正しい改造や革命を實現することが出來ぬ。私の望むところは、共和政體だ。その模範は都市的ロオマだ。それには、公共的精神即ち德義が必要だ。その德義とは何か。共和を愛し、律法を愛し、平等を愛し、祖國を愛することを意味する。」といふやうな見解を披瀝してゐる。その著『萬法精理』は以上の精神を秩序立つて明白にした大著である。倫ほモンテスキユウは、君主政の本質を說き、專制政治の害惡を難じ、司法、行政、立法の三權分立を創說した。以上の說は、フランス革命の上に大きい影響を與へた。

最後に私はルソオの思想を略述しなければならぬ。ルソオの思想的基調は「自然への復歸」といふことにあつた。彼れの社會契約說や天賦人權論は、既にホッブス、ロックらの說いたものである。ひとり「自然への復歸」は彼れの獨創になつた思想である。勿論、この事は夙に老莊哲學に道破せられてゐるから、嚴にいふと、それも獨創でないかも知れぬ。けれども、フランス啓蒙期において、力強く「自然へ歸れ！」と叫んだのは

ルソオのみである。この點に於て彼れは一種の創唱者だ。

　彼れの自然復歸主義は、早くその最初の論文『科學及び藝術論』に芽を吹いてゐる。それに於て現代文明は百害あつて一利がないから、私らは自然狀態へ還元することを以て畢竟の理想と認めると論じた。次ぎに彼れは小說『ヌウヴエエル・エロイイズ』でサロン式病的戀愛を拒斥して、自然的戀愛美を高調した。また彼れは『エミイル』を書いて、自由教育、非人爲的教育の必要を力說した。彼れが再三、自然復歸主義を宣傳したのは、啓蒙期に於ける唯理思想の煩瑣に失望して、主情的なのびのびした自然の世界へ出てゆかうとした意に原因した。人間機械說から人間生命說への推移を熱望したにもよつた。唯彼れの所謂「自然」とは何かといふことになると、漠然として捕捉に苦むが、煩瑣、虛飾、虛僞、不自然などを離れた文明的境地であらうと思はれる。以上の思想は單純で整はぬところがあるけれども、その天賦人權說、社會契約說と共に、フランス革命を誘發した一大動力となつた。

　かうして當時の思想界に於けるスツルム運動を概觀すると、革命は未だ事實の上に現はれてゐないけれども、思想上では、最早大革命が演出されてゐた。それにイギリス革命及びアメリカの獨立戰爭などが、眼の前に自由平等のために戰つて、成功した跡を明示しつゝあるのを見ると、熱し易いフランス國民——殊にパリイ市民の血は湧いた。加ふるに諸種の事情は、彼等を促がし立てゝ現狀と妥協するとを許さなかつた。結局、革命は必然の勢であつた。

　が、茲に注意すべき一事は、フランス大革命に於ては、ブルジョアジイの富及び發展が勢ひ貴族、僧侶の特權的地位を押しのけてそれに代らうとする意向に支配されてゐたことである。云ひ換へると、それは貴族、僧侶に對するブルジョアジイの挑戰だといふ意味が確かにあつた。ヴオルテエル、ルソオ、モンテスキユウ、チデロオ、ダランベエルらは、いづれも、ブルジョアジイの出身で、思想上から貴族、僧侶を打倒さうとしたのだとも見るとが出來る。要するに革命の素因は、いろいろあつたわけだが、この素因に加へて、ブルジョアジイの擡頭が大に革命の爆發を助け、またそれを促がしたのだと云へる。恐怖時代に勢力を揮つた革命三巨頭ロベスピエエル、ダントン、マラアらはいづれも、ブルジョアジイの出身だ。以上の事實によつて、大革命には、無產階級が加はつても、その主要素とならなかつたとがわかる。後の七月革命も亦同じ意味で行はれた。それらは畢意、實質上に於てブルジョアジイの革命であつた。

九　中産者革命から無産者革命へ

フランス革命の事蹟に今日誰れもよく知つてゐる。付て宗教改革運動が久しく全欧に波動を及ぼしたやうに、フランス革命も亦より以上に全欧を震動した。ウンタアマン氏は、フランス革命を罵倒して「抽象的な自由、平等、正義は紙の上でさへも、主張通り實現されるものでない。況んや或る者は他の者を支配し服従せしめんとし、また他の者は同じことを或る者に求めんとした。故に一般の集合が一個の政治機關となつたものゝ、それは混亂に陥つて目的を果すことが出來なかつた。」と云つた。また「フランスのブルジョアが失敗したことは、彼等の理性の永遠の君臨を打立んと宣言したことゝ同じく馬鹿々々しい話である。それでも彼等は無用な血の河を流し、一七九三年十一月十日の國民會議の布告によつて「理性」の神を祭り上げ、一七九四年の六月八日には「理性」を倒して舊い神を奉戴し、一七九四年七月二十四日には何が何んだか解からずにモー一度神を廢してしまつた。そして其の夥しい流血の惨を演じて居る。彼等の行動は深い森の中に獨り取り殘された子供のやうであつた。」と嘲つた。そしてウンタアマン氏は直下にフランス革命の一欠陥を剔抉して「彼等の理解しないことは、

於ては被治者と統治者とから成つて[illegible]に適合するやうな理想的憲法を作り得ないといふことである。封建的勢力が羽振りの良い時は専制主義は公然と王座を占めるが、ブルジョアが封建勢力に妥協して仮面を冠つた専制主義の基礎の上に「理性」を君臨させやうとすると、失敗して遂に労働階級の憤怒を逃れるために武断的獨裁官の保護を仰がねばならなくなる。」と痛刺してゐる。以上は赤松克麿氏の意譯によつたのであるが、大濶、ウンタアマン氏の意向が察せられる。氏一流の見方は、穏健、妥當といふよりも、唯物史觀的に鋭利である。偏してはゐるが、フランス革命の缺陥を露骨にさらけ出した點が見える。

今日冷靜にフランス革命のあとを見ると、これは恐しい一場の悪夢だ。唯物論と無神論との衣服を着けた「理性」の神の魔酒に酔はされてした狂舞だ。また一面から考へると、これはルイ十四世、十五世らの積悪の報いだ。抽象的な自由、平等、博愛の熱病に取り付かれた亂闘だ。まづこんなことが率直に云へるであらう。けれども當時のフランス人の心情に立ち入つて考へて見ると、悪夢にもせよ、狂舞にもせよ、亂闘にもせよ、一生懸命であつた。その結果が、どうあらうとも、彼等は行くべきところへ行き着かねば休止しなかつた。

彼等は、一七八九年以來決然と暗黑のうちに前途に於ける光明を期待しつゝ、猛烈な破壞作用を行つた。十萬餘の下層民が企てたバスチイユの破獄、外國軍の侵入に續いて起つた王黨の大捕縛、ジヤコバン黨の革命裁判所設置や反對派一萬人を三日のうちに虐殺した大悲劇、ルイ十六世の刑死など、いづれも恐怖時代の暗影を物凄く默示してゐる。暗殺から暗殺へ、亂鬪から亂鬪へ限りなく脅喝政治の幕が續いて、パリイは一時血の海の底に沈んだ。これほど大きい犧牲は、イギリスの革命にも見られなかつた。そしてその揚句、ジヤコバン黨の三頭首は非命に斃れて、政權は一七九九年ナポレオン一世の手に落ちた。つまり、フランス革命は、一面から見ると、ナポレオンを帝座へ据えるための序曲とも思はれた。

けれどもよく考へると、この大悲壯劇の背景を爲した思想は、ジヤコバン黨の三頭首が亡びるとも、亡びなかつた。ナポレオン一世の鐵手を以て、それを抑へるとも、抑へられなかつた。自由、平等、博愛の抽象的思想は、文字通りに實現せられなかつたけれども、それがフランス國民の多數の血と涙とを裏付けられて、デモクラシイの流れとなり、ドイツに入り、イタリイに入り、ポオランドに入り、その他諸國に入つて、全歐を動かした。ドイツの興隆も、イギリスの革政運動も、イタリイ王國の創建も、アメリカの奴隷廢止やロシヤの農奴解放もフランス革命の刺戟に負ふところが最も多かつた。

それらを一々、玆に記すとは出來ぬが、主として近時の問題となつてゐる無産階級が中心となつたパリイ二月革命及びコンミユンの亂について一言したい。この革命は、他の革命と意義を異にしてゐるからである。大革命や七月革命は、中等社會の人々が主力となつて、僧侶、貴族らと戰ひ、下層民はその身方となつて受動的に働いた。ところが二月革命及びコンミユンの亂は、下層民——勞働者らが主力を形造つて能動的に起した革命であつた。そこに明かに革命の内的意義にも、推移のあとがあつた。以上二つの革命は、イギリスに於けるチヤアチスト運動と共に現代社會民主々義運動の源を爲したものである。

が、遡つて無産階級運動の淵源を見ると、ドイツではルウタアの宗教改革運動の刺戟を受けて、夙に大きな百姓一揆が起つた。それは貴族の横暴、專恣を憤る貧しい農民の社會主義的思想とルウタアの新教主義的精神との抱合から生れたのである。それらの百姓一揆は絶えず頻發した。この空氣がセバスチヤン・ロッツエルをして「農民十二箇條」の要求を書かせた。それには伐材の自由、奴隷廢止、立法者の選擧、主稅以外の徵稅撤廢などが明かに記されてゐた。

それから當時の農民一揆の代表的なものは宗教家ミュンツェルを中心とした大集團であつた。ミュンツェルは再洗禮派——ルウタアが聖書に重きを置いたのに對して、天から直接に靈感を與へらるべきを信じ、洗禮は信徒の合意によつて行ふべき旨を主張した一派——に屬した一人で、この派は神託を重んじ、共産主義を唱へ、世界の滅亡、天國の來現などを說いた。ミュンツェルの同志、アイテルハウス・ランゲンマンテルは「汝自身のやうに隣人を愛せよ。一時的財産の共有に於て、この愛が實現せられる。」と叫んだ。かうして彼等の主張は深く農民を動かして、大きい勢力を得た。ドイツの大諸侯はそれを恐れて、八千の兵を以て、ミュンツェルを攻めた。この時、ミュンツェルは捕へられて焚殺され、その同志中に五千五百餘人の殉難者を生じた。再洗禮派の人々は尙ほ屈しないで、後にジャン・ボッケルソンが中心となつて、ミュンステル市に暴動を起した。これも亦失敗に歸した。が、社會主義的意義が以上の運動のうちに含まれてゐた點に於て、パリイ二月革命、コンミュンの亂などの先驅をした趣があつた。

さてフランスでは勞働者やプロレタリエエトが、一八三〇年の七月革命當時、自由主義に身方して、信仰及び出版の自由を確保するために生命を投げ出して働き、結果は勝利に終つたが、權ブルジョアの掌握するに當つて、彼等は全く當用とされることに憤んだ。爾後彼等の考へは漸く變つた。一八三一年に起つたリオン市の勞働者一揆は「勞働に生きよ、でなければ戰鬪に生きよ。」と叫んだ。續いて一八三九年には、勞働者に同情したルイ・ブランが『勞働組合論』を出し、一八四〇年には、プルウドンが『財産とは何ぞや』と題した一書を公にした。これをサン・シモンやシャルル・フウリエエらが出た時代の風潮にくらべると、社會主義思想は次第に革命的色彩を多く帶びて來た。ルイ・ブランの主張するところは「官立工場を設置して共産主義の一部を實行するとか、勞働者のために最も必要だ。」といふにあつた。

かうした形勢に對して、フランスの平民王ルイ・フイリップは、餘りに冷淡であつた。彼れがブルジョアジイと提携して、七月革命の後、王位に即いた當座は、自由主義者の色彩を巧みに裝うてゐた。それに多少、彼れも自由主義的思想の斷片を抱いてゐた。ところが、その地位が確定して、國民が王を歡迎する色あるを見ると急に豹變した。王は次第に保守主義の政策を執るやうになつた。そして當時焦眉の必要に迫つてゐた選擧權擴張問題を强壓的に握りつぶしたので、議會は富者の代議機關となつてしまつた。この事は、いたく民衆の感情を害した。

の人氣は次第にわるくなつた。殊に社會黨の一派は烈しく王を非難した。

折柄、一八四六、四七の兩年には全國凶作が續いて、貧民が非常に殖えた。社會黨は、それを見て、すべてを政府の手落ちや不誠意に歸した。そして進歩主義者で『帝政時代史』を書いたチエエルに身方して、ギゾオの保守黨内閣を手ひどく攻擊した。續いて彼等は一八四七年七月、シヤトオ・ルウジといふところに一大宴會を開いて、一七八九年及び一八三〇年の革命を記念し勞働者の保護、選擧法改正を議した。それはギゾオ内閣に對する一大示威運動であつた。

ところが、王はそれらの樣子を見て、不快を感じ、同年十二月、議會に臨んで、社會黨に反對すべき意志を表明した。内相チュ・シヤアテルも亦激昂した樣子で爾後、一切の改革運動を抑壓すべきことを公言した。のみならず、社會黨が一八四八年二月、大に勞働者の會合を開かうとしたのを禁止した。そこで勞働階級はひどく怒つた。殊に政府が國民兵を會場の道筋に配置したのを見て激昂した。爆發の時は到頭來た。勞働者の群は必死の勢で雪崩のやうに議會を襲ふた。そして暴力の下に政治の改革と首相ギゾオの免職を強請した。平民王は事態重大と見て恐怖し、直ぐにギゾオを免職して、選擧法改正の議を容れ、チエエルらに内閣を組織させた。

けれども勞働者の群は、倘それだけでは滿足しなかつた。亂民の一隊は、詩人ラマルチイヌに率ゐられて議會を占領した。この頃、王はもうイギリスへ逃走して、皇太孫パリイ伯に位を讓つたが、勞働者を身方とした社會黨は、パリイ伯の即位に反對した。そして共和黨の首領ラマルチイヌを中心に假政府を造つた。かうして二月二十七日、共和政が布かれた。ルイ・ブランはこの時、政府委員のうちに加はつた。

ところが、社會黨、共和黨の過激分子は、盛んに共産主義、社會主義を高唱して、倘ほ共和政府に向つて、猛烈な要求を持ち出した。それは今日のロシヤ過激派の主張に近い内容を持つたもので無産者本位の政治、財産共有制の確立などを要望したのである。けれどもラマルチイヌは巧みに彼等を說得して、漸進的態度を執ることにした。そして社會主義的傾向を政策の上に加味した。それで新たに勞働調査委員會が設けられて、各種工業勞働者の代表五百人を委員とした。會長には、ルイ・ブランを選んだ。調査の結果、工場法を制定して、パリイの勞働者は一日十時間、地方の勞働者は十一時間働くことに定めて、勞働紹介所、勞働者の住宅を設けた。それは一時勞働者を有頂天に狂喜させた。

特に注意すべきことは、國立生産組合の設立であつた。これは、ルイ・ブランの理想を實現したもので、全國の工場を買ひあげて、國立の一大工場を開き、そこで十二萬人の勞働者を收容した。これらのものはいづれも勞働に從事すると、しないとに關らず、毎日定つて二フランの給料が得られた。而もその中へ無頼漢などが混入したので、誰れも彼れもひどく怠け出して仕様がなかつた。政府も金を吐き出すばかりで到頭、その費用に困つた。殊にその管理者は、ブランの政敵エミイル・トオマスであつたから、倘更始末がわるくてすべてが、よく行かなかつた。

政府は百計盡きて結局、國立工場を解散することに決した。この事は勞働者をひどく怒らせた。彼等は、國民の名によつて、その不法を攻め、議會に解散を迫つた。また六月二十三日、四萬の勞働者が血眼になつて議會及び政府を襲撃した。政府は軍事總裁カベニヤアクに命じて、暴徒を迎撃させた。嵐のやうな爭鬪は二十六日まで、恐しい火花を散らしてパリイの街上で演ぜられた。そしてカベニヤアクの勝利に歸した。この時、暴徒中の死者一萬餘、捕虜一萬二千に上つた。大革命以來、パリイでは多くの血を流したが、この時のやうな大[illegible]未だ見られなかつたと傳へられる。この亂後、政府は、カベニヤアクが中心となつて、社會黨・共産黨の倶樂部に解散を命じ、また過激思想を鼓吹する新聞雜誌の發行を禁止し、言論を壓迫した。が、この革命の影響は全歐に及んだ。どの國も大抵、自由運動の大波を捲起した。革命の發源地イギリスも亦大動搖を生じた。

一八七一年三月パリイに於て起つたコンミユンの亂も略ぼ二月革命と似てゐた。當時ナポレオン三世が、ドイツと戰つて大敗した後を受けて、共和政府が成立した。ところが、勞働階級は、政府の施設を見て、一概にブルジョアジイに媚びたものだと思ひ込んだ。それで彼等は一氣に共和政府を打倒するために一揆を起して自治制(コンミユン)を宣言した。それは間もなく、マクマホンのために鎭壓されたが一時、パリイに恐怖時代の地獄相を再現した。一揆中捕へられて獄に投ぜられたものが二萬五千人に上つた。當時コンミユンの聲明したところは 一 共和政府を廢して個人の自由を擴張する事 二 廣く自派の聯合を形作る事 三 資本所有者に賠償を與へて、その所有權を拋たしめ資本及び土地を勞働團體のものに均分することなどであつた。

十　チヤアチスト運動と農奴解放

二月革命、コンミユンの亂などに對して、イギリスのチヤアチスト[illegible]注目すべき傾向を示してゐた。それは反資本主義的傾向の政治的具體化であつた。第四階級の自覺にもとづく・

猛烈な積極的行動であつた。チヤアチスト運動以前、イギリスに於ける第四階級は、いつも第三階級と仲よく手を携へて進んで來た。ところが、一八三二年、議會で選擧改革案が通過すると、第三階級が先づ選擧權を得た。ひとり、第四階級は劣敗者のやうに取り殘された。それから一八三四年、新救貧法が制定された時、それは第三階級の都合のために改正された。利己的立法のあとが明かにあつたので、第四階級の人々は激怒した。茲に彼等は自動的に目ざめて勞働者本位に社會改造を爲すべき前提として、普通選擧の實施を必要とし、人民憲章 People's Charter）を起草した。それは（一）成年男子の普通選擧權（二）不平等な選擧區（三）議會の毎年開會（四）議員の財産資格撤廢（五）無記名投票（六）議員の俸給支給などである。所謂チヤアチストの新名稱はそれにもとづいて起つた。

このチヤアチスト運動の背景を爲したのは、デモクラシイの思想及び產業革命である。產業革命は、機械の發明がもたらしたものだ。それによつて商工上の英雄と巨富とを生じたが、一方では人生のどん底に漂ふ數十萬の貧しい賃銀勞働者を生じた。それについて、正直なカアライルは貧者に身方して「イギリスは富に滿ちたけれども營養不良で死なうとしてゐる。」と憤慨した。チイスレリも亦「今のイギリスは互ゐに諒解するとが出來ぬ點に於て、熱帶、寒帶の二國民のやうに、富めるスと貧乏なイギリスとに截然分裂した」といつた。共に至ある。當時の賃銀勞働者は營養不良のイギリス、貧乏なイギリスを代表してゐた。彼等はその苦難、窮愁を脱するために、チヤアチスト運動を起したのである。

その運動は一八三七年、自由主義者プレエスの指導を受けてゐたロンドンの勞働者團體によつて先づ開始された。それへバアミンガムの有志――勞働者と中產階級の聯合團體――が加はり、更に南ウエルス、ランカシヤ、スコツトランド、ヨオクシヤらの勞働團體が加盟して、一大勢力を形造つた。その中心勢力となつた人物は、フイアガス・オコンナアである。オコンナアは新聞『北星』を主宰しつゝあつた政治家で、腕力主義者であつた。チヤアチストのうちには、腕力主義よりも言論主義によらうとしたウヰリアム・ラゴツトのやうな穩健派もゐたが、多數は腕力主義に傾いたので、勢ひオコンナアの天下となつた。そしてその中心地は、ロンドンからマンチエスタアに移つた。

その運動の第一段は、議會へ普通選擧の請願書を出すことにあつた。オコンナアらは熱狂的に演說、文章、集會などによつて、勞働者間の普選熱を烈しく煽り立てたので、一八三九年第一回の請願書を議會へ差出す時には百二十萬人の署名を得て、

頗る強い大勢力を示した。けれども議會ではこれを否決した。チヤアチストの連中は、非常に怒つて、大工業地の此處彼處に大小の暴動を起した。そして彼等は益々運動の上に熱度を加へて、一八四二年、第二回目の請願書を議會へ提出する時は、一躍、三百萬人の署名を得た。その書類の長さは、六哩に及び、三十人の勞働者が會旗を翳しつゝ、多數の委員が一大行列を造つて目さましい示威運動を行つた。ところが今度も、文豪マコオレエの反對演説のために再び否決された。彼等はまた怒つてイギリス全土にわたる示威と暴動とを起した。キングスレイの小説『オルトン・ロツク』には、その光景が描かれてゐる。

彼等は尙屈せずに、運動を續けたが、その内部に於て、ラヱツト派とオコンナア派との爭ひが度を增して、漸く分裂の微候を帶びた。その上、一八四八年、六百萬人の署名を得た請願書を議會へ提出すべき旨を呼號した時、政府は驚いて、一時、二十五萬人の臨時警官を各要所に配置し、ウエルリントンに大兵を授けて嚴に非常を戒めさせた。ところが、政府の豫期に反して僅かに二千人の署名をした請願書を出したに過ぎなかつた。かうして一時天下を風靡したチヤアチストが、ひどく衰へたのは内部に、思想的一致を缺いた上に適當の指導者がなく、組織上にもいろ〳〵の缺陷があつたによるが、一つは、經濟界の好況によつて、自然に勞働者の不平を緩和することが出來たからであつた。

けれどもチヤアチスト運動は、決して無意義ではなかつた。それは廣く第四階級の自覺を促がし、彼等の知見を增し、合せて勞働運動の上によき訓練を與へた。また政府及び資本家の反省を促がして、一八四七年の工場法改正、一八四六年の穀物法廢止を斷行せしめた。以上はイギリスに於ける勞働者のスツルム運動がもたらした功果である。が、一時非常に社會的不安の種を蒔いたものだ。

アメリカの奴隸廢止のことは、多く知られてゐるので、茲には、ロシヤの農奴解放のことを略説して、ヨオロツパに於けるスツルム運動の終結としよう。ロシヤは、夙に專制の國、革命の國である。そこには一八六一年二月の農奴解放令が出るまで、既に頻發した小革命運動があつた。その最初の革命的騷亂は、一六六九年のスチエンカ・ラアジンのモスクワ侵擊に現はれてゐる。その中心力となつたのは、ドン・コサツクで、元來農奴から分出したものであつた。

次ぎに一八二五年十二月、フランスの新思想に共鳴した近衞將校や少壯貴族、文學者らの一群が（一）政體改革（二）農奴廢止（三）自由教育振興（四）自治機關新設などの目的で、蹶

命運動を起して、ペテルブルグの元老院前で大砲を放つて騒いだが失敗した。當時それを「デカブリストの陰謀」と稱した。爾來、政府は厳しく言論、出版の自由を拘束した。けれども革命派は容易に屈しないで、一八三三年、そつと會合して陰謀を周らしたが、これも失敗した。當時ペツラシエフスキイやヘルツエンらが前後して流刑に處せられた。當時はロシヤ・ヘエゲリアンの時代で大學生間に新思想が勃興した。それから一八四九年には、有名なペトラセエフスキイ事件が起つた。それは革命黨や陰謀團でなくて、單に社會改造を目的とした青年團體で（一）農奴解放（二）裁判制度の改革（三）檢閲法改善などをその綱目とした。けれども刑事探偵らがそれを誇大視して、その首領ペトラセエフスキイやドストエエフスキイらを捕へて、シベリヤへ流した。

かうしてロシヤには、虚無黨出現以前に種々の革命運動や改革運動があつた。そしてそれらのいづれもが、農奴解放をその目的の一つに數へてゐた。そしてアメリカに於ける小説『アンクル・トムス・キヤビン』に匹敵して、それよりも一層藝術的に優れた『獵夫記』が、ツルゲエニエフの手で書かれて、呪ふべき農奴制の非を明かにした。ラデイシチエフも亦農奴の悲慘な有樣と地主の横暴とを描いた。概して當時の文士は、一齊に農奴制に反對した。それにつれて、農奴のうちにも自覺を喚ますものが次第に殖た。

折柄勃發した一八四八年のヨオロッパ革命は、ひどく農奴の神經を興奮させた。農奴の多くは終に決心して起ち上つた。彼等の一揆は一八五〇年から四方に蔓延して、物凄い光景を現はした。農奴を所有してゐた人々のうちには、農奴のために殺されたものが少くなかつた。政府は驚いて、軍隊を急派して、農奴を壓迫した。けれども識者の輿論は農奴に身方して、彼等の擁護に力めたので、一八六一年、アレキサンデル二世の時に、農奴解放令を發布するに至つた。當時、雜誌『鐘』を發行してゐたゲルツエンは、農奴解放のことを喜んで「ガレリヤ人よ、お前らは勝つた」といふ句で始つてゐる祝詩をアレキサンデルに捧呈した。そして農奴解放の結果は小地主や一部の貴族を零落させて「雜階級」なるものを生じた。

次ぎに解放された農奴は、生活上に於て却て以前よりも苦しい境遇に置かれた。彼等は權利の上で伸びて、物質の上で損をした。のみならず一部の貴族や地主は、矢張彼等を壓迫したので、一人前の農民となつた農奴らは、往々、土地を失つた。またいくらかの土地を持つてゐても、それだけでは、生活を支えることが出來ない窮境に陷つた。その上、苛酷な徴税は、彼等の

苦痛を増した。社會主義的思想は、この隙に附け入つて、この根を農民の上に下したのである　恐るべき虚無黨などがロシヤに發生したのも亦由來するところが遠く、且つ深いことを思はせる。

十一　國史上のスツルム運動とその特相

私はヨオロツパのスツルム運動の大略をつくしたが、尚ほ現代に根を引いてゐる諸般の社會運動についても、今少し詳しくその史的考察を述べて、即今の問題解決に資せねばならぬ順序である、けれどもそれでは餘り長くなるので、ヨオロツパ大戰前後の事と共に他日記述することにして、直ぐに國史上のスツルム運動を一瞥しよう。

日本に於ける最初のスツルム運動が起つたのは大化革新前後である。この時代に大きい波動を及ぼしたのは佛教の渡來及び支那文化の流入である。佛教が日本へ傳へられた時、その採否について、保守、進歩の兩派を生じたが、結局、厩戸皇子（聖徳太子）らの進歩派が勝つた。佛教弘通の端緒は茲に開かれた。當時日本人の精神生活は、單純、素朴で、現世的であつた。ところが佛教は、それに向つて、複雜な教理を教へ、來世、厭世、解脫などの觀念を吹き込んだ。これは思想上に於ける一大革命であつた。

當時のスツルム運動をさながら一身に體現したのは、聖徳太子である　その手に成つた憲法十七條には、政治上、特に重大な意義を有した。「國に二君なく、民に兩主なし。」といひ、「篤く三寶を敬へ。」と仰せられたことは、從來絶て國民の自覺しない點であつた。かうして君民一致と信仰生活の要諦を明示されたのは一般に好影響を附與した。それに太子が建てられた大阪の四天王寺は、療病、施藥、敬田、悲田の四院があつて、今日の所謂社會政策の具體化であつた。太子の力によつて、日本文化の黎明を見ることが出來た。

大化革新の事業は、明治維新に讓らない偉大なものであつた。それは、葛城皇子の識見と勇氣に負ふところが少くなかつた。葛城皇子は、中臣鎌足と提携して、專横な蘇我入鹿を誅し、政治上に一大革新を行つた。政府の組織が、たとひ形式的にもせよ、整頓して、中央集權の傾向を生じたのは、この時からであつたと云へる。それには、支那文化の指示によるところが多かつた。皇子は、孝徳天皇を補佐して、左右大臣内臣を置き、八省百官を設け、位階制度をも作つた。殊に一大英斷とも云ふべきは、皇子らの考へによつて、部曲の民や田莊を廢し、これ迄氏族の手にあつた私有の人民や土地を國家に收めようとされたことであつた。また皇子は、貧富の平均に力め、司法の

就いて、徴税上の公平を實現することに注意された。殊に救貧法には、特に心を傾けられた。

これらと共に支那文化輸入の功果は、いろいろの方面に現はれた。工藝上では、畫家、大工、陶工、織匠、裁縫工、革工などが來た。朝廷及び貴族の文書係、五經博士も來た、醫學、暦術の輸入もあつた。總じて當時の文化は支那の刺戟によつて、潑剌たる新彩を帶びた。それは急に魅力ある新しい世界が眼前にひらけてゆくやうな快感を人々に與へたにちがひなかつた。大まかにいふと、正に日本最初のルネサンスの趣があつた。

大化革新以後、第二のスツルム運動が起つたのは平安末期から鎌倉時代へかけてである。それは一面、宗教改革の上に現はれ、一面大名、武士の擡頭若くは新興の勢に現はれた。前者は、日本の思想界に深酷な印象を殘した。衰世、悲痛、絶望に沈んだ民衆は、日本化した新しい佛教に接して、はじめて救はれたものが多かつた。蓋し當時の佛教は貴族の佛教でなくて庶民の佛教であつた點に於て、山上の救ひではなくて、地上の鹽であつた點に於て、革命的であつた。日蓮の宗教の如きは、意氣に於て、新教を創唱したルウタアを凌いだ。徹底庶民的な法然、親鸞の宗教も亦明かに時代相を反映してゐた。

大名、武士の新興や擡頭も亦社會組織の上に於ける一革命であつた。在來は、貴族がどの方面にも威勢を振つたが、大名武士の出現と共に、政權は次第にこの新興階級へ移つた。頼朝の幕府建設から、源家三代、北條九代の歴史は、貴族文化以外の新文化、云ひ換へると、南人文化に對する北人文化を創造しはじめて、純日本的傾向をより多く發揮するに至つた。その生活樣式の如きも、餘程變つた。そこにスツルム期の特色が見えた。

次ぎに第三のスツルム期は、これを室町時代、安土桃山時代に見ることが出來る。在來、室町時代は史上の暗黒時代として、一般史家に閑却された傾きはあつたが、近頃その暗黒のうちに文化轉換期の特相を帶べるを見て、漸く熱心に史的考察を加へようとするものが出て來た。安土桃山時代は、文化轉換期から文化創造期に入つた序幕で、そこにも、欝勃たる新興の精神奔放な意氣の迸りを見るのである。私はこの兩期を合して、最大のスツルム期だといふことに躊躇しない。

室町時代のスツルム相を最も適確に反映するものは有名な土一揆の歴史である。土一揆が象徴する特相は、社會的差別や階級制の崩壞である、舊生命の殘物たる社會的機制の滅亡である、門閥除外の實力本位式時潮である。簡短にいへば、それは社會組織の一大革新である。そこには、一切の假面を取つてし

まりたま湿々たる人間の姿が、投げ出されたやうに浮んでゐる。
また階級闘爭の氣分が色濃く出てゐる。

土一揆とは、土民の一揆といふことを約めていつたのである。それは庶民が徳政——抵當物の取戻、貸借契約の破棄——を自發的に强ひた運動である。元來、徳政の稱は鎌倉時代に始つたので、當時幕府がその家人の生活難、財政難を救ふために、彼等が有する一切の債務を武斷的に破棄したことを指すのである。ところが室町時代には、武士に代つて、貧乏に悩む庶民が、生活難排除のために、貸借關係を破棄しようとするに至つたのだ。そしてその望みを達する手段として徒黨を組んだ。この運動を徳政一揆と稱するのはそれがためである。

土一揆が起つたのは、一面、時代相の特徴たる下剋上の思想にあるが、一面に於ては、富者階級に對する反感、重い租税の負擔、凶作、饑饉、貧乏などの苦痛にもとづくのである。無論、亂世のために中央政府の紀綱がゆるんで、警察力が行屆かなかつたとにもよらう。

當時、土倉(質屋)酒屋、寺院などは、いづれも富んでゐた。殊に土倉、酒屋は金融機械の用をしてゐるために利益が多かつた。それに横暴な遣り口をいつも繰返した。寺院は中世ヨオロツパの敎會のやうに利慾に執着して地主と金主とを兼ねてゐた。そして[illegible]有様で、庶民は勿論、公卿、武士なども、土倉、酒屋には苦しめられた。それと共に、そのいづれもが、土倉、酒屋を呪つた。そこに庶民を激昂させ、暴發させるべき素因があつた。彼等が酒屋、土倉を襲撃したのは、この大きい反感にもよつた。

土一揆の背後には、往々武士浪人がゐた。そして窃かに暴動を指揮した。それは前に述べたやうに、土倉、酒屋の搾取振を憎む上では、武人浪人にも亦庶民と共通的な感じがあつたためだ。時には公卿や武家が、そつと庶民に内應したり、聲援を與へたりした。時には、僧侶中にも、土一揆に同感したものがあつた。それらから察すると、この一揆には、貧乏といふ上に於て、武家、公卿、浪人、庶民を貫く熾烈な搾取階級への憎惡感が燃え立つてゐたのである。

次ぎに稀有の例ではあるが、武士大名の政治を廢して、庶民本位の政治を創始してゆかうとして、一揆を起した團體もあつた。播磨及び山城に於ける一揆はその實例である。それらは、階級鬪爭感の結晶したものと見られる。或は見方によつて、階級差別の崩壞を具體的に暗示したものとも解せられる。また下剋上の徵象とも思はれる。

それらの土一揆は、正長元年から永祿五年まで百數十年間、

殆ど年々繰返された。いかに當時の世態が不安、恐怖の空氣に包まれてゐたかを推想することが出來よう。今一々、それらを記すわけにゆかぬから、その代表的なもの二三を年代順に擧げて見よう。最初の土一揆は、正長元年に起つた『大乘院日記』に「わが國開闢以來始めての土民蜂起だ。それは亡國の基である。」といふ意味を記してゐる。その時は、奈良及び京都に一揆が起つて、德政の美名の下に抵當物品を奪取し、貸借契約を破り棄てた。この一揆熱は、颶風のやうに大和、山城、河内、近江地方にも及んだ。

嘉吉元年八月の一揆も正長のに讓らない大規模のものであつた。一揆の口實は、新將軍義勝がその治世始めに慣例によつて、德政を布くべき必要があるから、それを促がすのだ。といふのであつた。その發源地は近江である。一揆は十六箇所に陣營を配置し、その主力を東寺に置き、京都の諸方を閉鎖して、交通遮斷を行ひ、一齊に洛中に攻め入つた。その人數は數萬に上つた。彼等の代表者は、强硬に德政令の發布を幕府に迫つた。若し容れられないと、佛堂や社殿を悉く燒き拂ふべき旨を告げた。幕府は困つて一方に於て、彼等を慰撫し、一方では、京極持淸に命じて一揆を鎭壓させようとしたが、數萬の土民が諸所に火を放つて、潮のやうに喊聲をあげながら迫つてくるので、どうすることも出來なかつた。この時、土倉は大に恐怖して領細川持之に千貫の賄賂を贈つて鎭定を依賴したところが、侯は持之のいふことを聞かないで反對したので、持之も仕方なしに金を土倉に返した。結局、幕府は土民の前に屈して、彼等の要求通り、土民及び公家、武士に共通した德政令を發布した。この一揆の遣り口を見ると、態度の上にしつかりしたところがあつて、土民の背後には、武士、公卿らが潜んでゐたものと察せられる。

文明年間は一揆全盛の時代であつた。その代表的なもので新しい意義を發揮したのは、山城一揆である。それは國一揆と呼ばれた。この一揆が起つた原因は、他と趣を異にしてゐた。文明十七年、畠山義就の部下譽田某と畠山政長の部下齋藤彥次郎とが双方主人の關係から戰爭を始めた時、彼等は戰略のために、新關を設けて、京都への通路を塞いだ。また彼等は恣まに山城國内の寺社本所領を占領した。その影響は忽ち山城國民に不便を與へたので、彼等は自衞策として、兩畠山に向つて軍隊撤去新關廢止の要求を提出し、且つ寺社本所領の返還を促がした。この時、山城國民は特に、それらのことについて、十二月十一日、國民議會を開いた。そこへ集る議員は、十五六歲から六十歲までの人々を網羅した。その意見には侮り難いところがあ

つたので、両畠山は遂にその退去を容れた、國民はそれに滿足したが、尚ほ翌十八年二月十五日、宇治平等院に第二回國民議會を開いて、國中に於ける自治制を設定し、惣國月行事（自治委員長）の名で寺社領に向つて徴税命令を發した。かうして彼等が當時有力な兩畠山に對抗して、巧みに戰禍を避け、平和を維持し得たのは、近代的自由の精神と一致してゐた。その自治心の發揮も亦彼等の政治的自覺を表明した。

以上の土一揆だけでも、それが單なる暴動でなくて、暗黒時代に民衆が赤裸々に生きんとした意志が見える。殊に戰禍の多い世の中にゐて、山城一揆などが安寧維持、生活持續の自衛手段に出た心持やその猛烈な意氣を以て不安恐怖のうちに少しも屈しないで成るべく正しく進んでゆかうとした趣を見せてゐるのは民衆發達の新機運を表示したものだ。この一揆の軍隊的訓練を受けたものから足輕といふ一群の新闘士さへ生じた。それが應仁、文明の京都に於ける市街戰に積極的に立働いた。信長、秀吉などもその輕捷と敏活とを愛して足輕を好んで用ゐた。それがため、土民と武士との階級的差別が一部に於て消滅した。要するに土一揆は現代的にいふと、一種の無産階級運動であつた。そしてそこに將に來らんとする新文化　堺の如き自由都市の發達、海外貿易の一大發展など——を思はせるものがあつた。

なかつた。

その他、室町時代には、ポルトガル人によつてキリスト教（ゼエスイツト教）が傳へられて、宗教、博愛の思想を日本人の一部に吹き込んだ。國君や國家のほかに思ひを馳せなかつたものに世界主義を教へ、戰爭即人生と觀じてゐた人たちに人生即平和主義、無抵抗主義を説いたのは、確かにわが宗教史、道徳史の上に一革命をもたらしたものであつた。また鐵砲の輸入が、戰術の上に一大變化を與へたことをも見逃がすことが出來ぬ。それらも、次第に來るべき文化の黎明を豫想せしむるものがあつた。

私は安土桃山時代については、茲に言及することを見合せる。それは室町時代の延長であると同時にその結收だからである。室町期に蒔いて置いた新文化の種子が安土桃山期に花やかな結實を見せたのである。それが信長、秀吉などを中心に一大展開面を示した。その影響は江戸時代まで及んでゐる。江戸三百年間の平和は實に室町時代の大動搖期、大破壞期に胚胎した。江戸の民衆文化も亦室町期の新生文化に負ふところが最も多かつた。

さて第四のスツルム期は幕末及び維新前後——主として明治初年から二十年前後——に見ることが出來る。或は幕末を江戸時

代のスツルム期として、維新前後を明治のスツルム期と見ても宜い。さうなると、別に江戸の文藝復興期をもスツルム期の一に數へて宜い事になる。江戸文化の展開と發達とは、文藝復興期に負ふところが多かつた。この期の始めには由井正雪、別木庄左衛門らの謀叛、山鹿素行の武士道學、熊澤蕃山の自由思想の發表があり、竹内式部、山縣大貳らの勤王運動があつた。そこにスツルム相を示してゐた。それらを先驅として、平民階級の經濟上に於ける活動を始め　花街の繁華、平民文學の新興、旗本奴や町奴や十八大通の出現や古文學再興などを見た。それは文藝復興期に於けるスツルム相である。

幕末のスツルム相は、フランス革命が自由、平等、博愛の標語によつて進行したやうに尊王攘夷――適切にいふと尊皇攘夷――の新運動によつて表示せられた。それに對して佐幕開港を主張する一派や佐幕、尊皇の二主義を調和しようと試みた一派が加はつて、大動搖を生じた。井伊直弼の悲壯劇は、當時のスツルム期をさながらに彼れの一身に象徴してゐる觀がある。吉田松陰の死、佐久間象山の死、或は横井小楠の死、安藤對馬守の遭難などの上にも、進歩、保守の二派乃至革命黨（倒幕派）と非革命黨（佐幕派）との激烈な鬪爭を反映してゐる。結局、それらの鬪爭が絶頂に達して、伏見鳥羽の戰爭の上に大破裂相を示すに及んで、革命黨の勝利に歸した。武斷的幕府が倒て、明治の新政府が王政復古と共に實現した。

次ぎに明治初年から二十年前後に亘るスツルム期に於て見た特相は、新舊主義の衝突である。進歩と保守、武士階級出身者と町人階級出身者、門閥家と非門閥家、イギリス派とフランス派、文治派と武斷派、國粹派と歐米派藩閥と非藩閥といふやうにいつも二派の對立があつて、そこに激烈な鬪爭を醸し出した。結局それらは、進歩、保守、中立の三つに還元することが出來よう。明治初年から十年前後までは、政府に於て武斷派と文治派の爭ひが大破裂をして明治十年の西南戰爭を生んだ。續いて藩閥と非藩閥、急進派と保守、漸進派との爭ひが明治十四年の政變を生んだ。それから一轉して、歐米文化崇拜に對する國粹派の反抗運動、官僚の專制に對する民權派の主張、宣傳などが血腥い悲劇を幾度か演出して、國會開設に至つて一段落を告げた。この期に於ける大變革は國史上空前の現象であつた。以上極めて概括的だが、國史上のスツルム運動を仄かに想察することが出來よう。

十二　支那革命に見る近代ヨオロッパ思想

最後に私は最近の支那革命の思想的背景について、スツルム

明の特相を闡明したいと思ふ。元來、支那には、既に革命思想がかつて、『易經』や、程子の『易傳』などを始め、孟子の書にも革命のことが書いてある。易傳』によると「王者が興るのは命を天から受けたからで、世を易へることを革命といふのだ。』と解釋してゐる。世を易へるといふ意味は王朝の交迭である。この王朝の交迭といふことを主眼として見ると、支那の歴史は革命の連續である。ところが、ヨオロッパに於ける革命(Revolution)の意義は根本的に政治組織を覆し、若しくは政體變更を實現することを意味してゐる。この意味に重きを置いて支那史を見ると、支那には革命が殆んどない。王朝の交迭は目まぐるしいほどに起つたけれども、その政體はいつも君主専制であつた。唯中華民國を實現した最近の革命だけが、ヨオロッパと同じ意味に於ての革命を示したのである。それらから考へると、支那では思想上のスツルム運動にもとづくところの革命は最近の分を除くと、在來曾てなかつた。在來の革命は天の命を受けたといふ意味を形式的に後から附加するだけで、その所謂禪讓、放伐なるもの〻動機は物質的原因が主要な地位を占めてゐた。支那では民衆の生命財産を脅かすものは伐つ、民衆の生命財産を安固にする實力あるものは、自ら天の命によると稱して革命を起して王位に就くといふに過ぎなかつた。自由、平等、博愛の標語の下に現はれたフランス革命などの精神は、支那に於て見られなかつた。云ひ換へると、民の革命がなかつた。

ところが、最近の支那革命は、その運動を起すに當つて、在來のやうに物質的原因にのみよらないで思想上のスツルム・ウンド・ドラングによるところがある事を示した。それは漢人の子弟がヨオロッパや日本に留學して、在來支那では未知の世界ともいふべき立憲、共和の學説や近代文明思潮に觸れた爲めである。それらによつて彼等の考へ方や物の見方が變つた。彼等は政治的自由の意義を知つた。かうした新しい思想に立脚して、彼等が在來久しい間、支那の國教となつて來た儒學――孔子の教へを見ると、勢ひそこに新しい解釋を加へねばやまぬことになつた。それは曾て宋儒が佛教思想の影響を受けて、儒教を佛教化したのと趣や心持を同じうする。支那に新しい公羊學派が起つたり、孔子排斥の聲が一時傳はつたりしたのは、それがためである。そこに思想上のスツルム運動があつた。また反キリスト教運動が起つたのも同じ意味合である。政治革命、家庭革命、婦人解放などの叫びが高くなつたのも亦同じ氣流の分出である。

孔子は、支那國教の中心人物で、歴代尊崇の的であつた。殊に清朝の末年には、孔子の祀典を中祀から大祀に進めて、天地

宗廟と同等とした。ところが、時勢は一變した。孔子といふ偶像から離れて、新しい世界へ出てゆかねば、支那は救はれぬといふことを一部の新人が考へ出した。さうした考へは革命前から胚胎したのであるが、革命後、一層それが具體的なものになつた。支那の到るところにある孔子廟を破棄すべきことを唱へ出す偶像破壞主義者が續出した。彼等は孔子に向つて拜禮すべき必要がないと云つた。曾て廣東都督部教育部長某は、孔子拜禮反對の意思を表明した。四川省の一部では、孔子廟を破壞した。それらは反孔子思想の具體化であつた。

ところが、それに對して孔子擁護運動が起つた。その一派は保守主義の上に起ち、他の一派は進步主義の上に起つた。黃興などは保守派で偶像尊重主義者であつた。ところが政府部內の新人や康有爲、梁啓超などは、進步派であつた。進步主義者の見解によると、孔子の本意は民主共和の上にあるとする。政府の新人が孔道會に向つて意志表示を行つたのを見ると、「孔子の民主共和思想を正當に繼承したのは七十二弟子中で、曾參、顏回の二人があるのみだ。曾參の思想は更に子思に傳はつた。子思はそれを孟子に傳へた。孟子は即ち孔門直系の人で、彼れは明白に民主共和主義を說いた。彼れは眞によく孔子の本意を傳へた人物だ。」と解釋してゐる。孟子は「王者が天命を得て位に即けば、それは天命を奉じたものだ。また王者が民臣を虐場合は天命に背いたものだから、最早王たり天子たることは出ぬ。」といふ意味を力說してゐる。けれども孔子が民主共和を說いた徵證は何處にもない。そこに牽强附會の難はあるが、新しい時代の人々が、新しく孔子を解釋しようとした意圖がはつきり見える。

以上の點について、もつと組織的に新しく民主共和化した孔子を說かうとしたのは、康有爲、梁啓超氏らである。康有爲氏は新公羊學派として『春秋公羊傳』に於ける大義名分說を土臺にして新解釋を孔子教の上に試みた。氏は『春秋』に於ける三世――衰亂、昇平、太平　の說と『禮記』の禮運篇にある說――昔大道が行はれてゐた時代は天下を公として、賢を選び、能を選んでそれに君主權を讓つたといふ意味が出てゐる――とを併合して、そこに氏一流の新說を樹立した。

氏は虛君共和とか保皇とか、復辟とかいふことを唱へたが、その眞意は寧ろ共和主義、社會主義の方により多く傾いてゐた。ルソオの社會契約說などは氏に深い影響を與へた。また古代支那哲學のうちには、社會主義的思想が多分に含まれてゐるから、氏がヨオロッパの社會主義に共鳴したのは偶然でない。氏はこの共和主義、社會主義の思想に立脚して、春秋三世說と

禮記の禮運篇の說とを甚しく結び付けた。「昔、春秋時代は進化の順序を逆つて亂世から昇平の世に、昇平の世から太平大同の世になつた。大同の世は、正に理想的で天下を私せずに共和、民主的であり、社會主義の意を立派に體現した時だ。次ぎは禹湯文武周公の時代で、大同の世よりも稍わるい。世襲的君主制が成立つて、小康を保つに過ぎぬ。その次ぎは據亂の世で、國がわるくなる一方だ。現今は小康の世である。これを春秋三世の義にあてはめると『春秋』に於ける太平は『禮記』の大同の世に當る、昇平は小康、衰亂は據亂の世に當る」といふのである。かうして氏の見た孔子は、すつかり共和主義者、社會主義者の理想的人物化された。孔子が『春秋』を作つたのは大義名文のためであるが、康有爲氏は自家の主觀に映つた新孔子觀を以て、全く別種の解釋を打建てた。それは實に孔子觀の一大變化に留らぬ。スツルム期の支那に於ける思想的動搖と一大變革を示すものである。これを章太炎氏の支那國粹主義的思想にくらべると、一層興味が深い。要するに、支那革命によつて來るところは、かうした思想上のスツルム運動にあつたと思はねばならぬ。少くとも、さうした思想的背景があつたとを知らねばならぬ。

即今、世界を擧げて、大きなスツルム期にある時、私らが過去のスツルム運動を回顧すると、そこに流れや、反省や憂鬱や教訓などが與へられる。今の世界はいつまでも、恐怖、不安、動搖のうちに定着してはゐない。それがどうなるか、どう落着くか。赤化するか、綠化するか、それとも赤化もせず、綠化もしないで、別な色に染められるか。顧みて私らの祖先が戰國の暗黑時代に生の苦痛に屈しないで、血と汗とを以て、前途の荊棘を開き、或は自由都市を作り、或は自治制度の根に培ひ、或はヨオロツパの新文化を活用し、或は海外に雄飛して、新しい活氣あり、新しい光彩ある世界を作り出した事を思ふと、私らは現下の世界不安に行き惱んではならぬ。人類共榮、永久平和の炬火を高く掲げて、勇敢に前進しなければならぬ。

(附記)私は本稿に於て、國史上のスツルム運動を最も詳しく書く筈であつたが、歐米のスツルム運動の方で紙數の大半を費したので、止むを得ず日本のスツルム運動の一端だけを略記した。他日改めて『國史上のスツルム期』と題して詳述するつもりである。玆に謹んで讀者諸氏の諒恕を請ふ。尙ほ私が最近事象の一つとして支那革命の背景となつた思想上のスツルム運動を特に說いたのは、一般人がこの事を餘り知らぬからである。

現代文明の產んだ精神病患者

氏家信

十月十二日の夜と云へば秋らしい、清澄な季節で、散歩によい時である。凉風と云ふよりも稍や凉し過ぎるが、夜空に星月夜の美しく、あかるい夜であつた。二十歳になる一人の學生が淺草に行き、一夜を活動寫眞に樂しまうと、午後の八時近くに家を出かけて、田原町から淺草廣小路の通りを步いてをつた。其夜は何日になく雜沓してをつた。その人群れを避けて、電車の線路に近く步いてをつた。不夜城の如き觀樂の巷は其學生をウツトリさせた。電車は右往左往してをる。ウツトリして步るいてをつた學生は後から切りにベルを鳴らして、走り來る電車に氣が付かなかつた。アツと思つて避け樣とした時は既に遲かつた。危く避け損じた學生は電車の角で後頭部をしたたかに打たれて、昏倒した。それきり學生は人事不省に陷つた。

其後幾時間經過したか、學生は知らなかつた。眞夜中であつたらしい。次第に人心地が付いた時には附近の病院に擔ぎ込まれ、病室のベツトの上に白い薄團に包まれて、寢てをつたのである。何うして此の病室に寢てをるか考へて見ても、少しも解らない。不思議相にあたりを見廻した。相憎く傍に看護婦が居なかつた。呼鈴を鳴して呼うとしたが、それも大儀なので、獨り切りに考へて見た。朧げに思浮び出したのは昨夜八時頃淺草廣小路を步るいてをつた時に、後から電車が疾走して來たのに氣が付き、避けやうとした其瞬間に後頭部をイヤと云ふ程打つた。頭の中がガーンと鳴り、グラ〱と眩暈がしたと思ふと、其後のことは何うしたか少しも知らない。幾ら思出さうとしてもそれから先きのことは少しも思出せない。暫く考へてをるうちに眠るともなく、現ともなく夢を見てをつた。唯だ頭がガン〱痛んで困つた。次の朝眼が覺めてから後ち漸く自分が電車と衝突をしたことを思出した。頭痛が激しく、起き樣とすると眩暈がする。何うにも仕方がなく、終日ベツトに横になつてをつた。昨夜卒倒した時に打つ

たものでもあらうか、頭部の左側に次第に痛みを覺えて來た。

此の學生は約半月病院にをつた。醫師の治療をうけたので、だん／＼頭痛が薄くなつた。夜も晝もよく眠れた。時々は頭が茫然となつて、氣が遠くなる樣な氣がすることもあつた。頭痛は薄らいだが、時々に激しく痛んで來る。元氣がなく、氣分が沈み勝である。鬱憂病などと云ふのが、斯んなのであるまいかと自分で思ふ程であつた。記憶が惡るくなつた。今先きのことを直ぐ忘れる。思出さうとしても思出せない。それで物を考へると云ふことが嫌になつた。考がまとまらない。それでもヂレツタクなる樣な氣が爲ない。食物の味がない。食慾がそのために進まない。然し物のないのに物が見えたり、音のないのに音を聞く樣なことはなかつた。

これ等の病狀は漸次に快方に向つた。歩るいても眩暈を感じなくなつた。頭痛も時折り激しくするが、其痛みは大分遠のいた。それで十五六日で退院した。然し讀書し樣としても直ぐ倦きる。根氣がつゞかない。讀んでをつても頭に入らない。入らないと云ふよりも直ぐ今の先讀んだところを忘れる。そのために毎日ブラ／＼して遊んでをる。私の見たのは其より一二ケ月してからであつた。父の年も、母の年も忘れてをつた。以前はそんなことがなかつたと云つてをつた。神經衰弱の樣な狀態になつた。

此の一例は外傷性神經病と云ふ病氣である。此の病氣が一層重いと幻覺が起り、妄想などもある。そんなのは外傷性精神病と云ふのである。其の外傷を起したものは電車である。電車は文明の産物である。現代文明は地上に汽車を走らせ、電車を走らせ、自働車を飛ばしてをる。海には汽船、空には飛行器がある。維新前は二日も三日もかゝつて往復した鎌倉江の島も今日では日歸りに樂である。七日も十日もかゝり、川留でゆられ、輦臺で川を渡り、雲助に酒手をとられた東海道五十三次も汽車に乘れば一眠りのうちに行つて仕舞ふ。文明の利器たる汽車や電車には深く感謝しなければならんのである。それで我々が文明を讃美するが、一方には汽車電車の衝突、顚覆等があると、災厄性精神病や神經病が起る。

鋭い汽笛の響き、電車自働車のけたゝましい警笛の音、其地響の動搖等は都會人の神經を過敏にする。都會に住む人が一歩外出すると電車は不絶右往左往する。其間を自働車が疾驅する。自働車のベルは突然に背後より鳴す。ウツかり街を歩るいてをると跳ね飛ばされる。耳を作て、眼を見張つて通らねばならぬ。斯くして益々都會人が神經過敏になる。文明を謳歌した

都會人は是に至つて文明を呪ふ樣になる。

斯く考ふると常識的にも文明の進歩するに連れて精神病の增加し行くことが推察し得ることが容易である——文明と共に精神病の增加する理由は此他に猶ほ多々あるが、それは後に說明するところである。

於是誰しも現代文明が產む精神病と云ふものを考ふるのである。前述した、例症などは其恰も現代文明が禍をなした神經病の如き觀がある。我々の祖先の時代に知らなかつた樣な精神病が現代文明の惨禍として起り得るものと考ふることは決して不思議でない。我々は日常知人に會ふと『此の頃はあなたの方は繁昌でしような』といはれ、『これから益々精神病者が增加するでせうな』と質問を受ける。

然らば現代文明の產む精神病と云ふものがあるだらうか。あらば何んなものだらうか。

然し現代文明が生む精神病と云つたところが、特に現代文明が生む精神病と云ふものがない。古代文明の精神病、現代文明の精神病と云ふ樣なものはない。精神病と云ふものは人類の存在する限りある疾病であるので、神代の神々達にはいざ知らず、日本古代の住民から、人類の居つたところには必ず精神病があつたものであらうと思ふ。文化の進むに連れて精神病が多る。都會の居住者には田園の住民よりは精神病が多くあるとふことは各國の學者の唱道するところでもあり、我々專門家ならずとも、常識で考へても考へ得らるることである。それから推して行くと古代の住民の間には精神病が今日文化に浴してをる住民よりも數に於て遙るかに少なかつたとは云ひ得るとしても全く無かつたとは云ひ得ないのである。故に特に現代文明の生む精神病と云ふものはない。

遡我國に於て精神病の文字の最も古く見えたのは大寶の令である。大寶の令は天武天皇大寶二年に天下に頒たれたる新令で、今年より千二百二十三年前である。其令中に癲狂の文字がある。『惡疾癲狂二支廢兩目盲如此之類爲篤疾』とある。仁明天皇天長十年（今年より約千百年前）に清原夏野等が奉りたる令義解にも癲狂の文字があり、癲は今日で云ふ癲癇で、狂は精神病であることを說明してをる。

又眞僞が未だ明らかにされてゐないが、日本の醫學に關する古書とせられてをる大同類聚方や神遺方にも亦癲狂の文字がある。然し精神病を一項目として記載したものは圓融天皇永觀二年に丹波康頼の撰んだ醫心方である。今より約九百四十年前の

書志である。

然し此等の書籍に見えたる癲狂の文字は其以前既に支那の古書素問（周）や病源候論（隋）等に見えてをつたものである。故に精神病を病氣として見られてをつたのも甚だ古いことであると曰はれる。

希臘に於ても早く既にヒポクラテスが精神病を腦の疾病と認め、其精神病を躁ぐものと、鬱するものとに分ち、躁狂、鬱狂の名稱を附し、其治療をも述べてをるそうである。

之を以て見れば、精神病は人類のあるところには既にあつたものであることが疑ひないのである。獨逸には癲狂村と稱して一村悉く精神病院としてをる村がある。其村に部落をなすものは皆看護人と其家族であつて、其家に危險のない精神病者を家族の一人として、各家に數人を托して看護してをる。其村に病院があつて、之を看護治療してをる。主として慢性のものを取扱つてをるが、我國に於ても、獨逸の如く理想的なものではないが、京都岩倉村が其親があつたのである。其起緣甚だ古く、後三條天皇の第三の皇女、御齡十八歲にならせらるゝが、擧動常ならず、髮を振り亂し、衣を裂き、深く几帳にかくれて、物も言ひ給はなかつたので、天皇叡慮をなやませられ、神佛に祈願せられたところが、一夜靈夢あつて、岩倉大雲寺境內の靈泉を汲み、日夜服用すれば治ると云ふので、之を皇女に日毎汲み參りて、服用せしめたるところ不思議にも日ならずして狂疾癒え、聰明に復せられたと曰はれてをる。其事を遠近のものが聞き傳ひて、精神病者を岩倉村に連れ來たつたのである。斯くして岩倉村に多くの精神病者が集まり、各村民の家に宿泊したので、民家では之を宿泊せしめ、看護をなしたのである。其風習明治時代まで及び、明治十七年に今の岩倉病院が建てられたのである。

江戶に於ては弘化三年に龜戶村小松川に奈良林氏が初めて精神病院を建てゝ、其看護治療をなしたのである。今の加命堂腦病院の前身で、奈良林氏の何代か先きの祖先である。

斯く述べ來たると明治以前に既に精神病院があつたのである――甚だ不完全なものであつたが。そうすると現代の文明が開けゆく以前から精神病があつたのである。

然らば現代文明が精神病の增加とか種類とかに何等の影響を及ぼさぬものであらうか。現代文明の影響として精神病の增加することは學者が唱道してをるのみでなく、誰しも考へ居るところである。それなら何んな風に文明が精神病の增加に影響してをるものであらうか。其問題に對しては未だ明確な說明を與へてをるものがない。要するに文明の進むに從つて精神病が益

加する。且つ或種類の精神病が増加すると云つてをるに過ぎない。此點で諸學者の一致する論點は

一、文明の進むに從て生存競爭が激甚になつて行く、生きんとするための努力が其人を神經質にする。即ち精神病に罹り易い素地を作る。

二、酒類の濫用が必然的に起る。それで慢性酒精中毒が多くなる。

三、酒類の濫用に伴つて性的疾患が多くなる。主として黴毒で、其ために麻痺性癡呆が増加する（腦黴毒の種類と見てよい）。

と云ふにある。

又他方では未開の人種よりも、文明の人種に精神病が多い。村落に居住する者よりも、都會の居住者に精神病が多い。其等からも亦文明が進むと精神病が増加すると曰はれてをるのである。

又職業の種類によつても精神病の多い少いがある。文明の進步に伴ふ種々の勞働が起る。其職業によつても精神病者が増加する。そういふところからも文明が精神病を多く作るものと考へられてをる。

然し文明が進んだ國には立派な病院も多くあろし、精神病者の調査も行屆いてをるが、文明の進まない國に於ては精神病者の統計などがない。其等の點から未だ明確なる説明がないのである。

又國民の人情習慣風習及び生活狀態、其國の氣候風土等にも精神病の發生に深い關係があるので、一様に見ることも出來ないのである。其邊も文明如何によつて精神病の増加するや否やと云ふことを速斷し得ないところがあるのである。

然し大凡そのところは以上の如く文明が精神病を多く作るものと見て差支ない。差支がないのみならず國の文明、都會と村落等より見るも文明が如何に多くの精神病者を作りつゝあるかといふことは容易に想像し得られるものである。

此頃人種問題が頗る喧しくなつてをる。が文明國として精神病の多いのは何んと云つても歐米である。學問も進步し、よく制度も行屆いてをるので統計でもよく調査せられてをる。同じ歐羅巴でも、東部歐羅巴よりも西部歐羅巴に精神病が多くある。歐米に比較すると亞細亞は遙るかに少い。然し同じ亞細亞であるが、日本は精神病が多い。精神病の多いなどはあまり難有い話ではないが、文明國ほど精神病が多いとすれば寧ろ名譽なのかも知れない。蓋し日本は文明制度が行き渡りて、調査などもよく行き屆いてをるからなのである。斯學の大家である獨

逸のクレペリン氏も其著書に『唯だ日本に於てのみ此れと相似たる狀態にある』と云つて居る。

アフリカやオーストラリヤ地方には精神病が稀れであるし、アメリカのインヂアンや黑人にも同樣精神病は稀れである。ペルシヤ人、アベシニヤ人、アラビヤ人、印度人及び支那人には歐米人に比すると精神病者が遙るかに少數である。文明開化の程度が違ふからであると曰はれてをる。

然し風土を異にし、文化程度に差があり、人情風俗のかけはなれた人種を比較することは甚だ正確でない。それで文化の如何により精神病の多寡を見んと欲せば同一の國に在り、同一の狀態の下にある二人種の精神病者の數を比較して見るのがよい。それには歐羅巴に居る猶太人、北米に居る黑人の精神病者の數を調査するのがよい。猶太人は獨逸並に英國に於ては少くともゲルマン人よりは強く精神病又は神經病に罹るものである。北米に居る黑人は同じ土地に生活してゐる白人に比すると以前は精神病に罹ることが遙かに少いものであつた。然るに奴隸開放以來急激に精神病に罹るものが增加した。殊に北方都市に於て增加したのである。千八百七十年には黑人百萬人に對して僅に精神病者三百六十七名を算したが、千八百八十年には九百十二人に增加し、千八百九十年には九百八十人に達したのである。ホワイトの報告によるとアメリカの南方都市に於ける黑人と白人との精神病に罹る數を調査すると、黑人にありては健康者千二百七十七人に對する一人の割で精神病に罹つてをるが、白人に於ては健康者四百五十六人に對する一人の割で精神病者を出してをる。文化の發達した北部都市に於ては白人の健康者五百四十二人に一人の割か、又は五百二十人に對して一人の比で精神病者を出して居るのである。

之を以て見ると文化の進んだ國民に精神病者が多くなつてをるのである。それなら大體何れだけ精神病者にかかるものであらうかと云ふと獨逸では健康者千人に對して精神病者二人の比になつてをるが、之は入院患者の統計であるので、病院外にをる精神病者の比は少くも之より多くなつてをるものであらうと思はれる。瀨捌は健康者千人に對して四人乃至六人の比、精神病性素質を有するもの及び先天性神經質並に擬似は百人に對して五人の割——或はもう少し多いかも知れぬが——少し增加減のあない人は、百人に對して十人の割であると曰はれてをる(ライヒアルト氏)。

それから押して行くと精神病者と云ふものは可なり多數にあるものである。各國とも年々歲々精神病者の數が增加して行くのである。一般に精神病者の數は健康者五百人に一人か、三百

人に一人かの比になつてをる。

然らは日本には現今何萬位の精神病があるであらうか、今假りに精神病者を健康者三百人に對して一人、乃至は五百人に對して一人の割とすると、非常な數になるのである。大正九年の國勢調査の時の日本全國の人口は五千五百九拾六萬三千五十三人である。之に臺灣朝鮮及び在外者を算入すると總計七千七百六十三萬八千三百二十三人になる。今之を概略六千萬人と見ると精神病者が十二萬人乃至二十萬人になる。

東京市の人口は何うかと云ふと二百十七萬三千百六十二人である。今之を二百萬と見ての計算をすると、精神病者は四千人から六千六百人ある譯になる。我々の居住する東京にこれだけ多數の精神病者があるのである。

白痴は健康者四百人に一人乃至七百人に一人の判であるから日本全國には九萬人乃至十五萬人ある。東京市のみで三千人乃至五千人の白痴があることになる。

低能者は學齡兒童百人に一人乃至二百人に一人の割にあるもので、學齡兒童が日本全國に百萬人あるとすれば低能なものは四萬人乃至八萬人あるのである。

其處で廣い意味の精神病者——精神病と白痴癲癇をも合して——の數は日本全國に二十五萬乃至四十三萬人の多きに達するのである。人口が増加して行くに從て精神病者の數の増加するのでは決して不思議なことではない。

人口は年々増加して行くが、文明も亦日進月歩してをる。人口が増加する許りで精神病者が増加するものと見るのは蓋し早計であつて、文明との關係も考へねばならぬのである。そう考へることも、あながち附會の説ではあるまいと思ふ。然らば日本に於ては年々何れ程位精神病者が増加してをるであらうか。内務省の統計報告によると

年號	精神病者總數	人口一萬ニ對スル比例
明治三十九年	二四、一六六人	五・〇〇
同　四十年	二五、七九三	五・二五
同　四十一年	二六、八五八	五・二二
同　四十二年	二七、五九二	五・五三
同　四十三年	二八、二八五	五・六〇
大正元年	三二、九六四	六・三七
同　二年	三五、七二七	六・七五
同　三年	三七、三一七	六・九五
同　四年	四一、九二〇	七・五一

の如く十年間に約二倍に増加してをる。然し事實はモツト共

數に多いものであらうが、數にあらはれたものは以上の如きもので、大體を推察し得るによいのである。然し此數は前述せる各國の精神病者と甚だしい差違がある。それは精神病者の調査上の結果で、今少し精神病に關する智識が普及したなら、モット實數が多くなるであらうと思ふ。

・獨り日本に於て年々增加するのみでなく、外國に於ても增加してをる。入院患者數から見ると次の如きものがある、

獨逸帝國	一八七七年	四〇、三七五
	一九〇〇年	一一五、八四二
プロシヤ	一八九八年	五〇、〇〇九
	一九〇〇年	五五、二一五
オーストリヤ	一八七三年	五、九六五
	一九〇〇年	一二、四三二
イングランド	一八五九年	三六、七六二
	一八九八年	一〇五、八〇六
	一九〇四年	一一七、一一九
	一九〇五年	一二九、八二九
スコットランド	一九〇四年	一六、八九四
	一九〇五年	一七、二四一
アイルランド	一九〇四年	二二、七六四
	一九〇五年	二三、九六六

之を以て見るも各國年々增加を示してをる。然し之は入院患者であつて、各收容數が凡そ定つてあるものである、因て個人口一萬人に對する入院患者の比例を見るのがよい。

プロシヤ	一八七九年	五・七
	一八九八年	一五・三
	一九〇〇年	一六・九
バイエルン	一八六九年	四・〇
	一九〇〇年	一七・一
イングランド	一八五九年	一九・〇
	一八六九年	二四・〇
	一八九八年	三三・〇
	一九〇〇年	三四・一
オランダ	一八五〇年	五・一六
	一八九九年	一四・一二

の如く同じく增加してをる。

玆に日本が此れ程文明が進んだに拘らず甚だ不幸なる一現象がある。それは精神病院の不足である。

大正六年度に我國の精神病者は六萬四千九百三十四人あつたか、そのうち入院せるもの、即ち病院に收容せられてをつたものが五千四百人に過ぎないのである。殘り五萬九千九百三十人は入院治療を受け得ないのである。(內務省保健衛生調査會の報告であるので、前にあげた數より增加してをる)。然るに年々精神病者は增加して行く許りである。前には大正四年までの統計をあげたが、其後の增加は次の如き數に達してをる。(次の數は前のと同じく衛生局年報によつたもので、大正九年度のが手許にないので、欠けてをる)。

大正五年	四四、二二五人
同六年	四八、四六〇人
同七年	四九、四二七人
同八年	四九、三九八人
同十年	五〇、八九一人

斯く增加してをるが精神病院には各豫定收容數があるから病院が擴張するか、又は增設せられざるかぎりは收容數が增加しない。

之を外國の例に見ると國立精神病院なり、公立精神病院なりに收容せられてをる精神病者の數は英國で十二萬人、佛國が九萬人、獨逸では七萬人、米國は九萬人である。

何故入院患者の少ないのが不幸であるかと云ふに一つは精神病者が不治の疾病であると云ふ考から入院させない。又精神病院に入院さすると虐待せらるると一般に信ぜられてをる。此等の謬見と又二つには經濟問題である。幾月か幾年か其入院年月が長い。又何月か何年かかつたなら全治するか一見豫想がつかない。それで入院料を負擔し得られないところから入院さすことが出來ぬものが少くない。三には附近に精神病院がない。それで入院し、治療を受け度くも其病院がない。それで已を得ず自宅で治療するのである。

日本には未だ國立の精神病院が一つもない。東京府立松澤病院が七百五十人餘の定員で、日本で最も大きな病院である。外國には國立精神病院は多數で、多くは何千人と收容の出來るものである。それで前述した樣な多數の精神病者を收容し得るのである。

其他日本に於ては東京、京都、福岡、仙臺の醫科大學の精神科の病室があるが、大きいものではない。其他大阪、京都、千葉、愛知、金澤、熊本、長崎、新潟等の醫科大學の病院に精神病室がある。尚各縣の病院や收容所が約二十一箇所ある此等の官公立病院は總てで三十四五箇所で、收容數が約一千と見てよい。

私立病院は東京に十二、大阪に七、京都に四、兵庫に三、名

古屋及新潟に各二、神奈川、埼玉、千葉、靜岡、滋賀、宮城、富山、島根、廣島及高知に各一で、合計三十九箇所で、其收容數を約千と見てよいのである。北海道に六箇所あるが、公立病院の方に計算してある)。公私立病院を全部合しても五千餘の收容數に過ぎない。外國に比すれば甚だしい相違である。

大正四年末の統計を見ると日本全國の私立病院數は九百五十三院で、其中精神病院は二十九院であつて、三・四%にあたつてをる。

精神病者が入院出來ず、自宅で看護監置せられてをるのが何故不幸かと云ふと、多くは治療が行き屆かない爲めである。私が明治四十四年大學の助手をしてをつた時某縣の精神病者私宅監置の狀況視察を命ぜられて行つたことがある。何れも一坪餘の監置室に入れられてをつた、其うちには經濟的關係で、構造通風採光等の設備のよいものは割合に少かつた。且つ醫師の治療的方面も充分に行つて居らなかつた。一坪餘の監置室に入られてをる病人は甚だ不幸である。同じく監置せられるものなら大きな病院内で、醫師の治療をうけ、運動も充分出來、看護人も多く、行き屆いたところに居る方が何れだけ幸福か解らんのである。自宅に監置されてをる狀態は古の恰も座敷牢の樣な外觀がある。又監置せられないとしても、専門家の居らんところではもすた治療が出來ないのである。其の上にはこれもないので、看護してをる家人の方が早く疲憊憔悴する。其んなことも稀でないのである。之を救ふには何うしても國立精神病院を一日も早く建設して此等不幸なる精神病者を出來るだけ幸福にしてやることが國家の爲すべきところと思ふ。せめて各縣に一つ宛でも縣立精神病院が出來るならば又此不幸から精神病者が救はれるのであるが、前述した樣に一府一道四十三縣として縣立精神病院のあるところは甚だ少ないのである。

日本の文明が進み、歐米各國に比して遜色なく、世界の一等國に列し、醫學の進步も世界的になつて行くが、獨り精神病院の有樣が此文明と伴なはれないのは甚だ遺憾である。精神病學は可なり進步し、斯道の學者も可なり多くなつて行くに拘らず此遺憾なる有樣にあるのは日本全國の精神病者にとる一大不幸である。文明が精神病を作りつゝあるが、日本の文明は精神病者を置去りにして居る觀を呈してをる。

文明と精神病の增加を論じて、今や大分岐路に入つた。日本の精神病の數や病院數やに及んだ。再び前に立歸ることが必要になつた。文明の進むに從つて精神病者が増加する理由として文明國には未開國よりも精神病が多いと云ふことを屢述した。

それと似た様な狀態で都會には村落よりも精神病者が多い。それは都會の住民は村落のものよりも精神病に罹り易い常況にある。文明が進歩して行くに從つて生存競爭が激しくなる。精神及び身體を疲勞困憊することが多い。富貧の懸隔が甚だしくなり、豐裕なる人は放縱な生活に陷り、貧困なるものは不衞生的な生活に陷り、衞生的にも道德的にも不良なる常況にある。之を村落にある住民に比すると精神が過敏になり、身體の健康に害がある。日光に浴し、自然の風光に親しみ、田野を耕し、悠々としてある村落の住民は精神を過勞することが少なく、日中よく運動するので、安眠し、食慾が進み、心身ともに健康である。精神病に罹り易き素地も少なければ、機會も亦多くない。此等のことは誰しも常識で判斷の出來ることである。事實統計に表はれた數があると之を立證するに都合がよいのであるが、遺憾ながら其數がない。獨逸のクレペリン氏やフオークト氏の調査によれば都會の精神病には慢性酒精中毒、變質者、癲癇、麻痺性痴呆などが、村落の精神病に比して遙るかに多數であると云ふことである。

然らば如何なる理由で文明の進歩と共に精神病者が增加するのであらうか。之を解決するには甚だ困難の問題である。精神病學の著書を見ると先づ原因篇に於て第一に文明開化を舉げてをる。學者がそう信じてをるのみでなく、一般世人もそう信じてをる。私もそう信じてをる。其理由としては既に前述した通りであるが、あれだけでは少し論據が薄弱な傾がある。然し他に之を立證すべき澤山の正確な材料がない。現に毎年々人口が增加するばかりで精神病者が增加して行くのではない。其百分率が增加して行くのでも知られる。其處で文明が精神病を多く作ると考ふるより他に途がない。

他方に文明開化が進むに從つて國民の保健衞生が改善せられてゐる。國家が多額の費用を投じて、保健衞生調査會を設け、工場法を制定し、社會的制度設備の改善を謀つてをる。煤煙の多い、黑烟天に漲りて日月爲めに暗しと云つた樣な工場地に住む人々のためにはうららかな日光に浴して新鮮なる空氣を吸ひ、樹木草花等自然の風物に慰めらるる機會が少ない。殊に其處に發育する兒童には甚だ不幸なる影響を與ふるものである。それを救濟するためには公園も必要であらう、病院も建設せられ、兒童遊園地も設けられ、托兒所も造り、國家は專心其改善に苦心してをる。

最近殊に第二の國民たる兒童問題を深く考へられて來たのは甚だ悅しきことである。

一度路を行くに電車、自動車、自轉車、俥等右往左往し、東奔西走して、毎日都會の街路を歩るいてをる我々でさへ危險を感ずる。神田須田町附近は「親知らず」の名さへある。街を歩るくに神經をイラ〳〵させて歩るかねばならぬ。自動車は近來著しく增加したが、之に乘る身分の人は甚だ少數である。乘合自動車には乘り得るとしても道路の不完全から動搖が激しい。遺憾ながら此危險極りなき道路を歩るかねばならぬ。玆で衝突や轢き倒される樣な事故は一年を通じて可なり尠くない。尠くないので外傷性精神病が何人增加したと云ふ樣な調査はない。然し精神を持續的に興奮させてをることは事實である。これが軈て神經質な素質をつくるのである。之を救濟するには交通巡査が通行を整理してをる。安全地帶を設ける。街路に遊ぶより他に途のない兒童のために遊園地を作る。交通機關を高架線、地下線に改良されんとしてをる等國家は多大なる心配を之に拂つてをる。

又國家は生存競走に疲れたる病人のために施療病院や實費診療所を設備する。

榮養研究所を建てゝ、國民の榮養食の研究をなし、榮養保健の上に努力する。

義務教育の勵行をなして、國民の道德思想をたかめて行く。

少年の禁酒法が行はれ、禁煙法が設けられ、着々として改善し行くのである。

種々の社會的團體は施療病院となり、實費診療所となり、兒童保護所となり、健康相談所となり、或は服裝改善會が起り、簡易食堂が起り、演劇活動寫眞寄席等娛樂機關が增設せられ、國民の衣食住の改善、思想感情の安靜を謀つてをる。

文明の餘澤は斯くして日に月に國民保健の改善が謀られてをるのである。そうなると獨り精神病のみならず、諸々の疾病の發生を防止する上に善良なる要件がつくられてゆくのである。然し斯くの如き保健衞生の設備は日に月に增設せられて行くのであるが、先き立つものは金である。國家の經濟なり、社會團體の經濟なりが無盡藏ではない。經濟のゆるす範圍で設備せらるのである。理想的に設備せられて諸々の疾病が絕滅せられると云ふことが何時の時代にもないと思ふ。

玆で考ふることは文明開化の恩澤が多いか、之に伴ふ害毒の方が多いかといふ比較問題であるが、そんなことは誰が考へても出來ぬ相談である。共處で何うしても精神病をつくる不良なる要件を考へて見ねばならぬ。

生存競爭が激烈である。年々歲々激烈になる。村落でも賃金が上り、物價が高くなつて行く、況んや都會に於ては

激甚である。貧富の懸隔が甚だしくなつて行く。我々どもでも食つて行く爲めには努力に努力をしてゆかねばならない。物價が上るが月給はその割に上らない。勞働賃金が高くなるが、求職者が多い。終日自分が生き、妻子を養ふことにもがいてをる。精神並に身體を過勞する。精神は何時も緊張してをる。一方體力が消耗してゆく。精神病に罹り易い素地のある人が精神病に罹るのは誰しも考へられることである。素地のない人でも勞ひ神經質になつて行く。其神經質が子孫に素地を殘す。其素地を受けついだ子孫が又生存競爭場裡に困憊すると精神病に罹る。斯くして年々歳々精神病者が增加して行くのである。

昨年九月一日の大震災の如きは直接文明と何等の關係が無い。文錄年間にも大地震があり、安政年間にも大地震があつた。然しあの壯麗美觀を極めた大帝都が僅か數分の大地震のため、二日二晩にして廣茫際限なき燒野原となつた。文明の恩澤を蒙つてをつた程其殘骸が凄慘である。彼の燒原の眞中に殘つた大建築物の煉瓦の外廓を見た人は誰しも悲哀を感じたであらう。此の震災は幾多の悲劇を產み、幾多の精神病が發生したのである。震災が直接原因であつたが、復興するにあたりて幾多の人が幾多の努力を拂つたのである。帝都の眞唯中にあつて、自分も自分の妻子をも生かして行くためには各人想像も及ばぬ程の苦心焦慮をなしたのである。心身を過疲させた結果倒れた人も決して尠ないものではなかつたらうと思ふ。

茲に神田神保町に相應な店を張つてをつた洋品店ある。未だ四十代の働きざかりである。九月一日の震災つた時神保町邊は可なり火が早かつた。地震だ、火災だ、あの動亂の際には誰でも考ふることは自分の生命である。次に妻子の生命である。火震の焰は渦なして裏町に迫つた。颶風が起る。マゴ／＼してをると財產も生命も失つてしまふ。何物をも省るに暇なく、家族をまとめて身を以て九段上に逃れた。黑煙天に沖し、怪雲天に漲り、不安戰慄のうちに一夜を九段上に明かした。二日の朝になつて主人は斯うしては居られない。一家を生かして行くには一刻も早く金の調達をなして、店の再興を謀らねばならぬ。それには近在の親類の許一時妻子を預けるより他に途がない。交通機關も全部途絕したので、子供等を勵まして、徒歩で近在に落ちのびた。漸く親類の許に一時落着いた。落着きはしたが、安眠してをる場合ではない。復興計畫で胸が一パイである。

それから後ち夜の目も寢ずに資金の調達に東奔西走した。漸くにして元の住所にバラツクが出來上り、品物の仕入れも出來て開店をしたのは十一月初旬であつた。開店する頃には

各町々が相應に復興したので、商賣も次第に盛になつて行つた。ところが主人公は其復興と反比例して、幾夜も眠れなくなつた。身體は疲勞し易くなり、元氣がなく、氣心が沈鬱する樣になつた。心が落ちつかないので、記憶も惡るい樣になつた。而して商賣が相當にあるに拘らず品物が少しも賣れない。斯んなことでは後の仕入れに困る。妻子の生計に行きつまると考へ出した。毎日店へも出ずに自分の室に閉ぢこもりて、クヨ〳〵考へてのみをる。家のものや親類のものが幾ら「そんな心配がない」と云つても、何うしても聞き容れない。「現在商賣がうまく行かないぢやないか」と心配してをる。こんな日が幾日も續いてをるうちに主人は斯う商賣の繁昌しないのは神佛の罰である。自分が若い折り多少放蕩した其の罰であると考へ出した。終日考へてをる間には時々神棚に向つて謝罪する樣のことがあつた。

家のものは之を心配して近所の醫師に診てもらつた。神經衰弱であるから轉地すれば治ると曰はれた。それで主人は勸められて湯河原に行つた。然し幾日も居らずにかへつた。金もないのに湯治などして呑氣にして居られないと云ふのである。そうかと云つて店へ出て働くのではない。依然として考へ込んでをる。

これは輕症であるので、私が見たのには本當の一寸ばかりであつたが、入院さして、今では大部よくなつてをる。斯うしたことも生存競爭の疲勞れである。地震が原因をなしてをると云ふものゝ、斯うした生存上の問題は文明が進歩して行くに從つて益々多くなるものであると思ふ。

大人だけが生存競爭場裡に疲勞するのみでない。小學校の生徒でも、中學校の生徒でも、大學の學生でも同じく生存競爭の上では奮鬪を要するのである。それは入學難である。小學校の入學は左程の心配もないが、中學の入學試驗、高等學校程度の入學試驗では各親々の心配は並大抵でないが、其子供の身になると頭のなかに詰め切れん程に詰め込まれる。一升のものに一升詰め込むには何の差支もないが、一升のものに二升も、三升も詰め込まれる。頭の弱いものにとつては甚だ迷惑なことである。文運隆盛の極めで、聖代の餘澤であるが故に甚だ結構なことである。學問の普及と云ふことは文明の進んだ國にして始めて見る盛事である。難有い事である。それで誰れも彼れも評判のよい中學に入り度い。誰れも彼れも高等の學校から大學に入り度い、無理のない希望である。兒童の夢見るところは大臣であり、大將であり、大學者、大技術家、大資本家である如

のみでなく、親々もさうし度いのである。其處で「あの中學校は昨年何人高等學校に入學した」と云ふ標準で、子供の入學を希望する。學校の方でも成績を良くし、評判をよくし度い。勢ひ學生に勉强させる。引いては之が小學校にも及ぼす。學校で勉强した上に、家にかへると宿題又宿題で、遊ぶ隙もなく、宿題に追はれる。結構なことであるが、學校の先生の他に家庭教師が入る。先生を二人も要して勉强する。頭腦明晰なるならば何の心配もない。精神病的並に神經病的素質を有する兒童にして、其學問の負擔に堪へざる兒童にあつては精神が持續的に緊張する。其結果疲勞困憊する。學問に倦き易く疲れ易くなる。物覺えが惡くなる。覺えが惡るいと先生も親も猶ほ詰め込む。詰め込まれると益々疲勞する。疲勞した結果が神經が弱る。精神にも狂ひが來る。よく遊び、よく學ぶと云ふことが出來ない。

兒童の教育は智育だけではいかんのは私が今更めて云ふ必要がない。人間は學問技藝だけで生きて行くものではない。人間としての其人の人格を涵養することが必要である。體育を重んじ、强健なる身體をつくりて後ち學問を詰め込むのがよい。玆に近來其道の識者が注目して切りに情の教育や德育の方面を唱導鼓吹してをる。甚だよろこぶべき現象である。斯くしてこそ聖代の國民が健全になるのである。「健康なる精神は健康なる身體に宿る」と云ふことは何時でも眞理である。

こうは云ふものの昔し藤原の道長が其女を中宮に入かに、中宮定子に清少納言が侍へてをつたに對し、紫式部、赤衛門、和泉式部等梨壺の五歌仙を入れたのである。今も昔も親の情には變化がない。況して今日の世に先生の二人も三人も頼んで兒童の教育に苦心するのは無理もない。

其關係を直接に云ふことが出來ぬが、日本には近來早發性癡呆と云ふ青年に多く發生する精神病が多くなつた。

早發性癡呆は思春期に發して、慢性の經過をとり、後年癡呆に陷るものであるから、斯く名命したのである。多くは不治に終るもので、三割位い全治するものである。遺傳は七五乃至八〇%に見る。發病年齡が二十歳より二十五歳のもの最も多く、二十五歳より三十歳の間のもの之に次ぎ、十六歳より二十歳迄のものが第三位にある。其以後のものは卒に可なりの差がある。病狀としては幻覺、妄想がある。幻覺は五官の感覺の錯誤である。其うちでも幻聽が最も多く、聲なきに罵詈讒謗の聲を聞き、音なきに砲聲や半鐘の音をきくものである。誇大的のものよりも、被害的のものが多い。從て妄想も被害的追跡的のものが多い。探偵に追跡せられるとか、巡査が來るとか、友人が惡口するとか云ふ類のものである。感情は鈍麻し、一見茫然た

るが如きも、病人はよく物事を知つてをる。然し學問や仕事に對する興味や希望が無くなり、又感情が變換し易く、喜怒變換し易い。又喜怒が普通の人の場合と異なり、些細なることに感動し、比較的重大なことに無關心なことがある。甚しく無精になり、我まゝになる。動作行爲に目的がなく、秩序がなく、氣が向き次第になる。興奮すれば多言となり、不安となり、時に亂暴もすることがあるが、其行爲が情意と一致せず、甚だしくムラがある。或は寡言となり、茫然として座し、一室に籠り、面會を嫌ひ、終日寢ころんでをることもある。

早發性癡呆には破瓜病と緊張病と妄想性癡呆とある。破瓜病は前述した狀態であるが、緊張病になると顏貌が假面の如くなり、表情が乏しく、身體も堅くなり、動作がギゴチなくなり、强情で、無言で、何事も拒絕する傾向があり、同一の姿勢、同一の言語を繰返すことがある。時に衒奇的な動作をやる。興奮すれば支離滅裂なる動作をやり、徒らに喋り、徒らに唄ふ。突發的に物を投げたり、人を叩いたりする、衣服を破り、不潔なることを平氣でやる樣なことがある。又昏迷狀態と云つて、終日茫然として一所に立ち又は座し、或は茫然として幾日でも臥をることがあるものである。

妄想性癡呆と云ふのは主として妄想が症狀としてあらはる る。

此の早發性癡呆が學生に多いのは何故であるか、學生に限らず、その他の青年にも多いのである。發病が丁度學生時代の年齡であるので學生に多いのは勿論である。殊に東京で有名な、成績のよいと目はれてをる某中學校の生徒が屢々此の病に犯れたものを續けて診たことがある。其の時に學生の勤勉が主として成績如何にあるので、教育上注意すべきものであると思つた。然し醫師たる私が何も云ふ必要がない。賢明なる教育家が多い世の中である。此等の惡い影響が遠からず絕滅せらるゝであらうと思つた。

女學生にありては戀愛問題がある。失戀したとて直に精神病に罹るものではない。然し精神病に罹り易い素質を持つてをる女子の親は深く注意すべきことである。結婚は女子の精神に甚大な刺戟を與ふるものである。一步誤れば取返しのつかぬことになる。成るべく精神に深い感動を與へない樣にするがよい。

早發性癡呆に次いで多いのは躁鬱病である。以前は躁病と鬱病と二つに分かれてをつたのを、クレペリン氏が同一疾病と看做し、以上の如く命名したのである。遺傳的關係に

共八〇%に見るものである。年齢は早發性痴呆より稍遲く起る。三十歳から三十五歳の間に發病するものが最も多くある。之に次で二十歳より三十歳までの間のものと三十五歳より四十歳の間のものが多くある。然し十六歳より二十歳までの間のもの、及び四十歳より五十歳までの間のものにも可なり少なくない。若いものには躁病が多く、年寄つたものには鬱病が多い。殊に五十代のものに退行期性の鬱病が多いのである。

躁病の方は氣分が愉快になり、多言となり、多動となる。聯想が早く、意想が奔逸し、感情爽快となり落着がなく、何かしら仕事をせずに居られず、本を聲高に讀み、唱歌し、大字を書し、舞踊する等のことがあるが、それには秩序があり、目的がある。尊大で、時に誇大妄想がある。病勢甚だしき時は躁暴狀態になることもある。

鬱憂病の方は其と返對の病狀であるので、感情は悲哀となり、憂鬱となり、氣分が重く從て動作が抑制せられて、言葉も少なく、低く、終日考へてばかりをる。よく罪業妄想と稱して自分が嘗て悪るいことをしたので、今神佛の罰があたつたと云ひ、其悪るいことたる甚だ些細なることであるが、病人には其が眞劍なのである。悲觀厭世の心を起し、往々自殺するものがある。

猶ほ躁病を鬱病との混合狀態があるが、病氣の説明は他に讓りて略す。

此の躁鬱病は精神病中でも最もよく全治するものである。殊に躁病の方は殆ど全治すると見てよい。然しなかには定期的に發病するものがあつて全治しても亦發病するものがある。

此等の精神病は文明と共に精神病が增加し行くに從つて益々增加して行く精神病の一種である。

時々に筆が脫線するが、又再び前に戻つて文明と酒に就て一言せざるを得ない。文化が進むに從つて生活狀態が複雜になる。生存が激甚になり、心身の過勞が激しくなるに從つて、之を慰むるに飲酒するものが多くなつて行く。其弊を認めて世界大戰中露國が禁酒し、次でアメリカが禁酒した。

然し日本では神代より飲酒してをる。素戔嗚尊が出雲の國簸の川上で蛇を退討せらる時に八個の瓶に酒を滿たしてのましたことは古書に有名なことである。又萬葉集の歌人大伴の旅人の酒の歌は亦有名なるものである。

酒の名を聖と負せしいにしへの大き聖の言のよろしさ

なか〳〵に人とならずば酒壺になりにてしかも酒に染みなむ

あな醜く賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似る

なことは酒を禁止し、飲酒せざるものを「復るにおも低る」と賞揚してをる。之は勿論支那思想即ち漢詩の影響のあるものである。李太白は斗酒詩三百篇と云つて、酒飲みの詩人であつた。兎に角として飲酒の風は今に始まつたのでなく、昔からである。維新前の志士文人墨客何れも飲酒してをつたのが多い。

近年主として基督教を奉ずる團體より禁酒論が盛んに主張せられてをる。甚だよろこばしきことであるが、遂に其主張が廣く行はれず、今猶ほ飲酒するものが多い。宗教だけで禁酒させやうとするのは無理である。飲酒して快樂に耽るのは人間の本能性からである。酒の害毒を教へただけで禁酒するものではない。又酒をのむと云ふことは全然不道徳でもなければ、不衛生的でもない。要するに其量を過すからである。

豐裕なもので種々の娯樂に飽いたものは飲酒すべき機會を作り、其處に耽溺する。他に樂しみのない勞働者は飲酒で快樂を得る。又一方商業上の取引が頻繁になると料理屋や待合等に出入する機會が多く、飲酒することが從て多くなる。其爲めに酒の害毒が多くなる。

幸にして日本には歐米の報告の如く慢性酒精中毒が多くない。獨逸のミュンヘンの大學の調査によると精神病の全體の二二・〇%から[illegible]%に酒精者用がある。可なり多いものと見てよい。[illegible]精神病者のうち二二人は酒精中毒である。日本に於ける大正六年の内務省統計を見ると五千四人の精神病者のうち中酒性精神病は三十九人である。其比例は〇・八四%である。ミュンヘンのものに比すると甚だ少數である。然しこれは大正六年に各精神病院に在院せる患者數である。故に日本全國としては猶ほ多數あるものであらうと思ふ。

然し何故に日本には中酒性精神病は斯く少數であるか――實際はモット多數なものとしても外國よりは少ないのである――と云ふはこれは日本酒の酒精含有量が少ない爲であらうと思ふ。日本人は多く日本酒かビールをのむ。ウイスキーやブランデーはこの頃飲用せらるることが次第に多くなつて行くが、まだまだ日本酒の方が多い。外國でも酒精中毒を多く起すものは火酒、殊に馬鈴薯火酒、アブサン、リキュール等であると曰はれてをる。

尤も日本でも北國の燒酎、琉球の泡盛など强烈な酒はあるが、普通のものの酒精含有量は多くは左の如きものである。

月桂冠	一八・一一%	菊正宗	一六・二〇%
富久娘	一八・二三%	白鷹	一七・九〇%

大　關　一八•二六%　櫻正宗　一七•七○%

此等の酒は東京市中で廣く飲用されるものである。其他萬月花でも、澤の鶴でも此等と酒精含量は大差のないものと見てよい。

ビールの方になると遙るかに酒精含有量が少くなる。

恩比壽ビール	四•四一%	札幌ビール	三•八九%
麒麟ビール	四•四五%	朝日ビール	四•二三%
朝日黑ビール	四•三一%	東京ビール	四•○六%

此等をウイスキーやブランデーに比すると遙るかに酒精分量が少なくなるのである。

日常調理に使用する味淋は何うか。

最　上	一八•八○%	雪　山	一七•九○%
九重櫻	一七•九○%	京　娘	一九•一○%
東　關	一六•九○%	東女郎	一六•四○%

の如き酒精含有量で、日本酒の夫と略ぼ同樣である。調理に使用する位のことで何等の害がないのである。

猶ほ時折飲用するものに葡萄酒がある。又三月のお節句には白酒がある。白酒は常用の酒ではない。九•○二%から一二•八○%位の酒精分である。

大黑人印甲斐赤葡萄酒	六•五四%
牛久赤葡萄酒	七•九四%
日ノ出印赤葡萄酒	六•一四%
大黑天印甲斐產白葡萄酒	八•○○%
牛久白葡萄酒	八•二一%
日ノ出印白葡萄酒	六•五三%

又甘味のある葡萄酒としては

蜂印滋養香竄葡萄酒	九•八二%
地球印滋養興奮葡萄酒	一四•八○%
機那鐵葡萄酒	一一•四五%
地球印藥用葡萄酒	一三•一八%

の如きもので、其少量宛の飲用は左程の害のないものである。それが

ウイスキー		五七•三○%
玉蜀黍火酒		五四•一○%
馬鈴薯火酒		四九•一○%
コンニヤック	最少	三五•三三%
	最多	八一•八%
	平均	五六•一%
眞正ラム	最少	四四•○%
	最多	九三•三%

平均 六一・一%

アブサント 五五・九%

等になると、斯くの如く酒精分量が多量になつてをる。リキュル酒に屬するものに可なり多いものはセリ酒(一八・〇%乃至二二五・〇%)、マデイラ(一八・〇%乃至二〇・〇%)ある。

斯くの如き強烈なる酒精を飲用してをる外國人に日本人よりも酒精中毒の多いのは無理のないことである。

然し日本人の飲用するものでも燒酎は

燒酎		
附	最大	四四・二%
	最少	三五・一%
	平均	三九・六%

であるし、泡盛は四〇・六%乃至四六・八%であるから可なり酒精分量の少くないものである。然し此等は日本人一般の常用ではない。一部分のものと見てよい。

慢性酒精中毒は一般によく見るもので、酒を飲まぬと元氣がなく、酒を飲むと元氣がつき、仕事もよく出來ると云つた樣のがそれである。然し之は精神病のうちに屬さんものと見てよい。それが大酒することが續くと急激に精神異常を呈して來る。幻覺や妄想が起り、興奮し、不安狀態になり、數日よく安眠すると平靜になるものがある。之を酒客譫妄と稱して、酒精中毒に最も多く見る精神病である。其他に酒客譫妄の如き[illegible]にて初まり、覺醒後妄想が長くつゞくものもあるし、又癡呆狀態になるものもあるのである。

酒精中毒は外國に比して遙に少ないが、ヒドク少ないものではない。飲酒を盛にやることは自分が精神病に罹り易いのみでなく、子孫に遺傳的素地を殘す恐れがある。精神病に罹り易い素地を子孫に與ふることは勿論であるが、大酒家の子孫には白痴、癲癇、變質病等がある。ヒステリーの親にも大酒家が少くないし、不良少年の親にも大酒家が多いと言はれてをる。酒精の濫用は自身及び子孫に有害である。愼しむべきは酒と色とである。何時の時代にも之が金言である。要するに量を過し、度を越し、酒に飲まれるからである。禁酒せざるまでも、節酒するがよいのである。

酒に次で起る問題は性病である。昔から飲む、打つ、買ふを三道樂と云つてをるが、打つことは何うか知らんが、飲むことと買ふこととは兎角相伴ひ勝ちのものである。それで性病、殊に黴毒の傳播が多くなる。

又一方文明開化の進むと貧富の懸隔が甚だしくなり、生活の程度が高くなる。それで若い男女の結婚が昔の樣に容易に

れない。仕方なしの獨身生活が多くなる。獨身でをらぬまでも、晩婚が多くなる。其處で困るのは性慾上の問題である。春が來れば花咲き、柳が芽を出し、鳥が歌ふ樣に自然が自ら人間の心にも春が目ざむる樣にする。人間の本能であるから、食せざれば空腹を感じ、冬になれば寒く、夏になれば暑いと何の異つた理屈もないのである。獨り人間の性慾のみを別扱ひにするのは甚だ不道理であると思ふ。其處で、寒ければ衣服を着、飢ければ食すと何等の異りがなく、性慾を抑制し得ない人が多くなる。性慾を抑制すると害があると云ふ樣な議論には可なり抗議を申込んでもよい理由があるが、性慾の抑制の出來ぬ人が尠くない。さう云ふ場合には勢ひ折花攀柳となり、微吟低唱となるのは已を得ぬことである。斯くの如きことも亦性病の傳播に與り一力がある。

他方には亦職業婦人が多くなる。婦人の獨立といふことに從手を擧げて贊成するが、今日の社會狀態では遺憾ながら未だ充分に獨立し得ない樣である。其處に誘惑があり　誘拐がある。斯くして倫落の巷に陥るものも亦尠くない。玆にも亦性病の傳播が起る。

此等は文明國の何れもが其半面に持つ暗黑面である。

抑も黴毒は何時の時代より日本に傳播したものであらう。永正年間に畿内より關東の方に傳播したものである。戰國時代に既に日本に傳播したので　結城秀康が黴毒で死亡したのは有名な話である。支那から長崎を經て來たもので、關東瘡と云つてをつた。又葡萄牙人、和蘭人等の渡航も亦之が傳播に與りて力あるものの樣である。

其が元祿の文明隆興時代より文化文政の爛熟期に渡りて、花柳狹斜の巷が頗る繁榮を極めたので、一層其傳播が甚しくなつたものであらう。其頃と明治大正の時代と何れが多いか比較すべきものがない。

此の黴毒が腦を冒したものに麻痺性癡呆がある。此病氣は私共が見ると近年非常に多くなつたのである。以前は五十歳以上の男子の精神病として主として麻痺性癡呆に注意したものであるが　其後ち學問の進步は之を早期に診斷し得る樣になつたので　三十代より麻痺性癡呆に罹るものの多いことが發見せられたのである。然し最も多いのが四十代より五十代である。主として男子にあるもので、女子には比較的少ない。賣笑婦に多かるべき筈であるが、あまり見ない

此病氣は感染後八年乃至十五年後に起るもので、普通十年位と見られてをる。腦の組織を破壞するもので、進行性の病氣である。直接生命に危險があるもので、發病後數年ならずして倒れるものが多い。然し近來治療が進步して、全治すること　六

ケしきも、病勢を或程度に止め得ることがある様になつた。これは文明のよい方面のことである。

「己惚れと痴けとはもたぬものがない」と昔からの諺がある。世のなかに黴毒に罹つた人は無數にあるであらう。それから見れば麻痺性癡呆と云ふものは左程多いものでないかも知れない。但し近來學問の進步で、早く發見せられるのと、精神病に關する智識も次第に多くなるので、我々のところに來る病人が多くなつた。其結果我々の方面から見ると増加した様に見えるのかも知れないが、一般に多くなつたと曰はれてをる。

然し麻痺性癡呆に罹るものは多くは一家の主柱たる人に多い。高位高官のものも多い。軍人にしては將官、學者博士、豪商、技術家等に屢々見る。要するに何等か傑出した人物によく見る。平凡なものには少ないのである。宗教家や教育家には尠ないと曰はれてをる。謹嚴であるからである。然るに近來其宗教家、教育家にも往々にして麻痺性癡呆を見るのである。これも文明の影響かも知れない。

此病氣は記憶が非常に惡くなり、字は書をなさず、品を敗し、疑ひがあり、言語が不明瞭になり、幻覺や妄想があるも、荒唐無稽のものが多く、痙攣や卒倒の發作があることもある。主要なものは斯る病状であるが、種々の病型がある。其他の

に家族のものの氣のつかんうちに商賣上の取引に意外な失敗を來たすことがある。誇大的になり、濫費濫散がある。甚だ注意を要すべき病氣である。家人が發病に氣がつかぬ間に大損失をまねぎて、一家が悲境に陷つた例は私どものよく見るところである。

文明の伴ふ半面に斯かる不祥事のあるのは寒心すべきである。獨逸でも「チビリザチオーン（文明）とジヒリザチオーン（黴毒）」と云つてをる。

年々歳々増加するものに自殺がある。エスキロール氏は自殺者は凡て精神病であると云つてるのは極端な論としても、フオン・ゲッチンゲン氏は自殺者の三三・〇％は精神病者であると云つてをる。ヒュブネル氏は自殺者の三〇・〇乃至四〇・〇％は精神病者で、殘りの三分の二は素質者だと云つてをる。

この自殺が多くなるのも、生活狀態から來てをる。生存競爭に疲れたものであると云つてよい。それも亦文明の産んだ精神病と見らるべきものである。

猶ほ職業上に就いても文明の進步と共に終日火熱に接したものや化學的藥品を取扱ふものなどに神經に不良なる影響を與ふるものがある。此等に就ても猶ほ詳述すべきであるが、非常

が無いので省略する

此他猶ほ現代文明に伴ふ精神病の増加に働く種々の動機があるが、他日に讓ることにする。要するに前述するが如きものは凡て現代文明に影響せられて起る精神病である。

此文を草するに當り参考引用したる著書は富士川博士著醫學史、呉博士著精神病學集要、土肥博士著世界黴毒史、[illegible]學士著新撰精神病學、樫田學士著精神病問題、後藤學士著日[illegible]の心理等及獨逸の精神病學教科書二三であることを附記する。

東西權貴暗殺史論

白柳秀湖

狂信的暗殺と錯感的暗殺

暗殺には政權の爭奪を目的とするのがあり、軍事上の目的に發するのがあり、思想上の狂信に出でるのがあり、又、政治上の錯感に起るのがあり、其範圍は頗る廣く、其歴史に現はれた所も亦古い。

西洋には此外に宗教上の暗殺といふものがある。併しながらその多くは、宗教上の信仰に發したのでなく、宗教の名による政權の爭奪に發して居る。故に名は宗教的暗殺といふも、實は政爭的暗殺である。之は坊主が久しく政權を握つて居た西洋として當然のことであり、日本には幸にしてさういふ事實がなくして止んだ。

暗殺といふ文字が廣義に用ゐられる時は以上四ツの場合を包括し、更に私憤私怨に發する單純な市井の人殺しにも適用されるのであるが、それが狹義に用ゐられる場合は、近世の特産物である思想上の狂信に發する暗殺と、政治上の錯感に發する暗殺とを意味することゝなる。フランスの法律學者、ドクトル、レギーが、暗殺を狂信的のものと、錯感的のものとの二つに分類したのは、恐らく暗殺を狹義に解釋しての結果であらう。

茲に狂信的暗殺といふのは、或る學問上の主義、思想を奉ず

るものか、學問の範圍を脱して信仰の境地に入り、或る學派の說を信ずること、宛然善男善女が熱狂して教祖のお題目に唱和するが如き態度に陷つた時に生ずる悲劇であつて、之こそ嚴密な意味で宗教的暗殺ともいふべきものである。

學問と行實とは必ず相伴ふべきものであるといふ。其通りである。知行合一は學問の理想だ。併し行實は信仰ではない。學問と行實と相伴ふのはよいが、學問と信仰との野合は危險である。昔から坊主が政治に手を出して善い結果がなかつたやうに、學者が坊主臭くなつて善い道理がない。思想上の暗殺を、學問に伴ふ行實だなど考へるのは飛んでもない間違ひで、それは學問が宗教化した結果に外ならぬ。研究が信仰の俘囚となり、學說がお題目となつてしまつては行實も何もあつたものでない。

錯感的暗殺は、是まで行はれた政治上、宗教上の暗殺の殆どすべてを包括するものであり、人心がある當面の問題に亢奮激昂した時に生ずる悲劇である。誤解から起るのがあり、煽動から生ずるのがあり、それでないにしても、一人の主腦、若しくは少數の有力者を暗殺して時勢を覆へし得べしとするのは甚しき錯感である。英雄といひ、偉人といふも之を要するに時代の傀儡である。その時代にプレヴェールする力の權化である。——

人の[illegible]時代は變へるものでない。この時にもそれに代つても、後になつてその變化を回顧すれば、やはり同じ勢力が形を變へて現はれたものに過ぎないといふことがよく分る。伊庭想太郎は星亨を斃して東京市政を廓清し、併せて一代の人心を覺醒せしめようとしたのであるが、その人心に與へた影響は極めて一時的であり、東京の市政は依然として彼等餘類の手にあつたのみか、星のやうな人間をはぐゝみ育てた大政黨の勢力はその後益發展して、跳梁跋扈を恣にした。中岡艮一の原敬を刺したことが、政友會の分裂に何ほどの關係があつたか。之は今日評論は出來ない。二三十年して見るとよく分るのであるが、假に重大な原因の一をなしたとしても、分裂の結果は同じく資本主義の政黨である憲政會が勢力を得たといふに過ぎぬ。暗殺の結果から見ると時代は何程も進展をして居ぬ。或る首領若しくは有力者の暗殺は、その黨派に大打撃を與へることは出來ても、その黨派の立脚する社會の事實、即ちその黨派の根據する社會的勢力を覆へすことは出來ない。暗殺は之を大きく觀ても、又、小さく觀ても何れは錯感の結果に外ならぬ。

黨爭的暗殺と軍事的暗殺

暗殺といふ文字を狭義に解釋すると、ドクトル、レギーの分類は大體當つて居るやうであるが、之を廣義に解釋すると二つの類では足らぬ。少くとも、或る一つの勢力と他の一つの勢力との間に行はれた黨爭的暗殺と、戰鬪行爲の一端として行はれた軍事的暗殺との二つを之に加へる必要があると思ふ。さうして狂信的暗殺と、錯感的暗殺とが十九世紀以後の産物であるやうに黨爭的暗殺と、軍事的暗殺とは、主として中世以前の産物であつた。

黨爭的暗殺は東西ともに、その歴史に現れることが頗る古く、西洋では紀元前四十四年三月十五日に有名なシーザーの暗殺があつた。我國でも孝德天皇の大化元年、蘇我入鹿が三韓進貢の日、太極殿に於いて誅に伏して居る。その晴れの舞臺で殺された所が、シーザーのポンペイウス劇場で催された元老會議の席上に刺されたのとよく似て居る。但し入鹿を誅し併せて蘇我氏を族滅した中大兄皇子は、藤原鎌足と謀つて大化新制を斷行し、或る程度まで大氏族の跋扈を制することに成功したが、シーザーの暗殺は、その反對黨たるブルタス等の標榜した共和政治の擁護といふに相當の理由があつたに拘らず、甚だしき無謀の擧として人民の中殆ど一人の之に贊成するものなく、共陰謀はアントニウスの雄辯によりて脆くも殺へされたのみか、ローマはシーザーの死によつて却つてその帝政出現の期を早められて居る。

戰鬪行爲の一端として行はれた軍事的暗殺の代表的なものに、日本武尊が熊襲の魁帥川上梟帥(かはかみたける)を刺殺された一事がある。上古の戰爭は東西ともに英雄を中心とし、一粒選りの精兵を以て之に從屬せしめたもので、多くは英雄と英雄との格鬪を以て軍の勝敗を決した。今日の戰爭は團體戰で、各部の司令官は戰線に立つことなく、その一人の戰鬪力は軍の勝敗と何等の關係もないのであるが、上古は大將が軍の眞先に立つて進み、善戰健鬪して全軍の士氣を鼓舞し、大體の勝敗を決したものである。故に大將にして討たるれば、全軍戰はずして潰え、甚しきは兩軍鳴を靜めて大將と大將との格鬪を見物し、勝負の決するを俟ち、一兵を交へずして引揚げるやうなこともあつた(今昔物語)されば此時代にあつては忍んで敵の圍に入り、姿をやつして敵の大將に接近し、之を暗殺するといふことが、兩軍の勝敗を決する最も簡單な、且つ有効な方法として用ひられた。さうしてそれは婦人をして、大任を行はしむるか、婦人に扮して此大任を行ふか、何れにしてもそれが英雄時代の軍略として、最も正當且つ勇敢な行爲と認められて居たことは事實である。

されば垂仁天皇の時にも皇后、狭穗姫の兄、狭穗彦はその逆

意を決行せんとするに至り、皇后に説き、遂に大逆を行はしめようとして居る。安康天皇の時、御叔父、大草香皇子の遺孤眉輪王が天皇を弑し奉つたことは國史の上に隠れなき事實である。安康天皇は即位の初め、御弟大泊瀨皇子（雄略天皇）と力を協せて大草香皇子を滅ぼし、天皇はその妻中蒂姫を立てて皇后とし、大泊瀨皇子はその女、幡梭の皇女を納れて妃とせられた。此時大草香皇子の遺孤眉輪王は、母中蒂姫と共に宮中に與へられて、天皇に養はれることとなつたが、常に深く天皇を恨み奉つたものか、即位三年天皇が山宮に御幸して皇后の御膝を枕に甘睡し給ふ時、樓下に嬉戯して居た當年七歳の眉輪王は、突如樓を上つて天皇を刺し奉つた。之が國史の上に於ける最初の大事件である。此事件には裏面に中蒂姫が關係して居られると云ふ説と、大泊瀨皇子が關係して居られると云ふ説と二種あつて何れも決し難いが、何れにしても當年七歳の眉輪王だけで出來る仕事でないといふことだけは、諸家の見る所が一致して居る。さうして此事實はシエクスピアのハムレツトに餘ほどよく似て居る。

傳奇的なアッチラの死

東洋史と西洋史とに跨つて最も傳奇的であるのは、ドナウ河邊におけるフンの大王、アッチラの最期であらう。

フン族は四世紀から五世紀の半ばにかけ、今のウツクライナ、ハンガリー地方を中心として西はライン河、東は中央アジヤを經て、支那の邊境に接する廣大な領土を占め、純粋の白人であるゴスを始めとして、黒海沿岸、ドナウ河一帶の諸民族を悉くその支配下に從いた勇猛な黄人の一種族である。アッチラは即ちその王で、紀元四百三十四年兄リユーアスの後を襲いで王位に即いた。當時アッチラの威望は隆々として歐亞を風靡し、部下は皆此王の神聖を信じ、その鐵劍は以て全世界を征服すべき使命を帶ぶるものとした。

紀元四百四十七年、アッチラは大兵を率ゐて東ローマ帝國に侵入し、皇帝テオドシウス二世の軍を破つて、完全に之をその屬國とした。處がマルシアン帝が立つに及び、前帝の約を破棄してフンに隷屬を拒んだので、アッチラは大にその不信を憤り紀元四百五十一年、七十萬の大軍を率ゐて、ハンガリアから、今日のフランスに侵入し、勢破竹の如く諸都を席卷してオルレアン城を包圍した。これ實に白人歐洲が、黄色人種からうけた最初の大脅威であつて、シヤロンの一戰、縦にローマ・ヴイシ・ゴスを中堅とする歐洲聯合軍の勝利に歸し、アッチラは兵をかへし、四百五十二年その鋒鋩を轉じてイタリアの北部に侵入した。

時の西ローマ皇帝ヷアレンチニアン三世はその鋭鋒に敵せず、ローマ法王を仲裁者とし、王女にして絶世の美人と呼ばれたエルヂコと、巨萬の粧費とを贈つて和を結んだ。アッチラは王女と粧費とを得て兵をアルプスの東に引き、四百五十三年、ドナウ河邊、パンノニヤの陣中に於いて、エルヂコと盛大な結婚の式を擧げようとする夜、驟かに病んで死んだ。その死が餘りに傳奇的である爲に歴史家の間にさまざまな憶測が行はれて居る。若しアッチラの死が、エルヂゴの暗殺によるものとすれば此軍事的暗殺は東西を通じて恐らく最も偉大の効果を收めたものの一であらう。何故となれば、當時世界の大半を領土としたフンの大帝國は、アッチラの死から忽ち土崩瓦解してその痕跡を止めず、今日ではフンがトルコ民族であつたか、匈奴であつたか、その考證にさへ苦しむほどである。英雄時代に於いては暗殺といふことが斯くの如く有効であつた。

呉々も斷つて置くが、フンの死が暗殺によるものであるか、否かは全く西洋講談の領分であつて歴史としては、たゞ彼がエルヂコと結婚の夜に死んだといふことを記すに止めなければならぬ。

東西婦人刺客の比較

殊に面白いのは婦人の刺客について西洋と日本とを比較して見ることである。西洋の婦人はキリスト教の道徳で保護せられ、可なり古くから社會的に活動をして來て居るのであるから、政爭若しくは黨爭の渦中に投じて、敵黨領袖暗殺の大任を引受けたやうな事實が頗る多からうと思つて見ると大したことはない。近代に入つてはフランス革命の大立物、恐怖政治の巨魁マラーを襲うて一擊の下に之を殪した花の如き少女シャロット、コルデー、マラー、ダントンの恐怖政治を共々に絶滅したロベスピエールを刺さうとして、果さず家人の爲に捕へられたセシールレノー、ロシアでは千八百八十五年頃カラの牢獄に起つた囚人の虐待事件に憤激し、その主務官である州の知事イリヤシエホッチを暗殺しようとして捕へられた天使のやうに美しい革命の少女クチトンスカヤ、千八百八十一年のアレキサンダー二世弑逆事件に連累して捕へられたソフヒア、ペロウスカヤなどが世に聞えて居るが他には大して有名なものはないやうである。それに較べると日本の婦人は、家庭といふ牢獄の中に幽閉せられ、絶對服從の奴隸的境遇に甘んじたなど云はれる割合には政爭若しくは黨爭の黑幕に立ち、敵の主腦を暗殺すべき大任を託されるなどのことが多かつた。戰國時代はもとより、德川時代となつても婦人の此方面に於ける活動は却々盛んなもので

見なし、尤もその歎いた[illegible]だしも、中にはヒステリックな發作の結果と見られるやうなのが多く、外國にもこんなものなら幾らもあつたらうと思はれる。それにしても徳川時代に枚擧に遑なきほどある婦人の仇討と云つたやうなものは、中世のヨウロッパにも餘りなかつた。西洋の婦人は社會的によく活動し、日本婦人は因循姑息で非活動的であつたなどいふのは全く見方によることで、その程度は大抵同じものであつたやうに思ふ。

君父の仇とか、敵黨の誅殺とかいふことを除き、天下の爲とか、家國の爲とか、公衆の爲とかいふ動機に發して人を殺した女は餘り多く見當らぬ。たゞ信州飯田の堀氏に仕へ若君のお傅役を勤めた山口俊平の娘、藤子が自分には手習の師匠に當る主君の嬖妾、豐浦といふものを、下谷三味線堀の江戸屋敷で刺殺した事件がある。此時藤子年二十二、豐浦には親しみこそあつたれ、恨みと云つては微塵もない。その動機は全く豐浦が國政を亂るといふ公憤に出で、始終の態度の立派なこと、聞くもの、一人として感嘆せざるはなかつた。阿波の蜂須賀氏は堀氏の姻戚である關係から、藤子の忠勇義烈をきいていたく感激し、是非にその命を助けようと、親ら百方堀氏に說いて縱にその承諾

[illegible]藤子は刑に臨み、獄吏に乞うて厠に上り、月のものを浄めた後、獄卒が眼かくしをしようとするのを武士の娘に不必要なことであると云つて拒み、櫛をとつて鬢のおくれ毛をかき上げ、容を正して靜に合掌し、

信濃なる山路の雪と諸共に
春をもまたで消ゆる今日かな

と一首の歌をのこして死に就いた所、生に愛著の深い西洋の婦人などにはチョット見られぬ態度である。千八百八十三年、革命黨の陰謀に加はつた罪によつて死刑に處せられようとしたロシアの貴族の女で、ルドミルラ・フオルケルスタインといふものゝ態度が餘りに英雄的であつた爲に、宮廷に於ける非常の同情を博し、死一等を減じてシユリツセルブルグの牢獄に投ぜられたことがある。それとて山口藤子ほどに立派なものではなかつたらうと思はれる。藤子の屍體は飯田の長源寺に葬られたが、何人の營むともなく藩主代々の墓所よりも立派な石碑が立ち、參詣の男女が日夜踵を接するといふ有樣で、藩主も幾度か之を取毀たせたが、後から／＼と立派な石碑が立つので、遂には之をそのまゝにすることゝなつた。

藤子の外に政治的暗殺として考ふべきは德川綱吉の夫人鷹司氏が、柳澤吉保に百萬石を増加されようといふ前夜、（寶永六年正月十日）將軍を切諫して去らず、その竟に聽かれざるを知るに及んで、將軍を刺し己も自刃したといふ說である。之は當時專ら評判のことで、政府も之を打消さうとするには全力を注いだ形跡がある。『德川實記』など將軍死去前後の病狀までも細叙して、暗殺說を否認して居るが、誰も之を確實な史料といふものはない。暗殺說を從來の歷史家がしたやうに流言蜚語として一笑に附すべきか、尙ほ考ふべき餘地は十分にあるらしく思はれる。

西洋史上の四十五大暗殺

上古から中世を通じて近代に至るまでの有名な暗殺を列擧すれば、先づ西洋では、紀元前四十四年三月十五日のシーザー暗殺を始めとして、紀元千百七十年十二月二十九日のトーマス、ベケット暗殺、千三百八年五月一日のゼルマニー皇帝アルバート一世暗殺、千四百三十七年二月二十一日のスコットランド王チエームス一世暗殺、千五百四十六年五月二十九日のカーヂナル・ビートン暗殺、千五百六十六年三月九日のダビッド・リッチオ暗殺、千五百六十七年二月十日のダーンレー卿暗殺、千五百

ムス暗殺、千五百八十四年七月十日のオレンヂ侯ウヰリア殺、千五百八十九年八月二日のフランス皇帝ヘンリー三世暗殺、千六百十年五月十四日のフランス皇帝ヘンリー四世暗殺、千六百二十八年八月二十三日のバッキンハム侯ビリーアー暗殺、千六百三十四年二月二十五日のワーレンスタイン暗殺、千六百七十九年五月三日の大僧正シャープ暗殺、千七百九十二年三月十六日のスエーデン國王ガスタバス三世暗殺、千七百九十三年七月十三日のマラー暗殺、千八百年六月十四日のクレーバー將軍暗殺、千八百一年三月二十四日のロシア皇帝ポール暗殺、千八百八年六月のトルコ皇帝セリム三世暗殺、千八百十二年五月十一日イギリスの首相スペンサー・ハーセバル暗殺、千八百十九年三月二十三日ドイツの劇詩家コッツエビュー暗殺、千八百六十五年四月十四日、合衆國大統領アブラハム・リンコルン暗殺、千八百六十八年六月十日セルビアの皇子ミロッシユ暗殺、千八百七十年十二月二十八日スペインのプリム將軍暗殺、千八百七十一年五月二十四日の巴里大僧正、ジョーヂ・ダーボーイ暗殺、千八百七十二年二月八日印度總督メーヨー伯暗殺、千八百七十六年六月四日、トルコ皇帝アブダル・アヂス暗殺、千八百八十一年三月十三日ロシア皇帝アレキサンダー二世

ト・カーペンチウミ二覇王の闘爭獎勵者バーク暗殺、千八百九十四年六月二十四日、フランス大統領カルノー暗殺、千八百九十五年七月十五日、ブルガリアの政治家ステファン・スタンブローブ暗殺、千八百九十六年五月一日ペルシアの國王、ナズル・エ・チン暗殺、千八百九十八年九月十日アウストリア女皇エリザベス暗殺、千九百年七月二十八日のイタリー皇帝ハムバート暗殺、千九百一年九月六日合衆國大統領マツキンレー暗殺、千九百三年六月十一日セルビア皇帝アレキサンダー一世及び皇后ドラガ暗殺、千九百五年二月十七日ロシア皇帝ニコラス二世の伯父、セルジウス大侯暗殺、千九百八年二月ポルチユガル國王カールス一世及び皇太子暗殺、千九百十四年六月二十八日のアウストリア皇太子、フエルチナンド大公暗殺、千九百十四年八月のフランス社會黨首領ジヤン・ジヨーレス暗殺、千九百十六年十二月二十八日のロシア怪僧ラスプーチン暗殺、千九百十八年四月二十二日のコルニコフ將軍暗殺、千九百十八年七月十六日のロシア廢帝ニコラス一家暗殺、千九百十九年一月十五日のドイツ、スパルタカス團領袖リープクネヒト及びルクセンブルグ暗殺等がその主なるもので千九百十九年二月十八日のフランス首相クレマンソー暗殺は、彈丸が氏を傷けただけで未遂に了つ

日本史上の黨爭及軍事的暗殺

日本では前に述べた景行天皇の即位二十八年日本武尊の川上梟帥刺殺、安康天皇の即位三年、眉輪王の大逆、崇峻天皇の即位五年蘇我馬子に使嗾された東漢駒の大逆、大化元年中大兄皇子の蘇我入鹿誅殺、落人ではあつたが永曆元年正月四日、長田莊司忠致の源義朝暗殺、史實は甚だ貧弱であるが京都の遊佐阿古屋と共に最も廣く人口に膾炙して居る惡七兵衛景清が建久元年賴朝を奈良に暗殺せんとして未遂に了つたことが、若し幾分でも事實でありとすれば、暗殺の歷史に逸すべからざるものである。建久四年範賴が修善寺で殺され、元久元年賴家が同じ所で殺されたのは、暗殺といふにはふさはしくない。但承久元年正月、別當公曉が實朝を鶴が岡八幡の社前に刺したに至つては暗殺の代表的なものと云つてよい。建武二年七月、足利直義が北條時行擧兵の騷動に紛れて、淵邊義博に命じ、折から鎌倉に拘禁中の護良親王を暗殺させたのは東西ともによくある例で殺すべき口實のない反對黨の領袖を執へて、生けもせず、殺しもせぬ監視の下に置き、何かのドサクサに紛れて之を暗殺するといふことは、文明の今日でもよくあることで、戰亂かそ

の嚴重な監視の下に置いた人物の系統から起らず、必ず意外の邊に發するのは皮肉な事實である。正平十三年十月には新田義興が武藏の矢口で武家方に誘殺された。嘉吉元年六月二十四日赤松滿祐が足利義教を暗殺したのは、將軍の方にも重々惡い所があり、同情すべき點も少くなかつたが、當時は尙ほ君臣の關係が明かであり、弑逆者としての制裁は免れなかつた。降つて三好、松永の時代ともなれば下剋上は當然のこととなり、臣にして君を弑す事にも暗殺などの必要はなく、白晝堂々と兵を發して弑逆を行ふやうになつた。

戰國となつては、敵國の主腦を暗殺若しくは誘殺することが、殆ど日常の仕事となつた觀があり、そんなのを一々列擧して居ては際限がない。それにしても文明十八年七月名高い太田道灌が、その主定正に殺されたのは、槽屋の浴室で暗殺されたといふのは嘘で、討手を差向けられたといふのが眞であらう。慶長十六年六月二十四日加藤淸正が死んだのは家康の毒殺によるといふ巷說が行はれた。之は同年三月秀賴上洛に陪した時、淸正と同席で、家康の饗應をうけた淺野幸長、池田輝政の二星が、相尋いで殂落して居る所から起つたものであらう。家康も佐竹義宣の家老、車丹波守の子善七郎の爲に狙はれたといふ說がある。[illegible]

て、古主佐竹氏に復歸せしめようとしたのを　善七郎は固辭して受けず、乞丐の首領となつて、江戶の保安に任じた。非人頭車善七の家はかくして起つた。尤も之には異說があり、善七郎の狙つたのは家康でなくして秀忠であり　善七は紅葉山の園丁となつて入込んで居たといふものもある。車善七郎のことは石川五右衞門が秀吉を狙つたといふほどに根據のない說ではないらしい。

柳營の三大刄傷

德川時代に入つてからも暗殺沙汰は絕えなかつた。但し前代の戰爭的、軍事的暗殺は漸く止んで、政治的、錯感的の色彩が著しく濃厚になつて來た。

寬永十八年八月十日には老中井上正就が殿中に於いて豐島刑部信脯に刺され　貞享元年八月二十八日には大老堀田正俊が、若年寄稻葉正休に刺され、天明四年には若年寄田沼意知が殿中に於いて佐野政言の爲に致命傷を負はされて居る。豐島刑部の擧は全く私怨に出でたものらしく、それには春日局の差出口が原因をなして居る。刑部は正就を刺すと、直に返す刀で屠腹し、後から抱止めた小十人組の靑木久右衞門を一緒に刺殺して[illegible]

[illegible]に[illegible]體の前に殺されたに[illegible]た。事が起ると諸所から駈付け、出場を知らせず正體を暗殺してしまつたのは頗るあやしい。將軍若しくは諸老の密旨をうけたものではないか。其事に關しては■老が水戶の黃門から酷しく油を絞られて居る。田沼父子の惡政に關しては茲にいふまでもない。政言が意知を斬つたのは全く公憤に出で、田沼父子の惡政に惱み拔いて居る江戶中の人氣は素晴らしいものであつた。是より先、安永から天明にかけて天災地變が踵を接して起り、地方には恐ろしい飢饉が續いて、米價は天井知らずに奔騰し、天明四年に入つては百文に五合足らずといふ前代未聞の高値を現はし、下民の困難は言語に絕する有樣で、所詮は江戶にも一騷動なくては濟まじき形勢となつた。處へ佐野政言の刃傷があり、意知は翌日絕命、政言は四月三日死を賜ひ自家庭上に切腹して果てた。然るに其事があつた翌日からさしも奔騰して底止する所を知らざりし米價が俄に下落したので江戶の市民は政言を世直し大明神と稱へ、その德を慕ふこと一方ならず、その屍骸を葬つた淺草本願寺內の德本寺には、尙ほ米價の下落を祈ると稱して香花を手向くる男女引きも切らず、門前には花、線香などを賣る所が三ケ所も出來、門を入ると四斗樽に水を湛へて手洗の爺

この■ひは[illegible]、[illegible]谷行から開く客[illegible]せたが、前夜は夜中[illegible]に門の[illegible]どりから忍込んで客[illegible]したといふ。又、その頃、「いやさの[illegible]で血はさんさ」といふ俗謠が流行して居たのを、誰いひたつらか「いやさの善さで血はさんさ」ともぢり、夜になると築地なる意知の邸外を謠ひはやして步くものがあつた。「善さ」は政言の通稱善右衞門から來て居る。

かく政言の人氣が沸騰したので、非人ども二人づゝ組んで一人は劍菱の樽に鎗鞘の面をかぶり、他の一人は兩手に銀紙を貼つた劍を持ち、暗に政言が意知を斬る眞似をして步くと市民は手をうつて喜び、戶每に錢を投與へるので、乞食ども思はぬ利益を得たといふ。

大名のお家騷動といふものには、盛に暗殺が行はれたやうであり、中には三代承襲の主君を奪めたものもあるやに噂されて居るが、眞相は容易に分らず、分つたにしても暗殺としてその局面が極めて狹小で一々擧げるほどのものはない。

開港論者及徵兵主義者の暗殺

幕末となつては天下漸く多事で、尊王對佐幕、開港對攘夷と

諸藩の立場の異るに連れて、其主張が分れ、問題の切迫するに連れて議論も白熱化し、果ては白刃が閃き、銕火が飛び、幾多の尊き犧牲が新日本建設の祭壇に捧げられた。

恐怖の幕は萬延元年三月三日、櫻田門外に於ける井伊大老の暗殺から切つて落された。文久二年正月十五日には老中安藤對馬守正信が坂下門で要撃され、幸にして一命は取留めたが重傷を被つた。同年四月八日には土藩の參政で、熱心な開港論者である吉田東洋（正秋）が高知の城下で暗殺される。元治元年七月十一日には、同じく開港論者の佐久間象山が京都に於いて暗殺される、慶應三年十二月十二日には、龍本龍馬、中岡愼太郎の兩人が新選組の劍客近藤勇、土方歳三等に暗殺される。明治二年一月五日には、海軍の恩人として忘るべからざる横井小楠が兇徒の毒刃に斃れる。同年九月四日には、洋式軍隊の草創者として偉功のあつた兵部大輔大村益次郎が、守舊派の兇刃に斃れる。明治四年一月九日には之も、式軍隊草創者の一人である參與廣澤眞臣が暗殺され、頑迷派の威嚇は漸くにして開港問題から、徴兵問題に轉ぜんとするの傾向が顯著であつた。

明治五年からは徴兵主義者と壯兵主義者との衝突が征韓論の形式を借りて現はれ、新制度の建設と同時に慘ましき失業者たらんとする四十萬の士族は殆ど其すべてを擧げて壯兵主義者を支持し、其結果が佐賀の亂となり、神風連の騷動となり月、萩の變となつて、遂に西南戰爭を惹起した。さうして結果は壯兵主義の全敗に終り、西郷隆盛の白刃となつて局を結んだ。

明治七年一月十四日には右大臣岩倉具視が赤坂の喰違で征韓論者の襲撃をうけたが、馬が駭いて、馬車と共に濠中に墜落したので纔に免るることを得た。明治十一年五月十四日には岩倉、木戸と共に非征韓論者の巨頭と目された大久保利通が、西郷の心醉者である島田一郎及び其一味の爲に、麹町紀尾井坂の下で暗殺され、不平士族の妄動は此頃から徴兵問題を離れて、政黨運動に轉じた形がある。

チンゴイストの兇刃

西南戰爭から日清戰爭に至る十數年世人の視聽を聳動せしめた暗殺事件は區々であつて、その動機を作つた問題も一でないが刺客の頭腦を通じて流れたものは、要するに國權主義 國粹主義の思想である。明治十五年自由黨の總理板垣退助を岐阜に刺さうとした相原尚褧にしても、明治二十二年二月十一日、文部大臣森有禮を暗殺した西野文太郎にしても、同年十月十八日、外務大臣大隈重信を外務省の門前に要して爆彈を投じた來島恒喜

にしても、明治二十四年五月十一日、行幸中のロシヤ皇太子ニコラスを大津に刺さうとした津田三藏にしても、凡そこれら刺客の頭腦を一貫して流るるものは國粹主義、民權主義の思想である。日清戰爭以後は此國粹主義、民權主義の思想に大陸を餌食とする資本主義の油がかゝつて、帝國主義の運動となり、對外硬、即時出兵の主張を常習とする所謂浪人組の發生を見るに至つた。明治二十八年十月八日には、韓國に閔妃の暗殺事件が起り、明治四十三年十月二十六日には伊藤博文がハルピンで朝鮮人安重根の爲に暗殺された。安重根の豫審調書には日清戰爭以來、日本の對韓政策が年々變化して、日露戰爭の後に至りその最初の聲明に反し遂に韓國を併合するに至つたことの不信不義が最も痛烈に而も理路井然として攻撃されて居る。それにも拘らず彼が伊藤博文を怨み、之に報復して快を一時に取らうとしたのは錯感の甚しきものと云つてよい。外務省畑の凶變には其後大正に入つて、對支外交の軟弱に憤慨した少年岡田の阿部政務局長暗殺事件がある。此事件が岡田の見事な屠腹によつて、他に連累を出すことゝなしに終つたなどは不可思議な位なものである。

日露戰爭の前後となつては國民の思想も漸くにして進み、暗殺者の心理も昔のやうに單純ではなくなつた。ひとしく政治的暗殺といふ中に、内[illegible]になつて來た。明治三十四年六月十一日、伊庭想太郎が星亨を殺したのや、大正十年九月二十八日、朝日平吾が富豪安田善次郎を殺したのや、同年十一月五日、少年中岡艮一が、時の内閣總理大臣原敬を刺したのは、やがて來るべき狂信的暗殺の先驅ともいふべきもので、深く考へるものはこれらの事件に徴しても、夙に人心の機微に就いて、戒める所がなければならなかつたのである。

無政府主義者の五大暗殺

暗殺の中で最も恐ろしいのは狂信的暗殺で、錯感的暗殺のやうに當面の問題に直結して發するのでなく一種信仰の上から權力者を斃さうとする。昔はと暗殺の爲の暗殺である。西洋では十九世紀以來に此兇手に斃れるものが多く、最近にもフランスの首相クレマンソーはその難に遭つて危く一命を取とめた。殊にあげた四十五大暗殺の中で、個人的の怨恨によるのでなく、又當面の問題に關はるのでなく、暗殺の爲に暗殺されたのはフランスの大統領カルノー、アウストリアの女皇エリザベス、伊太利の皇帝ハムバート、合衆國の大統領マツキンレーなどで、その他は幾分でも、當面の問題に關係して居た。

千八百九十四年六月二十四日、フランスの大統領カルノーは

リオンの工藝博覽會に臨席し、式後歡迎の演技場に赴かうとする所を、伊太利生れの無政府主義者カゼリオといふものの爲に暗殺された。之が西洋で無政府主義者の主權者に害を加へた初めである。カルノーに取つても全く寢耳に水であつた。

是より先、無政府主義の學者ピーター・クロポトキンは本國を亡命して、フランスに在り、無政府主義宣傳の廉を以て千八百八十三年ジュール、グレヴヰーの政府から禁錮十ケ年、罰金千フラン、監視十ケ年の宣告を受けて居り、千八百八十六年一月には許されて出獄したが、佛蘭西政府の無政府主義に對する取締りはいよ〳〵嚴重を極めつゝあつた折柄とて、當面の問題に全く關係なしとは云ひ得ぬが、之を他の暗殺者の場合と較べて見ると、其間に著しい逕庭のあるのを發見する。

女皇の胸に三角錐の一撃

千八百九十八年九月十日、白皚々たるユングフラウの連峰倒に其影を水に浸し、紺碧の水聲なく、落ちてローン河となるゼネヴ湖の畔、今しもビユリペー旅館を出て雜の裳も輕やかに楚々として玉歩をトリツト・モントリユー行の汽船の波止場に運ばれるのは、美人の聞え高きアウストリアの女皇エリサベスであつた。

此時女皇の臈たけき姿を拜さんとて集まつた群集の中からカツカと進み出た一人の男、驀地に進んでアナヤといふ間もなく、女皇の鳩のやうな胸のあたりに突きあたると、身を飜へしてローン河の出口にある中の島の方に疾風の如く走つたが、間もなく警吏の手に捕へられた。

女皇には何の異常もなく波止場から汽船に召された。やがて汽船は岸を離れた。處が此時まで甲板に立つて、美しい湖水の景色に見とれて居られるやうに見えた女皇は急にパッタリと甲板の上に倒れた。供奉の人々が驚いて馳寄つて見ると、女皇の花の如き顏は何時の間にか色あせて、呼吸も全く止つて居る。驚いてコルセツトの下をしらべて見ると、果然！白い肌着には無殘にも紅の血が滲んで、やわらかい胸には細く鋭い三角錐で突いたらしい、小さい瘢跡が、深く〳〵殘つて居た。

男は名をルユージ、ルツシユと呼び、無政府主義者の一人であつた。彼は同志コートの手を逸したオルレアン侯暗殺の任務帶ひてゼネヴ湖畔に來たものであるが、彼の此地に著いた時には、オルレアン侯は既に去つて鹵簿の影さへ止めなかつた。彼は多大の望を囑せらる、同志に對して面目なく、脾肉の歎を洩して居る處へ、恰もよしアウストリアの女皇エリサベスが、多年の家庭的紛糾に疲れ切つた精神を此湖畔に備へるといふ知ら

を裝へて女皇の來るを待つて居たものである。

訊問者に對するルッシニの答へは頗る簡單明瞭なものであつた。曰く。『女皇は怠惰遊逸を事として尚ほ幸福であつた。私は終日營々として働きながら尚ほ不幸であつた。』と。その態度は殉教者が刑場に立つてお題目を唱へると同じであつた。社會主義者、無政府主義者は多く無神論者であるといふ。併し此の男などは三昧に入つたもので科學の立場などは全く忘れてしまつて居たらしい。

合衆國の三大暗殺

イタリーの皇帝ハムバート一世はヴイクトル、エムマニエル二世の長子で一生涯の中に三たび刺客の見舞を受け、最後にその毒手に斃れた。尤も帝は刺客の難ばかりでなく、若い時にはアウストリアとの戰爭で、危く其の一命をカスドザの野に失はうとしたこともある。千八百七十八年に帝位を襲ぎ、其年ナポリに於いてパッサンと呼ぶ發狂者の爲に危く暗殺されようとした。千八百九十七年には或る無政府主義の爲に圖られたが、之も運よくその難を免れ、千九百年七月二十八日に至り遂にブレッシと呼ぶ無政府主義者の爲に暗殺された。

種の操作に、奴隷の解放者として今も尚ほ國民の尊敬に入る火を點じて居るアブラハム、リンコルンである。時は千八百六十五年、南軍の形勢は日に非にして、四月四日にはリッチモンドに孤立したりし將軍が北軍に降を乞ひ、十四日にはアンダーソン少將が勇ましくサムター要塞に入城式を行つた。其夜である大統領リンコルンはワシントンのフォード座で、靜に觀劇に耽つて居たが、ジョン、ワイクス、ブースと呼ぶ俳優が突如棧敷に現はれて『壓制者の末路は常に斯くの如し』とラテン語で呼びながら狙擊した。リンコルンは重傷を負うて倒れ其翌朝擧國痛惜の裡に絶息した。ブースの徒黨は直に捕へられ、ブースはヴアヂニア州の或る穀倉の中で兵士の爲に銃殺せられた。之は思想上の狂信による暗殺ではなかつた。合衆國に於ける第二の犧牲者は大統領ガーフイールドで、彼は千八百八十一年の總選擧に當選し、三月四日就任式を了し七月二日ワシントンのステーションに停車して居る處を、獵官運動に望みを失したGuiteauといふものの爲に背部を刺され、重傷を負うて九月十九日といふに逝去した。之も無政府主義者とは全く關係のない事件であつた。第三の犧牲、大統領マッキンレーは千九百年の總選擧に再選せられ、三月四日就任式を了し、其年の五月ニコ

ヨク州に開かれた南米大陸大博覧會の招待をうけ、九月の初め同市に到り、六日その歡迎會に臨席した處をツオルゴスといふ無政府主義者の爲に拳銃を以て二發まで狙撃せられ、十四日の朝に至つて絕命した。

ツオルゴスは幼少の頃、自分の影にも恐れるといふほどの臆病ものであつた。尤も彼は天性虚弱で、初めからその生活の能力を缺いて居た。長ずるに及び甚しく其境遇に不滿を抱いて居たが、一たび無政府主義の理論をきくと、非常なインスピレーションを以てその說に隨喜し、果てはその熱心なる信者の一人となつた。此日大統領は洽く民衆を接見したので、ツオルゴスも豫め大統領に謁見を申出て置いた。いよ〳〵ツオルゴスの番となつた時、群衆の中から一人の跛が大統領の前に進出た。跛はイタリー人であつた。その姿態が餘りにおかしいので群衆は思はず哄と失笑した。此騷擾の爲にツオルゴスの計畫は少しく遲延させられた。而も彼は少しも焦らず落つき拂つて大統領の前に進出したが、その無邪氣な子供らしい態度には何人も彼に一點の疑を挿むものがなかつた。その時彼の左の手はさながら負傷でもしたかのやうにハンカチーフでシツカリと包まれて居た。大統領は早くもそれに眼を著けて、彼に負傷のことを尋ねようとする一刹那、[illegible]と、凄然たる音響と共に、マツキンレーは其場に倒れた。

アンキサンダー二世の弑逆

ロシアは暗殺や、陰謀の本場のやうに云はれて居るが、帝王の暗殺されたのは嚴重な意味でアレキサンダー二世一人あるのみ、ピーター三世やポール一世が殺されたのは、宮廷の紊亂によるもので、國民とは關係がない。ニコラス二世は今の虛無黨派に殺されたといふことになつて居るが、その眞想はまだ明かでない。

アレキサンダー二世は人も知る如く當時宮廷を團繞する貴族、僧侶の猛烈な反對を排して農奴の解放を斷行し、有名な革命家のアレキサンダー、ヘルツエンが亡命先のロンドンで發行して居た『コロコル』をして、一時半官紙の如き形を呈せしめたほどの聰明な天子であつた。然るに帝の力を以てしても累代宮廷に根を下して來た貴族、僧侶の勢力は一朝一夕にして之を拔くことが出來なかつた。ロシアの宮廷に蟠屈する貴族、僧侶どもは神聖同盟以來、國家の利害休戚に關せず、ドイツの官僚と結託し、露土戰爭の終局には見事にドイツのビスマルクから背負ひ投げの一手を喰ひクリミアに於ける三十二萬の犧牲をし[illegible]

[illegible]ふものは後者の實行は急なるとかの見れは或る過激な革命家の[illegible]
世界の大勢に順應してロシアも貴族や僧侶の故國を棄し、國民の自由を確保せよといふ程度のもので、之等の革命家は皆ドイツと提携することを欲せず、フランスと同盟して、ドイツに復讐すべしと主張したのであるが、宮廷の貴族どもは、共和政治のフランスと提携することが何となく氣味悪く、自分の權勢でも失ふやうに考へてドイツの官僚に組つた。

農奴解放の英斷によつて民間の進歩主義者からロシアの光明そのもののやうに仰がれたアレキサンダー二世も、外交問題に於いては國民と貴族との間に板挾みとなり、結局は國民を失望せしめ反動的にその怨府となるやうなことになつてしまつた。殊に當時の官吏が、帝よりも、寧ろ貴族、僧侶の意を仰へんとして行つた、嚴峻苛酷の檢閲政策及び改造運動の壓迫は、最初の期待が大きかつただけに民間の進歩主義者を失望せしめた。かくして千八百八十年代のロシアは暗澹たる不安の空氣に包まれて居た。

千八百八十一年三月十三日、ペトログラードはアレキサンダー二世の即位二十五年祝賀の饗宴にときめいて、春未だ淺き雪の中を祝賀の爲參内する貴族や、僧侶の馬車で賑はつて居た。

[illegible]、歸途ニコラウイツチ大公宮に入へ、皇妹[illegible]カイロナの宮を訪うて非常な歡待を受け、二十分にして[illegible]途に就かれた。

皇帝が儀表堂々として今しもカザリン運河にさしかゝつた時、一人の青年は堵列した拜觀の群集を分けてツカ／＼と馬車の方に近づいた。守衞の騎兵は驚いて彼を誰何しようとする刹那、ハンカチーフに包み持つた爆彈は突如として投付けられた。近侍十五名はバタ／＼と雪の街上に倒れ、馬車はその後部を破碎された。硝煙に紛れてニユースキー街の方に逃走しようとした青年は忽ち捕へられて縛に就いた。

暗殺者は名をニコラス・イウノウツチ・リザコフと云つた。

アレキサンダー二世は、幸にして微傷だも受けなかつた。リザコフの就縛に心を許した帝は、輕卒にも馬車を出て、親ら爆彈破裂の跡を點檢しようとされた。剛毅なる彼は、滿面に怒れを御んで何事かを呟きつゝ、十五人の近侍が倒れた慘澹たる現場に臨まれた。

ちやうど其時、群集の中から第二の暗殺者が現はれ、帝の脚下に向けて爆彈を投つけた。憐むべし、帝を始め二十人ばかりの侍從は再び爆彈を亂れて街上に倒れた。硝煙の消え去つた後、

何といふ悲慘！鮮血は斑々として雪を染め、苦悶の聲は絲の如く續いた。

帝は近侍の兵に抱き起された。變をきいて馳付けたミカエル大公に『宮殿へ――余は其處で死ぬ』と呟くやうに云つた。帝は人事不省に陷つたまゝ冬宮に運ばれ、約三十分間にして絶息された。第二の暗殺者は名をグリーブエスキーと云つて、ポーランド人であつた。

若しアレキサンダー二世が農奴の解放を行つた勇氣を以て、百尺竿頭更に一歩を進め、宮廷に蟠屈した貴族や、僧侶の勢力を芟除して置いたならば、世界で此國が社會革命の先驅をなすやうなことは恐らくなくして止んだかも知れない。何の途一度、社會革命の難關を經由すことが、人類共通の運命であるにしても、ロシアはモツト手際よくそれを經由することが出來たかも知れない。ロシアの革命が、如何に難産であつたかといふことは、それが一時に二重の革命を經過したことによつても察せられる。ケレンスキーの革命は即ち宮廷に蟠屈するドイツの勢力を一掃し英、佛の資本を背景として、ロシアを商工本位の共和國にしようといふので、實は列國が百年も昔に濟ませて居る政治革命であつた。續いて起つたレーニンの革命は、ケレンては、收拾しきれぬほどに疲弊して居たから起つたもので、國のまだ一度も體驗せざる所のものであつた。人間が胎内で十ケ月の間に永い〱進化の歷史を經由して來るやうに、ロシアは短い間に二段の革命を經由した。

それにしてもアレキサンダー二世の時、貴族、官僚の徒が國家の利害休戚を無視してまでも、クリミヤ戰爭で背負ひ投げを喰はされたドイツに執着し、利害の一致するフランスと提携することを氣味惡がつたのは、今日列國の資本主義政治家が、モウ何時までもイギリスや、北米合衆國のやうな大資本主義國家に縋るべき時勢でなくして、ロシアの承認を躊躇し、ロシアとの提携を恐れて居る事情に似たりや似たりといふべきではないか。

尙ほ最近の出來事として世界の人心を寒からしめ、カザリン女皇事件以來の大悲劇と稱せられて居るセルビアの革命、アレキサンダー一世及び皇后ドラガ暗殺の顚末を細叙し、侍臣の殘した一穗の燈が、オブレノウツチ王朝を破滅に導いた場面を語出でんには頗る興味あることであらうが、それは他日に讓ることとする。

ラインよりマインへ

林　久　男

一、七峰(ジーベンゲビルゲ)
二、ライン溯航
三、ギースバーデンよりフランクフルトへ
四、ウユルツブルクよりローテンブルクへ

自分たちは暗いごつ/\した道を重い行李を提げてすた/\と歩いた。氣味の惡い道である。時々叢かけなどから佛蘭西の守備兵がにユつと出て來る。

ライン河畔のボン市に樂聖ベートーヹンの生家を訪れて、驚異と感激に深く浸つた自分だちは、戒嚴令の布かれた不穩なる其町を去つて、名だたる七峰(ジーベンゲビルゲ)を負へる景勝の閑地ケヨーニヒス・ヰンタアに其夜を過ごさうと、ライン橋畔の電車に飛びのつたのは、もう夕闇に灯が瞬きはじめた頃であつた。ラインの右岸を暫く走つてドルレンドルフといふ驛へ來ると、急に乘客は悉く電車から引きおろされてしまつた。この邊一帶に街は戒嚴令が布かれてあるので、夕の六時以後は總ての乘物の運轉は絶對に禁止されて居るのだといふ。

詮なく降りたものの、それからは二三哩の道をとぼ/\と歩かなくてはならない。雨後の水溜が、濘かる田舍道をいよ/\險惡にしてゐる。初めはわい/\賑やかだつた男女の群も、次第に前になり後になつて、あとには自分と詩人Bの外には、ケヨルンの某會社の管理人だとかいふ中年の男だけが道づれだつた。自分が時々行李をおろして息をつくのを見て、

「私もお手傳ひして擔つてあげたいのは山々ですが、某會社の管理人が外國人の赤帽をして、あとで心附けを頂いたなどと世間に知れると、どうもをかしいですから」なとと、妙な皮肉を其男は云つて居る。やがて岐れ道へ來ると、數人のをなごが暗い中にさわめいて居る。聞けば、病家を見舞ふ尼さん達が道を失つて困つて居るのだといふ。時々遠方で喇叭の音が聞える。

全く夜襲の列にあるやうな淋しさである。

漸くたどりついたケョニヒスヰンタアの町は、まだ宵の口であるのに、街は眞暗で死んだやうにひつそりして居る。人つ子一人通らない。時々青い服の巡邏兵が靴を鳴らして通つてゆくばかりである。世が世ならば此の紅葉の好季にはどんなにか雑閙する七峰下の遊覧地も、又何とい物凄いふ緊張ぶりであらふ。何れの宿屋もすつかり締めきつて、ただ三軒だけ開かれて居るそれも、今は佛兵に占められて居るのだといふ。詮なくその一軒のエストファーレン・ホーフといふのに投じたが、全く陣營下の假寝のやうで、夜中幾度も喇叭の音や、巡邏の馬蹄の響きに夢を破られた。

北斗七星に象(かたど)つてか、七峰高く空を突くジーベンゲビルゲは、童話的景勝に富む大ラインの沿岸にあつても、特に展望の雄偉を誇り得るものである。此町の直背には、七峰の盟主たる「龍が巌(ドラッヘンフェルス)」が苔むす古砦の廃墟を頂き、大河に裾を洗はせて居るのも雄々しい。昔その洞窟に棲める龍の族は道ゆく人の血を吸ひあきて自らの火氣に酔ひ、終にジーグフリードに退治されると、その血が此一帯の地を潤ほして、こゝに醸される葡萄酒は「龍の血(ドラッヘンブルート)」とて特に芳醇なものとたゝへられて居る。

その「龍が巌(ドラッヘンフェルス)」やそれに對した「ペーテル山」に登るには來鐵索車の設備もあるのであるが、今は訪ふ人も稀であるので何れも運轉を停めて居る。詮なく馬車を雇つて、うしろの谷を迂回して「龍が巌(ドラッヘンフェルス)」の勝を探ることにした。

空も突きぬけるやうに晴れわたつた小春日の朝を、馬は散り敷く木の葉を踏みながら静かに登つてゆく。御者の鞭が澄みきつた空氣に高鳴る毎に、展望は次第にひろがつて、ラインの透りが刻々延びてゆく。眼をあげると、谷を隔てゝ左には「ペーテル山」右には「雄鹿が岳(ヒルシュベルク)」一は朝日をまともに浴び、一はそれを背にして、燃えるやうな秋の錦を着飾つて居る。詩興頓に到つてか、Bは若き瞳をかゞやかして高らかに詩句を吟誦して「吾等の春は滅びない!」と昂奮の聲を放つた。

對岸の小市も次第にはつきりと姿をあらはして來るが、周囲に並ぶ七丘も各々趣ある廃墟を載せて、絵巻物をくるやうに刻々隠顕極まりない。太古の森を思はせるやうな落ち葉の深い中を暫く登ると、つひに「龍が巌(ドラッヘンフェルス)」の頂上に達する。そこには自由戦争の記念のゴシックの尖石柱(オベリスク)や、珍しい方石材の鐘楼の跡や、かのケョルンの大伽藍の爲切り出した石坑の名残りもあるが、其の絶頂に魔の角の如く高く異様に聳える古城趾の小庭に立つて遠く眼を放つた展望の壮観は、何の言葉をもつてあら

はし得よう！ げに、ライン右岸随一と推されるだけあるが、殊にこの秋晴一碧の大觀は、たゞ恍惚として眼を走らす外は無い。

千仭の斷崖に臨む脚下には、巨龍の如き大ラインが秋の日を一杯に浴びて、廣野の果から果へと伸せるだけ伸して光つて居る。その行くて遙かの烟靄の中にはケョルンの大塔が玩具の如く小くほの見える。稍近くはボンの全市、眼下の對岸にはゴーデスベルク、ルングスドルフの町々。上手の河中に見ゆる伯爵島、尼島が恰も鴛鴦の浮いて居るやうに見える先には、ローランズエック、ウンケルの突角が、薄光る大河の水を狹くさしはさんで居る。

背後には「七峯」の峯々各々秋の裝ひを凝らして、鮮やかなる秋の中空に迫つて居るのも胸を躍らしめる。この天と地と、往く水と、聳える山と、この大自然の參差複雜のうちに、何といふ大なる調和と交響とが支配して居ることであらう。これが只偶然や移り氣の形成とどうして思はれよう。そこに大なる生命と叡知と攝理とをどうして否定することが出來よう。それにしても此の河を隔てた民と民、國と國との永き爭と憎しみとは、どうしたことであらう。この樂園の如き下界に於ても、今尚ほ馬蹄の響きに夜な夜な人の夢は驚かされつゝある。興亡數千年

の人の歴史を映して今も尚ほ昔の色に流れて居るさまには、うたた吾人の冥想を悠久のかなたへ誘はずには措かないのであつた。

饜かぬ眺めに別れて、下山の途につくと、馬は落葉の堆い径を靜に走つて、刻々吾々を人の世へ引きおろしていつた。

自分等はデュッセルドルフから既に二日路もラインの沿岸を騙つたのであるが、これから上流マインツ迄は尚ほそれ以上の里程を溯航しなくてはならない。併し前宿の梨の畠に散る秋は、ラインの舟行には最も選ばれたる時期と云はれて居る。

ライン共和國設立の實行きは日に日に急になつて、佛人の教唆と相俟つて、分離派（セパラチスト）の陰謀は愛國の士をしていよ〳〵時局の危急を思はしめるに至つて來た。而もバイエルン地方に於ては、ルーデンドルフやヒットラアを主謀とする所謂復辟派の擧も遠からじと云はれて、吾々の旅の行先も頗る暗澹たる有様であつた。

船場で暫し汽船を待つて居ると、上流の數日前の強雨の爲か、黒濁りの河水は岸を氾し、刻々溢れ高まつて來る波紋は、そゞろに時運の急をも思はせるのであつた。その濁つた水の上を、やがて一艘の白い船が恰も白鳥の如く靜かに近づいて來た

が、いよ〳〵其船に乘るにも、佛領黑奴兵の嚴重なる檢閲を要するのであつた。それでも船は心地よい設備で、その甲板に立つて眼をあげると、眉間には例の「龍が巖」(ドラッヘンフェルス)が脅すやうに聳え立ち、其背後に折り重なつて立つて居る峯々も、船の進むにつれて刻々姿を變へつゝあるのも美しい。先に瞰おろした鷲鷹の如き二島の間を通ると、右岸の丘上には神斧に成つたやうな高い石門が、蔦につゝまれて隆然として居る。その昔騎士トッゲンブルグが其戀人を待ち憧れたといふのも此あたりであらう。リンツ、アリエンドルス、アンデルナヘと溯るに從つて、左岸には黄に染まつた葡萄の山が限りなく續いて、この土地の豐かさを示して居るが、港々の寺や祀堂も各々其時代時代の特長を示し居るのも雅趣がある。尙ほ兩岸の目ぼしい高嶺には必ず城砦の跡が見えて、古來フランケンと、ローマンと、ゲルマーンとの落ち合つた此地方が如何に激しい攻守爭奪の中心となつたかを思はせて居る。而も其壘壁や尖塔は、今は青苔深くとざして、蔦蔓の生ひまとつて居るのも、城滅びて山河在りの趣が深い。例へば右手には、ラインエック、ブロールエック、アンデルナハ、左手にはアリエンフエルス、ハンメルシュタイン等指呼に遑もない。更に谷々からはアール、ギード、ネッテ等の川が、恰もゲヨーテの「メヘメット」の詩にあるが如く母河に注ぎ合しては永遠の旅へと急いで居る。空は麗かに絕好の[illegible]はあるが、行きかふ船の數も勘なく、たま〳〵流れを徂[illegible]ものも、何れも佛旗又は蘭旗を揭げて居る。一體にこの邊[illegible]筋は最も傳說に富んだ處で、一々その名物をほぐしつゝ觀てゆくやうな氣がしてならない。その昔バルバロッサ皇帝の頃、聖アポリナールの首をケヨルンへ送る途中、何故か突然船がとまつてどうしても動かないので、詮なく兎ある小祀堂におろしてそこに供養の爲めに建てたといふ寺もある。又中世賊衛の屆つた頃は、岩上の城壁より蜂の巢を投げて蜂攻めに惱したといふ砦壘も見える。又あれほど葡萄や、泉や、戀について美しく歌つた女詩人カルメン・ジルヴが好んで逍遙したといふモンレポスの城址は、ロマンテイックな木立の陰に蒼然と蔽ひかぶつて見えて居る。その昔、ローマ人が初めてラインを渡つた處とか、シーザアが初めて架橋をしたとか云はれて居るのも、河中の城も狹い此のエンガースのあたりである。

ニーダアヴエルトの島を過ぎると、川は急に右へ折れて、こゝに注ぎこむモーゼル川と大ラインとの挾む三角洲の所謂「ドイッチエス・エック」には、ギルヘルム一世皇帝の雄偉な大像が、馬首を北に向けて遠く睥睨して居る。

そのうしろはもうコブレンツである。船橋(シノクノ・ブリュッケ)の下の淺瀨で上

謎するとき、兩殿より甘累兵の嚴けてた[illegible]があつた、サノ[illegible]ら見てゐると、堂々たる紳士や窈窕たる淑女が、恰も虎狼の前でも通るやうに小さくすくんでは滑りぬけて行く姿は、何といふみじめさであらう。

ホテルの窓からは、河を隔てゝ遙かの上に聳えるエーレンブライト・シュタインの堡砦が折からの夕日の光を赤々と浴びて居るのが見える。そこにも今は佛蘭西の三色旗が高く夕風に飜つて居る。嘗てゲョーテが訪れたことのあるラ・ロッシエの家の名殘りも今其近くに在るといふ。彼岸へ通じる船橋(シッフス・ブリュッケ)は汽船が上下から來る度に、中を左右に開いて船を通す。その間通行の人車は、ちぎられた橋の兩端におとなしくぢつと待つて居るのであるが、下ゆく水は蒼黝と、瞬きそめた燈火の影を映して、溢るゝばかりに流れて居る。

夕暮の町をそゞろ歩いて王城の前へ出ると、赤石造りの壯麗なる其舊城も、今は佛兵の屯所となつて、其旗が風に飜つて居る。そこの廣場や大通りには、そここゝに市民がイんで、何をするともなく、只何等か不安なるものを豫期するやうに小聲に囁いて居るばかりである。何れの店ももうすつかり閉ぢて、燈も無い小暗い街にうよ〳〵群がる市民の間を、巡邏の兵が靴音高く、眼を光らして通るのも何とはなしに氣味が惡るい。ホテ々へ歸つて食堂に入ると、[illegible]ごと遙にだつて美の興じながら奥の[illegible]へ消えてゆく。

その夜も高い蹄の音に吾々の夢は幾たび破られたことであつたらう。

ライン舟行の興趣は寧ろ此のコブレンツより上流にありと云つていゝ。これからはいよ〳〵兩岸の山も迫つて、河の迂曲も瀨の速さも加はつて來る。ここからビンゲンを經てマインツまで溯るにも尙ほ一日を要するが、其間にも兩岸の峯々に仰がれる城砦堡壘の廢墟は一々送迎に遑もなく、黃に廣がる葡萄畑も、いよ〳〵秋の色を深くしてくれた。「愛が岩(リーベン・シュタイン)」とて左手に聳えてゐる雙峰は「不和の兄弟(ファンロリッヘ・ブリューダア)」と仇名されてゐたり、「鼠城(ブルグ・マウス)」と「猫 城(ブルグ・カッツ)」とが相睨み合つて居るのも面白い。殊に民謠に名高いローレライの岩のあたりは、奇巖高く峙つて流れも狹く急になつて、その對岸のオーバーヴェーゼルなどと共に、何となく深いローマンティックの色を漂はせてゐる。浪風強きゆふべ、この巖頭に夕日を浴びて、金色の髮を梳るといふ乙女の妖美は蓋しライン少女の象徴であらう。河に名高いカウブに近い河中の礁上には、大小十數の塔をのせた六角形の所謂「ファルツ」が、恰も巨船のやうに浮いて居る。十

四世の初めルードヰヒ王によつて建てられたもので、獅子の面像が南を睥睨して居るが、かの自由戰爭の當時、ブリュヘル將軍が獨軍を渡したのも此處であるといふ。右手に見える「鷲城」は、如何にも鷲の巣を思はせるやうな要所に聳え、ラインシュタイン城の圓塔が、こんもりした密木を冠り蔦葛を深く着こんで巖上に立つて居るのも奇觀である。

國と國、民と民との古き爭ひを語つて居るこれ等數十の堡砦の間には、ゴシック式やローマン式の塔をもつた教會が、山を負ひ水に臨んだのどかな村々町々を飾つて居る。かの傳說に名高い「鼠の塔」がしよんぼりと立つて居る小島のわきを通ると、川は「響が岩」の突角を大きく曲つて、左手に高く巨大なる國民紀念塔が、炬火を揭げるゲルマーンの姿に空を突いて立つて居る。美しい段層的な縞を描いて琥珀色に廣がる葡萄山を、河を隔てゝビンゲンのあたりから見晴らす眺めは、ラインの全長にわたつても、最も色彩に富んだ明るい景色の一つであらう。

これから上流は又河幅も廣く水もゆるやかに、處々に小島などを浮べて居るところは、如何にも大河の相があつて、支那の湖河でも思はせるやうな趣がある。折から薄暮が迫つて、雨さへしと〳〵とおりて來たので、いよ〳〵東洋的な情趣を添へて來た。

武裝せるライン河を前後三日にわたつての溯航もいよ〳〵終りに近づいた其日の夕暮れ、突然船長がやつて來て、乘船券へ證明のスタムプを押してくれた。聞けばこれから上陸すべきマインツも對岸のビーブリッヒも、ヰースバーデンも、まだ一帶に戒嚴令が布かれて居るが爲め、夕刻六時からは街上の通行は一切嚴禁されて、犯則者は直に捕縛されるので、宿屋を求める途中にも誰何されたらば此のスタンプを示さなければ危險であるからと云ふのであつた。まだ戰線の中に居るやうな氣がして何となく若緊張して居る。

日はたつぷりと暮れて、十五萬の大都マインツは恰も喪服でも着たやうに黒く目の前に横はつて居る。船を降りて街道を行くと薄暗い町角では着劍をした警備兵が不意に人を驚かす。又しても今夜は巡邏兵の蹄の音に夢を破られることかと氣遣はれたが、投じた宿は一切佛蘭式で、夕餐に添へたワインの甘美は流石にラインの名を羞かしめなかつたので、久しぶりに其琥珀の醍醐味に陶然とした二人は、黒く流れる水を瞰下しつゝ、心ゆくまで大ラインの賦を誦した。

この市はラインワインの輸出地として有名な外に、かの活版の祖グーテンベルクの生地として其銅像や博物館などもあり、

シルレルとも縁が深いので、その名を冠した劇場にはシラーの手に成つた其像が立つて居る。紀元五世紀頃から其存在を認められて居た大伽藍も、風雨多年、或は兵燹にかゝり、或は兵站に利用せられ、幾たびか修理と改築とを経た現形を観ると、そゞろに此ライン河畔の民の崎嶇たる運命を思はせるのであつた。

この市こそ、マイン河がラインに注ぎこむ形勝の地を擁し、今もかはらぬ活氣ある商業地ではあるが、古城址にある古代博物館には、殊にローマンやフランクの遺物や前史時代の發掘物に注意すべきものが尠からず蔵せられて居る。廣いカイザア通りの美しい並木ごしに、白くそゝり立つクリスト寺の高塔を仰ぐ眺めもこの町にはふさはしい感じを興へて居る。

それから一時間里程を隔つたキースバーデンは、この上流のバーデンバーデンと並び稱せられる欧洲屈指の大温泉場であるが、山水自然の勝景は彼に譲つても、人工的設備の點では寧ろそれを凌いで居ると云はれて居る。

ギルヘルム街の小暗い並木町には、内[illegible]多くの市民浴客が屯して、その間を警備の邏卒が縫つて歩いて居るのは、この保養地も尚ほ戒厳の中にあるかと、何となく物々しく緊張して來る。

この並木街より東へかけて殆ど全市の三分の一以上の面積を

占めて居る大公園には、[illegible]、旧[illegible]ある二つの大なる噴水をはさんで左右に[illegible]外に、こ[illegible]ルレルの[illegible]前に控へた[illegible]や、詩人ゲーテ[illegible]ンシュテツトや、晩年をこゝに送つたファイタークの像などが、正午に黄に紅に燃えて居る木立の陰がくれに隠顕して居る。後庭の池水をかこむ巨木の森の美しさは、真に秋の心をしみじみと味はせてくれるが、森閑とした木立の枝を[illegible]る音も遠から静かである。

先に一旦落着いた奥まつたホテルに中食をしたゝめると、食堂の客は何れも特選以外の外国人で、而ももう秋も更けたこととて、多くは金の捨て場に腐心して居るやうな富豪や、[illegible]い老夫人や御隠居たちで、自分等には片違ひをして来たやうな感じを興へるのであつた。

食後博物館や、議事堂や、堂寺などを見まはつて後、王城（シュロッス）を見舞はうとすると、その入口の柱には「ライン共和国成れり」といふ厳めしい廣告が大きく掲げられて、その前に集つてゐつとそれを読む市民の顔は、何とも云へぬ沈痛な色に塗らされて居た。

それから郊外の「哲學者の道（フィロゾーフェンヴェーク）」や「ネロが峯」の方へと志したが、今は交通機関もとだえて居ると聞いたに、「ゲョーテの

故郷」へ一刻も早くと心が牽かれたので、その不安な娯樂郷を急いで立去る爲に停車場へと車を驅つた。が、そこはもう佛蘭西の時間が支配して一時間おくれてゐたり、佛貨のみが流通してゐた。

フランクフルト行きの汽車が滑り出した時は、もう西の空の殘紅も夕闇に包まれて、右手に薄光るマイン河も、淡く夢のやうに透つてゐた。

やがてグリースハイムの小暗い停車場へ着くと、戒嚴地帶の境界なので、これから先へは汽車は連絡しないといふ。又しても一と面倒かと餘儀なく降りようとすると、突然、失業者らしい無賴の徒が十數人一散に車内へ侵入して來て、いきなり荷物を引つかゝへて行かうと揉み爭ふ。次の村の停留所まで荷物を持たせてくれと云ふのであつた。併し一旦手渡して、そのまゝ闇に消えられてしまつたら取り戻しようも無い物騷さで、それは兼てから警戒されてゐたので、ケョルンから來たといふ隣席の一紳士夫婦と、いち早く馬車を傭つて飛びのつてしまつた。他の多くの旅客の男女が非連絡の十數町を闇に紛れて急いで歩いて居るのが、恰も夜襲の退却のやうにも物凄く見えた。

やがて旅券や荷物の檢閲所へ近づくと、あたりは嚴重に鐵條網をめぐらして、一人々々虱殺しに調べられて居る。暫くして二人の檢閲官が、暗がりにとまつて居る自分等の馬車の戸口へやつて來たので、早速旅券を見せてやると、倒かに持つたまゝ手燭で一寸覗いて、

「日本字わたし讀めない」

と笑ひながら返してよこした。

いよ〳〵フランクフルトの町へ入つたのは、もう八時近くであつた。一夜の間代一千八百億マークは邦貨にしてもさう廉くはなかつたが、エキセルショールといふに投じて、しつとりと細雨に濡れる夜の町を見おろした時は、これがゲョーテの町——わが詩聖が百數十年以前に初めて此世の光を見た處かと思ふと、そゞろに胸もときめいて來るのであつた。

人口五十餘萬を有し、ハンブルクに次ぐ獨逸の通商市としてマイン河畔のフランクフルトには幾多の博物館や、畫堂や、堂宇や、紀念碑や、遊園等觀るべく訪ふべきものも數多いが、殊に此市が吾人の憧憬と興味とを強く牽くものは、鹿塹街（ヒルシュグラーベン）のゲョーテの生家と、「レョーマア」と呼ばれた市廳の跡とである。

『よき人の入れる場所こそ
聖（きよ）くあれ、幾百年の後までも
彼の言葉彼の行は子孫にひゞく』

とゲョーテ自身が云つて居る所、彼の生家に悉く入ることは
彼の詩と生活とを再び吾人の胸に浮きかへらすことである。

中古はその邊の町はづれにあたつて、鹿を飼ふ圍さへあつた
と云はれる狹い鹿圍街(ヒルシュグラーベン)のとほりへ入ると、彼の自敍傳で乃翁と
[illegible]とか呼ばれた家の特殊な外觀が先づ吾人の眼を强く射
て來る。

新しく塗りかへた表壁の色のけばけばしさや、受附にゐる波
蘭出とかいふ婦人の寄進の强請などは、少しく幻滅を感じさせ
たが、土間の左手の「青い室(ブラウエ・シュトゥーベ)」と呼ばれた食堂兼母堂フラウ・
ラートの居間に入ると、流石に上品な其色調が吾人の心をすつ
かり落ちつけてくれる。中央に大きな食堂が四つの古い椅子に
圍まれてあるが、幼時の詩人が、父母や妹と靜かな團欒の食を
とつたのも此處であつた。向ひのいたづらな三人兄弟に唆され
て、面白半分に母の大切な皿や盃を往來へ投げ出したのも此あ
たりであらう。その奥の臺所には、昔ながらに食器や勝手道具
が整然と置かれてあるが、フラウラートの獻立帳を見ても、彼
女の几帳面な又行き屆いた性質を思はせるのであつた。

『家の中で私の目を一番牽きつけたのは、父が前室を飾つた所
の多くの羅馬の光景であつた。――そこに自分は毎日大演技場(コリセオ)
や、サン・ピエトロの廣場(ピヤッツア)や、サン・ピエトロ寺の內部や外部
か、[illegible]

とゲョーテ自身が其自敍傳において云ふ所の[illegible]は
二階の取りつけにあるが、これこそ幼いゲョーテの胸に[illegible]に深い
印象を與へて、後年彼が以太利に[illegible]れさせたほど深い憧憬を持
つやうにな[illegible]た素地を作つたものである。[illegible]はむくつけな父
親ゝこれ等の版畫や彼地からの大理石や自然物の蒐集に就いて
は、いつも機嫌よく說明をしてくれたり、チョギナッテイとい
ふ以太利生れの老人を相手に己が羅馬紀行を以太利語で丹念に
書き綴つて居たといふ。

その以太利の老人を想はせるやうな好々爺が吾々を親切に案
內してくれる。しかも、どこで習つたものか、日本語の片言(かたこと)が
話せるので、頻りに日本人をなつかしがつて、おぼつかない言
葉で說明してくれるのも嬉しい。

二階にある三つの室は當時佛軍を率ひて此の市を占領してゐ
た少尉トラン伯が暫く寓居してゐたといはれて居るもので、そ
の好みで描かせた多くの繪畫で飾られて居る。佛蘭西の占領と
いふやうな事が、百何年に一度づゝ繰り返されて居ることか
と、目前の場合と思ひ合せて吾々の心を暗くするのであつた。

裏庭に面した一室は所謂音樂室で、そこには多くの古い樂器
の中に、ゲョーテ自身が彈じたといふ豎琴があつて詩人の[illegible]

しい趣味を忍ばせるのであつたが、それこそ國内に五指を屈する珍品であると老人は特につけ加へた。

三階の中央の室には父親が丹精して集めた新舊の畫が、所謂均齊的（シムメトリカル）に列べられてある。「古い酒もうまいが、併し新らしい酒もよく出來ない事は無いから、」といふ主義のもとに、父のカスパルは當時の名ある畫家を聘して盛に新作を描かせたといふ。中でもレムブラントに私淑したトウラウトマンや、和蘭風の靜物を好んで描いたユンケルや、ダルムシユタツトから態々喚んだといふゼーカツツや、森や牧場を好んで描いたヒルトなどの案外な畫風が其中に際立つて見えるが、これ等が幼い詩人の稚心をどれ程深く養つたことであらう。それに接して父の書齋といふものがあつて、疊みこめるやうに出來た質素な机が置かれてあるが、その隅の小窓からは時々父は愛息の出入をそつと監視したものであるといふ。兩親の寢室のかげにある小部屋こそ、今より百七十五年前に我が詩聖が呱々の初聲をあげた其處である。ワイマールのゲョーテハウスにある簡素な臨終の室と思ひ合せて、その間に展がる八十二年の永い意味深い生涯は、繪卷物の如く吾々の頭を通るのであつた。そこには詩人の大理石像が永遠に緘默の口をむすんで居る。

その上の屋根裏には若きゲョーテの書齋にあてられた一室があるが、まだ組髪を垂れた二十二三の小詩人が燃える瞳をかゞやかして其古い机の上で「ゲョツツ」や「エルテル」や「クラギヒョー」や「フアウスト」などの稿にペンを走らしたことかと思ふと、そゞろに創造の際の不思議さも想はれるのであつた。「この古い家の中へ新しい一つの世界を作り出してくれた」と詩人が其德をたゝえて居る其祖母の遺物である有名な人形芝居の舞臺は其隣室に置かれてある。詩人の幼な心に演劇に對する深い興味を植えつけたのも、彼自身がダギツトがゴライアスを討つ一くさりを演じて、途中で白（せりふ）を忘れて大縮尻をしたといふのも、この小舞臺であつたかと、種々の追想に思はすほゝゑまれた。

そこを下りて裏の中庭を通ると右手に「ゲョーテ博物館」といふものがある。シユメラアやコルベなどの手に成つたゲョーテの諸像や筆跡の外にその家族、君公、知己友人等の肖像や遺物が所狹いまで置かれてあるのが、詩人の生長や、生活や、戀や、惱みの雰圍氣をそのまゝ示して、彼の詩作を裏づける色々な資料を與へてくれるのであつた。

その懷想に耽りながら、あの大なる「たましひ」を生み、それを育んだその不思議なる家に盡きぬ名殘をとどめて、其通り

からパートマン街を靜に歩を運ぶと、もうそこには「レョーマア」と呼ばれた有名な市廳の高い塔がそゝり立つて居る。左右の建物をつなぐ高廊の下をくゞると、パウルの廣場の左手にはパウル寺院と、「一致の紀念塔(アインハイツデンクマール)」が秋の空を突いて聳えて居り、右方は即ち幾代もかゝつて十二樣の異なれる建方に成つたといふ由緒ある「レョーマア」そのものである。

その地下室(ケラア)で土地の誇りのワインを添へて中食をすました後、古色を帶びた穹窿(ゲヴエルベ)の下をくゞると、さゝやかなる中庭(ホーフ)がある。中央のヘルクレスの噴水の跡や、螺旋形の階塔をはじめ、四圍の建物を仰いでゐると、この廳堂の永い歷史がまざ〳〵と思ひ出される。その昔、幼きゲョーテがよく守衛の目を盗んでそつと忍び入り、驚異の眼を見はつたのも此建物の中である。カイザア・トレッペと呼ばれる廣い階段を昇ると、そこには壯麗な皇帝の間や、諸侯の間や、會議室などが、紫の壁布や名だたる肖像をもつて並んで居る。「此の紫の壁布や異樣な花彩の金線で飾られた選擧室は自分達に異敬の念を起させた」とゲョーテ自身も告白して居る。

十五世紀の初葉から近代に至るまで幾度か修理と增築とを經たこの一廓は、後期ゴシックから、獨逸ルネッサンスや、バロツグ式に至るまで近古の有らゆる建築的樣式を綜合して居るが、殊に[illegible]「レョーマア・ベルク」の[illegible]をはじめ、レョーエン・シュタイン、フラウエン・シュタイン等の各廓の前面を一瞬のうちに收める眺めは、吾々の懐想を此市と此一廓の光榮ある過去へと、いつとは無しに誘し去るのであつた。――即位式の後には牛鹿を屠つて全市民の饗應にそなへたといふこの廣場には、名酒を噴かして無料接待をした噴水や、十六世紀の半ばに成つたといふ正義(ゲレヒチヒカイトブルンネン)の噴水がそばだつて居るのも昔さびて居る。

フランクフルトに於ける數日の滯在は此の「ゲョーテの町」をすつかり自分達に親しくしてしまつた。靜に流れるマイン河の新古の橋の數々、その岸邊の散歩道、ドームやレオンハルト寺院の高い塔、昔ながらの古くさい趣ある小路を拔けると、辻々に立つゲョーテやシルレルやルタアやグーテンベルク等の馴染ある人々の像までも、問へば物言ふかと思はるゝ程の親しさを感じさせてくれるのであつた。

併しバイエルン地方に於けるルーデンドルフ等の一揆の噂はいよ〳〵吾々の旅を急がせたので、更にマインの上流ウエルツブルクへと道をいそいだ。

ウエルツブルクは四圍に丘を負ひマインの清流に臨んだ、小じまんまりとした靜かな町である。町のまはりに蹄型に古木鬱蒼たる遊苑を帶びて居るのも美しいが、今丁度秋酣はに、それ等の木々が黄の雨を降らして居る。晝後は電車さへ停止して居る上に、恰も日曜のことで、ひつそりかんとした街を、男も女も黒い禮服を着けて寺詣りにゆく姿などが、いよ〳〵此町の古い錆びた色を濃くしてくれる。宿の女が氣をきかせて湯たんぽを入れてくれた稍寒い一夜をあかすと、今にも泣き出しさうな空模樣であつたが、壁や塀の剝げちやけた小巷を通つてドームや、大學や、王城などを見歩いた後、古マイン橋の袂に出ると、川を隔てゝ目の前にマリエンベルクの舊砦が高く聳えて居る。彼のモツアールトの生地ザルツブルクの景をそゞろに想ひ起させる。橋の左右ところ〴〵に諸聖徒の像がどつしりと置かれてあるのも、この町の歷史を思はせるにふさはしい。

ルイトポルトの博物館に此地方の遺物の珍しいものを貯したのち、王城のうしろの禁苑の中をそゞろ步くと、しつとりとした秋の空氣と、うす黄に濡れた木の葉の色と、この町のもつ歷史的背景とが、秋の精をそゝるやうに、しみ〴〵と心にしみ渡つて、恰も聖地でもたどるやうに靜寂な氣に浸されるのであつた。

獨逸に於ける古い町々は、それ〴〵の歷史的背景と其地方色とによつて、各々際立つた特色を示し居る。ブレスラウ、ダンチヒ、リユベツクなどは勿論、ハルツの麓に散在して居るゴスラア、ハルバアシユタツト、ブラウンシユワイグや、チユリンゲンの森を圍む。イエーナ、ワイマール、エアフルト、アイゼナハ、マイニンゲンや、バイエルンにあつてはミユンヘン、ニユルンベルクをはじめ、バンベルク、ウユルツブルク、レーゲンスブルク、アウグスブルクや、バアデに於けるハイデルベルク、カールスルーエ、フライブルク等、一々その特長を擧げる迄もないが、併しタウバア河畔のローテンブルク程、舊いものを其儘に昔ながらの姿でそつくり吾々の眼の前にひろげてくれる不思議な町が外にあらうか。

町をめぐらす古い市壁や、濠のあと、處々に黒ずんで立つ市門の數々、寺院やドームや議事堂や名門の私宅までが、毀らさ損はれず、幾百年のさびをもつて、恰も發掘されたもののやうに列んで居る。

金鹿（ゴルデナアヒルシユ）ホテルに着いたのは夜晩だつたので、翌朝南面の窓を押すと、眼下に連ねるタウバアの谷の展望は、先づ吾人の心を魅せずにはおかない。白鵞の遊ぶ流れの彼方に散在する水車

小屋の方から雞の聲の聞えて來るものも鄙びて珍しい。

赤い屋根瓦や破風をもつた古い家の列なつて居る此町の逍遙は、直に人の心を、傳説に富めるローマンテイツクの中世へ案いていつてしまふ。高い市壁の要所々々を貫く幾多の市門のうちでも、レョーダア、コボルツエル、シュピタール、ブルグ、ウエツブルクといふやうな名を冠すものは、依然として昔ながらの姿に立つて居る外に、町角や辻々を飾つて居る數々の古びた塔は、問へば昔語りもしてくれさうな親しみを見せて居る。又プレョーンラインや、ヘルテリツツヒの雅趣ある噴水なども、この町の長い過去を偲ばせて居る。

谷に臨んだ西南の急坂ば葡萄畑や美しい並木に飾られて、酢德利(エッシヒクルーグ)の丘から城山園(ブルグ・ガルテン)の方への逍遙や、その城山園よりの夕暮の展望などは、他の何れの町に於ても得がたい味を具へて居る。

聖ヤコブ寺のバシリカをはじめ、この町の數々の寺院が何れもゴシック式であるのに引きかへて、市民の舊家の樣式は主にルネツサンス式によつて居る。議事堂前のマリエンの藥師屋や、シュピタル街のヘゲライタア家の中庭なども特別なるものではあるが、殊にヘレン街の舊家シュタウト家は、既に十五世紀の初め羅馬王ヘンリイや、カール五世の御宿にも充てられたとかで、その邸内の井や欄干は三百餘年の封脈に包まれて、遠い昔の猿の石像に彫られた水月の紋章(ワッペ)と共に、この家族の古い榮えを示して居る。

併しこの町の特色を最も濃厚にするものは、議事堂(ラートハウス)や市場(マルクト)を中心とする幾多の傳説や其名殘りの行事であらう。今も尚ほ聖靈降臨祭(プフィングスト)の日曜には「牧人踊り(シェーフアータンツ)」が土地の若い衆や娘達によつて、昔ながらの樂器の音につれて賑やかに催される。更にその翌日の所謂「晴れの祭酒(マイスタートゥルンク)」の行事は、その紀元を知ることによつて、いよ〱吾々を浪漫的世界へ引き込んでゆくのである。

想ふ、三十年戰爭の當時、將軍テイリイは此のローテンブルクを陷れたが、終に此市を灰燼に歸し市長其他を死刑に處することを命令した。これを聞いた市長ベツオルトの妹は、その鬼將軍の膝下に身を伏して、哀泣のもとに命乞をしたので、これを聞いたテイリイは、若し何人か三リトル半の大杯(フムペン)の酒を飲みにする者あらば聽さうといふ約束をした。すると前市長ヌーシュは、身を挺して其の大杯を息もつかずに嚥みほし以て全市を火と死より救つたといふ。

それ以來この記念日には議事堂内の皇帝室(カイザーザール)に於て莊嚴なる式を擧げ、その史實を一々實演し、鐘や、オルガンや、武器の音

さへ昔のまゝに繰り返されるが、爾來幾百年、未だ其大杯を鯨飲した市長は二度と出現しないといふ。その代り今日でも、議事堂前の高樓（昔の飲堂今の郵便局）の大時計が晝の十二時を打つと同時に、その兩側の窓が開いて、左にはテイリイ將軍の、右手には市長ヌーシュの等身の人像があらはれて、その大杯を飲みほす式が毎日繰りかへされて居る。葡萄の美酒の痛飲に全市の生命を救つたのみか、その偉名を幾世紀の後々までも唄はれて居るヌーシュの如き快男子こそ、この土地が生むにふさはしいヒーローであつた。

尙ほ其紀念日には、廣場や、古門や、濠あとにわたつて、幾百の假裝武士によつて其史實の野外劇が行はれる。テイリイ將軍の入城や、市民の娃の哀願の場や、ヌーシュの光榮ある鯨飲や、その頌德の大奏樂に至るまで、多くの緊張した場面が觀る人の心を三十年戰爭の昔に魅し去るのであるといふ。又今も毎金曜日の午後には二人の士卒が議事堂の鐘樓に登つて、古式によつた喇叭の吹奏をする。

穢いなりをした白髮痩軀の老人に導かれて、小暗い狹い階梯をたどつて漸く其の議事堂の高塔を昇りつめると、そこにひらけた望觀は又無く大きく美しく味深いものであつた。町の家々の赤い屋根は眞晝の日をまともにうけて眞に「赤城（ローテン・ブルク）」の名を躍如たらしめて居る中に、そこゝの市壁や、古塔や、古門や堂などのさびた灰色が、この町の古さを裏づけて居る。眼を放てば、秋の大野が見果てもつかず廣がつて、それを縫うてタウバアの流れが白蛇のやうに透つて居る。かくして野も、谷も、丘も、町も、昔ながらの姿に、横はつて居るが如く、こゝに住む人達も、何等新しいものに冒されず損はれず、昔ながらの鐘を聞き喇叭を聞いて其淳朴な生活を續けて居るのである。彼等にとつては「晴れの豪飲（マイスタア・トゥルンク）」の名殘りや、鐘や喇叭の古い響きは、一切迫した時局の云々よりも、より親しい、大切な、缺くべからざる心の糧である。ラインや、ルーアの沿岸の民が塗炭の苦に呻吟して居る現在に、そのラインの支流マインの上流の此タウベルの谷近くに、昔ながらの姿、昔ながらの民の現存して居ることは、一種異樣にも、懷しくも思はせるのであつた。

ルネツサンス式の玄關の名殘りや、風變りな螺旋階をもつた議事堂の奥の皇帝室（カイザア・ザール）には、三十年戰爭の壁畫をめぐらし、例の紀念日に「晴れの豪飲（マイスタア・トゥルンク）」を演ずるといふ正面の臺壇の前には、その三リトル半入りの大杯が大事さうに安置してある。大刀や鉾の林立して居る傍らには、六つの市門の爲の大鍵や、怖ろしく嚴重な錠を裝つた府縮のやうな鐵の貯金箱などが安置されて、人の心を五百年の昔へ飛ばしてしまふ。

それに隣つた昔の法廷には、判官、陪審、辯護士等の席も其儘殘つて居るが、それから暗い石階を下ると、其地下は恐ろしい石牢で、首枷、手桎、石臼などの責め道具も其まゝ置かれてある。殊に第一代の市長トプラアが謀叛の科によつて、投ぜられた一室は、通氣の爲の小孔があるだけで、黑闇陰濕な石房である。傳へ云ふ、その時トプラアの一味のものは十數町隔つた某本邸の地下から私かに此石房へ向けて隧道を穿つたが、將に達せんとした直前に彼は此中に怨をのんで牢死してしまつたといふ。

控への間には歴代の市長の像が掲げられ、會議室には例の「晴れの豪飲（マイスタアトゥルンク）」の場面の畫があつて、酒豪の救世主ヌーシュは如何にも酒好きさうな好々爺に見えるが、一國の爲とあつてポアンカレーの前ならば尙ほ三四杯は傾けさうた顏をして居る。

この廣場の東側にある最古の議事堂は、その後飲食店や踊り場になつて今は歴史博物館であるのも面白い。壁には其當時の食ひ物の値段表などが其儘貼つてある。士農工商の各室があつて、中でも商工の看板には、蠟燭屋、鞍屋、肉屋、車屋、煙突屋、鉋刀屋、樽屋、鍵屋など各々奇拔な趣味をこらして原始的な無邪氣さを見せて居る外に、古本、古樂器、古武器などにも其各々の特色が見え、暖爐の扉や紋章で飾られた古い階段までも一々當時の生活を素直に見せてゐてくれるのも嬉しい。

近年此の町が所謂、發見、される迄は、中古以來殆ど忘れられてゐたまゝであつたといふ。が、今も尙ほ四周に昔ながらの高い市壁をめぐらして居る此の町は、住む人の心にもそれがめぐらしてある程に、一切のものが不思議なばかりに古いものを持ち續けて居る。クリンゲン門のあたり、小窓口を眠さうに半取をやる老爺の太い煙管からのぼる青い烟は、現下のこの國の運命と思ひ合せると餘りに隔つたのどかさではあるが、それでも城山閣の木陰には國難に殉した人々の墓碑が白骨のやうに白くたま〱しく光つて居るのであつた。

大地も搖らぐ

大地は搖らぐ

正宗白鳥

杞人の憂ひは後世の物笑ひになつてゐるが、物事を憂ひだすと際限のないものである。合理的の憂ひと非合理的の憂ひとの差別はハツキリつくものではない。大地のゆらぐのを憂ふる我々は、天の落ちるのを憂ひた杞人を愚昧視して、自己の賢明を誇ることは出來ない譯である。

震災後二三ケ月して、私は小田原から箱根の方へ行つて、小田原城趾の巨大な石垣が崩れて、大きな松が根こそぎ倒れてゐるのを見て、「大地に根を張れ」といふ戒を守つてゐても、大きな動搖に出くはしたらどうにもならないことに思及んだ。登山電車の線路が滅茶々々になつて崖へぶらさがつたりしてゐるのを見ると、科學の力の薄弱なことを考へないではゐられなかつた。先日はまた鎌倉へ行つて圓覺寺建長寺などの大破壞のあとを見て、去年の大地震についての驚きを新たにした。建長寺では一番奥の堂宇が一つだけ形を留めてゐて、その日は、一人の僧侶と二人の人夫とが、何のためだか、天蓋を竿でつついたりしてゐたが、瓔珞も落ちた天蓋が斜めにダラリと下つて、埃まみれになつてゐるのを見ると、見窄らしくて有難味はなかつた。幾百といふ大小の佛體が、周圍に取片付けられてあつたが、鍍金が剝げたり首がちぎれたり、足が折れたりしてゐるのを見てゐると、それ等が平生世人の祈願禮拜の目標になつてゐたのが滑稽に感ぜられた。一度大地がゆらぐと、獨逸のカイゼルも建長寺の佛像と同樣になつた。

私は今、ストリンドベリイの遺稿だといふ「基督」を、森田久道氏の翻譯で讀んだのであるが、これには、ネロなど、自己を恃んで高慢な人間の見苦しい末路を、極めて簡勁に表現して、神に身をまかせてゐる信者の死にも動かされない平和を讃美してゐる。この作者は老いてから、さういふ平和を感じてゐたのであらうが、彼れが「天上には榮光神にあれ、地には平和」と自分で叫つたのであらうかと思ふと不思議でならない。

地球全體から云へば些細な動搖に過ぎないあのくらゐた地震によつてさへ、我々は極度の不安を感じさゝれたのだから、古代に、我々の祖先が地震洪水天候の不順食物の缺乏などの大災厄に會つて、どんなに脅かされて、どんなに悲んだか、想像も及ばないものがあつたであらう。そして、幼稚な祖先の頭腦に浮んで來た神といふものは、今日我々が鬼と名づけるものと同じやうに、人間を苦めるものであつた。それで我々の祖先は神々の御機嫌を取るために苦心した。舊約聖書を見てさへ、人間は神に親しむよりも神を恐れてゐた。キリストなどによつて神を愛の權化として說かれだしてから、人間は安心の出來るやうになつた譯だが、これも一つの迷妄だつたことが感ぜられるやうな時代が來かゝてゐる。さうして、敬神愛國忠孝節義などは古いものとして亡んで、人心はいよ〳〵險はしくなつて、地上に一層人類は今の混亂時代が來るのではないかと思はれる。

日本の新聞では、何とかといふ[illegible]に[illegible]日本の[illegible]をケナしてゐるが、西洋から先きに[illegible]するかも知れない。迷信でも、何かの信仰をもつてゐる間こそ、安んじて生を營んでゐられるので、信仰が皆無となつたら、世の中は早晩混亂するに極つてゐる。混亂極まつたあとに、新らしいもつと進んだ世が出現するかも知れないが、いかなる世になつても、人類は、本來一度はげしく揺れたら根こそぎ倒される地上に蠢めいてゐる生物なんだから、絶對な平和は有つてゐないのである。他の生物のやうに無智であるか、あるひは非常な迷信を抱いてゐるかしない限りは、絶對な平和は得れないのだ。

忘却と無智

小川未明

忘却といふことがなかつたら、この人生はあまりに傷ましいものでありませう。苦痛、恐怖、一切のものを、人は月日が經つにつれて忘れるので、笑ひもし、喜びもして、この生を樂しむことを得るのであります。

去年の震災當時のことを、人々は、いま忘れ顏に、華かな風して、若い女等は、この頃は、輕裝をして、足許も飛ぶやうな歩るきつきで、歩るいてゐます。人間は、無智だからといへばさうも言へるのであります。

この地上に、住むといつても、長くて、八十年、九十年を出ないのが人間の命です。その間に、大抵の人は、戰爭、地震、大火、病氣、それ等の怖しい經驗と思ひ出を持たないものはありますまい。二十年にして死し、三十年にして死し、四十年にして死し、そして、眞に、天命を完ふするものこそ、却つて、少ないのを知れば、人間の一生は、不安そのものである氣がされるのです。

しかし、忘却があればこそ、人は、涙にぬれた眼を洗つて、また笑つて、明日の太陽を仰ぐことができるのでした。

海王星の光りは、この地上に達するまでに、幾年か、かゝることをきゝました。また、空に輝く星の中で、遠い星は、いづれも、幾年か、幾月日かを地球に達するまでに、光りの旅に費すのだと、小供の時分、學校できかされた時に、どんなに悲壯に感じたでせう。

火星の中に、住んでゐる人間は、もう、地球の上に住んでゐる人間よりは、ずつと古い年代を有してゐることや、また、この宇宙には、あの太陽のやうな、太陽が他に幾つもあり、この地球と同じやうな遊星が、他に幾つもあるときかされた時には、茫然とせざるを得なかつたのです。

地球の最後は、惑星との衝突である。そして、その時は、も

う一人殘らず死んでしまつて、また、私達の人生といふものはなくなるのだ。たとへ、さうでなくとも、幾億年の後には、この地球は、熱を失つてしまつて、あの月のやうに、冷たく、光る一塊の死んだ星となつてしまふのだときかされました。月は、曾てこの地球のやうに、草木が青々として、その地上を掩ひ、動物が住んだこともあつたのだと言ひます。

私は、また、紀元前に於ける、この世界の文化についてきゝました。しかし、それ等は、いまや滅びて、沙漠の中に埋れたり、また、全く知られずに、地中に眠つてゐるものも多いといふのでした。

どうして滅び、また、形も、影も、なくなつてしまつたのか、もとより人間同志の戰爭のためもあつたでせう。自然の衰微といふこともあつたでせう。けれど、地震、洪水、噴火、海嘯、さうした、自然力の一瞬の襲撃によつて、忽ちにして、影を消してしまつたものも多いのであります。

私達は、いまや、自然に慣れてゐます。そして、平和な生活になれきつてゐます。たとへ、去年のやうな地震があつて、この東京だけでも二十萬人からの生命を失ひ、隅田川の水が、死屍にて埋められ、河水は、兩岸の火焰のために熱かつたといふ話より、怖しかつた事實に遭遇しても、いまだ一年ならずして、大衆の人々の心は、眼前の事態のために、過去の實感から、遠くに遠ざかりつゝあるのは是非もないことです。

最近、再び、地震の襲來せんとする兆候がないでもないと、それとなく、學者が報告をしてさへ、「なんで、自然のことが分るものか、天氣豫報を見ても、當らなさ加減は分つてゐる。また、大地震などやつて來て、たまるものかえ」と、いはぬばかりの顏付をしてゐます。

思ふに、人生は、これでいゝのかも知れません。これでこそ、破壞に打勝つて、建設し、また、建設して行くのでありませう。

けれど、私は、こゝに、翻つて、去年の九月一日のある光景を眼に描きます。

「慘劇刹那前の被服廠の光景」に題した、繪はがきを見た人はどんな氣持を抱くであらうか、そのことでした。

若い女も、小供を負つた母親も、また、男も、婆さんも、居れば、或は蒲團を抱へ、自轉車に荷を積み、被服廠の廣場の一隅に避難をしてゐる光景です。

この時、その人達は、時を移さず、其日の晩には、一人殘らず白骨となることを何うして考へることができたでせう。

また、この日の朝は、この都會では、どこの家でも、親子兄

弟が、いつしよに、睦まじく膳について食事をしたでありませう。

幼ない者は、毎日のやうに、我儘を言ひ、年頃の娘は化粧をし、また、仕事のある者は、それ〴〵昨日の仕事のあとをするために取りかゝつたにちがひない。

大地の揺れたのは、この瞬間でした。

この都會は、悉く火の海となつた。そして、その日の晩方には、親子兄弟ちり〴〵に別れて、そのうちのある者は、死に、また命あるものは、鐵道線路について、あてなく、この都會から逃げたのでした。中央線や、武藏野線には、十里先まで、その夜のうちに、この黙々として、逃げて行く列がつゞいたさうです。

去年の地震程のものは、たとへ陸地に於てゞはなくとも、海中に於て、たえずこの世界にはあるやうに思はれます。一夜にして、火山のために、地の下に埋れてしまつたものは、[illegible]イの街ばかりとは限らないのである。

人間は、忘却しやすく、また、無智なるために、たゞこれをしかく平常は、怖れてゐないだけです。そして、所有欲のために、權力慾のために、人間同志で爭闘をしたり、掠奪し合つたりしてゐます。もし、彼等が、この不可抗の自然力に思ひ至つたならば、相互が、殺し合ひ、奪ひ合ふことの愚を悟るでありませう。

私は、曾て、繁華な日本橋を通り、銀座を歩るきながら、恐らく、この綺麗な街は、私の死後も、かうして賑かで、また、美しからうと思つたことがありました。何ぞはからん。いまは昔の面影すら、もはや残つてゐないのです。呼、明治の東京はいま全くないのでした。

――二四、六――

神經病時代

長田秀雄

この頃の新聞に、葡萄牙の電報で、不思議な豫言が出てゐた。それは、同國の有名な豫言者が、發表した言葉でありま

今後二十年間は、大きな地震や、暴風や洪水が頻出するであらう。さう云ふ天變地妖のみならず、國際戰爭や、革命が引續いで起るであらう。そして、世界中に狂犬病が蔓延し、その結果人類は世界の犬を鏖殺するであらう——と、云ふのである。

何と、諸君、恐ろしい話では御座いませんか。

この電報が新聞の一面に大きな活字で出てゐたのを、見たとき、折角、靜まつてゐた神經に、一種の暗鬱な不安を感じたのは、あながち、私だけではありますまい。無論、よく考へてみると、こんな謠言は、世界のどこかには、毎日、幾つとなく造られてゐるのでありませう。そして、なるべく新らしい、なるべく人の神經を刺激する問題を呈供しやうと云ふ新聞紙の立場から、さもつともらしく紙上に傳へられるのであります。

だが、諸君、これがたとへ根もない謠言であるとしても、私どもは、これを一笑に附し去る事が出來ませうか。

から云ふ謠言の内にも、今、我々の魂を怯やかしつゝある世界不安の片影がうかゞはれないでせうか。御覽なさい。このわづか十音信かそこらの電文の内に、人類の恐怖の詩があらはれてゐます。世界に狂犬病がひろがつて、人類が犬を鏖殺するところなどは、ウエルスあたりの小說に描かれてゐさうな恐ろしい情景ではないでせうか。

現代の人々は神經だけで動いてゐます。歷史の過程は、我々を情慾の時代から、そして意志の時代から、たうとう、今日の神經の時代に導びいてきました。

疑もなくこれは世紀末の現象です。人類の一つの文化が將に終らんとする時に現はれてくる現象であります。

我々の生活は人工的にもう完成しかゝつてゐます。美食と安逸と、そして淫蕩とはもう我々の内臟を病ましめ、神經を疲勞させてゐるのであります。

階級の闘爭と國際間の紛擾は益々深刻になりつゝあります。人口過剩の結果、生活難は我々の心の裡に、氣味の惡い暗影を投じてゐるではありませんか

結果、今の時代は、あらゆる人間が神經病にかゝつてゐる時代であります。科學も哲學も、藝術も政治も皆、神經病的であります。いや、我々の生活全然が夜陰腐骨に燃ゆる燐火のやうに蒼白い神經の炎でいろどられてゐるのであります。

人生は此處に於て、薄氣味の惡い妖怪譚になつてしまいました。

さう云ふ時代の片影が、たしかにこの種の謠言の内に現はれてゐるのであります。

かう云ふ諺言は、やはり、人類の素直な直覺から出た豫言であります。少くとも私は、さう信じて疑はない者であります。

然るに不思議な事には、かう云ふ世界不安が襲來するときには、また、我々の世界に、天變地妖が屡々現はれるのであります。

これを歴史に照らして御覽になると、諸君は少くとも私の言葉をうなづかれるでありませう。

文化爛熟して世紀末の兆候が、現はれた時代に大洪水や、大地震や、または、大飢饉がしばしば襲來してゐるやうです。天地人の感應を信じて、星を占つた古代人の氣持も、あながち荒唐無稽として拒ぞける事は出來ないと、思ふのであります。

現代を御覽なさい。諸君、我々は、まづ、慘憺たる歐洲の大戰亂を經驗しました。つゞいて、露國の革命があの大戰亂に誘發されました。かと思ふと、露國の大飢饉、東京の大地震と、恐るべき天變地異が殆んど連續的に人類を怯やかしてゐるのであります。

大本教のやうな不思議な迷信が、一世の大問題として、我國で論ぜられたのも、人間の神經が病的になつてゐる立派な兆候であります。

もし、本當に葡萄牙の豫言者が云つたやうに、かう云ふ世界不安が今後二十年間も續くとしたら、果して人類の狀態はうなるでありませう。

蒼ざめた顏面に、惱亂した大きな眼を輝やかして、狂犬を撲殺しつゝある我々の將來が、大都會の暗澹たる廢墟の内に現はれる情景は現在に於ては、恐怖の幻影であります。が然し、もし、それが事實として現はれてきたらどうでせう。

全たく考へただけでも、私は戰慄を禁ずる事が出來ないのであります。

無論、こんな荒唐無稽な空想に怯へてゐるのは、愚の極であります。然し、こんな荒唐無稽な空想の内にも、一種の暗示が現はれてゐやしないでせうか。

一寸先きは暗の世

近松秋江

――大地も搖らく――

よく、寄席で、落語のはなしに、氣の小さい男が地獄にいつて、閻魔の法廷で、お前はどうして此の世に（幽冥界）來たかと訊かれ、私は、彼の世にゐる時、氣が小さいのが原因で肺病になつて死にました。どんなことを氣にしたか。夜道を歩いてゐる時、よく人が鐵管に躓づいて死なゝいものだと思つたり、煙突の煙でお日樣やお月さまが煙つたくないものだといふやうなことを氣にしました。といつたやうなことを聞かされて笑つたことがあつた。私がその落語を聞いた時分は、東京市に水道が敷設される頃で、最早二三十年も昔のことである。

しかし、私は、今日となつては、落語家が笑ひ話しにすることが、必ずしも笑ひ事ではないやうな氣がして來た。勿論、煙突の煙でお日樣やお月樣が煙つたい譯はないが、氣の小さい者即ち杞人の憂として一概に笑殺することの出來ぬのは自然界の現象であることが、去年の地震以來犇々と感ぜられるやうになつた。

佛教でいふところの寂滅爲樂といふことも、つく〲と考へられる。實際此の世界は苦患と恐怖の世界である。翌日も亦た太陽が東から昇つて來るものとばかり安心してゐられないやうな氣がする。どんな機みで、地球が軌道を逸出しないものとも限らないし、或は太陽が燃えて無くなることがあるかも知れず又冷却して用を爲さなくかることがあるかも知れぬ。

私は時々思ふ。――これは、去年の震災がある前から――甚だ幼稚な原始的な好奇心のやうであるが、例へば柿の樹の如きあんな粗朴な枝にどうして、あんな甘美な實が熟するか。又は畑の土に莚草の如く莚つてゐる西瓜にどうして、あんな甘美な水を含んだ、子供の殊に喜ぶ鮮紅色の大きな果實が實るか。それは僅かに一例に過ぎないが、考へてみればみるほど自然界くらゐ妙味に出來てゐるものはない。自然は實に惠み深い。植物

學者は唯單に柿や西瓜の實る因果を科學的に說明することは出來る。又理化學者はその甘美なる味の成分を分析することが出來るが、それなら何故に自然界に斯の如き都合好き植物が生育するかといふ超自然の理由に至つては依然として不可解である。それは神の外は何人も知ることが出來ぬのである。しかし、神はないのだ。自然は盲目である。無意識である。

卽ち、盲目で、無意識なる自然であるから、人類その他の生物にとつて極めて惠み深いことも多くあるが、その反對に冷酷無慘なことも、何等の遠慮はないのである。柿や西瓜の甘美なる味を惠んでくれる不可思議も無意識である。その反對の冷酷無慈悲も無意識である。何人が地球と他の星との衝突の絕無を保證し得ようぞ。

さういつたからとて、明日は太陽が東から上つてくれないかも知れぬと、それを氣にして、その前夜自殺して待つてゐる譯にもゆかず、此の世に生まれて來たのからして無意識の出來事であつたのだ。釋迦のいはれたやうに寂滅爲樂は少しも早く望む所のやうでもあるが、さて死なれもせず、やつぱり生きられるだけは生きて居たいのが吾々の本音である。しかし、生きてゐる以上は常に憂慮と苦患とは前後左右に殆ど跡を絕たないといつてよい。

それにつけても思ひ起されるのは、やつぱり去年の九月の大地震のことである。最早大抵の人は、あの地震についてふまい、忘れようとしてゐる。けれども今日から段々年月が經過するにつれて、あの地震の記憶は却つて確實になり、長く後世の語り草になるであらうと思ふ。あの時以來地震のあるまで地震といふものを、さまで畏いものとは思つてゐなかつた。地震よりか雷の方が畏かつた。無論今日でも雷は畏いが、地震など少しも畏くはなかつた。地震、雷、火事、おやぢといふが、雷のほかは何れも畏くなかつた。するとあの地震に出會した。

それと同時に、これまで自然界に對して抱いてゐた確信——といはうか、迷信といはうか、——といふものが、大半崩れてしまつたやうな氣がする。何時どんなことがあるかも知れぬ。地震もあれよりもつと大きい奴が搖れるかも知れぬといふ脅迫觀念に襲はれてゐる。本誌でも度々私はいつたが、東京に住むことが甚しく不安である。地震ならば何處に行つたて爲方がないといふものもあるが、必ずしもさうではなからうと思ふ。この武相地方に比べて遙かに地質學上安心の出來る土地は他にいくらもある筈だ。それにも係らず東京に住んでゐなければならぬといふのは、何といふ因果なことであらう。私は今日でも二階にあんまり重い物を持つて上らぬやうにしてゐる。なるべく平家

に住みたいのだが、地震以前に借家してのゐたので、それも今のところ爲方がない。額のやうなものゝ掛けぬやうにしてゐる。安心してさういふことの樂めぬといふは實に不自由なことである。棚はあつても物を載せることを差控へねばならぬ。電燈は何時消えるかも知れぬから、私は、あれ以來提燈を用意した。私共、東京で下宿生活から直ちに安價な借家所帶に移つていつた者には、提燈などの用意はあらう筈はない。それが今提燈なども用意して置かねば、何時どんなことがあるかも知れぬといふ緊張した、不安狀態にならしめた。それは、今までの、やゝだらけてゐた生活に刺戟を與へて、氣を引緊まらしてくれたことにもなるが、年中不安な、緊張した、片時も帶を解いて足を踏伸ばして寢ることも出來ないといふのは、情けない次第である。私共は東京にゐな れば生活が出來ぬから東京にゐるのだが、財産あつて徒食することの出來る人間が何を好んで東京に執着してゐるのかと、毎時不思議に思つてゐる。

私共は、たゞ徒らに空想するばかりで、實現することは不可能であるが、實現の不可能でない人達が東京のやうな危險な土地に生活してゐることを常に不思議がるよりも惜んでゐる。何故、もつと他の安定な土地に移住しないかと。

吾々は、時々不慮の出來事を想像することはあるものだが、それは單に不慮の出來事として、それを[illegible]したゞけに止る。それ以上を深く考へることは、あまり無い。それは何故だといふことを考へてみても、大抵の場合唯單に考へてみるに過ぎないと同樣である。人間は何時かは必ず死なねばならぬものと百も承知してゐる。自分にもいつかは、その運命がやつて來ると、よく知つてゐる。それで居りながら、死の現實に面接した場合については、あんまり考へてみようとせぬ。尤も、そのことばかりを考へてゐたら、何も爲ることは出來ぬ、そこに人間生存の妙諦もあるのだらうが。この自然界の成り行きも、やゝそんなもので、實に吾々は一寸先は暗の世の中に生存してゐるのだ。吾々は爲方なく、その日〳〵の妄想に支配されて生きてゐるやうなものである。

（六月四日）

不安恐怖の一夜

上司小劍

類子の家へ泥棒が這入つた。「這入る」といふ言葉を其のまゝに、便所の掃除口から這ひ込んだのである。掃除口から甕の上へ板をわたし、それを渡つて、金かくしへ頭をにゆうと出した臭い泥棒の姿が目に見えるやうだ。

其の夜類子の家は、泥棒の所謂空巣であつた。類子たち夫婦は女中を連れて、市へ活動寫眞を見に行つてゐた。類子たちの住む郊外から、田園電車で市の西の端まで三里、それから市内電車で一里ばかり、混雑に押されたり、足を踏まれたり、乘りかへに手間どつたりして、一時間半ぐらゐはかゝる。活動寫眞見物もなか〳〵容易でなかつた。

其の活動は外國のある革命家の一代記のやうなもので、パリカアドや斷頭臺や、いろ〳〵のおそろしい道具立ての中に、花やかな革命家の姿が、勇ましく映し出された。しかし、それは其の革命家の姿を、花やかに勇ましく映し出すための革命で、民衆の幸福といふ大看板はどこへ行つたか、結局わからないことになつた。踏み躙にされて、或は死し、或は倒れ、或は傷つき、辛ふじて、無事に生き殘つた人の上に、たいした幸福は來なかつた。革命以前の社會と革命以後の社會とをくらべて、どツちがどツちとも言ひかねるやうで、たゞ不安と恐怖とのくたびれもうけに終つたやうであつた。

歸り路の電車の中で、類子はしきりにそれを考へてゐた。……あんな恐ろしい思ひまでして、チツとやソツとの幸福が來たつて、割りに合はないと思つた。よしんば、地上の天國がやつて來たとて、あの不安と恐怖との間に幾日かを過したら、自分のやうなものは、無事に生き殘つてゐても、地上の天國では何んの樂みも得られないで、神經衰弱のためにブラ〳〵してゐるか、病院生活をつゞけなければなるまい。ましてや、革命戰の犧牲になつて、死んだり傷ついたりした人々は、幸福を求め

て不幸を得たものだ。氣の毒でならない。少しの犠牲もなく、不安も恐怖もなく、棚から牡丹餅のやうに、寢て待つ果報のやうに、だまつてゐるうちに、靜かな足どりで、革命と幸福と平和な完全な社會とが、連れ立つて、足音一つさせずにやつて來てくれるのならよい。それでなければいやだ、いやだ。いやなこつた。自分は漬け物が好きだ。わけても大阪漬けが好きだ。しかし、あれを拵らへる時の、漬ける時の臺所の混雜と面倒とを考へると、たいして大阪漬もたべたいとは思はなくなる。しかし、せめて大阪漬けを拵へるくらゐの混雜と面倒とで、社會的大革命が來て、其の結果が幸福な人類の生活といふことになるのならば、辛抱もしよう。けれども、今夜見たあの活動寫眞のやうな、不安と恐怖とを經ての上の幸福と平和となら、もうもう幸福も平和もたくさんだ。御免〳〵。……

郊外の田園電車を下りてから、淸らな水の流るゝ、かなり大きな川の堤を十丁ほども歩かなければ、類子の家はないのである。女中と三人で其の長い堤を、松かさの多い松並木に添ふて、ゆつくりと歩いて行くうちに、類子は今自分の考へたことを夫に話した。女中は活動寫眞が豫期したほど面白くなかつたので、失望と眠氣とに襲はれて、歩きながら眠つて、夢を見さうな足どりをしてゐた。

「はゝゝゝッ」と夫は心快よげに笑つた。さうして、「あれは舊式の革命だよ。昔しの革命だよ。それにあの革命家の生活を花やかに勇ましく見せるために、民衆といふものが一そう下らなく拵へられてあるんだ。丁度昔の大勇士の物語を讀むと、昔しの戰爭だつて、やつぱり、それが主力でなければならない筈の雜兵といふものが、まるで、其の勇士の槍で突き殺されたり鐵棒で擲り殺されたりするために出て來るやうだが、實際はそんなものぢやない。革命家の生活を花やかならしむるために民衆が現はれたり、勇士の勇を示すために雜兵が出て來たりするのは、活動寫眞と芝居とだけで、昔しだつてやはり、民衆あつての革命だし、雜兵あつての戰爭だよ。將棊の歩と飛車や角との關係とは違ふからね。ましてこれからはね。……」と語りつゞけた。

「だつて、わたし、あんな不安と恐怖とに、幾日も〳〵襲はれるのはいやだわ。たとへ其のあとへどんないゝ世の中が來るにしてもいやだわ。」と、類子はまたそれを繰りかへした。

「今にもこわれさうなボロ家に住んでると、改築をしなければならない。社會の改築は、家の改築のやうに、其の間他へ引き移つてゐるといふわけに行かない。住んだまゝで改築するんだから、ちやんとこわして、ちやんと出來上るまでは、ほこりも

かぶるし、事によれば怪我ぐらゐしなけれやならない。其のごたくをいやがつてちや、結局其の家の自然にこわれる時、下敷きになつて死ぬばかりだ。」と、主人はまた調弄ふやうに言つた。

「わたし、下敷きになつて死んだ方がいゝわ。瓦を剝がしたり壁をおとしたりする中に、住んでるよりは、……たとへ其の後へどんないゝお家が建つにしても、こわすのが大變で、建てるのがまた大變でせう。壁が乾かなかつたり、建具が間に合はなかつたり、ゴタ〳〵して、それやあなた、大變よ。それより古いお家に突つかい棒でもして、住み馴れたまゝに住んでるのがいゝわ。わたし平和が好きなの。平和をもとめて、不安と恐怖とを引つ張り出すのはいや。このまゝ靜かに、間に合せでも、姑息でも何んでもいゝ、たゞもう平和が欲しいの。」と類子はしみじみ言つた。

「はゝゝゝ、全くだ。すべての人が皆類子さんぐらゐの生活が出來て、類子さんの家ぐらゐの家に住まへたら、何もそれを改める必要もないし、こわすには及ばんのだからね。しかし世の中には類子さんぐらゐの生活さへ出來ないものが多くて、それが一日〳〵と殖えて來るんだ。人口の殖えるやうに貧民が殖えるんだ。」と、夫もまたしみ〳〵言つた。

漸く家の前まで歸りつくと、類子は近頃發明された鐵錠前をば、小面倒な數字と數字とを合せて、コチ〳〵やりら開けてゐた。

「はゝゝゝ。面倒くさいことをやつてるね。僕はこの錠前とか、戸締りとか、それにこんな板塀や垣根なんか嫌ひだね。こんなものをすべて取り除いた家に、四方をガラス張りにして、ユウゴウのミゼラアブルの僧正のやうに、開放した家へ住みたいね。」と、夫はまた微笑つた。

さうやつて、戸締りを開けて家の内へ入つた時、泥棒がお先きに、戸締りとは關係なく、忍び込んだのを發見したのであつた。便所の掃除口が泥棒の入口になつたといふことも、血相かへて夜中電燈を振り照らしつゝ、廣くもない家の内を方々改め廻はつた夫が發見したのであつた。盜難品は鳩の鳴く音をする掛け時計一つきりであつたが、其の夜の一家の不安と恐怖とはとても客間の机の上で見る社會の不安と恐怖どころでなかつた。

戸締り反對者の夫は、便所の戸に、こつちからカキ金をかけて、掃除口から忍び込んでも、便所よりほかへは行かれないやうにするため、おそくまでガン〳〵と金槌の音を立てゝゐた。

なまづ

豊島與志雄

この頃のやうに屢々地震に見舞はれると、たとひそれがどんな小さなものであらうとも、度重るうちには、昨年九月のやうな大地震が起りはすまひかと、さういつた恐れが湧いてくる。そしてたゞ何かしら不安である。

さういふ不安さを、少くとも東京や其附近に住んでる人々は皆懐いてるやうである。話の間にもよくそのことが出て來る。然し、不安は不安であつても、そのまゝで皆落付いてゐる。別に慌て騒ぐ者もゐない。近いうちにまた大地震が起るかも知れないといふやうなことを、巷說に聞いてもまたは學者の說に聞いても、さうかなあといつた風な氣持で、不安は覺えながらも落付いてゐる。

それは、大地震などゝいふことが、今の人知でははつきり豫報出來ないことで、起るかも知れないが起らないかも知れないといふ不確かさのためでもあらうが、また一方には、さういつた大自然の破壊作用は、どんなに強暴であらうとも、決して殘忍ではないからである。大自然の破壊作用には意志がない。だから、人はそれに對して如何に恐怖の念を懐いても、それに反抗して切齒扼腕することをしない。

天變地異の中にあつては、吾々は皆平等に無差別に取扱はれる。各個人の運命は、偶然事に支配されることが多いけれどもその偶然がみな必然だといふほどにまで考へられる。凡て平等で無差別で必然だ。どうにも仕方がない、といふ風に考へられてくる。それほど天變地異は物質的で沒精神的である。

人は物質の世界の上に立つて生きてゐる。物質の世界を無視しては一日も生きられはしない。然し實際に於て、物質の世界の最大脅威である大地震などについて、恐怖は感じても案外落付いてる所を見ると、なるほど人はパンのみにて生くるものでないかも知れない。

人は事實ではパンによつて生きてゐても、實際の生きる感じは、パンによつての感じではない、生きるといふ感じは、もつと別なところにある。だから、全く物質的な天變地異に對しては、命を天に任せるといつた風な、泰然自若たる心境さへも持ち得られる。

然しながら、人はまた他方に、集團として生き、集團として考へてもゐる。天變地異は、この集團としての考への上に、最も大きな影響を與へる。そしてその影響が、個々の考への上に大きな影を投げる。その時各個人が感ずるものは、直接に天變地異そのものではない。天變地異によつて人の集團に投ぜられる波紋、對稱を人間とする不安や恐怖、或る精神的な殘虐な脅威、そんなものが感ぜられてくる。そして本當の恐怖時代が生ずる。

昨年九月の大地震當時に、吾々はその恐怖時代を直接に經驗した。そしてこの恐怖時代は、忽然として過ぎ去つたやうであるけれども、實は一時表面から姿を沒したに過ぎなくて、吾々の集團的生活の底の方に潜んで時機を狙つてゐる。

大地震がもし再來するならば、底に潜んでるその怪物が再び表面に躍り出るに違ひない。大地震でなくとも、何等かの機會には躍り出して來るだらう。さういふ點から云へば、吾々の生活は噴火山の上に立つてゐる。古風な比喩を用ゆれば、吾々の生活の大地の下には、大きな鯰が住んでゐる。

さて、その鯰を退治に出かける勇士が、次から次へと現はれて、吾々にその冒險談を聞かしてくれると有難い。平凡退屈な旅行談を、吾々は餘りに聞かされすぎてゐる。

想華

醉狸州七席七題

葛西善藏

友情

鞭影を見て馳るは良馬に非ず――といふ文句があつたやうだ。本當ぢやないですか。あなたには久いぢめられて、あなたの長い鞭を受けても、馳れないんだからなあ。無理ですよ。動物愛護會からいはせれば、あなたなどはひどく惡くいはれますよ。この老駑馬を鞭打つて、書けないものを醉拂はして喋舌らせるなんか、隨分と慘酷な話ぢやないですか。が、まあ仕方がないですな。僕も商賣、あなたも商賣さ。何とか甘く、この談話が活きて呉れるといゝな。

實は、今日は、いろんなことから、色々なことといつても事件ではないんだが、色々な氣持から、お喋舌りは御免蒙りたいと思つてゐたんでしたが、昨夜も御約束した通り、今日は僕の親父の命日だ。先月の命日の晩は、親父の命日を忘れて、喧嘩などをしたんで、大變氣になつて居りました。それで親父の命日を忘れないといふ心持から、今晩お喋舌り

の皮切りだけをいたします。親父も、長い間、二十何年の長い間、酒のことでは僕を叱つて呉れなかつた。その餘德とでもいひませうか、あなたによつて、醉拂ひの言葉が原稿になるといふやうなことは、僕としては親父に感謝したいのであります。

さて、親父の命日なんで、幾らか親父に敬意を表して、改つたことをいひましたな。もうこれでいゝんだ。後は何んでもないんだ。併し親父の位牌を弟共に預けてあるといふことが、僕の何時も大變心を痛めてゐることです。

話が固くなることは止めたい。久振りで、廣津の話でもしよう。この間「女性改造」から「友情」といふことについて聞きに來られたが、友情なんていつて、實に漠然たるもんぢやないですか。隨分つまらない問題を持つて來たものだと思つて、僕は答案を書く氣になれなかつたが、矢張友情なんてものは、大いにあるんですよ。「女性改造」の記者をひやかしてさ、僕は毛唐のことは知らんが、支那の方でいふと、「朋あり遠方より來る、亦樂しからずや」、孔子様はさういふ風にいつてあるが、又その作者は知らないが、何とか文句は忘れたが、手を翻せば雲、手を覆へせば雨かな。う、管鮑貧時の交り、此事今人棄つること土の如し、といふ詩もあつたやうに、支那人にも大變反對のやうな意味のことがありさうなんで、友情なんていふことは隨分難しいものと思ふ。殊に近代の——ご存じの通りの大變な生活なんだから、友情なんていふ意味のことは、中々難しい、難しくなつて來てゐる。そのことの內容については、僕にはお喋舌りが出來ない。それでつまらない話をしよう。つひ二三日前、「新潮」の合評會に僕も始めて招かれて行きました。僕は「婦人公論」の原稿の催促を受けてゐたので、今月はどの雜誌も讀んでゐませんでした。——いや、どの雜誌も讀んでゐなかつたといふんではない、極く僅かしか讀んでゐなかつたといふ譯です。それで、「新潮」の廣津君のものも、どうしても間に會はずに、讀んでなかつた。讀んだのは牧野信一君のものだけであつた。そんな譯で、初めて「新潮」の合評會

に出たんだが、僕としては、酔拂つてゐてよく分らなかつたが、佐野君の意見をいつた後のものでせう。それからさきのものが、大變長く列席者皆さんの話題に上つたやうでした。段々進んで、廣津君の「生き殘れる者」の批評になりまして、久米君の「廣津は何時もそこへ逃げる」といふやうな言葉を耳にして、自分は何等不用意な心持だつたが、思はず赫つとしました。「逃げるとは何だ、廣津は逃げるんぢやない。精一杯やつてもそれが出來ないんであつて、廣津はそんな藝術上に於て、不誠實な人間ではない。」といふやうな意味で僕は久米に突つかゝつたやうな氣がする。

所で、昨日は五月の十二日、その前日から僕の「隨筆」の「妻の手紙」の批評を讀み、今月の月評。——合評會では失敗し、又その歸りに中村武羅夫君を手古摺らせ、兩三日續いて酒の上での失態の續き、朝、寢床の中で廣津の月評を讀んだが、さういふ失態續きのことでもあり、又前の晩の酒が殘つて居つたせいか、幾分氣分もセンチメンタルになつてゐたのかも知れないが、寢床の中で、廣津の月評を讀んで、本當に自分は涙が出てゝ困つた。伊藤君、僕が涙が出たなぞといふと、滑稽に思つて笑つてはいけない。僕にも老妻を思ふの心は、實に充分にある。人間はかういふ年頃になり、又かういふ事件が出來れば出來る程、眞實な夫婦の情愛といふものが、深まるものだといふことを君だつて否定はしないでせう。そこですな。「妻の手紙」の中で、主人公に對する「何といふ深い憂ひ」といふ言葉が僕を泣かしたんだ。ゑ、分りますか。廣津の今度の月評は、僕はお世辭ではないが、僕の小說以上の名月評と思ひます。それは友人といふ關係でなく、誰れが斯くの如く行亘つた月評を、批評を僕の作品についていつて呉れた人があつたか。併し僕は批評又は月評なんていふものについては、實に出鱈目なもんだと思つてゐるから、信用してゐない。だから、廣津の月評が特別に勝れて居つたからといつても、そのために涙が出るやうなことは恐らく僕にはないだらうと思ふ。只その月評なんていふものを、總べて通り越して、彼の友情だ、といふやうなものに、僕はどれだけ強く打たれたか。——この「戯く者」の

心境から、何とかして逃れ出す事を衷心から祈つて止まない。かういふ文句にしても、誰れか友情なくしていひ得るものぞ。又僕のワイフに對する彼の理解を如何に僕は感謝したことか。僕は寢床の中で讀んで、僕がセンチメンタルな涙を流したといふことを恥ぢない。僕は友情といふものは、立派にあり得ると思ふ。それの理屈は、僕には今並べてゐてるとは出來ない。今日は親父の命日ですから、これでご免を願ひます。

鏡

今晩はようこそお出で下さいました。ご苦勞に存じます。私は十四五の時分に、青森市へ丁稚子僧に行つたことがありまして、半年餘り奉公しましたが、自分の身體の弱いために、胃腸を損じて家へ歸つて來ました。その時分は、沒落した一家の再興といふ考への外に、少年の心持としてはありませんでした。或日といつていゝか、或月といつていゝか、自分には明瞭りした記憶はありませんが、その時分の青森市の商家の習慣として、お小遣を吳れたもんではない。だから、私は母から送られた僅かばかしのお小遣で、或日、その時分にも青森といふ市に、古本屋といふものもあつたでせう――その店から僕は、今確なことはいへないが、確か「商人百話草」どいふ本を見付け出して來て、それを讀んだ記憶がある。それの口繪には――この邊やゝ講談口調でいへば、右に富士を見て、脊の三度笠さ、振り分け荷物に、塵よけの合羽――さういふ繪がありまして、それに書いてあることは、「へい、今晩は。皆お集りでございます。ようこそお出で下さいました。これからお話しませう」といふ形式で語られてゐたやうに思ふ。今回伊藤君に毎晩お出でを願つて、かういふお喋舌りをするにつけ、その時分讀んだその「商人百話草」のことが思出されて仕方がありません。それでその時分の小僧時代のことまでもお話をした譯であります。矢張その時勢のことですが、矢張母のお小遣を貰つて、偶然

に、――[illegible]

描つたのを買つて來て、私は密に讀んでゐた所、店の番頭さんに見付けられ、「お前は商人の息子に似て、どうしてそんな雜誌を讀むのか」といはれて、番頭さんに不思議な感じを與へたやうな記憶がある。

それが一年も續かなかつたといふことは、前にお話してあつた筈ですね。これではこの話はそれだけにしておいて、

何か面白い話はないかな。あるならば、いやあるならばではない、何かもう少し喋舌りするかな。………

ぢやあ「鏡」の題に移らうぢやないか。瀧田さんのことをいひ出したつていゝんでせう。いつて惡いならばいひませんがね。まあいゝぢやありませんか。「書く者」の時分の話なんだから。君も氣を惡くしてはいけない。

あなたでしたよ。僕が書いてる折だつたぢやないですか。葛西がどんな顏をして書いてゐるか。宇野さんなぞは、悲しい所は涙を流して書いてゐることがあるさうだが――伊藤君、そんなことは、君は嘘をいつてるのではないでせう――葛西はこんなことを書いてる時に、どんな顏をして書いてゐるか、と瀧田さんにあなたが聞かれたといつて、一寸僕に話したことがあつたぢやありませんか。僕もあれには困つた。色々難しい、複雜した氣分のものですからね。そこで僕は始終困つて來ると、書き續けられなくなつて來ると、机の上の鏡を持ち出して、自分の顏をよく見た。それは何といつて說明していゝか、分らない氣分ではあるが、大體としては、おせいもなし、伊藤君もなし、只僕自身の顏を見るためだつたのだが、偶々おせいがそのことに氣がついて、おせいの慘めな風態、風貌を、僕が自分の顏を鏡に映すやうな風をして、それでおせいの慘めな風態を描寫したやうに、描寫の心持を持つたやうに――まさか、おせいもそんな風ではなかつたでせうが――そんな風におせいにいはれて、私も面倒臭かつたんで、そのまゝにしておいて大いに一つたぢやないか。そのことは君も知つてる筈なんだ。繰返していふまでもなく、それ位のことは僕も君も知つてる筈です

ね。矢張り僕は瀧田さんのいつたやうに、どんな顏をして書いて居つたかといはれると、僕は泣いても何んでも足りいんだ。僕はおせいの顏を鏡で映して描寫するやうな心持ちの程度で、あんなものは書けないんだ。僕が强辯すれば、俺は泣いてはしないか、俺はベソを搔いてはゐないか。そんなことでは貴樣は駄目だぞ、これ位のものでベソを搔くやうでは駄目だぞ。さういふ心持で、僕は鏡を見てゐたんで、誰を映す鏡でもない。要するに俺は俺の顏を映し、これ位のことでベソをかく男であることを私は好まないんだ。少し意味合ひが違つて來るが、まあ世間で俺を野狐禪扱ひするならば、私はいはふ、水に浸影の意なくサ、鳥に遺蹤の心なし、といふ所かね。

鯉

四五日前、「婦人公論」の牛澤君に勸められて、龜有の庄兵エ灸をすゑて貰ひに行つて來た。大變効くお灸と見えて――僕は、脚氣、喘息、神經痛の三つの病氣だつたな。今日で五日目で、大變効いたものと見えて、身體が、ひどく疲れた。お灸あたりといふことがあるんださうだが、そんなことかも知れない。七五三、七五三、七五三、かういふ風に三日で繰返して行つて、十二日間すゑられるんだから、中々大變ですよ。これによつて、病氣が癒るか癒らんか、そんな事は五日目の僕には、まだ分らんが、ひどく應へはあるやうに思ふ。そんなことで、今日は一日、疲れた、ねむい氣持で、今晩、何をお話してよいか、まだ分らないのです。

岩木山の話をしやう。岩木山といふと、僕の鄕里、津輕の弘前の山だ。昨夜慶應の文科三年生の洋君が來とつて、登山の口笛、下山の口笛も實にうまいし、それについての踊りもうまいぢやないか。洋先生ともいろ〳〵東北人のことについて話はしたが、特に弘前の人間の批評のことになつては、お互に失望した。僕には弘前人といふものは、多少洒辯な

精悍性があるが、どちらも薄い。日本全體的な云ひ方にすれば、やゝ、京都風といつてよろしい。僕は父祖の代から前の人間であり、僕は子供の時分以來弘前では育たなかつたが、生れた家は今でも立派にある。さういふ馴染つた土地ではあるが、弘前人といふものは餘り感心しない。併しまだ他方には、東北人として一つ纏りした性格を表はした人達が澤山あるかも知れない――まあ、こんな話は、つひ慶應文科生のために引出された話で、聊か赤面だな。今晩は特に定つた話題がない、背中が痛くて仕方がないんだから。昨夜から雨が降つて、今日一日雨が降つて、東京の下宿生活といふものが、僕にはいろんなことが考へられる。雨の下宿生活といふことを考へる時に、長い間の東京生活といふことが考へる譯に行かない。さういふ間にも、僕等は、仕事のために、又本當の生活のために、鬪はふぢやないか。君も奥州人だらう。まあこれぱかしは仕方のないことだ。

僕は富士山へも登つたこともある。岩木山は幾度も登つたが、高さ四千尺位の山で、それ程大した山ではないでせう。併し岩木山はご存じの通り、太平洋、日本海、北海、の三方が見られる所で、低い山としては特色があるが、郷土としては人間を崇拜するよりも、僕には氣持がよかつたから、偉い人物のない郷里へ行くと、雪の山、夏の山、何時の場合でも秀麗な山容の氣品と、据りのよさに僕は感心する。といつて、この山は、全國的にちつとも誇るだけのことは出來ないと思ふな。十和田湖の場合とは幾らか違ふ。僕には、十和田湖なら、もう少し説明的に、世間にいひ得ると思ふけれども。

私は、あの昨年の九月一日の地震の日、お寺が潰れて、外の方へ出て、まあ二日三晩位夜營したもんでせう。四五日か、幾日かして、自分のゐたお寺を見に行きたいと思つても、本當に怖くて、崖の岩崩れが恐しくて、とても見に行く勇氣がなかつた程です。皆潰れて了つたのだが、只、その時、幸ひに二間四方の佛殿が殘つた。まあそれもよろしかつた。その四五日目に、自分のゐた潰れた部屋に、私は自分のもの丶幾らか棚の廻りにあるものを捜しに行きました。そ

の時、直ぐ裏の、二尺とも離れてない裏の、池の鯉どもが、悉く泥と一緒に、池の外に投り出されて、ふやけた、變な白くふやけた形を見せられた時は、私は、ぞうつとしました。私は五年間、その池の鯉どもと馴染みだつた。黒い鯉の王樣、赤い鯉の王樣、この鯉は去年生れた奴、こやつは一昨年生れた鯉、それだけの親しい觀察があつた。うむ、私が物をやつても、その一等の王樣の黒い鯉は容易に皆と爭はない。彼れ一人のみ何時も離れて、鷹揚な泳ぎ方をしてゐた。赤い方の王樣の鯉は、さうでもないと見えて、若い者と一緒になつて、麩を遣れば麩を爭ひ、パンを遣ればパンを爭つてゐたんだ。それが今度の地震だつたぢやないか。私は、確かに四日か五日目だつたと思ふ、その佛殿と私の部屋との間、間といつても三尺にも足りない間であるが――そこが、池の水が雨などで溢れると、溝のやうになるのであるが、その邊に無茶苦茶に上られて、光りのない、脹れたやうな、變な白さに脹れて澤山のその大きな鯉どもが、そんな腹を見せた時には、僕は實に參つたァうむ、人間の澤山があんなに並んでゐられたよりか、僕は參つた氣がした。彼等も立派な生物だ。生物としての力で迫つて來る力を、僕は大變感じました。

昨夜は飛んだ失態を演んじて恐縮です。聊か身に不淨がありまして、一席休まして貰ひたかつたのですが、そんな譯で、足掛け五年振りの、朝夕の親友だつた鯉君共の死を弔ふべく、聊か不謹愼だつたんです。そんなこともあるんですからな、だから、餘りいぢめてはいけないぢやないですか、伊藤君。僕、一寸今日考へましたね、鞭影を見て馳るは良馬ではないといふんださうだが、あなたの鞭影を見ると、僕は何時も神經痛を起すぢやないか。鞭影を見て神經痛を起す馬なんか、實に意氣地のない弱い馬ですね、ウハヽヽヽ。どうぞ中澤君にもよろしく。

で、鯉のことからふと般若經――といふよりも、相馬泰三君のことを思ひ出したんで、老和尚のことや、いろ〳〵のことが懐しく思出されるんで、一寸お喋舌りしたいな。何年か前でせうが、泰三君が、先夫人と結婚前、僕の所を訪ね

て來て、當床老和尚と三人でお酒を飲んだことがありますよ。その時泰三君から僕は結婚のことを打明けられて、勝手な話だが、家に歸つて、老和尚を僕等の座敷に引張り出して來たやうなものでしたらう。それに和尚に、「今度、僕のこの友達が、ある身分の女の人と、お互に許し合つて結婚しやうといふんですが、女の方の方に一寸身分の違ひがあるやうに思ふんで、それさへないと、立派なお金持ちでもあり、教育もあり、美しい人でもあるんで、僕なぞも大いに賛成なんですが、何といつていゝか、一寸さういつた身分のやうなことがあるんで、和尚さん如何でございませう。」かういつて、和尚に、私は、泰三君を親しい友情を以て紹介と、相談を持ちかけた譯なんでした。和尚は易の方も多少——といつては失禮かも知れないが、易、人相、うらなひ、まじなひ、なんといふことでは、何しろ寺内でも第一等の和尚なんで、まむしに喰はれたまじなひ、やけどのまじなひといふと、遠方からも、動けないやうな人が、負ぶはれても來たやうな和尚で、さういふ點では、禪機を離れて、僕は、可成り信じて居りました。それだけに和尚の返事が大切に思はれた。で、泰三君の場合に、平民とか華族とか、そんなものは何んでもない。もと〳〵そんな譯のあるもんでないんだから、そんなことは氣にしなくもいゝ。只、朝飯前、お膳に向つた時、東だかを——多分東の方に向つて般若經を讀むと、この緣はうまく行くだあよ。かう和尚はいつたが、泰三君も感心して聞いた答だつた。そこで僕も醉拂つてゐたんで、「では和尚さん、私の運勢はどうですか？」と聞いたら、和尚は笑つて、「お前のは蛙行に水だよ。」かういつて、細んではゐるが、細い、澄んだ、柔かな目を、私の顏に向けていつた。僕も何とも言葉がなくて、此頃の流行の言葉を以ていへば、微苦笑一番せざるを得なかつたのである。ハンニヤハラミタボーズソハカかな、ワ、、、。——で、その後、去年の夏時分、可成り久振りで、泰三君を新宿驛前のアパートメントへ訪ねて、一二晩厄介になつて、いろんな浮世話、藝術の話をして、厄介をかけたことがある。彼はいろんな意味で、世間的には、損な、窮屈な立場に置かれて居るやうだが、彼

だけの藝術觀、彼一個の藝術についての信仰は、流石に、弱はらされてゐないことが分り、僕は大いに意を强くした。其時泰三君に、君は和尙の勸めた般若經を讀んだのかい、つて僕が聞いたが、あれを讀まなくて、和尙へ惡いことをした。かういはれたやうに僕は思ふ。あのよき和尙も震災後亡くなり、浮世の順繰りとはいひながら、思出す度びに寂しく思ふ。

岩　菲

一昨々年の夏頃だつたと思ふが　秋聲先生が、總領さんと、奥さんの弟さんの曹洞大學校を出られた信州の大きなお寺のお坊さん―といつても僕などよりもずつと若い。二十代の人でしたな。三人で僕のお寺にお寄りになつたことがある。ほんのお茶だけ呑んで、お休みなつたばかりだつたが、それから僕もお供をして、馬車で圓覺寺まで行き、海岸まで行きして、停車場までお送りしたことがある。そのお寺へ先生が見えた時、私の机の前の濡緣の外の、まあ、景色を見たりしてゐられたが、丁度緣の外に咲いてゐた、僕も長い間名を知らない草花を見て、これはいゝ花だな、僕の好きな花だ、つてさういはれた。その時自分は確かその草花の名を聞いたんだが、忘れないやうによく聞いた筈だつたが、その後忘れて了つた。秋聲先生にさういはれて、自分はそれとなく好きな花だつたが、さう思つて見ると、成程なあと思つて、見る度にその感を深うした。一尺五寸位かな。花は五瓣の褪紅色の叢生の草でせうなあ。葉にぎざぎざがあるんだが、葉の色は可成りの濃い、やつぱし綠といふのかな――さういふ全體の感じが、實にしつくりして、夏の花としては、寂しいといつていゝんだらうが、落付いた、品のいゝ花だ。僕の居たお寺には、澤山の草花や木の花もあり、殊にぼたんでは、昔啓書記がゐたといはれる位のお寺なん[illegible]山あつた。それにも拘らず、さう秋聲先生

にいはれたからかな。文展が特に花なぞについて理解ある審査員がなかつたのか、その「岩菲」といふ名がついてから、文展と云ふ
つて、その花の持つてる味ひが、僕には段々と分りかけた氣がし出した。

それで、つひ此間なんだが、秋聲先生のお宅へお邪魔をして、久振りで先生のお話を聞きました。森川町と此所とは、近いんですけど、さうお邪魔にも行かれないし、お話を伺ひに行きたいと思つても、つまらない事でお話を伺ひに行くのが、氣がさすんですつてね。此間は幸ひ先生にも時間があつたのでしたか、酒なぞご馳走になりまして、その間に一寸した事から、自分はその名を忘れてゐて、どうしても思出せなかつた岩菲の話が出て――その岩菲も今やどうなつてるか。いろんな思ひから、多少の感慨を胸に覺えました。偶然でしたがね、僕がお酒をご馳走になつてゐる時、先生の奥さんが見えて、「葛西さんもうちへお見えになつてから、二十年になりますねえ」つて、奥さんがかういはれた。先生は「さうかなあ、二十年になるかなあ、二十年の間に何をして來たかなあ」といはれたが、僕としては、何の言葉が、出やうにも出るものではありません。成程考へて見ると、初めて先生のおうちへお伺ひしたのは、僕の十九の年だつたと思ふから、數へ年でいふと、丁度二十年になる譯であります。先生は二十年の間にどれだけの仕事をして來てゐられますか、いろ〳〵の時代を踏み、いろ〳〵な仕事をして來て居るでせう。僕なぞなんですか。先生の二十年と僕の二十年と比べると、先生の一年に僕の二十年が當らないんだ……

それで、つひ思出されて、脫線することになるんだが、そんな二十年とか一年とかいふやうな言葉が出たんだから、まあ序でにいひませうかね。僕は長いこと「接待係」といふ題で小品を書きたいと思つて、隨分長い間心掛けて居りましたが、出來なかつたから、今晩いつちまいますがね。花袋秋聲兩先生の五十年記念祭の場合のことなんですよ。あの時は僕も接待係といふ役目になつてゐたんです。あれは確か國民文藝會なぞが發起目側ぢやなかつたんですか。今にた

つて見ると、僕にやゝ記憶の明瞭を欠くから、さういふ名前に對しては失敬するかも知れませんが、多分からだつと思ふ。その時の接待係長は上司小劍さんでした。僕はその係の方で、僕の係の人が澤山あつた譯ですな。誰々だつたか、明瞭りは覺えてゐないが、幾らか覺えのあるのは、吉井勇君などもさうぢやなかつたかな。加能君はどうでしたか。田中純君はどうでしたか。たしか瀧田さんとも其晩初めてお目にかゝつたと思ふ。まあ、さういふことは僕よく知らないんですが、新橋の東洋軒であの相談が始終あつたものださうです。僕も名儀上接待役のことになつてをりますから、最後の相談會の場合には、鎌倉から私も出て來ました。けちなことをいふやうだが、私は相談會といふと、皆會費を拂つてあゝいふ所で相談するんだから、さう思つてゐたもんだから、餘り出席もしなかつたし、餘りといつては惡いけれども、一度も何や何んで出て來なかつたし、それで、最終の相談會の時には、私は出ましたね。それで結局私も接待係になつたんだ。いろんなことをいふと難しくなるから、細かいことは端折る。當日、朝から雨降り、有樂座に花袋秋聲兩先生の何んだかの講演會がある。僕は役目ですからな、出席して居つたけれども、まあ陰乍ら、秋聲先生の萬一御氣分にお差支ないやうにと思つて、講演會前、又、樂屋の方までも顔出しをしたやうな譯でしたけれども、有樂座の舞台では、いろんな人を集めに來たやうでしたが、僕は寫眞の仲間へも入る事が出來ず、名前を上げては惡いけれども、何でもないやうな人も、さうして皆撮つたんだ。僕は實に寂しく悲しく思つたけれども、併しそれは仕方がない。それで講演會は濟んだといふから、樂屋へ先生如何であらうと思つて行つた所、先生既にあらずサ。久米君に聞いた筈だ。徳田さんどうしました、つて。分らない、つていつたと思ふ。それで講演會は多分四時頃濟んだものでせう。それから雨降の中を電車に乗つて、築地の精養軒まで僕は行きました。僕はいひました。他所の人にも役目があるなら、僕にも立派な接待係といふ役目が決つてあるんだから、割當てられてあるんだから、單なる名儀上だけならば、人の氣分を尊重す

るならば、結婚に招待したならよろし。さう思つたんで、何を措いても、秋聲氏のお祝ひの場合だから――僕は紋付の羽を着て行かないといふために、さういふことをいふならば、又それでも僕はよろしい。僕、他所の結婚式の場合に、先生の紋付羽織を着て行つたこともある。併し先生の場合に、私は紋付を着るだけの人間でもなし、着ては却つてをかしいんだから、紋付を借りに歩かなかつた。さういへば、あの時紋付を着てない人は、正宗白鳥さんは着てなかつた。荒い大島の絣で、有楽座の講演もしました「有楽座にて」といふ題で講演しました　只白鳥さんは、白足袋を穿いて居つた、紋付を着なかつたけれども、白足袋を穿いてゐた所に白鳥さんの用意も窺はれますな。僕は単なる接待係なんだから、接待係長に上司小剣さんが控へてるぢやないですか。他所の人の場合ならば、借りても紋付も着て行くし、白い足袋も穿いて行つたかも知れないが、秋聲先生の場合では、私には出来ない。それが皆が分つてゐてさういふ露骨なことはないさ。

それから精養軒へ行つた。行つたけれども、僕に接待係の徽章を呉れない。接待係共は皆徽章を胸につけてゐる。僕は外ならぬ先生のためだから、さうやつて行つてるんだから、後を追ふやうにして行つてるんだから、それに徽章を呉れない。接待係の室へ僕は入られなくなる。さうかつて、来賓室へ集つて来る人の前に僕は随分きまりが悪いぢやないですか。さうかつて、僕は主賓室へ入る譯に行かない。精養軒へ行つたのは恐らく四時頃でせう。それから宴會が始まるまで、長い間といふものは、僕の一代の中での閉口の時間だつたな。役割は初めから定まつてゐたんですから、皆さんが、何故、僕にもさういふ役目を與へて呉れたならば、僕にも徽章を呉れなかつたか。外の人の場合ならば、他所の紋の付いた羽織でも着て行く。白石實三君、あの人も矢張り紋付を着て、徽章を着けて、廊下を歩いてゐた。僕に多少あの人だけは同情して呉れましたな。僕は何所の室へ入つていゝか立場がないぢやないですか。誰がそんな意地悪るをしたといふことは思はないけれど、自分の皆心得の至らないためと思ふから、何とも思はない。分つてゐてする人は何とも

思はないから、そんな人は皆鬼に喰はれて死んで了ふんだから、構はん。さういふ譯だつたんでせう。だもんだから、僕が精養軒へ行つたのは非常に早かつた。誰も來賓も何もなかつた時に行つて了つた。ほんの主賓だけが集まつた位のもんでせう。主賓といふと花袋先生と德田さんだけですよ。主賓室へ行くのもなんですから、來賓室の大廣間に坐つてゐましたよ。僕は接待係の方へ行かれませんしね――その晩初めて花袋先生に秋聲先生の御紹介で、御挨拶することが出來たことは、僕の一代の喜びであります。秋聲先生曰くさ「君は田山君を知らないのか、會つたことがないのか。」「えゝっいや初めて……私は葛西善藏。」「田山先生」「私は田山……」慇懃に御挨拶を受けて、僕は大變有り難くお辭儀をしました。

まあ〳〵さういふ經緯(いきさつ)は又いゝ加減にして、宴會の話を早くして、今夜は早く酒を飲んで止めたいからな。面白い宴會でしたよ。僕は女の人を見たのは、あの時初めてだつた。僕の、卓子の前の人は、與謝野晶子さん、平塚雷鳥さん。あゝいふ人を見た僕は、隋分きまりが悪るかつたが、又氣持ちがよかつたな――僕の隣りは相馬泰三君だつたかな。あゝそれとは違ふかも知れない。とんちんかんになつてるかも知れない。その場合はさうぢやありませんでした。その晩は柳原伯、有島武郎さん、皆出席の時でした。僕の隣りに並んだ人は、竹久夢二さん、川路柳虹さん達で、前の人は知らない……そこで、柳原伯が御演説になり、武郎氏が演説をなさいました。――藝術のことは帝王以上のものであり、又乞食以下のものである。――かういつたやうな、稍々激越の調子でいはれたものと思ふ。その時分の武郎氏は幾らか神經質な印象を與へた。それは初對面だつた。その後あの輕井澤事件の前に、一二ケ月前だつたと思ふ。日日新聞社に泰西名畫の展覽會があつた日、僕も見に行つて、その歸りの省線で、お子さんを連れて居つた武郎氏を見、あの演説時分とは、中々確りして思つたのが、それが最後でしたかね。――又それから花袋先生は、すべて新しい時代のものを理解しよう、新しいものにぶつかつて行きたい。さういふ心持ちで過去もやつて來た、これからもさういふ風の心

持ちで行きたい、つていふ一種の御意見を述べられたやうに思ふ。秋聲先生に立つて、自分は何も仕事をしてゐない、かういふことをやつてもらつては、恥ぢるやうな氣持ちがする、と小さくなつたやうに僕には見えたんだ。

それから他の室で余興がありました。藤間の踊りかな。それから何とかいふ講談を聞きましたよ。話がとんちんかんになるけれどもね。僕が接待係室だかをうろ〱してゐた時、山本實彦改造さんかね、あなたよく出て來ましたねえつていはれた。會費十圓なんですからね。演說が濟んで、宴會になつて、中村武羅夫さんに、僕はさういつた、僕は暗然とした氣持ちになりましたつて。どういふ意味ですかつて彼は聞いた。いや、どういふ意味つてないけれど、あの人達はこれだけの仕事をしてゐる。僕はやり殘せる仕事はどうですかね。僕は氣持ちが暗くなるといつて、武羅夫さんとも別れた。歸りの玄關の時に、久々振りで、新潮社の佐藤義亮氏にですな、一寸肩を突かれて、今晩は御苦勞でしたね、つていはれたけれども、何と御挨拶しやうもなく、まあ涙を溜めた苦笑一番で、御挨拶に報ゐました。

一路平安

昨晩はあの雨降りの中を全札でお歸しして、誠に恐縮です。實は今晩も何も纒つたことが喋舌れさうにないので、朝から悲觀してゐた所ですよ。實は昨日なぞは、午後例によつて、日課の一高前までの散步をしましたが、熟々と憂鬱な氣持ちになりました、最早公孫樹の葉も青々と大きくなり、――この前の「中央公論」に書いたものには、鈴懸の葉の芽も出ないと書きましたが、鈴懸ではありませんでした。芽が出てゐなかつたので、僕には公孫樹とも鈴懸とも分らなかつたが、矢張り公孫樹の並木ですね。その前を往きは左側、復りは大學の通りの右側の步道を、こつ〱と步いて來た譯ですな。誰しも今時分は襲はれる感じであるかも知れないが、いろ〱と生活のこと、都會といふもの、自然への憧れの心、家

族のこと、殊にかうした日々の生活について想ひ到ると、持前の憂鬱と不服感に襲はれる。これが、自分の人生の行詰りの感じであらうか。その生活を押詰めて行くことが、疑ひなしに押進めて行くことが、本當なんだらうか、何か間違ひではないか知らん、といふやうな氣がされて、道行く人々、走る自動車、空の色、埃りの匂にまでも心を惹かれた譯でした。……

さて、どうもこんな話をすると、氣が詰つて、醉も駄目になつて了ふ。今もお斷りしたやうに、何も今晩はないんです。何々講演會といふ所ならば「無題」といふ所で、長い紙に書いて、狸州――いや、何の某とかいふやうなあの紙を下げて貰ふ所なんですが、西城亭ではそれも行きませんからな。誰も見て呉れる人がないぢやありませんか。聞いて呉れる人もないぢやありませんか。落城も實に弱つた。最早中日を過ぎた今日、無題といふ所では、あなたも呆れたでせう。で、「無題といふ所で、一寸思出したんだが、それでは、無――といふことについての、或る思出話を一寸して、それで今晩はご免を蒙りたいですな。伊藤君、さういふことにして呉れませんかね。醉拂ひ過ぎてるぢやありませんか。あなたの鞭影の前に用心して醉拂つて、追返してやらうと思つて、早くから飲んでゐたんですが、兎に角、あなたの鞭影には怖氣ついてると見えて、我輩の馬は意氣地がなくて困りますな。尤も此間の新聞で見ると、松方さんの日本一の持ち馬が、競爭に敗けたんで、騎手が免職されたといふ話が見えてましたな。そんな馬でさへ、落ちる時には落ちるぢやありませんか。況んや我輩の駑馬に於てをやかな。あなたの騎手のせいぢやないぢやないですか。騎手を免職したといふことが本當だとすると、日本一の松方さんも、ちと野暮だな。……

無の字といふと、二三年前のことでした。或る婦人雜誌の若い女記者が、――珍らしいんですよ、僕の所へ女記者が訪ねて來て呉れるなんか。僕は非常に光榮と喜びを感じましたね。まだ若い女の人で、可成りの美人でした。顔からだ

つたか知ら、帯からか知ら、何か黒い紐のついた、此頃ハイカラな人が持つてゐるシヤーイ何んとかいふ名前の袋などを持つてるやうな新時代の女の人で、僕のあの暗い、陰氣な部屋に、時ならぬイルミネーションを見して呉れたもんです。所が、段々話して居る内に、その婦人記者は中々禪學の特志家だつたんです。大變苦勞をなされた方であつて、えゝーと、松島の瑞巌寺で、無の字の公案が通つた方だつたには、僕も一寸意外に思ひました。そこで、僕曰く、「さうですか、それは大變なことですな。中々容易なことぢやないでせう。一體に、女の人は男よりか進步が早いといひますね。どういふものでせうか。單純で熱心だからですかね。ですが、此所の管長、中々の狸ですよ。大變學問も偉い人ですし、又瑞巌寺の老師とは趣きの違ふ所があるかも知れませんから、一寸試みに門を叩いて見てはどうですか。」かういつて、何しろ相手が可成りの美人だつたもんですから、僕大いに動いたんですな。非常に熱心に勸めたもんですよ。

話が順序しますが、實は白狀すると、公案が通つたといふことから、どういふ公案が通りましたかと、僕が聞いた時に、「無の字です。」と彼の女は答へた。「無の字……？」と僕は分りませんでした。「無の字といふと……」「ジヨーシユーの無の字です。」と答へられて、僕は赤面した次第です。成程な、女といふ奴は、偉いもんだ。一つの公案が通るんだから。僕は非常に感服しました。それからの話なんですがね。僕は大いに勸誘之れ努めたので彼の女は、確か何月時分だつたか、夏の前だつたか後だつたかの月並攝心、槐安國語の提唱に出席するといふので、僕は僧堂知客寮を訪ねて、彼の女のことを話しました。女の人は僧堂には入れない規約にはなつてゐるが、外ならぬあなたの御紹介だから、あなたの方で泊る所さへ決めて呉れると、一切は僧堂並みにお扱ひしても宜しいといはれて、その無の字女居士との約束を守り、早速端書で期日などを通知してあつたのだが、さつぱり何の便りもなく、端書の返事すら來なかつた。何とかといつて、

風流宗といつた感じですかな。僕は知客寮に大いに閉口しましたよ。「葛西さんはいけないな。何んだつてさうなんだから」ひやかされて、赤面したことがありますよ。伊藤君。どうですかね。ジョーシューの無の字とは、流石に女だけに通つたものである、僕は非常に感服したのです。僕の野狐禪は駄洒落であり、「婦人公論」の所謂「ふもれすく」ですからな。通る筈はないんだが、そのジョーシューの無の字には一寸參りましたね。僕の方では何しろ相手は美人だし、女の獨參振りを見て、此奴一つ、僕は男の場合の獨參振りをスケツチして「本來の面目」といふ小說を書いたことがあるんで、此奴は面白いと思つた。その鼻をパンとあかされたぢやありませんか。瑞巖寺老師、流石に偉いものだと思つて、僕は今でも感銘して居る所です。

そこで、野狐禪とか何とかいふ話が出たから、何も彼もいつて了ひますがね、今もいつた通り、僕の野狐禪なんていふものは、本當に僕の駄洒落であり、ふもれすくなんです。藝術と禪といふものは、とても僕などの力では寄りつき得るものではないといふことは、無論知つてますよ。それは本當に知つてる積りです。そこで今もいつたやうな、僕の失敗談や、多少文壇に關係したやうな人のことで、僕のきまりの惡い思ひをしたことをいひますと、相手の名を上げられることは迷惑かも知れないと思ひますが、一昨年、だつたと思ふ、の一月に、僕は新潮に「裁判」といふ三枚半の、所謂小咄しものを書いて責をふさいだことがありますな。その原稿催促に、中村武羅夫氏直き直き僕のお寺まで來て呉れました。恥しい話ですが、僕は丁度講座の鐘が鳴つたので、袴を穿き、足袋を脫ぎ、羽織を脫ぎして、玄關へ出掛けた所へ、武羅夫氏が丁度訪ねられたのです。武羅夫氏は「あなたの修業のためですから」かういつて、僕が上つてお茶を上げたいと思つてお勸めしたが、それを斷つて呉れて、僧堂へ行く僕と一緒に、玄關から引返して呉れました。臘八大接心の場合で、流石懶け者の僕も、講座へ出かけたかつたので、大變失禮だと思つたが、いはるゝまゝに、出て僕の山の

寺の石段を下り、我等共石段の前に立つて、丁度さういふ時だつたので、僕の立つてゐた所に下りの成つ前に出まし、そこで武羅夫君と別れたのでした。僕は武羅夫氏に對して非常に恥しい氣がしました。これだけの行もして居らず、これだけの心掛も守り得ずに、武羅夫氏が一生懸命の仕事のことで來て吳れたのに對し、形ばかしがそんなまねをして居つて、何の役に立たないぢやないか。僕は自分の愁つか、臘月といふのと十二月ですからな、あの寒い時に、足袋も穿かずにそんなまねをしてゐたことを大變恥しく思つた。まあかういふことも若し自分の懺悔といひ得るならば、さういふ心持で自分はいひたい。只自分はいひ得ることは、これも「中央公論」に書いた作なんで、聊か氣が引けるが、僕の二三年前の二月號に書いた「父の出郷」といふあの野狐禪ものには、僕は幾らか眞實な心持がある筈だと思つて、密かに思つてゐたんだが、世間はそれでは通りませんからね。父の死の——電報屋の間違ひでの臨終に聞かされて、時ならぬ時刻に、涙を禁じ得ずして、夜中金華老師のお寺の玄關に立ち、老師居るかゐないか、突つ放なされて歸つて來た時の氣持ちは、僕には忘れられない。「遙々とこの不孝な子を、魂となつても訪ねて吳れた父の心持ち……」云々といふやうな文句があつたやうに思ふが、その氣持ちを忘れることも出來ないし、自分としては僞つてもゐないんだし、それから先きも決して僞らうとは思はない。あれだけは僕野狐禪もの丶駄洒落ではない。……

さて、段々長くなりまして、駄洒落が長くなりまして、題意の一路平安の所へ來て、月並ないひ方をすれば、最早や時間がないといつて逃げられるんだが、僕にはそれ程の時間の觀念もない人間だし、もちつと醉拂つていゝだけの——文壇諸公からいへば、僕が金もないくせに酒を飲み過ぎると、隨分非難があるやうに思ふが、（が、少し醉拂つて來て、少し端折らうと思ふ。今日の新聞で松方公を乘した車夫が走らなかつたので、新聞記者が追越さうとしたら、走れ、走れ、つて老公がいはれたさうだ。そこで興津驛へ着いて、その車屋さん、彥さんが、新聞記者にいつた時、彥さん曰く

「殿樣も中々はしよつてゐられる。」――はしよつては元氣のことださうだ。）……いやはや、今晩は脫線振りで、實に一路平安ぢやないですかな。人生の一路は長く、又短いさ。大きなことは我々には考へられない。日々是好日さ、刻々是好刻、步々ニ薰風ヲ生ズ――といつたやうな氣持が常に働いてゐたいと思ふんだが、中々さうは行かんぢやありませんか。人生一路のこと、誰か苦難なしに通り得るものぞサ。う、所で、「鯉」の晩に失敗つたのは、實は、あれは十五日の日でして、僕の長男長女が初めての遠足に船で津輕海峽を越えるの日だつたのですよ。僕は無論分つてゐたのです。その前々から女房や長男の手紙を受けて、それでお金も送れなかつたのですが、併しお金ばかしの問題ぢやないんです。女房もそのことは知つとつて――三十分以上の汽車乘りにも堪えないやうな、船汽車電車などにも醉ふやうな、僕にいはせると異狀體質だとつていゝでせう、さういふことも女房は知つてゐるんで、いろいろな事情から我兒の汽船旅びを憂へて、學校の先生に反對したらしいのですが、さうも行かないこともあり、それでまあ遣ることになつたのです。それが十五日の、僕は今日旅行案內を調べましたが、多分七時幾らの聯絡船に乘り、あそこは四時間餘りで着く所ですから、十二時そこそこには着いたでせう。おお……函館のことをいひましたか。さう／＼いはなかつた。函館へ長男と長女が遠足に行つたんなさうです。僕とても無神經な人間ぢやない。だからあの日は、あの晩は、餘り氣が進まなかつたんだ。彼等のために海上の一路平安を祈る心は、人間としてはあり得ることなんだらう。だから、あなたの方のお喋舌りも出來る用意が出來てゐなかつた。彼等が船に乘つて、津輕斗南兩半島のあの赭岩の聳立したやうな兩半島を見て、津輕灣を出て行き、龍飛白神中の潮に揺られて、北海道といふ、彼等には新領土の感じのするやうな、一つの陸土を見て、船の進んで行く前に、彼等の心持ちの動いて行く心を、僕は想像することは出來る。もつと、うんと昔の時分に、押詰められたアイヌ族が、三厩の今では廢れた船場から、うつろ船に乘つて、段々內地人に追はれて、一衣帶水といつていゝ

なー少し言葉は足りないが、そんな氣持ちで、うつろ船であの荒い津輕海峽、あの潮を乘り切つて行つたつてことは、僕達に實に原始人としての生活氣分を動かすものがある。彼等は詩ではない、夢ではない。實際的に或る[illegible]のために壓迫されて、あの本土のどん詰りまで行き、そこで、まあ再び一衣帶水といふ不利な言葉でいひますが、本當に向ふの陸地が見えるんですよ。そこを望んで、彼等はあのうつろ船に乘つて、汐合をはかり、時をはかり、天候を考へて渡つて行つたといふことには、僕は幾度も津輕海峽を往復する毎に、何時も同感を誘はれる。その潮を越えると最早や北海道の領分になり、多少の新領分氣分になつて、そこまで行くと、鷗が群り飛び啼き、あの三角形した駒ケ岳の形も氣には入つてゐる。函館は港としては、それ程いゝ港とは思はないが、いろんな意味に於て大切な港であるし、その附近二三里に亙つて重要な物産の會社も盛んに出來て居り、又精神方面に於てもトラペスト修道院といふものもあり、修道院のことだけでも大變なもんぢやないですか。——さういふ所へ僕の長男長女が今度見學に行つたんだ。五稜郭の歴史だつて、田舍の先生だつて教へて呉れるでせう。僕は船にも汽車にも弱くはないんだ。酒にどうやらこれだけ强いだけに、そんなものではこれほど醉はない。だが彼は弱はさうで仕方がない。長男は靑森で連絡を見に行く船に乘つてさへ醉ふほどの弱蟲だ。併し大海はもつと浪が荒いんだ。くどいやうだが、龍飛岬中の潮は一寸つらいんですよ。玄海灘なぞとは無論段が違ひますけれど。あの浪に乘り、あの浪を歸へる—もう今日は歸つてゐます。三日間の旅行なんですから、十五日から始つて三日間の旅行なんですから。彼奴等はどうしたらう。あの僕が失態の晩に、函館の何所かの大勢の生徒共を集めて泊める旅館に、まあ寄席流にいふと追込になりして、彼等はよく安眠を得たでせうか、又得られたでせうか。伊藤君、察して呉れ。うん、ものの出來る出來ないは偶然ぢやないんだ。そんな關係が出來集つて、出來る場合もあり、出來ない場合もある。決して人間のことは單純なものではない。まあ、今晩はうちの子等も母親の所へ歸つ

て居ると思ふから、僕はまあ安心をした。――終りに臨んで――御免々々――終りに臨んで、この香具師な、このざな親父に、爾等の長い先きの一路平安を祈らしめよ。

私は幸ひに小學校時分に、僕の育つた村の先生――石田政藏先生に篤き、嚴しき薫陶を受けました。この春でしたか、この暮れでしたか、先生の二十五年勤續の記念碑を建てるといふことになつて、僕なぞは當然分相應の、五十錢でも十錢でも寄附帖に書くべきでしたが、私としては、あれだけの長い間の、今日までの薫陶に對し、さういふことは私達は出來ません。私の地方ではとても今國の劃一的な教育が行はるべくまだ〳〵文化程度が非常に低いのです。偶然に昨日『女性改造』を見て、或る意味の寺小屋教育に返へさなければならないといふ、パーカスト女史などを思ひ合せ、色々に我兒の教育のことを考へて居ります。併し今晩は醉つて來ましたので、醉つて來た、で責任を逃れやらとする氣持ちはありませんけれども、からいふ問題は難しい。我地方としては、まあ、日本全體の劃一教育などはとても出來ないといふやうなことは、殊に師範學校の教育については幾分の御注意を願ひたい位に思ふんだが、僕なぞいつた所で仕方がないでせう。いろ〳〵な例も僕は感じたことはありますけれど、いひ得ません。

我是儞

百川海に入つて名なし、百病膏肓に入つて亦名付くべきなし、といつた所かな。我輩の持病も今日で二百二十八點、明日滿願で二百四十點、といふ所まで來たのですが、長年の業病で、先刻から痛み、酒座醉酊するに及んで、倘役目にかゝりかね、昨晩の大雨中の所、今札を出し、再々のこととて醉狸州、慚善藏共に陳謝に堪えぬ。いつて以て今晩六日目の晩、明日七日目の晩にて打出し、故に九時半酒座にゐる。

實は、今曉五時目が覺めましたが、例によつて何のお喋舌りをするヒントも感じ得なかつたので、落膽不愉快甚しく、床を蹴つて起きるといふやうな氣分でないのには困つた。日々是好日、刻々是好刻、歩々ニ清風ヲ生ズ、底のことを始終考へては居るんだが、とても〳〵そんなことは出來るものぢやない。歩々に塵風を生じて……馬脚あるものは包めど

も現はる。蛇足の用無用、ソモサン……要するに、つまらない日のみ來り、つまらない對手のみ來り、つまらない風のみ來るんだ。それがどうにかならないものかな。朝に好月評を迎へ、夕に惡月評を送る。水菜稼業の情なさ。身に沁み渡る深い蹂躪、此頃稍々遁走の念頻りなるを覺ゆる所以である。さてもう一つ、實はといつて白状するサ、實は實はで嘘をいふな。實はといふと嘘になる。だが實はなんだ。今曉六時起床出來ずサ、床の中で新聞を讀みして、あれやこれやと戸惑ひし、正宗白鳥さんの讀賣新聞の「選擧について」といふ文章の中で、勝負精神のことについていつて居らるゝが、正宗さんも、敗けてばかりゐてなるものか、一度位は相手を土俵の砂に埋めて見たい、かういつて居らるゝ。碁將碁弄花などにも、大いに鬪つてやつてもいゝといふやうなことをもいつてゐて、選擧氣分のことを書いてゐられるが、僕も同感を禁じ得ない。僕だつて一代の中に敗けてばかりゐて堪るものか。偶には相手を土俵の砂の上に投げ飛して見たい位の精神は矢張りあるんだ。勝負精神の奪ふべからざる所以である。實は、又實はなんだが——いや今日されなかつたんですよ偶々寶珠院住持から建長寺の雜誌「和光」を送られたので、川老註金剛經提唱——[illegible]大師——それを讀んだので、いやはや、實に愉快になつて、でこそ、日々好日ぢやないか。今晩こそは伊藤君が來たつて怖くはないぞ。庄兵衛灸二百二十八點、それにも增して熱さの應へる伊藤灸六點に、何んでもないんだ。さういふ氣がされて、奔然として九時床を蹴つて立つたやうな次第でありますから、伊藤君よ、僕の醉、懶、二つの罪を許し給へさ。時有テ酒に醉フテ人ヲ罵ルモ、忽爾燒香禮ヲ作ス、底の心掛けは持つてるんだ。泥棒にも三分の理窟といふが、この文句は決して我輩の酒を呑んで毒舌を振ふことをいゝとして賞めてる言葉では無論ないんだ。我輩もそれ位のことは知つてゐるんだが、僕、元來意尚地者、故にこの語を我輩の方に有利のやうに强辯して、泥棒三分の說を持ち出す所以だ。

だから、いはないこつちやないぢやないか。こんな仕事といふものは大變なんだ。お互に大變なんだ。兩々相俟つて出來

る仕事なんだ。何方が強くとも、何方が弱くとも、この西城亭七晩の席はかけられない。兩々錯なり——といふ結果になつて了ふんだ。僕の酒語にして誤りあらば、その罪は君も半ば負ふべく、君にこの酒語によつてお叱りを受くる如きことあらば、これ我輩の責任なり。不義はお家の法度さ。庭前に引出されて、殿様の刃の前に、ころりと首を並べて落つとされる覺悟なくんば、決して試みする勿れ、作者を試みる勿れ 編輯者を試みる勿れ。間違つた時はどちらも宜しくないんだ。作家がよくつて編輯者が悪い、編輯者がよくつて作家が悪い、なんといふ理屈は駄目だ。僕は理屈は嫌いだ。即ち兩々錯なのさ、繰返していふ、兩々錯なんだ。——註釋的な言葉を以ていへばサ、野狐禪なんですよ。野狐の積りであなたが筆記して呉れなければいけないが、外にいひやうがないんだからな。文壇なんて、實に文壇生活といふものは、僕長年東京にゐなかつたので、文學で飯は食つて居つたけれど、文壇生活といふものの氣分と、此頃ほど直接に接觸することがなかつたんだが、又實はさ、えゝと、あなたの方の雜誌で、勝負とか何とかいふことで、文壇諸公の雜錄を集めてゐさうぢやないですか。それやこれやのこともあり、僕も一つは瀧田さんに對し、餘りゐながらでばかし書いて、原稿料を頂くのは氣の毒でもあるから、ちつたあ資本でも入れやうかと思つて、そんなことをいふと瀧田さんが笑ふでせう。瀧田さんの十日間の資本の入れ方に比べれば、哀れなもんぢやないか。それでもさ、分相應の資本をかける氣になつて、氣の進まんながらに、前夜三時臥床、朝六時起床。顏を剃り、入浴、すべてを果すと、僕の外出は十時過ぎならでは出られない。殊に震災後の上野から向ふは知らない。本郷三丁目よりタクシーに乘り、淺草觀音にお詣りし、吉原病院前まで行つたが、流石に下りて池を見る勇氣なく、稍々懇意の人を運轉助手に尋ねさしたが、震災後千束町にゐて、呉服屋を營み居る由、若かりし年世話になりし老女あり、その安否を得て、それより本所被服廠に參り、禮拜して、それから國技館に所謂國技なるものを見るさ。その日の取組みの中、稍々面白きもの、僕だけに面白かりしもの、太刀光、鶴ケ

鶴——僕の女房、つるといふ名前に特に聯想あり、特にこれを用ひて、今場ならば、鶴ヶ濱君のために一杯を献ぜん、然も中入までに幾組かの取組を見しも、西の海、恐らく舊源氏山といふ力士ならん。然と常陸岩の立合には、僕多大の同情を常陸岩に寄せたり。然も近代流の勝負精神ならん、勝負の結果よりいふ時には、西の海の流儀、ひとり相撲界のみならず、文壇又然るを覺ゆ。西の海の立ち來たなさを責むるならば、文壇人の立ちぎたなさに値するものなしとは決していひまい。あの立ちきたなさを以て文壇の横綱を張る、若くしてあのきたなさを以て文壇に横綱を張らんとする如きは、妄の即ち妄なるものにあらずして何ぞや。予は西の海氏の健闘的精神を實に愛す。予も亦その流儀なり。只文壇予諸公のために敢へて西の海の立合を望むものあらば、僕は氣の毒に思はない譯には行かない。栃木山、清瀬川の勝負のことは最早や問題でない。僕は實に清瀬川の廉潔にして健氣なる奮闘振りを非常に好きだつた。彼は横綱を尊敬するだけの純正さを持つてゐたし、又己れの奮闘しなければならぬだけの責任も解してゐたやうに思ふ。それで實力の違ひぢやないか。どうしたつて、栃木山にや僕には勝てさうに思ひなかつた。栃木は立たうとしない。受けて立たうとしてゐることは、僕國技館初めての人間にも分る。栃木のあの溫良な、ブルドツク面と、面を突き合して、一寸立ち上れないといふことは、清瀬君の無理もない所だ。栃木ブルドツク、相手に同情して、相手の立ち上れない苦しい所に同情して、わざと、うおーといつて、わざとの突かゝり方を見して、勝敗は自ら分つてゐる相手に向つて、誘ひをかけて見れただけの横綱振りなんだ。それだけに名譽自稱さ、清瀬川たるもの、突かけて行けなかつたのは、僕は清瀬川君のために、非常にいゝ所のある人だと思つて、感心した。敗れたりといへども、彼の如きは勝負精神に於て、決して恥でないものである。——做模打樣百千般。驀鼻牽來我是儞。だから驀鼻に牽來して見れば、君即ち俺、俺即ち君、といふ意味なんだらうぢやないか。我是儞といふ文句の題目を藉りて、今晩お茶を濁すんぢやないか。

先刻もいつたやうに、我輩の駑馬たるや、とても駄目なんだ。叩いても叩いても我輩は馳れないんだ。何とかいふ支那の文句に、長安一片の月、といふこともあつたが、我輩も人情のない人間であるとは思ひない。或る時は逆にとつて、己れは人情のない人間のやうに思込んだこともあり、情の動かないやうな人間のやうに思込んだりしたこともある。斷じてそんなことはない。人間情なくしてあるべきでない。思ひを長安一片に寄せる時、我輩の志に傷みなからんやサ。只生來の愚鈍、跛、よく人生の務めが出來ず、父に對しては不孝の兒たり、妻、親身のものに對しては、心傷ましめること、幾度かの死に値せん。僕餘りに健闘雄飛の精神に老いたることを思ひ、勝負精神の幾分の發揚を杞念して、國技館を見に行つたんであるが、そんなやうな意味で、寂しく歸り、若老の嘆、又嘆、嘆息を禁じ得なかつた。子供の時分あれ程好きだつた角力が、今日三十八才にして既に勝負の技に興味を失つた、といふことは、我輩の實に若老を哀しみさしたのである。若老の勝負精神を作興させんと思つて行つて、己れの既に若老の域に入りかけたを知り、止んぬるかなこの若老、最早や碁將棊弄花の精神の破傷し、痛み、長嘆大息を禁じ得なかつたといふ譯でもありませうか。再び三度び誤解を避けるためにいふが、併しながら、僕は勝負精神に卑怯でありたいとは決して考へたことがない。僕は何時でも、勝負精神に率直な、勇敢な人間として生涯を終始したい。但し、併しながら例を下等なことにいつて比喩すれば、碁將棊の場合にしても弄花の場合にしても、僕はその相手の人間の精神がこれ程露骨に現れるものはないと思ふ。僕は決して勝負事が嫌ひでない。僕は未熟ながらも、碁將棊トランプ位のことは知つてゐる。又好んでゐる。併し僕と最も氣の合ひ、お互に敬愛し合つてる人間とならば、僕は碁將棊トランプ弄花、何事であつても、僕は始終敗ても決して不愉快な感じを持たないけれども、此頃の碁將棊弄花トランプを遊戯にし、且つ勝負にし居る人間共の、人間の人格としての卑しさはどうぢや。それらの人間の文壇的棲息を思ふ時に、僕なんかは、文壇全體が汚されてるといふやうな氣がされて來

て自分の好きな遊戯さへ捨てゝるんだ。僕には將棋トランプや花のことについては、それだけの手間を入れてない。併し然り、さりながら碁などは幾分の初歩の手ほどきを受けたこともあり將棋は亡き父が立派な田舎初段を指せたので、練習しやうと思へば練習する機會もあつたものであるが、いろいろな氣持ちから、さういふ氣持ちになれなかつた。只僕一人をして自ら高く止るものとなす勿れ。決してそんな精神ではない。倨傲敢へて下らざるは、僕の赤ん坊以來の苦勞によつて、然り赤ん坊以來の苦勞これ又何んするものぞさ、生下シテ東西七步行ク――お釋迦樣に生れながらにして七步あるけたんだ。歩るいてそして天上天下唯我獨尊が赤ん坊で出來たんだ。我ら赤ん坊なんだ。併し俺も赤ん坊なんだし、お釋迦樣も赤ん坊なんだ。生下東西七步行くなんか、そりやこぢつけさ。赤ん坊はピイく泣いてりやいゝんだ。決して七步して天上天下唯我獨尊などをいふやうな赤ん坊はつまらない赤ん坊ぢやないか。お釋迦樣は決してその時分はそんなことなどいゝやしないんだ。いひもしないんだ。只彼の精神を僕等は深く受けなければならん。う、そんなものがゐるかゐないかも知らないけれども、有るといはれてある以上は、自分だけのそのまねの出來ない以上、それを尊敬するのは本當だ。尊敬出來ない奴は馬鹿なんだ。又卑怯者なんだ――だから、お斷りしてないんぢやないか。これ一切、小華老和尚の受賣りさ。我輩をして這般のいひ譯を述べしめる勿れかね。面白をかしの世の中ぢやないか。君は君、僕は僕、といふてもさうは行かない事が澤山あるんだ。君君たれば臣臣たらず、なんかといふやうな、あゝいふ間違つた言葉が日本にもあつたんで、大變迷惑なんだ。決してそんな筈のものではない。それと同じくかういふ仕事についても、君君なれば僕は僕、僕僕なれば君は君といふやうな精神では、容易に事が進む譯がないぢやないか。何と思つて君はこんなことを始めたんだ。俺に恥かゝせ、君も恥かくやうな仕事ならば、お互に止せ。即ち兩々錯なりさ。前念ハ衆生、後念ハ佛、普通にいふと、借りる時の佛面、返へす時の閻魔面ともいふぢやないか。それとも同じ理由さ。這般のことを分らんで、

この機微に觸るゝ勿れ、有相ノ身中無相ノ身さ、頭々盡ク吾家ノ物ぢやないか。――だが吾家の物たるもの一つだに有りや。一物一品、天地歸命體さ。天地のことはすべて皆歸へる所へ歸らなければならないんだ。他とつて私が取つて返へす譯に行かない。天地歸命體、よく心命を盡して、頭々のために仕へよ。然らば頭々自ら吾家の物たらん。頭々吾家の物にあらずさ。吾家の物たる頭々と我との差別なからん。――纔ニ是非アレバ紛然トシテ心ヲ失シ、階級ニ墮ザレバ復模索無シ。ま、滅茶苦茶ぢやないか。それはそれとして宜しい。そこで曰くさ、錦上花、花上錦さ。錦の上に花を飾つたつて、花も困る、錦又御迷惑。花の錦を飾つたつて、花の方でも御免蒙りたいんだ。だから、錦上花、花上錦、兩兩錯也といつてるぢやないか。文壇流行兒諸公、幾分の心を用ゐ給へ。只敢へて嫉妬とのみ思つては困るな。斯業の道は遠いさ。ぴつこに響く遠山の鐘つていつてる意味がお互に考へたいものぢやないかな。うむ、再びいふ、ぴつこに響く遠山の鐘。そこで追分を一つやらう。やつてもお終ひにするんぢやないんだ。鞭影に、主は追分、東は關所、(この所狸州先生得意の追分節の調子)……ピツコ哀しも遠山の鐘ときたかね。まア、我輩もそんなことになつたんですな。ピツコ哀しも遠山の鐘さ。文壇月評悉く遠山の鐘ぢやないか。我輩の呑兵衛をして無駄に鞭打つ勿れ。鞭打つても馳れないものは馳れないんだ。又馳るものは馳るんだ。やめろ、やめろ。長鞭馬腹に達すれば宜しいが、長鞭過ぎて馬睾に達し、急所を打てば、馬又氣死して馳らないこともあるだらうし、鞭短かうして馬腹に達せざる時、即ち兩々錯なんだ。鞍上人なく、鞍下馬なき境地に達せずんば愛宕山の石段を上下することは難しく、又我等文壇を馳驅するにも難しく、或る場合には駿馬痴漢を乘せさ、俊髦駄馬に乘るの罵りを免れざらん。白馬金鞍これ長安市上の事さ。醉李白、天子呼び來れども行かざるの趣き、君解するや否や。四方ノ計未ダ就ラズ、慷慨ノ志ハ尙存ス。君の社の島中大兄に、僕が醉拂つて書いて、雄作大兄か「僕のベーチ」の程度の自信を以て書いた心持ちを、君解するや如何、ソモサン。伊藤君、

度び〳〵御迷惑かけ、いろ〳〵な經緯を經て居るんだから、あの晩に牛津君も居つたし、書いた氣分はお分りでせう。あんな文句を書き、又あんな字ほか僕には書けないんだから、いろ〳〵な意味で殘念に思ふ。だが、さういふ譯でもないサ。お互のことをお互にいひたいやうな精神は僕には餘りないんだ。併し行き掛り上、惡い事をいつたことになつたならば、まあ詫るんだな。そりや幾重にも詫る。只天地生活の間に居るものとしては、只それ位の、僕は自信をいつてもいゝと思んだ。分に外れて、已れの上を誇るなよ。まあこれ位にして止して置かう。まアそれ位のものぢやないか。やる時はやつたらいゝ、敗ける時は敗けたがよからう。それが勝負の精神ぢやないか。君の所で勝負精神といふものを何かやつてるさうぢやないか。その上について幾分いひたいと思つたことが、多少こんな風に捻れて來たもんぢやないか。勝負とは考へたもんですな。又不安恐怖とは何だ。雜誌の出來ないうちにそんなことをいつては惡いけれど、何故君等雜誌家が不安恐怖とか何とかいふやうな際どい題目を狙ふのかな。日々の新聞は常にさうぢやないか。君等にして又この事を狙ふ、私情に阿ることだと思ふ。併しこの事は考へたことでないから別だ。併し今度は滅茶苦茶に野狐言を吐く積りだつたが、吐けるものでもない。私が野狐なら君も野狐ぢやないか。君が我からば我乍は倆ぢやないか。君が倆ならば我輩は我ぢやないか。その意味のための問題ぢやないか。一人稱も二人稱もないぢやないか。それは僕なぞとしても、君なぞとしても考へなければならない事ぢやないか。君は分るか、分る？　そこで、從來從來我是倆、さうだらうぢやないか。段々迫つて見て、段々難しくなつて見て、さうして見てくれば、お前も已れも、自も他も同じだといふ所に行くぢやないか。一人稱も二人稱もそこに何の根本があるんぢやない。そのうんと根本に入らなければどうしようもない。そこで雪の上に霜といふ言葉がある。霜の上に雪、雪の上に又霜、霜の上に又雪。君は雪の上に霜を冷たくることが好きであるか。まアよろしからう。霜雪の苦、お互に十年又十年サ——

訪問

西城亭中百富の山——身延にして命長ければ、今晩醉狸州、七席七題、積り積つて枚數七十枚に至る。我輩空前の稿料ならん。酒を飲むを止めてもつと動けといふものは誰ぞ！　懶善藏にけちをつけるために、醉狸州をいふ如きは卑怯なり。懶善藏未だ曾つて斯く如く働いたるとなし。……醉狸州、七席七題、今晩を以て終りとす。我輩の收入實に大なるものあり、ワハヽヽヽ。我輩の酒の如きをいふならば　世間又自ら我輩說あるんだ。他人の過ちを見て已れのとを考へろといふのは儒教の精神なんで、他人のとをいふとはならん。斷じてそれはならん。偶々おせい問題ありて、この善藏にしてこの病あるかとの嘆を我自ら禁じ得ざるものあつたのである。誰れか人の道樂を攻擊し得るもの、現文壇諸公何人かありや、ソモサン。昨夜伊藤川、狸州山を挑むも、狸州山、伊藤川の突つ張りを恐れて立ち上る能はず、遂に化粧立ちに終る。今夕土俵に上る。勝敗の事、兩々眼中になからん、即ち四股を踏んで、陶然その席に着き、狸州又坐に上る。時に九時十分前なり。狸州のメートル稍々上る。僕の立合ひ難き所は君の鐵砲を恐るればなりさ。乞ふ君の內股のみを掬ふ狸州山と思ふれこと勿れ。我輩行司にそれは聞きたい。我輩內股を掬ひ、君强引に來て、それで國技館上の相撲と同じ（我等の藝術上の世界に於て）なるならば、止んぬる哉。我等は我等の世界あり、我等は人氣觀衆を集めることが出來ないにしても、我には我等の觀衆あり。何とかの山忽として出來るものでないといふことが、伊藤君今日思へ。實はお灸も二百四十灸濟んだんで、お灸のお線香が殘つてゐる。それをお灸の跡に一本お座敷のために使ふも、藝の身のためのなりはいの寂しさや、と西鶴ならばいふ所でもあらうか。西鶴の時代には西鶴はあるんだ。西行の時代には西行があるんだ。西鶴の點さ、西行の點さ、又芭蕉の點さ。何とも仕樣がないんだ。時代相應に出來てるものであり、又時代

相應の點なんだ。僕等近代から見れば、幾分の物足りなさがあるとか當然なんだけれども、然りながら、彼等は彼等の時代に於て、實に長い時代を飛翔してゐることを我等は否定する譯に行かん。彼等にいはすれば、斷じて何百何十年已れの藝術が生きるといふ確信に立つての藝術に違ひないんだ。無論さうあるべきなんだ。今回、屢々引いた川老の言を又引くことになるが、川老曰くだ。三十年經つたならば已れの言葉は金聲を發せん。あの川老にしていつた。彼何者ぞ、あの川老の偉さといふものは實に實に偉いんだから。あの川老にして尙三十年後に地に擲てば金聲あらんとさういひました。我輩等の如きものは三日にして世に弃らるさ。

ソレ碧落ノ碑ニハ賢本無シ。即ち堂に上る。九時二十分。狸州メートル稍々上る。再び酒座に上る。隈伯瀨來し一物をいはんとしたけれども、隈伯來らずサ。文壇の事、彼に似て大きくなれよ。彼に似て大きくなるものなし。我等大きくなる譯に行かない。我等又書くものも上手なり、お酌も上手なれば、多少の一家を持ち得ることも出來ん。併し人の借金をしても千圓の家を持つ場合に、我輩は五百圓の程度で持てる。働きのない場合には、ソモサン。人は千圓、私は百圓、それ位の程度では、一家を持つたらどうやら間違ひのないやうに、出來るかどうか。恐らくは出來ないでせう。この醉書藏が、盃を地に擲つて金聲を發する譯がある譯がないんだ。金聲を發すといふ言葉があつても、我儕の前には實に金聲のないことは夥しいんだ。

僕はね、まア二十一二位の時分だつたかな。その時分は僕の貧乏もひどかつた。いろ／＼な友達から世話をされて、訪問記者などをやつたことがありますよ。併し矢張り貧乏な時分でしたな、殊に僕の貧乏といふと、私はその時分から傲慢だつたものだから、大變ひどかつたんですよ。その訪問記者時代にはいろ／＼なことがありますけれども、その中、特に私の記憶に殘つてゐるものを二三お話したいと思ふ。私が初めて訪問したのは、實業之日本社長增田義一先生

です。そちらへは御紹介の名刺も頂いて居つたので、幾度もの上にお目にかゝることが出來ました。「主從協同の精神」その時は確かかういふ題だつたやうに思ふ。變な印象をいへば、お話中、「ミトレッコが……ミトレッコが……」といはれたが、私は毛唐の學問の素養もなし、これは大變なことになつたものだなあ、と思つて、ミルトンとかいふやうなミルとかミラとかいふやうな言葉を、貧しい記憶の中に搜したものでありますが、僕聊か疑問のやうな顏をしたので、先生は二三度「ミトレッコ」を繰返された上、「只見れば、何の苦もなき水鳥の、足に閑なき我思ひかな」といはれました。即ち「ミトレッコ」は水戸烈公なりさ。これで分らなけりや餘ッ程馬鹿ぢやないか。

昨夜はメートルが上り過ぎて、脫線又脫線、非常に混亂したことと思ふが、初めから醉拂ひのくだなんだから、撤回もしたくない。それに久振りで來て見れた廣津君とも、どんた話をしてどんな風に別れたのか、それすら思ひ出せない。只彼が、僕が近所の俥で歸ることを勸めたのに、創作氣分でかうして歩いてるんだから、神樂坂まで歩いて行くといつて、俥を避けたことだけは、今朝思ひ浮んだ位だ。廣津君とは兎に角愉快だつた。實は今曉三時半に目が覺め、隣りの庭園の雀の囀り聲の愉快らし、雞の元氣た啼き聲、鳥の聲など聞いて居ると、彼等は如何にも愉快らしいんで、自分も遂ひ床を蹴つて起きるやうな氣持ちになり、四時半頃、下宿を出て、春町まで往復の散步をして來た。往來を馳けてゐる犬共も矢張り愉快らし。人間も本當は朝の機嫌はあんな風にあるべきなんだらうに、どうも僕などは、その自然の粜れた愉快すらもう失つて居るらしく、かうした現在の生活について、多少の反省なきを得ない氣がし、雀や犬共の生活が羨しいやうな氣持ちがした。六時頃部屋に歸つて來たが、おせいはまだねぼけてゐて、中々ぐづるので、折角の朝の氣分を滅茶々々にされ、つひ癇癪が起きて、罵つたり叩いたりし、實に浅間しい氣分になり、終日床の中で過ごし

た。かうしたやうな生活も最早や八ヶ月になるのだな。何時までかうした生活が續くのか、續けて行かなければならないのか、お互に立場の上からも、眞面目に考へられて來る。非常に暗い氣持ちにならずにはゐられない。それで、實は今、あなたがお出でになる丁度前に、二人の間に別れ話が出て、大體妥協點が見え出されたやうな氣がするが、思へばおせいも不憫なことであるが、彼女のためにもその方が仕合せなんだらうと思ふ。僕としても、この氣違ひ染みた人間を、何時までもお守りさしておくといふことは、寧ろ慘酷なことのやうな氣がされて來た。こんなやうな譯で、あなたには大變申譯のないことですが、最初の計畫、訪問の――大隈侯訪問のことは、今夜はとても喋れないし、喋つたら一層失敗すると思ひますから、どうぞ勘忍して下さい。十何年來の「呼鈴」とか何とかいふ題で、小品に書きたいと思つて、難しくて書かなかつたものでしたが、今回又失敗に終りました。醉狸州七席七題――の初めからのことを考へると、憂鬱と苦い冷汗の氣持ちで堪らなく、本當に息塞るやうな氣がされるんですた。クロイロフの百日の、而かも醉拂ひの驢馬であり、あなたが、象だつたといふと、あなたの惡口になるが、兎に角からいつた相棒二人で、世界一週を志した、その信念を讀者にかつて頂きたいものと思ひます。長々お退屈さまでした。

クヨ〱するな！何でも勇敢にやれ！

大泉黑石

『わが貧豪大泉黑石の邸へ近頃小さい桃色の小包が屆いた。黑石ひそかに思へらく。これは屹度親切な讀者が自分の好きな蕎麥粉でも送つてくれたんだらう。いや確かにさうだとニコ〱眼の色をかへて開けて見ると大違ひ。現はれ出たのは蕎麥でも饂飩でもない長さ二丈にあまる長篇の手紙と來たものだから先生すつかり悄れて了つたが、氣を取り直して讀んで見ると、この手紙の差出人は横濱に彷ふてゐる露西亞人で而も震災のために勤め先の商館が燒けて了ひ食ふに困るから小說家にでもなりたいといふのだ。だから黑石先生の門弟にしてくれないかといふ一節へ來ると、黑石なるもの、また〱眼の色をかへた。といふのは、露西亞人で食ふに困りさへすれば一人まへの小說家になれさうな言ひ草が箆棒癪に障つたんだらう。おまけに蕎麥粉と思つたのが此の始末だから、疳の蟲も手つだつて件の手紙を前に引きすゑ憤然として（バカ！　お前はバカだよ。べらんめえ！　冷汗や小說が眼だまの色で書けてたまるけエ！）と怒鳴りながら小包の袋の、黑石先生御脚下とある隣りへ持つて來て（お前のやうな男は、猫に咬まれて死ぬがよい）と朱書きで逆送した云々』（大正十三年二月二十四日『週刊朝日』第二十八頁）――この記事で見ると大泉黑石なるものは頗るヘンな奴だ、いや、二月二十四日以來頗るヘンな奴だと思はれてゐるに違ひない。他人の迷惑なら三年が五年でも我慢するが、御手

許の災難と來ては、今日まで持ち越すだけでも勉強した方だと思ふから、敢て此處に開き直つて猛然と抗議する。『東京朝日』の記事は眞實か？　無論眞實ではない！　そんなら嘘か？　いや嘘ではない！　すると一體どういふことになるんだ？　いや、さう急かれると話しにくいが、事の起りはかうなんだ——諸君は王朝一代の風流才子中納言行平流謫の地として有名な神戸蘆屋の里を知つてゐるだらう？　行平歿じて九百八十年にもならうといふ今日此處に、どこからともなく現はれいでた二代目行平があるのだ。中納言が佗の跡にバラックの家をかまへ、小說を書くやら演說をするやら、矢鱈滅法に敵人の向ふを張つてゐる二代目行平があるのだ。と言へば、諸君の中には、ア、。あれか？　と頷く人もあるだらう？　いかさま、去年の地震に潰されそこなひ、憲兵の目を胡麻化して逃げ失せた風流社會主義者加藤一夫のことなんだが、それとは知らずに、大將、今ごろは何處にどうしてゐるかと心配してゐるところへ、蘆屋から葉書が來た「犬殺しみたいな役人を相手に、蚊のやうな毛脛を振りまわす活劇や、道のまん中で昂奮して卒倒するやうな藝當はモウやめた。今は心靜かに行平中納言の菩提を弔ひながら勉學してゐるから安堵してくれたまへ。」といふのだ。そこで「大きに安堵した。實は僕も東京がいやになつたんだ。君の尻馬にのつて誰かの菩提を弔ひかた〴〵、暫くでもいゝから、心靜かに行ひ澄してみたいのだが、適當な古跡はなからうか？」と言ふてやつた。同じ貧乏をするなら東京の燒け跡を辻路つきまわるよりは、蘆屋あたりの安長屋に寢ころがつて松風村雨の夢でも見る方が愉快だと思ひながら、返事を待つてゐたが、サツパリ來ない。諸道屋の加藤のことだから本氣にしないで打つちやつてゐるのか手紙が屆かないのかと思つてゐると、間もない或る日の朝、蘆屋から電報が來た「僕の處へ落ち合つた退京連が久しぶりに文談演說會をやることになつたから是非のり出して來たまへ」といふのだ。新聞の噂によると僕の仲間の辻潤といふノラクラ者が、丁度あの邊をノタ打ちまわつてゐるのだから、事によると此の手合ひが二代目行平の家へ流れ込んで、退屈しのぎに村の衆を

相手に出放題の熱を吹かうといふのかも知れない。文談演説もないもんだが、東京にゐても始まらぬ。加藤や辻を相手に神戸くんだりまで安長屋の素見に行くのも氣まぐれでよからうと着物を着がへてゐると、表の硝子戸を破れるやうな勢ひでガン／＼叩く音がするのだ。驚いて跳んで行くと、ネクタイのないカラーに、靴の上まで垂れさがつてゐる皺苦茶の長いフロックを纏ふた野田勘兵衛が、入口に突つ立ちながらヘラ／＼笑つてゐた。勘兵衛とは三河島の屠牛場時代からの知合ひで、その時分、僕の仲間には今一人平口萬之助といふのがゐた。萬之助と僕とが月島造船所を食ひ詰めて、屠牛場へなぐれこむと間もなく、口入屋の亭主が一人の男を合宿部屋へつれて來て宜敷く頼むといふのだ。これが勘兵衛だつた。だから取り敢へず作業場へつれて行つて、明日から此處で働くんだと敎へてやると「世が世なら、私もこんな不淨場へ來るんぢやないんですがネイ。」と泣き聲で言ふから、流石に同情して僕の仲間に入れてやると、勘兵衛はスツカリ喜んで「お見受け申すところ、あんたがた御兩人もやはり世が世なら、こんな處へ御入來なさる柄でないネ。」とお世辭を言つた。だから勿論、牛や馬を相手に朝から晩まで、血だらけの鐵の棒をふりまわすのが能ぢやない。小綺麗な商賣が見つかり次第に廢めるつもりさ。どうだい。いゝ話はないかネ。と言ふと勘兵衛の顏がキユツと緊張した「いやア。あんた。仕事の口なら幾らもありますよ。さういふ譯なら私の家へお出でなさい。ね。あんたがたは狹山の銘茶を御存じだらう？　私の親爺は保谷町のお茶造りなんだ。池袋から十五分ばかり汽車にのつて左の窓から首を出すと、野田茶園とペンキで書いた黑い煙突がヌツと見える。そこだネ。昔はモツト盛んにやつてゐたが、この節、あの界隈が拓けて來たので、親爺のやつ、茶畑の半分を住宅地に賣つちまつたんだ。今は工場が二ツきりないけど、仕事は絶えずやつてゐるし、いつも手不足で困つてゐるんだから、私の手紙を持つて行きさへすりや喜んで使つてくれるよ。何アにさ。一緒に行つて私の口から話をすれば一も二もない事なんだが、」と言ひかけてヘラ／＼笑ひながら「あんたがたの前

だが、僕はネ。私がネ。親爺の金に手をつけて株を内證で少し張りとばしたのがバレてお極りの勘當をくつたんだ。それきり一年も寄りつかずに彼方此方のたくり廻つて到頭此處までやつれ込んだといふわけなんだが、私のおへおや、いくら頭錢の親爺にしろ、勘坊、今ごろは何處にどうしてゐるやら、若氣のあやまちにイケ太い眞似をさらして逃げくさつたが、根は正直者だ、定めし今頃は後悔してゐるだらう、これからは心を入れかへてミッチリ稼がう、いや、この氣になつてくれさへすりや、文句なしに家へ入れてやるのだが――と、かう思ふ時もあらうといふもんだ。何しろ私はたつた一人の倅なんだからネ。そこへ、あんたがたお兩人へ手紙を屆けて貰ふ。手紙の中には、お袋が一と目でワッと泣くやうな哀れつぽい事が山ほど認めてある。その結果、お袋が親爺に縋りついて何とか詫りに迎へ來さアネ。どゝの詰り私が家へ歸れるやうになると、三人揃つてお茶の葉でも揉みながら悠々と出世の段取にかゝる。一擧兩得で惡くはないネ。どうです。これを御緣に私の家まで一と足出掛けませんかい。」と沁々とした調子だ。「耳よりの話だが、素人に出來るかしら聞いて見ると、焙烙茶の前に突つ立つて兩手を動かして居さへすればいゝといふ挨拶だから、製茶場の仕事よりは樂だと思つて萬之助に相談すると、折角の好意だ。骨の折れぬ仕事なら何でもやるよ。保谷町といへば遠くもないから、樣子を見た上で、よさゝうだと思つたら話をきめて來ちやどうだと乘り出して來たので、勘兵衛に手紙を書いて貰ひ、汽車賃を掻き集めて三河島を出た僕は池袋から汽車にのつた。成るほど、この次に保谷だといふ處へ來て窓から首を出すと、東西南北一面の茶畑で、眞つ白い花の匂ひがとんで來る。野田茶園といふ文字は煤けて見えないが、一本の大きな煙突が青黑い茶の中にポコンと現はれて、工場らしいトタン屋根がピカリと光つた。これだナと思ひながら、鳥籠のやうな停車場を出ると町を踏み切つて共トタン屋根の下へ來た。戸口が締つてゐるのでコツ／＼叩くと、窓から女工が顔を出した。早速ながら是を大將に渡してくれと勘兵衛の手紙を持ち出した。「大將つて誰かネイ？」「野田勘兵衛君のお

父さんだヨ」。女工はサモ訝かしさうに僕の顔と手紙とを見くらべて考へる風だつたが「ア、。野田勘の爺さんかい？そんなら此處でネヱだ、あの角の家だアヨ。」と指して見せるから其處へ行つた。ところが成るほど、お茶屋には違ひないが、勘兵衛の話とは大分ちがふのだ。垢びかりのする茶釜が只一ツ、埃つぽい狭い店に置いてある。頭の禿げた石佛のやうな爺さんがキチンとかしこまつて、膝の上に拳固をのせてゐる。間違ひではないかと思つて念のために勘兵衛君の家は此處ですかときいて見ると、さうだヨといふ挨拶だから心細くなつたが、ともかくも例の手紙を出して「何分よろしく願ひます」とお辭儀をしながら渡した。爺さんは「フン。何の用だ」といはぬばかりの呆けた目つきで、一應讀み終ると其の手紙を持つた片手をヌツと伸べた。かと思ふと、禿げ頭を前につき出して、首筋と襟のあいだにポンと投げ入れた。よく見ると此の手紙のほかに、ハガキや封筒が二三枚、背なかに辷り落ちないやうに巧く挾き差してあるのだ。妙な癖があるもんだと思つてゐると、爺さんは僕をヂロリと見て、膝の上の拳固をブル／＼顫はせながら「や！ 悴のお使ひは御苦勞でやした。お歸んなすつたらアノ野郎にコウ言ふておくんなせヱ。ヱ、か――俺もハア、年はとつたが保谷の勘十だア。手めえのやうな大めし喰ひの骨おしみ野郎にだまされて食ひ倒されるほど耄碌はしネヱだ。ヱヱ加減の泣き言サぬかしくさる暇には、屠牛場の牛の糞でも掃出して拵えて居るがヱ、だ。」と怒鳴るやうな調子だ、こりやいけない。正直に復命しやうものなら勘兵衛も大いに悲觀するだらうが、さういふ悴の紹介では此方の話も巧く運ぶかしらと思ひながら「そのお頼みは確かに承知しました。時に」と僕は爺さんの顏色を窺つて「私どもの方は如何でせうか」と切り出した。「お前さんの方とは何だネ？」「手紙に認めてありませう？」「いゝや。何とも書いてないよ。」と爺さんは益々呆けた「そんな筈はないんだが 實はネ、お宅の工場で私と今一人の仲間を使つていたゞくやうな話になつてるんで、態々お訪ねしたやうな譯ですがネ。」すると爺さんは目を圓くしてびつくりするのだ。「アノ野郎が、そんなことを言ふたのか？」「えゝ。さ

うです。いけませんか。」「いけませんも何もヘッヘッヘ。俺の家はナ、この店と茶畑のほかに、母屋が一つあるきりだよ。お前さんに來て買ふやうな工場がありや、こんな厨茶の小賣りなんかしてゐやしない。見ればわかるぢやないか。お前さんもお前さんだ。呆れたネ。」と言ふのだ。呆れたのはこつちだ。店の様子はいさゝか變挺だが、目のまへの茶壺は見本で、工場は別にあるんだらう、田舍は大概そんなもんだと買ひかぶつてゐたので、腹も立つが可笑くもある。犬でも人間でも腹がへると眼がくらんで何にでも喰ひつくもんだ。いくら眼がくらんでも人の話を輕々しく本氣にして慌てふためくのは考へもんだと思ひながら、いざとなると此の通り。すつかり馬鹿を見た上に、爺さんにまでヘラヘラ笑はれて三河島へ引き揚げたことがある。野田勘兵衞はこんな男だ。人を人とも思はぬ横着な眞似をするので、屠牛場の牛殺し仲間にも憎まれたり毆られたりした。だから其後萬之助と僕とが、西伯利へ押し渡る時も默つてゐた。同じ部屋に寢起してゐればこそ、忌々しいが口を利いてやるのだ。別れて了へば此んな奴の事なんか忘れて了へと忘れて了つた。それから今度は萬之助と西伯利で別れて、僕ひとり東京へ舞ひ戻り、本郷の湯屋の裏に落ちついて、これから資本いらずの文學者にでもならうかといつた調子で、自作の小說を東京中の雜誌社へ持ちこんでは勇ましく斷られるのだが、賣れない原稿でも氣ながに持ち廻つてゐると、名前だけでも有名になるもんだ。といふのは「大日本帝國商品界」記者・花園紅人といふ男が、湯屋の裏の僕を訪ねて來たから、取り敢へず會つてやると、是が三河島の屠牛場にゐる筈の勘兵衞なんだ。あんまり意外だからポカンとしてゐると野田勘の花園紅人は僕を見てヘラヘラ笑ひ出した。「一別以來、まことに久濶！近頃は盛んにお書きですな。いや、このくらいの御發展はあつて然るべきだと思つてゐました。蔭ながら愉快ですよ。大いにおやんなさい。」と言ひながら、ノコノコ上りこんで「サテ今日は、久しぶりに西伯利のお土産話でも伺ひ傍々、社用を帶びて御相談に上りました。」といふ騷ぎになつて來た。屠牛場の醬油樽に腰かけて、狹山の銘茶を知らネ

エか？保谷(ホヤ)の勘十は私(あつし)の親爺だと啖呵を切つた勘兵衛が、花園紅人になり澄ますほど文明が發達したのだ。卓の上に兩手をついて人並みに挨拶したつて此方はビクともするんぢやないが、勘兵衛の聲音にしては餘り奇抜だから、どうしてこんなに氣味の悪い出世をしたのか何ふつもりで、先づその御相談とは自體何だ？ときいて見た。すると勘兵衛は赤い鼻の下をゴリ／＼擦りながら、徐ろに外套のポツケツトから「大日本帝國商品界」第何號かを一部とり出して、敬々しく僕にくれた。名前ほどもない雑記帳みたいな廣告だらけの貧相な雑誌だ。まつぴるま人様のお目にかけるやうな代物ではないナと思つて尻ごみしてゐると、勘兵衛が勿體さうに言ふのだ「その御相談といふのはネ。私の方の社長が、あなたの小説『短刀(ナイフ)』を讀んでスツカリ感心しちやつて、こりや小説以上だ、まるで短刀(ナイフ)の廣告だ、かういふ作者に自分の雑誌の記事を書いて貰つたら嘸面白いものが出來るだらう、と編輯同人に話をしてゐたのです」僕はおかしいナと思つた。小説『短刀(ナイフ)』はまだ活字になつてゐない筈だ。といふのは『解放』といふ雑誌社の棚の中へ預けてある。こゝの文學部に、小説家廣津和郎がゐると聞いて、まつ直ぐに擔ぎ入れた僕の力作で、廣津和郎は知らないが勿論一と目見たら巧いと言ふだらう。さうして買つてくれたら其の原稿料で白米の二三俵も買ひこむことになつてゐたんだが、中に立つ氣の短い編輯者のわからず屋が、甚たお氣の毒ながら廣津先生にお取次ぎするだけの物ではありませんから、といふ理屈で原稿を戻して來たので、白米の方もお流れになつたが、これは後の災難だから、奇妙に感じて僕の『短刀(ナイフ)』を何處で見たか聞き糺すとかうだ「サア。うちの社長は雑誌社仲間に顔が廣いから、何處かで見たんでせうヨ。私は其話の中に貴君の名まへが出るので、もしや左様ではないかと思つて聞くと矢つ張りさうだ。イヤ。その大泉さんは私の舊友ですと辷つかり口を辷らしたもんだから、ヂヤ、花園君から一つ吾々の雑誌へも記事を書いてくれるやうに頼んで貰ひたいと來ちやつたんでサ。御承知でないかも知れないがアノ有名な辻潤先生や、宮島資夫先生などは、モウ内輪同様にし

て惡い——若い——損つてゐるんですよ。おや〳〵なから原稿一枚につき金一十五錢で、その一枚が一日のやうな有樣で一寸お話

でせう？」いくら勘兵衛の嘘つきでも今度は大丈夫だらう。この賦金にさへなりやいゝと思つて引受けた。翌日から小說をやめて「大日本帝國商品界」の編輯局へ詰め切りだ。神田柳原の路次の中のドブ臭い三疊に頭を列べて、天賞堂の寶石がどうだ、食べたこともない風月の羊羹がどうだと頻りに能書きの稽古をやつては見たが、「短刀（ドス）」の作者も此の道にかけては辻や宮島に敵はぬ。といつて一枚三十五錢で瘦せ我慢をはるのも腹のへる話だと思つてやめた。改めて紹介する程の人物ではないが、一とたび電柱の廣告ビラを見ることによつて屠牛場の人足から「大日本帝國商品界」の外交員に一躍した野田の勘兵衛は、いくばくもなく「東京毎日」の廣告部に鞍がへして、去年の九月まで何の故障もなかつたが、例の大地震の新添へをくつて可愛相に馘られた。折角の幸運もこれで解散だ。根があゝいふ男だから、この際泥坊でもやりやしないかと思つてゐると、僕の住居の長崎村までやつて來て、下谷警察署の手から引きとつた保谷（ホーヤ）出身の罹災者三十幾人をつれて故鄕へ歸ることになつたから當座のお別れだと、勇士のやうに肩をそびやかして言ふたもんだ。存外偉い。この寸法で行けば、どんな頑固な親爺の勘十だつて、いきなり悴の向ふ脛をカツ拂ふやうな氣づかひはなからうと安心して別れたが、半年ばかり立つと此の野田勘兵衛が　オツト待つた黑石先生！あなたは一體何を饒舌るつもりか知らないが、話のはじめに持ち出した「週刊朝日」の露西亞人や加藤一夫の電報はどうなつたんだ？勘兵衛のことなんかどうでもいゝから、そつちを早く片づけて貰ひたいナ——いや、全く仰せの通り！勘兵衛の身の上噺に道草をくつてゐる場合ではない。が、加藤一夫の電報を見て神戸行きの仕度をしてゐる處へ、地震このかた、半年ぶりに野田勘兵衛が妙な風采をしてやつて來たので一寸面喰つた僕は、この男の顏を見ると何時も昔の事を思ひ出す癖なんだからツイ脫線して了つた。が、この迄で僕と勘兵衛とが、僕の部屋の中の卓子を圍みながら、こんな話をしてゐるんだ

筋へ引つ返すことにしやう――「いつ東京へ出て來たんだい。オイ。」と是は主人の僕。「十日ばかり前サ―」とヘラ〱笑ふ客の勘兵衛。「フーン。だが、あゝして手柄を立てゝ歸つたんだから、今頃は田舍で大持てだらう、燒ケ野ガ原の都へなんか出て來る氣にはなるまいと思つてゐたんだがネ。」「いやア君！」と勘兵衛は頭をふり〱吐き出すやうな調子で絶望的に言ふのだ「持てるどころかい！苦しい思ひをして三十兩の身錢を切つてサ。連れて歸つた罹災民どもは禮にも來ない始末だ。かてゝ加へて氣の知れない奴は縣知事だよ。あれだけの骨折りに對してお下げ遊ばした金一封をあけて見ればタツタ三兩！三兩とは恐れ入つたネ。而もその大枚三兩を受取るのに、一兩二分の貸し自轉車にフンゾリ反つて二日がかりの縣廳通ひと來たもんだから、ヘトヘトになつて差引きゼロさ。自轉車の上で怒る、怒る、封を切つて一兩のボロ札を三枚チラと見た俺は全く涙も出なかつた。戰爭と地震にぶつかつたら最後、眞つ先に立つて逃げることにモウ決めた。人の世話なんか願ひ下げだ。」剝げない地金の告白だ。「さうさ。生存は兵法だよ。金も力もない奴は、金も力もある奴を瞞着するか犧牲になるか、二ツに一ツで生きて行くやうに出來てるんだが、人さまの犧牲になるやうな、しほらしい柄でもない君に、このコツがわからんとは不思議だよ。」「とおつしやると、人さまを瞞すのが手前どもの家の藝だから、よろしく奧の手を出して歩るき給へテナ御挨拶かネ。へツ。たまらねヱや。何てマア恐ツそろしいことになつたもんだ」と大きな溜息をつきながら、泣かうか笑はうかといふ情けない顔つきで、まともにヂツと僕を見つめてゐる勘兵衛の眼玉が、ヂリ〱と殺氣を帶びて來るのだ。狡るさうな眞つ黒い瞳孔はだん〱大きくひろがり、何か、から、小さい影の一ツ一ツがその孔の中に踊り狂ふやうな定かならぬ光の飛沫が、復讐と嘲笑とを仄めかしてギラ〱と入り亂れとび散つた。今俺は迚も愉快なことを思ひ出したのだ。と言はぬばかりに大きく一ツ頷いた勘兵衛はかういふのだ「眼力恐れをなすネ。ヘツヘ。いや、全くだよ、考へて見たまへ。「東毎」のお拂ひ箱かケチの始まりで今日までヘマつゞ

きだ、田舎の奴には馬鹿にされ、都會にはいびられる、いくら野方圖の俺だつて、あんまり業腹だ、何とかしてやらうと思つて埋め合せをつけなくちや氣が煮えるといふ譯で頻りに考へ込んでゐると、俺と一緒に、東京へ遊びに出た山下勇造から手紙が來た。知つてゐるかい山下勇造を？」「社會主義の詩を書く男ッ、あれか？」さうだと勘兵衞は答へたが、試驗の惡いときには資本家萬歲の論文もつくる山下勇造が、彌次郎兵衞なら、この男は喜多八といふ格の相棒ださうだ。「この山下の手紙によると、あいつの先生が千葉の郡部から代議士の候補に立つので、運動かたを頼まれて毎日飛び廻つてゐるが、お前も手傳に來てくれないか、この人は○持ちの醫者で政治屋のことは何も知らない爺さんだから、いゝ事があるぜ。」とかういふ譯サ。で、何は兎もあれ金儲けだ、俺の思惑によると、山下と一緒に其のお醫者さんの運動員になりすまして、候補者の戸別訪問をする、買收をする。ビラを撒く、演說會場で後ろの方から拍手喝采をする。隙を狙つてお醫者さんの軍用金をチョロマカス。巧いことを言つて酒をのむ。當選しやうが落つこちやうが此方はするだけの事をした上で禮を貰ふ。こいつは運が向いて來たナ！と思つて喜び勇んで山下の家へ駈けつけたのサ。ところが成る程、山下の話も嘘ではない。俺の豫算はガラリと外れた。と思ひたまへ。君なんかは知るまいが、道玄坂の「作酒家」にお福さんといふ青豆のやうな十七八の藝者がゐるんだ、このお福さんに山下がゾッコン打ち込んでゐた。と思ひたまへ。金でも拾つたら身受けしやうとまで心に誓つてゐると棚からボタ餅、選擧の運動屋を頼まれて少しばかり金の融通がつくもんだから、善は急げと五百兩の現ナマをふところに落籍の談判においでなすつたが、なか／＼どうして、千兩は鐚一文欠けても厭でムると首をふつて抱へ主は應じない。「當りまへだよ。この節は陸軍省の馬でも五百兩では御拂ひ下げにならんからね。」と言つて、奴さん千兩と纏つて醫者の金を胡麻化す度胸もないので悄氣てゐる處へ、それ 君の關係筋の活動會社に白川百合子ツて女優がゐるだらう？あの女の亭主が山下の友達で、ブラ／＼やつて來た。と思ひたまへ。例の一件が旨く行かないので、いゝ智

慧はなからうかと奴さん迂つかり言つたらしい。ところで此の女優の亭主がまた大變な野郎でネ。山下の打ち明け話いて了ふと、フン！そんなことに悶着するやうな山下勇造君も氣が弱くなつたネ。よろしい！「春酒家」へやる金がおなら、半分でいゝから乃公(オレ)に寄越したまへ。百合子と二人で巧く女を盜み出して何處かへ隱してやる。どうだい乃公(オレ)に任せるわけに行かないか？と言つたさうだ。流石の山下も鼻のうちは二の足を踏んだが、さうでもしなければ、惚れた女と夫婦になることが出來ないのだから、ヤケ半分に宜敷く賴むといふことになつた。色戀もかうなると面倒だが、女優夫婦は二百五十兩の請負ひ仕事にかゝつたネ。白川百合子はお福さんが行きつけのお湯屋をつきとめて、しばらくの間にお福さんとは湯槽の中で近づきになつた。と思ひたまへ。何かの切つかけに山下の話を持ち出した。お福さんとは似たり寄つたりの藝人で、おまけに山下とは懇意の仲だテンで、恐ろしく打ち解けて來る時分を見計つて、一體はかういふ手筈になつてゐるんだから、思ひ切つて逃げてはくれまいか、とか何とか口說きにかゝると、實際山下に惚れこんでゐるんだか、かうまで苦勞して夫婦になりたい男の情に動かされたんだか、お福さんは百合子の言ふことを聞いたと見えて、その夜、お湯屋の戸口を出た二人は、濡れ手拭に石鹼箱をブラ下げたまゝ、澁谷のステイションから品川行電車にいつかつて、大坂まで突つ走つたといふんだから、この邊は商賣の活動寫眞でやると乙な活劇だ。山下の考へでは、選擧がすみ次第に大阪の新開祉へ口を探しに行つて、あつちでお福さんと家を持つのだから、一と足お先にやつたわけさ。成るほど、新家庭には誂へ向きの家が萩の茶屋とかに見つかつたので、百合子とお福さんとは其處で山下勇造の上かた下りを待つことになつたのはよかつたが、こんな事件には馴れ切つた藝者屋の目から見ちや、子どもの隱れん坊だらうよ。手を廻したかと思ふと、すぐお福さんの隱れ家をつきとめて置いて百合子の留守をつけ目にお福さんを脅して連れ去つたもんだから、百合子は膽をつぶして、東京へ電報を打つやら、山下の野郎が泡をくつて狼狽するやら飛んだお茶番サ。だが、もしやと思つて

「後酒家」の樣子を窺ふと、これはしたりお福さん。元の鞘にチャンとおさまりかへつて傍ろに三味線でも弾いていらつしやる。新派悲劇も此處におきまして全卷の終と幕を引いちまやア何のことはないんだが、奴さん、俺をつかまへて有の物語りをしちまふと今度は女優の懺悔だ。ヤレ、二百五十兩をふんだくつたアノ女優が油斷をしたので、こんな結果になつたのだ。妾、大阪へ來たついでに奈良を見物したいワ。お福チャン、あんたお留守番をしてくれないこと？さうして出かけた日にしてやられたんだが、モウあんな不親切な奴どもとは絶交だ。と怒つたりベソを掻いたり二た目には二百五十兩が出て來る。サテ野田勘兵衞君、殘りの二百五十兩を君に進呈するから、君の頓智でモウ一ぺんお福坊をおびき出してくれるわけには行くまいか？と來たネ。だから、一度で懲らずにまた〳〵やり直さうといふほどの熱烈ぶりから察するに、そのお福さんとやらは、餘つぽど結構な女と見えるネヱ。ヘツヘ。と言ふと奴さんニヤ〳〵笑ひたがら、ウン、女は兎に角、棒にふつた二百五十兩が惜しいよ。今頃はアノ金で温泉へでも行つて、あの夫婦が枕を列べて悠々と寢てゐるかも知れないと思ふと、腹が立つて癪が焚えるんだ。とさ。ヘツ。驚き入谷の來れ蛙とは奴さんのこツた。馬鹿げて向ふ見ずの、おまけに鼻の下のダレ下つたケチンボウめ？宮島賛夫の十八番ではないが、一場の訓示を與へてキツパリと斷るのが人情だ。しかし、俺が斷ると奴さん、外のやつに頼むだらう？どう甘く行きツこはないが、二百五十兩の金を他の奴に持つて行かれるのは勿體ないと思ふのも人情だらう？君。そこで俺は山下に向つて、他例から俺に相談すれば、そんなドヂを踏みやしないんだ。まあ、いゝよ。君のためなら水火も厭やしない。女の方は引き受けてやるから安心したまひと引き受けた。奴さん、眼尻を上げたり下げたり頻りに喜んで揉手までしやつといふ噂になつたが、冗談ぢやない、水火も南瓜もあるものかい、こんな物騷な事があるから、錢吝屋の商賣も思つたほど樂ぢやないのだ。」と野田勘兵衞はペロ〳〵唇を舐めまわした。が、勘兵衞の無駄話は何時おしひになるんたか見當もつかない

し、卓子は既に嘩だらけだ。――讀者諸君。勘兵衛の饒舌を此の邊で打ち切らうではないか?冗いやうだが僕はソモソモ『週刊朝日』の記事の辯駁をするのが本篇の目的なんだから、默つて聽いてゐると、いゝ氣になつて、サア俺の話はこれからだ、と言はぬばかりに構へる勘兵衛の様子に驚いた僕は突つ切るのだ――「久しぶりに失禮なことを言ふやうだが、君は一體何しに來たんだい?用件を承はらうぢやないか?」流行の勘兵衛もドギマギしながら、赤い鼻の下をゴリゴリこすり、豆鐵砲をくつた鳩のやうに僕を見たが、すぐまた澄して言つた。「いやなことを言ひなさんな。今の話が大切の用件の序幕なんだから、お終ひまで聽いてくれたまへ。」だから僕は立つたり坐つたり大袈裟にソワつきながら「折角だが、今日は忙しいから此の次にして貰ひたいネ。僕はこれから旅に出るんだよ。」と言ふと、勘兵衛は例の狡るさうな眼で僕の身のまわりを疑りぶかく見るのだ。だから卓子の上に電報を放り出して見せると、勘兵衛は引つたくるやうに取つて目をくつつけてゐたが「ホウ。神戸で演説をやるネ?此の加藤ツてな誰だらう?」と小首をまげた。「二代目行平サ。一夫先生だよ。」「あゝ。一夫か!」と馬鹿にするやうな調子で、勘兵衛は電報を投け出した。「君は知つてゐるのかい?」すると勘兵衛はチョッキのポッケットに指を突つ込んで、椅子の上にグッと反り返つた。「あゝ知つてらアね!いつだつたか大将の家で演説會があつたんだ。俺の社にゐた洋行歸りの大杉榮も饒舌ることになつたんだが、饒舌つてゐるとこへ飛び込んで行つて、加藤の身内の者が大杉の兩腕をバッサリと斬り落す計略だなんて、先刻の山下勇造が聞き込んで來て俺にかう言ふのサ。野田勘兵衛君!「白山人」の一味も卑怯だよ。大杉さんを幡隨院の長兵衛式に片づけやうといふんだ、さう巧く斬れるかどうか行つて見たまへ。洒落た眞似をしやがつたら君の腕ツ節で叩きのめしてやりたまへ、何アに、相手は高の知れた文士見習ひの痩せ浪人ぢやないか、實は乃公が行きたいんだが、社の方が差し閊へさうだからネ。俺は斷りたいのだが、臆病だの不人情だのと、山下風情に馬鹿にされたり見くびられたりするのも忌々し

いから、大杉について世鴨宮仲の道場へ行つた。と思ひたまへ。大杉の顔を見ると一同シーンと鳴りを沈めたのは豪氣なもんだ。俺は誰にも悟られないやうに、監察の陰に控えた。ダンピラを引つこぬく奴があつたら最後だ。コレを取つて投げつけるのだと俺の側に置いてある角火鉢の上の冷たい鐵瓶をシツカリ握りしめ、片唾をのんで形勢を窺つた俺の姿も勇しく見えたが、そろ／＼武者ぶるひが始つて、握つてゐる鐵瓶の蓋が、ガラガラと鳴りやかるのには弱つたネ。これではいけないと下ッ腹へ力を入れ、演壇みたいな處に立つて饒舌る辯士どもの顔を睨まへながら、大杉の番が來るのを待つてゐると、頭から流れ落ちる冷汗が目尻に沁み込んで耳が唸り出した、かと思ふと今度はひどい動悸で、だん／＼氣がボッとして來る、これでもいけないと俺は横を向いて鐵瓶の口から水をガブ／＼のんで元氣をつけてゐたが、腕を斬り落すなんて大杉の口から出た噓だ。そんなことがあつちや大變だてんで、一人で行くのが怖いもんだから山下を引張つて行くつもりで、そんな出鱈目を言つたのサ。山下だつて怖いもんだから巧いことを言つて俺に押しつけやがつたんだ。と俺は思ふネ。血の雨はおろか毆り合ひもありやしねえ。壽命の縮まるやうな思ひをしながら、おつかなびつくりで鐵瓶の水ばかりのんでゐた俺は助かつたと思つてホッとしたよ。だから俺は加藤の御大も乾兒もよく知つてらアネ。」とおきまりの辯でクリ／＼眼玉を動かしたり赤い鼻を右ひだりに捻るのだ。勘兵衛さん、心中大いに得意がつてゐるナと思ふと「フン！君が加藤一夫なんかと演説をする。その筋の目が光る。同じ棒組だと睨まれる。こたいだの地震みたいな騷ぎがおッ始まる。とすればだネ、こりやおへもんだよ。惡いことは言はないから、よしたまへ。キシヤチンナイユカレヌ・百兩オクレと電報を打ちたまへ。ソンナラタノマヌと向ふから言ふて來らア。カツテニシヤカレとまた此方から言ふてやらア。そこで百年の友達も箱根の東西で喧嘩別れと來りや世話がない。神戸くんだまりで押し出して行つたつて、どうせ碌なことは饒舌るまいから、警察へでも引つぱられて痛い目に會つたらどうするんだ

い？二と勘兵衞は僕を引きとめにかゝるのだ、「大きにお世話だ。警察へ引つ張られたら署長に敎へてやらア。私の眼さめ踏えて控え居る現代の英雄は二代目行平の加藤君と私とは同業組合の友達に過ぎないのでありまして、今をること數年前、この朝臣が偉らさうな手前味噌をすり廻つては諸國の浪人を狩り集めて專ら悲憤慷慨に多忙をきわめてゐた時なんか、イケ好かない親爺だと思つて居りましたが、さき頃のこと、可愛い細君に逃げ出され、悲哀のあまりに涙をふるひ、拙いながらも一篇の新體詩をつくつて「讀賣新聞」にのせたといふ事件は頗る有名だから、閣下も定めし御承知のことでありませう。實を言ふと、加藤君はいゝ男なんだ。私が女でなかつたのが恨めしいと思ふくらゐだ。その愛すべき男に置いてきぼりを食はせるやうな女房なら、小野小町であらうとクレオパトラであらうと叩き出しちまへ！どうせそんな女房にワイシャツの洗濯をして貰つたつて襟垢は落ちやしない！御飯をたいて貰つたつて年中生煮え(なまにえ)だらう　まかり間違つて妾が惡うございましたと後悔面をブラ下げて戻つて來るやうなことがあつたら、いきなり爐をめくつて水をぶつかけろ！と、借金も恨もない奥方(おくがた)の仕打ちに、陰ながら義憤の癪を起しましたヨ。閣下。況んや當局者の行平卿に於てをやだらうと思つてゐますとオヤ〳〵さ。覆水は盆に逆戻り、いつとはなしの和解と來たので呆氣にとられましたが、いや！懲惡ばかりに忠實で、勸善の功德を知らない裁判官かワイニンゲルか？ニイチエかストリンドベルヒか？女に緣の薄い痩せ我慢屋の私には、情愛の市場に横町や抜け道のあるのが解らないのだ。成る程これが人間と論理の違ふ所以で恐れ入つたもんだと感心したのが動機となり、この善人の哀情家(センチメンタリスト)が馬鹿に好きになりまして、只今では、私ほど彼を愛し彼を理解する物好きはなからうとさへ思ふやうになりました。だから此の加藤君が私に出て來いと言へば、何はサテ置き飛んで行かずにゐられませうか？といふ譯でやつて來ましたが、お氣に障るやうな演說をいたしまして、まことに申し譯もありません。これも一時の出來心です。加藤君は主義者だから壯士屋リズムでせうか、私の方は

人間萬物無に障リズム・見ることを聞くことを面白くナイヒリズム・何をやつても臭ふに因リズムとでもいふべき主義で行詰生活の無水炭酸みたいな哲學だから主義者とは原料が違ひます。留置場へ放り込むなら相棒君を願ひます。と言へば吉人も呆れて放免してくれるサ。思ひ立つたら行くよ。僕は。」と口から出まかせにまくし立てると勘兵衛は煙に卷かれてポカンとしてゐたが「おや、矢つ張り行くのか？そいつは困つたナ」と、ほんとに殘念さうな様子だから、面倒だとは思ひながらも譯をきいて見ると、實は僕でないと出來ないことで、一面には貧乏な僕のためにと思つて、近ごろ誂へてもない儲け仕事を持つて來たのだ、それとも知らずに、かうして不愛想にあしらはれるのは心外だ。と勘兵衛は膨れつ面で不平がましく言つた。昔からこんな嘘をつくので、勘兵衛の儲け話には恐れをなして遠慮したもんだが、その長年たまつてゐる嘘の借金拂ひをした上に、今度はお釣りを貰つてもいゝ話なんだから、儲かる儲からんは兎に角、僕の仕事の武運長久のために　も一度だまされると思つて勘兵衛の言ふことを聽いてはどうだと勘兵衛が一人で躍氣となるので、さう無下に斷るのもどうかと思つたり、今度はどうやら眞個かも知れないと思つたり、眞實儲かることなら、二代目行平とは絶交しても苦しうないのが僕の流儀だから神戸行きはやめて其方へ乘り出してもいゝがと思つたり、とゞの詰りは、冗談半分警戒半分に「何度有り難い友情だネ。それだけの親切があればこそ嘘でも引つかけてくれるんだ。しかし今日は君が僕を嚇しに來たのでないツてことが、君のその眼玉の色でわかる。僕の神戸行きは今夜の三等急行に間に合ふから、兎も角も聽かうぢやないか。で　その儲け話は何だい？」すると勘兵衛は當り前だと言はぬばかりに「それ見たまへ。矢張り儲けたいんだらう？だから先刻の俺の話を落ちついて終ひまで聽くがいゝ。」と打つて變つて命令口調だ。「しかし、山下勇造とお福さんの事件なんか面白くないネ。またあの續きかい？」と僕は心配した。「ウン。續きは續きだが、あんな平凡なもんぢやないよ。少なくとも俺が飛び込んで行つた事件だ。あれだけの前置をして置かないと解らんと思ふ

ら言ふたまでの事で、あれからが君、大變なんだ。最後に到つて露西亞人の革命家ツてヨボ〱の野郎までが出て來るなんて想像がつくかい?」と口を尖らせて言ふから、その事件の何處か一體僕の金儲けになるのかしら、と思ひながら、彼の駄辯を聞くことになると、勘兵衞は舌なめずりして始めるのだ。

「サテ、俺は例の選擧運動屋の山下勇造に賴まれて「合酒家」のお福チヤンを引つ拉ひに行かうと約束した。といふところまで話をしたつけネ?實をいふと、加藤一夫の家の演說會に大杉榮のお供をしたのが災難の元さ。野田勘兵衞は頼もしい男だとスツカリ買ひかぶつてゐやがるんだから弱つたネ。へつへつへ。」と勘兵衞は顋をつまんで苦笑した。「さうだらうナ!君なんかは、ほんたうの正體を理解されて、頭を掻く人種なんだから、誤解されて迷惑するのは是が始めてなんだらう?」と僕も一寸彌次つた。すると勘兵衞は顏を顰めて「ウツフ。やり切れねヱナ!」とベソ掻くやうに「だから今度の一件も、俺に任せりや成功疑なしと御見立てなすつたもんだが、かりそめにも千兩といふ金のかゝつた女一人をカツ攫つて逃げるんだ。水瓜泥坊とは譯が違ふアね。細工は粒々、仕上げを見て居れと、大層な見得を切つて奴さんを喜ばせたのは此の俺に違ひないが、やり損へば誘拐罪で暗い處へ打ち込まれるのだ。劍呑々々。足元の明るいうちに一層のこと止めやうか?と思ひ直したのも勘兵衞さんの俺だが、しかし嗚呼!恐ろしき誘惑の斷崖に立ち迷ひて、危惧と不安に顫えおのゝく彼の貧しき小羊こそ哀ひなる哉だ。今やその首を捉えてお先眞ツ暗ケ谷へ投げ落すべく、二百五十兩の翼を打ちひろげハタ〱と舞ひくだる妄執の大鷲と防ふべく餘りに力弱かりき。アーメンと來て、俺の覺悟は無鐵砲に決つた。といつて馴れぬ仕事だもの。盲人の魚釣りで見當がつかねえや。何處へ手を廻して何うすればいゝのか?と頭をひねつてゐると、君に言ふのを忘れてゐたが、いつか聞いた山下の話が、ポンと胸へ浮んで來た。といふのは、お福孃の出身地なるものが、例の代議士候補のお醫者や山下などゝ同じ房州の山奥――でないかも知れないが――月崎

村といふつたさうだ。お前様の爺サマと蓮馬塵の兄者とが盤面不足をやつてゐるさうだが、この連中のいふ山下といふ中學校時代の汚たれ仲間だつてネ。こいつ等が消え坂で巡り合つてお互ひに懐しく出來ちまつた――かどうか其時迄は聞かないが――メめた！と俺は膝を打つたネ。といふのはオラが村も月崎とやらで、この間は所用あつての初上京と洒落ましたがハア、東京サ行かつしやるなら兎もの事にオラが娘のお福坊と會ふてくれねエか、と村を出る時、あの爺サマに頼まれて來た、といふ趣向サ。金も少しはありさうな田舎旦那の扮装で「春酒家」を訪れた俺はその實、おつかなびつくりなんだが、流石にこれが曲者とは御存じないと見える女將の接待ぶりが如才ないので、氣が咎めて尻の下がムヅッ痒くなつて來た。と思ふと、女將が改まつた口調で、月崎村からお出でなすつた旦那にはお氣の毒ですけど、アノお福ちやんには近頃こんな紛擾が出來まして、家にゐるのが辛さうですから仕替へさせてやるまでと思つて、實は三日ほど前他所に預けましたので、と言ふのだ。紛擾とは山下の一件サ。そいつは困つたと思ひながら空呆けてゐると、あの事件について元・謀介署の刑事だつた堀田とか堀口とかいふ私立探偵に支拂つた金がいくら、何がいくらと數へ上げて隨分ひどい目に逢ひましたと言ふのだ。探偵と聞いてピクッとしたネ。それが餘程癪に障ると見えて、山下の悪口を言ふの何のと――旦那にこんなことをお聞かせ申す筋ではありませんが、あの妓をおびき出して姿を晦ましやがつたその客は、金もない癖にキザな奴でネ。も一度ああいふ生意氣な眞似をしやうものなら、草の根を分けても探し出して取つちめてやる！といきまくのだ、この女將にモウ一杯食はせてやるなんて罪な話だと氣の毒になつて腋の下の冷汗を拭いてゐると、女將は言ひ難くさうにかういふた。だから今こゝでお福嬢を俺に引合せる譯に行かないのが殘念だ。村へ戻つたら爺サマにもさう言ふてくれ。お福嬢が居れば俺のお供をして東京見物をさせたい。それが出來ないから代りに女將が案内をする、とモウ立ち上つて出掛る仕度なんだから驚いたが、東京見物はどうでもいゝ女が

と會はしてくれと言へば怪しまれるかも知れないので、女將の尻について歩るくうちには、女と會ふべき手段の勘考もつくだらうと思ひながら、女將の言ふがまゝに道玄坂で俥にブ乘つた。と思ひたまへ。だが閉口したのは、二重橋前まで來ると、女將がわざ〳〵俥を下りて石垣へ向ひ、高山彥九郎のお袋みたいな面つきで勿體さうにお辭儀をしながら、是こそは天ケ下しろしめすお方がおいで遊ばす世界第一のお城だ。サア拜んで置きなさい。と言ふのだ。女將だつて俺の手まへ、こんな六ケ敷い面をするんだらう？俺も女將の手まへがあるのでホヽウ！と感心しながら宜敷くやつてのけたが、サアそれから、と俥の上で——こちらに見ゆるのが帝劇といふて、世界第一の芝居小屋。あの燒け跡の細かい處に目を留めて御覽——！サアそれがすんだら是が丸ビルといふて、世界第一の西洋館。中にはヱレベーターといふものがある。田舍の人はよく目をまはして打つ倒れるが、「お土產話し」に乘つて見ますかネ？といふ調子だ。ヱレベーターの中で、顏見知りの奴と出會して聲でもかけられちやお了ひだ。目はまはぬかも知れないが吃驚した拍子に火が出て打つ倒れるだらうと思つて願ひ下げた。到る處で世界第一の講釋も恐れ入るが、歩るき廻るのは俥屋の足で、金を拂ふのは女將だから好きなところへ行くがいゝと、俺は手足をのばしてゴロゴロ搖られてゐたが、今日の見物は此の位で一と先づ切り上げやうといふ仰せに從つてまた「春酒家」へ引揚ると此の氣前のいゝ女將が俺に向つてネ。俥屋も草臥れて可哀相だから、俥賃のほかに酒代を奮發してやつて頂きませうと來た。

これが皮切りでボツ〳〵遊興をすゝめるのサ。田舍には大概お茶畑があるもんで、丸切り知らないことではボロが出るから俺はお茶の取引きに來たんだが、そつちの用は片づいて國へ戾るばかりだといふ體になつてるんだから、いゝ鳥が掛つたと思つたんだらう。よし來た！山下に買つた弁走我の使ひ處だ。事情は先刻承知してゐるが、折角遊ぶならお福さんを呼びたいネ。と當つて見た。女將は一寸逡ふ樣子だつたが、では大にきいて參りますと奥へ引つ込んだ。山下の

廻し者たら大變だが、此の客なら心配ないと思つたのか、ニコ〳〵前に使ひの家へ使つて來た時に、武田家にこれした、と言ひながら、川流婆さんを呼んで、例のその預け先から待命中のお福嬢をつれ出しにやつたのだ。セウよめた！時計はいつも質屋の倉にあるが俺の深計は胸に在りで――小さい時分に見たつきりで覺えてないから、お福さんも私の顔は忘れてゐるだらうが、しかし、お福さんは其の山下勇造とやらに心から惚れてゐるんですかい？と思ひ出補で俺が云ふと――サアそれも知りたいんですつ。實は同業の家へ仕替する話がつきさうなんで、それが決る迄新松町の親類前へ置いてありますが、大阪へ突つ走つたことは後悔してゐるやうでも、心底に想ひが殘つてゐるちや、いつ何どき仕替先を跳び出さないとも限らないし、蛞蝓みたいな山下にくツついて廻られた日には妾が困りますからネ。旦那に篤とあの妓の了見をきいて戴きませうか？と女將の憂慮顏サ。そこへ俥でのりつけて、今晩は、と座敷の閾に手をついたのが、始めてお目にかゝるお福嬢なんだが、瞼の下の泣き黒子に一寸愛嬌があるといふだけで、千兩の借金に想ふ男と添はれないのが恨めしいナンテ粹な柄ぢやねヱ。どう見たつて婦人參政運動員といふところだ。この女に惚れる山下勇造も變つてやがる。と思ふと――ネヱお福チヤン。この旦那が、あんたの爺サマに頼まれて、態々川崎村から會ひにいらつしつしたんだよ。と女將が恩を着せるやうに言ふのだ。アラ、まあ、さう？とお福嬢は呆れたやうに俺の顏を見てゐたが――さう言へば妾何處かでお目にかゝつたやうだわ。あゝ。やつと思ひ出した！旦那は川崎村の三田尻醫院を御存じでせう？と言ふのだ。三田尻とは例の立候補の〇持ちサ。だから知つてゐることにして置いた。するとお福嬢は顏を赤らめて――妾あそこのお女中さんでしたのよ。いつだつたか、大勢のお客様に朝のお味噌汁を出すと貴客、三田尻さんが一と口すゝつて（シ、シ、シ、シ、舌が燒ける。燒ける。馬鹿野郎！）とお椀をとつて妾にぶツつけなすつたことがあるわ。煮えくり返るやうな熱いお汁が、妾の目鼻に流れこんで、顏一ぱい赤ンぶくれになつたわ。するとお客様の中にいらした貴客が

ピックリして、妾の顔を水で冷やして下さるやら、氣の毒だといつてお金を下さるやら、大層お世話になつたことたほえてゐるわ。あの節はほんとに有り難う。そして今晩はまた御親切にも——と、お福孃の聲は涙に曇つて來るのだら、オヤ〳〵と思つたが、房州にも俺みたいな人相の男が居つたと見えていゝ鹽梅だ。そんな事もあつたやうな顏つきで澄し込んでゐたが實はこんな話を感心して聞いてゐる女將の奴め、早く座を外してくれりやいゝがナと思つてゐると——ほんとにおなつかしいことね。アレからもう五年にもなりますわ。とお福孃は羽織の袖で、眼をふき〳〵月崎村時代の懷舊談を始めるのだが、これには參つたと見えて、——妾、少し用がございますので一寸失禮いたしますが、どうぞごゆつくり。と、女將は逃げるやうに奧へ引つ込んだ。サアこの機に乘じて俺は仕事に取りかゝるのだ、と奧の樣子を窺ひながら、お福孃の側へ跪り寄らうとすると、昔話なんか何時の間にかやめて了つたお福孃が眼の色を變へて——チョイト。貴客。山下はどうしてゐるの？と來たんだからビクッとしたね。後で聞いてさうかと思つたが、それ、俺が罹災民をつれて田舍へ歸る二三日まへなんだ。君の、あの表現派の活動寫眞と震災映畫を封切した日の神樂坂牛込館で、君は舞臺に立つて演說をやつたね？演說はとにかく俺は地震の寫眞を見に山下をつれて行つたのだ。すると俺たちの三等席と斜かひの階上の貴客連の中にゐたお福孃が、チャンと目をつけてゐたんださうだ。俺の赤い鼻がどんなに強い印象を與へたか知らんが、半年以上も前のことを覺えてゐるとは記憶のいゝ女だが、また直感の早いのにも舌を卷いたよ。知らすに聞いてゐた味噌汁の追憶談も口から出任せの噓なんだ。あゝしてノベツに饒舌りまくつたんで、女將さんも閉口して出て行つたんだわヨ。といふ譯サ。面はまづいが何と狂言の巧いこと！上には上があるなアと恐れ入ると——貴客！山下はどうしてゐるの？此家の女將さんが、アン畜生を捕まへて其筋へ突出してやるなんて血眼だつたのヨ。妾は大阪でとらまつて此家へ引戻されるとすぐ濱松町へ押込め同樣なんだから、後の樣子が知れないんですけど、變つた事はな

いでさうネ？と山下のことを心配して俺に訊ねるのだから　——いいや、八重ちやんのまゝは山下に訊いたことでなかなかまた
お男ぢやないから心配しなさんな。いやモウ、何がどうならうと、お前さんと一緒になるんだと毎日々々駈けずり廻つて
ゐるが、思ふやうに行かないので奴さんボウツとしてらア。——と力をこめて俺は少し誇張した。——さうよ、あの人はま
だそんなことを言つてるの？——冗談ぢやないよ。大將泣くぜ。お前さんだつて憎い譯ぢやあるまいし矢つ張りホの字な
んだらう？一緒に苦勞するのも惡くはないといつた心的傾向だらう？へつへ。と腋の下をくすぐるやうに言ふと、女は嬉
しく眼尻を下げてニコリと笑ひながら默つて俯向いてゐるから、返事をしろと催促すると、羞かんで頷くのだ——それご
らん。それがお前さんの眞實といふもんだ。逢エねエやなア。どうかその氣で、モウ一度逃げてくれる譯には行くまいか
？お前さんも知つてゐる通り、山下に金さへありや、危ない眞似をさせるやうな奴さんぢやないのだが、これも仕方が
ないと思つて實はお前さんの了見を確かめた上で、ドロンの打ち合せをする役目を引受けた俺は、無い智慧を絞つて此
の虎の穴へとび込んで來たのだ。この願ひは是非とも一ツ聞いて貰ひたい。と熱情たつぷりに口說きながら、女の樣子
を窺ふと、またか！と言はぬばかりの意外な顏つきで、いかにも當惑したやうに、片手を胸へ持つて行き、暫く考へてゐ
たが又すぐ俺を見て——よしませうヨ！あの山下の友達の女優さんの巧い話に釣られてウカ〳〵と家をぬけ出して、逃
げ隱れてお了ひにはフン捕まつて、散々ひどい目に會つた揚句の今では貴方、濱松町の電氣局の倉庫ン中へ叩つ込まれ
て、お小用に行くんだつてゴロツキみたいな奴の監視つきなのヨ。おまけに搜索費だの俥代だのと、弱身につけ込んで
妾の借金にくり込まれるんでせう。たまつたもんぢやない！それやネ。山下だつて心配もしませうし、二百五十圓ぐら
ゐ棒にも振りましたらうが、今度やり損つたら？と思ふと、やりやしないけど腹が立つわヨ。別に山下が憎いツてこと
はありませんが、さうまで苦勞して夫婦になりたいとも思ひません。とサウ言つて頂戴。不實な女だと思はれても仕方

がないワ。ネ。さうでせう。といふ愁訴なんだ。もつと氣の利いた相談かと思つたら何だ！といふ態度で斷られたもな理屈だ。山下勇造が聞いたらソンナ筈はないと喧嘩腰になるかも知れないが、事實は此の位の熱度サ。馬鹿々々しくて極りが悪くなつたから、一體、山下勇造の何處に惚れたのか？同じ村の者だからか？と冗談にきいて見ると、實に指を屈するほどあるんだ。たとへば監獄部屋の解放とか、集團バラックの建築とか、何とか名まへをつけて人の金を引き出す手腕――內務省の住宅組合に加入して三千兩受け取つたが、家を建てるかと思ふと飮んで了つたといつた風にナ――それから早稻田大學の卒業論文を一手に引き受けて代作してやつたので大分儲かつたが、今度は一ツ資本家擁護の生物進化論の誤謬を指摘して博士になるといふ其の奇拔な頭腦――もつともその費用に困るから、一冊十五兩の革命詩集を出版するんだと言ひながら金を集めて吉原へおいでなすつたことなんか誰でも知つてゐるがネ――醉つぱらへば素裸になつて御自分の股間の逸物に紙の袋をかぶせ、ヤツと立ち上ると忽ち奇々妙々の舞踊りが始まる そこに空前の御愛嬌があるんだとサ、山下の人物は躍如としてらア。牛は牛づれ。愈よ出て愈よ行き當りバツタリの氣風が、お福孃の御氣に召したといふのだ。黒石先生。驚いたか？」と、ペラ〳〵喋つて來た野川勘兵衞は、目を圓くしてヘラ〳〵笑ふから、僕は加藤一夫の電報で卓子をボンボン叩きながら「フン〳〵くだらないよ！僕が聞きたいのは金儲けの話だ。あれはどうなつたんだい？」と急き立てると、勘兵衞はイヤに落ちついてからいふのだ「モウ直ぐお了ひ。辛棒して聞きたまへ。つまりこんな譯だから、女は逃げてくれない。俺の二百五十兩はフイになる。と思つて悲觀してゐると――こんな勸めがツクヅク厭になつたワ。とお福孃がいふのだ――矢つ張り山下の奧さんになつた方がよかろ？――こないだみたいな事さへなければネ――ヤ！思ひつきがあるぞ！ネ。お福チヤン。こいつア女將を瞞す手なんだが、俺がお前さんを身受けするといふ事にして話をつけたらどうだ？ 俺は二百五十兩の金が手に入る。山下も少しは持つてゐるだらう？こいつを一

と極めにする。これから女將に向つて、お福チャンの話を聞くと矢つ張り其の山下とやらに未練があつて忘れたいにもさうな眼だ。この様子では何時とび出されるか油斷が出來ない。といつて俺も村の爺サマに頼まれたいお客の折り合ひだ。お福チャンの事は俺に任せてくれまいか？と言ふのだ。女將はお前さんを持て餘してゐるんだから二ツ返事で承知して、どういふ風に極りをつけてくれるかと言ふに違ひない。そこで實は俺も女房はゐるか、女一人を引取つて別に世話をする分に苦情はないと思つたんで、お福チャンに當つて見ると滿更でもなさゝうだから、改めて女を俺にくれないか？と其處ンとこをモツト巧くやるのだ。すると女將は喜んで、オヤまあさうですか、どなたに差上るのも同じこと　旦那にお願ひ出來るとお互さま助かります、が、あの紛擾(ごたごた)の入費を入れてザツと千二百の借金になつてゐますが、ケチのついた女だから綺麗に一ツでよろしうございます。と來るだらう。では、　さう決めた！サテその金をそつくり今あげたいけれども、商賣の方に出しちまつて、是れだけしか持ち合せない、いづれ後程でも取引先で都合して來る迄、約束の印(しるし)に受取つてくれないか？と先刻のやつを出して渡す、女將は俺を信用してゐるから即座に納得して受取證を書くョ。あとで問題が起つたつて受取證さへ握つてゐりや、詐欺にも誘拐にもなりつこなしだ。そこでお福チャンに衣裳でも拵へてやりたいんだが、一時間ばかり女を貸して貰へると嬉しいネ、「大丸」へでも行かうといふ趣向サ。と俺が切り込むと、此處迄來て厭だといふ氣遣ひはない。一寸お待ち下さい、妾の一存では御返事いたし兼ますから、と女將は奥へ引つ込んで、また宿六と御相談の結果、外ならぬ旦那のことですから、どうぞ福チャンをお連れなすつて下さい。只今、御案内に宅の婆さんを御附けします。と來らア。商賣に拔目はないョ。あんな婆アの五人や十人護衛に附いて來たつて驚かねえやナ。丸ビル」へ引つ張り込んで撒いちまわア！あの前に集(たか)つてゐるタクシーに跳び込んで俺の巣箱へブツ飛ばし、一と月も籠乎と踏んでゐりやモウ捕まりつこないよ。――と俺が言ふとお福嬢は釣り込まれて聞いてゐたが　――さう巧く行くでせ

うか？と少し眼の色が變つて來た——巧く行けばやるかい？と俺は駄目を押した——そりや、やらんこともないワ。—も、さうなるとまた探偵沙汰なんでせう？大阪の二の舞をやるやうぢやネ。と女の心は動いて來たから、モウ一と息だと思つたから、白川百合子の女優とは、頭の中のゼンマイが違ふのだ、目から鼻へぬける男の俺がついてゐる以上、捕まるやうな下手は金輪際だと馬力をかけて說き伏せると、女の度胸は物凄く据つたネ。毎日々々、身の行末を思ひ案じてゐたんだが、さういふ段取がついてゐるなら、モウ一度の運試しにやりませう！こんな境界には一日も堪へられない。サア、何時實行するか？といふ騷ぎになつて來たから最早〆めた！善は急げで明日がよからう。と事は決つたのだ。そこでお福チヤンに一寸座を立つて貰ひ、女將を呼んで掛け合ふと、ヘツ。大出來さ。旦那にさう願へることなら、話だけでも直ぐ締めて頂きませうか、と俺の思惑通り心易くおいでなすつた。だがさうすると暫く東京に居なければなるまいから、改めて明日また出直すとして、宿をきめて來る、と勘定をすまして「春酒家」を出た俺は、その足で麻布狸穴は山下の家へ飛んで行つた。と思ひたまへ。有權者名簿をくり〳〵、○持ち醫者の立候補趣意書か何かの封筒にセツセと宛名を書いてゐた山下勇造は、俺の報告をきいて大喜びだつたが、忽ち蹴躓いたやうな當惑面で——打ち明けていふと實は選擧運動費の一部として、醫者の三田尻から最初受取つた金が七百圓と勸業債券が少しばかりあつたんだが、仕事はまだ一ツもしないのにモウ金はスツカラカンで、一文もない。そんなことを言ふてる場合でないから、債券を賣つて出來るだけ拵へるとして、あの妓と引替にやるといふ約束の君の報酬は一寸待つてくれないか？と面白くないことを言ひやがつた。ぢや、何時寄越すのだ？と聞くと、明後日は醫者の三田尻が、房州から金を持つて來るので、その時は少し置いて行つて貰ふつもりだから確かに進呈するといふのだ。間違ひはなからうナ？と俺が念を押すと、山下が偉さうに眉を釣り上げて啖呵を切つたョ——俺も山下勇造だ！頭を竪に、諾と振り出す一言は金鐵の正札で昔から押し通して

來た男だ！堅だと思ふなり、名譽を擧げてやらア、さう中。俺が作合の部隊に入つたのはたしかの頃だ、古参兵から上つ靴を貰ふと、古參兵どもが破れ靴とすりかへて了つた。新兵は襤褸みたいなボロ靴で劇る心外の七々不平なんだが、文句をいふと怖いから、足の痛さも泣ツ面で我慢した。あんまり横だから仲間の新兵に向ひ、俺が上等靴を取戻してやるから待つてろと言つた。新兵の中で一等教育のある俺の一言を彼等は信頼した。或る日の駈け足調練で崖の上から五六人川の中へ落つた。氷で辷つたのだ。隊長が負傷兵を調べて、外に怪我をした者はないかと言ふから、俺が出て行くと、負傷は何處だ？と隊長。ハイ。此靴デアリマス。一同此通り底拔ケデアリマス。と隊長の鼻先へ足をあげて見せると、隊長が面喰つて馬鹿！といきなり俺を張りつけやがつたもんだが、これが動機で元の上等靴がそつくり戻つて來た。俺は靴の恩人に奉られたネ。それからまた、こんな事もあるんだ――と山下勇造が碌でもない手前味噌を列べるから俺も錯々承知してやつた。すると奴さん、肝腎の仕事をオツ放り出して置いて勿體さうに取出した債券を、泣きの涙といふ姿で賣りに行つたが、選擧に落こちるのは、かういふ輩(やから)に運動を頼んだ候補者と思へばいゝ。暫くすると奴さん歸つて來て――君！驚きたまへ！二百圓にもならンかつたヨ！だが、此處まで漕ぎつけたのだ。何を犧牲にしてもお福チヤンを手に入れたいもんだ！と愈々困つた風だから、當り前ヨ、此處で兵古垂れるやうぢや山下も勇造も頼母しくねヱや。第一報酬の二百五十兩がお流れになる。參謀長の勘兵衛さんが助からねヱ。と嚇かけてやると、熊の胃でも舐めるやうな顰めツ面で山下が――ウーン。ご、こ、かうなりや手當り次第だ！着物と洋服と柱時計と古本を賣り飛ばしちまへ！だが五十圓になるかナ？オツトさうだ。どうせ二十圓にもなるまいが、君のアノ行李を親切ついでに提供してくれ。かためて一度に賣をするのだ。一生のお願ひだ。と拜み倒すときの哀れつぽい目つきで、好きなことを唸らつしやる。田舎から持つて來た俺の行李が部屋の隅に置いてあるのだ。それが二十圓にならうとなるまいと大きにお世話だら

う。餘つ程斷らうかと思つたが、一兩の物は二兩にして取り戻せば惜しくはない代物ばかりだから、恩を着せてやることにした。そしてやつと三百足らずの金の工面がつくと今度は暫く女を匿まう場所は何處がよからうか？といふ段になつて、俺の頭は頓智の大空から閃めき落ちる霹靂の弓の矢のやうにピカリ！パツと働いたネ。君は知るまいが、横濱本牧に燒け殘つてゐる「メゾン・ドリエン」といふ西洋人相手の古ぼけた木賃宿がある。俺は神樂坂の牛込館に地震の映畫を見に行つた。と先刻言ふたが、その映畫の中にチラと現はれたのが、この燒跡の宿屋で「メゾン・ドリエン」なんて字幕の說明があつた。何が役に立つか解らんもんだ。今でも人を泊めてくれるかどうか、行つて見なくちや解らんが、此家なら嗅ぎ出される心配がない、と山下も贊成して即座に決つた。どうだい。黑石先生の着想よりは非凡だらう？へつへ。」と野田勘兵衛は駄辯をふるつて此處まで來ると、お釋迦樣でも御存じないといふ顏つきで赤い鼻をピクリとやるのだが、「メゾン・ドリエン」とは聞いたやうな家だと僕が言ふと、眞逆といつた風に「君、知つてるのかい？」と勘兵衛だ。僕の目には一軒の西洋館が映つた。「サア。違つてゐるかも知れないが、横濱居留地の坂を本牧へ下ると、小さい橋から直ぐ汚ない町になる。その二ツ目か三ツ目の路次を入ると灰色に塗りこくつた薄暗いバラツク造りがあるよ。屋根の上に一角犀の角みたいな太い突起のある、あれぢやないか？」「一角犀の角？」と勘兵衛は梟のやうな目を白黑させて此奴油斷がならぬと言はぬばかりに「そ、そ、それだ！フーン。君は、ど、どうして知つてゐるのか？」と驚いて跳び上る始末だから、非凡な着想もないもんだが、あれがさうだと、知つてゐる譯がある。といふのは例の辻潤だ、俺は天才で、天才はザラに通用しない十圓金貨のやうなもんだ、迂然顏を出すと贋物あつかひにされるから俺は滅多に外へは出られない。がダネ、いづれ俺の偉いところが御目にとまれば、日本政府は馬車を飛ばして三顧に來るだらう？といつた調子で古本ばかり讀みながら、國賓にでもなるつもりで孔明を氣取つてゐる此の希ムサイ男がだ、或る時、横濱の古

[illegible]び棄てにしても構はないと思つてゐるのだ）久しく會はンから谷崎潤一郎ンとこへ敬意を表しに行かうぢやないか！本牧は本牧だが番地を忘れたつけ。何。探せば解るサ。と辻潤が先に立つて頻りに本牧を迂路ついてゐると、屋根に角の生えたバラツク西洋館の前に出た。此家ではないか？と扉口を覗くと谷崎といふローマ字の名刺が貼りつけてあるから、ホラ此處だ。やつと見つかつた！と辻が一足踏み込むと、豈圖らんや、ガランとした薄暗い奥の部屋からバタ〳〵飛び出して來たのが、襦袢一枚の西洋婦人なんだ。辻が面喰つてペコ〳〵お辭儀をすると、この家にはお前さんのやうな者は居りませんとか何とか破れかぶれの英語で此の婦人が言つたかと思ふと、まるで乞食を追つぱらふやうな權幕で辻の胸をドンと突いた。呆氣にとられてゐる二人を尻目にかけて赤い腰卷をハタ〳〵翻ひながら婦人は引込んで了つた。あとで氣がつくと、成るほど姓は同じだが名が違ふから全くの戸惑ひなんだ。這々の體で外へ飛び出して一體今の女は何だらうと僕が言ふと、辻が目尻に皺をよせてニヤ〳〵笑ひながら、君！ことによると彼女賣笑婦だぜ！そんなら僕にも了見があつたのに惜しいことをした。と言ふたもんだが、あのジョツフル元帥が日本へ來た頃、此の家の前を通つて見ると既に代替りで、硝子の扉には赤いペンキでMAISON D'ORIENT（メゾン・ドリエン）とあり、軒下の壁には食ひ物や洋酒の名が一面に書き殴つてある。フランスの水兵が窓から赤い首を出してパイプを咬へてゐるといふ光景だから、ホウ、料理屋になつたナ。襦袢の西洋婦人はどうしたか？と思つてまた辻潤に尋ねると——サア何處へ行つたらう？様子が氣になるから出掛けて見ると、何でもあの女に部屋を貸してゐた男から二代目の家主が、あの酒場を始めたらしいネ。五十錢のウヰスキー一杯でピアノを彈かせてくれるので時々押掛けて行くよ——と言つたゞけだから「メゾン・ドリエン」は僕も知つてはゐるが二年も前のことだ、と野田勘兵衛に説明してやつた。すると勘兵衛は合點が行つたと

見えて「へエ。さうか！その時分は酒場（レストラン）かも知れないが、この節は燒け出された毛唐相手の木賃宿もやつてるヨ。ふのは」ときた喇叭のやうな駄辯をふるひ出す「愈々お福孃の誘拐にとりかゝる其の翌日、右の宿の樣子を確かめくと、部屋は幾つも空いてゐると言ふから、直ぐ引返して山下の金をふところに、「春酒家」へ乘込んだ俺は、その內ら五十兩だけスツポカシテ約束通り女將へ渡した。そして受取をとるとサモ親切さうな顏つきで、妓に着物を買つてやりたいから、一時間ほど彼女を貸して貰ひたいと言つた。多分女將は承諾する、婆さんが跟いて來る。妓の袖なんか捉つてゐられちや仕事は遣りにくいナと思つて心配してゐると、俺を信用してゐる女將は大丈夫だと睨んだのか、折よく誰もゐないのか、お供を附けませうとも言はずに、早くお歸ンなさい、と二ツ返事でお福チヤンを出してくれた。妓はアノ晩泊つてゐたのだ。が、一ツ巧く行くと萬事この通りだが、俺の腹を探るために、かう易々と承知して置いてコツソリ尾行をつけるんぢやないか、と思へば流石に不氣味だから用心のために、お福坊をつれて「春酒家」を出ると行先の決つた「丸ビル」六階の「大丸」へ、と先づ出掛けたが、尾行らしい人影もないので、階段づたひに大急ぎで或る洋食品屋の非常口へ出るや否や、お向ひの停車場へ一目散に駈け込むと直ぐ橫濱行電車に乘つた。が、まだ安心は出來ない。もしも途中で捕まつたら、どう言ひ拔けやうか、どう胡麻化さうかと二人が二人ビク／＼ものだつたが、お蔭樣でどうやら無事に「メゾン・ドリエン」へ辿りつく事が出來て、お互ひに顏を見合ひ、ホツとした、と思ひたまへ。女には電車の中で此の隱れ家の事を話して置いたのだ。が、今頃はアノ鼻の赤い畜生に一杯くはされたと「春酒家」の女將はびつくり仰天の探偵騷ぎで、二人の行衛を血眼で嗅ぎ廻つてゐるに違ひない。と思へば部屋の窓から顏を出すのも怖かなくて、俺は息を殺しながら山下へ手紙を書いた——俺の大役は成功したから安心したまへ。此家に潜込んで居れば嗅ぎ出される恐れはないが、油斷は出來ない。お福孃を君に早く引渡して、約束の二百五十兩を貰つたら直ぐ俺は氣の利いた

港へ飛んで行つて一緒に息をつきたいのだ、君の封状をお稲様と共に切に待つ――すると其の金をくれる筈の二三日の晩に、山下がコソ／＼と來て、久しぶりに女の顏を見たもんだから、いきなりモウ眼から涎を垂れ流して歯をガリ／＼鳴らしながら「こ、こ、かういふ處を君に見せてはすまないけれども」と言ふたかと思ふと、女へ跳びついて行つて、處かまはずペロ／＼舐め廻さうといふ狂喜の始末に、俺のことなんか胴忘れの形サ。へつへつへ。それがやつとお了ひになると、今度は申し譯のないやうな面つきで――實はネ、あの○持ち賢者の上京が延れるさうだから、僕の濠洲の方はモウ少し待つてくれないか？　實際僕も弱るんだが、それまでお稲ちやんの保護をしてくれる宿賃に取つてくれたまへ――と寒さうな懷中から財布を出して二兩半くれやがるとスゴ／＼歸るのだ。當が外れて俺の息はグウと來つた。くれ／＼も人を馬鹿にした勇造もあるもんだ。仕方がないから、また二三日待つてゐると金がなくなり、明日から飯がくへないと言つた始末。この宿屋は一食一泊すべて現金なんだから參つたネ、今は早、俺もお稲チヤンも悲觀するやら憤慨するやら、よろしい！　これから麻布の山下の家へ捻ぢ込んで談判しやう！　さう思つていきまき乍ら部屋をとび出し、廊下を通りぬけやうとする途端にだ、俺の背なかにイヤといふほどブツつかつた物があるのだ。驚いてふりかへると、俺の足もとに、今どき見たくも見られないやうな、古いボロ／＼の手提げ鞄が一ツ落こつてら、オーヤ。何處から此奴め飛んで來やがつたんだらう？　と思ふとまた／＼！　今度は迚も汚くさい垢だらけの腐つたやうなシヤツが飛んで來たペッ！　ペッ！　畜生。何をしやがるんでえ！　と俺はそいつを頭から引つぱづして、モ一度そつちを見ると愈々驚いた。一向氣がつかなかつたが、俺の隣りの室で、此家の主人と、一人の露西亞人とが、迚も珍な大立ち廻りをしてゐらつしやる始末だ。宿の主人が口から泡を吹き――出て行け！　サア。出て失せろ！　イゴーリめ――と怒鳴り乍ら髯モヂヤの露西亞人と、一本の古ぼけた洋傘を汗だく／＼で引つ張り合つてゐるのだ。――この露西亞人は俺の部屋

の隣室の物置見たいなところに寝起してゐる此の宿のボーイなんだ——。が、このとき、ふと俺の顔を見た此の宿の主人——五味久吉と云ふの——がびつくりして握つてゐる洋傘を突つぱなし、——アツ。旦那。と、とんだ粗忽をいたしやして。何うも相すみません——とサモ極りの悪さうな苦が笑ひの揉み手といふ態サ。何かは知らぬが喧嘩に違ひない。默つてるのも變だから、仲へ割り込んで自體どうしたのか伺つて見ると、宿の主人はサモ、そこにポカンと突つ立ちながらガダ〳〵顫へてゐる露西亞人が忌々しくてたまらないと言ふ面つきで、俺にかういふのだ、即ち、この場面の露西亞人——何とかイゴリーといふのださうだが——五六年前にヨーロッパの方から、先刻の古鞄一ツに洋傘一本で、只獨り、フラリとこの街へやつて來た。そして毛皮や更紗の貿易をやる猶太人の何トカ商館に勤めてゐたさうだが、こないだの地震で商館は燒け落ち、主人も番頭も支離分散だ。イゴーリ先生、飼ひ主に離れた犬同樣、食ふに困るとい、わけで、街を迷路つきながら智慧を絞つた揚句の果が、上野・淺草公園で、東京製麵會社とかのドウナツ賣りとお出なすつたが、どうも思はしく捌けないので直ぐ廢めて了ひ、又この街へ舞ひ戻つて今度は此の「メゾン・ドリエン」に泊り込み、近所の羅紗問屋からお慈悲で受け取つて來る燒け殘りの、安つぽい羅紗の行商と早變りなすつたんだが、露西亞渡りの上物でないつてことは、世間が知つてゐるんだから、是れも同じく失敗で、おしひにはその日の宿錢にも詰つて來た。宿の主人は右の事情を聞いて氣の毒に思つたのか、イゴーリ先生の身のきまりがつくまでは、宿の賄ひや掃除の手傳ひをさせてロハで泊めてやらうといふことになつたんだ。といふのはアメリカに先生の妹がゐるから、旅費が出來次第に其處へ行きたいといふ譯さ、だが仕事になれない武骨のイゴーリ先生、エプロンを着込んでボーイになりすましたかと思ふと、もう皿を破すやら酒瓶をひつくり返すやら。十五錢のライスカレーを誂へた客には、一皿一圓五十錢もするやうな——アントル・コート・グレリエとかを持つて行つて、フンーこりや何でネー・と劍突を食ふ。あべこべにその粋な料

皿を運へたお客へはライスカレーをあてがつて置いて、オイノ＼、これが神樣に食へるかい？馬鹿やろうめえしー！と、られる。滅相ないイゴーリの着物の袖がお皿の汁へ浸ることがあれば、客は眉を顰めて、大將！お前の袖を見な、汁が立ちのぼつてゐるぜ！と厭味を言ふだらう？するとイゴーリは——へい。お客さん。構やしませんよ、こんなボロ服なんか！といつた調子なんださうだ　なまじつか日本語が出來るもんだから、顏馴染みの客を捉まへて、仕舞にもつかぬ身上話を始める。物欲しげな目つきでチップをねだる。あんまり穴いのでお客も了ひには逃げ出す。これが商賣の妨げになるから止めろと言へば暫くは止めてゐるが直ぐまた始める。厄介な人間を背負ひ込んだもんだ、露西亞の領事でゐりや押しつけてやるんだが、露すこととすることとこの流儀では際はないから追ひ出したいとは思ふけれども、遠いアメリカの何處とかに妹が一人ゐるきりで行き場がない。だから今まで隨分我慢してゐたんだが、今日といふ今日は堪忍袋の緒が切れたのだ。といふのは、氣をつけてすりやいいのに、お客さんの頭の上でソーダ水の栓を拔いたもんだから、お客さんの着物は泡だらけで、おまけにそれが可笑いいつて笑ひやかつた此奴むくぢやらの露助め！サア出て失せやがれ——一刻も家には置けない！といふ譯で實は此の頓馬鹿のイゴーリの荷物を只今かたしてオッポリ出してゐる處だと目を細めていふのだ。ほつほつはて　ところが、此處にお酉チャンと籠城してザッと一週間にもなるが階下の食堂へ顏出しをせずに部屋へ配達のお膳ですましてゐるので、此部屋と食堂で働いてゐる此の露西亞人の面をゆつくり眺める機會もなかつたが、かうして向き合ふと不思議に一度この大將の顏を見たやうな氣がする。間もなく思ひ出した。といふのはツシ、例の牛込館へ活動寫眞を見に行つての歸り、山下勇造と一緒に神樂坂の通りを見附の方へ下つて行くと坂の下に一人の露西亞人が、舶來の石鹸を列べた箱を首に吊して、立ち賣りをやつてゐるのだ。その露西亞人の顏が店頭でよくお目にかゝる例のドフトイエフスキー——（ドストイエフスキーと言はずに）——アの野郎にそつくりだから——オイ。こ

の毛唐の面ア、ドフトイエフスキーだなと山下に言ふと、この石鹼賣りがランプの火屋みたいに目を丸くしやがつて、お前もドフトイエフスキーを知つてゐるのか？へエ偉いもんだ。と言はぬばかりにニコ〳〵笑ひながら、俺を見て——ドフトイエフスキー・ボリショイ・ピシャテリ！とか、變な文句を吐しやがつた面が迚も愛嬌モンだから、餘計な施しとは思つたが石鹼を二つ買つて——ヤイ！ドフ的め！何處まで飛ぶか見て居れ！と二ツとも濠の中へ投げ込んで見せたことがあるのだ。一體に露西亞人の顏はドレモこれも同じ型に出來上つて居るもんだから人違ひかも知れないとは思つたが、アノ時のドフ的ぢやないかと聞いて見ると矢張りさうなんだから、君、惡いことは出來ないと言ふもんだ。先生の方ぢや俺の顏なんか忘れてゐるんだが、そんなこともあつたかと思へば流石に懷かしいと見えて、頻りに俺の同情を求める樣子だから、俺もそゞろに氣の毒になつちやつてネ。そんなことで今、此の家を追ひ出されたら何處へ行くのだと尋ねると、かうなつては仕方がないからアメリカの妹の處へでも行かうかとは思つて居るけれども金がないと云ふ可哀相な返事だ。これが俺の性分で見てゐられないから、——ぢや今日の處は俺が主人に詫つてやる。是れから氣を附けると云ふと、どうかさう願ひますつて泣つ面で頷いた。だから俺が主人に話をつけ、主人も客の取りなしとあつては無下に拒絕も出來ないもんだから？澁々承知したっと思ひたまへ。ともかくもそのアメリカへ行くだけの金が出來るまで置いてやらうと云ふことになるとロシア人、涙をこぼしてよろこんだネ。そしてこの主人がプリ〳〵怒り乍ら引つ込むとネ。思ひがけないことには僕をつかまへて、何かの拍子に身の上話の愚痴をこぼし始めたものだ。だん〳〵聞いてゐると片言まじりだからハッキリはしないが、つまり一口に云ふと、このイゴーリ先生驚くべき經驗をもつた露西亞革命家の一人なんだから、人は見かけに寄らないもんだらう？而もそれが實にこの男のとも思はれぬほど奇拔な身の上話なんだ。あんまり面白いので、俺は聞き乍ら何の氣なしに考へたネ。こいつを小說にでも書いて出版したらさぞ賣れるだら

うなア。いや屹度飛ぶやうに賣れるに違ひない。そこで賣り上げ金の半分でもイゴーリにやれば嘸よろこぶことだらう？一擧兩得の大金儲け！着想に又々非凡と來たね。だが困つたことに俺は小説が駄目だから、こいつは君に頼んだもんか、と思ふ段になつて、黒石先生、君のことをフツと思ひ出したのサ。いつか露西亞の大使館で救恤金募集運動の尻馬に乘つて警察から小言を食つたこともある篤志家の君だから實はかうだと事を分けて頼めば、厭だといふ筈はない。と思ひきめて當意即妙。俺は形を改めてイゴーリに向ひ——あゝ！聞けば聞くほど天晴れな慘烈なお前さんの身の上だ。それに就いてヒョンな事を言ふやうだが實は俺の親友に文士が一人ゐるのだ。この文士に今の物語をモツト詳しく話して聞かせたなら、お前さんに同情して、そいつを小説に書いて金を拵へてくれるだらう？するとお前さんもズツとアメリカへ行ける譯だが、どうだい？——と、俺が懇ろに慰めてやると、イゴーリ先生、いきなりから兩手をひろげたかと思ふと、眼玉をグリ〳〵やつて、おゝ！そ、そんなことが出來るなら、どうか早くその文士を連れて來て下さい！私はいくらでも饒舌ります！と嬉しまぎれにビツクリするやうな太え聲でハメを外しやがつた、へツ。聞いたかい？右のやうな事情だ。その外に山下の方の金は別として、俺も忙しい中の仲介役に少し頂けたら、有り難いとも思ふんだがネ？どうだらう。大將の話を小説に書いて本屋に賣つてくれないか？。實はその事で、君を訪ねて來たわけなんだ。」と野田勘兵衛は機關銃のやうにノベツ幕なしのお饒舌りをやつと切り上げたが、此處まで來るのに二時間もかゝらうといふのだからたまらない。何年たつても此の通り。碌な仕事は始めない男だと思ひながら「わかつた！金儲と言ふのはそれかい？」。「ウン、君だつて此の可哀相な革命家には一掬の涙を注いで以て大いに同情する考へだらう？」などと訴へかゝる勘兵衛の脱線的仁道面や、人を食つた狡猾さ加減には毎度手がつけられないさうサ。同情するだけ夫れだけ猶更革命家の身の上話を食ひものにする了見はないつもりだ。加藤一夫の演説會に行くと其筋から睨まれて損をするなら、そ

んな物を書いて革命の宣傳でもやらうといふ社會主義と間違はれて損をすると請合ひだから、平にお斷りだと言ひたいナ。僕がその革命家の爲めにアメリカ行きの路銀を進んで都合しやうと思や、僕の藏書かピアノでも賣るだらうサ。君の話だけぢや、そんな篤志家の眞似をする氣にはなれないよ。どんな話か知らんが、そのイゴリー先生とやらは眞個に革命家なのかい？君の當推量ぢやないか？見ず知らずの君に、そんな事を打ち明けるなんて本物としちや輕卒すぎらア。嘘だらう？」と僕が言ふと勘兵衞はムツとして「ヤ！會つて見れば解る！そ、そんな鈍棒な男ぢやない。是を見たまへ。念のために持つて來たのだ。」と二ツに折曲げた外國の古雜誌を外套から摑出して、蛋とり眼でページを繰りつてゐたが、やがて「これ。これ。これが證據だ」と僕の鼻先へ突きつけるから見ると、是が以前にマーク・ツウェンやドイルあたりを擔いで賣出した例の「ストランド・マガジン」は黴て紙の色も黄色くならうといふ一九一〇年七月號なんだ。此處で勘兵衞はグツと乘り出して來て「此處にも書いてあるだらう？大將。一九〇三年の革命を仕損じて露都から紐育へ亡命し、死んだレニンなどゝ一緒に生活してゐる頃サ。此雜誌の記者が書いた訪問記事なんだ。大將。是だけ記念に保存してゐるのを借りて來たのだよ。」などゝ、露西亞人イゴーリの受賣りするのを聞きながら、たつた二ページしかない記事の半分を占領してゐる革命家らしい一癖ありげな五六人の男の寫眞を見て行くと、イゴーリ・サゾノフといふ五十年配の髭面があつたから「これだネ？」と勘兵衞に示すと「それ〳〵。それがメゾン・ドリエンのボーイなんだ。實によく似てゐる」と答へた。だから試みに（亡命客訪問記）とでも言ひたい見出しの眞下のゴシツク活字の説明書きだけ見るとかうだ。

The narrative which we are here enable to set before our readers is unique and sensational in the highest degree. For the first time the secrets of the Russian Revolutionary Party—the aims, methods,

and characters of the terrible "Fighting-Organization" are revealed to the public by one of their own body. It is a real "Human Document", throwing a flood of light upon the inner history of one of the most sensational assassinations ever planned. It is difficult after reading it to avoid the reflection that these men and women, perpetrators though they were of what is commonly regarded as the vilest kind of murder, have something in them of the stuff of which, in better causes, heroes and mertyrs are made. As the narrator is still alive, we are not able to divulge his name, but we have taken steps to satisfy ourselves of the absolute authenticity of his narrative.

(原文其儘)—だから「フン成る程ネ、これで見るとその革命家とやらは本物らしいが、かりそめにも、さういふ際どい仕事師が如何した風の吹き廻しで日本へ都落に來るのだらう?」と不思議に思つて僕は聞いた。すると勘兵衛は、それ見たかといふ格好だ「そこが大將の話の面白いところサ。どうだい、好奇心が動くだらう?兎も角も行つて見やうぢやないか?決して損はかけないよ。」と中腰になつて「ストランド・マガジン」をまた外套のポツケツトへ捻ぢ込んだ。が、こいつはどうやら面白さうだ。參考のために一應伺つて置くのも惡くはなさゝうだ。手間どるやうな長話しでもあるまいから、謹聽して了つたら横濱で神戸行きの切符を買ふことにして「折角の好意を無にするのも氣の毒だから行かう。サア、案内したまへ。」と僕は立つた。そして此の長崎村の家を僕と勘兵衛とは跳び出した。途中の落合局で今夜東京を發つ旨の電報を打つた(その電報が加藤一夫の手に屆く時分には、ジケンオコツタユケナイといふ面倒な取消をしなければならない始末に立ち到らうとは夢にも知らずに)到頭「メゾン・ドリエン」の露西亞人イゴーリ・サゾノフと會ひに出掛けたのだ—(といふ處で「木賃宿の革命家」前篇(くよ〳〵するな)は終る)—

〔附記〕正體朦朧の「メゾン・ドリエン」に巣飽る一老革命家の跳躍を叙することに依りて、近世革命史上に爛然たる異彩を放つべき有望なる本篇「木賃宿の革命家」起草の由來は一に「週刊朝日」所說の吟味にあり。是、既に言へり。されば當面の順序として本作者と彼と相識るに到るの所以を明らかにしつゝ此處まで進み來るや、惱ましき紅毛碧目の一劣奴・野田勘兵衛が乃舌喋々として意外の長きにわたり、爲に妨げられたる物語は既に八十餘枚を超へ、夙に現はれ出づべくして未だ現はれ出でざる主人公的老革命家を如何にして早く引出さんかと作者大いに氣を揉みたるも其甲斐なく、原稿のメ切日を幾日か過ぎても徹夜しても遂に追ひつく能はざりき。今は本意なきことながら全篇の半分を「クヨ〳〵するな！」と名づけて以て本月號に、殘りの半分を然るべき別題の下に、來月（或は來々月）に發表するの外、術なきに到れり。かくて全篇は二回目に完結し、井せて此處に傑作の面目を完うせんとするものなり。高山樗牛なる學徒あり。二十餘年前に嘆息して曰く。ニイチェ仆れ、ラスキン逝き、イブセンの病篤く、トルストイまた起つ能はず、惆悵の思ひ何ぞ堪へむや。と。今や黒石先生の健脚頓かに衰へて一日の稿量一枚を越ゆることなしと聞かば、敢て先生の與様ならずとも、惆悵の思ひ何ぞ堪むやと言はんか。お尻の革命家に生方敏郎なるものありて曰く。君が中央公論に書くものに凡そお尻のあつたことがない。お尻は一體どうしたのだ？今度も矢つ張りさうだらう？と。然り、お尻は來月。生方敏郎。暫く待て。（大正十三年六月十日）

戰後の獨逸を觀るべく
―炎熱の海を倫敦まで―

水野廣德

四年三個月の封鎖に苦しめられて、國民は藁のパンを食ひ、木の靴を穿き、紙の衣を着て居ると傳へられた戰爭直後の獨逸を見んが爲め、一九一八年十一月十一日休戰條約が愈々成立するや否や、獨逸旅行を思ひ付いた。旅券の手續や旅行の仕度などに意外の時日を費やし、翌年二月郵船會社へ乘船を申込むと、歐洲行の便船は六月迄は既に悉く滿員しちと云ふ。七月まで待たされては溜まらない。若し船室の融通が付かれば、二等でも、三等でも構はないと云ふ條件つきで漸く三月の船に乘せて貰ふことが出來た。戰爭中潜水艦の危險の爲め旅行を見合はしたる外國人の歸國する者多きと戰後貿易の轉機に乘じて一攫千金の奇利を博せんとする實業關係の渡歐者が俄かに増加したる爲めであると云ふ。客の方から平身低頭哀訴歎願して漸く乘せて頂くと云ふ有樣である。郵船會社大繁昌。

扨て愈々乘船して見ると、幸に室の都合が付いたと見へ上等の室へ入れられた。素より各船滿員で、二個の寢臺に對して同室者三人、一人は窮屈なソッファーの上に寢轉ばねばならぬのである。併し夫れなどはまだ仕合せなので、中には一等の賃金を拂つて二等や三等に押し込められて居る人さへある。乘客の半數は外國人で、婦人と小兒とか殊に多

い。傍若無人に跳ね廻はる六七歳の腕白小僧から、乳母車に眠る赤ん坊に至るまで、大小十五六人も居る。甲板は宛ら幼稚園の樣な賑ひである。日本人の乘客もキャビン、パッセンジャーだけで五十人ばかりも居る。其の中倫敦行が二十人あまりある。半數は銀行會社等の若い人々で、博士の卵たる文部省留學生も四五人居る。其他會社の重役も居れば華族の若樣も居る。官命出張の役人も居れば自腹見物の我黨の士も居る。話相手遊び相手に事は缺かない。賑やかな旅行である。

下の關と上海との間で船が少し搖れた。高天原の子孫たる神洲男兒とかも、海に出てゝはカラ意氣地が無い。巾幗の洋婦人が甲板に巨臀を振り立てゝ活動せる間に、日本男子は顏色蒼然青菜の如く、縦藻のベットにへばり付いて顏を見せぬのもあれば、甲板の籐椅子にしがみ付いて動かぬのもある。黃白銅黑の外に更に靑色の一人種が出來た。食堂の椅子はチラリ、パラリ

『大分へコ垂れたじやないか、此の位の波で頭が上がらん樣じや、印度洋では命が上がるよ。』

『斯う苦しくては孫子の末まで船乘はヤラされない。印度洋はモットひどいかね。』

『今日なんどは君、シケの中じやないよ。食卓に框を嵌める樣にならなけりや、シケとは云へないさ。』

『そんなに脅かしちやいけない、君などは之で何とも無いかね。』

『これ位で飯が食へない樣じや、洒落ではないが船乘で飯は食へないさ。』

『羨ましいなア、どうしたら船に醉はなくなるかね。』

『幾ら醫學が進歩しても、馬鹿に付ける藥と眩暈の治る藥とはまだ出來ない樣だね。船醉ばかりは治すより馴れろじや。まア甲板へ出て運動でもやつて見玉へ、枕と首つ引きじやア、世界を十遍廻つたつて治りやせんよ。耳繻などで

は若い水兵お祭つぱらうと、甲板へ引き出して脇足をやらしたり、マストへ登らしたりするのじや。時々はマストの上から五色の水をブッ放すこともあるがね。僕等だつて初めて乗艦した時には、ヘドを吐き〳〵仕事をやらされたものじやよ。』

『たまらん〳〵、そんな話を聞かされると、一層胸へこみ下げて來る。斯んな苦しい時に異性の親切な介抱でも受けたら命の外は何でも提供して感謝するだらうね。』

『よつぱらひ本性違はずだね。そんなことを考へるだけの元氣がありや、命はまだ大丈夫じや。君も妻君を一人で船に乘せると險呑だぜ。』

○

濁水漫々、何處が岸とも堺の知れぬ楊子江口を出てた船は、南へ〳〵と進航しつゝある。蜒々屈折幾千哩、崑崙の山より流れ出でたる海水の泥は次第に薄らいで、三四時間も航すれば、いつしか黄海の名も空しく海は碧翠に澄み渡る。南走一晝夜、左には東海の蒼波洋々萬頃に連り、右には浙江の島嶼點々青螺の如く浮んで居る。前日の風和ぎて、空は晴れ、海は靜かに、八千何百噸の船は微動だにせず、滑かに青波の上をすべり行く。昨日の幽鬱、今日の愉快、甲板は賑やかである。

夜一夜明るく毎に氣候は次第に暖くなる。上海を出てゝより三日目、船は早や臺灣海峽に入る。氣の早き外人達は白服を着る者もある。海峽と稱するも廣さ八十海里、右舷遙かに福建の山頂波間に出沒するあるのみ、臺灣島は地平に沈んで見れども見ない。唯無數の白帆行きつ來りつ、近きは大鵬の翼を張れるが如く、遠きは白鷗の浮べるが如く、單調の海に幾分の風趣を添へる。連日の平穩に青色人種再び黄色人種に還元し、ライスカレーの多食を誇つて居る。

日一日重ぬる毎に船客間の親睦は濃やかになる。乘船當時四角四面な「あなた」「私」の初對面の挨拶より、浮世話に何時しか角が取れ、「君」「僕」の內證話にまで發展する。赤毛の茶目公とも友達になる、金髪の美人ともグド、モーニングを交換する。昨日は路傍白眼の人、今日は十年莫逆の知己となるのが同船者の情である。綠の海面を吹き渡る涼風に浴しつゝ籐の寢椅子を並べて馬鹿話に日を送くる船客生活ぐらい呑氣なものはあるまい。

『臺灣海峽つて隨分廣いんだね、僕は海峽と云ふから兩岸の陸地が見へる位かと思つて居たが。』

『そらね、さつと幅八十海里、長さ二百海里と云ふんだから、四國などは海峽の內へスッカリ入つて仕舞ふだらうよ。まア朝鮮海峽から對島を取り除けた位の廣さサ。』

『書物などには、臺灣海峽を扼してなど〻書いてあるが、斯んな廣い海峽をどんなにして防禦するかね。』

『こいつは難かしい質問だね。此の答案に合格すりや參謀總長兼軍令部長になれる譯さ。通つて來た馬關海峽や、紀淡海峽の樣に、兩岸から大砲で嚇かす工合に簡單には行かないからね』。

『すると矢張り軍艦で守るんかね。』

『まア海軍で守る外仕方が無いだらうね。』

『軍艦で守るとすると、何んな風にやるのかね、我々にはトント想像が付かないがね。』

『僕にだつて判らないよ、斯んな廣い海に軍艦がブラ〳〵して居りや、潛水艦にズドンとやられるし、世界の公海に機雷を拋り込むことも許されまいし。左ればと云つて英吉利海峽の樣に網を張ることも出來ないし、まア飛行機か何かで見張をするんだね。ところが此の邊は有名な低氣壓の製造地だから厄介さ。夫に此の海峽だけ守つた處で、琉球諸島の間には幾らでも拔け道があるんだからね。四十隻からの婆爾的艦隊でさへ、コツソリやつて來たのだから、入らう

と思へば何處からでも入れるさ。』

『厄介なものだね、何とかならないものかね。』

『厄介なものだよ。併し此次何國と戰爭するか知らないが、此處から內へ敵の大艦隊が態々侵入して來る様なことは先づあるまいよ。入つたところで精々黃海の通商破壞を目的とする巡洋艦か潛水艇位のものさ。』

『澎湖島と云ふのは何の邊かね、あそこは軍事上相當役に立つんかね。』

『さう、丁度此のあたりだね。右が廈門で左が澎湖島じや。低い岩ばかりの島だから遠方からは迚ても見へないがね。國防上から言つたら、まア交番ぐらゐのものだらうよ、小泥棒は捕まへるだらうが強盜となると一寸手に合ひ兼ねるね。ところが警察本署たる佐世保軍港があまり遠う過ぎるので困まるさ。』

『すると正かの時には臺灣は孤立じやね。』

『臺灣どころが、日本全國が孤立して居るじやないか。此の以上難かしいことは海軍大臣にでも聞いて見れ玉へ。』

○

右に立つ矢もあると云ふが、香港では岩から松が生へて居る。四圍悉く岩山草山の禿島ばかりの間に、唯獨り香港島のみが鬱松蓊蔚。四時の綠を海水の碧と競ふて居る。此の翠水綠樹の間に、巍峩たる高樓、瀟洒たる白屋が海岸より山の中腹に至る迄、段々層を爲して錯落參差たる美しさは誠に畫いた様である。殊に紅綠入り交りたる萬顆の燈火、水に落くる夜の眺めは、龍宮の城とかも斯くやと思はれる。百年以前、黎巖裸々として瘴烟瘴氣深く籠め、人間不住の地たりし此の島を化して東洋一の港と爲したる英人の努力は感ずべきである。之を思へば朝鮮の禿山も、滿洲の礫山も、悲觀するを要しない。唯努力じや、唯歲月じや。併し性急で近慾な日本人に眞似が出來るや否やは第二の問題じや。

香港を出ると暑氣は次第に酷しくなる。一夜作りの上海服に着換へる。船客相手の上海の服屋は、午前に註文すれば午後には作つて來る。新に作るのか、寸法の似た出來合服を持つて來るのかは知らぬが、着工合の悪るいこと夥だしい。上衣一枚一圓五十錢、値段を聞きては文句も言へない。

香港より新嘉坡まで直路一針、千五百海里五日航程である。第三日目に安南の突角を近く航過する。白砂青樹長く連り、遠山邐迤として霞に匂ふ。日露戰爭の當時婆爾的艦隊の久しく淹留したるホンコヘ灣は此の附近にある。多少の感慨を催ふす。

緯度は早や十度に低まり、四月の太陽を北に見る。暑さは暑し、仕事は無し、讀書には懶し、遊戲には飽いた。甲板の日蔭を撰んで籐椅子に身を投げる。類を以て集まる三人五人、香港探檢談も種子が盡きて、新嘉坡の作戰計畫が議せられる。之も長くは續かず、話は何時も極端化する。老ひたるも、若きも、古きも、新らしきも、學者も、無學も、之ばかりは過激派である。時ならぬ馬鹿笑に外人貴婦の夢を驚かすことも屢々ある。

退屈凌ぎに何か話の種子は無いかと、蚤取眼で互に他人のアラやしくじりを捜がし廻はる。寢ぼけ眼で便所の歸りに室を間違へてド鳴られたり、素つ裸で風呂から飛び出し、外國婦人を驚殺せしめたなどの失敗は、最早や月並で鼻に付く。乘客中に坊つちやんの様な可愛い顏した小さい醫學士の留學生が居る。或日「暑い〳〵」と胴衣のボタンを外づして胸を煽いで居た。胸のあたりに白い大きな舌の様なものが、風のまに〳〵ペラ〳〵と動いて居る。口の悪い男が、

「S君、君はネクタイを二つもやつて居るね、其の下の方の白い固いのは、何か醫學上の理由でもあるんかね。」

不良壯年の群がドツと囃やす。正直なドクトル顏を赤めながら眞面目に、

「こりや君、ワイシヤツの代りの胸板じやよ。」

『へー、今時珍らしいものを持つて居るね、親父さんの御讓りかい、それとも當時代用品として買ひ求めたのかいそれとも來かね。』

『何がそんなに可笑しいかね。君等がカフスを使ふのと同じことじやないか。經濟で、便利で、涼しくて、非常に實用的だよ。』

『お負けに高尙で、優美で、ハイカラで、美術的で、當世紳士の御必要品と來るかね。一體何處の緣日で買つたのかい。』

『怪しからんことを云ふ。僕等の學校では皆之をやつてるがね。』

『どうか知らんが今時イカ胸をペロつかして、倫敦巴里を濶歩しようと云ふんだから、君も優しい顏に似合はん中々豪膽があるね。洗濯屋が何と付けて來るかい、まさか西洋涎掛とも書くまいね。』

『非道いことを云ふ。まア一度試めして見玉へ、こんな便利なものはないよ。』

『便利かどうか知らんが、ニユートン時代の畫を見る樣だね。』

爾來ドクトルのイカ胸は永く甲板の話題を提供して呉れた。彼の在る處、彌次漫評頻りに起り、常に笑聲が絕へない。併しドクトル平然として、いつもニコ〱しながら、赤道直下に汗拭き〱イカ胸をペロつかして、デツキゴルフの勝負に外國婦人を啞然たらしめて居る。

○

新嘉坡の名物、護謨に、ジヨホールに、日本娘！。

面積二百三十平方哩の新嘉坡島、山と言はず、谷と言はず、全島悉く護謨園である。多くは支那人の經營に屬すと

か。日本勞働者も島だけで千人を下らず、內地を合すれば三千人にも達すと云ふ。護謨樹の幹皮をV形に劍り、其に小さき武力罐をブラ下げて、流れ出づる護謨液の集を受ける。飛行機、潜水艇、無線電信、電話まで發明さるゝ科進步の今の世に、之は又何たる原始的な採收法だらう。人間の智慧も知れたものである。

西にモナコ、東にジョホール、世界に於けるバクチ公開國の好一對である。芸者の稅金と、バクチの寺錢とで國費を支ふる、孰れが文明國なるやなどゝ野暮な質問を起すべからず、バクチを國粹として尊重する國もある世の中ぢや。一攫千金を志して折角ジョホールまで行きたるものゝ、戰爭に遠慮して休業中と聞き、本場のライスカレーに涙をこぼして空しく歸つた馬鹿者もある。

世の中は三日見ぬ間　櫻かな、二年以前來た時に、赤い着物に細帶一つ、日燒けた顏におしろいコテ／＼、陣を店頭に張つて日本語、支那語、馬來語チャンポンに、相手擇ばず國家奉仕に奮鬪したる日本娘も、今は浴衣姿のバー女と變はる。蓋し吉原變して淺草となるの類である。吉原の張店撤廢に國風破壞を惜んだ人は、新嘉坡日本娘の全滅に痛恨の涙を濺ぐが好い。

生きた魚の日本料理、船の洋食よりは腹の虫が歡迎する。西洋窓に疊を敷いた風通しの悪い變な部屋で、隣座敷の踊三味線を聞く、暑いこと／＼。波止場には軍艦が着いて居た。自動車で島の周圍をドライブする。道路坦々音も立てず躍りもせず、埃も揚げず、泥も飛ばさず、車滑かに走る。護謨林の中、靜波の邊り、家稀に燈火疎らに、涼風習々赤道直下とは思へない。折柄の驟雨一過すれば涼爽更に加はり、半輪の月高く椰子樹の頂に懸つて居る。歌の詠めさをる憾みとする。

歸船すれば荷揚げのウインチ尙ほ轣轆として汗に塗みれたる土人の顏黑く電燈に光つて居る。

『感心に能く歸つて來たね。あの模樣では明日の出港に後寳になりやアせんかと心配して居たんだが……』

『古い奴だが振られて歸る何とかさ。陸も暑いが船も暑いね。』

『熱帶の港の碇泊は地獄さ。部屋の中は暑くて迚も眠らりやせんよ。新嘉坡の觀察若くは探検はどうだつたかね。』

『まア悲觀だね。上海、香港、新嘉坡と、何處でも日本人は相當に居るには居るが、個人的に成功して居る者は殆んど無い樣だね。到る處日本人同志の共食ひだ。そこに至ると支那人は偉いね。新嘉坡でも一と名の付くものは悉く支那人が持つて居ると云ふじやないか。』

『日本人は口の先でこそ人間到る處靑山ありなどゝ威張つて居るが、其實外國へ出ると踏張り意氣地が無いね。つまり郷國に對する愛着心があまり强よ過ぎるからで、殖民には不適當な國民だね。何しろ衣食住から風俗習慣道德まで一種特別で、しかも唯我獨善と極め込んで居るのだから、外國人とも協調融和が取れにくいさ。手段を撰ばず取れる丈け取つて、二萬か三萬の小金が出來ると後は野となれ山となれで、日本へ歸つて樂隱居をしようと云ふんだから、大きな成功者が出來ない筈さ。』

『斯く云ふ御同樣も一日だつてライスカレーを缺かさないんだからね。椅子は有つても胡坐をかゝんと承知が出來ないと云ふんだから困まつたものさ。』

『それに國民敎育の根本があまりに御國第一で、排外思想侮外思想を養成するのも、一つの原因だと思ふがね。』

『そら、電燈が消へた。早や十一時ぢや。さア今夜は甲板の椅子へ寢るかなア。』

『よし玉へ、夜中にスコールでも來ると風を引よくよ。熱帶の風引はタチが惡いからね。』

『共雜儀でもして吳れる人があると、風を引いても張合があるがね。一人雜儀じや詰らない、暑くても部屋へ入るか

な。」

○

新嘉坡を出てゝ馬喇加峡の一夜、流汗淋漓として暑さに眠られず。彼南の一日、燒け付く炎天を犯して極樂寺の見物も決して極樂ではない、一時間七弗の自働車もあまり涼くはない。唯もぎ立ての椰子の實の水ばかりは甘露の味がした。

彼南を出でゝ一夜一日、スマトラの東岸に沿ふて進む。全山鬱蒼、緑翠海水と共に濃く、故國の景に接するの思がある。

新嘉坡で日本人乘客の半數退船し、日本人村の籐椅子會議に寂寥を感ず。入り代つて西洋の御客さん乘り來る。小兒益多く甲板に群を爲す。併し感心に日本の小供の如く喧嘩はやらない。甲板に一坪ばかりの木柵の框を立て、其の中に二三歳くらゐの小兒を入れ、母親は籐椅子に横つて晝寢の夢を貪つて居る。甘く考へたり檻中の幼兒、是なら落ちる心配もなく、怪我する氣遣ひもない。

炎暑益強く、室内蒸熱ムロの如く、日中迚ても居に堪へない。甲板に出ると、此處にも、其處にも、日本人も、外國人も、男も、女も、死人の様にグツタリと籐椅子の上に寢そべつて居る。讀み掛けた小説の甲板に落ちたるを知らぬ西洋婦人もあれば、上衣もシヤツもボタンを外づして、心地よげに胸毛を風に嬲らして居る日本人もある。露天甲板は白く乾き切つて陽炎が搖らひで居る。海は太陽の直射を受けて、波はギラ〳〵眩しきまでに輝く。手首襟筋からは脂汁がニト〳〵と泉む。自分の息さへ火の様な感じがする。晝飯と晩飯とに食堂に入る毎に汗びつしより、是れだけの御馳走を飯臺の前にアグラをかいて、双袒脫いで食ふたなら、嘸ぞ美味からうなどゝ下司根性も出る。

彼南に土人の手相見が居る。能く中るとて有名である。乘客の誰れ彼れ、見料一圓を奮發して手の筋を見て貰つた。新聞記者のO君が、銀座中捜がしても遂に合ふ手袋が無かつたと云ふ巨大なる分厚の掌を衝き出す。盤紙をもしやくつた様な顏の手相博士、尤もらしく「チス・ライン」とか何とかやる。O君頻りに感心して首を傾ける。

『實に良く中る、不思議だね、過去の事は悉く適中したよ。倫敦へ着いたら乾度吉報が待つて居ると云つたが樂しみだなア。』

『若し本當の事を言つて、其の大きな掌でパチリやられては溜まらないと思つて、手相先生好い加減な歡ばしを言つたんだよ。君も案外甘いね。』

『實は倫敦へ行つたら電報爲替が來て居る筈なのじや。』

『君が金の欲しさうな顏をしたからだよ。併しK君が妻君を三度貰ふたとは、今の奧さんが聞いたら泣くぜ。尤とも既に三度目なのかな。』

『K君はまだ獨身だから大丈夫じや。』

『すりや、一番二番の妻君にはナリ手がないぜ。幽靈とでも結婚するかな。』

『S君には小供が二人しか無いと云つたが、既に三人あるんだから一人は他人の子供じやね。S君留守中大丈夫かい。』

『夫よりもアノお跳ぬのロスキイの、三年以内に水死するは隨分嚴しかつたね。』

『あれ以來おばさん、スツカリしよげ込んで仕舞つて、いつも椅子に噛つて悲觀して居るよ。旅行中あんなことを言はれちや、誰だつてあまり好い氣持はしないからね。』

『馬鹿に同情するね。おばさん、あまり無遠慮にあの男と巫山戲るので、手相先生きつと妬いたんだよ。』

『迷信家の信用を博する爲めに、屹度誰か一人を犧牲にするんだね。良い事ばかり言つて居たんでは人が怪しむからね。どうせ二度と來る人間は殆んど無いのだから、何を言つたつて平氣さ。』

『A君の外國人と結婚すると云ふのが、今日の秀逸だね。之も同胞の誼みとして奧さんに内報して置く必要があるね。』

『あれで一時間ばかりの間に一寸十圓程稼いで行つたが甘い商買だね。あの位の藝當なら我々にだつて出來そうじや。歸つたら神戸あたりで「チズ・ライン」をやるかな。』

○

スマトラの北端アチン角を西にかはれば船はベンガル灣に入る。四顧淼茫として唯波と雲。

甲板を洗ふブラシの音に寢苦しかりし曉の夢を破られ、尙ほ床中にウト〳〵とする時、バスボーイが船室の戶をコツ〳〵、御風呂の準備が出來ましたと告げる。夜は纔かに明けてケビンの窓硝子が薄白い。ホノ暗い廊下の電燈が鈍い黄色い疲れた光を殘して居る。淸澄な潮湯に汗を流し、部屋に歸ると、トーストと珈琲が持て來てある。同室者の眠を覺まさぬ樣靜かに口を嗽ぎ、顏を洗ひ、珈琲を飮み、服を着換へて甲板に出る。今洗つたばかりの甲板は水々として飴色に濕ひ、塵一つ止めて居ない。東天ほのかに紅を潮して西の空には圓い殘んの月が薄白く懸つて居る。軟かな凉しい朝の風が心地よく顏を吹く。淸い爽かな海の氣が浴後の體を引き締める。夏の海の朝の氣分こそ、海上生活者のみが味ひ得る特權である。

舷欄にもたれて滿船の朝氣を滿喫する。靜かな海には輕い漣が疊の目の樣な小皺を湛へて居る。船首の切波が八の字形に末廣がつて、果てしも無き廣き海に消へるともなく消へ行く。東西南北、乾坤巽艮、見渡す限り眼を遮るものもない。澄み切つた紺靑の空、果て知らぬ碧綠の海、クッキリと鮮やかな水線に限られた大圓圏の中、天上天下唯我が船

あるのみである。天空海濶、心自ら大である。

東の水線に橫はる低い土手雲が紫紺色に彩られる。雲の上縁には朱金色の縁線が美しく輝やく。船客が暑さに疲れた顏してボツ／＼甲板に現はれる。「お早う」「グードモーニン」の挨拶が口々に交はされる。やがて朝飯のドラが鳴る。若い婦人は御化粧の出來ぬ爲めか、食堂に出るものは尠ない。食後の甲板は生き／＼として賑やかである。まだ乾き切らぬ甲板にデツキボーイを急き立てゝゴルフのベースを作る。若い男女はゴルフやビリヤードにキヤツ／＼とはしやぐ。ズラリと並べた寢椅子の上には老人や婦人が讀書に餘念が無い。小供は自轉車に乘つたり、輪投げをしたり、思ひ／＼に遊んで居る。一組の外人は早や喫煙室の一卓を占領して、パチリ／＼とハート、クラブの札を繰つて居る。九時を過ぐると炎帝がソロ／＼猛威を發揮し始める。十一時にはビスケツトとスープが配られる。

午後一時に晝食のドラが鳴る。船のコツクが腕に撚りを掛けたビフテキよりも、カツレツよりも、米の飯に福神漬が日本人には歡迎せられる。三時までは西洋人の晝寢時間とあつて、騷がしき甲板の遊戯は禁制である。風通し良き甲板の一角に陣取りたる日本人村の雜談會が賑ふ。誰かのネクタイピンの寶石が「石じや」「硝子じや」の論議立から古倫母の寶石談が始まつた。新嘉坡からの三等船客に印度の寶石商人が居ると聞き、

『一つ呼んで冷やかして見ようじやないか。』

色の黒い、目玉の光つた、人相のあまり好くない印度人が、穢ない布袋から紙やキレや綿に包んだ、靑や、赤や、紫や、紫の南京玉の樣な寶石を甲板に並べた。覺束ない日本語で、

『あたし古倫母居る、安く賣る、日本の人澤山買ふ。』

『是は幾らか？』

『是れ上等ルビイ、日本金十圓、澤山安い、買ふ宜しい。』

『是は？』

『是れ一番上等石、負けるない十五圓、日本持つて歸へる、奥さん歡ぶ。』

『二つで五圓に負け！硝子じやないか。』

『硝子ない、本當ルビイ、大丈夫、靴踏んで見るよろしい。二つ二十圓負ける、古倫坡買ふ二つ三十圓。』

『此の大きいのは幾ら？』

『是れ安くない、五十圓。』

『隨分吹きやがるなア、十圓に負け！』

『日本の人親切、印度の人皆好く、三十圓負ける、あたし損する。よろしい。』

寶石商人君中々御世辭を言ふ。何邊となく、出しては包み、包みては出し、到頭言ひ値の四分の一から五分の一位で四五人買はされた。

『一體こりや本物かやね。』

『まア本物として置くさ。兎に角安い物だ。』

後で口の惡い事務長に見せたら二足三文に踏み倒された。事務長の曰く、

『奴は甘い儲けをしましたわい。』

○

午後三時には茶菓が出る。日本乘客の爲めには折々餅菓子、汁粉などの御馳走もある。甲板では再びゴルフやビリヤ

ーミが始まる。荒武者の大佐達が上衣脱ぎ棄て、汗水垂らしながら「アウト」とか何とか叫びながら騒いで居る。日は漸く傾いて斜に甲板を射る。日覆の蚊帳が風通しを妨げる。炎暑愈厳しい。

甲板に設けられたスウィミング、バスが賑ふ。大理石で刻んだ様に真つ白い西洋婦人の豊満な肉體が、透明な水中に躍る。較べて見ると日本人の皮膚は矢つ張り黄黒い。黄金色でなく真鍮色じや。水浴時間は男女別々の規定であるに拘はらず、何時も女の方から規則を破つて男子の時刻に混浴する。流石に西洋の女は厚かましい。素より男子の方でも抗議はしない。

夕食は七時の定め、三十分前に用意のドラが鳴る。文明紳士たらんものは此間に、髯を剃り髪を梳り、服を更め、男も女も大メカシにめかし込む。船長以下船員は尻切トンボの白いジヤケツに着換へる。何世紀以前の服裝か知らぬが随分古風な滑稽な服である。肌もあらはに目透く様な薄絹の婦人服の涼しそうなのに引き代へ、黒い禮服着けたる男の暑さうなこと。背廣の着流しでさへ汗が出るのに。

食後浴衣に着代へて甲板に出る。涼しい夕風が日中の暑氣を拂つて甦へる思がする。若い西洋の男女は互に腕を組んで、楽しそうにグル〳〵と甲板の周りを散歩して居る。時には蓄音機を引つ張り出してダンスをやることもある。夕食後の二三時間こそ、彼等に取つて最も愉快な時であるらしい。電燈影暗き甲板の隅に喃々の聲を聞くことも珍らしくない。

赤道附近の地は春夏秋冬、四季を通じて殆んど晝夜の長短が無い。朱盆の様な太陽が空に錦を殘して西の海に沈むと、入り代つて銀盤の様な満月が東の空に浮き上がる。

白銀の鏡を磨ぎ澄ました様な月が、今しも後甲板の上に懸つて居る。

『良い月だね、今日は滿月だらう。』

『日本じや今頃櫻の盛りだね、庭の櫻に朧月と云ふ處だ。惡るくないね。』

『月と云ふ奴はどうしても陰性物のもので、どんな美しい月でも之を見て浮れ出す氣分にはなれないね。冴へれば冴へる程、澄めば澄む程、物淋しい、物すごい感じがするね。』

『春花秋月で、月は矢張り秋のものじや。寂しい琴の音では月見が出來るが、騷がしい三味線では月は見えないね。』

『併し又斯うやつて、靜かな大海の眞ん中に俗念を忘れて隈なき滿月を眺めるのも多少の趣はあるれ。あの月をヂツと見入つて見玉へ、無念無想になるか、左も無ければ雜感交到するかじや。一體西洋人は花に對しては非常に好愛心を持つて居るが、月に對しては殆んど無關心の樣じやね。見玉へ、澤山の西洋人中、一人として此の美しい月を眺めて居る者は無いじやないか。』

『明日の晩、日本人の觀月會をやらうじやないか。二十餘人の同胞が同船でベンガルを越へるなどは、日本發展の證として大に祝すべきだ。』

『宜からう、一つ船長に交渉して見よう。場所はボードデツキに胡座を搔いて浴衣掛けと云ふことでね。併し天上の嫦娥ばかりでは物足りないから、後甲板の花には君が交渉使となるさ。此前僕が此處を通つた時には同行僅に四人で、しかも前途には獨艇が跳梁して何時鱶の餌食になるかも知れぬと云ふ頗る心細い有樣だつたがね、其に比べると今度の航海は實に呑氣で愉快じや。』

日は沒した。西天は空も海も火の樣に夕照に燃へて居る。ボードデツキに集まる日本人約三十名、中に一點の紅も交つて居る。絕對平等の無差無別、海苔を嚙つて麥酒の滿を引く。海は蒼黎に暮れて水線漸く模糊となる。空は暗綠に深

みて星辰に光を放つ。西空の紅愈々微にして、東天の白徐ろに加はる。やがて水際にちりばむ朱一點、初めは錢閃の如く尋で伏杯の如く、更に半圓となり、遂に全圓となる團々朱盆の如く、色火に似て居る。「月が出た！　月が出た！」。ベンガル灣心觀月の宴、且つ飲み且つ歌ふ。軍歌が出る、サノサが出る、端唄が出る、長唄が出る。船上の無禮講、月は檣頭に莞爾として笑つて居る。

○

ベンガルの三月、幸に天晴れ海穩かに、唯炎熱の酷しきに苦しむ。船内鼠多く、屢船室を犯す。一夜睡眠中、踵の剝皮を綺麗に喰ひ取られ、翌夜亦親指を咬ぢらる。上段のO君及隣室の人亦襲はる。入口の扉を締むれば暑さに蒸し殺され、開き置けば鼠の危險あり。足の指ぐらゐならまだしも、急所でも嚙まれては大變なり。全身を毛布に包みて床に入る。暑いこと〳〵。遂に逃げ出して甲板の椅子に寢る。若き西洋婦人にして暗の甲板に眠むれる者もある。大膽至極。

船は古倫母に入る。同志を募り自動車を馳つて佛跡キヤンデイに遊ぶ。沿道の風景、時に幽邃、時に豪壯、支那の文人畫を實地に見るの思がする。路傍の樹木に大象を繋げる、幌水牛車の悠々たるなど印度氣分亦深い。七十餘哩の山道能く整ふて、車は板上を滑べるが如くである。印度人或は英國の虐政に苦しむことあらんも惡道路に惱まされず。我が東京人と孰れが幸不幸。

彼南までは支那人の勢力範圍である。古倫母に來つては最早や支那人を見ない。日本人の數も亦僅に二三十人に過ぎずとか。ベンガルは東亞と中亞との分堺水である。香港、新嘉坡、彼南、古倫母と歐洲航路汽船の寄泊する處、悉くユニオンジヤツクの旗が飜つて居る。世界を我が物顏する英國の天下は何時まで續くであろう。印度の地下には既に熱火が燃えつゝ居る。

古倫母一泊、港口防波堤の壯大に敬意を表しつゝ埃士西土に向ふ。亞拉比亞海の横斷、紅海の縱斷、運河の通航、其の航程二千八百三十海里である。出港の翌日ミニコイ島を右舷に過ぐれば、船は連日連夜、亞拉比亞海を西に駛る。島もなく、山も見へず、鳥の通はず、魚も躍らず、白雲青波を友として日夜唯炎熱と戰ふのみである。季節尚ほ早ければモンスーンも未だ起らず、時に風全く絶へて海油の如く、熱汗上衣に撤することもある。印度洋の風にビク／＼したる船弱黨の豪傑共、俄に意つて、印度洋の波屁の如し、チト時化ねば航海の面白味が無いなど、氣焔當るべからず。

あまりの暑さにデツキゴルフに汗を絞ぼる勇士も少なく、船内惰氣滿々、生きた死骸が甲板到る處椅子の上にコロリ／＼。小供ばかりは獨り賑やかに騷いで居る。小供は風の子雅火の子である。夜は正午を過ぎねば暑くて室に寢る能はず、夕食後の籐椅子會益賑ふ。時には船長以下の船員まで臨時會員として出席することもある。話上手な事務長が講談もどきに實歴談をやることもある。コツクテールや、ソーダ水に喉を濕ふし、夜食のサンドウイツチを頬張りながら、毛ずね捲くり出して愚問愚答愚談愚話に消燈時の迫まるも知らず、氣隨氣儘の太平樂を極む。何としても不良壯年團である。

『今夜の議題は何とするかやね。』

『ドクトルの生殖學講演も濟んだから、今夜は一つ外人棚卸しをやるか。』

『あのB宣教師は日本語が能く判るんだから、滅多なことは云へないぜ。』

『大丈夫、今夜先生達は社交室で何かやつて居るから。』

『英人のMね、あの男は何だか、スパイの樣な氣がしてならないがね。F君などは大分心易い樣だが、どう思ふかね。』

『僕はあの男は相當な人格者と信じて居るがね。』

『一體此の船には西洋の女も大分乘つて居るが、扨て我々の目に美人と見へるのは殆んど居ないね。西洋でも美人は殖民地などへは來ないと見へるね。本國には相當美人が多いんだが……』

『あれで、男の方は躍氣になつて騒いで居るんだから、おかしいよ。風習の相違かも知れないが、男も、女も、閙う〳〵しいのに驚くね。まるでサカリの付いた犬見たいなものだ。唯嘴合をやらないだけが感心さ。』

『此頃消燈後の甲板は隨分ひどい模樣だね。社交室や喫煙室なども怪しいと云ふことだよ。』

『日本を出てから、もう一月になるからね。生力旺盛な先生達にや無理もないだらう。』

『あのポーランド君到頭青服をキヤツチした樣だぜ。西洋でも矢張り一押し二金じやね。』

『夫れじや冬服のロス君が可哀想じやね。あの男中々愛嬌者で、冬服一着で此の暑い印度洋を押し通ふすんだからエライさ。何でも先生白軍の中尉とか云ふことだよ。』

『夫にしても何じやね、女の歡心を得る爲めに、椅子を直してやる。毛布を掛けてやる。枕をすけてやる。茶を運んでやる。まるで女の奴隸じやね。西洋人の色男たる亦難いかなじや。迚ても日本人には眞似が出來ないね。』

『能く見覺へて置いて、向ふへ行つてから鐵砲を頂かない樣にし玉へ、目的を達するまでは何處だつて男は女の奴隸だからね。』

○

一度の時化にも會はず、暑い〳〵と喘ぎながら亞拉比亞海平穩に過ぎて、五日目の朝早く、右舷に初めて山勢雄偉の怪島を見る。赭黒の岩山、崎嶇峭立、屹として蒼波の上に峙つて居る。全島日に燒けて殆んど一點の緑を見ない。朝食を終へて再び甲板に出づれば、阿弗利加の極東端がタフイ角は早や其の豪宏なる姿を左舷船首に展開して居る。船唯千

呎削るが如く、割くが如く、海表に壁立すること數十哩に連り、五千呎の蒼山峨々兀々として其の上に聳へて居る。裸岩朝日に映じて全山燃ゆるが如く、滿目唯是れ赤土と赭岩とである。草木生ぜず、人畜棲まず、熱風に乾され、烈陽に熱かれつゝ、殿乎として怪魔の如く半天に突つ立て居る。雄壯にして凄涼、粗大にして荒寥、之ぞ阿弗利加的風景である。

船は亞丁灣に入り、左舷に阿弗利加の陸を望んで進む。近きは赭岩日に輝き、遠きは連峯紫烟にかすんで居る。空に一點の雲もなく、海は疊の如く、輕風颯々、漣波瀲々、亞拉比亞通ひの帆舟三四、遠く鷗の如く浮んで居る。

やがて亞拉比亞の山も見え出した。明日は愈世界一の熱海と稱せらるゝ紅海に乘り入るのである。印度洋の暑熱に苦しみたる乘客は、此の上暑くては干物になると恐慌一方でない。昔、印度通ひの船を此處まで見送つて、生別死別の涙の水杯を交はしたと云ふ「涙の瀬戸」バベルマンデブ夜の間に過ぎて、翌朝起き出づれば船は既に紅海に在る。不思議や海水の色は依然として紺碧に澄んで居る。

地圖を見ると、日蔭の糸瓜の如く細長き紅海も、來て見れば此處も廣漠たる大海、亞拉比亞の山、阿弗利加の山、見れども見へない。唯大小數個の島を見る。何れも岩山突屹として島姿頗る怪奇を極めて居る。全島の山皮悉く枯れ禿げて岩砂裸出し、一樹の綠陰、一戸の民家も無い。一島の島端に燈臺がある。斷岩峙つ褐岩の次に白堊の燈柱矗として立つて居る。熱海無人の燈臺守、語る友もなく、行く處もなく、日暮れて點じ、夜明けて滅す。春夏秋冬、風日雨夜、終歳一律以て生を送くる。生きた死骸か、死んだ生骸か、彼が人生觀こそ聞きたきものである。

『一體こんな處の燈臺守は何を樂しみに生きて居るんだらう。』

『我々の様な俗物には判らないね。兎に角外に飯を食ふ道を知らぬ非常な凡倉か、人類奉仕の觀念の極めて强い非常な

損得だね。要するに大損か、大得かじや。」

『まア我々には何でも勤まる仕事じやないね。此處の燈臺守と監獄生活と、どちらが幸福だらうか。」

「どちらもまだ實驗したことが無いから判斷が付かないね。おれで監獄の方は肉體上の苦痛は大であらうが、群居生活と云ふ點に於て幾らか精神的の慰藉は有らうじやないか。こゝの燈臺守と來ては精神的の慰藉は先づ絶無だからね。するど監獄の方が良いかも知れんぜ。』

「食ふ爲めの職業とすると、生に對する人間の執着心も隨分强いものじやね。』

『併し住めば都と云ふから、之でも狎れて見れや、夫れ相當の樂しみも、慰さみもあるだらうよ。華族や富豪から見りや終日汗水垂して而かも食ふや食はずの勞働者などの生存慾が疑はれるだらうからね。』

「豈に獨り勞働者のみならんやだ。特權階級者から見りや、我々の生存だつて同じことだよ。パンの爲めには、上役の言ふことなら馬鹿でも、阿呆でも、御無理御尤で聞かにやならんのだからね、どこにパン以外に生存の價値があるものか。』

『すると、好いた同志で浮世を外に燈臺守でもやるのが、最も意義ある生存かも知れないね。』

「そんな氣持も爲ないではないね。どうたい、一つ實驗して見ないかい。』

『やるにしても亞拉比亞の無人島じや溜まらない。まア東京灣の觀音崎くらいなら。」

○

紅海縱斷の四晝夜、思ひし程に暑くもなく、北風來れば甲板寧ろ冷涼を覺ゆ。宵前は涼くして艙梯子の上、人已に稀なることもある。

島嶼二三、左舷に近く過ぐ。或は峨々たる岩山、鋸齒の如く、碎刄の如く、錐の如く、劍の如く、大小高低、數を亘せるものもある。或は全島唯是れ赭岩磊々、赤土累々。一木一草を見せざるものもある。紅海の名の起る、水の紅にあらずして山の赤きに由るならんかと思はれる。

船は遂に蘇士灣に入る。兩岸俄かに逼つて、右にシナイ半島、左に埃及の連山を見る。奇峰怪嶽巖々として山巓鋸の如く亂峙群立、近きは岩角突屹として崖嵬峥嵘、妙義五劍の無數に連なるに似たるものがある。モーゼ十戒のシナイ山は夕靄にかすんで右の半空を摩し、獅子の如きアブギル山は聳然として左の中天を衝いて居る。風光唯壯凄。

蘇士港碇泊兩三時間、運河航過の準備を爲す。樹木乏しき荒凉たる砂原の濱。赤煉化家屋の烈陽に灼くる景色の毒々しさ、二千年來の古市蘇士の町の寂しさこそ哀れである。土耳共帽の土人來つて怪貨を密賣する者もある。

船愈運河に入る。河幅僅に百米突。狹きこと甲板より飛んで渡るばかりである。兩岸の地は唯一面の沙漠にして黄原十里家を見ず、滿目荒凉、白沙徒に日に輝いて居る。河の東岸には堡壘、塹壕、鐵條網など、殆んど寸地を殘さず連接し、大戰の名殘尙ほ新たである。其の蜒々として絕へざる幾條の鐵條網、斷續として起伏せる塹壕の跡、累々として積み重ねられたる堡壘の土嚢、岸に沿ふて盡くる處を知らない。今更ながら戰爭の規模大なるを覺る。

運河全長八十五哩、河内船速最大五節。途中大小數個の湖水がある。河の西岸には數個所の見張所を設け、時に稍や樹木の靑きを見る。駱駝沙丘に戯れ、猛鷲荒原に翔るなど、沙漠氣分を深ふする。陽はいつしか黄沙に沈んで、四顧暗瞑。船外隻燈の光を見ず、運河の水、帶の如く獨り星光に白んで居る。當年世界文明發祥の地、今は荒漠無人の境となる。驕れる埃及人、彷へるイスラエルの民、等しく是れ二千年の夢の跡。桑田碧海と變じ、沃野砂原と化す。地球は何時か消滅す。觀ずれば人生畢竟是れ何物？。國の富と力を盡くして己が墳墓の金字塔を築きたる埃及王のミイラ、今は

倫敦博物館の見せ物となる。富貴何するものぞ、功名何するものぞ、權勢何するものぞ、我に生きて我に死することこそ是れ人生と言ひたくなる、

『運河は案外粗末な、原始的なものだね。僕は兩方の岸などはコンクリートか何かで築いて、今少し現代的なものかと思つて居たが。』

『之でも工業の比較的幼稚な五十年前の仕事としては大工事だつたらうよ。其の當時の金で二億五千萬圓も掛つたのだから、今であつたら大した金さ。計畫者のレセップと云ふ佛蘭西人は、其後パナマ運河で失敗して懲役に抛り込まれたりしたが、兎に角エライ男だね。』

『大事業家は大冒險家だから、一歩誤まると法に觸れる樣なこともやるからね。此の運河が出來た爲めに、東京から倫敦へ行くのに、どの位利益があるんだらう。』

『そうね、距離に於て三千海里以上も近くなるだらうよ。十二海里の速力の船とすれば十二三日早く着く勘定じや。總て新規の事業には必ず反對が有るもので、今でこそ英國は運河の大株主で非常に利益を得て居るが、レセップが之を開いた時には種々の點から英國は大に反對して妨害を加へたものだよ。日本でも初めて東京と横濱との間に鐵道を敷いた時には、外國兵が之を利用して東京へ攻めて來ると云つて反對した國權論者も多かつたと云ふじやないか。尤も英國の反對には英國として相當の理由もあつたのだが、愈開通して見りや、此の通り便利なのじや。』

『どこの國にも、いつの時代にも、頑冥なわからず屋はあると見へるね。其の點に於て日本などは決して人後に落ちない方だらうよ。支那の受賣をやつて居ながら、西洋の事を頭からクサして掛かる國粹主義者が多いんだから驚くよ。ところで、若し紅海と地中海とが昔から接續して居たら、東西文明はもつと早く融合して、世界の歴史は今と餘程違つて

居るだらうと思ふがね」。

「さア共の問題は船舶の發達との關係にあるから一概には言へぬが、僕は大した影響はあるまいと思ふよ。併しコイツは籐椅子の上で議論する問題じやないね。」

○

午前十時運河に入り、翌朝未明運河を出でゝ坡西土に着く。地は歐亞船路の要衝、巨船輻湊して煤煙空に漲つて居る。運河と共に開かれたる新開港である。緯度は我が鹿兒島と多く異ならざるも暑熱烈しく、樹木少なく、風一たび起れば細砂の雨を降らす。住民の大多數は色半黒にして鼻高く、眼ギラ〳〵一癖ありそうな亞拉比亞人である。眞黒牛の如き亞弗利加土人も交つて居る。外の男には顏さへ拜まさぬと云ふ女の貞淑か、男の嫉妬か、頭より黒き布を被りたる回教婦人の顏こそ見たけれ、額に竹の切節を當てたるは既婚婦人のしるしなりとか、妙な風俗もあつたもの。英國軍隊駐屯す、將校も、兵卒も、悉く砂原にテント生活を爲し、大にデモクラシイを發揮して居る。ゴールデン、ハウスとかで奇々妙々の踊を見た。

市中で土耳其帽を購ひ、被つて棧橋に到る。門衛の亞拉比亞巡査、大聲叱咤しながら入門を拒む。旅券を見すれば抱腹大笑、夕刻なるに「オハヨー」。旅中の一笑話である、亞拉比亞人と間違へらるゝ程、不斷より黒き顏益黒くなつた。

坡西土を出でゝ地中海に浮ぶ。次の港は倫敦である。機雷、潛水艇の犠牲二三隻、檣を半ば水上に現はして港外に沈んで居る。船では遭難の配置が定められる。ナイル河の港遠く流れて海は黄色に濁つて居る。天地開闢以來何萬何千年世界の大川小河、晝夜滔々として陸地の泥を海に送くる。今後何萬何千年、地球の表面海と陸との區別なからん。

冷氣遽に加はり甲板復た暑熱を感ぜず、日本の春の氣候に復へる。日本人多くは私室に籠居し、甲板に椅子を並べて

愚談に耽る者尠ない。左舷に阿弗利加の山を望みつゝ、船は地中海を西に向つて駛つて居る　英国海軍の要塞そこなる夜の間に過ぎて、チュニス海峡パンテマリヤ島は今左舷に近く従へて居る。島は延長約十哩、海岸は多く断崖絶壁にして、波は崖際に白んで居る。山の中腹は耕作能く行はれて林園交錯、白堊の民家其間に點綴せる光景、優にして閑でおる。古倫母以來初めて人の住む青き島を見た。

阿弗利加の極北端チュニスのボン岬を過ぎて西地中海に入る。機雷の難を避けて陸岸に近づかず。阿弗利加の山、雲か、烟か、淡翠を抹するが如く、氣候快適、海閑かである。日本を出てより早や四十五日、人々愚談に飽きてトランプ頻りにはづむ。喫煙室、社交室等、朝から晩までダイヤ、クラブの騒賑やかである。一組の外人、上海以來食事を終る外晝も、夜も、喫煙室に陣取りてカードを鬪つて居る。勿論金を賭けたバクチである。根氣と熱心とに感服する。

『先生は能く飽きもせず、毎日〳〵やつて居るね。バクチと云ふ奴は餘つ程面白いものと見へるね。』

『飲む、打つ、買ふ、は人間の三大道樂と云ふからね。八八などもやり出すと、飯を食ふ間も惜しくなると云ふじやないか、兎に角勝負事を好むのは人間の本能だね。此の本能を最大に發揮するのが戰爭だらうよ。』

『飲む、買ふとは、人間肉體慾の滿足だが、打つのは好爭心、優越心、利己心と云ふ精神作用の衝動だから、殆んど滿足と云ふことが無いんだらうね、先生達はどの位賭けるんだらう。』

『どの位か知らないが、そう大きな勝負じやない樣だよ。ノッポーの和蘭人の奴、最初の十日ばかりに二百圓ほど損したとかでショげて止して仕舞つたよ。デブ君が一番上手で、もう千圓以上儲けて居ると云ふ評判だぜ。』

『船賃だけ浮いた譯じやね。今度の航海の樣に日本人や女が多くては、大きな儲けも無いだらう。』

『先達も西洋人が、日本人は非常に面白さうにカルタをやつて居るが、隨分澤山賭けるんだらう、一體どの位賭けるか

と聞くじやないか。金は一文も賭けない、唯シツペばかりじやと言つたら、奴さん目をまん圓くして、夫れで能くさんなに面白さうに遊べるものじや、日本人は矢張りミリタリズムじやと不思議がつて居るよ。』

『日本のバクチ打ちも褌一つになる迄やると云ふが、西洋人も同じと見へて、事務長の話に依ると、カルタに負けて退船の時に酒保の仕拂が出來ず、トランクを抵當に置いて行く者もあるさうだよ。』

『女房を抵當にせんだけが、まだ感心じやよ。』

○

西班牙の山が見へ出した。「歐羅巴じや〳〵」と珍らしさうに日本人が集まつて來る。船舶の往來漸く繁く、あちらにも、こちらにも、煤煙が見へる。山は次第に近づいた。唯見る、裸々たる赭山、巖角徒に險にして殆んど綠翠の跡を絕ち、滿洲の禿山に似て居る。文明の花咲くと云ふ歐洲も青山沃野ばかりではない。

坡西土を出でゝ早や七日、今日は朝早く世界の險要ジブラルター海峽を通過する筈である。未明起きて甲板に出た。曉霧深く塞して陸影を見ず、疾風逆に吹いて海氣甚だ冷やかである。「ジブラルター」と聞き平素朝寢坊の乘客も續々起きて來る。

やがて曉霧の霽るゝと共に、船首に近く狀貌魁偉の山嶽が聳へて居るのを見た。山容既に險尋常の山でない。船進むに從ひ、波白き海上に巍乎として聳峙せる一大岩盤が現はれた。之ぞ天下の要害、地中海の西關門ジブラルターの頭角である。山態の壯嚴なる、山勢の雄勁なる、山姿の怪奇なる、天工が神斧を振つて彫めるが如く、長さ二哩、高さ一千四百呎の大岩塊、堂然として白波閃めく海表に蟠屈して居る。北端は懸崖千呎壁の如く峙ち、南面は層々楷を爲して海に臨み、砲壘兵營等の連接せるを見る。山頂は凹凸峩々として駝背の如く、砲臺、望樓、隨所に隱見して居る。東面は山

頂より水際まで峻坂一下、攀登に易く、岩角磊々たる間に大方形のセメントの壁面を張りたてある。恐らくこれは岩石の崩落を防ぐ爲めならんも、少なからず自然の壯美を損する。之を東方より眺めば臥象の伏すが如く、之を南方より望めば猛獅の蹲まるに似、其の男性的なる雄大の點、壯偉の觀、思はず難攻不落の歎聲が出る。さても英國の有である。

ジブラルター頭角の南端を過ぐれば大西洋は船首の前方に開展する。對岸モロッコとの間、水路僅に八海里、ジブラルターの砲彈は海を越へて深く阿弗利加の地に達する。潜水艦ならでは出入し得べくもない。モロッコの山容亦凡ならず縱令ジブラルターの壯觀に及ばすとも、巖山重疊として變奇に富んで居る、ジブラルター頭角の西にジブラルターの小灣がある。周圍の丘陵新綠鮮やかにして春色正に濃やかである。故國の春も思ひ出される。灣の西岸の一小邑アルゼシラスは嘗てモロッコ問題を以て有名なりし處、青山綠波の間に白き人家群を爲し、遠望甚だ清爽である。當年風雲を捲き起したる獨逸カイザー、今日感果して如何。有爲轉變の世の中である。

西班牙の最南端タリフ角をかはれば船は直に大西洋に出づ。近くトラフハルガーの古戰場を弔ひ、セントビンセント岬を廻つて針路を北に定む。右には葡萄牙の山遠く翠黛を描き、左には千里渺漫の大西洋を望む。汽船の交通頻繁く、煤煙二三常に視界の裡にある。長途の航海も已に終りに近づき、乘客ぼつ〳〵荷物の整理を始む。心何となく忙がしい。

上海以來一度のシケにも逢はず、難海のビスケー灣、海池の如く、船暈嫌の氣焔愈昂る。嘗て獨逸潜水艦に脅やかされ、戰々兢々死を期して越へたるビスケー灣も、今日は談笑喜戲の間に過ぐ、當年を追想して感多少である。

英吉利海峽最早や警戒の飛行機も飛ばず、護衛の驅逐艦も走らず、戰雲散じて平和の春光は閑かに波を射て居る。今日は愈倫敦入り、早や英國の陸地も見へて居る。荷物の片付も出來た。酒保や洗濯代の拂も濟んだ。外人乘客は嬉しそうなのもある。別れの惜しそうなのもある。初洋行の日本人は何となく不安の氣に襲はれて居る。

『隨分永い航海だつたね。下の關を出てから今日で四十九日目じや。航海中は一日も早く着きたいと思つたが、扨て上陸となると、何となく船が戀しいね。まだ一週間航海がしたい樣じや。』

『今度の樣に海は靜かで、船は賑やかで、愉快な航海は滅多に無いよ。之で一月も遲れると、屹度印度洋でモンスーンにやられるんだがね。』

『そうかね、併し一度ぐらゐはシケにも逢つて見た方が話の種子になつたんだがね。』

『泥棒の逃げた後で腕まくりかね。……倫敦では此節非常に宿屋が拂底だと云ふが、君は決まつて居るのかい。』

『全く當なしだ。友人に無線電信を打たうと思ふんだが、私信は取扱はないと言ふから困まつて居るんだ。』

『此の摸樣では上陸は日が暮れそうだよ。チルベリーなどへほり上げられたら夫れこそ仕末に終へないよ。一そ今晩は船へ泊めて與れると好いんだがね。船長に交渉して見るか。』

『英人は遲くても是非今夜の上陸を希望して居ると云ふから船長も困まつて居るらしい。チルベリーへ着いて見なくちやア、檢閱官が來るか、來ないかさへ判らないと云ふんだからね。着くのは晩の八時だそうだ』。

『八時に着くと、上陸は九時過ぎるね。倫敦着は十二時頃になるだらうよ。併し、そう心配するにや及ばないさ。倫敦へ着きさへすりやどうにかなるよ。此節は日本人の旅館もあると云ふからね。夫に外國人は個人的には案外親切だよ。一度外國を旅行して見ると、其國の人の親切が痛切に感ぜられるね。日本人などは、あまり旅行をやらないから言葉の不自由な外國の旅行者に對して兎角同情心が薄い傾があるね。排日とか、親日とか云ふと、大きな政治的問題の樣だが、其の原因は彼我旅行者の心理上の機微に發生することが少なくないだらうと思ふよ。……着く迄にはまだ大分閑が掛かる、一番最後の決戰をやらうか。』

▼豫　告▲

三派聯立内閣に對する批判と希望……………諸　家

新内閣閣僚人物評論……………諸　家

右本誌七月號誌上に掲載せらるべし

「中央公論」七月號創作及想華豫告

戯曲 亡き妻を哭く……長田秀雄

小說……宮島資夫

小說……德田秋聲

川魚の記……室生犀星

中央公論第卅九年夏季増刊號創作



さま〴〵な不安

正宗白鳥

(一)

演伎座は寒かつた。數週間前から、宿痾の痔疾のための出血などによつて身體の衰へてゐた私は、見物席にぢつとしてゐても、廊下へ出ても、喫煙室へ入つても、寒さが氣になつて、その日の境遇を樂むことが出來なかつた。太鼓を叩いたり鹽をまいたり、空間に文字を描いたりするやうな、多分江戸時代の舞臺開きにやつたらしい儀式を見てゐても、昔の歌舞伎の夢を見てゐる氣持にはなれなかつた。知人の話を聞いてゐるのも懶かつた。來賓の元氣のいゝ祝辭演説を聞かされてゐるうちにも、「寺田屋騷動」の序幕を見せられてゐるうちにも、私は感冒に罹りさうなのが何よりも氣になつて、歡樂の刺戟などは微塵も身に覺えないでゐた。「芝居なんて詰らないものだ。ことに新俳優の新作芝居なんて詰らないものだ。それに、この寒さを我慢して、皆んながよく觀てゐるものだ」と、私は、場内に滿ちてゐる人々の心根を不思議に感じた。

序幕が濟むと、私は、食堂から貰つて來た開場祝の辨當を、他の買物と一しよに風呂敷に包んで劇場を出た。數人の知人に隨いて、寒い銀座をぶらついて、飲みたくもない紅茶などを飲んで興味のない時を過した。暫くして、人に別れて汽車に乘るとぽか〳〵と溫い上に座席が空いてゐた。のび〳〵と足を伸して横はると、死から蘇生したやうな氣持がした。大磯へ着くと、月の冴えてゐること、空氣の澄んでゐること、溫いことなどが、不斷にまして身に染みて感ぜられた。「東京は空氣が濁つてゐる。燒跡はことに酷い。健康にはよくないだらう。しかし健康によくつても惡くつても、田舍住ひよりも都會住ひの方に、生存の價値が多いやうに思はれるから不思議だ」と、私は東京へ行くたびに、一つの問題として考へてゐるのであつた。誰れと交際したいのでもないし、何處へ行つて何を見たいと思つてゐるのでもないのに、何故埃つぽいゝ都會に愛着してゐるのであらう？

私は、月の光が漂うて、演伎座の蕪雜な芝居の舞臺面とは比較にならないほどに、夢のやうに美しく見える、大井戸のほとりを通り、籔際の小徑を上つて、ひつそりしてゐる自分の家へ歸つた。いつものやうに妻の姪子が一人で留守番をしてゐるのであつた。私たちは行火の上で演伎座の辨當を開けて食べた。

私は、朝、神田橋近くの某の病院へ行つて注射をして貰つたことや、午餐に天金で鰕の天どんを食べて非常にうまかつたことや、演伎座や銀座の寒かつたことや、歸りに、大磯の山手に別莊を有つてゐる××男爵と同じ汽車に乘合せたことなど、一日の行爲や見聞を印象的に話したが、妻の方では、瑣末な事でも東京の話を聞くのは、樂みになるらしかつた。

「今年は春が遲いやうだ。彼岸近くなつてから寒いやうぢや花もおくれるだらう」

私は近ごろ季節の變遷、四圍の風物に對して、以前よりもよく注意するやうになつてゐたが、春が來たらどしよう、

夏が來たらどうしようといふ希望や空想によつて樂まされることは、前よりも少くなつてゐた。[illegible]見に行つてもいゝが、大儀で寢たり起きたりして花時を過しても、さして不滿が感ぜられさうでもなかつた。

「東京がいゝ。水道があるだけでも東京がいゝ」と、時子はどうかすると、口に出して東京を讚美してゐた。そのたびに私は、

「東京にゐると田舎がよく思はれるし、田舎にゐると東京に住みたくなるし……」と、應へてゐた。

とに角日返りで東京へ行つた翌日は、疲勞を覺えて寢すのを私の例としてゐたので、演伎座の開場式に列した翌日、頭に力がなくつて、多大な興味をもつて書きかけてゐる脚本の筆が進まなくなつたのも、食慾が進まないのも、庭の掃除をするのが大儀になつたのをも、別段訝しくは思はなかつた。それで、終日火鉢の側で、一人ぽつちで例の取留めのない非現實な事を考へながら、寒い一日を過して、夜は早くから寢床に就いた。

眠るには眠られたが、いやな夢ばかりを見續けた。そして、身體のどこかに故障が出來たらしいことが、眞夜中時分に豫感された。病氣には抵抗力の弱い私である。「演伎座で流行性感冒が傳染したのかも知れない」と、私はかの抱月氏をも殺した大感冒流行期に、博文館に招かれて行つた帝國劇場で、感冒を脊負込んで來たり、また十年前に帝劇で胃痙攣を起したりしたことを思出した。

「いゝ年齢をして芝居なんぞ觀に行くからいけないんだ。人ごみの中へは成べく入つて行かないやうにするのが、自分のためにいゝのだ」と、演伎座の招待にたやすく應じて、寒風に身をさらしたことを後悔した。

二十年前には、演伎座にだつて面白い芝居が演ぜられてゐた。片市の釣船の三婦や松助の義平次などの「夏祭」は、私の觀劇史中では特筆すべきものであつた。私は、燒失した昔の劇場の影を追憶して、さういふ昔のいゝ舞臺をなり

く目に浮べて樂んでゐればいゝので、バラックの殺風景な小屋へわざ〳〵足を運んで、新演劇を觀賞するには及ばないのである。

朝起ると、ぞく〳〵とさむ氣がして、頭が重苦しく、流行性感冒に犯されたのに相違なかつた。私は一度たゝんだ寢床を再び敷直して、枕許に屏風を立廻して、病人として寢ついた。そして檢溫をしたり、生姜湯や卵酒を飲んで汗を出したり自己流の療法を試みて數日を過した。その間に、かねて時子が獨斷で賴んでゐた近所の仕事師が、仲間を一人連れてやつて來て、家起しをはじめた。私の寢室へまで浸入して、水準器で家の傾き加減を調査して饒舌を弄した。

「何のために仕事師なんか賴んだのだ？一通り直つてるものをいぢくり廻さなくつていゝぢやないか。却つて害になるかも知れないよ。それにあの仕事師には去年の秋に不親切なことばかりされて懲りてるのに、何だつてまた家へ呼込んだのだい？加減の惡い時にあんな奴に傍で騷がれちや溜らないよ」と、私は妻に向つて小言を云つた。

「あの人には暇な時にちよつと見て呉れと賴んだゞけで、家起しをし直すことに極めた譯ぢやなかつたんです。あの人は今朝來ると、自分ひとり極めで大きな丸太を買ひに行つて、勝手に突かい棒をしたんですよ。」

「そんなことを勝手にされて溜るものぢやない。あの男は餘計なことをして家に傷がつかうとも、手間賃さへ取れりやいゝつていふ人間なんだから。……今日一日で斷つてしまへ」

私は仕事師に向つてもいやな顏を見せた。子々孫々へ傳へるのでもない假りの住居が、三分や五分右へ傾いてゐようとも、左へ曲つてゐようとも、そんなことは、私に取つてはどうでもいゝのであつた。

「去年間に合せにやつたのがいけなかつたのです。お家の爲めには、床の下へ入つて一々腰を入れて見るんですね」

と、仕事師はごた〳〵と說明した。

「家の爲めなんかどうでもいゝよ。このまゝでも一年や二年は大丈夫住んでゐられるだらう」

私たちは相談して、仕事師は一先づ斷ることに決めた。

「四五日もつゞいて午後になると、熱が八度以上になるのは變だ。おれはこれまで風邪を引いても、大抵一日か二日で熱が取れてしまふんだが、今度は變だ。醫者に診て貰はうかな」

私はさう云つて、幸ひ外が霽めいて穩かに溫かゝつたので、俥に乗つて知合ひの醫者O氏の家へ行つた。十時を過ぎてゐるのに朝寢好きのO氏はまだ眠つてゐた。「ぢや、出直して來ませう」と私は代診に云つて歸つたが、強いて診察を受ける必要はないやうに思はれたので、O氏の車夫が主人の起床を知らせて來ても出掛けなかつた。午後になると、O氏は病家廻りの次手に、俥を私の家の門に止めて、車夫に私の容態を訊かせた。時子が「主人は今ちよつと外へ出掛けました」と云ふと、車夫は「先生は大變心配してゐらつしやいますから、後でまたお伺ひしませう」と云つた。

「まだ診もしないおれの病氣を先生が心配してゐるのも可笑しいが、今度來たら診て貰はなくちやなるまいな」

私は、自分の爲めよりも、醫師に對する義理として診察を受ける氣持になつてゐた。一時間ばかりすると、果してO氏が再び俥を私の家の前へ寄せたので、時子は寢床の廻りを片付けてO氏を呼入れた。

「たゞの感冒です。氣管支が少し痛んでゐますから、その治療をしといたらいゝでせう」と、O氏は念入りに診察したあとで云つた。

「氣管支から肺が惡くなるやうなことはないんでせうか」と、時子は氣遣はしげに訊いた。

「そりや氣管支から肺尖を冒されることもあるんですが、御主人にはそんな御心配は入りませんよ」と、O氏は笑ひ笑ひ云つた。

ぢや、一日二日氣管支の藥を飲まされるのかと、私は無益な服藥を敢てする氣持で、自分の病氣をば輕視するやうになつてゐた。

「四五日患つたゞけで、もうこんなに瘦せちやつた」と、私がか細い腕を撫でながら云ふと、

「でも、あなたは仕合せな人ね」と、時子は云つた。

「何でおれが仕合せなんだらう」

私は自分を幸福とは緣のない人間のやうに早くからつねに思込んでゐるのに、年中側にゐる時子の心に私が仕合せな人として映つてゐるのは變であつた。

「あなたはどんな重い病氣に罹つても、寢床の上で安心して死ねるからいゝ」

時子はそれを獨り極めにして羨んでゐるやうに云つた。多分彼女自身は、誰れも世話をして呉れる者がなくつて、老いて病んで窮死するだらうと、前途を暗く見てゐるらしかつた。そして、彼女の兩親は、子の無い女の淋しさについては、自分で實感がないために思遣りがなくつて、時子が將來の不安について訴へても理解のある聞き手になつては呉れなかつた。

「おれも安心して死ねれば結構だがな。いつどんな酷い病氣に取付かれ燥搔死をするか知れたもんぢやないよ」

私は、生存の樂みに醉つてゐないくせに、死を恐れてゐた。平然として死に就く覺悟は何時になつてもついてゐなかつた。そして、眞に死を何とも思つてゐない人には敬服してゐるのであつた。

「あと四五年で、おれも定命の五十に達するのだが、死ぬる間際まで世俗の事に捉はれてうかり／＼と暮すことだらう」と、私は弱つてゐる身體を寢床に横たへて、天井を見上げたり、ガラス越しに春めいて來た庭を眺めながら、現代

にはあまり流行しない空漠たる死生の問題について、いろ／＼に考へた。壁一は其の中から頭蓋に芽を吹いてゐる。太爪が咲いてゐる。

私の感冒は略々癒りかけたが、痔疾の出血が毎日少しづゝでも続いて起るので氣にかゝつてゐた。不斷出血してゐる私は、些少の出血にも弱らされた。顔色は直ぐに青くなつて頭がくら／＼したり、時としては嘔氣がしたりしたが、もう二三度注射をしたら出血だけは止まるのだと私は信じてゐたので、一日も早く感冒が全癒して、東京の病院へ注射を受けに出掛けられるやうにと、待遠しく思つてゐた。それで、出血の恐ろしさに、便所通ひを出來るだけ我慢してゐたが、ある夜、腸の中が鳴つて苦しくつて辛抱しきれなくなつたので、我知らず立起つたが、電氣を點けて見ると、猿股はべつとり血に塗れてゐた。で、便所へ行つても、用心して、燈火を點けて用を足さうとしたが、力を用ゐるまでもなく、血がサツと流れ出た。數十年來經驗してゐるやうな輕度の出血ではなくつて、放つて置いたら身體中の血の有りつたけ流れ出てしまひさうだつたので、便通をつけるどころではなくつて、ヒヨロ／＼と寢床へ歸つて妻を呼起した。

「とに角、早くO氏に診て貰はにやならん」と促した。

夜はすでに更けてゐた。時子は慌てて寢衣の上に何かを羽織けて出掛けた。私は努めて安靜を保ちながら、O氏が來て呉れるのを待焦れてゐた。……波の音と犬の聲の外には何も聞えないで、深夜の淋しさは、衰へた私の頭の中に染込んだ。

これで放任して置いたら、全身の血汐が流れ出で、私は眠るが如く往生を遂げることが出來るのであらう。動脈を切つて死ぬるのは、快い自殺の方法だと、昔「クオ、ヴアヂス」を讀んで、エピクユリアンのペトロニユースの美的最後を見た時から、私は教へられてゐるのだから、今ひとりでに出血するのを幸はひに、その快い死の道に身をまかせたら

いゝではないか。今その快い死の道を避けたために、他日、苦しい死の道へ追ひやられるようでは馬鹿らしいではないかと、私は自問自答したが、腑甲斐なくも即刻の死に安んずることが出來なかつた。

電燈に照らして見ると、私の手には靜脈が浮いて、皮膚の色は木の葉のやうに青かつた。時子は息を切らして歸つて來て「お醫者は今直に來て吳れますよ」と、私に力をつけた。

O氏の逞しい姿は間もなく私の目に映つた。氏は病狀を訊きながら、私を診斷して、

「絶對的安靜が何よりも必要です。小水も寢たまゝ取るやうにしなければいけません。兎に角、今直腸の筋肉のしまる藥の注射をしときませう。それで明日の朝あらためて血留めの注射をすることにしませう」と云つて、注射器を鞄から出して、私の股へ藥を注した。その注射が私には有難いものに思はれた。

「痔でこんなにひどく出血したことはなかつたんですが、腸の出血ぢやないでせうか」と、私が訊ねると、

「さあ。明日灌腸をしてよく診ませう。兎に角かういふ出血は油斷が出來ませんよ。××寺の住職が此間腸の出血で死にましたが、どうしても血が留らなかつたのです」

「××寺の坊さんは腸出血で死んだのですか」私はO氏から突然それを聞いて、一層陰欝な氣持に襲はれた。

十日ほど前に××寺の住職梅山氏の葬式が、梅の咲き盛つてゐる庭で、大勢の僧侶によつて入念に執行されてゐるのを、私は見た。團扇太鼓の勇ましい日蓮宗の流布してゐるこの土地では珍らしく、この寺は眞言宗なので、會葬の老若男女が鉦を叩いて弔するのが哀れげに聞かれてよかつた。

氏には震災前後に二三度、道で行會つたことがあつて、一度は訪問して昔話でもしようと思つてゐたので、突然の氏の死に私は驚かされて人生の無常を感じたのであつた。三十年ほど前、私がはじめて上京した年の夏、興津で開かれた

基督教の夏季學校へ入つた時に、僧侶のくせに耶蘇信者の仲間に加はつて頻りに氣焔を吐いてゐたのが、この梅山氏なのだが、三十年後にこの大磯で偶然行會つたのも不思議であるし、間もなく死別れるのも不思議であつた。

「慶應の病院で二年も治療したんですが、原因がよく分らないで、此方へ歸つて來たんです。腸に潰瘍があるのか、癌があるのか、よく分らないで治療の仕様がなかつたのですよ」と、O氏は云つて、「あなたのは多分痔のせいでせうから治療がし易いでせうがね」

「あの住職は海水浴をやつてゐましたよ」

「さういふ無茶をやるからいけない」

O氏はそんな世間話をしたあと、私の患部を氷で冷すやうにと注意をして歸つて行つた。時子は早速氷を買ひに出掛けた。

私は梅山氏がその體内から流れ出る血液を醫術の力を借りても留め得ないで死亡したことを思ふと、悲慘な暗愁たる感じに襲はれて、かの「クオ、ヴアヂス」のペトロニユースの死に對するやうな美しい想像は描かれなかつた。第一あの青い顏した、老境に達してザラ〳〵した皮膚をした僧侶が出血に惱んでゐる狀態は、昔物語の風流才子の最後のやうな美しい納として、私の心には浮ばないで汚らしかつた。さういふ私自身も汚らしかつた。

時子が買つて來た氷を臺所で碎いてゐる音が、眞夜中の空氣を破つて私の耳に夢のやうに響いた。彼女は氷袋を私の患部にあてゝ介抱しながら、N屋でもS屋でも煩さがつて、容易に戸を開けて呉れなかつたことをこぼして、

「隣りの支那蕎麥の家の人が氣の毒がつて、S屋へ云つて呉れたので、不承々々に起きて佛頂面で氷を賣つて呉れたのです」と云つた。

私だちは不安な思ひをして夜の明けるのを待つてゐた。腹部に瓦斯の蓄積するのは苦しかつたし、瓦斯でも何から洩れるたびに出血するのが恐ろしかつた。そして、次第々々に身體が衰へるやうなのが、たよりなく思はれた。……何といふことなしに死にたくなかつた。

「おれは身體がよくなつたつて、何をしたいとも思つてやしないが、病氣だけは癒らなけりや困るなあ」と、私は歎息した。私の病氣の平癒を重大事件として切望してゐる者は、今のところ私自身の外には時子だけであつた。

それで、朝になると、O氏一人を手頼りにして、その來診を待設けてゐたが、氏は容易に來て呉れなかつた。二三度注射を受けてゐる東京の痔の病院へ行つたら、應急手當てがあるであらうのにと私はもどかしく思つてゐたが、腹部の壓迫の苦しさに一刻も堪へられなくなつた。呻きだした。唸りだした。それで、近所の人を主人もおつかけ〳〵使にやつて醫師の來診を求めると、O氏は白衣を着けたまゝ慌たゞしくやつて來て、私の心臓を診て、「これなら大丈夫」と、稍々安んじたやうに云つて、それから、血止め藥のゼラチンの注射をした。「これはよく利きますが、明日、外の藥を、も一本注射しませう」と云つて、痔疾なら、姑息な注射療法などに依らないで、根本的の外科療治をした方がいゝと勸めた。

私は、痔疾のために、さしたる苦痛を感じたことはなかつたのだが、たゞ出血が恐ろしくつて、痔の病院の手輕な注射によつて一時を糊塗してゐたのであつた。私はすでに老境に達してゐる。手術の苦痛を忍んで根本療治をするにも及ばないやうに思はれる。何事も姑息の手段によつて、今後幾年かの生命を辛うじて生きてゐたならいゝではないか。

が、姑息にしても、O氏の手當てだけでは安んじてゐられなかつた。近所のある商店の主人も氣遣つて呉れて、外のお醫者を紹介しようかと勸めに來た。時子は日が暮れてから、何かの相談相手にと、その商店へ行つた。雨が降頻つて

强い風さへ吹添つて、戸外の樣子が凄かつた。私は獨居してゐるのが淋しくつて、誰れか附添人が絶えず側にゐて吳れるやうにと望んだが、肉身の者の一人もゐない他郷では、手賴りになる附添人を得る望みはなかつた。…他郷でなくつても、私には肉身のうちで親しい者は殆んどないと云つてよかつた。成るべくなら、獨りで病に堪へて獨りで死んで行くだけの勇氣は確持してゐなければならない。それだけがおれには必要だと自から勵ましたが、さうすると、一層心淋しかつた。

濡れて歸つて來た時子は、しよんぼりと枕許に立つた。

「外に上手な醫者があるのかい」と、私が訊ねると、「親切な柔しいお醫者なんですつて。でも、今家にはゐないの。それで、私はOさんの所へ寄つてよく聽いたのですが、あの人は、專門ちがいで完全な手當ては出來ないと自分で云つてるんです。出血が一時止つたら、自分が附添ひになつて東京の病院へ連れて行つてもいゝと云つてるんだから、兎に角、この土地のお醫者なんかを手賴りにしないで、一日も早く東京へ行くんですね」と、時子は深く考へてゐるらしく云つた。

「だが、二時間も汽車に乘るのは不安心だな。……身體の弱い者はこんな場合があるだけでも、田舍に住んでゐるのは不便だ。東京にゐたら、こんな苦しい思ひをしないでも濟むのだらうが」

私は東京を憧憬した。血止めの注射のお蔭か、あるひは生理上自然に止まる時が來たのか、出血は一先づ收まつたのに力を得て、私だちは明日にも上京する決心をした。幸ひあくる日は天氣がよかつた。

此間中身をかまふ暇のなかつた時子が、身仕度をするのを急立てて、俥で停車場へ行つたが、車夫は時子に向つて、

「旦那樣のお顏色が大變お惡いから、お氣をおつけなさいまし」と、云つたさうだつた。家を出る時に見送つて吳れた

近所の人も、憐むやうな目を私に注いだ。

私は汽車に乘ると毛布を被つて横になつて眼を閉ぢてゐた。汽車が動搖するたびに、出血はしないかと恐れてゐた。人間は何時何處でポクリと死ぬるものか知れないと、頻りに考へられたが、その考へは自分自身を脅かすばかりで、多年修養の甲斐もなく、獨りで運命に安んじる氣持にはなれなかつた。

やうやく東京驛に着くと、一先づ、かゝり付の痔の病院へ行くことにした。その病院にはこの前よりも多數の患者が集まつてゐた。私は横になつて順番を待つて、診察室へ入つたが、少くも一時の手當てだけはして貰へて、出血の心配はなくなることゝ豫期してゐたのであつたが、事情を話すと、ヒョロ長い氣力のなさゝうな醫師は、

「それは困りましたね。遠方から通ふのでは困るが、二三日樣子を見てどうかしませう」と云つた。

時にとつての救世主の如くに醫者の顏面を仰ぎ見てゐた私は、その言葉振りで、「この醫者ぢや駄目なんだな」と、直ぐに感じた。

「二三日と云つて、今の今が苦しいんです。入院は出來ませんか」

「入院すると治療の都合はいゝんですが、今のところ病室が一杯で、申込みは次きから次へと溜つてゐるんで」

「ぢや、宿を取つて通つてもよろしいが」

「さう。二三日樣子を見てから何とかしませう。はゞかりには可成行かないやうにしてゐらつしやい」

私は「馬鹿」と云つてやりたかつた。そんな餘裕があるくらゐなら苦しみはしないのだと思つた。診察室を出て待合部屋へ入ると、そこにゐる人々が、みんな庸醫に欺かれてゐるやうに思はれた。仕方なしに外へ出たが、私だちは路傍に立つて暫く迷つた。その日は日曜だつたので、大きな病院へ行くには都合が惡かつた。

さうしてゐるうちに、私はふと思ひついて、そのT病院へ行くことにした。午前中の診察時間の間に合ふやうにと道を急いだが、醫師に對して信頼の念が薄らぐので手頼りなかつた。かつてある有名な病院で何等無益なツベルクリンの注射をせられたことなどが思出された。時子がある有名な病院で博士の手術を受けたのが何の効もなかつたことも思出された。ある縁者が蓄膿症で手術を受けたのに充分に治療しなかつたことも思出された。痔専門の病院には、本式の醫術に暗い山師見たいなものが多いさうだが、外の病院だつて五十歩百歩で、身を托して安心してゐられるのは、此方が無智なためなのかも知れない。

さう思ひながらも、T病院を訪ねて、醫師の診斷を受けて事もなげに云はれた時には、それだけで助かつた氣がした。まだ一人の患者も入らない出來立てのバラックの病室に入つて、一日を隔てゝ手術をすることに決つた。

時子は入院に必要な者を調へて、家の後仕末をつけるために、日返りで大磯へ行つて來た。私は病院の風呂へ入つて散髮もして、斷頭臺へでも上るやうな大袈裟な氣持で手術を待つてゐた。

貧血が烈いために、コロロホルムを嗅がされては、醒めたあとの苦みが多からうといふやうな譯で、腰髓麻酔をかけられた。手術臺に乘つて、腰の方へ注射されると、下半身は痺れて來たが、頭の方は、いくらかボンヤリしながらも、意識があるので、醫師の話聲も剪刀の音もよく聞えた。痔の病院で注射したあとが潰瘍になつてゐることも話聲で知られた。

「痛くないのが不思議だ」と、私は魔藥の偉力を考へてゐたが、それも一時で、病室へ連れ戻されて、いくらかの時間を經ると、猛烈な疼痛が全身を震はせた。私は呻きだした。七顛八倒の苦みを感得さゝれながら泣き面をした。我慢する力は全くなくなつてしまつた。二十歳前に大患に罹つた時には、苦痛に襲はれるたびに、指を組合せて神を念じてゐ

たのであつたが、今の私にはそんな氣休めも得られなかつた。そして私は夢うつゝに祖母を呼んだ。昔大患の際に獻的に私を介抱してくれた者は祖母だつたので、神をも佛をも他のいろ〳〵な人間をも信じない私は現世で最も信頼される生物の影を祖母に於てのみ見てゐるやうに思はれた。……「お婆あさん、痛い〳〵」と、叫ぶと、祖母の靈が、昔のやうに私を撫でさするべくそこに現はれさうに思はれた。

一晝夜ばかり立つと患部の疼痛は略々鎭まつたが、膀胱の括約筋も魔藥の影響を受けてゐるとかで働かないので、いくら力を入れても排尿することが出來なかつた。かうなると、平氣で排尿の出來る人が羨ましくなつた。それで四五日間は醫師に頼んで機械で出して貰つたが、そんなことをしてゐると、自分の身體が一つの醜骸であることが明かに見られるやうだつた。

腰部が一切魔藥に罹つたためでもあらうが、色慾も痲痺してしまつたやうだつた。便通を閉すためにアヘン劑を服用してゐるためか、絶えず睡氣は催したが、食慾は殆んど無くなつて、牛乳や重湯を啜るのも苦痛だつた。食氣と色氣のなくなつた私は、不斷とは違つた精神狀態に陷つた。それは實に變な者だつた。時子でも看護婦でも變な生物として目に映つた。私は昔からいろ〳〵な場合に、あるひは瞥見し、あるひは接近して、今も記憶に殘つてゐる美女を思ひ出したが何の感じも起らなかつた。美醜好惡の念がまるでなくなつたやうであつた。それは超脱した上品な感じではないので、頭が滓で詰められて痴呆になつたやうであつた。かういふ時には、延壽太夫の「吉田屋」や「三千歳」のやうな妙音樂を耳にしても、電車の軌る音と同樣の感じしか得られないであらう。

我々が平生持つてゐる色慾は甚だ淡いものであるが、そんなものでも身體に潛在してゐるがために、見るもの聞く者について多少の趣味が感ぜられるのであらう。芭蕉だつてその身體に色慾があつたればこそ、あゝいふ感傷的な發句が

つくれたのであらう。

食氣と色氣とを缺いた生物が、一重ねの寢具の上に釘付けにされて、排泄物の始末に惱まされてゐる有様は、醜の醜であるべき筈だが、當の生物に取つては、病床上の朝夕は難行苦行の朝夕であつた。

「これでよくなるのか知らん」と私は屢々疑ひを挿んでゐた。

入院の次第は時子の手で、私の家や彼女の實家へ通知されてゐたが、私の故郷からは、大手術だと思つたのか、「日を知らせれば立會ひに誰れかゞ行く」といふ電報が來た。

「そんなことで電報を寄越すのは不思議だよ。……誰れかつて次郎が來るのだらうが、來たつて宿にも困るくらゐで、おれだちの手助けになりやしない。それよりも、かういふ時には金を送つて呉れるのが一番なんだ」と、私は云つた。

「お父さんも年を取つたから、子供の事を思ふやうになつたんでせう」と、時子は云つた。

「しかし、入院費を直ぐに送れと云つたら、決していゝ顏をしないね。今は銀行の破産で金に不自由をしてゐるだらうが、昔のやうな餘裕があつても決して快く送つてくれりやしないよ。……だから、自分で多少の金を貯蓄してゐたのがよかつたのだ。雜誌社へ頭を下げなくてもいゝし、親や親類に無心を云はなくてもいゝんだから」

「Oさんが、夜中にでも直ぐ診に來て呉れたのは、私の家でお金が拂へるからなのよ。近所の家で急病で呼びに行つても、あのお醫者はなか〳〵來て呉れないつて、隨分怨んでる者もあるんですつて」

「おれなぞは金儲けの出來る柄ぢやないが、子供がないから氣樂なんだよ。それに不斷贅澤をしないからな」

私は病床に寢て考へてゐると、贅澤の興味など毛頭起らなかつた。そして、口舌のためや女人のためや衣服や遊興のために金錢の必要に迫まられて、頭を痛めて夜を日に繼いでセツセと原稿を書いてゐる人間が、不思議な生物のやうに

思はれた。
時子の父親からは、かねて噂のあつた初孫の生れたことを知らせて來たが、その出産の日は、私が手術を受けた當日であつた。
「男の子が生れたんですつて。みんなが喜んで大騷ぎをしてゐるでせうね」と、時子は羨ましさうに云つた。
「おれと比べて幸と不幸の對照だね。……彼處には家庭的の人間ばかり揃つてるんだから、みんながいゝ氣になつてはしやいでるだらう」
しかし、私は自分自身で子供を慾しがつてゐないくらゐだから、他家に赤ん坊が生れたのを喜ぶ氣持なんぞあらう筈はなかつた。
「これで彼家のお嫁さんも根が生へたやうなものだ。あの人も辛抱した甲斐があつたんですね」と、時子は感慨を籠めて云つた。
「子供が出來たら、あしこもます〱勤儉貯蓄主義になるだらう」
社交の狹い我々には、世間話の種は外になかつたので、この出産を材料としてをり〱無駄口を利いた。

（二）

病室は南向きで日當りはよかつたが、時節が遲れたとは云へ、すでに四月になつたのだから日によるとバラツク仕立の部屋は暑苦しくつて、午睡をするにも眠りづらいことがあつた。私は痛みを忍んで、あちらへ向きこちらへ向きした。時子は不眠症を訴へて、晝間でも片隅で横になつてゐた。そして用事のない附添ひの看護婦は、肥滿した身體を伏

せて軽息を洩らしてゐた。

一隅のガラス戸は開けられてゐたので、白いカーテンは風に吹かれて、膨らんだり縮んだりしてゐた。病院の左の方は愛宕山で、それから、公園地圓山と續いてゐるこの近傍の地理は、私の腦裡にはほゞ描き得られるのであつた。愛宕山の樹木は去秋の火災で枯れたさうだが、圓山や瓢簞池のほとりの櫻はそろ〳〵咲きかけてゐるだらうと、私は心をそちらの春景色の方へ馳せた。

池のほとりや圓山の上には、茶店が出てゐて、そこでは飲んでゐる者もあり食つてゐる者もある。千鳥足で歩いてゐる者や、唄つてゐる者や巫山戯てゐる者。私は過去に多年見聞してゐたお蔭で、花見の光景は寢床の上でも思浮べることが出來たが、なぜ千鳥足になるのが面白いのやら、唄ふのが面白いのやら、手術後の疲勞してゐる私の頭には理解出來なかつた。……たゞ、壓制的に止められてゐる便通が快くついて、腹の中や頭の中が輕くなつたらいゝだらうと、それだけが、人生の幸福として渴望された。

そこへ、扉をコツ〳〵と叩いて、河本といふ男が入つて來た。この男は、十數年前に文學を志望して上京して、私の親戚の者の紹介狀を持つて私をも訪ねて來たことがあつて、その後も私が忘れた時分に、ふと顏を見せるのを例としてゐた。今度は今までになく身奇麗な服裝（なり）をしてゐた。頭髮も今までのやうにやりつ放しではなかつた。

「××新聞に出てゐましたから、お見舞に上りました。どんなです？」と、彼れはニコ〳〵して訊ねながら、風呂敷を解いて菓子折を出した。

「君は今でも文藝欄の記事なんぞを讀んでるんかい」と、私は、早くから文學の方は諦めて、今はアメリカン何とかいふ百貨商店に勤務してゐる筈の彼が用もない文藝消息などに注意してゐるのを、むしろ奇怪に感じた。

「この頃は忙しいからあんまり讀めないんですが、それでも、時々は雜誌を買つて讀んでゐますよ」と、河本は答へて、直ぐに話題を地震の方へ向けた。

私は一通りの受答へはしたが、氣分の惡い時に見舞客と世上の事件を話合ふのは煩はしくつて、話は止切勝となつた。

「僕が大磯へ移つた年に君が遊びに來たのだから、君に會ふのも四年目だね。今は可成り出世してるんだらう」

「出世もするものですか。獨身で喰つてかれるだけですよ。この頃は文學者の收入も大變よくなつたさうだから、あの時最初の志を變へないで文學をやつとけばよかつたんですね」

「ぢや、僕が餘計な忠告をしたのがいけなかつたのだね」

「いや、自分の薄志弱行がいけなかつたんです。私だつて、あれから今まで、十二年間も一しよ懸命にやつてゐたなら、人氣作家の半分や三分の一くらゐな作家にはなれてゐたでせうに」

「さうかも知れないが、しかし、これから十二年間も努力してやる氣にやなれないだらうね」

「えゝそりやさうですがね。……生活のためにいろ／＼やつて來たから、これで創作の材料は豐富なんですよ。話の筋だけども、今の人氣作家のよりは面白い者が書けるんです」

「書かなくつても面白い經驗をしてゐれば、生甲斐があるといふものだ。羨ましいね」

私は、地質のよしあしは分らないが、見たところ瀟洒たるこの頃の流行らしい洋服を着けた、若い健かな顏色をしてゐる河本を見上げたが、さして羨ましいとは思はなかつた。彼れが自由自在に足を動し得られるのは羨ましかつたが、彼れの面白い經驗や豐富な材料は、掃溜めの塵屑のやうにしか思はれなかつた。いづれ、婦女子との關係などが、重な者なのだらうが、今の私は、生理的の男女關係について考へるも、精神的の戀愛三昧について考へるも、乾燥無味な或

る作用に過ぎないやうにしか思はれなかつた。時子の實家に子が生れたことだつて、乾燥無味な或る作用としか、私には思はれなかつた。

慾望も氣力もまだ回復しない麻痺した頭には、とに角好意をもつて見舞つて呉れた河本さへ、目障りな煩い存在となつて映つた。

「御退院なすつたら、一度私の店へお寄んなすつて下さい。食料品なんぞもこの頃は諸國の名物が隨分集つてゐますよ」

河本は商店の賣品の種類を數上げたりしながら、金口の西洋煙草を吸ひ出した。空氣の鮮明な部屋の中に、煙がフハリ〱と漂つた。私が無愛想に、碌々受應へをしないのにも關はらず、彼れは悠然と構えて「洋服をお拵えになるのなら、切地が安く手に入るやうにして上げます」と當世流行の柄などについて話して、市價よりも幾割安く買へると云つて私に洋服の便利を說いて新調を勸めたが、相手になつてゐると、二三年前に訪ねて來た時よりも、彼れに威力が出來て、私の方を壓迫してゐるやうだつた。それで、彼れが一層はげしく目障りになる煩い存在となつて私の目に映つた。

私は身體の苦しさを實際以上に裝つて、目を瞑つて、蒲團の上に額を押當てゝ、彼れの壓迫を避けた。色氣も食氣もまだ回復しない麻痺した私の頭には、喋舌つてゐる彼れ、微笑してゐる彼れ、美裝してゐる彼れ、煙草の煙を吐いてゐる彼れが、世俗の人間を代表して、おれを蔑みに來てゐるやうに思はれた。

彼れは　私が口を噤んでゐる間時子と話をしてゐたが、やがて歸つて行つたので　私は頭を持上げて、

「あいつ、以前よりや高慢になつたね」と云ふと、

「そんなことないわ。口の利きつ振りだつて、商店へ出てるだけあつて、以前よりは却つて叮嚀になつたくらゐですよ」

と、時子は云つた。

「さうかなあ」

私はさう信じなかつた。河本によつて代表されてゐる世俗のすべての人を、煩い存在物として排除することは頗はしかつたが　側でよく居睡りをしてゐる田舍丸出しの看護婦や、退屈してゐるらしい時子に對するおれ自身の關係を思ふと氣がひけた。今この二人に離れられたら、私は盲人が杖を離れたやうになるのであらうが、私の目には、女人の形をしてゐる肉體として映つてゐるだけで何の興味もないこの二人が、私のために排尿の世話までして日夜看護をしてゐるのが不思議であつた。……看護婦は一日いくらの賃金のために働いてゐるのには極つてゐるが、いゝ時候に病人の煩はしい世話をするのは面白くないのにちがいない。時子は夫妻といふ縁故で、自然の人情から、おれの世話をしてゐる譯なのだらうが、色慾の痲痺してゐる私には、同室内の二人の女人に、親しみの感じは寄せられなかつた。從つて二人が私に義務以外の親しみを持つてゐることも理解されなかつたので、世話をされるのも當然とは思はれなかつた。

看護婦は大地震の際の病院の大混雜について話した。婦人病で腹部切開を施したばかりの患者をかついで避難した悲慘な有樣を話した。私が前に行つてゐた痔の病院では、猛火が迫つて來たので患者を二階から大道へ抛投げたさうであつた。……運次第で、その抛投げられた患者は私自身であつたかも知れなかつたのだ。今の今、天變地異が起つて、私が飛起きて避難しなければならぬ場合になつたらどうだらう？　その苦しみは想像されたが、それによつて私の頭は興奮しても力づくのでもなかつた。……痲痺した、能のない頭になつて、人に對して愛情の念も缺けてゐるくせに、天變地異が今起らないことや、自分が當分死ぬる氣遣のなくなつてゐることだけは信じてゐるらしかつた。「もう大分よくなりました。もう少しの御辛抱ですよ」なんて醫者に云はれるのを眞に受けるだけの信仰心は持つてゐた。

壓制的の便通の閉止が除かれて、食慾が出て來て、頭腦の苦痛や腹部の苦痛が衰へると、世の中が少しは明るくなつ

たが、さうすると、醫者の手で自分の肉體をいぢられるのがいやになつた。

「大きな病院だと、すべてが物々しいので、醫療の力も非凡なやうに思はされるが、本當はどうだか分つたものぢやない。こんな手術をやつたゝめに一方はよくなつても、餘病を起さないとも限らないからね」と、私は從來屢々醫術に手頼つてゐたのに、いつもさしたる効果のなかつたことに思及んだ。

氣分がよくなつて、新聞や雜誌が讀めるやうになると、自分の職業の事も念頭に動きだして、發病前の自我と異らない自我に後戻りしだしたが、それにつれて、何年も病牀に就いてゐた人、就いてゐる人の苦しみに同情されて、去年から中氣に罹つてゐるといふ俳優のT君をも、早く見舞つてやらうと、私も思ふやうになつた。

「見神の實驗」を書いた哲學者のT君の病疲れた影をも、私は久振りに思出した。今から二十年あまり前に、私は講義錄の編輯員として、倫理史の寄稿者たるT君を屢々訪問したのであつたが、T君は半ば身體を起して夜具に凭れて、蒼褪めた頬張つた顏に微笑を浮べて、病中に感得した人生觀なる者をよく話した。私が宇宙人生に對する幼稚な懷疑觀を述べるのをよく聽いて呉れた。……中氣や肺結核患者のやうに、六尺の寢床の上に前途の希望もなく寢てゐるのは、死にもまして悲慘であらうと察せられるが、T君はあの弱つた身體で希望を私に向つて說いてゐたから不思議だ。「もうすこし温かになつたら、俥に乘つて近所を見て廻らうと思ふ」とか「もう二三年もして健康が回復したら」どうしようと思ふとか云つたが、T君も、暗闇から神樣をひねり出して夢まぼろしに慰めを得てゐた傍ら、性慾のためには隨分人知れず惱まされてゐたさうであつた。T君は私など後進に向つては、見神の方の話だけをして、一方の話はしなかつたが、ある時、私はT君と同じ病氣に罹つてゐた人から、T君がその人に向つてしみ〴〵と性慾の惱みを訴へたことを聞いて感慨に打たれた。

「肺病患者が猥褻なことを考へてゐると思ふと氣味が惡いな。まだしも神樣でも拜んでゐて呉れた方がいゝ」と、その時には皮肉に云つたのであつたが、今思ふと、色氣があればこそ、神も佛も生み出せるので、手術後の私のやうであつたら駄目だ。

(三)

数十日間液體ばかりで生きて來た私は、障害物が取れて、食慾が回復すると、冷たいお粥でも、鰹節の入つてゐない味噌汁でも、何でもうまく食べられたが、それでも時子や私自身が豫想して用心してゐたほどには喰意地が張らなかつた。食つてはいけないと思ふと、大抵は我慢が出來るのが、自分ながら不思議であつた。私には大抵の儉約が出來る、大抵の慾望を壓へることが出來るのだなと、生存力の强烈でない自分を憐れむ如く省みた。强烈でないにもかゝはらず、生存を廢止する覺悟がいつになつてもつかないのを更に憐れむ如く省みた。

一國の資本の半ばを有してゐるといふ獨逸財界の大立物スチンネスが、膽石病の手術の結果が惡くつて死亡したことや、澤村宗之助が腦溢血のために舞臺で卒倒したことなどの新聞記事を讀むと、平生よりも身に染みて、人の世の哀れさが、感ぜられたが、宗之助が臨終の間際には「子供のことを頼みます」と、それだけを傍人に云つたといふことが、私の胸に響いた。

誰れに取つても、子供といふ者は可愛いゝものらしい。私は幸ひにして子供がないために、この世に未練を殘さないで、潔く死ねるのであらうか。私は不幸にして、子供がないために、安んじてこの世を去り切れないのであらうか。

「大磯の家は埃だらけになつてるだらうな。あの家には、歸つて行つても、誰れもおれの退院を待つてやしないし、此

院を出たら温泉へでも行くといゝんだわ」と、私は時子に云つた。

二人きりの家族だから、今はT病院の××病室へ轉居してゐるやうなものである。監督の上からも親兄弟からも、何等の束縛を受けてゐない私は、自由に何處にでも住めるのであるが、特別に住みいゝ所を私はまだ思當らないのである。巴里がよくつても瑞西がよくつても、異人種の中では、私は快く住めさうには思はない。そして、病院の病室にでも住んでゐればゐられるのである。監獄にだつて覺悟をすれば住めるかも知れない。

時子は副食物を買ひに屡々丸ビルや、銀座へ出掛けたが、病人でないだけに、私よりも却つて退屈を感じてゐた。

「折角東京へ來てるんだから、花見にでも活動見物にでも行つたらいゝぢやないか」と、私が勸めても、女として、獨りでは遊びに出られなかつた。

「それでも東京にゐるお蔭で、毎晩風呂に入れるし、水道があつて洗濯が充分に出來るからいゝ」と、時子はそんなことをでも幸福の一つとしようとしてゐた。そして、時間潰しにはよく頭髮をいぢつてゐた。附添の看護婦も、髮の手入れとお化粧とで退屈な時を過してゐた。

「女はお化粧をしてれば退屈をしないんだね」と、私は冷かした。

附添の看護婦を斷つてからは、私たちはなほ更この病室に假寓してゐるやうな有様になつた。

「病院にゐると安心なことは安心ね。身體が惡くなつたら、何時でもお醫者さんが診て呉れるから」と、時子は私の發病當時の心配を思出して云つた。

「もつと歳を取つたら、宿屋代りに病院に泊ることにしたらいゝんだわ。子供がなくつて、歳がよつて病氣しても、親身に介抱して呉れるものはないんだから、病院で死ぬるのが安心でいゝだらう。」

私は放浪生活の樂みを、時々、空想にだけは浮べないことはなかつたが、いつかは免れない死を出來るだけ安らかに過したいので、放浪にも餘程の注意をしてゐなければならなかつた。ゴンクールの「ルネ・モオプラン」といふ、私の愛讀書の中の老夫婦は、男の子にも女にも死なれたので、何處といふ當てもなく、何のためといふ目的もなく、たゞ、天壽として彼等の身に殘されてゐる時日を消磨するために諸方を流浪してゐたさうだが、私たちは愛する肉身に死なれたといふやうな深刻な悲みもなくして、殘生を流浪しなければならない。

時子の弟が商用で上京して、次手に私たちを病院に訪ねると、時子は俄かに元氣づいて、立續けにさまぐ〳〵な事を訊ねた。世間の風波には曝されないで素直に育つて來た彼れは、初めて子供といふ者をもつた悦しさに戸まどひしてゐるやうだつた。

「みんな喜んでるだらうねえ」

「あゝ。子供は丈夫で元氣がよくつて可愛らしいよ」

「方々からお祝ひが大變だつたらうね」

「さうでもないよ。今日初宮は高島屋へ誂えて來たよ」

「私にさう云へば、一しよに行つて見立てゝやるんだつたのに」

姉と弟とはこんな話をしてゐたが、私は傍で聞いてゐて、時子のために淋しい氣持がした。彼女の實家がますく〳〵賑やかになるのに引變へて、私の家はますく〳〵淋しくなるばかりであつた。同胞の仲も、配偶が出來ると疎遠になり、子供が生れると、更に疎遠をますのが人の世の習はしで、時子とその弟の上にも、それが現はれつゝあるのを、私は以前から傍觀してゐた。

時子は弟の持つて來た風呂敷包を開けて、子供の帽子などを取出して批評をした。

「家を出てると子供のことが氣になつてならないね」と云つて、弟は近くの病室にゐる病兒の泣聲を聞きつけて、「家の子供の泣聲はあんなぢやないよ。そりや勢ひがいゝ」

「どんな子か見たいものだな。寫眞をお寄越しよ」

「あゝ」

時子は弟を誘つて銀座の方へ散歩に行つた。

私はひとりで節穴だらけの天井を見てゐた。そして、今日一日の暮れたといふことを考へた。

「氷の出しじまひです」といふ聲がいつものやうに廊下の一角から響いて來た。その冴えたいゝ聲を、はじめのうちは哀れつぽく物凄く聞いたのであつたが、この頃は、退屈さましとして興味をもつて聞くやうになつた。病兒の泣聲や、老人の悩ましげな咳や、手術を受けた患者のうめきや、不愉快な音聲のみ起つてゐる夜の病院のうちに、「氷の出しじまひです」は、一つの音樂として響いて來た。

（四）

長くも三週間を經過したら退院が出來るにちがいないと、自分で確信してゐたその三週間が來ても、手術の傷は癒えないのか、醫師は全快を斷言して呉れなかつた。もう少しですと氣休めを云ふに止まつた。そして、座つてもいゝとか廊下をぶらつくくらゐならいゝとか、恩惠を垂れるやうに云つたが寢床の上に座つて見ても、病院の廊下をぶらついて見ても、さして面白くはないので、私は終日横になつてゐた。

何處に住んでゐても、讀書か執筆か、あるひは空想によつて、日々の退屈を紛らしてゐた私は、此處にゐても、其の助けによつて辛うじて、毎日の長い晝や夜が過ごされた。若い醫員T氏の幾十冊の藏書を借りて、片ばしから讀通した。「行の哲學」とか、「武者小路全集」とか、獨歩啄木の著書、新譯榮花物語、徒然草など、醫者でも今頃の若い人は、こんな書物を讀んでゐるのか思ふと面白かつた。その人に對して新たな親しみが感ぜられた。私は久振りに徒然草を讀んで、その日本的の名文に感心したが、作者に對して敬意を寄せるよりも、むしろ可笑味が感ぜられた。無常を說いても、この人のは遊戯的で上つ面を撫でてばかりゐるやうである。日本の古文學は、讀直して見たら、みんな大抵はそんなものかも知れない。

「上つ面」といへば、文學が上つ面を撫でてゐるばかりではない、醫術だつて本當は上つ面を撫でてゐるばかりではなからうか。私の治療も三週間が四週間に延びても極りがつかなかつた。痔の手術くらゐで、豫後がこんなに長引くのは、私には腑に落ちなかつた。すると、醫術に對して疑惑が强烈に私の心に湧いた。かつて慢性の胃病の治療に百日を費して寸毫の效果のなかつたことも思出された。私の身内の者で、ある手術を受けて、「もう完全に癒りました」と院長が斷言してゐたのに、退院すると間もなく、何の不養生もしてゐなかつたのに、元の通りに惡くなつたことも思出された。

「あなたのは、注射のあとの潰瘍があつたために、豫定より少し長引いたのです。しかし、もう少しです」と、醫師は云つて、一日々々と日は立つた。

「もう痛くも何ともないんですが、出血します」と、私が訴へると、

「もう少しです、大抵皮はついた」と、醫師は云つて、「これであなたは一生痔の心配ないやうになりますよ」と、柔しい聲で云つた。

しかし、私には手術前と同じやうに、ポタリ〳〵と出血してゐるのが氣になつた。出血後にある若い醫師を招いて手當をして貰ふと、

「水のやうな皮が張つてゐるだけですから、少し動くと出血するんです」と、患部をさぐつて、その人は云つた。

「ぢや容易に、外を歩く譯には行かないでせうね」と訊くと。

「圓太郎自働車にでも乘つたら、直ぐ裂けますよ」と、その人は卒直に云つた。

それでは元の木阿彌で、あの數週間の苦勞が何の效果もなかつたのじやないかと、暗い氣持になつた。

「お醫者さんの氣のつかないやうな奧の方から血がにじみ出てますよ。」時子は患部を拭ひながら、熱心に検べて、「こりや、も一度手術をしなきやならないかも知れない。」と云つて、しをれた。

「手術のし直しは困るが、病院でも、自分のやり損じを證明するやうなことはやらないだらう。」

「だつて戯談に入院してゐるのぢやなし、一日でも早く、間違のない治療をして貰にや困りますよ。長引くのは諦めるにしても、直るあてのないのにかうしてゐるのは溜りませんからね」

二人は心を焦立たせたが、患者の一日は醫師に取つては一分間にも當らなかつた。足を切つたり腹を開いたりするやうな大きな手術が毎日執行されてゐた。

「これで激痛を感じてる時なら却つて餘計なことを考ないで、醫者を神様のやうに思つて手頼つてゐられるが、この頃は回診のあるたびに醫者に對する信用が減つて來るから心細いよ」

私はさう云つてゐたが、しかし、一ケ月の辛抱をフイにして此處を逃出す譯には行かなかつた。

「どうせ急に直らないのなら、毎日神妙に寢てゐるにも及ぶまい。今日は銀座の方へ散歩して來よう」

私は醫師の許しを得て、病院の風呂で二ヶ月間の垢を落してから、夕方妻に護られながら、病院の外へ出た。ソッ電車に乘つて日比まで行つて、銀座の方へ向つてノロ〳〵と歩きだしたが、激しい雜踏と强い光とに、弱つてゐる心身が壓倒されて、目まぐるしくて、惡夢に襲はれてゐるやうで、數奇屋橋までも足を進め得なかつた。それで途中から引返して病院へ戾つて、住馴れた自分の寢床へ横はつて、やうやく安靜を得た。……あんな騷々しい所で、人はよく生きてゐられるものだ。僅か一ヶ月の間に東京が異つた國の都會である如くに繁華になり混亂を極めてゐると、醒めたあとで夢を思出す如くに、今見て來たことを思出したりした。

そこへ、ふと、若くつてまだ世間ずれのしない醫員のT君が、容態を聞きがてら遊びに來た。

「この頃はよくお眠りになれますか」

「眠れたり眠れなかつたりです」

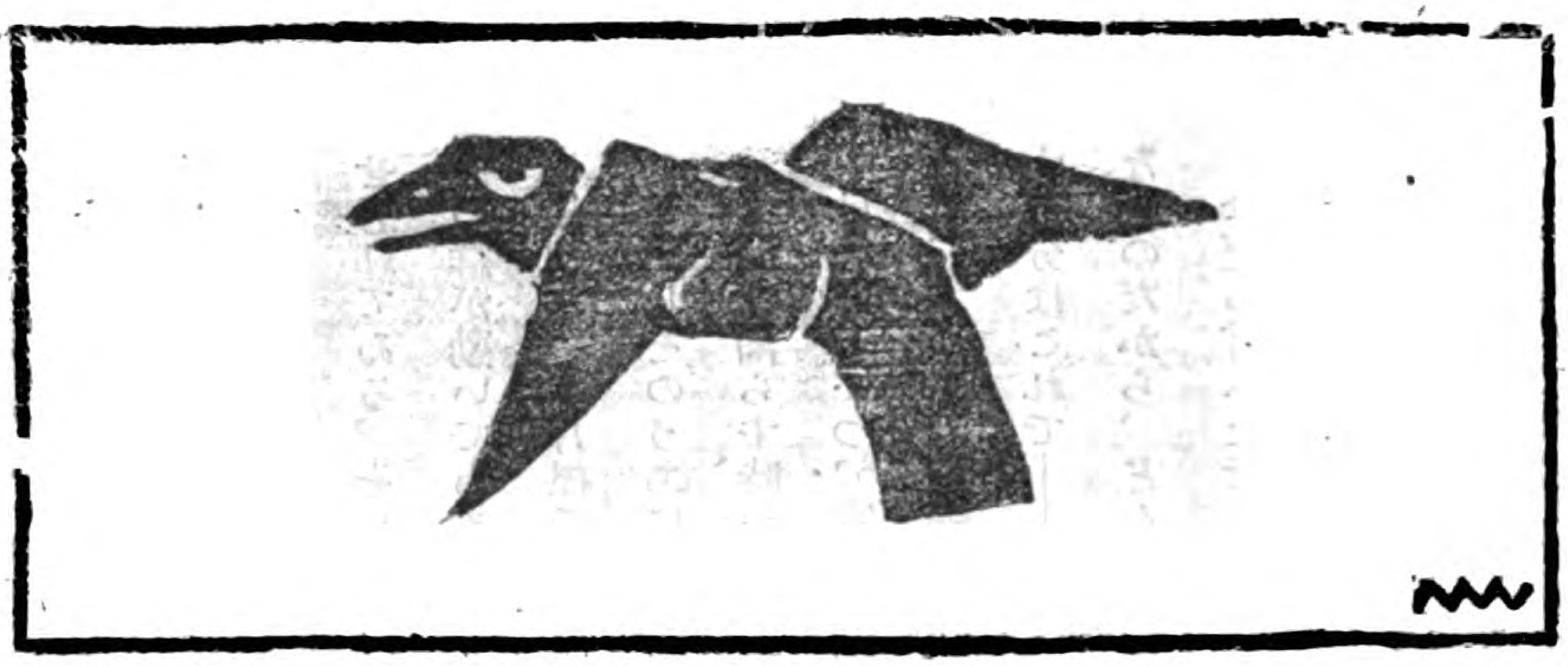
「神經衰弱にならいゝ藥がありますよ。僕飮んでゐるんです」と、T氏は、白い錠劑の入つてゐる小さな罎をポケットから出して私に見せた。手に取つて見ると、英字で藥の成分や效能が書かれてあつた。

「これを飮んで注射をすると、いろ〳〵な神經が强くなるんです。インポーテントによく利くさうです。砒素も入つてゐて全身が强くなるから、私は飮んでゐるんですがね」

「ヨヒンビンもあるんですね。こんな者は害にはならないんでせうか」

「いや害にはなりません。お用ひになつちやいかがです。僕が注射して上げませうか」T君は私の性的虛弱を見知つてゐるやうに云つた。

「えゝ」と私は輕く聞流した。そして、T氏の話す外科手術の話を夢のやうな聞きながらウト〳〵した。



黒い影

下村千秋

一

僕が、府下のある監獄――さう呼ばれてゐた頃――の教誨師として、その職に馴れて來たのは、赴任してから半年あまりも過ぎてからであつた。

赴任した當時、僕は先づ、何處へ行つても岩石をくり拔いたやうな建物から、息の詰まるやうな壓迫を感じた。身體がいつも締木にかけられてゐるやうで、何とも言へない疲勞を覺えた。それから一時間毎に鳴る大時計の音――それは入口の建物の二階の正面に取りつけてある時計から響く音であるが、それが鋼鐵の棒を叩くやうな音を出す度に、僕は身體がすくみ上るやうに感じた。カーン、カーンと、實に硬い感じの、癇の強い音である、そしてそれは、監獄中にひゞき渡るのであつた。

あとで知つたのだが、その大時計の音は、囚人の耳には、金鎚で心臓を叩かれるやうにひゞくといふことであつた。あの音が一度響く度に放免の日が近づくのだと思ふ

よりは、何處といふことなく遠い暗い世界に追ひ込まれるやうに感ずるといふことであつた。

その次に脅かされたのは、一日に一度、晝飯後の三十分間、夫れ夫れの監房から引き出された幾百といふ囚人達が、中庭に一列縱隊に並べさせられ、各囚人の距離を六尺位にして、その庭の中を引き廻される——運動のために——時の光景であつた。各囚人は、互ひの顏を知り合はないやうにする必要上、眼の所だけを圓く切り拔いた白い布の袋をかぶせられてゐる。それが長い列をなして、前後左右を監守に守られ默々と動いて行くのだ。僕は見てゐて、どうしても髑髏の群が動いてゐるのだとしか思はれなかつた。

最初の一ト月程で、僕は變な憂鬱症にかかつてしまつた程であつた。

しかしそのうちに少しづゝ、さういふ事にも馴れて來た。僕にはいつも顳顬を叩きつけられるやうに聞えた大時計の音も聞き漏らす時があるやうになつた。建物から受ける壓迫もさう感じなくなつた。

けれど、一つ、容易に馴れ切れない事があつた。それは自分の受け持つてゐる囚人達の監房を訪ねる仕事である。毎日二三人づゝ、順繰りに訪ねて教誨をするのであるが、これが僕に取つて最も厭な仕事であつた。が、教誨師の仕事の大部分はこれで——外に、囚人を一堂に集めて教誨する仕事もあるが——これが出來なければ、その職に就いてゐられないのだから、どんなに厭でも、定められてゐる通りを果さねばならなかつたのだ。

今更ら言ふまでもなく、普通人が普段に持つてゐるやうな感情を持つてゐる囚人は殆んどない。強盜殺人犯が必ずしもそれに相應した感情を持つてゐるとは限らないが、どの囚人もどの囚人も所謂一癖を持つてゐるのだ。從つてそれが容貌や動作にも現はれる。さうした囚人を一人一人監房に訪ねて、何かの話をしなければならぬといふ事は、僕のやうな男に取つては實際苦痛であつた。監房に入つて、囚人と對坐して、ある程度まで話し出してしまへば、あとは割りに

平氣で向ひ合つてゐられるが、その前、先づ監房の扉の前に立つた時既にいやーな氣持になるのだ。時にはかれさへ感ずる。大ていは、監房に入る前に、扉についてゐる小窓から中の様子を覗ふのだが、その小窓を開ける時さへ變た氣持になる。どうかすると、その小窓に囚人の二つの眼だけがギロリと光つてゐることがあるのだ。

ある時は、こつちから廊下を歩いて行つた歩調のまゝ、いきなり突き當るやうに扉を開けることに依つて、厭な氣持を味はない豫防をすることもあるが、それでも、扉を開けて、一種異様な臭氣と、廊下よりも一層冷たく感ずる冷氣とに觸れると、身體中がゾーツとなる。高い窓から僅かに注いで來る光りの下で、與へられた仕事をしてゐる囚人に、扉の開く音をきくと、顔を振り向けてこつちを睨む。囚人によつて、驚いたやうに急に振り向く者とゆつくりと首を廻す者とあるが、睨むといふ點ではどの囚人も一致してゐる、その時の眼の光りにまた脅かされるのだ。思はず身構でもするやうな氣持になつたことが幾度あつたか知れない。

この扉を開ける時の氣持、囚人の眼の光りを見た時の印象は、十年後の今でも殘つてゐて、それが、どうかした場合に、奮に突然に僕を驚かすことがある。

教誨師を止めた思想上の動機は外にあつたが、感情上の動機は確かに、かうした場合のいやーな氣持がだんだんに積つて、理屈なしにその職が厭になつて來たことに在つたのだ。

教誨師自身が既にそんな氣持で囚人に接するのであるから、いかに言葉の上で、勸善懲惡を説き、懺悔をすゝめた所で、少なくとも僕の場合では、囚人達はそれを素直に受け容れよう筈がなかつた。表情にはひどく反感を示しながらも、默つて聞いてゐる方は最もいゝ方で、大ていは何とか理屈をつけて、自分の刑罰の不當を訴へたり、ある者は自分の罪が寃罪であることを主張したりする。結局こつちの説教は、彼等の感情を荒らすに過ぎないのであつた。そして自

分も不愉快な氣持で監房を出るのがいつものきまりであつた。中には、表情の上でも言葉の上でも、心から懺悔したるやうな風に見せるものもあつたが、それも乞食が人の恵みをいくらでも多く得んが爲めに、殊更らに慘めななりをし、哀れな言葉を吐くと同じ心理狀態から來たもので、そんな奴に限つて、出獄してから一週間とたゝないうちに再び同じ監房へ戻つて來た。

結局、僕の場合では、ほんとうの意味での敎誨師としての任務を果したことがなかつたのである。それとも僕自身に、彼等を監獄といふ組織に缺陷があつたのか、彼等囚人にフエータルな惡の根が張つてゐるのか、それとも僕自身に、彼等を說得し得る力がなかつたのか、それ等のことはどれがどうとはつきり言へないが、とにかく僕は三年間の敎誨師生活に於て、囚人の魂としつくり觸れ合つて、少しの僞りもない懺悔を聞き得た喜びを感じたことが殆んどなかつたのである。

しかし、さういふ喜びを感じた經驗が一度あつた。前後に只の一度である。

そのことを話して見よう。

二

その囚人の名は篠原と云つた。彼は殺人罪で或る年限の刑を受けて入獄してゐたものである。

彼は、僕がそこへ赴任する八ケ月前に入獄してゐた。彼を始めてその監房で見たのは、僕が赴任してから五日目であつたと覺えてゐる。顏の長い、鼻柱の高い、口の大きい男であつた。どうかすると顏全體が妙に歪んで見えて、最初の印象はやつぱり自身の犯罪にふさはしい容貌だといふ感じを持たせられたが、それから二三度訪ねるうちに、その切れ

の[illegible]かには、しつとりした優しみと[illegible]しみの色があることを見つけ[illegible]には
は、他の囚人から感じられるやうな下賤な荒廢した表情とはまるで異つた、靜かな落ついた表情に現はれることが[illegible]つた。
見かけは四十近い年齢に見えたが、實際は三十四歳であつた。

別にこれといふ手職も持たない單なる勞働者であつたが、學歷は中學四年までであつた。しかしその態度や表情や、物の言ひ方にはそれ以上の精神的教養を受けて來たもののやうな所があつた。

彼は、僕の説教をいつも首を垂れて默つて聞いてゐた。何か訊いても大ていイエースかノーを答へるだけであつた。その表情には別に反感も現はれてゐなかつた。と言つて、こつちの言ふことを一一受け容れてゐるといふ風でもなかつた。獨りで默想してゐるといふ風でもあつたし、こつちの言ふことを一一吟味してゐるといふ風でもあつた。

僕はだんだんと、その囚人に對してだけは自分の言ふことに氣をつけ出すやうになつた。他の囚人に對しては平氣で言へたことが、その男には言へなくなつた。高びしやに出ることは尙更出來なかつた。普段よく考へて見ないやうなことはうつかり言ひ出せなかつた。

さうして僕はいつの間にか、この囚人とだけは、對等的の氣持で話すやうになつたのである。「僕にはよく解らないが」とか「こんな事は僕にも出來さうにもないが」とかを冒頭に置いて話すやうになつた。つまり、僕は彼に對してだけは、所謂教誨師ではなかつたのである。

さうした僕の、自然な謙讓な氣持が、いつか彼の心に染みて行つたのか、それとも彼は、長い間の沈默生活に堪へられなくなつたのか――實際大ていの囚人にとつては、沈默といふことは、刑罰以外の刑罰であつた。彼等は入獄して始めて、さういふ無形の罰もあることに驚くのである。尤も、彼等に、大つぴらに話の出來る教誨師の訪問を受けると、

はち切れるやうに水を盛つた水袋の口を切られたやうに、無暗としやべり出すのがきまりなのである――しかし彼は、もう沈默の中に押し包んでゐるに堪へられなくなつたといふ風ではなく、もう話してもいゝ時が來たから話すのだといふ風に、ある冬はじめの午後、その薄暗い監房の隅の、小さな固い座布團の上にキチンと坐つて、自分の犯罪に就ての詳細を話し出したのである。

それは僕が、彼の監房を訪ねはじめてから一年近くなつた時であつた。それまで僕は彼を十四五回訪ねてゐたが、その間彼は一度も、自分から進んで話し出したり、何かを慾求したりしたことがなかつたのである。例へば、手紙を出したいからその手續きを賴むと申し出したことさへないのである。もつとも、外から彼に宛てた手紙がそれまでに一通も來てゐない所から見ると、彼にはこの世の中で、何かを賴み、或ひは何かを訴へてやるやうな相手が一人もなかつたのかも知れない――どんな重罪を犯した囚人でも、心から心配してゐてくれるものを一人や二人は持つてゐるものであるが――勿論、彼に面會を求めて來たものは一人もなかつた。

その日僕は、何かの話から彼の犯罪當時の模樣を訊いて見たのである。犯罪事項や、犯罪理由、犯罪經路などは、當の囚人から訊くまでもなく、それ等を相當詳しく書き記した帳簿があるので、それに依つて大概は知ることが出來るのであるが、教誨の便宜上――犯した罪がいかに恐るべきものであるかを知らせる手段上、直接囚人から罪を犯すまでの經路を訊くことをよくするのである。けれど先刻も話したやうに、大ていの囚人は、假出獄といふ名目で放免の日を一日もはやく與へられることを望む心から、少しでも善人であることを見せかける爲めと、また大ていの囚人は弱者であるが故に、自分の犯した罪をまともに見つめることが出來ない爲めとで、それにひどいひねくれ性も手傳つて、犯罪の經路を、自分以外のものにばかり罪を着せて、自分のことはあくまでも有益なやうに申し立てるのが恒なのである。あ

るものは、まるで何等の罪も犯した覺えがないやうに申し立てるものさへあるのだ。だから、殆んどの囚人に對しては、囚人自身の尤もらしい申し立てを眞に受ける氣持で對することは全く出來なかつたが、その日彼が、

「それでは、罪を犯すまでの道行きを一通り申上げます」と言ひ出した時、僕は直覺的に、この男はきつと、事件のありのまゝを正直に話すに違ひないといふことが信じられた。それに、入獄してから一年半も沈默を守つて來てゐた後に始めて開いた口でもあつたので。

そこで僕は、ある靜かな昂奮を感じながら、彼の言ふことを一つ一つ素直に聽くことが出來たのである。

三

彼は、當時より二年前のある冬はじめ。――十月三十一日の夜、嚴密に言へば、十一月一日の午前二時半、場所は東京の北の場末のある草原で、彼の親分であると云ふ男を、電車線路工事用の金梃を以て毆り殺したのである。被害者は、腦天半分を貝殼のやうに粉碎されて即死した。彼はそれから二日目の夕方、彼の定宿である木賃宿で捕へられたのである。

僕は、ある話からふとかう訊いて見たのであつた。

「君は、被害者とは、親分子分の關係以外に何の關係もなかつたのかね?」

「えゝ、表向きはそれだけの關係でしたが、實際は友だち同志でした」

彼は、板の間にあぐらをかいてゐる僕の膝の邊を見つめながら靜かにさう答へたのである。

それで、いつ頃から被害者と知り合つたのだね？」

「その三年ほど前からです。だんだん話し合つて見ると、同郷人でしたので、その爲め直ぐ仲よしになつて、何でも打ち明けて話すやうになりました。その人は、獨身で暮してゐたせいか、大へん淋しがりやで、しよつちう遊びに來い遊びに來いと言つて吳れました。遊びに行くと大へん喜んで、できるだけの御馳走をして吳れました。私のうちへも、月に二三べんは、必ず一升壜をさげて來て吳れました。私の家内の手料理が何よりだと言つて、いつも大機嫌で飲むのでした。郷里から家内を呼び寄せることが出來たのも、長屋の片隅でも自分の家を持つことが出來たのもみんなあの人のお陰です。人の世話と來たら自分のことよりも熱心になる人でした。さつき友だち同志だと申しましたが、私は内心では、おろそかには出來ない恩人だといつも思つてゐたのです。恩人扱ひや目上扱ひなどをすると不愉快がるので、わざと平つたくつき合つてゐたのです。」

「そんな人をまたどうして殺す氣になつたのだね？」

「それでは、罪を犯すまでの道行きを一通り申し上げます」

こゝで彼はさう言つたのである。で僕は、もう一度彼の顔を注視して、そして襟を正すやうな氣持にさへなつて聽き出したのである。

「犯罪の夜、私だちはいつもの通り行きつけの馬肉屋へ上り込んで飲んだのです。仲間は、あの人との外に、菊公といふのと、熊太と呼ばれてゐたのと、五右衛門といふ綽名をつけられてゐた男との三人でした。その日稼ぎの私だちは、みそかだらと言つて、餘計な勘定の入る日ではありませんでしたが、それでも毎月、みそかにはいつもより景氣をつける習慣

になつてゐたのです。連中は二階の天井の低い部屋の、一間に並んだ卓の一番奥に陣取つて、はつかまこふで景気よく飲み始めたのでした。少し飲んでゐるうちにいゝ機嫌になつた親分は、今夜の勘定の半分は俺が持つから、と言ひ出したもので、みんな図に乗つて大あぐらで飲み出したのです。

私はその頃、ある事情で、一月ほど労働を休んでゐて、その日始めて働いたものですから、身体の節々が痛んで、楽な気持で酒が飲めませんでした。それに前から病つてゐる脚氣もまだすつかり直り切つてゐなかつたので、なるべく飲まないやうにもしてゐました。實はその日の朝も頭痛がして、仕事に出ることを一日延ばさうとした位でした。ですから仕事をしてゐる間も、からだ中がだるくて、時々輕いめまひさへして、工事が片づくのがずいぶん待たれました。で、仕事が終へると、私はすぐ宿へ歸らうとすると、忠太の奴が、少し氣になる厭味を言ひやがつたので、我慢してつき合つた譯なのです。

けれど少しづゝ飲んでゐるうちに、酒は私も至つて好きな方ですから、いゝ氣持になつて來たので、ついひかへることを忘れてしまひました。

私だちの傍には、たま子ととみ子といふ女中がついてゐました。親分はいつでも話のない方ですし、左右衛門は天井が駄目で人並の話が出來ない男でしたし、粂公は、鵞鳥のやうな肥り方をしてゐるとみ子をつかまへて何か口説いてゐるので、私は忠太を相手に話すより外はありませんでした。が、いま申したやうに忠太に對してはさつきから腹の底で反感を持つてゐたものですから、勢ひ、殘つてゐるたま子を相手に話すやうにばかりしてゐました。たま子といふのは、色の小白い、眼のくりくりした小柄の面白い女でした。實は私はこの女をそれまでに二三度連れ出したりしたこともあるので、たま子の方でも私の傍にばかり喰つついてゐたのです。

私はその時、忠太を仲間外れにしてやるやうな氣持も持ちながら、たま子を相手に、飛行機の話をしてゐたと思ゐます。飛行機の話は當時はまだ珍らしくて、近いうちに芝浦かどつかで、陸軍の試驗飛行があるが、うまく飛べば見ものだなどゝいふ噂があつた頃でした。たま子は、背中を忠太の大きな身體に凭せかけ、二本の足を私のあぐらの上に投げ出して、煙草をふかしながら空つぽいて私の言ふのを聞く、といふよりは見てゐました。

「人が飛ぶなんて、まるで夢のやうな話だわね」たま子はそんなことを言つては、時々、ふんぞり反つて忠太のからだをゆすぶると、忠太は大袈裟に首を振り、眼を細くしてニタニタ笑ひながら獨酌でぐいぐい飲んでゐました。

そのうちに忠太がだしぬけに、

「そんな、あぶくのやうな話ア止しアがれ」と言つて私を毒々しく睨みました。それは明らかに敵意を示してゐました。忠太が何故そんな敵意を私に持つてゐるかは私にはよく解りました。外にも理由はありましたが、その時の忠太は、私とたま子との仲を妬いてゐたのです。

私はさつきからのことがあるので、その時少しむつとして、

「何があぶくだ、手前に解る話ぢやねえや」と輕蔑した口調で言つてやりました。

「何！」忠太はぐるりと私の方に向きをかへました。「自體貴様はなんだい、貴様は、いつもそのあぶく話に釣られて、とどのつまりはのたれ死ぬやうな目に會つてばかりゐやがるんぢやねえか。こないだの北海道行きの態ア何んだ」

忠太はさう言つて、得意げにみんなの顔を見廻はしました。

忠太の謂ふ「北海道行き」といふのは、私は入獄する一年程前に、一人で北海道へ渡つたことがあるのです。十勝あたりへうんと土地を借り込んで、一つ大百姓にならうといふ——今から思へば空想でしたが、その目算で出かけて行つ

たところが、途中の小松まで行つて動きが取れなくなり、たうとう某港工事の人夫となり、それから何の[illegible]へ押し込まれ、そのうちにひどい脚氣を病み出して勞働も出來なくなり、揚句の果、命からがら逃げ戻つたことがあるので、忠太はそれを言つたのです。私はその前からいつも、彼等から見ればあぶくのやうなことばかり考へ出しては失敗する所から「あぶく野郎」などとよく言はれ言はれしたのです。

しかし、私自身では、自分の考へる「理想」と彼等の謂ふ「あぶく」とには大へんな相違があると思つてゐました。だからいつか一つ、「理想」と「あぶく」に就いて大いに論じてやらうと思つてゐました。で、今また忠太から「あぶく」と言はれたもので、少し言つてやる氣になりました。けれどそれを口に出した時には、その問題から離れて、只相手を罵る言葉になつてしまつたのです。

「何を言つてやがるんだ。手前等が考へたりしたりしてゐることがほんとうのあぶくぢやねえか、手前等こそあぶくのやうな人間だ」

相手はそれですつかり怒つてしまつて、

「な、な、なに！」と言つたかと思ふと卓の上の二合徳利を持つて立ち上りました。忠太は激昂すると口が吃つて物が言へなくなるので、すぐ腕力沙汰になる男なのです。私もすぐ立ち上りました。この時、向ひ側にゐた親分が卓を跨いで二人の間に割り込みました。

忠太も親分にはいろいろの弱點を握られてゐるので、すぐおとなしくなりました。二人は腰を下しました。それから、たま子が立つて行つて、銚子をつけ直して、親分のとり持ちで、忠太と盃をやり取りなどしました。

やがて親分は、忠太を自分の側へ引つ張つて、諭るやうな口調で何かを言つてきかせてゐました。忠太は始めのうち

はうんうんと聞いてゐましたが、しまひに「もう解つたよ、とにかくこんな所で飲むのは胸糞が悪いや、どうだ親これからなかへ繰り込まうぢやねえか」など丶、頻りと親分を煽動してゐました。

私は何だか急にボサボサした白つぽい氣持になつて、酒もまづくなりました。五右門はいつか鼾をかいて寢てゐました。菊公は大きな厚い唇からよだれを垂しながらまだとみ子を口說いてゐます。そんなのを見ても氣持か變に乾いて來ました。やがて私も、たま子の膝に枕をしてごろりと仰になりました。

私だちがそこへ上つた時は、四十ばかりの行商人風の男が一人ゐたきりでしたが、いつの間にか、三組四組の客が上り込んで、それにつれて女中も出張つて來たので、部屋の中は、いろんな人のだみ聲や小唄聲やら、煙草の煙、肉の油の匂ひなどで、いかにも馬肉屋らしい空氣に充ちて來てゐました。私は煙草をふかしながらマヂマヂと煤けた天井を見つめてゐました。そのうちふと私は、親分が、ときどき白い眼をして私の方を見るのに氣づきました。横目で氣をつけて見ると、親分のその眼つきには、何故か惡意を持つてゐるやうに見えました「いやに當てつけやかるな」とでも言ひさうだとふと私は思ひました。親分もたま子を一二度連れ出したことがあるらしいのです。私は別に當てつけるつもりでさうしてたま子の膝枕をしてゐたのではありませんが、さういふ風に親分の心を邪推して見ると、今度は何故か、故意に當てつけてやらうといふ氣持になりました。

私はさうして寢ながら、たま子の手の盃から酒を飲んだりしました。それから鼻唄を唄ひ始めました。すると、たま子が、淺草の活動の話を持ち出して、

「あしたは、ついたちで休みだから、活動へ連れてつて頂戴よ」など丶態と大きな聲で言つたりしました。たま子も、私と同じ氣持から親分に當てつけてゐるつもりだつたのかも知れなかつたのです、

「つれて行かなくつちや」といふやうなひどい事を大きな聲で言つたりしました。すると、[illegible]ふ風に、つーいと私の顔を睨みつけたりしました。そのうちに、私たちの右側で、たゞ寄で眠つてゐた二人ばかりの客が出て行つたので、部屋のうちは割りに靜かになりました。さうなると親分と私との尻目が急に目立つて來たので私はこれをぼかすつもりでその頃見た西洋の活動の筋をたま子を相手に話し出しました。』

四

『「古道具商を營む夫婦者がゐた。夫は古道具を買ひ集めに出るので留守勝ちであつた。その留守をねらつては、若い妻君を口說きに來る金持の獨身者がゐた。細君はたうとう口說き落されて、ある日、夫の留守中にその男と駈落してしまつた。夫は歸宅してそれを知つて、非常に嘆いた。やがてその嘆きは憤りに變つた。彼は直ちに自分の店をしまひ、一匹の猿を買ひ込み、猿まわしに變裝して、敵の二人の行衛を探しに出た。三年目に彼はつひに敵の住家を見つけ出した。はじめ彼は敵の二人共殺さうと思つた。けれどあとで、男だけ殺すことにした。その方が、男に復讐すると同時に、女にも一番いゝ復讐の方法だと思つたからである。

ある日彼は、女の留守を伺つて男の部屋に忍び込み、格鬪の末、男を絞殺してしまつた。そしてその屍體を入口のドアに凭せかけて置いた。女が歸宅してドアを開けると、屍體がバタリと倒れかゝる、女は氣絶する、彼はさう期待して微笑しながらその部屋を去つた。そして玄關先に繋いで置いた猿を再び肩に乘せ、太鼓を叩きながら悠然として立ち去る」

活動の筋は大體こんなのでした。たま子はその話を、兩手をうしろに突いて淨の姿で聞いてゐましたが、親分は、さ

つきから、こつちに注意を注いでゐました。私はそれに氣がついてゐましたが、構はず話しつゞけてゐたのです。話し終ると　親分は、

「篠原！」と氣色ばつた聲で　わざと私の姓を呼びました。

「おゝ」

私はやつぱり寢たまゝ無造作に答へました。

「貴樣アどこまで人に當てつけやがるんだえ」

さう言つて私を尻目で睨んだ親分の醉つた赤い眼には、これまでに見たことのない憎々しい色が光りました。

「來たな」と私は思ひました。私はゆつくりと起き直つて親分の眼をぎゆつと見つめてゐました。

私には　親分のその時の心持がすつかり解つたのです。と申すのは、當時より二週間ばかり前から、親分と私との間にも、いま話した活動の筋の始めの方に似たやうな出來事があつたからです。いや、實際は　それとは可なり違つたものです、けれど、どうかすると——少なくとも私一人の場合では、自分だちの事件に對して、活動の筋と同じやうな經路を辿るやうな考へ方をしないでもなかつたのです。何か呆んやりしてゐた時など、氣がついて見ると、私はいつかその猿まわしの男の心になり切つて恐ろしい想像に耽つてゐるのでした。けれどそれは實行にまで現はれるほど強いものではありませんでした。譯はたゞ妄想に過ぎませんでした。

で、自分のさうした妄想を恐れるよりも以上に恐れてゐたことは、親分の方で、私と同じやうな考へ方から私に對して警戒してはゐまいかといふ想像でした。それに實際に於ても、少し思ひあたる事があつたのです。この想像のために、私の心は二重になつて、親分に變に働きかけて行つてゐたのでした。

そこへ、今親分からそんな風に言はれたので、私はすぐと、親分はやつぱり、私の犯罪した事件のことを頭に浮べて考へてゐるのだなといふことを確めたやうな氣がしたのです。問題はたゞ子分から全く離れてゐました。

私の心はいつか險しくなつてゐました。同時に同じ程度の自制心が湧いて來て、私は非常に冷靜になつてきゐりました。私は親分に謝りました。そんな事件をそんな場所でむき出しにされては堪らないと思つたからです。』

こゝで僕は質問を挾んだのだ。

「その事件といふのは、どんな事件だつたのだね？」

「……馬鹿々々しい事です。それに私の犯罪とは大した關係がありませんから」

「いや、關係があるかも知れない。大體でいゝから話さないか」

彼はさう言はれると、首を心持ちかしげて、監房の一隅の暗い所をぢつと見詰めてゐた、しばらくしてから、

「やつぱりその話は止します。正直に申せば、その話をするのは厭なんです」

彼はさう言つて、僕の顏を見上げた。落ち込んだ眼の下の筋肉がぴくぴく動いて、顏全體が歪んで來た。僕は氣の毒になつたので強いて訊き出さうとはしなかつた。

彼はその先を話しつゞける。

『私は親分にあやまりました。

「氣にさわつたらあやまるよ、俺アそんなつもりで、今の話をしたんぢや全くないんだからよ、あやまるよ」

さう言つて私は輕く頭を下げました。

「馬鹿にするねえ」親分は餘計に怒り出しました。「それほど俺がかたきたらいつでも殺しやがれ、いまの行動の話ぢや

ねえか、貴様のやうな猿まわし奴に殺される男だと思つてやがるんか」
私は思はず顔を赤らめました。それ以上事件を露骨にされない用心に、
「済まなかつた、済まなかつた」と丁寧に、また押しつけるやうに言つて頭を幾度も下げました。
そこへたま子が口を出して——たま子にだけは事件の一部始終を話してあるので——たま子は卓を乗り越え、親分の大あぐらの上に馬乗りに乗りました。そして親分の牛のやうな首根を両手でゆすぶりながら、親分の言ふことを掻き廻しちまつたので、親分もたうとう黙り込み、やがては機嫌よく笑ひ出して、たま子のさす盃を眼を細くして受けてゐました。
忠太はまだ頻りと「繰り込まう」を繰り返してゐましたが、親分は相手にしませんでした。
私は、先に一人で帰らうと思ひました。で、その折りを見つけてゐると、忠太の奴、また騒ぎ出したのです」

五

「忠太はもう呂律が廻らないほど酔つぱらつてゐましたが、奴は急に、金を盗まれた、と言ひ出したのです。腹掛の丼をひつくり返して、少しばかりの銀貨や銅貨を卓の上にばら撒き、入れといた筈の五円札が無いと言ふのです。
私に、おかしなことを言ふ奴だと思ひました。私はその朝、忠太の丼には一文も無いことを確めてゐるのです。その朝、忠太は客の丼をはたいて見せて、
「この通りだ、夕べは馬鹿に持てちやつたもんでね」てなことを言つて、済まねえが煙草銭をと、私から持つてつた程なのです。卓の上にばら撒いた金はその日一日の労銀です。

私はその事を言つてやらうとしてゐると、忠太は、だしぬけに、傍に坐つてゐたたま子を押のけやうとしたのです、それから片手でたま子の首玉を壓しつけ、片手をたま子の帯と帯の間へ突込んでゐたが、たうとう帯の間から、はだかのまゝの何枚かの札を引き出したのです。二つに折つたのをひろげて見ると、一圓札二枚と、五圓札一枚でした。忠太はニタリと笑つて、その五圓札をつまみ上げ、

「太えあまだ、これを見やがれ」と我鳴り出し「さつき、いやに俺が身體にこすりつくと思つたら、ちやんとやつてやがるんだ、こ、こ、この泥棒あま」

たま子は、起き上ると、亂れた髪をふり立てながら、開き直つて、

「忠太さん、何だつて？　もう一度言つてごらんよ」といふ調子で、恐ろしく黄ろい聲を張り上げ出しました。

私は、たま子のその下賤ばつた態度にも不愉快を感じましたが、忠太の圖々しいやり口には一層腹が立つたので、

「忠太、でたらめ吐かすな」と我ながら驚いた程どら聲を出しました。

忠太の醉つぱらつた時の惡い癖で、金がなくなると、居合せた弱さうな者をつかまへて、泥棒呼ばりをし、結局いくらでもしぼり取ることをよくするのです。私もそれまでさういふ忠太を一二度見てゐました。けれど、それまではそんなことも離れた氣持で見てゐましたが、その夜だけは許してゐる氣にはなれなかつたのです。

「貴様の丼にや、始めつから、五兩なんて札は入つてなかつたんだ。俺はちやんと確めてゐるぞ、たま子、俺が證人に立つから、交番へでも何處へでも出て行け」

「奴の口を出すこつちやねえ」と忠太は私に向つて來ました、「引つ込んでゐねえと、ど、ど、どたまぶち割るぞ」

「やつて見ろえ、貴様は、なかへ行くに親分を口説きそこなつたんだらう。そこでいつもの手で人の金を引つさらつて

一人で行かうとしたんだ、ごまかしたつて駄目だぞ」

すると、忠太はまたよろよろと立ち上つたが、今度はうしろの壁にバタンと倒れました。倒れながらも卓の上の徳利を取つて、私の方へ投げつけました。私はそれを片手で拂ひ除けました。徳利は卓の端に當つて、ひどい音を立てゝ碎けました。外の客はみんなこつちを見てゐます。

忠太は起き上りながら、また二本目の徳利をつかみました。この時たま子は、疊の上に落ちてゐた五圓札をつまみ上げ、忠太の前に塞がり坐つて、

「そんなに欲しい金なら、呉れてやるよ、さア、千住でも吉原でも、さつさと行きやがれ」と持つた札を忠太の面へ叩きつけました。私はまた怒鳴りました。

「たま公、馬鹿なことをするな。貴様は泥棒になるつもりか。俺は、俺だけは、あくまで爭つてやるぞ。忠公、交番へ來い」

私は立ち上り、卓を跨がうとすると、親分は不意に、私の擧げた片足を拂ひ除けて、

「篠原、いゝ加減にしねえか」と怒鳴りました「貴様は、さつきから、たま公の肩ばかり持つてゐるが、して見ると、いゝぐるになつてやがるんだな」

「親分、何を言ふんだ。俺はたゞ不正なことが許せないんだ。間違つてるものを通せないんだ。それに何だつて、惡黨の忠公を庇ふんだ」

私は二つの拳骨をかためて、親分に嚙みつくやうに向つて行きました。

「何を！」親分も立ち上りました。その樣子がひどく殺氣立つてゐました。

菊公ととみ子も直ぐ立ち上つて、親分の身體を兩方からつかみました。とみ子の驚いた顏が、まるで白痴が笑つてゐるやうに見えました。私は私で、いつか、たま子や外の女中に兩手をつかまへられてゐました。それから尚ほ外の二三人の女中に、まるで擔がれるやうにして、梯子段の方へ引張つて行かれました。私は、それに出來るだけ抵抗しましたが、ふとたま子の顏を見ると、たま子は、唇を喰ひしばり、淚をボロボロ零しながら、夢中になつて私の右手を引つ張つてゐるのです。

私は梯子段を下されました。それから暗い電燈が一つついてゐる恐ろしく汚ない部屋——女中たちの部屋でせう、そこへ連れ込まれました。その時傍にゐたのはたま子一人でした。たま子は、部屋の隅に積んである紙のやうな布團を引つ張り出して、私を無理に寢かしました。そして私の身體を上から床へつけるやうにして添寢しながら、しばらく啜すすりしてゐました。

やがてたま子は、吐切れ吐切れに昂奮でこんなことを言ひ出しました。

「あしたは、きつと、活動を見に行きませうね。そして、あたし、それつきりこの家へは歸りませんわ……何處かへ行つてしまうの……あなた、何處かへ連れてつて頂戴よ。どこだつて、どんなとこだつて、遠いとこでさへあれば構はない。お金もちつとは持つてゐるから、それで、だれにも解らない、遠い所へ行きませうよ、そして二人きりで暮しませうよ、ね、わかつて、きいてくれて？……」

たま子はさう言つては私の肩をゆすぶります。私は默つてゐました。

「ね、きいてくれるでせう、あたしはきつとさうしますよ。それに、あたしは、こゝにもう少しぐづぐづしてゐると、どんな目に會はされるか解らないのよ、だから、あたしを助けると思つて、ね、あたし、あなたの爲めなら、何でもし

てよ、ね、ね、わかつて？」

涙に濡れたたま子の顔が、私の胸を壓しつけます。それに、白粉と女の肌の匂ひとが、ガサガサにたつてゐる私の氣持を少しづゝ柔かにうるほして行きました。勿論、さつきたま子に對して感じた不愉快さもきれいに消えてゐました。

私は、たま子がさう言ひ出した動機は割りに自然であるやうに感じました。そして何とか言つてやらねばいけないと思ひながら「俺もいつまであんな仲間に喰つついてゐたら、どんな目に會はされるかも知れない。その上、こん夜のやうなことが度重なると、今まで時々親分に對して考へた例の恐ろしいことをほんとうにするかも知れない。それは恐ろしいことだ。今のうちに逃れよう、ほんとうに逃れよう」といふ風に考へました。

私はさう考へて少しホツとしました。で、それをたま子に言つて見ようとしましたが、それを今言ふと、折角のたま子の自然な氣持を感傷的にして終へやしないかとふと考へ直しました。また事實、たま子がさう言ひ出した氣持にも、何處かに感傷的な所があるかも知れないとも思はれたので、それを互ひに議論し出してはやり切れなかつたので、わざと何んにも聞えなかつたやうに、默つて眼をつぶつてゐました。

しかし私は、明日といふ日に、非常な希望をかけてゐました。』

六

「朋輩に呼びたてられて、私の傍を離れる時、たま子は念を押しましたが、その時も私は眠つたふりをしてゐました。

私は眠らうとしました。けれどかなり疲勞を覺えてゐるのに眼は冴えて來るばかりでした。それに、そこの店は、夜が更けるに從つて客が混んで來るやうな場所にあつたので、二階でがなり立てるお客の聲や、忙がしく亂暴に梯子段を

上り下りする女中達の足音や、障子一重の板場で、食器を洗ふ音などがだんだんにひどくなつて來て、それ等を氣にし出すと、とても寢てなぞゐられなくなりました。

私は、明日、たま子と出會ふ場所と時間とを示し合しといて、そして宿へ歸らうと思ひながら、たま子が再び入つて來るのを心待ちしてゐました。そのうちに私はうとうとしたと見えます。私は俄に突然に誰かに横つ腹を蹴られました。つゞいて兩の足首を摑へられたかと思ふと、私はいきなり抛り出されました。そこは路次の敷石の上でした。

私は腰と後頭部をしたゝか打ちました。しばらくは立ち上れませんでした。やがて立ち上がつた時、私は自分ながら氣が變つたかと思ふほど、ひどく昂奮してゐました。私は店先へ廻ると、そこの壁に立て掛けてある、工事用の金梃を取り上げて、土足のまゝ上りこみました。私は二階へ上るつもりだつたのです。親分始め、忠太でも、銅公でも左右衛門でも片つ端から叩き潰さう、と思つたのです。そして梯子段を三四段ほど上つたとき、うしろから、店の主と、肉切り男とに引つ抱へられました。そして私は他愛もなく店先の往來の中へ引き出されてしまひました。

私は往來の中で、二人を相手に力の限り爭ひました。

「親分の野郎を引張り出せ」

私はそれを幾度か叫びました。私の身體を路次に抛り出したのは親分だと私は思つてゐるのです――あとで知つたのですが、それは親分ではなく、たま子に岡惚れしてゐる肉切り男でした――しかし二人の大の男の力は、私をまるで子供のやうに扱ひました。私はまたおかしい程力がないのです。それがまた私を怒らせました。

持つた金梃はどうしても放しませんでしたが、私はその金梃と一緒に、幾度か地べたへ叩きつけられました。肉切の男がまたまるで猩々のやうな力持ちなのです。私はその猩々に、二三十間程往來を引きずつて行かれた揚句、電信柱へ

いやといふほど叩きつけられました。

私は、再び引き返して行く勇氣、といふよりは力がまるで無くなつてゐました。頭と胴と、手と足とが、バラバ離れてしまつてゐるやうな感じでした。しかし、ぐつぐつしてゐると、その邊の闇の中に隠れてゐるかも知れない狼に、また死ぬやうな目に脅はされるに違ひないといふ恐迫觀念にも驅られて、私は例の金挺を持つたまゝ、馬肉屋とは反對の方向へ歩いて行きました。

何處へ行くのか自分でも解りませんでした。また引返してやらうといふ氣も動いてゐました。そのまゝ引つ込むのは口惜しくてなりませんでした。それでゐてやつぱり先へ先へとぐんぐん歩いて行きました。

夜が更け切つたのか、人通りのない通りなのか、眞暗な道には人つ子一人歩いてゐません。私はその闇の中を歩きながら、不意に足元をかつ拂はれるやうな氣がしては、思はず首をすくめたりしました。後から足音がしたら、金挺を振り廻すのだ、と思つては、全身を耳にして歩いてゐました。

そのうちにいつか兩側の家並が無くなりました。眼をあげて見ると、先は何處までも眞暗な空です。どこの廣つぱなのか見當もつきませんでした。注意して見ると、地平線の上に、二ツ三ツ星が見えます。

私は思はずブルルと身顫ひをして、全身に粟粒の立つのを感じました。冷たい風が星の光つてゐる方から吹いて來ました。

實に恐ろしい空虚、と言つても言ひ切れません、身體全部が見る間に消滅してしまひさうな寂しさにだしぬけに襲はれました。私はそれまでに、あんな心のうつろさ、頼りなさを感じたことはありません。

その時私は、ほんとうに突然に、妻の顔――その半月ほど前に別れた妻の顔を闇の中に見ました。そして私は妻の名を

呼びました。その後、あれほど私の心を惹きつけてゐたたま子のことなどは、不思議と全く忘れてゐたのです。

しかし、その妻は、今は實は親分の妻となつてゐて、私の所へは決して歸つて來る女ではないのです。さうです。やつぱり話してしまひます。さつき、話すのが厭だと言つたこと、親分と私との間に起つた出來事を話してしまひます。話さずにはゐられなくなりました。』

こゝで彼は再び默つた。その顔には、いつか、何とも言へないさびしい、けれど緊張した靜かな表情が、彼を別人かと思はせるほどに現れてゐた。

彼はぢつと一所に据えた眼を、間遠にしばたゝきながら、時々唇を嘗めてゐたが、やがてまた話し出した。

七

『私は際限の知れない深い闇の中をうろつきながら、ほんとうに聲に出して、妻の名を呼びました。けれど、どんなに呼んだ所で、いまは立派に親分のものとなつてゐて、その居所さへ私には解つてゐないのです。妻と表向きの夫婦になつたのは、當時から四年程前ですが、實際に一緒になつたは今から丁度十年前、私が二十四のときです。先生と喧嘩をして、中學を中途で止してから、田舍へ歸つて小學校の代用をしてゐる頃に知り合つた女です。その時もさまざまの噂のあつた女で、私にも可なり厭な所のある女でしたが、その厭な所に妙に惹きつけられて、たうとう二人でそこを飛び出し、海一つ渡つて函館へ行きました。

そこで私は、驛夫を一年あまり、郵便配達を半年ほど、次に牛乳配達を三月ほどといふ風に職を變へて行くうちに、鐵道線路の雪掻き人夫となつたのが手始めで、たうとうその日稼ぎの勞働者になつてしまひました。頭ではいつも理想

へ理想へと動いてゐて、その動く度に、實際では、下層へ下層へと陷ちて行きました。

私に取つては、社會のさまざまの階級と階級との間の仕切りには、下にのみ開く安全瓣があつただけです。一旦その安全瓣を通つて下へ降りて行くと、いかに頭では上へ上へと狙つても、その瓣は、金輪際上へは開いてくれませんでした。そこに私はいつも堪らない焦燥と憤怒を覺えました。そこで私は、私の力の及ぶ限り闘ひましたが、結局得るものは、困憊と失望とだけでした。さうして私は、容易に開く下への瓣を通れるだけ通つて、最後に底まで陷ちてしまつたのです。

私はひどい脚氣を病み出しました。そして直ぐにその日の生活に困りました。で、家財道具を賣り拂つて再び郷里へかへりました。それは郷里を出てから六年目でした。家には老父が一人、役場の小使などをして暮してゐました。私は、父の世話を受け、妻にも働かせて半年ほど脚氣を養生してゐました。その間に、寺の和尚で、私が中學をよした當座二年ほど、私に、論語や、孟子や、「歎異抄」のところどころを講義してくれた老人が、妻の里と、頑固な私の親爺との仲に入つて骨を折つてくれて、妻と私を公然の夫婦にしてくれました。

その年の暮、私は新規蒔直しのつもりで、先づ單身で始めての東京へ出て來たのです。はつきりした目的はありませんでしたが、東京なら少しは人間らしい生活が出來ると思つたのでした。來て見ると、身寄り知人はなし、そのうちに僅かばかりの持ち金は消えてしまひ、つひには、やつぱり元の職業を頼りの仕事につく外はなかつたのです。さうしてあの親分と知り合つたのです。

それから、さつき申しましたやうに、親分の世話で割合、割のいゝ仕事にありつくことが出來、そのお陰で、妻も呼び寄せ、家も持つことが出來ました。親分としよつちう、往き來してゐたのはその頃です。しかし、二年あまりして、

さういふ生活にも堪へ切れなくなりました。東京といふ都會は、私に取つてはまるで、化膿したおできのやうなものだとこの時思ひました。一寸動いても痛いんです。自分も人も痛いんです。そして直ぐに毆り合ひを始めるのです、私は、このまゝで行つたら、ぺちやぺちやに叩き潰されてしまひさうな氣がして來ました。私は恐ろしくなりました。ここで私は、またも理想にすがつて、ある雜誌の記事から、北海道十勝平原の大百姓になることを夢見て、獨りで出かけて行つたのです。旅費は、妻を本所のある工場に入れて造りました。

小樽まで行つて先が塞がりました。つまり底に突き當つたのです。そしてさつきお話したやうな破目に陷り、果ては、ひどい脚氣と神經衰弱とを土産にし、警察の世話にまでなつて、再び東京の地に戻つて來たのです。

戻つて來て驚きました。せめてもの頼りにして來た妻は、入つてゐる筈の工場にゐないぢやありませんか。だんだん探索して見ると意外にも親分といつしよになつてゐるのです。始めはとても本氣にできませんでした。忠太に伺つていきさつを聞いて、始めてさうかと思ひました。さう思つて、これはもうどうすることも出來ないことだと思ひました。妻を取り戻すことは出來ないといふ氣がしたのです。妻の性質、親分の氣象といふものを別々に離して考へて見ると、何も六ヶ敷い問題ではないやうに思はれましたが、そこへ私といふ人間の氣質も加へて、その事件を中心として、三人の取り組みを考へて見ると、私がやつぱり除け者になりました。けれど私は、一度は三人が取組んで見なければならないとは思ひました。

それは十月の中頃、犯罪の夜からさつと二週間ほど前の夜のことです。秋雨のじめじめ降る寒い陰氣な夜でした。私は傘もなしに木賃宿を出ました。まつすぐ親分のうちへ行くつもりで出ましたが、歩いてゐるうちに堪らなく惨めな氣持になつて、その勇氣が挫けてしまひました。

幾月か洗濯したことのない油で光つたメリヤスのシャツと股引に、印絆天を一枚ひつかけたきり、歯のすり切れてしまつた下駄、蓬々の頭には帽子もない私の姿は、どう見ても立ん坊そのまゝでした。私はその夜は今更ながらさういふ自分の姿を見廻して、一層惨めな心になりました。

私は、懐手をし、首をすくめ、前こゞみに、何處へといふあてもなく只明るい方へ明るい方へと、店の軒下傳ひに歩いて行きました。さうして歩いてゐるうちに、南千住の停車場の前へ出ました。私は待合室の中へのそのそ入つて行きました。

お腹もひどくすいてゐました。そしてもう何を考へる力もなくなつてゐました。私は濡れた襤褸布を棄てるかのやうに、自分の身體を腰掛の隅に置きました。このまゝ死んでしまへばいゝ、ときどきそんな考へが、泥沼の底から沼氣が浮き出すやうに浮びました。

眼の前を、昇降客が右往左往してゐるのに對して、心の何處かでは氣が引けてゐるのに、私の眼には、それ等の人達が影人形のやうに何の意味もなく映るのを感ずるだけでした。私の眼は、死んだ魚の眼のやうに、何の潤ひもなく開いたきりでゐるやうな氣がしてなりませんでした。

「妻を取り戻した所で仕様がないよ」

やがてそんなことがふと考へられました。

「そんならどうすればいゝのだ」

さう自問して見て、私はまたも堪らない惨めさを感じさせられました。私は、頭から肩から腰までぐつしより濡れた身體をときどき蠢かしては、どろんとした眼を間遠にしばたゝいてゐました。つい半年前に、あれほどの希望を持ちな

から北海道へ向つて同じこの停車場から發つた自分であつたのに！とそんなことを思ひ出して見ても、心は少しも動きませんでした。

やがてまた、このまゝ死んでしまへ、といふ氣持が、黒い幕のやうに音もなく心の前に下りて來て、私は[illegible]の[illegible]にでもかけられたやうな氣持になりました。

さうして小一時間ほどたつたとき、私は一人の巡査に、その最後の休息所を追ひ立てられました。

それからまた一時間ばかりの後、私は、その三日前につき止めて置いた親分の家の前に立つてゐたのです。』

八

『「今晩は…………」

さう聲をかけると、それまでしてゐた内の話聲がはつたり止みました。

「こんばん…………こんばんは……」

「…………だれだえ？」

それは親分の聲でした。やがて障子を開ける音、土間の下駄を突つかける氣配、つゞいて掛金をはずす音と同時にゴトリと雨戸が開きました。

私は思はず二足ほど退りました。軒燈もない暗い路次なので、お互の顏をはつきり見ることが出來ません。内から溢れる帯ほどの巾の光りの中に、雨の足が白く光つて見えました。

『「だれだね？」』

親分は首だけ出してまたさう言ひました。

「…………わしです、篠原です」

「おや……」と親分は、自分の耳を疑ふやうに言つて、私の方を覗き込むやうにしてゐたが、

「松つアんかね？」と訊き直しました。

「えゝ、さうですよ」

すると親分は、何とも言はずにうちへ引つ込みました。一二分、ひそひそ話がもれてゐました。何かに蹴つまづく音がしたりして、それから食器を片つける音がすると、親分はまた出て來ました。

「まア、おはいり」

親分は一枚戸を開け切りました。私の姿は、うちから射す洋燈の光をまともに受けました。私は慌てゝ顔を伏せました。

私が土間に立つたとき、親分は長火鉢の向うの座に戻つてゐました。

「足が泥だらけですから」

「そいつアいけねえ」

親分は臺所へ立つて、バケツに水を汲んで持つて來てくれました。

足を洗つて上つたが、濡れ鼠の私は、その場に立つてゐるより外はありませんでした。親分は、變な腰つきで立つてゐる私の裾の方を、一寸の間横目で見てゐましたが、急に立ち上つて、うしろの壁にかけてある自分の普段着を外して私の方へ投げました。

「氣持が悪いだらうが、着換へなせい」

私は印絆天と股引だけを脱いで、親分の汗臭い縞の袷を着ました。シヤツも脱ぎたかつたのですが、さうまでは出來ませんでした。

部屋は六疊一間きりでしたが、小綺麗に片づいてゐました。障子一重の臺所に人の氣配のするのが女だらうと思つてゐました

「いつ、こつちへ歸つて來たんだね？」

親分は私に坐布團をすゝめてから、さう訊きました。

「十日ばかり前です」

「さうかえ、………やつぱし、あつちはうまく行かなかつたのかね？」

「…………えゝ」

「そいつア氣の毒だつたね。行つたきり何とも言つてよこさねえから、心配はしてゐたんだよ。やつぱし、何處へ行つたつて、うまいことアねえんだな」

「えゝ、それに、病氣にかゝつたものですから」

「病氣つて………？」

「脚氣です、ずゐぶんひどい目に會ひました」

「さうかね、そして、もういゝのかえ？」

「まだよくないんです。一時よくなつたのですが、近頃またひどくなつて來てゐるんです」

「そいつア……養生はしてゐるんかえ？」

「それどころぢやないんです」

「困つたなア……」

會話はこんな風で、本問題、つまり妻のことにはいつまでも觸れて行きませんでした。私は苛々しながらもその問題に觸れて行くことを何となく恐れてもゐました。何でもなく歸つてしまはうかとも思ひました。

親分は、暖かさうな褞袍の中に圓い背面を埋めて、ときどき臺所の方に氣を配りながら、私の機嫌を取るやうな言ひ方をしたり、悄々しさうな表情をしたり、太つ腹を見せるやうな態度をしたりしました。そのうちに私は、來た時から感じてゐる、物乞ひをしてゐるやうな自分の慘めな氣持を持てあまして來たので、たうとう自分から切り出しました。

「實は家内が、親分のお世話になつてゐると聞いたもんで」

そこまで言ふと、親分は、

「あゝ、あゝ、あゝ、」と私の言ふことを打ち消すやうに大きな聲を出しました。「そのことでとうから君んとこへ手紙を出さう出さうと思つてたんだが、君の居所ア解らねえんでそれで困つてたんだよ。それに、君がこつちへ歸つてゐるとア夢にも知らなかつたからなア」

さういふ親分の言ひ方に私は少し反感を持ちました。私は默つてあぐらをかきました。痺れてゐる脚がしびれても來たので。

親分は、變になつて行く私の氣持を壓しつけるやうに、太い煙管で宙を掻き廻しながら、しやべりつゞけるのです。

「あん時、ちつとはかしだが、君もひつかけ放しで出かけちまつたんだらう。あとで俺も困つてね、そのうち、おたき

さんが、本所の方の工場に入つてると聞き込んだもんで、まアその相談に行つて見たんだよ。すると、おたきさんは、慣れない仕事にこき使はれたためか、身體を惡くしちやつて、汚ない女工部屋に寢てる始末ぢやねえか。可哀相になつちまつてね、こつちの話はあとにして、そこで、工場の借金や、いろんな不義理な金やも俺が拂つてやつて、まアこゝへ連れて來た譯サ。連れて來てからも、一ト月近く醫者通ひをしたもので、けちなやうだが、俺も有りもしねえ溜め金をはたいちまつたんだ。そのうちおたきさんの方から、厭でなかつたら當分一緒に置いてくれろ、御恩返しに何でもするからなどと言ひ出したものでね、こつちも女手には不自由してゐた所だし、それぢやしばらくお世話をして貰はうかといふことになつてね、それからずつとゐるわけサ。しかしおたきさんも、何と言つても君といふれつきとした亭主を持つてゐる身なんだからね、その方を何とか話し合ひをつけなきア、俺だつて落ちつけねえやね、そこで、山根の親分に賴んで、一つはなしをつけて貰はうと思つてたんだが、何しろ肝心の君の行衞が皆目わからねえんだらう、どうすることも出來なかつたんだよ」

嘘ともほんとうともつかない親分のさういふ言ひ分を聞いてゐるうちに、反感はますますつのつて來ました。女の奴、臺所で、どんな面をしてゐやがるのだらうと思ふと、いきなり障子を突き倒してやりたいやうな衝動に驅られました。

親分はまたしばらく同じやうなことを言つてゐましたが、私は何を言ふのも厭になつていつまでも默つてゐました。そして白い眼をしてときどき部屋のうちを見廻したりしました。親分は私の顏色を熱心に覗つてゐましたが、ふと立ち上つて、臺所へ入つて行きました。そこで女に何か言ひつけてゐました。女はすぐ臺所から外へ出て行きました。

女を逃がしたのだなと私は思ひました。で親分が元の坐へ歸るや、その顏を鋭どく見詰めて何かを言はうとしまし

た。すると親分は、急にくだけた、親しみのある顔付となり、眼尻の所に小皺さへ寄せて、下手に出てから言ふの
す。

「松つアん、まアそんなに六ケ敷い顔をせずに、平つたく話しておくれよ。そこで物は相談だが、どうだらう、おたきさんを當分俺んとこへ置いちや。その代り、と言つちや何だが、當分の君の宿料や、脚氣の養生料位は出すよ。ほんとの所、俺もそれ位なことはして置かなきア寢醒めが悪いからな」そこで親分はわざとらしくがらがら笑つて、

「そのうちに、君の身體も元通りになり、家も嫁も持てるやうになつたら、またおたきさんを連れて行くなり、新らしい若い細君を貰ふなり、何とでも好きなやうにするサ、しかし君も今んところ、さう言つちや何だが、嫁の、家のといふ騒ぎぢやないんだらう。二三日のうちに、少しまとめた金を持つて行くから、今夜のとこは穏かに許してくんな、頼むよ」

私はやつぱり黙つてゐました。

「厭かえ?」さう訊き返した親分の聲にはとげがありました。私は思はず顔をあげて、

「……まとまつた金つて、いくらなんです?」と訊きました。

私は、金に目がくれたのではなかつたのですが、突つ掛つて行く切つかけに、そんなことを言つてしまつたのです。

「そいつも相談だが、さし當り、どうだらう、これでは?」と親分は三本の指を私の眼の前に出しました。

「三兩かね?」

「冗談ぢやねえ、犬や猫を引き取るのぢやあるめえし、と言つて三百兩とまでは行かねえがね」

私は、そのふざけた言ひ方に對して、もう少しで怒鳴らうとしました。

「どうだね、我慢ができねえかね？」

「…………」

「おや、これまで奮發するよ」

親分は今度は片手を擴げました。

「…………」

「それ以上は無理だよ、その代り、すぐにやるよ、あす、あさつてと、あさつての晩までにや間違えなく屆けるよ、なアいゝだらう、」

その頃、私のやうな暮し方をしてゐる者には、月に五圓もあれば結構生きてゐられたのです。そして實を言へば、私はその夜木賃宿へ泊れるほどの金も持つてゐなかつたのです。

私はその夜、決してそんな金で妻を賣るつもりはなかつたのですが、金そのものから來る誘惑がだんだんと私の生一本な氣持を濁して行きました。私はそれを情なく思ひながらも、また親分に對する反感は相變らず持つてゐながらも、いつか無言のうちに、親分の申し出をそのまゝ承諾したやうな形になつてしまつたのです。

そのうちに女が歸つて來て、やがて親分は小さな食卓の上に酒の用意をして出しました。その時もまだ臺所にぐつぐつしてゐた女が、親分に三四度呼び立てられて、つひに私の前に現はれました。

大きな丸髷、眞白に塗つた顏、それらは、一寸の間、これが自分の妻だつた女かと疑はせるほどに變つてゐました。子こそ產まなかつたが、長い間の貧乏、苦勞にやつれて、妻は、私が北海道へ發つ前など、ほんとうに汚ない女になつてゐたのですから。

女は默つて頭を下げたきり、髷で顏を隱してしまひました。私も默つて輕く腰を曲げたきり、女の方を見ないやうにしてゐました。

「おたきさん、もう話はついちまつたんだから、遠慮なんざ無用だ。一つうんと御馳走をしておくれ」

親分はさう言つた口を私の方へ向けて、

「なア松つアん、今夜は一つ久しぶりで、うんと飮んでくんな。改めてささうよ」と盃を出しました。

私は默つてそれを受けました。その手が細かく顫へて酒が膝の上にこぼれました。

女はまたすぐ臺所へ立つて行きました。女の綺麗な素足が私の胸を矮にはツとさせました。

胸の鼓動がいつの間にか烈しくなつてゐました。

「さうさう、松つアんにさつぱりした着物を出してやんな。さつき、お前さんがゐなかつたもんで、あんなので間に合はしといたが」

親分からさう言はれると、女は臺所から出て來て、私の背後の戸棚をあけて、ごそごそやつてゐたが、袷、羽織に、襦袢まで添へて出しました。私は、上つた時から濡れたシヤツが氣持惡くて困つてゐた所ですから、すぐに立つてそれに着換へようとしました。女がうしろから掛けてくれました。肩の所で、女の指先と私の指先とが偶然觸れ合つたとき、私は身體中がピリツと痺れたやうに感じて慌てゝ手を引つ込めました。

「それで、髮床へ行つて來りや、やつぱり元の松つアんだね、アツハヽヽヽ」

私が再び座につくと　親分はさう言つて、腹の中まで見せるとでもいふやうに、わざと大きな口を開いて笑ひ出しました。』

九

「すき腹へ飲んだので、四五本立つた頃には、私は相當に醉ひました　病氣には惡いと知つてましたが、構はず飲みました。

豚がぐつぐつ煮えてゐましたが、それには殆んど箸をつけませんでした。そこへ來るまでは歩けないほどに空腹を感じてゐたのに、何故か食慾がないのです。

女は勿論、親分も、私が北海道でどんな事をして來たか、どうして再び舞ひ戻つて來たかに就てはまるで訊きませんでした。もちろん私からは一言も言ひ出しませんでした。

親分は座の白けることを恐れるかのやうに、あたりさわりの無いことを休みなしに饒舌つてゐましたが　私は親分のさす酒を默つて受けてゐるばかりでした。

そのうちに私は、座つてもゐられないほど醉つて來ました　ときどき頭がグラグラとゆれて倒れさうになりました。恐いほど血管の鼓動が耳にひゞきました。その時はもう平氣な顏をして、私の前に座つてゐる女の顏を、私は幾度か盗入に覗き込みましたが、眞白い顏が、部屋いつぱいに擴がつたり、馬鹿に遠く小さく見えたり、三つにも四つにも映つたりして、元の妻のおもかげを見つけ出すことはまるで出來ませんでした。

それから後のことは一一覺えて居りません　一時近くなつて私はそこを出ました。出るとき、今晩の宿料をと言つて五圓札一枚握らせられました。高下駄もはき、傘もさして出ました、着物も親分のを着たまゝです。

一二町も歩いてからでせうか、私は再び親分のうちへ戻つて行きました。曲り角を間違へて大分その邊をうろついて

からやうやう親分の家の前に立ちました

「泊めろ、俺を泊めろ」

私は雨戸を叩いてそんなことを言つたのです。

女が寢卷に赤いだて卷を卷いたまゝ出て來ました。それを見ると、私は急にむかむかつとして來て、つぼめて持つてゐた傘をふり上げ、女をめがけて叩き下しました。それが外れて、玄關の障子にバタンと當りました 棧が二三本折れたやうな音がしました。

「何をしやがるんだ」

親分の聲がしたかと思ふと、親分も寢卷一つで、女の前へ立ち塞がりました。

その瞬間、私は身體中の筋肉がギユツとしまるやうに感じました。同時に非常な殘酷な氣持が胸一ぱいに擴がりました。

私は片足を敷居の上にあげて、また傘をふりあげました。それはすぐ親分に奪ひ取られました。私は今度は下駄持をづてふりあげました。

「畜生、叩き殺すぞ、殺さずに置くもんか」

私はそんなことを何遍も叫んだのを覺えてゐます。

しかし私は他愛もなく親分に組み伏せられました。

それからまたどの位の後かわかりませんが、私は、いつの間にか着物に着がへた女に手を引かれて外へ出ました。女は傘をさしかけてくれました。

私は出る前に、さつき貰つた五圓札を目茶苦茶に引き裂いて親分の前に叩きつけました—

私は歩きながら女の手を握つて泣いたり、憤つたりしました。

「今日は勘忍してやる。しかし、いつか思ひを晴してやるぞ。貴様等がくつついただけでも、俺の男はつぶれちやたんだ、それに何のこつた、金で買はうとア何のこつた。」

そんなことを四邊構はず叫びました。

「もつと靜かにして頂戴よ」と女は泣くやうな聲でそれを繰り返しました。

「うるさい。俺は貴樣を人間とは思つてないんだ。しかし　さういふけだもの奴に赤恥をかかせられたかと思ふと、俺は生きちやゐられないんだ、俺は、この俺のことも叩き殺してやる。しかし、その前に、貴樣等のことを叩き殺さずには置かない」

女はいつか元の女房らしい口調になつて「おとなしくして頂戴」を繰り返してゐました。それから、女は熱心になつてこんなことをいふのです。

「あなたはまだ私の事情をよく知らないで怒つてばかりゐるのですもの。これにはこみ入つた譯があるのですよ。それは私がぢかにあなたに話します。二三日のうちに、あなたに合ひに行きますから、きつと行きますから、そして私はあなたの好きなやうになりますから、だから今夜だけはおとなしく歸つて頂戴よ、ね、でないと事が面倒になるばかりだから」

私は幾度か、泥の中に轉びさうになりました。女はその度に、私の身體を吊し上げるやうにして支へてくれました。さういふことが激した私の心を少しづゝなだめて行きました。

私は、女が可哀相になつて來ました。一方では、親分がよく女を私につけて出したものだと思ふと、親分も弱い男だなど思はれて來ました。さつき親分の前へ、札を引き裂いて叩きつけた時　親分はおかしいほどあやまつたり機嫌を取つたりしたことなどが、ひよいと思ひ出されました。

私は女を歸してやる氣になりました。女はきつと自分の所へ再び歸つて來るといふ自信を持つことが出來たからです。

ある大通りへ出る暗い路次の所で女は歸つて行きました。歸るとき　女は「内緒」と言つて十圓札一枚私の手に握らせました。

「それぢや、きつと來るだらう、きつとだらうな」

私は最後にさう念を押しました。

「大丈夫よ、きつとよ」

女は息張つた聲でさう言ひました。

その十年前、郷里で逢引してゐた頃の氣持がふと湧いて來ました。

しかし私は、それから五分と歩かないうちに女を歸してしまつたことを悔い始めました。つひ今、あれほど把握したばかりの「自信」がすつかり消え失せてゐるのです。

「うまくやられてゐるぞ」と思ふと、またそのまゝでは歸れない氣持になりました。けれど、非常な昂奮、憤怒の後の疲勞は只々、休息を欲するばかりでした。私はぬかるみの中へでも寢ころびたいやうな疲れを持て餘しながら、よろよろと宿の方へ歩いて行きました。」

十

『待つてゐた女は來ずに、それから二日目の夜約束通り親分から金が屆きました。その金は忠太が持つて來てくれたのです。金額は約束の半分しかありませんでした。あと四五日待てといふ口傳でしたが、それはたうとう貰はずにしまひました。最初に申し出した額にも缺けてゐる所から見ると、それは忠太が一人ぎめの駄賃に取つたのかも知れません。

「女はどうしてゐる？」

その時私はだしぬけにさう訊きました。

「女つて、だれだえ？」

忠太は空とぼけた言ひ方をします。それで私は口を噤みました。

翌日、私は、親分から來た金で、木賃宿よりは少し増な近くの下宿屋へ越しました。女のことは思ひ切れませんでしたが、それを思ふことを無理に堪へてゐました。また一方には、何年ぶりかで、金に不自由のない生活に入ることが出來たせいか、一人でもさう寂しいとも感じませんでした。夜は寄席へ入つたり、活動を覗いたり、朝は寢放題寢て、のう／＼と十日ほど暮してしまひました。

その頃です、例の筋の活動を見ましたのは。實際あの活動を見たとき、私は眼が覺めたやうになつて、自分の周圍を見廻はしました。

その次の夜、私は少し醉つて再び親分の家へでかけたのです。私は活動の筋と同じやうな經路を辿るつもりで出かけたのでは勿論ありません。たゞ様子を見て來よう、それだけでした。いや、それほどもはつきりした目的はありません

でした。たゞ行つて見なければ氣が濟まない氣持からでした

行つて見ると、親分は何處かへ引き越してゐるのです。近所で訊いて見ると、向島の方とばかりではつきりしません。

「親分の奴、やつぱり俺を警戒してゐるのだな」

そのとき私はふとさう思つたのです。さう思ふと、それに相應した氣持が出て來て、その時から親分に對する私の心は、變に鋭どくなりました。

その心は、意識すればするほど深くなつて行きました。さうして私は、その心をだん／＼と持てあますやうになりました。

私は、その心を散らす爲めに、酒を飲み出しました。醉つてはよく遊廓へ行きました。それから例の馬肉屋へ上つては、たゞ子を連れ出しました。その間には忠太も二三度來て飲んで行きました。さうして、そんなことをしてゐるうちに、金はきれいに無くなつてしまつたのです。

私はまた元の木賃宿へ歸らなければなりませんでした。脚氣も少しも直つてはゐませんでしたが遊んではゐられなくなりました。で、忠太に頼んで仕事を見つけて貰ひました。その仕事は電車線路工事でした。

その日の朝、仕事場へ行つて見ると、親分も來てゐるのです。こいつはいけないと思ひました。私はその日半月ぶりで始めて親分の顏を見たのです。そしてそれが最初で最後の日となつたのです。幾分か薄らいでゐた親分に對する氣持は、忽ち元通りに胸一杯に擴がりました。

親分は私の所へ近づいて來て、私の病氣のことなどを訊いたりして、こだわりの無い笑ひ方をしました。私もさう

い笑ひ方をしようとして、その顏が變に歪んだのを感じました。仕事にかゝると、忠太は私の傍へは寄りつきませんでした。

正午過ぎから、腫れた脚がひどくしびれ出し、頭痛もし、めまひもして、堪らなく憂鬱になりました。それが一つかぶさるやうに襲つて來ると、私はだしぬけに叫び出したくなつたりしました。持つた薪割で誰かの腦天を叩きのめしたくさへなりました。さうでもしなければ防ぎ切れないやうな憂鬱なのです。

「いゝ加減にして切り上げなけりやいけない、そして勞働をするのはまだはやい」

私はさう思つて、仕事が片つくと匆々、宿へ歸る仕度をしたのです。するとそこへ忠太の奴が來て、私の鼻つ先へ小指を出して、「親分のレコが待つてゐるからな」と言ひやがつたのです。私はグツと癪に觸りました。いかに女のことが忘れ切れないと言へ、私は親分の留守を狙つて女の所へ行かうなどとは考へてゐませんでした。それに、女の居所も知つてゐなかつたのですから。

けれど忠太からさう言はれると、私はすぐと、それは親分の邪推を取りついだもののやうに思はずにはゐられなかつたのです。そしてそのことを氣にし出すと、親分に對する感情はますます尖つて行くのを感じてゐながら、自分一人先に歸つてしまふ譯には行かなくなつたのでした。

馬肉屋へ上つて、始めて親分と眞向ひに坐つたとき、頭の中が變に森となつたのを感じました。それから一言物を言ふ毎に、自分の顏が妙に歪むのをどうすることも出來ませんでした。

やがて、さつきお話したやうに、たま子のことから、先づ忠太と爭ひ出し、次には親分と直接にいがみ合ひ出した時、今夜は穩やかには濟みさうもないやうな豫感がしてなりませんでした。たとへ親分の方では穩やかに濟さうとして

も、自分の心の中にある何物かゞそれでは承知しないだらうといふやうな氣がしてなりませんでした。
それからのいきさつは、さつき申し上げた通りです。』

十一

『女中部屋から路次へ抛り出されたとき、金挺を持つて、二階へ上らうとした時の私が恐ろしく殺氣立つてゐたことは、今までのお話でよくお解りのことゝ思ひます。

それから、肉切り男に追つ拂はれて、廣つぱの闇の中へ逃ひ込み、恐ろしい空虚感に襲はれた末に、突然妻の名を呼んだ私の氣持もお解り下さることゝ思ひます。

妻の名を呼んだ後に考へたことは、一體自分はどうしてこんな破目に陷つてしまつたのだらうどいふ今更ながらの自問でした。

冷たい風に吹かれるので、眼がちくちく痛んで涙が滲み出ます。私はそれを手の甲で拭いては、その自問を繰り返しました。その自問に答へるには、それまでの自分の生活の經路をふり返つて見るより外の方法はありませんが、頭はそれを憶ひ出す力が無くなつてゐるのです。たゞ、いま話したやうな事柄のとびとびが憶ひ浮べられるに過ぎませんでした。

さうして最後に殘つたものは、えたいの知れない黑い影でした。そしてその影は、自分の力では拂ひ除けることが出來ないもののやうに感じられてなりませんでした。考へて見ると、私は、その十年近くの間、その黑い影につき纏はれ通しであるやうに思はれました。その影がいつも身の背後にゐて、眼前にはどんなに光明を見ても、すぐにそれを眞黑

に蔽ひ隠して終ふ。さうして私はいつも、暗闇の中を無目的に歩いて來たものであるやうに思はれて來ました。

私はその影から逃れようとでもするかのやうに、腐つぱの闇の中をぐんぐん歩いて行きました。手には例の金梃があるのです。私はそれを持て餘してゐながら、捨てることを忘れてゐるのです。

腐つぱの中の道は何處まで行つても盡きません。それとも私は一所を堂々巡りしてゐたのか、どつちを向いても、灯一つ見えません。やがて際だつて冷たい風が、足の先から頭を抜けて吹き通つたやうに感じました。

私は頭へ上つて、無意識に金梃をふり廻しました。闇に向つて喰つてかゝるかのやうに。さうすると、私はまた急に殺氣立ちました。そして、この世のありとあらゆるものを、貝殻を碎くやうに叩き潰してやりたい衝動でわくわくして來ました。

さつき、肉屋で、思ふ存分金梃をふり廻せなかつたぢれつたさ、そればかりでなく、忠太にも、妻にも、親分にも、それからそれまでの生涯に接して來た凡てのものに對して、自分の思ふ存分のことをなし得ずに來たぢれつたさ、そればかりか、反つてあべこべに、相手から、どの相手からも、さつき肉切り男に手玉に取るやうに取り扱はれたやうに、自由にされ通して來た口惜しさが、その時一どきにグワンと頭にひゞいて來ました。尚ほその上に一方では、さつきから感じてゐる恐迫觀念――ぼんやりしてゐると、肉切り男に足元をかつ攫はれるやうな怖ろしさも感じてゐるので、それとこれとがごつちやになつて、實際私は、闇に向つて、力限り、幾度金梃をふり廻したか知れません。

そのうちに私は、堪らなく疲勞を感じ出しました。兩脚の筋肉が急に硬直したやうになつて、膝が曲りません。――一歩も歩けなくなりました。十年この方の勞働の疲勞が一どきに襲つて來たかのやうでした。これはまるで大きな岩石に乘りかゝられたかのやうでした。私は、泥の塊が崩れるやうに、ドサリとその場に倒れてしまひました。

黒いいくつもの影が、音もなく身の周圍をうろうろしてゐるやうに眼の網膜に映ります。それがいつの間にか一つの大きな黒い影に纒つて來ます、そしてそれは親分の姿に似てゐます。ハツと思ふ間に、その影は私の身體を上からぎゆつと壓へつけて來ます。私は力限り四肢をふん張つて起き上らうとします。

やがて私はがつたりとなつて地べたへひれ伏しました。力らしい力は全く拔け切つてしまつたのか、指一つ動かすことが出來ないのです。さうしてひれ伏しながら、只頭の中で、金挺を眞向にふりかざして、親分に似た影を叩き潰した時の快さを繰り返し繰り返し考へてゐました。』

『それからどの位の時間が過ぎたか解りません。私はだしぬけに、首の邊をつかまれてグイと引き起されました。見ると、さつきの親分に似た黒い影が眼の前に立つてゐます。私は金挺をふり上げるや一撃を喰はしました。氣持のいゝ手應へがありましたが、黒い影はそれと同時に消えてしまひました。

「黒い影――生涯の敵をやつつけたぞ」

そんなことを呆んやりした頭の中で思ひました。が、その影はすぐにまたのつこりと音も無く現はれて來さうな氣がしてなりません。さう思ふと私はそこに立つてゐるのが恐ろしくなりました。

私はまた歩き出しました。足元には長い草が絡みつきます。その草は進むに從つて深くなり、膝から腰、腰から胸となり、果ては身を沒してしまひました。歩きにくいのでたうとう金挺を棄てることに氣づきました。それから身輕になつて進んで行きましたが、草はますます深くなるばかりでした。しまひには匐ふやうにして進みましたが、それも困難になりました。そして私は、いつの間にか、その草の中へ腹ばつたまゝぐつすりと寢込んでしまひました。』

『次の朝眼を開いて見ると、私は河岸の叢の藪の中に寢てゐました。どうしてそんな所へ迷ひ込んで寢てゐたのか、それを思ひ出さうとしても、ずんと重い頭には凡てがぼんやり思ひ浮べられるだけです。

身體には熱がありました。脚ばかりでなく、顔までむくみ上つてゐました。その雙眼だけは、げつそりと凹んでしまつたやうな感じです。

ぐつぐつしてゐると脚氣衝心でやられやしないかといふ恐れに驅られ出しました。で眞直ぐに宿へ歸つて來ました。ひとつは、もし今日も仕事場へ出たら、今日こそは、親分と死に生きの爭ひをしやしないかといふ豫感が可なり強く感じられてならなかつたからです。

宿へ歸へると、飯も食はずにすぐに布團にくるまつて寢ました。日が暮れたのも知りません。次の朝、頭を擧げて見ると、やつぱりひどく重い。また寢つゞけました。實によく眠れました。

その日の夕方私は二人の刑事に踏み込まれて、寢床の中で捕はれたのです。

警察へ連れて行かれ、血のついた金挺を突きつけられて訊問されたとき、私は始めて人殺しの犯人だといふことを知りました。それから被害者は親分だと知つたとき、私は一時全身の血液が冷たくなつたのを感じました。

つゞいて順序を追つて訊問されてから、私が親分を殺した時は、廣つぱの道端へ寢た夜の眞夜中――二時と三時との間であることが解りました。黒い影に身を引き起されて、夢中で金挺の一撃を喰はしたとき、手應へのあつたのが、親分の腦天を打ち割つた證據でした。親分は一聲をも出し得ず、道端の溝の中へ轉げ込んでしまつたのです。』

これで彼は口を噤んだ。

僕は最後に訊いた。

「親分は、その夜、どうして君の寝てゐる所へ行つたのだらう？」

『親分は、その夜私がひどいことを叫んでゐなくなると、急に私を恐れ出し、そこで私と仲なをりの飲み直しをやるつもりで、私のあとを追つかけて來たらしいのです。それは、親分の屍體と一緒に、一升壜があつたことゝ、あとで證人の一人として法廷に呼び出されたたま子の申し立てとで、十分に察することが出來ました。』



微笑する未來

小川未明

この時、室の裡で、人がどんな空想に耽つてゐようと、また、勝手に、想像を描いてゐようと、外界の活動しつゝある現象には、少しの關係もあらう筈がなかつた。水の上には、船が、何か鐵材のやうなものを積んで來てゐた。河は、入り曲つて、街の狹い裏口のあたりまで、覗き込んでゐて、船の搖れるたびに、ひた／＼と小さな波を岸邊に打つてゐた。博品館の塔形をした、尖つた家根の頂きには、赤い旗がひら／＼と動いて、風の流れてゐる方へなびいてゐた。ちやうどその下の幅廣い往來には、自動車が疾走してゐる。幾日も雨が降らないので、乾いた地面からは、黄色な埃が上つて、小さな渦を日の下で卷いてゐるのであつた。

その性質上靜止するものは、誰にも氣兼する必要がなく靜止してゐる。また、動くべき筈のものは、この瞬間から、次の瞬間へと、必然の原則に從つて動いてゐる。そしてすべてはあるがまゝの自然其のものゝ姿たるに、他ならなかつた。

二階建の外側を青く塗つた、四角な家が、高い建物と建物の間に狹まつてゐたが、

小さな家は、たゞこれ一個のみではなくして、寧ろ大小の建物が入り混つてゐるので、このあたりの街の外觀は、て多角形な、複雜な曲折した線で構成されてゐる。この青い家の二階は、ある貿易會社の事務室になつてゐて、その業目錄は、毛、紙、油、ペンキなどといふ類で、どちらかといへば、際物的であつてまだ設立してから日が經たなかつた。二人の走り使ひをする給仕と、三人の外交員やら、事務員を兼る若い者と、それに、社長とが、大阪毎日、こゝへ顏を出すのであつた。

歪んでゐて、開閉のわるい南向きの硝子窓は、冬の間中はよく日が當つたが、だん〳〵日が北へ廻はつて、今では、西向きの窓の上端の方だけを、明るく帶のやうに彩るだけで、こちらの窓は、もはや日が當らなくなつた。もとより、西には高い家屋があつたから、日光が、全部其方の窓を照らすやうなことはなかつた。

南の窓際には、窓の方をうしろにして、机に向つてゐる、外交もすれば、事務も執る、武井は青い顏をして、何か空想に耽りながら、にた〳〵と笑つてゐた。その笑ひは、傍から見たゞけでも、何となく氣味の惡い笑ひであつた。眼をぢつと傷のついた、机の上の一點に落して、折々、白い齒を露くのである。何か机の上に、展げてあるのかといふに、何にも置いてあるのではなかつた。たゞ、彼は、漠然とそこに眼を向けて、奇怪な幻想の奧の奧を見ようとしてゐるのであつた。

自然があるがまゝに、靜止し、存在し、また活動することは、人間に關係がないばかりでなく、彼が、かうして恣まに、空想し、また、考へることに對して、外界の自然は、全く無關係であつた。

巷から起る雜音がきこえて來る。時折、鐵材の轉がる烈しい音が、あたりの調和を破つて、生物の神經を一場處へ捉へようとする。しかし彼は、この音までが、果して意識されたか否やも疑はしい程に、無關心に見られたのであつた。

振向いたら、汚れた硝子窓を透して、あちらに立つてゐる、幾本かの電信柱と、傾いてゐる波浮のやうな家根と、弛るんだ、眩ぶしさうな空と、たとへ鐵材を上げてゐる人夫や、その船の影は見えなくても、河岸の一端が、建物の隙間から見えるのであつたけれど、彼は、振向きもしなかつた。冬の時分に、使つた日避けの縞引の黄色な布は、半分裂けて、窓の上の方へまくしあがつたまゝになつてゐる。そして、厳密に言へば、この青い壁板だつて、外の風や塵や、雨に晒らされたゝめに、やはり汚れてゐるので、決して、冴えた青い色といふことはできなかつた。

彼は、にた〳〵と笑ひをつゞけてゐた。たとへ唐突でも、この街の中を歩るきまはつたら、活動寫眞館の前に掲げられてある、繪看板で、その中のどれか一つに、よくこの男の顔に似た冷血漢があつて、何か心の中で、たくらむ時に、かうして、にた〳〵とした笑ひを洩らしてゐる光景があるのを、見られるやうな氣がした。

突然あちらの街角のあたりで、自動車がパンクした音がしたのである。ピストルで、何者か、狙撃をしたやうに、しかし、それ程、强力のある音でもなかつたが、何となく、ある不安を象徴するやうな、衝撃が心を掠めた。

彼にも、この音ばかりは、感じたらしかつた。それどころでなく、彼の心は、全く、その音の方に集注されてゐた。そして、さうあるのが當然であるといふやうに、また、これを喜ぶやうに、その爆破がもつと、もつと擴大して、全體が破裂する時があるやうに、自分は、たゞ、その時を待つてゐるやうに、そして、たとへ、四方から、あるたけのものが壞れ落ちてきて、身の上に降りかゝるとも決して、自分は、慌てないといふやうに、終局は、さうあるべきだといふことを、自分は、知りぬいてゐるとでもいふやうに……見られた。彼は、この皮肉のやうな、氣味の惡い笑ひをつゞけてゐた。

人間は、互に、相手の顔の表情で、その者が、心の中でどんなことを思つてゐるかを知らうとするものである。少な

くも、顔付で、大抵心の中は分るものとしてゐる。ちやうど、草や、木の莖や、葉や、枝の繁り具合を見て、その木の、地の中に隱された根が、凡そどれ程だけひろがつてゐるかが想像されると同じやうなものである。

「また、武井さんが、にた／＼默つて笑つてゐるぜ」と、給仕の中の大きな方の木島といふのが、やさしい、女のやうな顔付をした、それよりは、二つ三つ年下のやうやく十三位になつた、三田の脊中をつゝきながら言つた。

二人の少年は、そつと、武井の方を見てゐた。そして、彼が、人の覗つてゐるとは、氣付かずに、机の上に向つて、にた／＼と笑つてゐるのを、また、いつもの癖がはじまつたと言はぬばかりに、眺めてゐた。

あれがあの人の癖だといつて、面白いことにして眺めてゐるのは、二人の少年位のものであつた。かうして、一つの社の中にゐて、いつしよに仕事をしてゐる者には、たへず、お互の心の中を探り合ふのも不思議でない。

「あいつのことだらう、どうせ、よくないことを考へてゐるにきまつてゐる。何と言つて來ても、相手にしなければいゝのだ」

社長は、自分のいつも置場所の定まつてゐる椅子に腰をかけて、うしろへ凭れるやうに反身になりながら、あちらに居る、武井のかうした笑ひを見た時は、氣持を不快にされずにはゐられなかつた。そして、また、いつも自分に向つてこんなやうに、警告するのであつた。

その時は、社長は、なるたけ、彼と視線を出遇はして、話をするのを避けることにつとめてゐた。

外交專門の塚田には、相手の笑ひや、表情から、こちらが、その都度持たなければならぬ微細の感情とか、また言葉付などとかいふものについては、殆んど感知しない位、無頓着であつた。それ程、この男は、鈍重で、押しが強く、時に、執念深くもあつた。彼は、無口であつたが、自分が利益を得るためには、どこまでも主張し、また突き進んで行つ

た。社長は、早くから、この男の性格を見抜いてゐたものと見えて、外交を専門として、注文を求めるのに、責任額を超えたら以上は、歩合を與へることにしてゐる。

だから、相手の笑ひが、蓋し何を意味しようと、また表情が何うであらうと、畢竟、それが、自分の利害關係外のことだつたら、たとへ、その意味は、自分に分つてゐても、無頓着であるといふのが、この男の意識した、處世術らしくも思はれた。

他に、もう一人、小澤といふ青年がゐた。彼は、武井と机を並べてゐるだけに、最も、よく二人は、話をしたのである。しかし、この二人の性質は、全く反對であつたのである。武井が冷やかな眼で、物の底を割つて見ようとするのを、小澤は、厭なものは、見ないですむものなら、觸れずに、美しい方面ばかりを見ようとするのであつた。

「悪く解釋するのと、善く解釋するのと、何事に關してもそこには、二つの見方があるのさ。どちらをも、否定することはできないのだが……」

小澤は、よくかう言つたのである。そしてかゝる温情的な言葉は、常に、武井の嫌つたところであつた。武井は、其時は、いつもの皮肉な笑ひをもつて、默つて酬いるのであつた。これと、同じやうに、彼の笑ひを見ると、また小澤は、誰れよりもその笑ひの影に隱れた、冷酷な、悪魔的の思想を感じたのであつた。

武井が、かうした、悪魔的な思想の持主になつたのには、次のやうな經路がある。それを語らなければならない。

彼は、頭のいゝ青年であつた。學校を出るまでは、秀才として知られてゐた。もし、彼に、他の人達に較べて、缺けてゐるものがあるとしたら、それは、嘘を言つたり、阿諛したりして、妥協のできなかつたことである。

彼は、自分の行爲を顧みて、決して、疚ましいとは思はなかつた。獨身時代にもさうであつたが、結婚をして、家庭

を持つてからも、彼の思想や、生活の態度は變らなかつた。

年の若い、夫婦の者は、華かな日を送ることも出來なかつた。平常、不足勝な、貧しい日を送つてゐたのである。

「あなたのやうに、木で鼻をかむやうなことばかり言つてゐらしたのでは、いつまで經つたつて、私達は、樂な暮しは出來つこありませんわ。あなたのおつしやることは、それは、正しいけれど、世の中は、さう言つたばかりでも、通りませんわ」と、彼とは多少、性情の異なつてゐた、彼の妻はかう言つたのであつた。

彼は、この女を愛してゐないのではなかつた。また、その言葉に、道理がないと、思つたのでもなかつた。しかし、彼には、妄りに頭を下げたり、心にもないことをしやべることはできなかつた。また、先輩のところへ、憐れな樣子をして、頼みに行くといふことが、時には、死よりも辛いことがあつたからである。

「俺を攻めたつて仕方がない。さういふやうな人間に生れて來なかつたのだ」と、彼は、言つたのであつた。

若い女が、しなやかな、自分の體にしつくりと似合つた、派手やかな着物を被て歩るいてゐるのを見ると、彼は、それを美しいと思はないではなかつた。若い時分には、すべて、さうあるのがほんとうだとさへ思つた。そして、これと同時に、同じ年頃の自分の妻のことを考へずにはゐられなかつた。

彼は、彼女を、ほんとうに可哀さうだと思つた。なぜ、彼女は、幸福にめぐり遇はさなかつたか？しかし、二人の生活は、ます〳〵思ふやうにはならなかつた。

ある冬の寒い暮方のことであつた。早くから、外の往來には、人足が杜絶えた。そして、針金のやうに、鋭く、痛い、木枯が吹き募つてゐた。

急に、腹が痛み出した妻は、室の裡を轉がりながら、彼に向つて、苦痛を訴へた。

「どうしたんだ？どうして、急に、さう痛みだしたのだ？」

彼は、その痛みが、盲腸のあたりから起るのを知つた。脈々として、波動をなして、痛みは、後から、後からつゞいた。彼は、同時に、かうした不幸が、こんなに貧乏な者を、なぜ不意に、襲はなければならぬかを疑つた。

「うんと前こゞみになつて、痛むところを、しつかりと押へて我慢をするがいゝ。俺は、すぐに、醫者を呼んでくるから……」

彼は、別に、この附近に知つてゐる醫者がなかつた。往來の上で、暫時、それについて惑つたがどこでも構はないと思つて、すぐ通りに、面した醫者の玄關をはいつて、硝子戸を開けた。

電燈は、もう軒下にも、また、家々の内にも點つてゐた。往來は、乾き切つてゐたが、うす闇の底に白くつゞいて、かすかに、沙埃の、風の後を追つて、驅けて行く淡い影が見られたのである。

藥局室と思はれる處から、小さな窓を開けて書生が、顏だけをだして、こちらを睨むやうに見た。

「はあ……はじめての家ですか。先生は、いま、お留守ですが」と、素氣なく、その書生は斷つた。

彼は、氣狂ひのやうになつて、其の木枯の吹く、往來の上をあちら、こちらに驅けた。

「いま、直でなければならない！」

彼は、口の中で、かう言ひつゞけた。そして、彼女が、眞暗な室の裡で、腹を押へて轉げまはつてゐる、いぢらしい姿をあり〳〵と見たのであつた。

再たび、怖ろしいものを見るやうな、氣持で我が家へ近づいた。そして、こつそりと入口からはいつた。果して、彼女は、立ち上つて頭の上の電燈のスヰツチを捻る氣力もなく、暗がりのまゝで、室の片隅に坐つてゐた。

「どうだね？」と、彼は、氣使するやうにたづねた。

「やはり、痛みます」

彼女は、しかし、幾分、痛みに、馴れたやうな様子であつた。そして、一時のやうに、室の中を轉がりもせずに、ぢつとしてゐた。

彼は、電燈をつけて、室の内を明るくしながら、

「ぢきに、醫者が來るよ」と、さも、安心させるように言つた。

「あなた、俥屋にやる、お金もないぢやありませんか……」と、一方には、痛みを堪へるやうに、苦るしさうな、小さな聲で、彼女は言ふのであつた。

彼は、これに答へずに、默つてゐた。

「すぐ、歸つて來るから」

それから、しばらくして、彼は、かう言ひ殘して、家を出たのであつた。

學校時代の友達の一人が、さう遠く隔つてゐない處に住んでゐるので、常には、あまり行つたこともないが、この場合であるから、事情を打明けて、少しばかり金を借りて來ようと思つた。

やがて、彼は、其家の前に立つたのである。まだ新しい門には戸が閉つて、錠がかゝつてゐた。軒燈の光りが、松の木目の分る程、風が吹く中を空しく照らしてゐるばかりだつた。

結婚をしてから、幾年にもならない、まだ子供のなかつた友達は、二人連れで、どこかへ散歩に出かけたものと思はれた。友達の現在が幸福であるのに……と、武井は、風の中に立つて、不安と恐怖に戰いてゐる自分の樣子が顧みら

れたのである。

運命は、どこまでも、自分には辛く當るのかと、彼は、これから、何うしたらいゝだらうと思つて、しばらく垣根の際に佇みながら思案に暮れてゐた。

門の内側から、一本の大きな枇杷の木らしいのが葉の繁つた、枝を空に擴げてゐた。この常盤木の黒い葉は、雲切れのした、星の流れさうな、夜の空に、一層濃い影を造つて、はた〳〵と搖れつゝあつた。

彼は、ぢつと、その黒い葉が、生きて感覺あるものゝやうに、觸れ合つたり、虚空を叩いたりしてゐるのを、氣をとめて見てゐると、その隙間から、遠い空の星影が、たちまち見えたり、隠れたりするのであつた。彼は、生活の心配さへなかつたら、こんなやうな、何人も、氣の付かない、また、思ひも寄らないところにも、詩があり、お伽噺があるのを、發見して、それを獨りで心から樂しむこともできるであらうと思つた。

この時、あちらの路次を曲つて、こちらに近づいて來る、話聲を聞いた。彼は、ちようど臆病な獸物が、人間の聲を聞くと、本能的に逃げ隠れするやうに、軒燈の光りの全くとゞかない暗い物蔭の處へ身を退いたのであつた。

話しながら來る、その聲によつて、一人は、明るい感じのする若い女で、一人は、耳に聞き覺のある友達の聲であることが分つた。友達夫婦が、歸つて來たのだ。彼は、ぢつとして、身動きせずに、其方を凝視してゐた。女は、手に、何か量のある、紙に包んだ、買物を抱いてゐた。やがて、暗がりの裡で、鍵をはづす冷たい、金屬のかち合つた音がしたのであつた。

二人が、門の内にはいつて、また戸を閉めてしまふと、彼は、はじめて輕い安堵に近い感じを覺えた。そして、彼の胸には、たゞ何といふことなしに、烈しい反感が漲つたのであつた。

「死んでも、憐れみを受けるものか！」

彼は、かう心で言つた。

女が、黒い毛革の襟卷をしてゐたと、暗がりで、よく見えないのに、或は錯覺だつたかも知れないが、彼は、そんなやうな氣がして一層反感をそゝつた。そして、こゝへやつて來た、目的などは、全く忘れたやうに、この家の前を素通りしてしまつた。

個人主義的な思想から脫し切れなかつた彼は、運命のまゝに境遇を靜觀するより仕方がなかつた。自然の不公平は獨り、人間に於てばかりでない、他のいろ／＼な植物や、動物にあつても同じい事實を見るのである。どれ程、偶然な事件から、ある者は、苦るしみ、不幸であり、また死んで行くことか。それを、誰に向つて、訴ふることもなく、人間以外は、すべて默々として、運命のまゝに忍從してゐる。

自然力に對して、獨り、人間だけがこれを防衛し、また抵抗することを知つてゐる。しかし、それは、絕對に有効だらうか。また、それが出來ないやうな境遇にあるものは、やはり、運命に屈從するより他に途がないと、彼は、考へたのであつた。

「どうせ、俺達は、貧乏なのだ。どうすることもできやしない」

彼は、かう思つた時、ある獸物は、生活を享樂するのに、また、ある植物は、日光に照されて花を咲くのに、ある獸物は、殺され、ある植物は、切られなければならぬ悲慘な光景を、同時に眼に描くことによつて、自分達のことをも、あきらめてゐるのであつた。

貧乏と、病氣に、惱んでゐる妻に向つて、「できないことは、仕方がないぢやないか。廣い世間に、誰だつて、自分

から好きで苦るしむものはない、みんな、できないからのことだ」と、言つた。

病苦のために、窶れて、青い顔をした、妻は、折々恍惚として、はてしもない空を仰いで、默つて、涙ぐんでゐるやうなことがあつた。彼女の病氣は、腎臓結核らしかつた。

毎日、病妻の體を見守つてゐるうちに、彼は、遂に、かうした思想を抱くに、至つた。

「長かれ、短かれ、何人も死滅するのだ。たゞ、それは時間の問題だけでないか。さう考へれば、悲しむにも足らない譯だ」

かう、思つたのも、畢竟、何することもできないからの、絶望の餘りに他ならなかつた。彼は、かうした、時に、冷かな心になつて、落付いた批評的の眼付で、日にまし、窶れて行く彼女を見たのであつた。すると、最も、近い處に居る筈の人間が、最も、彼から、遠いところに居る人間のやうにすら見られたのであつた。

「あなたは、ほんたうに、冷かな方ね。もうそんなに、長いこと家に、生きてゐさせんよ。明日にだつて、死ぬか分らないのに、妾をば、可哀さうとは、思つて下さらないの？」

彼女は、かう言つて、恨めしさうに、涙ぐんで、汚れた袖口で、溢れ出る涙を拭いた。彼女の頸筋のあたりが、だんだん痩せ細つて行くのが目立つた。

「お前が死んだら、俺は、それこそ、全くの孤獨だ。なんで、悲しくないことがあるものか。しかし死ぬのは、お前ばかりでない。みんな　死ぬのだ。さう　思つて、あきらめなければならない」

彼は、妻の枕許に、きちんと座つて、彼女の泣くのを、見つめながら言つた。

彼女は、迫りつゝあつた、死と顔を合はせる怖しさのために、自分から、思ひ切つて息を絶たうとさへ思つたことが

あつた。
ある日、隙を覗つて、彼には、無斷で、家から脫け出したのである。彼は、それを悟ると、狂氣のやうになつて、彼女の後を追ひかけた。そしてやつと、あちらへ、急いで行く、彼女の後姿を見付けて、無理に捉へて、家へつれて戾つた。
それから、女は、氣の弱いものだといふこと、また、女は、思想だけで、生き得られないといふことを知つた。
彼の妻の死は、眞に、みじめなものであつた。そして、それは、彼に、すべて、生きてゐる者を呪ひの心なく見得ぬやうにしてしまつた。
宏壯な建物が軒を並べてゐる、街が、麗らかに太陽の照らす下に橫はり、いかにも、そこは、富裕な者の住んでゐる場所のやうに思はれた。坦々とした、往來の上を、美しくきらびやかに着飾つた令孃や、夫人達が步るいて行く。その人達の顏は、健康と幸福に輝いてゐる如く思はれた。彼は、それ等の光景を憤りなしに見ることができなかつた。自然の不公平を恨んだり、運命そのものを呪つたりせずにはゐられなかつた。
しかし、それ等の宏壯な建築や、また美しい、華かな人達は、いつまで、このやうに幸福であり、また、現在のまゝの姿でゐられるのだらうか。氣付きこそしないが、刻々に、それ等は、破滅に向つて、急ぎつゝあるのではないか？この地上に、ありとあらゆるものは、決して、そのまゝでは、永久に存在をつゞけることが出來ないのだ。彼等は、このことについて、たゞ無智であるばかりに、笑つてゐるのだ。また、喜んでゐるのだ。
「過去は、煙のやうなものだ。そして、過去の一切が、零なんだ。そこには、遠いとか、近いとかいふ差別はない。全く、虛無なんだ。そして、現在のすべてのものが、刻々に、無にならんとするがために、急ぎつゝあるのだ。俺が、眼を閉いでゐるうちに、あの若い、奇麗な女は、やがて白髮の皺だらけの醜いお婆さんとなるだらう。そして、彼女等も

死んでしまへば、また、この俺も、それと前後して死んでしまのふだ」
彼は、かうした、つき詰た、思想を不常頭の中に持つやうになつた。さうした時、彼は、何を見ても、冷やかに、皮肉に、笑はざるを得なかつた。
「お前は、それを幸福だと思つてゐるのか、馬鹿め、お前は、死ぬんぢやないか？　いつか、この地上から、誰からも見えないどこかへ消えて行つてしまふんぢやないか？　嬉しいとか、面白いとか、そんなことが、いつたい、いつまで、そして、どれほど價値があるんだ」
かう彼は、心の中で、言ふのであつた。
彼は、どんな話をきいても、決して面白いとは思はなかつた。また、どんなものを見ても、それに、魂がほんとうに捉へられるといふことがなかつた。何も、かも、彼には、たいした意味があることゝは思はれなかつた。彼には、默つて笑つて、すまされることばかりであつた。
これに、引換へて、破壊を見た時は、氣持がよかつた。
「なんで、俺は、自然を不公平などと思つたらう？　自然は實に、公平なんだ。いつかは、みんなに、死の宣告を下して、確實に執行するからだ」
何を見ても、また、聞いても、冷かであつた彼は、破壊を、頭の中に考へる時、眼に見る時だけは、血が熱したのである。その時は、不常は、音を立てない、冷かな、皮肉な笑ひに、悪魔的な、咽喉のひつかゝるやうな、奇聲を立てた。
「さうだ。あいつは、まだ夢を見てゐる。俺が、破壊してやらう。さうしたら、どんなに慌てることか……」
かうした、たくらみが、頭の中に湧いた時は、青い顔を俯向けて、彼は、にたくと笑つた。そのたくらみが、深刻

であればある程、その笑ひは凄味を帶びたのであつた。

「みんな、もつと早く社へ出て來てくれいと、社長さんが言つてゐました」と、給仕の木島が昨日きいたことを思ひ出したやうに、武井や小澤のゐる前で言つた。

屋外は、午前のうちから、日の光りが、きら〳〵としてゐた。給仕だけは、いつも規定通りの刻限から、早く社に出て來て、たとへ用事がなからうと晩方までゐるのであつた。

「明日から、もつと早く來よう」と、小澤は、この頃は、少し早くても家を出るのは何でもないやうな氣がした。下宿にゐて、机の前で、ぼんやり煙草を喫らしながら、空想に耽つてゐることも、可なり怠屈なやうに思はれた。それよりは、まだ街の空氣の冷かなうちに、歩るいて、頭のさつぱりする方が悪るくなかつたからだ。

武井は、にた〳〵と笑つた。

「用事のある時は、早く出るもいゝし、無い時は、少し位遲くたつていゝぢやないか。社長は、僕達を、まるで自分の手足のやうに動かさうと思つてゐるんだよ。獨り、こゝの社長ばかりでないのさ。雇主は、仕事をさせるために、人を使ふといふよりは、自分の手足のやうに、氣の向いたまゝに動かさうといふんだ。仕事のあるなしではなしに、自分が使つてゐるといふ意識のために……。そして、權力で、目下の者の自由を束縛することが、あいつ等には、一種愉快なことにちがひないんだからね」

小澤は、彼の言ふことを、默つて聞いてゐた。誰の言ふことにも、一度は、靜かに耳を傾けて、その言葉の中に含まれた眞理を汲み取らうとした。それが、この男の謙遜に見えるところでもあつた。

「もちろん、雇主の教養にもよるだらうが、やはり、賃金制度が、自然さうさせるのではないだらうか」と、小澤は、

言つて、自分にも、よく考へて見ようとするやうに、頭を傾けた。

武井は、青い顔に、笑ひの影を消さなかつた。

「何、それは、僕達がみんな、無自覺だからなのさ。産れた時から、この社會は、ちやんと、雇主と雇はれ人との二つの階級に分れてゐたんだ。その他には、別なものはなかつたんだ。雇ふといふことが、特別の恩顧をかけるといふことでも何んでもない。また、雇はれるといふことが、卑屈な地位にあるのでも何んでもない。雇はれる階級がなければ、勿論、雇ふ階級が存在しないからなのだ。今日の組織から言へば、この兩者の權利を平等と見るのこそ當然なんだ。この權利が不平等となり、兩者が敵視し合つた時には、すでに、この組織は、崩壞しかゝつたのだ。すべてが、雇主階級が、古い頭から自分を偉く思つた誤信と、雇はれ人が、昔の時代の奴隷根性の因襲から、自分達を卑下して見る誤謬から、爭鬪を生ずるに至つたのだ」と、武井は言つた。

「そんなら、僕達が、平等だといふことを自覺したとして、どうすればいゝんだらうか?」と、小澤は、理屈はどうであらうと、實際の場合に、どうすればいゝかといふことをたづねたのであつた。

「社長の言ふことなんかを、きかなければいゝんだよ」

「僕は、爭つてもはじまらないと思ふがね。大抵のことは、默つてゐても、それが卑屈だとばかりはいはれないのだ。いけなかつた時は、結局去るまでの話なんだが、さあ、どこへ行つたつて同じことだらうから」と、小澤は、彼とは、常に、反對の考へを持つたのであつた。いつでも、逆眞理に、また價値があるやうに、この二人の性格は、反對の見方をする傾きがあつたが、その何れにも、突きつめていつたら眞理があつたであらう。

「小澤君は、ヒユマニストで、僕が、惡魔派とでも言ふのかな」と、武井は、咽喉にひつるやうな聲を立て笑つた。

「いや、たゞ性格なんだ。いつたい、僕は、好んで、平地に波瀾を起したくないからだ。餘程のことでゞでもなけね………」

「そこが、ヒエマニストたる所以なんだよ。僕は、さうでない。いつでも反抗することが道徳的といふ言葉を使ふなら、道徳的であると信じてゐるのだ。間違つたこと、眞理でないことは、存在の價値がないのだ。價値のないもの、眞理でないものを、一刻も早く破壞するのが、畢竟道徳的なんだからね、さういへば、一つとして、世の中には、存在の價値があるものは、ないのかも知れないが………まあ、そのことは別として、道理でないことには、反抗するのだよ」と、武井は、言つた。

平常は、あまり無駄口を言はない、暇があつた時は、リーダーを出して、赤い表紙のついた英和辭書を引きながら、語學を勉強してゐる、問題の木島は、給仕らしく袴をはいてゐた。そして、立つてゐると、やはり年の十五程にしか、背の高さは見えなかつたが、大柄で、がつしりとしてゐた。彼は、片脚をふら〳〵さして、草履で床の面を摺りながら眼を細くして、

「武井さん、さう言つたつて、私達は、命令に從はなければ、すぐに首になるんですから、駄目ですよ」と、武井を見て言つた。

「はゝゝ」と、小澤は、傍から、笑つた。

「馬鹿だなあ………反抗するにも、いろ〳〵あるぢやないか。眞正面から打突つて行くばかりが反抗ではないぜ。サボタージユも一種の反抗といふことを知らんけれや、話せないな」と、武井は、半ば、煽動するやうに、半ば、憐れむやうな調子で言つた。

「正直な少年に、そんなことを教へるもんぢやないよ」と、小澤は、毒を注ぎ込まうとする武井に向つて詰るやうに言はざるをえなかつた。

「いや、僕が、何も惡るいことを教へるのでない。欺瞞が、どうして眞理であるかといふことを悟るのは、決して、惡るいことぢやないからね。いつまでも、彼等に、馬鹿になつて居れとでも、君は、言ふのかね」

武井は、青白い、血の氣の乏しい顏を、こちらに向けて、白眼で、冷かに、小澤を見たが、瞬間に、そんなことは、どちらだつていゝのだつたと、氣付いたといふ風に、また、眼をあちらに反らして、蔑むやうな、口許に笑ひを浮べたのであつた。

小澤は、常に、人生に對して、武井とは、正反對の思想の上に立つてゐた。刹那、刹那に、人生が動いて行くものなら、その刹那をより善く、より幸福に、生きるのが、人間的であるのだと思つた。そして、悲しいこと、醜いこと、また不愉快なこと、それ等を知らずに、すむものなら、その方がいゝか分らない。また、人々が、さう心がけることに於てのみ、この地上には、はじめて、美しい、正しい生活が、はじめられるものゝやうに、思はれたのであつた。だから、武井が、正直な少年の心に、黒い影を投げることは、彼としては、默つてゐられなかつた。

「正直であるといふことは、その人自からが持つ美徳なんだよ。すべて、先づ自分から、ほんたうの人間であることが大切なのだ。生活することが、直に、爭闘であり、行動は、常に敵に對して、なされるものとばかりは考へたくないのだ」と、小澤は、言つた。

武井は、いつもの如く椅子に腰かけ、テーブルに向ひながら、飽迄、冷靜であつた。

「さう思ふのは、君が、夢想家だからなのだ。人間の生活は、いつも、爭闘を意味して居るのさ。自然に對しても、ま

た、搾取者に對しても、瞬間と雖も、爭鬪せずに立つて行くことはできないのだ。その行動が、直に、相手に對してでないものは一つもない。刻々に、自分が殺されつゝあるか、相手を殺しつゝあるか、いづれかであるべきなのだ。この事實の前に、强いて眼を閉ぢて、勝手な空想に耽るのは、それは、その者の自由としても……常に、現實は、さうなのだ」

二人は、いつも、これ以上は、互に言はなかつた。言ふことがなかつたからだ。

その後でも、武井は、冷然としてゐたけれど、小澤は、何となく、さびしさうな、いらだたしさうな、また、どうしても、相手の言つたことは領かれないといふやうに、疑惑と默想に、捉へられるのが習はしであつた。

小澤は、思つた。强食弱肉が、生物界の現象であれば、相互扶助も、また、他面の現象である。前者が、眞理であれば、後者も眞理でなければならないであらう。多くの動物が、一夫多妻であるからといつて、稀に見る、一夫一妻を、動物界の現象から否定することはできないのである。人間の抱く、ありとあらゆる思想、感情、意志、本能は、その中のどの一つも、人間的の要素の一分子たらざるものはないといつていゝ。

狂暴な感情の中にも、一點かすかな、溫かい光りが認められたなら、それをしつかりと見失はないように、その光りの强大を心がけることが人間としての理想の貴さではないだらうか。ちやうど、理想主義といふものは、暴風雨の中を、火を護ひながら、歩るいて行くに等しいものだ。その火を吹き消してはならない。その火は、いつか、この闇の裡にうごめく人生を明るく照らすことがあるからなのだ。

「人間同志は、相戰ふことより、相なぐさめ合ふことによつて、どれだけ、勇氣づけられることか。また、憎むことより、愛することによつて、麗はしい、生甲斐をしみ〴〵と感ずることか」と、彼は、考へたのであつた。

會社へ出て、みんなが顔を合はしても、格別、話しもせずに、その日の仕事を終へて、別れて歸つてしまふやうなことがあれば、また、思ひ〱の話に、時を費やしたり、時には思想の異なるところから、議論するやうなこともあつた。

武井は、小澤が、机に向つて、何か書いてゐた時に、その顔を覗くやうにして、

「君、いんまに、大變なことが起るぜ」と、言つた。

小澤は、彼が、平常はたとへ皮肉を言つても、決して、みだりに事實を誇張して、語るやうなことはしないと知るので、かう言ふのを聞くと、不意に顔を上げて、何事かと思はざるを得なかつた。

「あんな顔をしてゐるけれど、社長に、なか〱女好きなんだよ」

「何かあつたのかね」

武井は、その秘密を知つてゐる者は、恐らく、自分より他にはあるまいと、いはぬばかりな態度で、意味ありげに笑つて見せた。

「ある人の細君と怪しいんだよ」

「何、細君と?」

小澤は、たとへ、そんなことがあつても、それが自分等に、どれ程の關係があらうかと考へられた。自分は、その女を知らう筈がない。どうして、武井が、よくその眞相を知つてゐて、それについて興味を感ずるかゞ、却つて、不思議なのであつた。

「君は、まだ、知るまいね」

かう言つて、武井は、ズボンの隱しに兩手を差し込んで、小澤の机のまはりを歩るいてゐた。

「僕は、知るわけがない」
「塚田の細君と怪しいのさ」
「何、塚田の？」
これを聞くと、小澤は、流石に、駭いたのであつた。
「あいつは、馬鹿だから、自分の細君のことなんか分らないのだよ。あまり社長の家へなど、二人でペン／＼行くからさ。しかし、このことを塚田に聞かしたら、さぞ、奴のことだから、どんな騒ぎを起すか知れないぜ」
武井は、落付いて言つたが、青い顔は、何事をか豫期して、急に、活々しく輝いて見えた。
「武井君、君は、確證を摑んだのかね？」と、小澤は、半ば、そのことが、信じられないといふ風に言つた。
武井は、信じなければ、信じなくてもいゝ。その人の勝手だ。自分は、何もそれについて、證據立をしなければならぬ必要がないと感じたらしく、口を噤んでしまつた。そして、彼は、二たび、その問題に觸れなかつた。

日の光りの、きら／＼と舗石の上へ降り注ぐ、晝少し過ぎた頃、背のすらりとした二十四五の女が、ベールを顔に垂れて、草履で街の中を歩るいてゐた。女優とも、また、令嬢とも判斷がつかなかつた。彼女は、日傘をさゝずに、全身に日を浴びて、小さな影を足許に落しながら、脇見もせずに、行くのであつた。貴金屬を商ふ店の前を通つても覗いて見ようとするではなく、呉服店の前を通つても、そこには、人間が澤山出入りをしてゐたけれど、振りかへりもせずに、過ぎてしまつた。

暗綠色に塗つた、自動車の號は、星の流るゝやうに、日光の中を閃めいて、街頭を走つて、たちまちのうちに、消んでしまつた。微風は、生溫るく、白い埃を物憂さうに上げてゐる。この時、彼女は、角の小さな煙草屋へ立寄つた。そして、煙草を買ふと、また、歩るいて、二三丁も來てから、白いカーテンの彎曲なりに、入口に飾つてゐる、カフエーにはいつた。

彼女は、その店の女給でもなかつた。そこにあつた腰掛にしなやかにかけて、一ツのテーブルの上に肱を置いた。そして、レモンソーダ水を、年の若い女給に誂へた。女給は、ベールを脫つた、女の顏に、ちよつと眼をとめてから、奧へ行つて通じたのであつた。

彼女の眼は大きかつた。頭髮は、少し赤くて艶があつた。やがて、前に運ばれた、大きなコップへ八分目まで滿たした、橙色の液體を、啣らした、麥藁の長い莖で、唇を着けて吸つたのである。冷たい水が細く通るたびに、女の白い美くしい咽喉は、かすかに鳴つた。この時、柱にかゝつてゐた、鏡に向つて、女給は、頭に手をやつてゐた。そして、あちらの花瓶にさしてある花は、もう凋れてしまつて、上の方で、蠅が、ぐる〳〵輪を描いてまはつてゐたのである。

「ちよつと、こゝに電話があつて?」と、彼女は、ソーダ水を飮み乾すと、女給を見てたづねた。

「いゝえ、電話は、ないのですよ」と女給は、人馴れのした、輕い調子で答へた。

しばらくしてから、彼女は、其店から出ると、横路の方へ折れて行つた。この時、船の上に、積んできた、石炭や、材木や、鐵材などを、河岸では陸上げしてゐると見えて、その響きは、このあたりの街の空に、響いてゐた。

彼女は、靑く塗つた、建物の入口の扉を開けて、內部へはいつた。そして、階下の鈴を押すと、二階から、袴をはいた、十五六の少年の給仕が、梯子段を降りて來た。彼女は、上の方を仰ぎながら、昇り口のところに立つてゐた。

「塚田は、來てゐませんか」と、彼女は、給仕が、下まで來かゝつた時に言つた。

「塚田さんは、今日は、まだおゐでになりません」と、少年は、答へた。

「社長さんは、ゐらつしやいますか」と、彼女は、ベールをとらずに、言つた。

少年は、顏の上にうすい布がかゝつてゐたので、どんな顏の女であるか、知らうと思つても、よく見ることが出來なかつた。

「ゐらつしやいます。あなたは？」と、少年は梯子段の最後から、一段目ばかり上に立つて、たづねた。

「やはり、塚田に、用事があつて來たのですがと、言つて下されば、いゝのです」と　幾分か、聲を低くして、口許に、笑いを湛えながら言つた。

少年は、梯子段を昇つて行つた。彼女は、その間に、ベールを脫つた。そして、懷中から小さな化粧鏡を出して、鼻頭の汗を、薰りのする紙で拭き、襟のあたりを整してゐた。

階下には、梯子段の脇のところに、別な事務所があつて、そこでは、靴音がしたり、話聲がしたりして、さはめいてゐた。

彼女は、上を見上げて、そこに、顏のあらはれるのを待つてゐるやうであつたが、間もなく、色い淺黑い、口髭のある四角張つた顏があらはれると、彼女は、につこりと笑つて白い足袋に、埃のかゝつた足を、成たけ音を立てないようにして、靜かに上つて行つた。

社長は、うす暗い廊下の端に佇んで、彼女が、梯子段を上り切るのを待つてゐた。

二人は、額と額を觸れ合はんばかりにして話した。その聲は、傍に、誰の姿もなかつたにもかゝはらず低かつた。そし

て、女は、顔を紅からめて、掌で笑ひを無理に押へてゐた、刹那、電話室の内から、眼を光からして、ぢつとこちらを見た男があつた。其處と電話室とは、可なり隔つてはゐたが　磨り硝子の破目から、覗くと、二人の様子は、話聲こそよくきこえぬが、手に取るやうに分かるのであつた。

武井は、ある人の住所番地を知る必要があつて、多分その人の家に電話があつたやうな氣がするので、電話の人名簿によつて、探ね當てようと、先刻から　電話室にはいつてゐたのであつた。彼は、二人に氣付かれないように、ぢつとして、音を立てなかつた。

そのうちに、女は、梯子段を降りにかゝつた。一段下へ、片足をつけてから、こちらを振向いて、

「あちらでなくて、新橋の方よ……」と、言つた。

社長は、うなづいて見せて、

「十分ばかりしてから」と、言つた。

この會話だけは、武井の耳にもはつきりときこえた。彼は、眞に偶然のことから、怖ろしい、また、忌はしい秘密を知つたのであつた。その瞬間、塚田を可哀さうな、また氣の毒な人間のやうな氣がした。しかし、しばらくして考へると、同情の念なんか、消えてしまつて、全く愚鈍な男のやうにしか、思へなかつた。

青い建物から、彼女は、外へ出ると、廣い通りを抜けて、橋を渡つて、あちらへ行つた。電車が走り、自働車や、俥が、光りの中を、無數に蠢めいてゐた。彼女は、いつの間にかまた、ベールを顔にかけてゐた。彼女の開かずに持つてゐる日傘は、流行遅れのした、しかも色の褪せた紫色のもので、今年の流行である、水色の冴え／＼したのをさして行く人々の中に混ると、流石に、氣が咎めて、それをさして行けなかつたのであつた、

新橋驛に、彼女の足は、向つた、その驛の入口で、十二三の少女が、切花を賣つてゐた。彼女は、その前に立止つた。そして、一本の紅い薔薇の花を買つた。彼女は、待合室の方へ歩るきながら、花を顔につけて香氣を嗅いで見た。彼女は何思ふとなく、金鶴香水を嗅覺に呼び起したが、それよりは、もつと、この花の香氣の方が、生きてゐるだけ、あくどかつた。待合室には、輕裝をして、ほんたうにこれから、どこか、海岸の方へでも出かけやうとする、人達があつたやうに見受けられた。彼女は、多くの人々の間をあちらに歩るいたり、こちらに歩るいたりして、時の經つのを待つてゐた。

武井は、人間の虚僞を憎みながら、また、彼等の淺薄な狡智を冷笑つたのであつた。いたづらに、華美に身をやつすことが、女性の誇りだと思ひ込んでゐるやうな、良心の鞭を感じない、その癖、夢見てゐるやうな、あどけない眼付をして、巧みに男の心を囚へる術を心得てゐる女と、女と見れば、性慾を抑へることのできない、金を儲けることゝ、食ふことゝ、女を弄ぶことの他に、殆んど頭の中には何も考へてゐないやうな男と、彼は、この二人の後の場面を活動寫眞の看板繪のそれよりも、もつとあくどく、醜惡に想像した。

武井は、テーブルに向つて、タイプライターに、打たうとする、文面の下書をしながら、あちらに、平氣な顔をして、煙草を喫してゐる、社長の顔を上目で、睨んでゐた。

「お前は、それで、俺達の復讐なしに、濟むと思ふのか？　馬鹿な」と、彼は、頭の中で言つて、例の氣味の惡い、笑ひを顔に浮べた。

彼は、この種の雇主が、使用人に對して、常に、恩惠を施してでもゐると考へるばかりでなく、金を拂つて、使用する間は、使用人は、雇主の命令に、服從するのが義務であるといふことから。

「あいつは、内氣な性質と見えて、俺の顔を見るのを怖しがつてゐるが、あいつの方はなか〳〵如才がない。そして

俺の姿を見ると、轉びさうになつて、できるだけ低く頭を下げる」と、ある屈主は、笑つてゐる。
「俺は、どうして、神樣でもないのに、こんなに、多數の使用人の顏を一人、一人、見覺えられるものか？　こちらは、知らんでゐても、あちらは、みんなよく、俺を知つてゐる、そして、どこで遇つても頭を下げる。この俺一人の腹の中で、あいつらを右へ廻はすとも、左へ廻はすとも、手足の如く、動かすことができるのだからな」と、ある屈主は、誇顏に言ふであらう。
武井は、さう考へると、憎惡に燃えた。
「たしかに、あの顏では……」と、彼は、この時、社長の圓圓しい、四角な顏を見やつて、「使用人を機械としか思つてゐまい。意志があり、感情があり、力のある人間とは考へてゐまい。馬鹿め……」と、口の中で言つた。
ちやうど、十分間も經つと、社長は、事務室から、外へ行く仕度をして出かけた。
武井の、タイプライターを叩く、それから發する一種リズミカルな、小さな金屬性の響きは、ちやうど乾いた空氣の中へ、光つた鋲を打突んでゐるやうな感じがした。それが、終ると、武井は、壁にかゝつてゐる、自分の帽子をとつた。
「今日は、まだ、小澤君は、一度も社へ出て來ないね？」と、彼は、木島に、話かけた。
この時、二人の少年は、名古屋地方へ輸送する、注文品のバリカンと、西洋剃刀の小さな包みを幾つも、荷裝してゐたのであつた。
「まだ、お見えになりません」と、年上の給仕は、答へた。

「もう、暑くて、日中は、外を歩るけないな」と、武井は、白つぽい、縞の帽子を被つて、両手をポケツトにいれて、外の方を向き、突立ちながら、言つた。

窓の外は、一面に、赫として、この瞬間だけは押默つて、靜かしかつた。彼は、これから埃の立つ、日の照りつける往來を歩るくのだと思つたのか、ちよつと瞼を細くして、眩ぶしさうな目付をした。が、すぐに、また、こちらに向き直ると、いつもの皮肉な笑ひを顔に浮べて、

「もし、塚田が來たら……木島君、塚田がやつて來たら、お前の色女が、新橋驛で待つてゐると、言つてやりたまへよ」

川瀨の木島は、頭を上げて、武井の方を見ながら、

「さつき來た、女は、誰ですか？」と、笑ひながらたづねた。

「社長が知つてゐる筈だよ。社長に、聞いて見たまへ」

武井は、さう言つて、さつさと廊下の方へ歩るいて、梯子段を降りて行つてしまつた。

彼は、俯向きながら、往來を脇見もせずに歩るいてゐた。もう、一年ばかりにもならうが、彼がはじめて、塚田のところへたづねて行つた時のことが思ひ出されたのであつた。

ある町裏の路次に、塚田は、住んでゐた。いまでも、この家に居るのであるが、家は、二間しかなかつた。高い建物の陰になつてゐて、終日日陰になつてゐた。緣側の前には、狹まい庭があつたが、やはり、暑い時分であるにもかゝはらず、地面は、何となく濕氣ばんでゐて、痩せた常盤木が二三本、前の家の壁板に縋つて、どこか、廣い、自由な空間を求めて、憧がれてゐるやうに、ひよろ〳〵としてゐた。そして、上を仰ぐと、どこかの物干臺にかゝつてゐる、いろ

〳〵な色合の洗濯物が見える他、青い空すら、充分には、望まれなかつた。

しかし、彼等二人は、この家に住んで滿足してゐるらしかつた。買物に出るのには便利であるし、また、夜、二人で散歩に出かけるのには、一歩外へ出れば、明るい街の火が眩ぶしいばかり、足許から露店が並んでゐるのを、誇り顏に語るので分つた。

ちやうど、塚田夫妻は、武井の來る前は、長火鉢の傍で、話でもして、空しく時を費してゐたらしかつた。塚田は、いつ見ても髭が伸びて、穢苦るしい顏をしてゐた。そして、あまり、口數をきかなく、煙草をぷか〳〵と喫つてゐるのが、この男の平常なのであつた。武井は、この家の敷居を跨ぐ時まで、どんな細君だらうかとはじめて、顏を見るので心にそんなことを思つてゐた。そして、座敷になつてゐる六疊の間に通されると、彼女は、顏を見られるのが、恥かしいのであらうか、隣りの四疊半の間に逃げて行つて、襖の蔭に隱れてしまつた。

しかし、彼女は、客の眼から、全く、自分を避けたのではなかつた。なぜなら、半分顏を襖の蔭からあらはして、こちらを覗いてゐたからだ。人見知りをするといふよりか、こんな嬌態をして、男の好奇心を内へようとする、浮氣女のする手管であつたのである。彼女は、かうして、甘い夫が聲をかけるのを待つてゐた。

「オイ、こゝへ來たらいゝぢやないか」と、果して、塚田は、彼女を呼んだ。

「だつて、ねえ、あなた……………」

「なんだい」

「まだ、こんな、樣子をしてゐるんですもの」

彼女は、かう言つて、座敷に、はいつて來ると、隅のところに置いてある、鏡臺の前にぺたりと坐つた。大柄の、派

手な、青つぽい浴衣を着て、幅の狹い帶をぐる〳〵と卷いて、しどけない風をしてゐた。そして、その着物の袂は、十七八の娘の被るやうな長い、踵にまでとゞきさうに見えた。

彼女は、客から、よく見えるところで、平氣で、髪を直したり、刷毛を取つて、顏に白粉を塗つたりした。それをするのに、大分間がかゝつた。それから、二人の傍に來て、男といふものを、さも怖れてゞもゐるやうに、ちよつと可憐らしい樣子付をして挨拶をした。

「あすこの活動寫眞館に復活が來てゐますね」と、武井は、塚田に言つた。

「えゝ、來てゐますわ」と、彼女が、すぐに答へた。

「僕は、めつたに、活動へはいつたことがない」と、塚田は、暗い顏で言つた。

「芝居でも、ひと頃は、騷いだぢやないか」と、武井は、至る處で、カチユシヤの唄が流行したのを思ひ出して、言つた。しかし、塚田は、その芝居すら見てゐなかつたらしい。

「妾、活動でも、芝居でも見ましたわ」と、彼女は、言つた。

「全く、悲觀してしまひましたの。だつて、カチユシヤが、可哀さうなのですもの、誰だつて、あゝいふ境遇にゐればあゝなりますわ。妾は、自分も、いつかあんな風に、流浪するのでないかといふやうな氣持がして、さびしうございましたの」

「お前が、浮氣つぽいからだ。つまらん、誰が、自分を、そんな風に思ふ者があるものか」と、塚田は、怒り氣味に言つた。

「だつて、妾は、子供の時分から、よく、そんな空想をして、自分が、悲しくなつて、泣いたことがあるんです

「もの……」

武井は、この女の、紅い色をした唇と、夢見るやうな眼付をした顔と……暗い、四角張つた塚田の顔とを對照して、かうした、單調な生活が、いつまで二人の間に、つゞけられるものかと疑はれたのであつた。

「奥さんの故郷は、どこですか」と、武井は、聞いた。

「妾は、生れたところは、北海道ですの、そして、物心がつく時分から、兩親の都合で、方々へまゐりましたわ」と、彼女は、答へた。

武井は、彼女の言ふことを聞き、また女の顔を見ると、何となく、荒い北國の海を背景とせずには、彼女のことを考へることが出來ないやうに、感じたのであつた。

彼女は、誰とでも、すぐに、馴々しくなる種類の女であつた。

話をしてゐる間に、勝手許へ氷がきたので、彼女は、立つて行つて、盆にのせて持つて來た。結晶した、硝子屑のやうな氷の粉末が、緑と赤と、また靑とに彩つた、三個のコップの中に、冷たさうに盛り上げられて、それには、鈍然とした光りを放つた、アルミニユームの匙が、各のコップの中に、突差されてゐた。その二つの氷には、鮮紅なイチゴ液がかゝつてゐて、もう一つのは、不透明な小豆の餡が底の方に沈澱してゐた。

「妾は、あづきにしたの」と、言つて、彼女は、髷の格好を半分崩しながら、それをつゝいて、甘まさうに匙で掬つては、赤い、うすい唇の邊に持つて行つた。

武井は、暇を告げて、歸らうとすると、

「まあ、ゆつくりして行きたまへ」と、言つて、塚田が止めた。

「いゝぢやありませんの、もつと遊んでゐらしても」と、彼女は、上目で、武井を睨むやうに見ながら言つた。

「この女は、なか〳〵男に、擦れてゐる。單純な閲歷を踏んできた女ではあるまい」と、武井は、心の中で思つた。

「オイ、ビールと、何か、ちよつと行つてこいよ」

「何がいゝでせう？おさしみなんかよりは、洋食の方がいゝでせう」

「かまはんでくれたまへ、ビールだけで澤山だ」

「妾の好きなのは、テキに、コロツケよ」と、言つて、彼女は、笑つた。

「自分の好きなものばかりいふなよ。ハムサラダが、いゝだらう」

彼女は、立つて、隣の間にはいると、小さな聲で、しかも、調子よく、

「コロツケ、コロツケ
今日も、コロツケ
あすも、コロツケ
コロツケ、コロツケ」

と、歌ひながら、勝手口の方から、街へと出て行つた。

武井は、其後であつた。塚田と彼女のローマンスを、どうして、そんなことを知つてゐるものか、却つて、おとなしい小澤から聞かされたのであつた。

すべては、すでに過去となつた。武井は、白く日の光りの照り付ける道を歩るきながら、自分が、訪ねて行つた時分の塚田夫妻のことを眼に描いて、

「あの女は、たしかに社長と關係してゐるが、塚田はまだ知るまい。或は、氣付いてゐても、あの男のことだから、それを利用するつもりでゐるのかも知れない」

彼は、頭を上げて、青い顏で太陽を見ながら、にたにたと笑つた。

「君、社長と塚田の細君とをかしいぜ」

武井の口から、小澤が、さう聞いたのは、彼女が、社へやつて來てから、數日後のことであつた。

「まさか、そんなことはあり得ない」と、小澤は、思つた。

この現實は、實際に於て、たとへ小澤の考へるやうな、美しいものでなく、あり得ないことだと信ずるやうな、醜惡な事實が澤山あるにせよ、飽迄、彼は、自分の良心によつた判斷から、そんなことは、あらう筈がないと信じたのであつた。

「いゝ加減に、人といふものは、噂をするものだ。誰が、その本人でないかぎり、ほんとうの生活が分る筈があらう?」と、思つた。

落日の餘炎が、水に流れて、橋の上に黑い人の影が頻りに往來する頃、會社から、二人の少年が、その日の務めを終へて歸つて行つた。

一人は、木島で、もう一人は、それより年下の三田であつた。二人の少年は、袴をはいてゐた。木島は、骨格が强健に見えたけれど、三田は、細く、痩せて、神經質な容貌をしてゐた。二人は、街の中を、神田の方に歩るいて、各自の

夜學に行くのであつた。

木島は、英語を專修してゐた。彼は、語學さへ修めたなら、どこへでも飛び歩るくことができるように考へてゐた。彼の空想に描く世界には、いつも、太陽が燦爛として輝いてゐた。油のやうにつや〳〵しく、緑に、紫に、滔々として波濤がうねりうねつてゐる大洋が望まれるのであつた。また、赤い建物や、白い色の建物が重なり合つて、それをば圍繞する熱帶植物の濃い影なども見えるのであつた。彼は、明るい、廣い世界に憧がれてゐた。いつかは、この物憂いやうな、うす暗いやうな境遇から這ひ出して何もかも新鮮な希望と愉快に滿たされる、世界に翔けて行くことができるやうに感じたのである。

「君は、どうするのだい」

二人が、空想を語り、希望を話しながら、肩を並べて歩るいてゐる時に、木島は、固い黒い顏に、白い齒なみを見せて、色の白い、頰に赤味を帶んで、女のやうにやさしく見えた三田に、問ひかけたのである。

「僕は、まだ、先のことを考へてゐない」

三田は、小さな聲で、答へた。この少年は、田舍の小學校を卒へたばかりであつた。こちらに來て、この會社に務めるやうになつてから、私立の中學程度の夜學にはいつたのであつた。二人は、會社にゐるうちに、食麵麭を嚙つて、それで夕食を濟ましてから、出かけることもあるが、また、いつしよに、パウリスタにはいつて、珈琲とドーナツを食べてから、各の學校へ、別れることもあつた。そして、歸りには、獨りとなつて、思ひ、思ひの空想に耽りながら、木島は、兩親のゐる家へ、三田は、叔父の家へと戻るのであつた。

木島は、暗い、急な坂を上らなければならない。坂を登り切つたところに、一本の大きな欅の木があつた。朝、彼が、

家を出て、こゝに差しかゝると、日の光りが、この木の葉いつぱいに當つてゐた。葉の一枚、一枚が、鮮かに日の光りを反射して輝いてゐる。空は、高らかに、青々として、澄んで、白い雲が流れてゐる。ちやうど、自然は、これから、まだ、長い夏の間の享樂を夢想する如く、安靜げに、まどろんでゐるのであつたが、夜、人通りが絶えた時分になつてこの木の下に立ち、上を仰ぐと、大きな木は、黒い、喪服を着たやうに、きら〳〵と光る星の下で身震ひしてゐた。彼は、何となく、冷たな、眼に見えない掌が、心臟の上に置かれたやうな恐怖を覺えた。

三田は、また、街の中に懸かつてゐる、小さな橋の上に佇んで、廣告燈の赤い文字が消えたり明くなつたりするのを默つて眺めてゐた。足許の杙に打衝かつて、流れて行く水の音に、聞くともなく、耳を澄してゐると、彼は、母もない、父もない、眞に孤獨の自分の身の上を悲しく思ふのであつた。常に、思ひ出さうと、あせればあせる程、はつきりしなくなる母の顏が、かうして、すゝり泣くやうな、きれ〴〵に、小さな自分の魂を洗つて行く、水音を聞いてゐると、ほんたうに遠い昔だのに、はつきりとなつかしい母の顏が、眼の前に、浮び出るのであつた。それは、小刀で、寸々に、胸の肉を切るよりも、この悲哀の方が、苦るしく、鋭く、肉に食ひ入るのであつた。

「三田君は、今日も社へ出て來ないが、病氣なのかね」と、小澤は、いつも其處に見る、少年の姿を、すでに二日ばかりも見なかつたので、木島にたづねたのである。

「頭が痛いといつて臥てゐます」と、木島は、答へた。

「頭が痛むつて、どこがわるいのかね」

「さあ、どこがわるいんですか……」と、木島は、それを知らぬらしかつた。

小澤は、哀れな少年の境遇をさま〴〵に頭の中に描いたのである。

「醫者に、かゝつてゐないのかなあ」と、小澤は、言つた。

木島は、さも友達に同情したやうな口振りで

「叔父さんといふ人はなか〳〵變な人らしいんです。それに、おばさんといふ人も、あまりいゝ人ではないのです。よくは、知りませんが、いつか、そんなことを三田君が言つてゐました」と、彼は語つた。

「そんなら、まだ醫者に見せないのかも知れない……」と、小澤は、自分の顏を曇らせながら言つた。

「君は、見舞に行つたのかね？」

「今朝、來る前に、ちよつと寄つて來ました」と、木島は、言つて、その時の光景を思ひ出したやうな眼付をした。

會社の時計は、十時前なので、武井は出て來なかつた。社長の姿も見えなかつた。塚田が、先刻、慌しさうにして、入つて來たが、またすぐに、どこかへ出て行つてしまつて、室の中は冷淡として、小澤と木島と二人きりであつた。

「それは、叔父さんといふのは、をかしな人間なんですよ。僕も、二三度、三田のところへ行つたので、見ましたが、いつも酒ばかり飲んでゐるんです。そして、醉ふと、おれが、不遇なばかりに、みんなに迷惑をかけて、まことにすまん言つて、泣き出すのです」と、木島は言つた。

「そんなら、さう惡い人間でもないやうだが」と、小澤は、その話に釣込まれて笑つた。

三田は、次の月も會社を休んだ。

彼は、氷嚢に、熱い頭を就けて、仰向いて四疊半に横はつてゐた。街の横町を曲る車の轍の音が、時々、圓い形をし

てゐる珠のやうに、彼の枕許にまで、轉がつて來るのであつた。それを聞いてゐると、何處に、自分がどうしてゐるといふことさへ、全く忘れてしまつて、青々とした桑圃の中に立つて、往來を過ぎる荷をつけた車を引いて行く馬をぢつと見てゐるやうな氣がした。そして、甘い、やるせない心をそゝるやうな、桐の花が薫つて來るのを感じた。母は、家にゐて、せつせと働いてゐる。自分は、母を思ひ出しては、遊んでゐても、折々家へ歸つて、母の顏を見る。……そして安心して、また、遊びに出る。

彼は、こんな空想に耽つてゐた。車の轍の音が轉がつて來る。全く、自分が、どこにどうしてゐるのか分らなくなつて、ふと床の上に起きあがる。見まはすと、それは、叔父の家だといふことが分る。たちまち、樂しい過去につながる細い絲が斷ち切られてしまふ。彼は、二たび、枕に頭をつけて横はつた。

それからの我家に起つたこと、悲しい、苦しかつた、いろ／＼のことが、心の中に繰返へる。母が死んでから、父と姉と自分と三人で暮してゐた。父は、朝、早くから勤めに出かける、その後で姉と二人は、朝飯を食べるやうなことがあつた。父は、いつも、自分の眠てゐるうちに出かけたからだ。

自分は、學校へ行つた。その後で、姉は、掃除をしたり、洗濯をしたり、母の生きてゐる時分にしたやうなことを、姉は、代つてしなければならなかつた。父の留守の間は、二人は、さびしかつた。そして、晩に父が、勤めから歸るのを待つてゐた。

父は、そんなに、遠く隔つてはゐない、停車場に、勤めてゐたのだ。ある冬の日の夕方のこと、町裏にあつた、溝の邊で、自分は、みんなといつしよに遊んでゐた。寺の鐘が鳴つてゐたことも覺えてゐる。そして、溝の邊にあつた、榎の木の頂きに、赤い雲が漂つてゐたことさへ眼に殘つてゐる。

「あちらへ、誰か、擔架に載せられて行く」と、不意に、誰か言つたものがあつた。

みんなの眼は、其の方に向いた。そして、怖しいものが、もつとよく見えるところへ、なるたけ、近く驅け出して行つた。

「あつ！」と、叫んで、自分は、驚いたあまり氣絶しやうとした。それは、父であつたからだ。擔架といつしよに從いて來た。私の家へよく遊びに來る父の同僚が、自分を手招いて早く歸れと言つたので分つた。

父の顔は、白い繃帶で、幾重にも卷かれてゐるので見えない程だつた。過失から、汽車に轢かれたのだ。そして、家に着いた時は、勿論、もうすでに何時間か前に冷たくなつてゐた、父は知覺のない體だつた。その刹那、父は、悲鳴をあげたであらう。そして、其場處では、大事件なだけに大騷ぎをしたであらう。その時刻に、姉と自分はちやど煎餅を買つてきて食べてゐたのだ。……その時から、いろ〳〵な經驗に出遇つた。葬式があつた。家が賣られた。姉と自分は、東京へ來るやうになつた。

いまゝでのやうに、姉弟は、打寛いで話をする機會もなかつた。姉は、こちらに來て、二十日目から電話交換局へ勤めることになつた。しかし、その翌月腹膜を患つた。それがために叔父に預けてあつた。父の弔慰金や家を賣つた殘り金などが、殆んど費し果されたのである。

「弟の學費を送るため、妾は、どこへなりと奉公をします」と、長い病氣が癒つたとき、姉は、叔父の前で泣いて、言つた。

それから、間もなくして、姉は、もう叔父の家には居られなくなつた。……

少年は、考へると、たまらなく悲しくなつたのであつた。そして、姉から送つてくる金の大部分が、叔父夫婦の生活

費となつてゐる。小供のない叔父は、いつも若造をして、火鉢の前へ座つて、長煙管に煙草をつめて喫つてゐた。叔父は、保險の勸誘員をしたり、また、通信社の廣告取をしたり、最近でも、すでにたび〳〵變つた。何一つ、いつまでも執着することができなかつた。

「俺が、不遇なばかりに、みんなに迷惑をかけてすまない……」と、言つて、酒を飲むと泣く癖があつた。

額の扁平な、髮をてら〳〵さした叔母は　煙管で長火鉢の縁をぱし、ぱし叩きながら、

「あ、妾だつて、張合がない、芝居へ行つて見るでなし、毎日つまらなく暮らしてしまふんだもの　どれ、お湯にでもはいつて暖まつて來ませう」と、言つて、叔父に構はず出かけるのであつた。

彼は、二三日前の此家の光景を、眼に思ひ浮べた。ちやうど、その日の夜になつてからだ。はじめて醫者を呼んでくれた。醫者は、來て見て、熱が高いから、氷嚢を頭に付けなければならぬと言つて歸つたのである。

彼は、現在のこと、過去のこと、また我が身のこと、姉のことなどを取りとめなく思つたり、考へたりしてゐた。前日から見れば　熱も少し降つたらしく、いくらか氣分もよかつたので、彼は床の中で、いろ〳〵なことを考へてゐた。

暮方になつた。醫者が、來る時分であらうと思つてゐると、玄關の格子戸が開いた音がした。耳を澄ますと、親しい聲がはいつた。木島が、見舞に來てくれたのだ。

「今日は、氣分はどんなかね。小澤さんが、大事にするようにと、よろしく言つたよ」、木島は、いつもの如く、にこにこ笑ひながら、彼の枕許に座つた。

三田は、出勤して、もう仕事をするやうになつた。二人の少年は、いつもの場處に並んで腰をかけてゐた。社長は、一週間程前から大阪へ行つて留守であつた。

白い洋服を着た武井は、扇手を鳴らしながら、小澤の傍へ、椅子を引き寄せて、それへ掛けながら話した。

「N汽船會社のストライキは、何うなるだらうね。米國からの電報に、こんどのS號へ紙を積んだ報知が來てゐるが、横濱へ上げずに神戸へ降ろすやうになるかも知れない。さうすれば　僕が、神戸まで行つてきたいと思ふ。そして、關西の様子でも見て來よう。メイデーも今年は、關西の方が、こちらよりは盛であつたやうだ。あの日、君は、示威行列を見たかね」と、武井は、言つた。

小澤は、灰色の雲が、都會の空低く垂れて、いまにも雨になりさうな模様であつた。センチメンタルな日のことを忘れることができなかつた。彼は　町の角に立つて、都會の中を横切つて行く、無産階級の長い列と、そして、彼等の歌つて行く××歌の節とを聞いてゐるうちに、いつとはなしに、ステプニヤツクや、ゴルキイの作にあらはれてゐるやうな、遠いロシヤと、その時分の鐵鎖に繋がれた革命家の面影などが　想像されて涙ぐましい氣持になつたのであるが……そして、その日は、夜になつてから　ついに雨となつた。傷ましい晝間の、新綠に風が、吹いてゐた、その光景まで眼の中に動いてゐる。

「あゝ、見たとも」と、彼は、答へた。

「木島は、あの列の中に加つたさうだね」

「あれは、感心だよ」

木島は、ちやうど、この時、階下へ行つたらしかつた。あちらには、三田が、一人で何か仕事をしてゐた。武井と小

澤の言葉は、低かつたので、あちらへは、何を話してゐるのかよく分らなかつたにちがひない。

「もとより、あんな少年に、むづかしい理論なんか分らう筈はないが、ちやんと自分達は結束して、これから正しい社會を造らなければならぬ、義務があることだけは、分つてゐるのだ」と、小澤は、言つた。

「どれ程、はつきりした階級意識があるのか、そんなことは分るものでない。みんな少年時代には、相當の理想があるのだ。また、世の中が、全く、美しく見えもするのだ。しかし、駄目だ。人間が駄目なのだ。畢竟、慾望には打勝つことができないからだ」と、武井は、小澤に向つて、あまり信じ過ぎてはならないといふやうに言つた。彼の青白い顔には、いつもの皮肉な笑ひがあつた。それが、相手をして、冷酷な人間と思はせるのである。

「君は、破壊的にか、さもなければ、否定的にしかものを見ないためだ。少年の純眞と生長を疑つてはならないだらう」と、小澤は、武井と話をする最後は、いつも、かうして議論になると思ひながら言つた。

「木島と三田に、こゝにある寫眞を見せてやらうかな」と、武井は、内懐ろを探つて、手帳を出し、其の間に挾んであつた、一枚の小形の寫眞を出して、ちよつと小澤に示して、また、いつまでも晒らすのが、氣まり惡さうに、それを上衣のポケツトに隠した。小澤は、ちよつとしか見なかつたのであるが、目に殘つた白いところは、柔らかな、ふくらみのある血の出る肉體の部分だつた。

「よしたまへ、それは、よくない、いたづらといふものだ」と、小澤は、眞面目に言つた。

小澤は、やはり、少年時代に、奇怪な繪を見たばかりに、それがいつまでも頭からとれなくて、惱まされたことを、記憶してゐるのであつた。

武井は、意地惡るさうな眼付をして、にたにたと笑つてゐた。

「君は、いつでも、そんなものを持つて歩いてゐるのか?」と、小澤は、呆れたといはんばかりに、武井の顔を見ら言つた。

しかし、武井は、から言はれると、却つて態度に平氣を裝つた。

「露骨過ぎて、痛快ぢやないかね。さうは思はないか? 僕は、思ふんだ。これを見ると ――man is animal―― all man is mortal――といふことが、はつきりするのだ」

武井は、冷かに笑つた。

小澤は、人生を、さう思ひ定めてゐるらしい彼が、皮肉を言つたり、破壞しやうとしたりするのは、決して、面白いからでなく、彼自からが、呪はれた存在であると知るとさびしい氣がして、悲しまずにはゐられなかつた。

「あ、時に、塚田の近狀を君は、まだ知るまい?」と、武井は、新らしい興味の緣をそこに見出したといはぬばかりだつた。

彼が、愉快さうに見えるのは、何等かの、暗黑な事實を探り出した時だけである。

「塚田君は、外廻りが忙しいと見えて、ちつとも出て來ないね」

「それどころぢやないよ。ピストルを持つて、血眼になつて、細君を探して歩いてゐるのだ。細君が、逃げたんでね」

と、武井は、落付いて、語つた。

小澤は、いつか、彼の口から、社長と關係のあるやうに、聞いたことを思ひ出した。それに、いま社長が留守なので、この兩者を結び付けて、ちよつと空想して見ずにゐられなかつた。

「どうして?」と、小澤は、眼を見張つた。

「塚田を、厭やになつたのさ、うしろについてゐる者があるのだらう」

「それは、誰か、分らない？」

「恐らく、一人や、二人ではなからうからね」と、武井は、無造作に答へた。

小澤は、どんな風の細君であるか、まだ一度も見なかつたのである。この話を聞いたゞけでは、たゞ、顔や、姿を自分勝手に想像するに過ぎなかつた。

「塚田と彼女と知り合つたのも、塚田が、病氣をして病院に入つてゐる時、看護婦をしてゐて、たま／＼看護婦仲から、來たのだといふぢやないか。その前に、すでに幾人男を知つてゐたか知れない。何しろ、尻の輕い女なのだよ。そのために、塚田は、學校を中途で廢してしまつたのださうだ」

「細君は、どこへ行つたか、分らないのかね？」と、小澤は、たづねた。

武井は、扇子で、胸のあたりへ風を送りながら、皮肉な笑ひを顔に浮べて、

「昨日、塚田に遇つたのだ。細君が淺草の劇場にゐるといふから、これから、探しに行つて見るんだといつて、眼の色を變へてゐたよ。あれからどうしたか……」と、武井は、その時の光景を思ひ出すやうな様子に見えた。

「女優にでも、なつたのか知らん」

「それも、たしかに、そこにゐるか、ゐないか分らんのさ。よく似た女を見たと、ある人が告げたからといふだけなのだから……しかし、きつと、その人の言つた女かも知れないよ」と、武井は、それに對して、何等か自信あるもの、やうに言つたのである。

「もし、細君を見つけたら、殺す氣だらうかね」と、小澤は、今朝の新聞の社會面には、まだそんな記事が出てゐなか

つたと思ひながら、言つた。

「なに、そんなことはないだらう。無理に、家へ引摺つて來るのが、あの男のしさうなことだ。そして、自分が惡かつたと言つて、女の前へ手をついて、あやまる位なもんだよ」と、武井は、さも、それを蔑すむやうに言つた。

「まさか、そんなこともすまい」

小澤は、武井の言ふごとく、事件が運ぶものと限つてはゐないと考へた。この都會の裡でどれ程、毎日のやうに、怖しい血を流すやうな慘劇が演じられてゐるか分らないからだ。さういふ事實を、彼は、新聞の上で見てゐたからである。

「ほんとうに、塚田は、見付けたらうか……」と、小澤は、言つた。

武井が、立つて、自分のテーブルの上から、何か、書いたものを手に取り上げて、あちらのタイプライターの前に行つて腰かけて、それを歐文に打ちはじめた時まで、小澤は、なほ念頭から、塚田のことを忘れることができなかつた。

彼の眼には、暗い顏をして、額際から汗を滴らしながら、默つて、埃を浴びて歩るいてゐる、背の低い塚田の姿が浮んだ。赤い旗や、紫の旗が錯雜してゐる狹い路次を、群集は、活動寫眞の看板繪を仰いだり、また、顏に濃く白粉を塗つて、大きな眼ばかり動いてゐる疲れた女給達を見やりながら、享樂氣分に浸つて、歩るいてゐる間も、塚田は、獨り、血腥い想像をめぐらしながら、歩いてゐる姿が見えたのであつた。

しばらくの間、武井が、タイプライターを打つ音だけが、してゐた。

久しぶりに出て來た、學校時代の友達が、歸るのを小澤は、東京驛まで送つて行つた。

「また、二三年も逢はれないだらうね」と、友達は、待合室で、煙草を吸ひながら、名殘りを惜しむやうに、言つた。

この時、小澤は、硝子窓を透して、外の光線の漲る海の中へ、消えてゆく俥や、自動車や、人間の影などを瞪視しながら、瞬間の後には、この都會の生活から、友の姿は、消えるのだと思つた。そのかはり、友は、別のところで、自分達の知ることのできない環境の中で笑つたり、話をしたりするのだ。そして、また、二年、三年、四年……顏を見ることもなく過るのだ。

こんなことを考へると、たとへ、友人とはいつても、平常は、たゞ心の眼に、その顏の浮ぶだけであつて、實際に、逢つて話をするのは、一生を通じてさへ、實に僅かの時間にすぎないと知ると、いまさら、人生の孤獨なことを感じたのである。

それから、切符を買つて、プラツトホームを出て、汽車に、友は乘り込み、別れの言葉を交はし合つて、帽子を脫いで振つたりするまで、僅かな時間に、いろ／＼な慌しさを感じさせられたのである。ほんとうに、彼が、會社にゐても、また、宿にゐても、机に倚りかゝつて、とりとめのない空想に耽つてゐる時間よりも、まだ短い間ではあるが。

小澤は、いつも、かうして、一刻、一刻に、生活の實感を、味ふことが、できるものなら、人間の一生は、決して短くなく、實に長いものだといふことを感じた。そして、「時」は、永久に變らない同じ時なのである。まさしく、その時を消費する人間によつて、短かくも感ずれば、また長くも感ずるのであつた……こんなことを彼は、頭の中に空想しながら、人ごみの中を分けて外へ出たのであつた。

五六歩ばかり、踏みだしてから、彼は、思はず立止つた。社長が、いま着た汽車で、大阪から歸つて來たからだ。そ

して、あちらで自動車を呼んで、それに乘らうとしてゐる。あとから、若いハイカラな婦人が、うすい、肉色のベールを、顏にかけたのが、いつしよに乘り込んだ。彼は、もつと近づいて、それを凝視する暇がなかつた。なぜなら、青い煙を吐いて、自動車は、たゞ煙だけを後に殘して、もう、その影は、だん／＼遠ざかつて、霞んでしまつたからだ。

――あれは、塚川の妻君ぢやないか？

彼は、かう思つた刹那、見るべからざるものを見たやうな、忘れやうと思つても、眼から、拂拭することのできない印象を殘したやうな、それは、後悔に近い不快な感じであつた。もし、想像した如く事實とすれば、怖しいことであり、また、憫むべきことであつた。

――どうか、別な人間であつてくれゝばいゝ。

彼は、かう思つたのであつた。しかし、どういふものか、あの女は、塚川の妻君のやうな氣がしてならなかつた。二人があゝして、不義の快樂に耽つてゐるのだ。彼は、そんなことを氣にすまいとした。全く、知らない、また、見ない時分の心でありたいと思つた。なぜなら、それに對して、苦痛を覺えるからだ。彼は、思ふまいとして、また、頭の中に思つてゐた。そのたびに、自分の魂までが、溺れて、汚されてゐるやうであつた。

公園の並木は、風の襲ひ來るたびに、小さな齒を閃かす如く、細かな葉が笑つてゐた。いつか空には雲が湧き出て、日の光が、遮られたり、照つたりしてゐた。その變るまゝに、足許の花壇に咲いてゐる、赤い花が、かつと明るく火の點いたやうに見えたり、また、さびしく、哀しげに暗くさへ見えるのであつた。彼は、ベンチの上に腰を下ろした。そして、遠方の、まだ雲のかゝつてゐない、青く晴れてゐる、晩方の空を望みながら、女の乘つてゐる汽車は、いま頃、いづこのあたりを走つてゐるだらうなどと思つた。

公園から、彼は、去ると街の賑かな通りの方へと歩るいて行つた。この時、電燈はきら／＼と輝いてゐたが、暗い空からは、細かな雨が落ちて來た。人々は、急ぎ足になり、くる電車は、どれも、どれも滿員であつた。彼は、たちまちのうちに、街の中が、傘をさしてゐる人々で、いつぱいになつたのを見た。そして、傘をさゝないで歩るいてゐるやうな人は、一人も見えなかつた。

――いつたい、傘の用意もせずに、往來してゐた、あの人達は、みんなどこへ行つたのだらうと、驚かされたのである。そして、彼ばかりは、雨にぬれながら、俯向きがちに歩るいてゐた。

――どこか、その邊に、カフエーがあらう。そこへ、はいつて、少しばかり休んで行かう……。

自動車の、二つの大きな眼は、きら／＼と光つて、闇を照らしたのであつた。その自動車は、街の角を曲らうとした。彼は、立どまつて、これを避けてゐると、ヘツドライトに照らされた、闇の一部分が明るく浮き出て網目のやうに、雨脚が交錯して見えた。しかも、その細い銀色の絲は、車體の起した風で、霧を起して、茫として、煙つてゐる如くであつた。

それは、彼に、たまらなく、美しいものに見えた。さう考へる間にも、先刻、自動車へ乘り込んだ、社長と若い婦人の姿とが、目先に浮んで、この社會には、幾多のかうした忌はしい事實があるであらうと思ふと、都會そのものが持つ、魅力のある娼婦のやうな誘惑に、彼は、若い血潮の惱みを感じたと共に、心臟の喘ぐのを覺えた。

ちやうど、小澤が、これを見てから、二三ケ月の後であつた。塚田は、細君からの手紙を受取つた。

その手紙には、獨りゐることは、さびしくて堪えられない。藝術に身を捧げようと思つて、十日ばかりといふもの、朝は早くから、夜は遲くまで、ダンスの稽古や、獨唱の練習を、お友達に勵まされながらやつてゐるが、家のことを考へ出すと、こんなことをしてゐるのも、つまらないことのやうに思はれて、いまゝでの考へが全く夢であつたやうな氣がする……と、いふやうなことが書かれてあつた。そして、差出したところは、やはり淺草からであつた。

塚田は、この手紙を讀むうちに、彼女と戀し合つた、はじめの頃の涙ぐんだ、しほらしい彼女の姿をば、こゝに二たび見るやうな氣持がした。そして、きつと、不自由をして、困つてゐるのだらうと同情するのであつた。

——どんな室で、どんな風に、暮らしてゐるだらうか？　そんなに、女優になりたけれや、さうと俺に言へばいゝものを。

そして、彼は、淺草の劇場で、彼女を見たといつた人の言葉が、間違つてゐなかつたことを知つた。

彼は、すぐに、出かける仕度をしながら、彼女のところへ行つて、否應なしに、つれて歸らなければならないと思つた。彼は、いまゝで絶望し、またいろ〳〵に杞憂したことを顧みた。あんなに、慌てなくてよかつたのだと、二たび自分のふところに、歸つて來る可愛らしい小鳥をなつかしむような目つきをしながら思つた。が、ふと、また、ある疑念をさしはさんだ。

——もし、このまゝで過ぎたら、そして、あいつが困つてゐるのを知つて、もつと金のある、また、やさしくする男があいつに寄り添つたら、二人の間は、どうなつたか知れない。

から考へると、彼は、嫉妬にちかい、憎惡に燃えたのであつた。そして、いくら、彼女を擲り、また苛んでも、自分の感情が、癒されないやうに思つた。

彼は、驅け出すやうにして、家から出た。

塚田夫婦は、また、いまゝでの安に、以前のやうな生活をくり返へすことになつた。

「うちのやつは、あれで、十日ばかりも女優の稽古をしてきたんだ」

塚田は、細君のしばらく家出をした事情を辯解するやうに、また、それを、ハイカラな細君を持つ自慢のやうに、社へ來ても、吹聽したのであつた。

小澤は、これを聞くと、默つて、苦笑してゐた。

ある日、三田と小澤の他には、誰もゐなかつたときであつた。三田は、小澤の傍へやつて來た。

小澤は、につこりと少年を見て微笑しながら、

「毎晩學校へ行つてゐるのかね」と、先づ、こちらからたづねた。

「行つてゐます」と、神經質らしい、眼のうるんだ少年は、小澤の笑顔に答へるやうに笑つて、言つた。

「夜は、おそくなるだらう」

「しかし、九時に、終つても、この頃は、まだ、宵のうちです。街の通りへ出ますと、人がぞろ／＼歩るいてゐます」

「木島君は、どうしたか、來ないな」と、大きな方の少年が見えなかつたので、小澤は、思ひ出したやうに聞いた

「今日は、少し用事があるからといつて、昨日社長に斷つてゐました」

「この頃は、會社も商賣の方は暇だから、仕事がなくて樂だらう。三田君は、時々、活動へでも行つて見るかね」と、

小澤は、別に、しなければならぬ事がなかつたから、この少年を相手に話してゐた。

武井は、皮肉を言ふのと、それに、どこか冷たく感ずるので、打解けて話にくかつたけれど、小澤に對しては、木島も三田も、何となく親しみを感じてゐるのであつた。

「小澤さん、みずてんといふのは、どういふことでせうか」と、不意に、三田が、顔を赤くして、たづねた。

「みずてん？」と小澤は、きゝかへした。

三田は、思つたとほりを、何となく言つたのが氣恥かしさうに、

「藝者のことを、よく、みずてんと言ひますが……」と、たづねた。

小澤は、曾て、木島の口から、三田の姉は、藝妓になつてゐるとか、聞いたことを、思ひ出した。そして、すぐに、返事をしかねたのであつた。

「僕にも、成程、さういふが、ほんとうの意味は、分らんのだ」と、小澤は、言つた。

三田は、小澤の顔を見ながら、頬のあたりを染めて、

「嘘でせう。小澤さんは、知つてゐらつしやるのでせう」と、半ば、それを疑ひながら、きつと、よくない意味であるから、答へるのを憚かるのだと察したらしかつた。

「いや、そんなことはないが……きかなくても、君にだつて、分る時があるよ」と、小澤は、言つた。

「分りました」と、三田は、小さな聲で、答へた。そして、自分の定まつた場處の方へ、戻つて行つた。

少年の頭には、大抵その意味が、推察された。しかし、自分の姉に限つては、あり得ないことだ。全く、自分の信ずる姉に限つて、そんなことが空想されるものか？　却つて、そんなことを考へるのが、怖しい、また、罪悪の如く感じられた。

彼は、たゞ、せんだつて、ちよつと、叔父の家へやつて來た。姉が、すつかり見違へるやうになつて、立派な着物を着て――田舎に、父と二人で暮らしてゐた時分には、着物などは粗末であつたが、きりゝとした姿で、朝から、晩まで、

よく家のために働いてゐたことを思ひ出した。それにくらべると、なんとなく、様子がけばけばしく、急に偏いきお嬢れて、ちがつた人間のやうであつたことが思ひ出された。その時、姉の顔を、しみ〴〵と見ると、もとのやうに、澄んで、すぐに自分の心にまで射し込んだ清らかな光りがなくなつて、どことなく、顔も青白く、馬鹿に肥えたやうに見えたのさへ、自分の姉ながら、厭悪な氣持を抱かされたのであつた。

彼は、そのときのことを、考へるとたまらなく、惱ましかつた。ぼんやりと眼を窓の方に向けて、空想に、耽つてゐた。

「三田君、いつしよに歸らない？　今日は、もう社長は、出て來ない筈だ。ご馳走をするから、晩方まで、僕の下宿で遊んで行きたまへ」と、小澤は、歸らうとしながら、三田の傍まで來て、言つた。

やがて、小澤と三田の二人は、梯子段を降りて、青い建物から、外へ出て行つた。

歐洲戰爭後、不景氣の波が、日本へも押寄せてくるだらうとは、かねてから豫期されたのであつた。あまり、一時は、好景氣であつたゞけに怖れられた。しかし、その當座は、殆んど杞憂に過ぎなかつた。かつて新聞の經濟欄や、また、學者等が言つた程の影響を感ずることができなかつた。そして、街には、ます〳〵華澤な身なりをした、女が歩るいてゐた。自動車の數も、おびたゞしく增していつた。爲替相場は降らなかつた。獨逸が經濟的の破滅をしかゝつてゐるといふ情報をたび〳〵耳にしても、また、佛國の貨幣が下落をしても、日本の圓價値は、五十弗の上を出てゐた。貿易商は、居ながら利德にあづかつてゐた譯である。

社長は、時々、夕飯を食べに、武井と小澤と塚田をつれて、晩方、社から外へ出かけて行つた。社長は一處ではすまず、次には、きつと待合に寄つて、あらためて飲むのであつた。彼には、なじみの待合があつた。そして、そこへ行けば、やはり、幾人もあつた、なじみの藝妓を、その時の氣分で、どれかを、かはる〲呼ぶのであつた。三人は、かうした、社長の遊び振りを見せつけられた譯であるが、こんな處に來ると、塚田が、一番圖々しく振舞つた、武井は、相變らず、皮肉な笑ひを浮べて、批評的に見てゐた。小澤は誰の機嫌も損じたくなかつたので、たゞ、はやく自由になれることを欲するといふ風であつた。

「お酒を、持つてきてくれ」と、塚田は、だらしなく醉つても、未だ盃を手から放さなかつた。そして、藝妓が、三味線を彈かうが、彈くまいが、自分の口から出まかせに、うたひつゞけた。

「三田の姉が、こゝで藝妓をしてゐるといふ話だが、なんといふのか、君達は、知つてゐるだらう」と、赤い顏をして、社長は、大きな腹を前へ突き出して、兩手をうしろにつきながら言つた。

「武井君は、知つてゐる筈だ」と、塚田が、口を挾んだ。

「なんといふの？」と、この時、前に坐つてゐた藝妓のうちの一人が、ふところから、小さな鏡をだして自分の顏をうつしてゐたが、それを胸のあたりにはさんで言つた。

「僕が、そんなことを知るものか」と、武井はほんのりと赤味を眼許に含んで、冷たく笑ひながら答へた。

「いや、君は、さういふことにかけては、なか〱拔目がないよ」と、塚田は、朦朧とした目つきをしながら執拗に言つた。

「誰か、知らないかな」と、社長は、給仕の姉をこゝへ呼んで見ることに、興味を感じてゐるらしかつた。

小澤は、獨り、默つてゐたが、目の前に、いぢらしい少年の姿があり〳〵として浮んだ。この純な少年の心に對して、そのことは限りない侮辱であつた。彼は、やがて、その姉が呼ばれたら來ないでもあらうが、それを見るに忍びなかつた。そして、こゝにゐる女は、すべて金のために、自由を持たない女達だと思ふと、一層憐れむ心が湧いてきた。

「それは、よしたがいゝでせう」と、小澤は、眞面目な氣持で、言つた。

「いゝぢやないか」と、武井は、そんなことは問題にするに足らないといふ調子だつた。

「呼びたまへ、同情心があるから呼ぶんだ。どうせ、誰の前へだつて、出るんぢやないか」と、塚田は言つた。

「三田が、聞いたら、泣くだらうから、よした方がいゝ。彼の感情も、尊重してやりたまへ」と、小澤は、言つた。

この座は、なんとなく白けた。

「さあ、彈きますから、何か、おうたひなさいよ」と、藝妓は、撥をとつて、三味線の調子を合はせた。

社長のなじみの藝妓といふのは、まだ若かつた。社長の傍を離れずに、紅い袖口から、ダイヤモンドの光る、白い手を出して、指の間に、煙草をはさんで、ぷか〳〵喫つてゐた。眼の大きい、細面の女であつた。もう一人は、それよりは、ずと年増であつたが、三味線もよく彈けば、とりなしも上手であつた。この女が三味線をひきはじめると、もう一人ゐる束髪に結つた、紫色の派手な裾模様のついた着物をきたのが、酒をついでゐたのであつた。この女ばかりは、誰が、盃をやつても、それを受けなかつた。そして、顏は、蠟のやうに、青味を帶んでゐた。

みんなは、その女について、どう思つたか知らないが、小澤は、女が、病氣にかゝつてゐると思つた。彼は、病毒がこの若い、美しい女の皮膚を犯かして、それから、だん〳〵と全身に喰ひ込んで行く、經過などを想像してゐると、いつか痛ましさを通り越して、自分の身に戰慄さへ覺えたのである。

年が明けて、春にはいつてから、つひに不景氣が市場を襲つた。それは、可なり根本的のものであるやうに經は觀測された。

會社には、社長の弟といふ人が、新たに、社長の秘書格で入社することになつた。この人は、長い間、處々で、放浪の生活をして來たといふ以外に、まだ誰も、その人について、くはしく知るものがなかつた。三十二三で、脊が高く、兄弟でも、社長と反對に痩せてゐる方で、頭髮が、額際で卷いてゐた。そして、隼のやうな鋭い眼が、尖つた鼻の上にいつも輝いてゐた。彼は、薫の高い葉卷をくはいて、よく、この世の中の、見たり、聞いたりした、いろ〳〵の面白いことを、大きな聲で、みんなのゐる前で話した。

「高崎の商人が、岩越境の山林を三千圓で買つた。松や、樅や、雜木などで、なかには四五尺廻はりの大木もある。昔から、まだ手がはいらないといふのだから、鬱蒼として繁つてゐる。一本五十錢にもあたらないので、薪木にしても、また、炭にしても充分儲かる見込みで、先方の言葉を信じて買つてしまつた。里へ三里たらずといふのだから、東京へ材木として、運搬するつもりだつた。ところが行つて見ると、先方の言つたことに、間違ひはないが、その三里の道ときたら、車も通らない、嶮阻な道でとても、夏は切り出すことができないので、冬になるのを待つてゐた。ところが、このあたりは、雪が深いので、降りはじめたと思ふと直に、一晩のうちにも、三尺、四尺と積つてしまふ。それで、いまだに、手を着けずにゐるが、二千圓でも、千五百圓でも買手があつたら賣つてしまふと買手をさがしてゐると聞いたが、不景氣になつて、勞働賃金が下落したら、儲けの中から、それ位の資本は造作なく浮ばれないものでもない」

彼は、こんなやうな話をするかと思ふと、

「不景氣がきたといつて、みんなは怖ろしがるが、相場と同じやうなもので、一方に下落をして損をする者があれば、

一方には、またこれを利用して儲けてゐる人間がある。要するに、その機會をいゝようにさへ利用すればいゝのだ。たゞ、手を拱いて、傍觀するのでは、いつになつたつて儲ける口などはあるものでない」と、言つた。

彼の話を聞いてゐる者は、いつしか、聞いてゐるうちに、眞理があるなと、話の中に、惹きいれられてしまふのであつた。

彼は、かうして、しやべらない時分は、窓際に居て、硝子戸越しに、さびしさうな面持で、遠い空を、ぢつとながめてゐることもあつた。過ぎ去つたことを空想するやうに、また、あてもなく憧がれてゐるやうにも見えるのであつた。

ある朝、小澤も、武井も、この會社に勤めて彼の顏を知るものは、悉く驚いた。どの新聞にも、「少年の自殺」として三田が、郊外線で轢死したことを報じてゐたからだ。その時間は、前夜の十時頃で、場所は、ちやうど下車や、人間が通る、ガードから、僅かに一丁足らず離れたところであつた。そして、叔父の談話として載せられたのを見ると、――數年前から、姉と弟の二人は、兩親を喪つて以來、出京して、叔父の許に、引取られ、いま姉は、他へ奉公して、弟は、S貿易會社の給仕をつとめ、毎朝早く出勤し、歸途は夜學に行つて、おとなしい性質のため、叱るやうなこともなく、この日も、いつもと同じく出かけたのであつた。原因として、思ひ當る程のこともないが、たゞ子供心に、死んだ兩親が戀しくなり、さびしい身の上を悲觀したゝめでなかつたか？人の好さうな叔父は、涙を流してゐた。――と、談話の後には、短かく、記者の筆で、その場の光景が書かれてゐた。

流石に、武井も、このことに對しては、皮肉に笑ふことができたかつた。彼は、新聞を手から離して、しばらく瞳の

方を向いて、默想してゐた。

いつしか、彼の目には、ずつと、昔のある夏の日のことが浮んだ。彼女と言ひ爭つて、しまいに、彼女が、「ら　妾は、死んでしまいます。」と、跣で外へ驅け出たことがあつた。その時、彼女は、姙娠してゐたのだが――そして、その子供は、あくる月、流産してしまつたのである

少年の死と、何の關係もない、そんな、過去の幻想が浮んだ。彼は、いつになく、しんみりとした氣持になつて涙ぐんだ。そして、その時だけは、彼も、學校を出たばかりの青春時代の彼に、返つたのであつた。

小澤は、同じ朝、新聞を下宿で見ながら、

「叔父は、姉を奉公してゐるといつて、なぜ藝妓になつてゐると言はなかつたのだらう？　もし、眞に、人の好い叔父であるなら、率直にほんたうのことを言ふべき筈である。三田が死んだ、兩親を戀しがつて、悲しみのあまりに自殺したやうに言つてゐるが、これは、どうしても腑に落ちないことだ」

小澤は、獨りで自分に言いながら、叔父の語つたことを否定したのであつた。

會社に出てきて、木島が、話したのをきいて、一切は分つた。

――當日、暮方、社から歸る時に、二人の少年は、つれ立つて歩るいて行つた。

ちやうど、學期の變り目で、二人とも、學校は、休みであつた。

「活動へ行つて見ようか。神田のS館は、面白さうだぜ。僕は、探偵ものもいゝが、北極探險なんかの方は、ずつと面白いよ。實際の景色なんだからね」と、木島が、誘うように言つた。

三田は、すぐに、返事をしなかつた。何となく、沈み勝に、足許を見つめてゐた。

「いやかえ？」と、圓い顔の木島は、無理にも同意を促すように見られた。

「僕は、姉さんにあひたいのだ」と、三田は、低い聲で答へた。

「君、夜行つても、いゝのかえ」と木島は、曾て通つた、藝妓街の夜の華かさと賑はしさとを、ふと思ひ出して言つたのである。

三田は、答へなかつた。

「ぢや、そのあたりまで、いつしよに行かう」と、木島は、言つた。

ある土手の上へ、さしかゝると、櫻の花が滿開であつた。しつとりと、暗く暮れていつた晩春の夜空に、乳色の、花は浮き出てゐるのであつた。

「八重櫻だね」

「櫻の花は、ちつとも香はないね」

「甘いやうな匂ひがするだらう」

「君は、するかえ、僕には、ちつともしないよ」

「なぜ、櫻を、花の中で一番綺麗だといふんだらうね」と、木島が、言つた。

「僕は、櫻よりも、梅の花がすきだ。いゝ香ひがするから」と、三田は、その香ひから、何ものか連想するやうに、なつかしげに答へた。

あちらの低地には、町の灯が、群がつて、一つ、一つ、美しく輝いてゐるのであつた。そこには、靠るやうに神秘の霧がかゝつてゐて、その中から、笑ひ聲と、白い顏と、自動車の笛聲などが起つて來るやうな氣がした。

「僕は、こゝから、電車に乘つて歸るから」と木島は、三田を顧みながら、言つた、
「ぢや、失敬」と、言つて、三田は、電車路を横切つて、あちらへ、一人で歩るいて行つた。木島は、少し來てから、うしろ姿を振返へると、ちやうど三田の振り向いた、白い顏が、うす闇の中に、ほんのりと見えた。やがて、その小さい姿は、もつと濃い、また、大きい、たえず動きつゝあつた、いろ〳〵の影のために、防げられて、見えなくなつてしまつた。

木島は、三田と社をいつしよに出てから、別れ際までのことを、加賀に語つた。そして、言葉をつゞけて、
「三田君は、姉さんのことばかり、いつも言つてゐましたから、あの晩姉さんとの間に、何かあつたでないでせうか？しかし、姉さんは、三田君を可愛がつてゐると、三田君は、いつて、ゐました」と言つた。

小澤と武井が、彼の話をきいてゐたのであるが、小澤は、さも感慨深さうに、
「姉さんのことを思つてゐたのは、無理もあるまい。三田君に、とつては、たゞ一人の姉さんなんだからな」と言つた。

小澤は、いつか、自分の分らない言葉の意味を問うたことがあつたのを思ひ出した。そして、その日、歸りに、自分の下宿へいつしよに來て、晩方まで遊んで行つたのであつた。……

小澤は、まだ、寢てゐたのである。ある雜誌に寄稿するために、前夜は、おそくまで机に向つてゐたから、すでに、日が高かつたけれど、いつになく、よく眠つてゐた。

そこへ、武井が、やつて來た。
「もう、起きても、いゝ時分だから、起して下さい」と、武井は、下宿の女中に向つて言つた。
室の裡の、空氣は蒸されてゐた。女中が、窓を開けると、小澤は、眼をこすりながら、自分で床を片附けて、すぐに顔を洗ひに行つた。その間に室の中は、さつぱりと掃除された。そして、武井は、火のはいつてゐない、青つぽい瀬戸の火鉢を前にして坐つて、煙草を喫つてゐた。
「君、今日は、朝寢ぼうをしてね、失敬しました」と、小澤は、笑ひながら、挨拶をしてから、女中の持つてきた茶を武井にすゝめた。
武井は、いつになく、改まつた調子で、
「小澤君、僕は、急に、大阪へ行くことになつた。あちらで、こんど新らしく經濟雜誌が出るので、友人といつしよにそれをやらうと思ふのだ」と、言つた。
「それは、いゝことだ。雜誌なんかの方が、君には適してゐる。僕達が、こんな實業方面にたづさはつてゐるのは、間違なんだ。つひ口がないもんだから、やつてゐたもの〻、あの會社だつて、もう、これからは、どうなるか分らない」
と、小澤は言つた。
武井は、冷かな笑ひを顔に浮べながら、
「山師なんだよ、あの時分は、誰が、何をしたつて、景氣がよかつたから、儲かつたのだ。もう、これからは、さうはいかない。君は、どう思ふか知れないが、社長の弟は、一萬五千圓の金を持つて、あれは、逃げたのだよ。社長は、うまく、だまされたんだね。もう一度、うんと儲けようなどと思つて、すつかりやられてしまつたのだ。自分の爲か、ど

んな人間であるかといふことも、金が儲かる話になると、全く忘れて、盲目になつてしまふと見えるね」

「弟の言つたことは、みんな嘘なのか？」と、小澤は、眼を見張つた。

「製紙會社へ交渉したことや、また、建築會社で、材木を引受けるといつたことなど、それは、事實だらう。塚田が、交渉に行つた時も先方では、品物さへ着いたら引換へに金を拂ふといつたさうだ。それは、嘘でないにしても、樺太の深林を拂下げてもらふといふことは、どうだか、疑はしいと思つてゐる」と、武井は、言つた。

小澤は、あの頭髪の額際に卷いた、鼻頭の尖つた弟が、會社へ出てきて、みんなのゐる前で、演說でもするやうに、先方の周旋人から、檢べて書いてよこした樹木の概算などを示しながら、

「材木にして、船で輸送して、こちらへ陸上げするまでの一際の費用を見積つて、差引いて見ても、莫大な利益が上がるのです。たとへ、みんなパルプにしてしまつても、儲かります。これは、すぐに、きめに私が行つて來ませう。製紙會社へ交渉しても、建築會社へ聞いて見ても、どちらも、荷さへ見たら、金を渡すと言ひますから、この方は、心配はいらないのです。たゞ、一月ばかりの間、會社の資本を運轉すればいゝ譯です……」と、彼は、言つた。

小澤は、その當時のことを思ひ出した。そして、それから、四五日の後に、弟は、樺太に向つて出發したのであつた。

「君は、弟が、金を持つて、逃げてしまつたといふのか？」と、小澤は、遙かに、武井の言が信じられないやうに、彼の顏を見詰た。

「カムチヤツカか、ニコライエフスクの方へでも渡つて、何かするつもりだらう。そして、儲かつたら、兄の方へ借りた金を返へせばいゝといふ位に思つてゐるだらう。何にしても、あの弟は、怪物だよ」

「さうかなあ、それで、君は、大阪の方へは、いつ頃立つのだね」と、小澤は、つひに、武井とも別れなければならぬ

時が來たかと思つた。

「昨夜、社長のところへ行つて話したら、さういふ都合なら仕方もないが、弟の歸つてくるまでゐてくれないかと言ふのだけれど、それは、いつのことか分らないから、僕は、今晩にも立つつもりでゐる」と、武井は、もはや、この土地には、さまで、未練がないといはぬばかりの樣子であつた。

「そんなに早く……」と、小澤は、言つた。

それから、二人は、いつしよに、小澤の下宿を出て、街の方へと話しながら歩るいた。町は日の下に輝いてゐた。

「お別れに、ビールでも飲まう……」と、小澤は、武井をかへり見て言ひながら、自分が先になつて、傍のこさつぱりとした鳥屋へ上つた。

武井は、大阪に行つてしまつた。

社長の弟からは、武井の言つた如く、全く、音信が杜絶えたのである。社長は、搜索願を出したり、自分で出かけたり、大騒ぎをしたが、結局、會社の破産に、終つてしまつた。

青い建物の二階のその室は、やがて、他の人達が借りてきて、異つた職業の事務所になつたのである。そして、僅かな間に、みんなの境遇に變化があつた。塚田は、ある實業會社へはいつて、ちやうど、いまゝでと同じやうな仕事をしてゐる。そして、小澤は、新聞社の編輯にはいつたのであつた。

「木島は、どうしたらう？」と、小澤は、よく木島のことを思ひ出した。

もう、夏が來かゝつてゐた。空には、白い雲が、光つて見えた。

休日のこと、小澤は、下宿にゐて、窓の裡で寢ころんで煙草をふかしながら、ぼんやりと窓の外を眺めてゐた。女中が、手紙を持つて來た。彼は、それを手に受け取つて、S丸にて、木島と書いてあるのを、ぢつと見て、

「木島は、船乘りになつたのか？」と、ひとり言をしながら、四角な封筒を切つた。

彼は、それを讀んだ。

「……あの後、私は、試驗をうけて、船員になり、いま、S丸に乘つてゐます。臺灣や、北海道へも行きました。はじめのうちは眼がまはつたり、あらしの時は、醉ひましたが、もう、いまでは、なれてなんともありません。こんど、米國から、英國の方まで行くことになりました。太平洋のまんなかに出て、空と雲と波ばかりを見ます時は、言ひ知れぬ悲壯を感じます。男子は、すべからく、海を家として、世界的に働くべきだ。と思ひます。ことに、月夜の時は、すてきです。小澤さんに、一度見せてあげたいと思います。

私が、この手紙を書いてゐると、ケビンに置いてある、ゼラニユムの紅い花びらが、風に吹かれて、小鳥の心臟のやうに、ひら／＼と動いてゐます。こんど日本へ歸る時は、土産を持つて行きます。黑い煙をあげて、船は、南へ、南へと走つてゐます。御自愛を祈ります」

小澤は、ゐずまひを直して、思つた。

「未來は、この少年の前に微笑してゐるやうだ。それに、くらべて俺達の生活はどうだらう……俺達も、まだ、若いんだが？」

—一九二四・五作—



橋本氏の半生

宮地嘉六

上

『俺はお前達にまだ話したことがなかつたかのう。俺がはじめて東京へやつて來た時分のことだが……。』

『え、まだ一度も聞きませんよ。』妻君は云つた。

『その時分俺は二十だつた。東京の街にはまだ電車がなかつた。鐵道馬車がのろ〱馳つてゐた頃だつた。第一に俺は東京へ來てそば屋で失敗した。何をあげます。と聞くから、柱を見ると、もりかけ三錢と書いてある。で俺は、もりかけをくれと云つたのぢや。』

『まあ、いやなお父さん。』娘は母親と一緒に箸を置いて笑つた。一家は晩餐をしてゐた。

『おそば屋ではこまつたでせう、あなた。』

『九州の俺の國ぢや、もりとか、かけとか云はないんだ。此方は分らないから書いてある通りに云つたんだ。』

『關東近在の人なら、どんな田舍者だつて、もりかけをくれなんてとんちんかんなことは云ひませんよ——そして、そば屋ではどうしました。』

『なあに、女中の方で氣をきかせて、もり一つにかけを一つお膳にのせて持つて來よつた。此方は知らないから、東京ではかうして食べさせるんだなと思つて平氣で食べちまつたんだ。あとで大笑ひさ。』

平常氣むづかしい主人は時々一家晩餐のお膳についてゐる間に家人をくつろがせる爲めのやうに、そんな馬鹿話しをするくせがあつた。主人は別の高膳で、ちびり／＼晩酌をやりながら話した。

『あの時分はよく腹がすいたものだ。九州男子だ。馬車なんかに乘るものか、どこへ行くにもてく／＼で押し通してゐたもんだから、腹はいつもぺこ／＼だつた。その頃の俺の理想的人物と云へば、浪六の小説中の當世五人男ぢやつた。俺は東京へ來ると早速その五人男が共同生活をしてゐたと云ふ千住の方の汐入村へ、京橋八丁堀からとこ／＼歩いて行つた。何でも二三時間かゝつたらう。村の小川の岸で百姓のおかみさんが畑からとつて來たばかりの大根をせつせと洗つてをつたから——おかみさん、ちよつとお尋ねします。此のへんが汐入村と云ふのですか——はいさうでごわす——と云ふから、此のへんに四五人で苦學をしてをつた書生がございませんでしたか、と藪から棒に訊ねたものだ。おかみさんは——さあどうだかね。聞きませんがねえ……と云ふわけだ——』

『お父さんのそんなお話しははじめて聞くわ。隨分變り者だつたのねえ、お父さん。それからどうなすつたの。』十六になる娘は父親のきげんの好いのを見て頻りにさきを聞きたがつた。

『それからお父さんは間もなく東京がいやになつて、東海道を歩いて關西の方へ都落ちをした。』

『まあ……東海道を歩いて……その時分は汽車はなかつてお父さん』

『汽車はあつたさ。だが歩いて行つて見たかつたんだ。』

『まあ……』

橋本氏は妻君と娘とを前に置いて思ひ出を味ふやうに晩酌の杯をほしながら語るのであつた。今から三十年の昔のことであるが、ついさき頃のことのやうにも思へるのであつた。丁度藝術家がその初期の幼稚な習作をとり出して見る時のやうに、橋本氏は自分の二十前後の心の姿に對しては一種の羞恥となつかしさと、嫌悪をさへ覺えるのであつた。都會にあこがれる地方の青年の多くが考へるやうに、彼もまた、その頃東京へ行くと云ふそのことが一つの偉いことのやうに考へられ、東京で生活すると云ふことゝ成功と云ふことを一緒に考へたものであつた。東京で生活してゐる人間は乞食でも囚人でも勞働者でも偉い特別な人間のやうに思はれたものであつた。

『京橋八丁堀の幸町、あのへんも今度も震災ですつかり燒けてしまつたが、あのへんは俺が最初東京に來た時に身を落ちつけた町ぢやつた。豆腐屋と質屋の土藏との間の陋路のつきあたりに三島屋と云ふ小さな下宿屋があつたが、其でも同じ下宿屋に一緒にゐた同郷人の鍛冶と云ふ友達が俺より三四ケ月さきに東京へ來てその下宿屋にゐたのぢや。俺もそこに置いて貰ふことにして、そこから芝の田町の富岡鐵工場と云ふ工場まで雨にも風にも毎日通つたが、築地をぬけて新橋へ出る近道を知らぬもんだから、八丁堀から京橋へ出て、それから銀座を通つて一直線に歩いたが、高輪の手前の田町まで大股で一時間半かゝつたものぢや。朝は六時前に下宿屋を出て、やつと七時頃、田町の工場へ行きついて、それから十二時間の勞働をすまして夜の十一時頃下宿屋へ歸りつく。隨分疲れはしたが九州男子と云ふので三ケ月ほどやり通した。歸りは先づ田町から金杉橋まで來てひと息、それから新橋まで來てひと息、銀座を通らなければ東京にゐる

甲斐がないやうな氣がしたので、築地へぬける道を敎はつてからも銀座をわざ〳〵通つたものだ。或る夜、俺が此方側の步道を大股で歩いて歸つてゐると、向ふ側の步道を俺と同年ぐらゐの書生が、大股でさつさと俺と同じ方へ歩いて行くのを見た。それから速度の競爭が始まつた。京橋へ行きつくまで双方とも大股でどん〳〵やつつけたが、その時分は今ほどには人通りが多くなかつたものか、それとも夜の十時過ぎで人通りがへつてゐたものか、俺はその時の向ふ側の書生の姿を今でもあり〳〵と思ひ出すことが出來るよ。』

『その書生も九州男子だつたかも知れませんよ、あなた。おつほほほ。』妻君は笑ひながら云つた。

『隨分やんちやだつたのねえお父さんは・・その頃のお父さんはどんなでしたらう。見たいわ、わたし。二十だつたら、家に來る三河屋の御用きゝくらゐだわねえお母さん。』娘の京子は云つた。

『もつとお背が高かつたでせうよ。お父さんは今だつてのつぽうだもの。』

『俺はその時分から背は高かつた。その翌年、兵隊へとられる時は五尺六寸一分だつた。力も强かつたせいかその時分、家の柱を見るといきなりぐいと力いつぱいで押して見たい癖があつた。八丁堀幸町の下宿屋などは、俺が柱につかまつて一押しぐいとやると、むり〳〵つと云つたものだ。むり〳〵云はせてゆすぶるもんだから下宿屋の主人が二階へ上つて來たことがあつた。』

橋本氏の昔ばなしには大分かけ値もあつた。彼自身はさも勇壯活潑な、意志の鞏固な大力無双な九州男子の典型的若者でででもあつたやうに云ふのであるが、その實は意志の薄弱な、女性的な、無謀な、ものに感じ易い青年だつたのである。何事にも最初は熱心で、そして直ぐにうんざりしてしまふ若者であつた。その若者は勞働のかたはら學問をするつもりで東京へ來た。八丁堀幸町から芝の田町の鐵工場へ毎日てくで通つて勞働した。初めは下宿屋の主人も感心した。

或る日若者は工場でミーリングを使ひながら歯車の音に合せて思ひだしたやうに都々逸を唄つた。自分でもびつくりするほど間ぬけな頓狂な聲で。

『わたしが悪くばあやまりましよが……』

『誰だ、仕事中に唄ふのは……』技師が事務所から怒鳴つた。技師は嚴格な人物だつた。唄つた若者は顔をまつかにして俯向いた。その技師はかね〴〵彼に好意を持つてゐてくれた上長であつただけに若者はひどく慚愧した。終日彼は非常に悪いことでもしたやうに默々として仕事をした。翌朝は氣を持ち直して工場へ向つたが工場の門口まで行くと急に足が進まなく〳〵なつた。で若者は辨當箱を持つたまゝぶら〳〵とあらぬ方向へ歩いて行つた。高輪へんの屋敷町には櫻の花がこぼれ落ちて春も終りに近い朝の日影が幸福さうな門構への家々に昇りかけてゐた。若者は自分が工場で終日、くすぶつて働いてゐる間に春は過ぎつゝあつたことを知つた。そしてその日一日を白山にのび〳〵と歩き暮すことを自分に許した。若者は山の手の門構への中流の家々を見ると、その門の標札に特別の注意を拂つた。東京に二十年前から來てゐる伯父の住居をどうかして見出したかつたのである。伯父と云ふのは彼の母の兄であつた。その伯父は彼が生れる前年に上京した。彼はそのことを叔母から聞いてゐた。そして彼の想像では伯父は醫學校を卒業して立派な醫者となつて此の東京にゐる筈であつた。然し何故その伯父は故郷の弟妹その他に十數年間音信を斷つてゐたのか、それが彼にも一つの疑問だつた。若者は終日、足の向くまゝに靜かな山の手の町々を歩き廻つた。そして夕日が西に落ちる頃になつて、彼は一日を無爲に暮したと云ふ心弱い悔いと不安と疲れとを覺えて宿へ急いだ。

『明日からは決して工場を休んだりしないぞ。俺は奮闘しなければならぬ。』と若者は心に誓つた。

然しその翌日もその鐵工場の機械場には若者の姿は見えなかつた。

神田の末廣町にペンキ塗のうまい看板屋があつた。或る日その看板屋の前に三時間餘も立止つて、看板繪を描いてゐる畫工と、その畫工が一筆／＼加へるごとにみごとな風景畫が浮き出して來るその畫面とを、かたみに熱心に見てゐる一人の通りすがりの若者があつた。その若者は絣の袷を着て、鳥打帽を被つて、きたない下駄をはいて、小脇に空の辨當箱を抱いてゐた。――それが彼であつた。

或る日のこと、芝公園の丸山の、杉木立に圍まれた山頂の廣場で喇叭隊が一小隊ほど來て教官の軍曹の指揮で喇叭の吹奏を練修してゐた。そのまはりには、子供等や、赤ん坊を負ぶつた色白のおかみさんやが見物してゐた。春の陽はもう西空にあつた。向ふの廣場では學生達がジヤケツ一枚になつてテニスをやつてゐた。好男子の軍曹と、どれもこれも皆似よつたやうなまづい日にやけた顔の兵卒の一列と、赤ん坊を負ぶつて頬笑ながら見物してゐる色白のおかみさんとを、或る獨自の觀念を持つて眺めてゐる一人の若者があつた――それは彼であつた。

更にまた或る日のこと、大川端で一人の投身自殺者が石垣の下に引きあげられてゐた。水上警察署の警官や檢屍係や人夫がそのまはりに立つてゐた。石垣の上には見物人が集つてゐた。死人はまだ二十代の若者であつた。『何故自殺をしたのだらう……』さう呟きながら暗い不安な思ひと、その不安を防がうとする自警の念とを持つて眺めてゐる一人の若者があつた――それは彼であつた。

彼は一日工場を缺勤した爲めに氣を狂はせてしまつた。毎朝工場へ行く氣で下宿屋を出るには出たが、工場の近くまで行くと何となく氣が進まないのであつた。そしては、ぐれ休みを續けた。公園をぶらついたり、隅田川のほとりをぶらついて待乳山八幡の境内で晝食の辨當を喰べたりしては日が暮れてから宿へ歸るのであつた。不安な思ひは日に日に彼の心を暗く包んだ。東京と云ふ彼の戀人は彼の不健全な弱志と無知な惑溺とに對しては失戀を酬いた。彼は東京にゐ

ながら日に日に東京に捨てられつゝある自分を悲しみを以て見た。悲哀と憂愁の情緒を日に日に深めた。

突然國の叔母夫婦が彼の宿へ訪ねて來た。此の叔母夫婦は國で洋服屋をしてゐた。羅紗問屋との取引の爲めに東京見物旁々來たのであつた。新橋の衆屋館と云ふその頃の一流の宿屋に叔母夫婦は滞在してゐた。叔母の亭主はフロツクコートなどを着て薄い口髭をさへ生やしてゐた。一見地方の小都會の洋服屋の主人のやうではなかつた。下宿屋の主人夫婦は彼にかうした叔母夫婦があることとで彼を見直した。叔母夫婦は玄關に立つたまゝ下宿屋の二階に上らうともしなかつた。そのまゝ一緒に新橋の旅館へ來るやうにと彼に云つた。若者は云はれる通りにした。彼は昨日までの不安な思ひを一掃した。叔母夫婦と云ふ不意の味方を得て彼は遂に勢ひついた。彼は二臺の機關車に曳かれて行く小さな貨車のやうに叔母夫婦の後に從つて旅館へ行つた。そして下宿屋の暗い二階から見あきた東京を、一流の旅館の三階の窓から初めて彼は見下したのであつた。彼は恰も強者のやうに見渡した。昨日まで彼に不安と憂愁との他に與へなかつた華やかな東京は彼にお辭儀をしてゐるやうにも見えるのだつた。

『勞働をしながら夜學校へ行くちふ考へはよかろう。心がけ一つで人間はどぎやんでもなれるから、しつかりやらんば。』

『はい……』

『今が一番大事な時ぢやけん、立派な人間になつてくれんばならぬたい……』叔母は云つた。若者は旅館の風呂へ入つてそれから夕飯をよばれた。彼は十才から十二才まで此の叔母夫婦のもとにひきとられて裁縫職人にならうとしたこともあつた。仕立屋がきらひになつて實家に歸つてからは宿屋の小僧、それから下駄屋の小僧、それから佐世保へ出奔して造船廠の機械工見習、それから……。

彼は叔母夫婦からそこで初めて伯父の所在を聞いた。彼の想像とは全く異つた伯父の身の上を叔母は彼に語り聞せた。叔母は良人の前でその兄の身の上について憂鬱な調子で慨嘆した。彼も初めて伯父のことを聞いてうなだれた。牢獄と云ふ一語で伯父に對する彼の一切の想像は灰色に變つた。立派な醫者として、尠くも一個の醫者として伯父を此の大都會の中に想像することの誇りを失はねばならなかつた。

『子供の時分は近所のほめられ者ぢやつたと云ふのに、何としたことか、ほんにまあ……』叔母は嘆息した。

『立派に使へる頭を持ちながら……』叔母の亭主も云つた。

その翌日、若者と彼と叔母とは巣鴨監獄署の門前に立つた。二人は高い煉瓦の外壁と、更に高い〱いかめしい潜り門とを見上げて、それ以上近寄る氣力を失つた。二人は同じやうに小さく吐息をするだけであつた。やがて赤い囚衣の罪人が門内から列をなして出て來た。彼等は笠を被つてゐた。彼等は二人づゝで畚を擔いでゐた。腰の鎖の音がした。彼等は看守に曳かれながら外壁に沿ふて行つた。二人はそれを眺めてまた同じやうに默つて吐息をした。やがて若者だけ一人で門の方へ進んで行つた。そして彼は、かゝる場所で誰もがする恐縮の表情を以て伯父の罪名や刑期を門衛に調べて貰つた。

『罪名は詐欺――』と門衛は高聲で云つた『刑期は十ケ年――放免は本年七月――』と更に云ひ足した『面會は午前中に手續をすれば出來る。日曜は許可せぬ。』

門衛の高聲だけを聞いてゐると、その若者はひどく何か叱られてでもゐるやうに見えるのであつた。叔母は心配さうにその方を見やつてゐた。彼女の顏色は蒼ざめてその若作りな姿態はしよんぼりと崩れてゐた。間もなく甥は彼女の佇んでゐる方へ戻つて來た。そして告げた。

『一度ならずのことぢやもの、死んだ人間と思つてあきらめませう。』叔母は力なく云つた。

甥はそれには答へなかつた。彼等は親肉の墓を訪ねた人のやうに直ぐにはそこを去りかねて外壁の周圍を見やつた。そゞろ歩きをしながら、幾度か外壁をふり返り〳〵した。若者は一人でかう考へるのだつた。

『あゝ伯父でさへ此の東京でそのやうなことになつたのだ。子供の時分から近所のほめられ者であつた伯父でさへ…』

そして彼は伯父を例として今は自分の弱い意志に見きりをつけたくなつた。さうでなくてさへ失ひかけてゐた弱い信念を彼は自から投げ棄てたくなつた。自分も此の東京に長くゐる間には……と考へた。そのうちにだん〳〵墮落するかも分らない……と云ふ怖れを彼は自から深めるのであつた。彼は畫家にもなりたかつた、文學をも勉强しようと思つた。工場の技師になる爲めに工手學校へも入學しようと思つてゐた。然しさうした漠然とした望みに對して彼はその時から一層臆病な批判者となつた。

叔母夫婦は一週間ほど滯在して去つた。それから間もなく若者は獄中の伯父に手紙を送つた。

『拜啓、未見の伯父さまよ。私はあなたの妹なるコト子の一子でございます。伯父さまが數十年前に故郷を出られて、此の東京で御勉學なさつてをられることは幼少の時分から聞いてをりました。母上のコト子は私が二才の時になくなりました。そのことは伯父さまも御存じのことゝ存じます。私は本年二月此の東京へやつてまゐりました。伯父さまの出獄の日をお待ちしてをります。何卒おからだをお大切に遊ばされますやう……』

此の手紙は叔母夫婦からの頼みを果す爲めであつた。彼は伯父の出獄を待つて伯父と對面し、そして伯父についての委細を報告することの役目を半ば自から進んで受けたのであつた。然し伯父からは何の返事も來なかつた。彼は七月が近づくと共に出獄の伯父に對する想像を一層深刻にした。彼は未見の伯父を待ち受けると云ふなつかしさよりも、未獄

と云ふ墓場から這ひ出して來る伯父のぶきみな幽靈を待つ心地であつた。大都會の下町には陰濕な梅雨期が過ぎて烈しい暑さの夏が來た。すると國の叔母からは趣きの變つた手紙が來た。伯父が出獄して訪ねて來ても對面せぬやうにとの手紙であつた。

『――お前樣も伯父樣のやうな身の上にならぬやうに堅固な心を持つて勉强なさるやうくれ〴〵も祈りをり候。來年はお前樣も徴兵檢査を受けねばならぬことゆゑ、歸國されては如何なものに候哉、そちらですますやう手續きなされ候哉、學問も大切なれど、お前樣にはきかいの方の手職もあるゆゑ、その方を熱心に勉强されるがよろしきかと存じ候。こちらにも機械工場は幾つも出來て、主人の知り合ひの工場もあるゆゑ、お前樣を歸國させてその工場へ入れたいなど丶主人も申しをられ候。お前樣も兩親はなく、それに長男のことゆゑ、なるべくは國元にて身を定められては如何に候哉、兎も角御身御大切にお暮しのほど祈り上げ候――』

叔母の手紙は彼の弱志にとつて甚だ好都合であつた。單に東京で暮してゐると云ふ無意味な誇りを持つ爲めにすら、あらゆる衰弊な都會人の生活を見せつけられ、青春のあらゆる慾念と實感とを自から撲殺し、あらゆる刺戟の被害者たることの屈辱と哀愁と憂欝との惱みに堪へ、なほその上に、いたましい人間の運命の多樣な標本を見て戰慄し、そして無形の笞に苛まれることであつたのだ。九州男子を以て任じた若者は半年た丶ざるに東京の威力にへこたれた。自分の陷る前途の深淵を豫感した。孔雀の群れの中の鷄たらんよりも鷄群の中の鷄であることの安易を思ふのであつた。

七月は來た。然し伯父らしい人は彼の宿を訪ねては來なかつた。一葉のはがきすら來なかつた。それにしても彼が獄中へ送つた手紙はどうなつたか。それは無論伯父の手に渡つたに相違ない……。

橋本氏は此所まで當時のことを回想する間に晩酌の德利を一本あけてしまつた。

『俺とその友達はそれから間もなく八丁堀幸町の下宿屋を引き上げて越前堀のお岩稲荷の直ぐ横手の小さな駄菓子屋の二階で自炊生活をすることになつたのぢや。その駄菓子屋は婆さんと爺さんと二人きりぢやつたが、爺さんは長わづらひで下の暗い部屋に寢たきりで、ごほん〳〵と力のない咳をしとつた。婆さんは毎日、近所の子供相手に駄菓子をあきなひながら内職の熨斗を折つてゐた。何でも武士のなれの果てで、戸口の標札には『神奈川縣士族何々』と書いてあつたが、二刀流の達人と云ふことぢやつた。或る晩、俺が石川島の工場から歸ると、まことにすみませんが、ちよつと橋本さんお手を貸して下さいよ。と婆さんが云ふのぢや。病人が寢がへりをしたいと云ふので、抱へて向きを變へてくれと云ふ頼みぢやつた。俺は何でもないことだと思ふて氣輕に寢てゐるお爺さんに跨がつて脚の方と首の方とをかゝへたのぢや。痩せ衰えてしまつてゐたのでまるで藁で作つた人形のやう輕かつた。それはよかつたが何とも云へない臭ひがしたには閉口した。然しそれからは度々お爺さんを抱へてやつたものぢやつた……』橋本氏は妙に感慨を深めながら話した後『その駄菓子屋の二階にゐる間に夜中にとんだ面白いあわて方をしたことがあつた。よくねいつて俺が何か夢を見てゐると誰か俺の耳に口を押つつけて『橋本……橋本……』と云ふのぢや、ほつと眼をさますと、一緒に寢てゐる友達の鍛治がしつかりと俺の首つ玉を抱きしめて聲を殺して俺をよんでゐたのぢや。どうした……と云ふと、あの音を聞け……どろぼうだぞ……と云ふ。で俺もじつと聞き耳をたてると、二階の壁か雨戸かをきり破つてゐるやうな、がり〳〵云ふ音がしてゐた。俺も氣味が惡かつたが、思ひきつて、エヘン……と一つやつた。すると音がひたりと止んだ。それから五分ほどして、音がそれきりしなくなつたので二人は跳ね起きたのぢや。電燈をとぼして、鍛治が押入を開けた。カバンがない！と鍛治が叫んだ。俺もそこを見た。全く鍛治のカバンがなかつた。今度は一方の押入を開けた。すると俺の行李はあつたのぢや。鍛治はがつかりしてゐるので俺はもう一度そつちの押入を開けて見たのぢや――ところが不

思議に、さつき見た時になかつたカバンがそこにちやんと入つてるのちや、おいある。おかしいなあ。二人共手品にかかつたやうだつた。慌ててしまつてゐたのちや。それから二人で窓の雨戸をしらべて見まわつたり、押入の物を全部引きずり出したりして、どこかに、どろぼうがきり破つて入らうとした痕はないかと捜して見た。すると椽側の隅の米櫃のところに木屑がいつぱい散らかつてゐた――鼠だつた…と云ふわけちや……』

『まあ慌て者の九州男子がそろつたものですねえ、おつほつほ…』妻君は笑ひながら云つた。娘も口をあんぐりさせて笑つた。

下

『その翌年に日露戰爭が始まつた。』と橋本氏は語り續けた『お父さんは要塞砲兵にとられて下の關の火の山砲台の守備隊に編入されて、高い山のてつぺんで寒い北風に吹かれて新兵教育を受けたちや。』

『砲兵つてどんなことをするのお父さん。』京子は云つた。母娘はもう食事をすませてゐた。

『砲兵つてのは大砲をうつ兵隊さ。お父さんは重砲兵ちやつた。うちの座敷にある瀬戸の火鉢ほど大きい大砲が、その砲台には二十門ほど据ゑつけてあつたが、それをたつた三十秒で彈丸を塡めて發射することの練習を毎日やつたものちや。お父さんは一番選手ちやつた。身が輕くつて何をしても敏捷ぢやつた。機械を扱ひ馴れてゐたから大砲に彈丸を塡めて、閉鎖器をしめるまでの動作が誰よりも早かつたのちや。』

『閉鎖器てなに……』

『女の子のくせに此の人は……だまつてお父さんのお話しを聞いてたら好いちやないか……』母親は云つた。

『分らないところは聞いたつて好いぢやないのお母さん。ねえお父さん……』娘は母親に云ひ返した『露西亞兵と戰爭したんですの、お父さんも。』

『戰地にはとう〳〵行かなんだ。そいでも日本海の海戰の時は砲口を全部日本海の方へ向けて戰鬪準備をしたぢや。遠くの海で砲聲が翌朝までしてゐた……』

橋本氏はこんな昔話をしてゐると晩酌の度を思はず過ごすのだつた。一兵卒の最左翼だつた者でも曾て銃を擔ひ劍をさげたと云ふことを自分の傳記中に書き落したくはないものだ。そして人はどんないやな過去の生活にも價値を附けたがる健忘症を持つてゐる。橋本氏の生涯は殆ど惡夢の連續であつた。中でも軍隊生活の一年間が最もさうであつた。彼は乙種の補充兵として工場から兵營に引き出されたのであつた。

或る日のこと、中隊本部からの達しがあつた。兩親なく、兄弟なき戶主である者は申し出ろ。と云ふ達しであつた。その時五人の新兵は申し出た。彼等は何の爲めに中隊本部からさう云ふ達しが來たかをめい〳〵心ではひそかに豫感し得た。除隊になることだ……と思つた。あゝ若しもさう云ふことになつてくれたら……と一人の新兵は山上の烈しい練兵中にも思つた。吹雪の中で長時間の駈足をしながらも思つた。猛烈な砲臺教練中にも思つた。練兵が終つてからも思つた。消燈喇叭が鳴つてバラックの全兵舍が寢しづまつてからも思つた。翌日も思つた。また練兵中にも思つた。練兵が終つてから酒保のカタパンをかじりながら冬の夜空の星を仰いでは思つた。

『お星さま、どうか私が除隊になりますやうに……私は戰地へ送られて死にたくはありません……私には兩親も兄弟もありません……ひとりぼつちの人間ですよ……お星樣彼女は私が戰地へ行つたと聞けばどんなに失望するでせう……私が戰死したら屹度彼女も死ぬでせう……お星樣……私を除隊にして下さい……私は除隊になつたらどんな苦しい生活で

も耐忍します……ねえお星様……あなたは屹度私を救つてくださるに違ひありません。……ありがたうございます、お星様……』その若い新兵はカタパンをかじりながら、唇にカタパンの砕けらをつけたまゝ空の星を仰向いて云ふのであつた。そして幾日かの後に除隊命令によつて戰友の多くに別れを告げて此の砲臺を去る時の嬉しさを心に描いて見るのであつた。

『屹度俺は除隊になるであらう。……』

然し一週間たつても、二週間たつても除隊命令は來なかつた。それどころか練兵は日に日に猛烈の度を加へた。此の山上の補充新兵は一日も早く鍊えあげて旅順の總攻擊に送り出さねばならぬと云ふので重砲の教練を急いだ。

遂に除隊が空望に終つたと知るとその新兵は落膽した。然し間もなく彼は自から氣を取り直すことが出來た。一人の友達からの手紙は彼の女々しい心を鞭撻するに力あつた。

『拜啓貴兄益々軍務に御精勵慶賀に堪へず候當十二師團步兵第三中隊は愈々來る△△日戰地へ出發致すことに相成小生の歡喜お察し下され度候越前堀の自炊生活當時の如く鼠の音を盜賊のそれと誤り驚くやうな失態は最早斷じてあるまじく九州男子の面目を示すの時は此の際と奮起勇躍……云々』と書いた手紙であつた。

『あゝ彼は戰地へ行くのか……』新兵は自分の臆病が恥しかつた『俺は除隊を空の星に祈つた。そして今は一日も早く止戰になることを祈つてゐる……』と彼は自分を輕蔑した。然し彼は更に臆病な心を以て、九州男子にあるまじきことをさへ考へるやうになつた。それは十二珊加農砲の操縱の時に思ひきつて揚彈機の齒輪に拇指を一本嚙ませたら……と云ふ妄想――彼は此のことを一週間ほど每晩寢てから考へるのであつた。

十二珊加農砲の砲手は九名と定つてゐた。その定員九名は各々持場が別れてゐた。一番砲手は閉鎖器の開閉を、二番

砲手は装薬と揚弾器から釣りあげられて来る弾丸を、三番砲手は照準を、四番五番の砲手は砲塔轉回を、六番七番は揚弾機を、八番は弾丸運びを、九番は装薬の運搬を、それ〳〵その兵士の體質、性格、頭腦、動作の敏捷によつて適當する持ち場を與へられるのであつた。然し實戰の場合、一番砲手が斃れた時は二番砲手がそれに代り、各砲手は一順位置を變へることになつてゐた。さて、その砲台では、やがて戰地へ送るべき新兵に毎日のやうに大教練を施した。大教練の際は特に各班は優秀な一番砲手を選んだ。装塡から、放射までの時間の競爭であつたからである。それに劣敗することは砲手の不名譽であるばかりでなく班の不名譽とした。同時に優勝を得ることは砲手の名譽であり班の名譽であつた。云ふまでもなく優劣の定まるところは定員砲手の聯合的動作の訓練如何にあつた。中でも一番砲手の敏捷さに待たねばならなかつた。一番砲手の敏捷を要するところは閉鎖器の開閉にあつた。開閉器に飛びついてからの電光石火的動作にあつた。閉鎖器のハンドルを三回廻すことの素早さにあつた。然し教練の際のさうした機械的動作にすぐれてゐた兵士でも冬の夜空の星を仰いで『お星さまよ……除隊になりますやうに…』とくり返し女々しい祈願をしてゐたのであつた。そして更に思ひを進めて、その重砲の揚弾機の歯輪で母指を切斷しようとまで……。

『この指を一本めちや〳〵にすれば俺は除隊になるに定つてゐる……』とその新兵は考へた。幾晩も考へた……。

橋本氏は此所まで回想して、ふと杯を持つてゐる手を、じつと眺めた。彼は今日になつて見ると、杯を支へてゐるその右の手の母指に大變すまないやうな、そしてわびたいやうな氣持がするのであつた。

『お父さんお酒がこぼれるわ。』

『うむ……。』橋本氏は娘に注意されてそのまゝ杯を口へ持つて行つてぐいとほしてしまつた。そしてなほも當時の回想を續けるのであつた。

『明日大教練がなければ、普通教練ならば一順位置を替への號令で俺は六番砲手に代はることが出來るであらう・・・そしてあの揚彈機に就く・・・七番砲手と二人でウインチのハンドルを廻す・・・俺は誰も氣づかないやうにすきを見定めて・・・』彼はそこまで寢ながら幾度か考へた。そしてその犧牲なるべき母指を、そつと片方の手で握つて見るのであつた。

『ガリツと音がして此の指の骨はぐたぐたになるのだ・・・だがほんの一瞬間の事だ・・・自殺することを思へば何でもない。俺はそれで直ぐ除隊になる・・・切斷された指は二週間たてば生え立ての松茸のやうになほつてしまふであらう・・・俺はこれまで機械工場でミーリングや旋盤を使つて來た・・・作業中にこれまで一度もけがをしなかつたのが不思議なくらゐだ・・・旋盤の齒輪で指を噛まれたものは旋盤師の中には澤山あるのに、俺だけは無事で來た・・・こんなことになるくらゐだつたら工場で指一本ぐらゐけがしてゐてもよかつた・・・』と彼は考へるのであつた。

『然しながら・・・』と彼はまた考へた『若しも故意に揚彈機で指を噛まれたことが分つたならば・・・そのやうな前例が此の軍隊内には澤山これまであつたとすれば・・・多くの前例にてらして直ぐに軍隊避忌の行爲と認定されたら・・・されるかも知れぬ・・・その時自分はどこまでもさうでないと云ひ張り得るか・・・然し軍隊はそれほど甘いところと汝は思つてゐたのか！と俺は大喝されるであらう・・・軍法會議・・・衛戍監獄・・・あゝいけないいけない・・・』

彼はそこまで思ひ及ぶと妄想を一掃した。そしてそれまでの妄想と全く反對の空想に向つた。出征――旅順總攻撃――重砲兵の一番砲手――名譽の――戰功――間もなく休戰――平和克復――金鵄勳章功七級――凱旋除隊――九州男子の模範――鄕黨の歡迎――叔父や叔母の嬉し淚の目――愛する從妹との結婚――彼は加速度にそこまで考へた。彼は戰地へ送られてからの勇ましい自分を更に進んで空想するのであつた。總攻撃の砲煙彈雨を思ひ描いて見るのであつた。

『流彈アン……千二百アク……各砲舎急ぎ射てえツ……』

戸外では冬の夜風がすさまじく吹き出して彼が寝てゐる第三班のバラツク兵舎の廂の、日頃から毀れてぶら〳〵下つて、はづれかけてゐるトタンのとひが、がらん、ばらん、がらん……と鳴つてゐるのであつた。夜風はヒユーと鳴りを立てゝ山上の兵舎をます〳〵強く叩きつけてゐるのであつた。その音が恰度、彼が寝床で思ひ描いてゐる旅順總攻撃の砲烟彈雨の光景にそつくりはまつて聞えるのであつた。敵彈の小さな破片が彼の額の一方にあたつて掠めた。彼はそれをものともせずに一番砲手として敏速に彈丸を裝塡してゐるのであつた。額から血がたら〳〵と流れた。額から肩へかけて血だらけになつてゐるのだ……。

『一番砲手負傷、一順位置を替へえツ……』

『砲臺長殿！私は微傷であります。此のまゝ續けさせて下さい！』

『よろしい！ではそのまゝ續けろ！』

がらん、ばらん、がらん……と兵舎の外の廂のとひはます〳〵凄ましく風にあふられて鳴り續けてゐるのであつた。

夜嵐はヒユー……。

『彈丸命中……敵艦全滅ウー・射ち方止めえー……トテ〳〵〳〵トウウ・・』

『あゝさうだ……さう行かなければならぬのだ……さう行かなければならぬ。なにくそ、やつて見せるぞ……』

彼はさうした空想にひどく昂奮した。そしてやがて疲れて眠りに陷つるのだつた。

日曜日には外出した。一人で町を歩いた。町には美しい女が通つてゐた。彼と同じ年頃の青年が通つてゐた。彼は商店の若い店員を見ても思つた。ステーションの若い驛夫を見ても思つた。

『あゝ彼等は幸福である。兵隊にもとられずに何と云ふ幸福な運のよい人間だ。……』

また意氣な衣服を着て町をぶらついてゐる若者を見ては思つた。

『自分は兵營で毎日追ひまくられて、そしてやがて戰地へやられようとしてゐるのに、あの若者は何と云ふ幸福な、間の好い男だらう。あんな好い體格を持つてゐて、どうして兵隊にとられずにすんだのだらう……』

また、向ふから來る若い男女の二人づれを見ては思つた。

『まるで戰爭のことなんか考へてもゐないやうだ。何と云ふ仕合せな奴だ。戰勝の公報を毎日新聞や號外で待ちうけて、のんきに生きてゐるのだ。何と云ふ運のよい人間だ。自分だつて軍隊へとられなかつたら、どんなことでも出來るのだ……工場で働きながらも日曜日には好きな衣服を着て町を歩いたこともあつたのだ。もう一度自分はさうした境遇に歸りたい。彼等のやうにして町を歩いて見たい。然し自分はやがて戰地へ行くであらう……』

或る日、練兵が終る時、中隊長は新兵一同に次のやうに訓諭した。

『汝等に注意して置くことがあるから聞け。當下の關には先頃から、東京の非戰論者の一派が入りこんで來て、兵士に向つて内密に非戰論的思想を宣傳しようとしてゐる。これは聯隊長殿からの注意であるが、汝等は決して日曜日に外出しても、それら非戰論者の一派に接近してはならぬ。好いか。決してそれら一派の云ふことに耳を貸してはならぬ。それら非戰論者は非國民的な奴等であるから、萬一それらの奴等を見つけたら此の中隊長に報告しろ。終り。』

彼はそれを聞いて考へた。その非戰論者と云ふのはどう云ふ思想を持つてゐるのであらう。と彼は想像して見るのであつた。或は自分の日頃の考へはそれらの非戰論者一派の思想に近いのではないだらうか、と思つた。そして、それら一派の意見を彼は知りたいやうな氣がするのであつた。

『俺は苦しい工場で働いて居た。然しその工場よりも數等殘酷な戰時の軍隊へ引き出された。そして俺は此の若い貴い命までも投げ出してゐる。俺は無論國家を愛する。日本と云ふ自分の國を愛する。然し國家は自分をこれまで愛してくれたであらうか。……』と考へた。『自分の愛する國家はこれまで自分に對して充分のパンをさへ與へてはくれなかつた。生活の不安をのみ感じさせた。失業の憂目を、束縛の苦痛を、脅威を、そして更に今は國家に對する義務を強いてゐるのである。自分は自分を充分愛してくれない國家を愛しなければならぬであらうか。自分をこれまで愛してくれなかつた國家に義務を盡さねばならぬのであらうか……いや自分はあくまで國家を愛する。祖國を、日本を愛する。今は愛する國家が外國との戰爭にまけてはならぬのだ。自分はそれを信ずる。だから、國家はもつと自分達を愛してくれねばならぬ筈だ……』と彼は考へた。

然し寒いつらい新兵生活の三ケ月は過ぎた。彼はまだ戰地へ送られることにはならなかつた。そして旅順陷落の捷報を聞いた。第一期の檢閲がすむ頃はもう暖い春であつた。砲台の胸墻にもいろ〳〵の草花が咲いた。陽炎がたつた。砲台の麓の村々は霞に明けて霞に暮れた。緋桃の花は草家のあひだ〳〵に紅絞りを見せ、青い麥畑と菜の花畑は山々の裾模様を染めなした。海は春の日の下に白帆を浮べて果て知れず煙り、遠近の島々は野に眠る臥牛の如く、或はその子牛の如く橫つてゐるのであつた。新兵等は時々砲台を下りてその麓の村落や綠の野で野外演習をした。旅順は陷落したが戰爭はいつ止むとも豫測出來なかつた。彼等補充新兵は、いづれ現役に繰りこまれるであらうとのことであつた。その爲め猛敎練を續けてゐるのであつた。

『現役に繰りこまれたら……』と彼は考へた『さうなれば戰爭が止んでも三年はゐなければならぬ……』

彼は早く戰地へやられたがよいと思つた。彼は自殺者たることを不名譽として厭ふ代りに戰死を望んだ。病死でもい

いと思つた。此の世に存在することは苦痛を續けることであり苦痛に堪へると云ふ勇氣は前途の光明に對してのみあり得ると彼は思つた。

彼は隊内の出兵動員の度毎に皆と共に志願した。然しその都度彼は殘された。

『自分はどうして選抜してくれないのだらう……中隊長殿は俺が臆病な人間であることを見ぬいてござるのではないだらうか。それとも……』と彼は思つた。

彼の專業は一期の檢閲後『觀測』の方と定つた。彼は砲を操縦することが得意であつたと共に觀測機を扱ふことに妙を得てゐた。加農砲の大教練の際、一番砲手として、裝塡から發射まで二十六秒と云ふ飛びきりの記録を作つてその爲め却つて中隊長殿に叱られたほどである。『汝の動作はなるほど早いが、動作ではない、まるで舞踏である。實戰の場合には却つてその早さが禍ひするのである。閉鎖器のハンドルを廻す時の早さはそれでよいが、閉鎖器を閉いてからの、藥莢の檢査は全くゼロである。も少し堅實なる動作を練習せよ。』

全く彼の一番砲手としての動作は拙速主義だつた。その早さに於ては群を抜いてゐたけれども實戰には向かなかつたに違ひない。彼はどこまでも戰闘員としては不適當な兵卒に出來てゐた。然し觀測の方では彼の速さは非難の餘地がなかつた。指示された目標を觀測器の測鏡内に直ぐにとり入れることが敏だつた。動目標、例へば海峽を通過する商船を指示された場合にも彼は觀測器の左右のハンドルを同時に廻して、それを素早く測鏡内にすひ込んで進行する汽船の速度を少しの不同もないやうに追跡し得た。それは彼にとつては工場にゐた時分にダライ盤の兩ハンドルを使ふ時の技術をそのまゝ應用することであつたから、何でもないことであつた。彼は練習の初日から古兵のやうにすぐにやれた。

彼はいつの出兵の場合にも取り殘された。彼ばかりではなく、觀測專業の兵卒は全部さうであつたのだ。そして出兵

のあることに補缺兵が町の聯隊の方から砲台の兵舎へ編入されて來た。聯隊から來る兵卒はどれも重砲の操縦方はへたであつた。彼等の中には現役兵もゐたが大抵ぼんくらが多かつた。彼等よりも後から入營した砲台の補充兵の方が重砲操縦にはすぐれてゐた。

或る夜、二人の展望所歩哨は次のやうなことを話し合つた。

『君は聯隊にゐたの。』かう訊ねたのは彼であつた。

二人は初めて複哨として一緒に立つたのであつた。

『あ。』

『君は現役かい。』

『うん。君は。』

『僕は補充兵だ。』

『補充か。そんなら戰爭が止めば直ぐ除隊にならあ。』

『だつて戰爭はなか／＼止みさうもないぢやないか。僕達補充兵も現役にくり上げるちふことぢや。』

『そんなことはないさ。もうバルチック艦隊をやつけて、遼陽を攻め落せばわけはない。山は見えてるよ。』

『さうかな。今年中に止むだらうか。』

『今年中には止むとも』現役兵は云つて『俺達は戰爭が止んでもあともう二年、あゝいやになるぞ。』

『君は兵隊に來るまで何をしとつたい。』

『俺かい。俺は役者だつた。』

『役者？新派の方のかい。』

『あ。』

『ほう……ぢや踊りがいけるだらう。』

『踊りは少しはやれるさ、だが新派にや踊りはさういらんからね。せりふが一番肝腎さ、見たまへ僕のこの聲は、せりふの稽古をしてからこんな聲になつたんだよ。よく通るだらう。女形は踊りから仕上げたものが多いが、僕は劍舞が得意さ。』

『ほう……新派は誰の一座にゐたのよ。』

『後藤の一座にもゐたし、伊藤文雄の一座にもゐたことがあるよ。』

『……後藤は好い役者だなあ。僕は大好きさ。君は多くどんな役を演つたい。』

『僕は不如歸では川島武雄をやつてゐた。乳姉妹では高濱勇……』

『好いねえ。君は好い役ばかり演つてゐたんだねえ。』

『僕は川島武雄が一番得意だつたさ。此の馬關の稲荷座でも演つたものだよ。稲荷町の藝者は大抵知つてゐるよ。』

『ほう……君は役者で何と云ふ名だつたい。』

『雲井富士男と云つた。後藤がつけてくれたんだ。僕は後藤に可愛がられてゐたんでねえ。兵隊にとられなかつたら、今頃は後藤について東京に行つてゐるんだが……』

『役者は好いだらうなあ。』

『好いよう、兵隊にゐるよりは遙かに好いよ。軍隊へ來てすつかり顏が黑くなつたもんだから、此の間稲荷町の知つた

藝者に逢つて笑はれた。』

『軍隊を出たらまた役者になるのかい。』

『あゝ無論…』

此の時週番士官らしい靴音が遠くから近づいて來た。劍と長靴とかち合ふ音が第一觀測所の方からだん〳〵近づいて來た。二人の歩哨はそれきり話しを止めた。

『誰か！ 止まれ！』歩哨は聲いつぱい勇敢に誰何した。もとより、その勇敢な誰何の聲は歩哨としての自分の勤務ぶりを上官に示す爲めのほや〳〵の新兵の形式的な洞聞聲に過ぎなかつた。そして歩哨は自分の聲に緊張したのである。

『週番士官――』と闇の中から近づいて來る黒影は悠々と答へた。そして胸墻の歩哨のところまで來るとかう云つた。

『歩哨、汝の誰何の仕方は間違つてゐる。初めに『止まれ』と云ふのだ。好いか。『誰か！』を先に云つたのでは『誰か』と聞きたゞしてゐる間に敵は一歩も二歩も近づいて來る。だから『止まれ…』を先に云はなくてはいけない。』

『はッ……』哨歩は不動の姿勢をとつて硬くなつた……。

バルチック艦隊の全滅と共に砲台守備は不必要となつた。そして戰爭はいよ〳〵終りに近づいた。砲台の兵士は年中行事の九月の實彈射擊演習を終ると間もなく全部町の營所に下りてしまつた。彼等は全く山育ちの新兵だつたので町の兵營に下るとまごついた。重砲操縱は得意であつた。廣い〳〵練兵場での横隊教練では最劣等と云ふことで聯隊中の笑ひものになつた。負けきらひの中隊長は躍起となつて毎日〳〵おそ蒔きの横隊教練の號令に聲を嗄らした。然し休戰公報で兵卒等の目の色は異つてゐた――休戰公報、出兵中止、講和談、豫後備の召集解除、補充兵の除隊……。

然し除隊になると共に彼は失業者であつた。戰爭中の工場の景氣の好い間彼は一兵卒として兵營にあつた。そして戰

爭が止んで工場が不景氣になつた時分に彼は再び工場に歸らねばならなかつた――就職の不安、生活の脅威、その實感は彼に何を敎へたであらう……。

橋本氏は此所まで回想すると殘りすくなになつた晩酌の杯をキユーと飲みほした。そして云つた。

『俺は丁度滿一ケ年兵隊にゐた。しまひの二ケ月はリユウマチに罹つて病院で暮したぢや、衞戍病院から野戰病院へ移されて、そこでは戰傷患者と一緒に一月ほどのんきに日を暮らした。野戰病院には澤山の篤志看護婦達がゐてのう。一人きれいなのがわしに親切にしてくれたぢや。夜中に、わしが寢てゐる寢臺のうしろを通る時は、かけ蒲團のずれてるのをいつも直して行つてくれたりしたものぢや。もうあの看護婦もすつかりお婆さんになつとることぢやらう、ああ人生は早いものぢや……』少し飲み過ぎた氣味で橋本氏は妙に感慨めいた調子で云つて『それよりも今思ひ出してもおかしくなることがある。衞戍病院から小倉の野戰病院に送られて行く時、患者は俺共に六人ぢやつたが、汽車の中で或る爺さんと嫗さんとが俺達の白い病院着を着て兵隊の帽子をかむつてゐるのを見てかう云ふのぢや。『戰地からござらつしやつた兵隊さんでがせうが、まあ、どこの戰爭で負傷しなさつたのか、お氣の毒なことぢや、ありがたいことぢや、まだ皆さんお若い兵隊さん達ぢやわい。……』かう云はれて俺はきまりが惡かつたから云つたのぢや『私等は戰地から來たのぢやありません。戰地で負傷したのぢやありません。』とさう云つたがそのお爺さんはほんとにしてくれんのぢや『いやいや、さうぢやごわすまい。戰地でいかい手柄をなすつてお歸りになるのでごわせう。日本の兵隊さんは例へ戰地で手柄をして歸つて來ても、さうぢやないとかくしなさるのが多がす。偉いものでがす。そのくらゐに偉いから露西亞に勝つたのでごわす、お國ではお待ちかねでござんせう、やれ〳〵、ありがたい〳〵……』俺達六人の補充兵の患者は互に顏を見合せて、仕方がないからその爺さんの云ふ通りになつてやつたぢや、そのお爺さんにありがたがられるよりは、

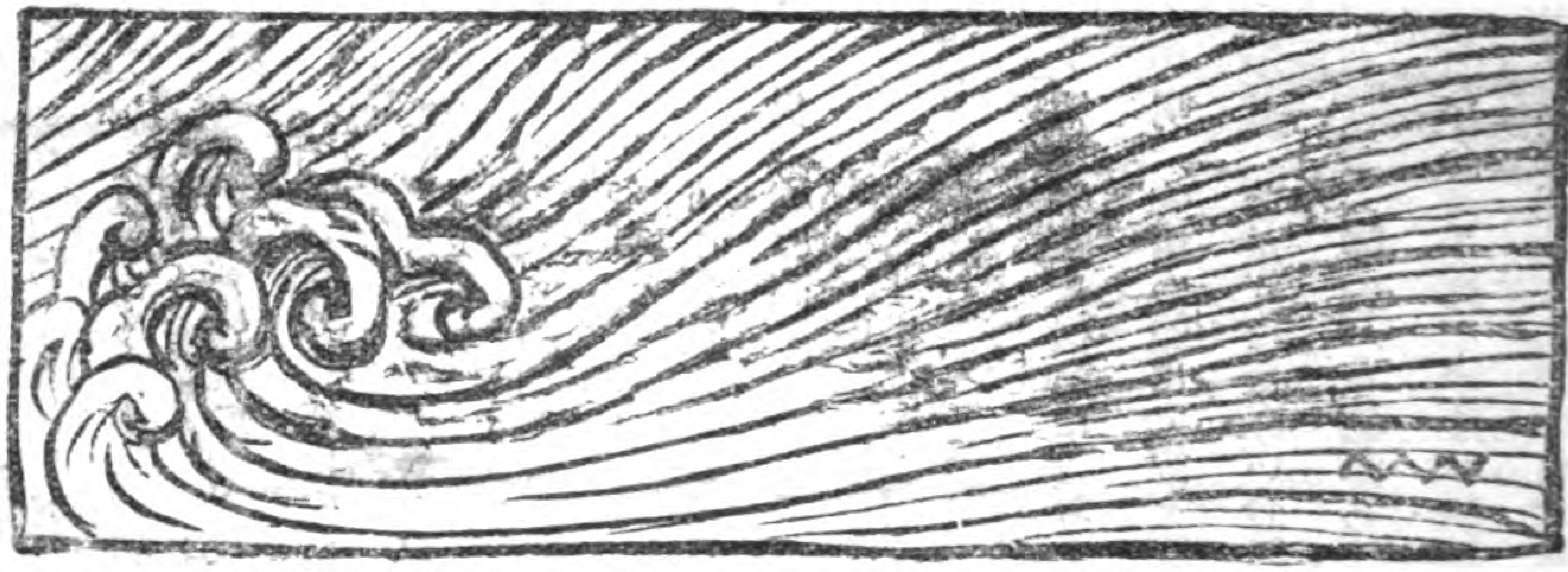
此方かありがたかつたわけおや……』
『まあ……』と娘はおちやつぴいらしくまるい眼を見はつて父を笑つた。
『さあ、もう、あなた御飯をよそひませう。』妻君は良人の長い晩酌に止めをさした。
　橋本氏は食事をしながらもなほひとりで考へた。兵隊を出てから今日まで自分の辿つて來た長い生活の跡を飛び／＼に思ひ出すのであつた。自から手をさしのべれば得られたであらう幾人かの女のこと、戀人のことをも思ひ浮べた。或る期間は遊蕩兒にもなりかけた。その時分は頭髪の刈り方にまで氣むづかしくなつて、折角刈つてくれた、床屋の刈り方が氣に向かないで一日に三軒の床屋を廻つて刈り直ほさせたことさへあつた。と、また或る期間には非常に生眞面目な、勞働者にはめづらしい讀書好きの青年に變つた。そして工場へ出ると露骨に社會主義思想を振り廻してとう／＼馘になつた。また或る期間には小說家にならうと云ふ考へで二度目に東京へやつて來て、方々の大家の門の前へ立つてはうろついた。そして半年目にはまた絶望して地方の工場へ歸つて働いたがストライキの時に出しやばつた爲めに未決檻にぶち込まれた。彼はひどい傷手を蒙るたんびに、その次の期間には一時、羊のやうにおとなしい人物に變つてしまふのであつた。彼がその地方の工場地で間借りをしてゐた染物屋の主人は、彼を惜しい人間だと云つて娘の婿にほしがつて、彼に紋を描くことを敎へようとした。彼自身もさうならうかと思つたこともあつた。彼は戀する女の爲めには、また自分を戀してくれた女の爲めには自分を努めて穩やかな一勞働者として無事に彼女を養つてゆける人間にならうと、どんなにそれに骨折つたか。また彼は自分の一面の善良さを信じてくれた人々の爲めには、どこまでもその相手を驚かさないやうにしようと、その一面をのみ育てることに自から努力したか。然し彼は何處に於ても最後の安定を得ることが出來なかつた。彼は一つの生活を斷念して次の生活に移ることの憧れのみで生きて來た。彼を今日まで生かして來てくれ

たものはそれのみであつた。そして不安は彼につきものであつた。

『然し……』と橋本氏は思ふのであつた『俺の不安は俺の臆病が與へたものであつて、人生の罪でない。その悉くが社會の罪でもなかつた。人間は虚心坦懐に闘つて生きて行くことであつた——俺の命もまだ短くも十年は使へるだらう……』

『おい、お前達は早く寢な、俺はこれからまだ仕事がある。』彼は妻君娘にはさう云つて二階の書齋に上つて行つた。

遠くで夜汽車の轟がしてゐた。彼はまた書齋でしばらく何をか考へこんでしまつた。打ち勝つことの出來ない執拗な不安がどこまでも追ひかけて來るのを感じながら。



煩惱無安（三幕）

永田衡吉

人。

平維盛。

重景。（維盛の從者。）

石童丸。（美少年。女優又は女形が扮す。）

瀧口入道時頼。

了念

快念

其他。間者。僧。山伏。武士。村人。舟夫等大勢。

時。壽永三年の春。

處。紀州高野山。熊野那智浦。

一　高野山中

森々たる杉木立。梢葉の間から覗いてゐる切れ／＼の空には早春の夕暮を想はする夕陽の影が仄かににぢんで、波の樣な國境の山々はいま靜かな眠りに就かうとしてゐる。一すぢの細徑が上手奥から中央に延びてきて、くの字形に折れて花道に向ひ、下手寄りの大きな岩のところを一路は坂となつて奥へ降り、一路はそのまゝ花道へ延びてゐる。春寒き高野の奥にはまだ殘雪が路傍の草を埋めてゐる。幕明き前から春の夕をおくる峰谷々の寺院の鐘の音が惱ましげに聞へる。

幕明く。鐘の音が止んで暫くたつと、坂口の岩蔭から藺の深編笠が一つ現れる。肩の荷物扮裝などから見て高野詣りの旅商人とおもはれる。

男。（樹の間を透かしてあたりを見廻はす。徐々に小徑を辿つて中央の曲り角の邊まで來て上手奥を見る。思はず。）おお、目印の梅が！（さう言ふなり急ぎ坂口に立戻り奥に向つて叫ぶ。）おーいツ……見えましたぞう……おーいツ……

……

答へる聲。（微かに。）おーいツ……

男。（安堵の態にて笠を脱ぎ太古の森を見上げて。）あゝえ得も言はれぬ寂けさぢや！（落陽の空を見て。）あの陽の落ちるあたりに血腥い合戰があらうとは思はれぬ……（溜息をつく。やがて、身を岩蔭に寄せて草鞋の紐を結ぶ。）

（靜寂。花道から快念了念の少年僧が話しながら登場。快念は年長である。）

了念。それ、やはり朝敵であらうがの。

快念。なるほど今は朝敵ぢやが、やがて御味方となるは請合ひぢや。

了念。なんで左様なことが。
快念。まづ考へてみやれ。昨日までは平家の戰勝祈願に日も足らぬ當山が、明日は打つてかはつて源氏勢必勝の大秘法を修せられると申すではござらぬか。あの目先の明るい大僧正様が譯もなう斯様なことを致されやうか。
了念。(無念さうに。)すれやこの御山も權勢の强い方へ寢返りを打ち居つたか!
快念。これツ。(あたりを見廻しながら。)寢返りなどと、もし本院の所化にでも聞かれたなら……
了念。構はず。あゝ日夜あがめ奉つた大僧正様もこれでは俗人も同然ぢや……
快念。(聲を落して。)高僧聖僧とて俗世の波の外には居られぬ御時世ぢや。興福寺園城寺とても同じこと ——。そなたの師の房のやうな道心堅固な求道者は千人に一人……(兩人坂口までくる。)これやもう坂口。名殘惜しいがおさらばでござる。
了念。(淋しく會釋して。)おさらば。
快念。明日また大秘法の場で。
了念。(背いて。)逢ひませう。
快念。(坂を降つて退場。)
了念。とぼとぼと上手奥へ、の徑を辿る。)
男。(立上る。了念の後から。)もうし、もうし……(聲を高めて。)もうし!もうし!
了念。(振向く。わたくしをお呼びでございまするか。
男。(いんぎんに)へい、御急ぎのところをお呼び止めいたしまして相濟みませぬ……(膝を屈めながら了念に近づく。)

へい、手前ことは江州彦根在の旅商人與兵衞と申すもの、同行三人連れにて初めて當山へ參詣致してござりまするが、只今あれにて溺れ承りますれば、明日は戰勝の大祕法とやらを修せられるとのこと、左樣に有難い御脩式にめぐり逢ふのも大日如來の御導き——。是非とも御參拜が致したいと存じまするが如何なものでござりませうか。卒爾ながらお訊ね申しまする。

了念。その御脩式は源氏勢の御發願ゆゑ、武士の外は諸人禁制と承りまする。

男。それは〳〵。してその源氏勢と申されまするは——。

了念。東國から參つた範賴殿の手勢でござりまする。

男。(驚きを包んで。)いつ當山へ御參着にござりまするな。

了念。そなたは橋本宿から本街道を御上りではござりませぬか。

男。へい……その……和歌の浦見物を致してあの西山の裏路傳ひにこれまで參つて御座りまする。

了念。あの恐しい險岨を——。

男。いかにも左樣で——。

了念。和歌から橋本までは紀の川沿ひに樂な路がある筈。

男。え、え、その何でござりまする。急に歸國といふ事に相成り近路ときくまゝに難事とも知らずついうか〳〵と……いやもう人跡絕えたる山中とて、連れの一人は步行さへかなはず……未だに姿も見えませぬ。(と木の間を透かして坂下を見る。)

了念。(ぢつと男の樣子を見て小首を傾ける。)

男。(向き直つて。)さて御出家。たゞさへ商人は心弱いものでござりまするに、武士達大勢居ると聞いて密かに身内がびく〳〵致して參りました。何卒明日の旅路の心得に、その源氏勢とやらの人數、此の宿々など詳しう御敎へなされて下りませ。なるべくその宿々をよけて參りたうござりまするでー。

了念。(だしぬけに。)旅の人。これで御暇申しまする。

男。はてー。ま、ま、お待ち下さりませ。(了念を追ふて憐れみを乞ふやうに袖を捉へて。)さう仰せられずに、憐れな旅人を助けると思召して何卒一部始終を御漏しのほど、へい、此通りでござりまする。(と、地に額をつけて懇願する。)

(坂下より(おーいッ……)と呼ぶ聲に續いて何かきこえる。)

男。(心中うろたへる。坂下に向ひ大聲に。)只今!只今!(了念に。)あれが同行の者にござりまする。へい、御出家、只今の儀を切に御願ひ申しまする。

了念。一向に存じませぬゆえ……

男。知らぬ筈はござりませぬ。へい、折入つてのお願ひでござりまする。

了念。いえいえ何にも存じませぬ。

男。それはあまりにつれなうござりまする、御出家。(と、了念を見据える。)

了念。(武士らしい眼光に射られて戰慄を感じる。思はず。)わ、わかつたッ……

男。(とぼけて。)どうかなされましてござりまするか。

了念。師の房に申上げるのぢや!(と、逃げかゝる。)

男。袖をしかと握りしめる。落着いて。）何を申されまするな。

（呼ぶ聲が微かに「我君様の御召し」と聞える。）

了念。あ、あれをきけやれ！

男。えゝッ。（屹となる。）

了念。平家の落人！

男。こ、これッ、さ、さやうな者では……

了念。お、お離し下され。（力をこめて男を突退ける。一目散に上手奥に馳け行く――。と、森の寂けさを裂く如く悲鳴あがる。殘雪の中に倒れる。）

（物すごき靜寂の間を逢ふて微かなる呻き聲。）

男。（暫く彫刻の如く立つ。やがて靜かに死骸の傍に行き短劍を拔き取り涙ながら獨白。）あゝ、また一人、可憐な者を殺めたのか……あゝ。主君の爲めとは云ひながら、……許されよ御出家！逆さまなれど俗人の念佛を受けて極樂往生して下され。南無阿彌陀佛。々々々。（長き間。坂下よりの呼ぶ聲に目覺めたる如くあたりを見廻し、死骸を抱いて奥の谷間に降り、やがて足早に坂口へ行つて奥へ降りて行く。）

（無臺空虚。やがて話し聲が聞えて三人の旅人が坂口から現はれる。深編笠の痩せぎすな男は足を痛めて左右の男の肩に手をかけて釣られながら歩いてゐる。右は先刻の男で重景。左は美少年の石童丸。眞中なのは維盛である。）

重景。漸く坂を登りつめましてござりまする。

維盛。左様か――。

重景。そこの曲り角まで參れば目印の松も見えまするで今一息の御辛抱を願ひまする。

維盛。此の様にしてならまだ三里や五里の路は樂に歩けさうぢや。

石童丸。それではこちらが堪りませぬ。（汗をふく。）少しの間、この御手をお外し下さりませ。肩が痛ふてなりませぬで。

維盛。ようし。これでよいか。（手を外さうとすると足先が地に付く。）痛ッ……痛ッ……

重景。（よろめく維盛を支へる。石童丸に。）もう七八丁のところぢや、さ、元氣をお出しなされ。

石童丸。（力なく。）はい。（元の如く維盛の手を肩にかけ三人よち／＼と歩む。）

維盛。あゝ斯様に我れとわが身が動かせないと思ふと、しみ／＼そち達の有難味が分つてくる。兩人共にいかい難儀をかけるのう。

重景。これしきの御奉公が何でござりませう。親重代の御厚恩を思へば、この骨を粉に致しても尙ほ足りませぬ。

維盛。そちから「親重代の御厚恩」といふ言葉をきく度にわしはいつも冷汗を覺える。お互ひの親同士が恩をかけたりかけられたりしたために、子供のわし達までが恩義のやり取りをしなければならぬといふ理由があらうかの。まあわしはよいとしても、そちの身になつてみると迷惑至極の沙汰であらうがの。

重景。御恩返しが何で迷惑でござりませう。

維盛。いや、總じて主君の恩などゝ申すものは戰場で一働きさせたいための方便に過ぎぬやうぢや。結局は「一將功成つて萬骨枯れる」で、忠とか義とか申す美名に醉ふて戰場の露と消える者がまづ愚かといふものぢや。

重景。これは恐れ入つた御言葉にござりまする。

維盛。そこで兩人。そち達の忠義をもうこのへんでわしは辭退致したいと思ふてゐる。

重景。重ね〴〵の御串談、恐れ入りまする。
維盛。串談ではない。この通り至極正氣で申すのぢや。
石童丸。重景どの、御氣をつけなされや。中將樣は正氣な狂言を遊ばすのがお上手ゆゑ。
重景。はははは。そなたの申さるゝ通りぢや。はははは。
維盛。正氣ぢやと申すに左樣に取られては近頃迷惑でござる。
石童丸。(その途端。)おッ、白梅が!(三人思はず立止まる。)
重景。(嬉しげに維盛に。)あ、あれ御覽下さりませ。あの杉木立の蔭に!
維盛。うむ、草庵が見える!。(やがて溜息をつく。)
石童丸。(ちつと透し見ながら。)あゝ嬉しや!永の舟路に島を見た思ひぢや。
維盛。(突然崩れる如く路傍に坐り込んで了ふ。)
石童丸。おゝ我君樣が!
重景。(振向いて。)如何なされましたな。
維盛。待ち望んだ白梅を見て氣のゆるんだせいか……こ、この通りぢや。(大袈裟な表情をして吐息をし股を撫ぜる。)
重景。いま御休息遊ばされては、今度歩き出す時一しほ御み足が痛みまするで、こゝのところは御辛棒あつて……
維盛。ぢやと申して。(腰をさすりながら。)こゝの骨が拔けてしまふたやうで、痛ッ、痛ッ……一歩も半歩ももう歩けぬわ。
重景。これはこまり申した。草庵を眼前に見ながら……(自ら肯いて。)やむを得ぬ、どれ、御介抱致しまする。

石童丸。私もお擦り申しまする。
維盛。それには及ばぬ。暫くぢつとして居れば痛みは治りさうぢや。しかし重景、此處にかうしてゐても大事はないか。
重景。されば。(とあたりを一巡して。)大丈夫でござりまする。
維盛。左樣か。(近くを見廻して。)ところで、小坊主奴の死骸はいづれへ打棄てたかの。
重景。(與の下を指し。)丁度あの松が根のところに。かう御覽遊ばせ。(指先で維盛の視線を導く。)
維盛。む、見える。よつく見える。どうやら鹿の餌食にするには勿體ないほどの美僧ぢや。
重景。まことに眉目美しい雛僧にござりました。
石童丸。(すねたる如く横を向いてゐる。)
維盛。これや石童丸。そちやそのやうな顏をして――。さ、こゝへおじや。重景もこちらへ。是非是非耳に入れたい儀がござるで。
(兩人維盛の左右に腰を下ろす。)
重景。改まつて何事にござりまする。
維盛。それは別段餘の儀ではござらぬ。(あたりを見て。)尤も、斯樣な路傍にて申すは如何かと存ずるが、あの庵に着いてからは少々話しにくい事故、日も暮れ人跡の絕えたるを幸ひに、今こゝで心靜かに語るでござらう。兩人共、耳を澄ましてよつくきいてくれやれ。
重景。何事にてもあれ拜承致しまする。

維盛。實は八島出立の砌より、今日言はふか、明日語ろうかと迷ふて居たが、いまとなつては是非に及ばず、思ひ切つて明かさねばならぬ。なう兩人。(感傷的に。)構えて驚くなよ。重景!石童丸!(と兩人の手を取つて。)今日を限り主從の緣を斷つて貰ひたいのぢや。

兩人。えツ?

維盛。その驚きは尤もなれど、これには深い仔細のあること——。

重景。如何なる仔細がござりませうとも、平家復興の曉までは決して御側は離れませぬ。

維盛。さ、そこぢや。重景。まづこの太古の森の中で今申す「平家復興」の儀をよく〱勘考して貰ひたい。かう眼をつぶつて、八島に漂ふ一門の上を想ふと、遙かの心の底から言ひ知れぬ淋しい波がひた〱と打ち寄せてくる。その淋しさは世の運命が我々に告げる無言の豫言ぢや。わしは疾くからその豫言を耳にして、最早一門の行末についてはかなしいあきらめの心を抱いてゐるのぢや。

重景。これはしたり!八島御出奔の砌りには平家復興の秘策をめぐらすための御上洛と仰せられたではござりませぬか。

維盛。いかにも左樣には申したなれど——。それは、一門並びにそち達をたばかり申す方便であつたわ。

重景。(呆れて。)方便!あのたばかる……

維盛。左樣に驚くまい。わしのこの胸底を割つてみせやうなら、その責めるやうな眼光が同情のしづくに曇らうぞい。

重景。(膝を進めて。)何はともあれ、先づ御仔細をば——

維盛。(背く。)目ざすは洛陽にあらず……まことは、此の靈山を——

重景。え？

維盛。靈山を目ざして出家遁世のため――。

重景。（驚いて。）何と仰せられまする！

石童丸。それでは八島の浦の御一門を御見すてあそばされて御出家をば……

重景。（つゞけて。）いかなればその樣な御決心を遊ばされたのでござりまするか。

維盛。一門を見すてたなどゝ申されては些か片腹の病めること。先づわしの申す一條をとくと聞いてたもれ。（間。）そち達も眼のあたりに見てよく存じてゐる通り、八島の合戰は如何にヒイキ目に考へても、味方に更々勝味はなし。只一つ、命とたのむは都畿內の殘黨なれど、それもこの四五日の旅路の見聞にも知れる通り、今は悉く賴朝一味の掌中に丸め込まれて、もはや色褪せた赤旗の下に馳せ參じる醉狂者もない有樣。わしは八島に居る頃から旣に事態をかうと悟つて、總大將の宗盛等に懇々と說ききかせたが、暗愚な宗盛は更なり、あの智者で通つた知盛や教經までがわしの言を即座に卻けて衷心から錦の御旗や赤旗の力を信じて今に平家の殘黨が隨所に起る夢を見てゐるのぢや。あまり時世が見えなさすぎるほどに、わしはあきれ果てゝそのまゝ口を噤んでしまふたが、靜かに彼等の心底を推量するに、まづ武名を青史に殘したいといふ愚かな見榮に捉はれてゐるとよりは思はれぬ――。

重景。さり乍ら、たとへ藻屑と消ゆる御一門の運命とは申せ、見す〳〵これを外にみて、御出家遊ばさるゝとは、平家隨一の將軍たる御面目にもかゝはる儀かと存じまする。

維盛。その「將軍」は以後やめてくれやれ。かの富士川の水鳥に不覺を取つて以來わしは自ら將軍と申さぬことに致してゐる。尤も、世の愚かな民草が三位中將殿などと崇めまつるゆゑ、惡い氣も致さず今日までゆるしてきたもの

ゝ、心の中ではとつくに鎧甲をかなぐり捨てて、風流三昧の詩人の心でわしはゐるのぢや、

重景。俗世を厭ふ詩人にも致せ、一滴たりとも忠義の血汐が流れて居らるゝならば――。

維盛。(皮肉に。)左様な血汐はわしには通ふてゐぬやうぢや。ぢやが、あの宗盛や知盛等に流れてゐる血汐が忠義の血汐といふならば以ての外の儀ぢや。まづ考へてもみやれ。まだ齢十指に足らぬ頑是なき主上を初め奉り、美しい女官達までをあたら死地に引き入れ申してそれが忠と申されようか、下萬民の生命をむざ〳〵と奪ふてそれが義といへやうか。罪ぢや、僞りぢや、世にもかやうな悲慘なことがござらうか。維盛、かゝる忠義にはほと〳〵愛想がつき申したわ。さりとて、わしには一門の公達等に此理を説きかせて、源平の合戰をやめさせるほどの辯才もなく、まゝよ、此の上は飾りを下ろしてかの修羅道に苦しむ有緣無緣の衆生をば供養しまつらうと、心ならずも一門ならびにそち達までをたばかり、八島を抜け出で遙々と、瀧口入道時頼殿を頼りにこの山までは參つたのぢや。のう兩人、今は何せん力もつきて珠數爪繰らうとする淋しい維盛が心を汲み取られて、今宵高野の旅枕を最後に、主從の緣を斷つて下され。のう兩人。あゝこれも宿世の緣でござらう……(涙を拭く)

石童丸。嫌でござりまする。我君樣がお死に遊ばされるのならとにかく、さもない限りはいついつまでも、御側近うかはゆがつて下さりませ。

維盛。現世はおろか來世までも一緒に居たいは山々なれど、清淨無垢の沙門の身には俗世の緣は大禁物。こゝの道理をよくきゝ分けて重景共々、明日は此山を降り、誰ぞ武勇すぐれた主君を取つて天晴れ名ある武士に立身出世を……

石童丸。いえ、いえ、私のやうな臆病者が武勇すぐれた主君をとるは鷹の仲間入りをする子雀も同然でござりまする。我君樣がたつて高野の坊樣におなり遊ばすなら私も一緒に稚兒樣になりまする。

維盛。はて聞き分けのない！（重景に。）この子をよきやうに宥めて共に下山を頼みまする。

重景。（ちつと考へてゐたが。）それではやつぱり御遁世を。

維盛。覺悟の上ぢや。

重景。あゝそれと知つたなら……（奥の谷間をちつと見下ろす。愁然たる間。）

維盛。はてそちにも似合はぬ。人の一人や二人殺めたとて、涙を流す弱者(よわもの)でもなからうに。

重景。とは申せ、罪なき者を――。（寂。鹿の遠音。維盛に打向ひ。）我君様。拙者如き痴(うつ)け者が出家を致すことは相成りませぬか。

維盛。（愚弄的に。）そちや何を申す！　はゝゝ……そちが出家になる……はゝゝ……

石童丸。（突然。）あれ！庵に灯りがつきました！

維盛。なるほど。（あたりの暮色を見て。）あゝ春の一日(ひとひ)も暮れてしまふたなあ！（静かなる間。）どうやら庵の方から看經(かんきん)の鉦の音がきこえるやうな。（耳を澄ます。）あゝあれが瀧口殿の鉦の音であらうか。悩み多いわしの心を救ふて下さる入道殿の鉦の音か。（パラ〳〵と小雨が降り初める。）はて（と梢を見て。）雨か露か――。

石童丸。（同じく上を見て。）雨にござりまする。のう重景殿、ひどう降らぬ間に、早うあの庵へ。

重景。（考へに耽つてゐたが。）それがおよろしうござりまする。（と維盛を向く。）

維盛。それでは立つとしやうか。

重景。（先づ立つて。）さあ御手を。

石童丸。（同じく立つて。）御手を。

維盛。（兩人に兩手をとらせて。）やつとな。（立上る。一歩踏出す途端に。）痛ツ……タツ……タツ……（倒れる。）

重景。（維盛の足先を見て。）おツ。生爪が！

石童丸。これは！

維盛。痛ツ……タツ：タツ……早く何とかして！……痛ツ……

重景。只今！（編笠の紐を裂いて傷口を縛る。）如何にござりまするな。

維盛。む、痛みはとまつた——。

重景。（しげ／＼と維盛の顏を打ちまもつて。）あゝ、これが最後の御奉公でござりませうか。（涙ぐむ。）

維盛。（恬淡として。）もう一度！拐杖になつて下され。のう兩人。

兩人。はは！（維盛の手を取つて肩にかけ、疲勞を堪えながら上手奧に向つて歩く。）

維盛。（呑氣に。）山路は人杖に限るのう。（石童丸に。）これ、しつかり致さぬか。ひよろひよろ竹では杖にならぬわ。

石童丸。はい——。（苦しき息をつゞけ跛をひき乍ら歩く。）

重景。（石童丸を慰める如く。）今しばらくの辛抱でござるぞ。

石童丸。（汗をふき乍ら肯く。）

維盛。これが忠義のしじまひぢや、と思ふてわが身を勞はつてくれやれ。（二三歩歩く。）

石童丸。（獨白的に。）あゝ、私も公達に生れたうござりまする。

維盛。今忠義を盡しておけば來世は公達疑ひなしぢや。はははは。

石童丸。（眞面目に。）さういふ公達は來世は何に生れまする。

維盛。(言葉に窮し。)左様さ……

(舞臺突然暗黑と化す。時に奥の谷間より一焚きの狐火燃え上る。)

瀧口入道の庵室

霧不斷の香を焚き月常住の燭を挑ぐとも言ふべき茅屋。室は方丈位。上手は壁、正面は戸、下手は押入になつてゐる。壁間には大日如來の繪像を掛け樒を供へてゐる。その前に二個の經机。一つには堆き經卷と文筥など。一つには讀みかけた經卷が披つてゐる。室の上手奥に庫裡のある心。一面の荒れたる庭には白梅がくつきり闇に浮んでゐる。

前場と同じ夜の亥の刻。狩衣の維盛と墨染の時頼とが對座してゐる。維盛は延びた髯を頻りに氣にしてゐる。

兩人の間に置かれた燭がジーツと音を立てる。話しの切れ目には玉川の流れがちろ〳〵と聞く。

維盛。では、御免を蒙りまして。(と脚を延ばして揉む。)人目を避ける計りに裏山の難路を辿り、すつかり脚を痛めましたが、それだけにまたかうして打ち寛いで、貴僧と昔語りを致すのが一しほ嬉しうてなりませぬ。もし貴僧に御目に……

時頼。中將殿。「貴僧」などとは面はゆうござれば、昔のまゝに時頼とか、おまへとかお呼びなされて下さりませ。

維盛。いや、いや、昔は主君でもいまは俗人の維盛が、墨染の御身を呼び捨てにはなりませぬ。

時頼。明日は同じく墨染の御身、その御謙遜は平に――。

維盛。つゆ謙遜ではござらぬ。實はわしこそ中將殿などと呼ばれて汗顔の至り、以後維盛どのとでも仰せ下され。し

て、久々の御對面ゆゑ、あまりにむさくるしい體ではと存じ、斯樣な態につくろひましたが、東國勢とやらの眼につくやうなことはござるまいか。

時賴。人里遠き高野の奥、殊に夜も深し、その御心配は御無用かと存じまする。

維盛。それにて安堵致した——。はて、只今は何やらの話最中でござつたな。(考へて)さう、さう、横笛殿の御物語。(時賴を見て。)して、其後尼僧には如何なされましたな。

時賴。されば——。落飾の後は奈良の都の法華寺にて一向三昧に耽つて居りましたが。

維盛。どうかなされましたかな。

時賴。(眼を伏せて。)去年の秋の央ばに——。

維盛。え？

時賴。相果てましてございまする。

相果てられた！(溜息。)あゝ世にも稀れな臈たき御身でござつたになあ。(改めて。)まだ春秋に富む御齡で何故左樣なことにおなりなされましたか。

時賴。心の病が欝して、と申しまする。

維盛。心の病が！(自り背きつゝ。)さもあらう、さもあらう。(間。)定めし貴僧には御手篤い御介抱を遊ばされたことでござらうの。

時賴。介抱などとは以ての外——。

維盛。それやまたなぜに。

時頼。三界を離れし沙門の身には、一目死顔に逢ふことさへ許されませぬ。

維盛。ふーむ。(茫然として考へ込む。)僧になれば左樣にしてまで俗世の緣を斷たねばなりませぬか。

時頼。いかにも。女人厭離は佛道第一の戒めでございまする。

維盛。もしその戒を破れば如何相成りまする。

時頼。生き乍ら無間地獄の苛責に逢ひ——。

維盛。と、申すは、如何樣な責め折檻でござりまするな。

時頼。例へば猛火に灸られ……(維盛一々戰慄する。)或ひは熱水に煮られ……或ひは淺猿しき禽獸の姿と變へられ……

維盛。おゝ生きながら禽獸の姿となる!ても怖ろしい。(身慄ひをする。)

時頼。(空の星を仰いで。)はや亥の刻も過ぎてござれば、これより御所望に從ひ御剃髮の儀を營みまする。何卒、御支度を願ひまする。(庫裡に向ひ。)了念、淨水を持つて參れ。了念!(答なし、不安氣に。)はて——。(と、自ら立ちかける。)

維盛。(首垂れたまゝぢつと考へ込んでゐたが叮嚀な調子で。)入道殿、しばらく!剃髮の儀は暫時御見合せのほど御願ひ申しまする。

時頼。(意外の面持にて。)俄かの御見合せとは如何なる儀で——。

維盛。彼是思案仕るに、やはり俗人の身がなつかしうござるゆゑ。

時頼。え——。

維盛。今は何をお隱し申しませう。實を申せば剃髮の儀は元々維盛が眞實心底からの願ひではござりませぬ。

時頼。これはまた異なことを承る。

維盛。今更斯く申すも恥かし乍ら——。（坐つたまゝ庵裡の方を見てから。）さる仔細あつてかの兩人と縁を切りたさに、ふと思付いたのが此の出家遁世の狂言にございまする。

時頼。（ぢつと考へる。）む、それには定めし深い仔細が——。（膝を進めて。）幸ひ、あたりに人影もなし、何卒拙僧にまで事の次第を詳さに御明し下され。

維盛。（萎れたまゝ。）遲かれ早かれ、貴僧の御耳に入れねばならぬことながら、まことに以て申しにくい儀で——。

時頼。假初には洩し難きことも、出家には包まず御明し下さるが定かと存じまする。

維盛。いや、精進堅固な御出家の前では尙更漏らしにくうござる——。

時頼。御躊躇とは水臭し。今更思すまでもなけれども、拙僧ことはよそ人ならず、元は御一門につながる北面の武士。主君のためには碎骨粉身も辭せざる所存——。

維盛。それでは私は申すことをかまえて賤しまず、蔑すまずに、よく〳〵人情の機微をお察しあつて、この維盛の胸の惱みをお救ひ下さるか。入道殿。

時頼。仰せまでもござりませぬ。

維盛。しからば思ひ切つて申さう。（顏をそむけて。）八島を拔け出で遙々貴僧を御訪ね申したのは……（もぢ〳〵する。）一重に妻子に逢ひたい一念からぢや！（狩衣の袖に顏を埋める。）

時頼。中將殿、お隱し召さるな。その御言葉の裏には——。

維盛。裏も表もござらぬ、只々妻子に逢ひたいばかり！

時頼。それでは拙僧より御訊ね申しまする。北の方樣をお慕ひ遊ばす一念ならばかの兩人を御遠ざけなされる譯がござ

りませうや。

維盛。はて、人情にうとい入道殿ぢや。あの木の股から生れたやうな重景奴にこのやうな女々しい心底を打明けたならまあ如何でござらうか。忠義一途な重景は、事によるとわしを刺殺して自らも返す刃で相果てるやも知れぬ。あゝ、平維盛ともあらうものが郎黨風情の手にかゝつて死なれやうか。いやさ、妻子に逢はずにおめ／＼犬死を致されやうか。それゆえ、出家するとて體よく縁を切つて了ふたのでござる。また石童丸ことは根が女子のやうな男子ゆえわしが女房の許へ連れてゆくことは……（言ひにくさうに。）ちと憚りあり。彼を思ひ此を思ふて、八島出立の砌よりいろ／＼と嘘偽り愛憎づかしの數々を盡してはみましたが、重景の一途な忠義心と、石童丸の熱心には打ち克てず、漸くこの山の土を踏んでふと思ひついたのが出家の狂言。これには流石の兩人も納得致して明日は愈々、主従三人互ひに袂を別つことと相成りましたが、今貴僧から破戒の罪障の怖ろしさを承り、かりそめの方便に出家ごとも相成らずとそゞろ末怖ろしうて……（と身を慄はす。）あゝ罪障の御話を承はらずば、火にあぶられ、又は淺猿しい禽獣に姿をかへられるところでござつた。（考へて。）これ時頼殿、出家せずにあの兩人と縁を切るに何ぞよい分別はござるまいかの。知慧才覺の逸れた貴僧を見込んで維盛この通り御願ひ申しまする。（低頭平身する。）

時頼。（瞑目。維盛の心情を察るが如く憐れむが如く一滴の露が眼を潤ほす。）

維盛。御機嫌を損ぜられたか、入道殿。（膝を進めて。）溺れる者の一握の藁、いま貴僧に見すてられては、維盛進退谷まつて詮術もござらぬ。のう、時頼殿！色界の苦勞も淺からぬ貴僧ではござらぬか。まあ一通りわしの物語りをお聞き下されて少しは憫憐と思ぼし下され！（間）過ぐる年の七月、都六條にていとしい妻や子に別れてから早や八月なかば。陣中の明暮れに一日たりとも都の空を仰がぬ時とてはなく、日毎に玉章を取交して陣中の淋しさを打忘れて

居りましたが、この如月の始つかた、一の谷より八島の浦に逃れてからは命の綱の玉章もふつりと絶え果て、遣る文は梨のつぶで。それからと申すものは、夜毎に悪夢に惱まされて、さては水さえ咽喉を通らず――。先刻、貴僧がわしの顏を見るなり、いたく旅やつれがしたと申されましたが、それは旅のせい計りではござらぬ、既に八島の陣中にて妻子を想ふあまりかく面やつれが致して居りました。(頬を撫でるので、のびた髯を氣にして。)後程、剃刀をお貸しなされて下され。

時頼、(經机の上の文筥を指し。)あの文筥の中にありまするで、何卒御使ひ下りませ。

維盛。では後刻拜借いたしまする。(言葉を前に繼いで。)斯樣な譯で、只一途に、妻子に逢ふて倶に住みたいと願ふばかり、他には大それた望みも、また深い仔細もございませぬ。のう、時頼殿、もしや巡禮旅僧の口からなりと、都の消息をお聞きではございませぬか。神佛にさへかつて漏らさぬ一生の秘事を打明け申したのも、貴僧の御同情と御力添えを仰いで、あの妻や子に逢ひたいため!(時頼默。)時頼殿、何とか仰せ下され。さうお默り召されずに、何卒……

時頼。委細を承つて御心境深く御察し申しまする。(沁々と。)さりながら、もし御父重盛公御存命中にして此場に在ませば如何思召さるゝでござりませう。「おゝ維盛、よく參つた。」と仰せらるるでござらうか、但しはまた、弓箭を取つて御打擲遊ばされるでござらうか。中將殿、この儀をよく〱御勘考下さりませ。今御一門は如何なる運命の下にあらせられまする?また、一天萬乘の君はいかに在ます?(落涙。たとへ中將殿には弓箭を取つて戰はずとも、斷ち難き煩惱の絆を斷つて御出家遊ばさるるならば、御父重盛公にもさぞかし御滿足に思さるるでござりませうに――。

維盛。(やゝ語氣を强めて。)左樣な述懷は維盛聞き飽きましたわい。一門が危いとて、妻子を慕ふてはなりませぬか。

亡父重盛に責められたさに煩惱を斷つて了ふたなら、この維盛は生きて生甲斐がござらぬ。

時賴。（獨白のやうに。）義を見てなさざるは勇なきなり——とか。

維盛。その勇氣のない煩惱具足の身を救ふて下さるが出家の御役目ではござらぬか。

時賴。（瞑想的に。）救ひは——人間の救ひは只一つ。

維盛。その一つをどうかお授け下され。

時賴。（つゞけて。）人間の救ひは一つ。たゞ歸命に在り——。

維盛。維盛の救ひは一つぢや。たゞ妻子に逢ふて……

時賴。（涙ながら。）今は何をか申上げませう。（維盛に向ひ。）たゞ一つ、御耳に入れたき儀は北の方様六代御前の君の御消息——。

維盛。（驚喜のあまり。）や、やツ、消息を存じてござつたか！

時賴。御兩所にはこの春の初めつかた、都を後に何處ともなく——。

維盛。（放心の體。）都を後に何處ともなく……

石童丸。（廊裡より轉ぶが如く登場。）た、たいへんでございまする！

時賴。（落着いて。）何事ぢや。

石童丸（舌がもつれる。）重景どのが……た、只今……（奥より劍の音がきこえる。）あ、あれツ……

時賴。（立つて奥の戸を一枚あける。夜の空が眞紅に染つてゐる。劍の音しきりに聞ゆ。ぢつと闇を見詰める。）

維盛。（時賴の側に膝寄つて。）な、なにごとでござる。

時賴。必定、間者が。

維盛。えツ、間者が！（膽を潰す。空を見て。）あ、あの空は――。

時賴。夥しい篝火の影。

維盛。これやどうしたことで。（戸の外に首を出して。）西も東も一面の火の海ぢや。（劍の音に慄える。）

時賴。察するに。東國勢は戰勝祈願に名を借つて、落人詮議を致すと覺えまする。

維盛。落人詮議！あゝ遂々網の中へひツかゝりに參つたのか！（時賴の裾を捉てえ。）逃げ路を教へて下され。

時賴。御狼狽へ遊ばすな。拙僧はこれから裏手の樣子を見屆けた上、下の院まで參つて始終を訊ねて參ります。

維盛。取殘されては心細うござるでわしも參りまする。

時賴。いや、暇(いとま)はとらせませぬほどに――。

維盛。それでは早うお歸り下され、な。

時賴。はは。御免下され。（上手椽先まで來て立上り。）了念！了念！（返答なし。首を傾けたきゝ奥に退場。）

（一旦途絶えてゐた劍の音が下手の方から聞えてくる。）

維盛。（下手の押入に石童丸と共に隱れんとして。）待て。身に寸鐵を帶びずには心元ない。これや石童丸。刀を持て！

石童丸。（慄えてゐる。）庫裡へ參るのは御免なされて……

維盛。臆病者ツ。（自ら取りに行かんとして騷音に膽を消し引返す。文筥に目を留めて）む、何も持たぬよりは――。（打背き剃刀を取出し、石童丸と共に押入に入る。）

（重景と間者とが立廻りながら下手庭から現れる。劍光が閃々する。）

間者。(遂に刀を落されて。)む、無念！(どツかと地上に坐し。)さ、首を刎ねろ。

重景。(縄をかける。)

維盛。(少し戸を開けて。)間者は一人か。

重景。左様でござります。

維盛。して――。縄をしかとかけたか。

重景。堅く縛めましてござります。

維盛。(這出して來る。)これや間者！少々訊ねたい儀がある。包まずに申せ！(膝を進めて。)東國勢は當山の何れに屯してゐるのぢや。有體に申せ。(間者默。)なぜ默り居る！早く申せ！

間者。(大聲に。)莫迦ツ。

維盛。(飛び上る。)ぶ、ぶれい者！斬捨てゝくれる！

間者。武士の本懷ぢや。存分に斬れ！

維盛。(聲を和げて。)斬るとは僞りぢや。な、東國勢の居ぬ方角を教へては吳れまいか。さすれば、命は助けてやる。

間者。(嗤笑ふ。ちろりと維盛を見て。)貴様は一體何奴ぢや。

維盛。我こそは小松左大臣が嫡子、權亮三位中將平朝臣……

間者。維盛とな！む！(立上つて飛掛らうとするを重景に制せられる。)

維盛。(恐怖を抱き。)重景、眞二つに致せ！

重景。言葉を返すは恐れ多うはござりまするが、いま此者に刀刃を加えて殺生戒を犯せば御剃髮の御障りとも相成りま

すれば、何卒、御助命の程願はしう存じまする。

維盛。(言葉に窮し。)剃髪も剃髪なれど、わが身も危なうござるで、速座に斬り捨て申せ。

重景。併しながら此者とても……

維盛。(被せるやうに。)迅く斬れと申すに!

重景。(已むなく。)は。(間者の側に寄つて泌々と。)お見受け申せばまだ若年の御身。定めし親御も息災でござらう。言ひ殘すことあらば、拙者とても浪々の身ながら風の便りになりとお傳ひ申すでござらう。

間者。御親切忝し。さりながらかゝる汚名を父母に傳ふるは如何にも心苦しきゆゑ――。

重景。では、御遺言は――。

間者。(首を振つて。)何事も――。(默靜。淋しく眼を見開き、重景の顏をしみ〴〵眺めて。)名も知らぬ。そなたがわしを討つも主君のため、わしがそなたに殺さるゝも主君のため。あゝ惡人の友を棄てゝ善人の敵を招けとはそなたの事か――。いきおなさけ厚きそなたの刃にかゝつて相果つるは今生の喜びぢや。(落涙。やがて維盛の方へ視線を向けて。)これや維盛!あの眞紅の空を見よ。我れ一人は斬つても、あの萬人は斬れまいぞ。(唾と共に。)ペツ、畜生奴ツ。

維盛。無禮千萬!(重景に。)それツ。

重景。は。(瞑目唱名。一刀の下に首を打つ。)

維盛。死骸は直さま山犬の餌食に致せ。

重景。では、拙者が申受けて――。(と骸を抱いて上手籔の方に退場。)

維盛。(空を見て不安と焦燥とが昂まる。)一人は斬つても萬人は斬れぬ、か。あゝ逃げ路も知らず――。(ちつと考へ

てゐる。）む！（肯く。懐中より剃刀を取出す。幾度か躊躇の後、髻を切る。それを掌に受けて打ち眺めて次第に暗然となる。）

時頼。（打ち萎れて上手庭より登場。）

維盛。入道殿、様子を早うおきかせ下され。

時頼。されば——まことに以て言語道断の至り。

維盛。と、申されますると。

時頼。一山の衆徒輩は掌を返すが如く源氏に款を通じて今や敵将を囲んで酒宴なかばと承る——、

維盛。（落着いて。）さもあらう。寶俗共の今日あるは維盛とくに承知致してござつた。のう、時頼殿。味氣なき世とあきらめて維盛もすでに覺悟をきはめて居りまする。これを御覧下され。（と髻を差出す。）

時頼。む、殊勝なる御決心。天晴平家の御大將ぢや。おゝ嬉しうござる、三位中將殿！（涙ぐむ。）

維盛。先刻の雑言面目次第もござりませぬ。何卒一切を水に流して、法の道に御導きの程切に御願ひ申し上げまする。

時頼。（肯いて。）人間一時無明の迷ひはあるもの。此の御覺悟を拝して拙僧の喜び何に比ふべくもござりませぬ。速刻御剃髪申上げるでござりませう。

維盛。何卒よろしく御願ひ申しまする。

時頼。暫時御猶豫下され。淨衣淨水を以て參りまする。（上手奥へ行きかける。）

維盛。あいや暫く。俗世の緣の終りに只一つ御尋ね申したい儀がござりまする。

時頼。何事にもあれ御尋ね下され。

維盛。 されば御言葉に甘へて――。(と眼を外らせて。)貴僧は先刻妻や子は都を後に、と申されましたが、何處に落ちて參つたでござりませうか――此の一事が氣にかゝつて、出家心の障りと相成りまする。

時賴。 道行く人の噂には、吉野、十津川より熊野路にかけて……

維盛。 えツ、熊野路！あの熊野路！野には熊住み、浦には鯨の吼えるといふ！(身を震はす。)こゝは同じく紀伊の國。その熊野とやらは大凡何れに當りまするな。

時賴。 (上手正面を指し。)まづ彼方に當りませうか。

維盛。 (その方角に向ひ。)おゝ、熊野三所大權現！我が妻や子の安穩を護らせ給へ！(ひれ伏して拜む。)

時賴。 (退場。)

重景。 (登場。手に髻の毛を掴んでゐる。維盛の頭を見て。)む、我君樣にもすでに御飾りを。

維盛。 む、この通りぢや。

重景。 して、御剃髮の後は如何遊ばされまするな。只ならぬ當山の樣子を見るにつけ

維盛。 かくなる上は、一蓑一笠に身を托して先づ三熊野の靈地を巡禮修業の決心ぢや。

重景。 あゝやむごとなき公達の御身が明日はいやしき巡禮の御姿とは！

維盛。 かまえて歎きめさるな。これが浮世のならはしぢや。

重景。 (感動して髻を維盛の前に差出す。)

維盛。 (頭と髻とを見較べて。)そちもか。む。俄仕立の商人姿では最早敵の目は晦まし難い。(庫裡の方を見ながら。)さあ今の内わしが剃つてやる……

重景。あいや。斯く髻を切りましたは命を惜しむ方便ではござりませぬ。

維盛。ふーむ。

重景。我君様の御爲めとは申せ、先には罪なき若僧を殺め、今また敵ながら天晴れ忠義の武士を手にかけて心なき身にもそゞろ沁み入る無常の風……

維盛。これ重景！何を申すのぢや。そちは石童丸共々寸時も早う此山を降りめされ。

重景。御言葉にはござりまするが、斯く決心の上は墨染に身を包んで何處までも御伴仕る所存にござりまする。

維盛。それは困る。わしはひとりで淋しい遍路を致したいのぢや。

重景。御み足弱き我君様にお一人の御遍路など何とておさせ申されませう。

維盛。その親切は忝なけれど、何卒無用にして下されｌ

重景。いや親重代の御厚恩を思へば……

維盛。（苦りきつて呟く。）またか――。（上手に時頼の姿を見て。）入道殿が參られる。剃髪の場に俗人は穢はしうござるで、遠慮下され。

重景。仰せなれば差控へまする。（庫裡へ退場。）

時頼。（登場。法衣と水盤とを持つ。）何卒、御召替えを――。（法衣を差出す。）

維盛。は、忝ない。（立つて狩衣を法衣に着替える。始終何か考へてゐる樣子。）

時頼。（下手庭を見て屹となる。狂へる如く。）了念！了念！（立上る。）

維盛。先刻より了念々々とお呼びなされるは？

時頼。亡き横笛が弟にて拙僧に就き佛道修業の者。今日七ツ下り、東禪院に參りしまゝ未だ歸庵仕らず――。

維盛。お歳は。

時頼。十四。

維盛。顏は。

時頼。面長――。

維盛。上には白の麻衣、下には黑の腰衣。あの石童に瓜二つの？

時頼。如何にも石童殿に見まがふばかり。

維盛。すれや、重景の手にかゝりしは――。

時頼。えゝツ。

維盛。（誇張的に。）あゝ痛はしや！

時頼。（急き入つて。）重景殿には何故あつて了念をば……

維盛。さればでござる。（と聲を落し時頼の耳近く。）……

時頼。（背きつゝ。）うむ……美少年と見れば……手籠め……酷からしく……（無念の表情。）

維盛。わが郎黨のことをかく申すは心苦しうは存ずれど、まことに世にも怖ろしい性根をもつた人非人にござる。速刻當山を御追放あるか但しは御舍弟の仇を打たるゝか――。

時頼。（沈思の體にて。）只茫然として今は言葉もござらぬ。（歎息する。）

重景。（維盛の前に躍り出る。）我君様ツ。氣、氣でも狂はれたかツ。

維盛。（落着いて。）これ、言葉を愼しまぬか。

重景。え〻ツ。腸が煮えくり返るわいツ。（言葉出です。）

維盛。そちはわしのために了念どのを手にかけたといふ腹であらうがの。はははは。それは近頃迷惑千萬なことぢや。

重景。口惜しうござるツ。

維盛。左様に口惜しければ寸時も早う主君を棄て〻國元へ立歸へれや。（押入れを指し。）あれに臥してゐる石童丸を喚び起して共に下山を致すがよいぞよ。

重景。むツ……

維盛。さ、さ、早う立ち歸れや！（押入れを向いて呼ぶ。）石童丸！石童丸！

重景。もうこれまでぢやツ。（矢庭に短劍を拔き維盛を刺さんとする。）

時頼。（抱きとめる。）

重景。お離し下されツ。わが君諸共……

時頼。ま、ま、鎭まりめされ。（刀を奪ふて。）今一時の憤怒に馳られて主君を刺し申してはそなたの忠義が立たうか。見れば將まで切りし殊勝の御身が、これまた法體の維盛殿を手にかけ申しては、大日如來の御前に相濟み申さうか。

重景。（首垂れしま〻涙を拭く。）

時頼。（同情して。）そなたにも掛じたき儀は重々ござらう。時頼深くお察し申す。されど、事の是非曲直はひたすら御佛の御裁きに委せて、今は只、心靜かに佛道に歸依せられよ。やがて夜も明けなば拙僧も當山を立ち退く所存ゆえ、元の主從三人が同じ罌染の友となつて雲水修業の旅に出ぜう。のう、中將殿。

維盛。いやいや、かやうな不屆者との道伴れは眞平でござる。

重景。（はら〳〵と涙を流す。）一旦の憤怒に馳られて無分別に及びし段、重景深く後悔仕る！平にお許し下され！（床に額をつけて詫びる。）

維盛。まかりならぬわ！

石童丸。（人聲に目さめて押入れを出て影の如く三人の側に來る。）おゝ、我君様も重景殿も御出家におなり遊ばすか。（時頼の袖を捉えて。）入道殿。私も稚兒様になりたうござります。（と見上げる。）

時頼。（ぢつと石童丸の顏に見入る。緊張の間。切なき調子にて獨白。）わが弟に――。（と言ひかけて下手の谷間を眺め、やがて維盛の方に視線を轉じて怨めしげな表情をする。遂に耐りかねてがばと打伏して嗚咽する。）

一同。（時頼に視線を注ぐ。）

（空の篝火の影が次第にうすくなる。）

三　熊野那智の浦

渺茫たる海原である。上手に僅かばかり白沙青松の濱邊がある。晩春の霞が一面に立ちこめてゐる。

幕の明く前から喧騷が聞える。

濱邊では漁夫村人武士僧山伏其他老幼男女が大勢、沖の一點を見詰めて騷いでゐる。渚には一艘の舟があつて傍らに舟夫が立つてゐる。

村人や漁夫等の間に左の言葉が聞える。

（おゝ漕ぐわ、漕ぐわ……

（矢を射るやうぢや。

（島を目がけて漕ぎをる！

（成程のう！成程のう！

（島へ上るのぢやな。

（む。島へ上るのぢや！

（島からまた七里ケ濱へでも逃げのびるのではあるまいかの。

（さうらしいぞ。

（これ、これ、何を申す。今に舟が止まるであらう。あの邊がこの海でも一番深い處ぢやでの。

（如何なものでござらうかの。

（わしも如何かと思ふてゐる。あの年箇の坊主にたばかられたに相違ござらぬ。

武士甲。（苛立つ。）姦しいッ。默り居れッ。

（群衆一齊に默る。）

僧の聲。南無阿彌陀佛〳〵。〳〵。

山伏の聲。なあまくさまんだら、さらだあ。せんだらまかろしやな。そはたや、うんたらたかんまん……

武士乙。（堪りかねて舟夫に。）舟を出せ！

舟夫。へ、へ。（ためらふ。）

武士甲。出せと申すに！

舟夫。へ、へ。(躊ためらふ。)

武士乙。何を愚圖々々致すツ。

武士丙。(甲乙に。)待て！暫く様子を……

武士甲。といふ間に、取逃したらどうする？

武士丙。大海に放つた笹舟ぢや。何處へ逃れる術もあるまい。

武士甲。む！(乙と顔を見合せて。)あつたら褒美を逃がし居るなあ！

武士乙。(同じく口惜しげに。)うむツ。(唾を吐いて。)くそ、いま／＼しいツ。

(おゝ、舟が止まつたやうぢや。

(人が動きだしたぞ。

(おゝ立上つた！

(また一人立上つた！

(眞實投身致すやうぢや。

(後から誰やらが止めてゐるやうぢや。

——(間。)——

(おツ、危ないツ。

(おゝ……(寂。)

僧の聲。南無阿彌陀佛〳〵。

山伏の聲。せんだまかろしやな。そはたらうんたらたかんまん……

（舞臺少しく廻る。）

濱邊はかくれる。見渡す限りの青海波の中に小島が一つ浮んでゐる。土俗これを山成島（やまなりのしま）と呼ぶ。奇しき形の岩の間に小松が四五本繪模樣に生えてゐる。下手寄りの岩石は深く壊れて窟になつてゐる。背景には遠く熊野の山脈を背の底に望みその下手に那智の大瀧が銀泥をなすりつけたやうに天涯にかゝつてゐる。

晩春の光が波の上にきら〳〵と光つてゐる。

一葉の舟が上手奥から漕出る。中に維盛、時頼、重景、石童丸が何れも僧形にて乘つてゐる。

舟夫。（ぶつきらな調子で。）このあたりでどうぢやろ。十五六町は請合ひぢや。

時頼。（伏せてゐた眼を上げて。）早や、山成島近くでござるか。

舟夫。島はそこぢや。（後向きになつて顎で指す。）

（維盛を除き、一同首を廻らしてみる。）

時頼。（舟夫に。）では舟を止めて貰ひませう。

舟夫。ようしきた。（櫓をとめる。）あれ見さつせ、あれが日本一那智の大瀧樣ぢや。

時頼、重景。（其方を見て拜む。）

維盛。（料紙に筆を走らせてゐたが、これを時頼に渡す。）

時頼。(底調に讀む。)「生れてはつひに死ぬてふことのみぞ、定めなき世に定ありける。三位中將維盛。法名淨圓、年十七歲、壽永三年三月廿八日那智の沖にて入水す。」

維盛。此世へ殘すかたみはそれ。何卒、その辭世の歌をば淨圓を知るほどの人々に語りつたへて一片の回向をなりと御賴み申しまする。

時頼。委細畏つてござる。

維盛。(述懷的に。)あゝ熊野の靈地を踏んで七日あまり、運拙なくも那智籠りの野武士に見現されて有無を云はせず引立てられうずるところを、貴僧のおとりなしにより荒くれ男の手を放れ自ら此浦に身を投げて、滄海の藻屑と消ゆるは、思へば不幸中の喜び！あゝ重衡の如く縲絏の辱しめを受けて、京鎌倉の果てまでも生恥を晒すよりはなんぼう有難い佛緣でござらう。世の哀れを知る人々は定めし淨圓の心中を憐んで、世の末までも語り草と致されるであらう。維盛の滿足これにすぎませぬ。

時頼。御辭世といひ、只今の御述懷と申し、まことに大悟徹底の御心境、拙僧思はず落淚仕つてござる。

維盛。あゝ淨圓が心ほどうとましう濁れた心が世にもござらうか。のう、皆々。今はに臨みそなた達の厚い義理情けをおもふて淨圓身を切らるゝ思ひぢや。今は何事も詳さには申しませぬ。只々懺悔悔恨の淚に咽ぶ淨圓が胸を推量されこれまでの不德不義をば許されよ。(落淚する。)あゝ生れて廿有七年。金殿玉樓に起き臥す身が、現世の有爲轉變に遭ふて……(と舟を見て。)おゝ、この蝕んだ舟板の上を最期の床として奈落の底に沈み果てうとは！

重景。(感に堪えず。)御免下され。(矢庭に海に躍入らうとする。)

時頼。(急ぎ抱き止める。)

重景。お止め下さるな！

時頼。お待あれ！淨閑殿を差し置いて死出の旅路を急がるゝは……

重景。高野の庵にて刄物三昧に及びし身の申しわけ、一足先きに冥途の御道しるべを……

時頼。御心中もさるほどながら――淨閑殿もろとも御入水あつてこそ主從の緣も深しと申すもの。

重景。此上、あのおやつれ申した御横顔を見奉るに忍びませぬ。何卒。お、お離し下され！

石童丸。（重景の足に取りついて。）お死にやつてはいやぢや……いやぢや……

重景。そなたは以後入道殿を師と仰いで、天晴れ名僧知識となつて下され！

石童丸。（泣きながら。）お死にやつてはいやぢやわいのう……（泣伏す。）

維盛。（右の對話中、舟夫と海上を指しながら頻りに問答をしてゐる。）

重景。我君樣！

維盛。（はつとして重景を見上げる。）

重景。お先きへ、おさらば！（時頼の手を振切つて投身す。）

一同。おゝ！（舟甚しく搖れる。）

時頼。（瞑目合掌して弔ふ。）

（上手奥より濟溫の喧騷が聞える。）

維盛。（その方を見て。）人の死にやるをおかしう囃してゐるとは、ても心なしの痴け者ぢやのう。あゝ淨閑の心は一しほ淋しくなりをつたわ。（氣を取直して。）いやいや、かうして居られぬ。（打倒れてゐる石童丸に向ひ。）これや石童丸。

覺語はよいか。

石童丸。(顔を上げずに。)死ぬるのは嬉でござりまする。

維盛。わしも共に死ぬるのぢや。

石童丸。(身を震はして。)あゝ恐ろしうてなりませぬ。

維盛。何んで恐ろしいことがあらうか。この荒海の底にも美しい御國が在るのぢや。

石童丸。(海を見て。)この海の底に――。

維盛。いかにも。

石童丸。(海を見詰める。魅惑されたかの如く微笑が顔に浮び上る。)我君様！(と維盛に取付く。)

維盛。む、天晴れの覺悟！さ立ちや。(と手を取る。石童丸立つ。時頼に。)入道殿。何卒、後世安樂の念佛を！

時頼。(肯く。手を合せ珠數を爪繰つて。)南無阿彌陀佛。

維盛。阿彌陀佛！(石童丸を小脇に抱え重景と反對の方向に投身す。舟搖れる。飛沫が上る。)

時頼。(ぢつと海底を覗く。やがて獨白。)地下に在す重盛公もこのけなげなる。御最期に定めし御滿足の事でござらう。これにて了念の怨恨も

あゝ一切煩惱の障礙は霧と散じて涅槃の月は主從三人の上に照り添ひ。(高野の空を仰いで。)

晴れて靜かに成佛いたすであらう。(にじみ出る涙を押しとゞめる如く瞑目して。)若我成佛十方世界、念佛衆生攝取不捨。(珠數さらさらと爪繰るうちに舟影下手に沒す。)

新樂來臨。折柄、天低く垂れて島に打ちつける波の音が荒々しく聞えてくる。長き間。

島の正面の岩陰から濡鼠になつた人間の半身が現はれる。維盛である。衣は裂け顔は土の如く血が處々ににぢんで

ゐる。茫然として死せる者の如く岩上に身を投げて切ない息を吐きつゞける。やがて陸の方を見詰め、また海上を見廻して、漸く安堵の息をつく。)

維盛。(那智の瀧に向ひ。)おゝ那智觀世音大菩薩！熊野三所大權現！(岩上に額を擦りつけて拜む。)

(日次第に暮れ行く。晩春の悩ましき熱風が吹いて波は一層荒れてくる。)

船頭にきいて聞いた淺瀬の底を探廻してゐるうちにこの島蔭に打ち上げられやうとは―(感謝に耐えられぬ風にて再び那智の方に向つて拜む。その合せた手の上に血汐がぽたり〱と落ちる。顔に手をやる。血が一面につく。傍らの岩間の水溜りに顔を映してみる。傷だらけの醜い顔容に泣き出しさうになる。)いや〱歎くまい。この相好變つた傷だらけの顔こそはわしを維盛とも思はせぬ天の與へ、佛の御慈悲と申すものぢや。たとへ都大路を歩くとも「あれ三位中將殿よ」と後指をさす者もあるまい―これで天下を憚らず暮せるのぢや！さるにても大洋をさまよふわが妻や子に、此處にかうして長らへてゐるわしの消息を知らせたいものぢやなあ。おゝ、沖に片帆の影が見える！この島ちかく參つたなら、呼び止めて陸地に渡り京の巷を押分けても妻や子を訊ね出さうぞ。

(風吹き募る。陰暗なる海鳥頻りに飛ぶ。)風も吹け。波も荒れよ。煩惱の前には怖しいものは何もないのぢや。(足元を見て。)おゝ帆立貝が！海鼠！若布！(猫を見て。)おゝ、ねぐらまで！(側に寄つて。)ふわふわと軟かい藻を敷きつめて！あゝわしはいつまでもこの島で暮したい程ぢや。

(間)

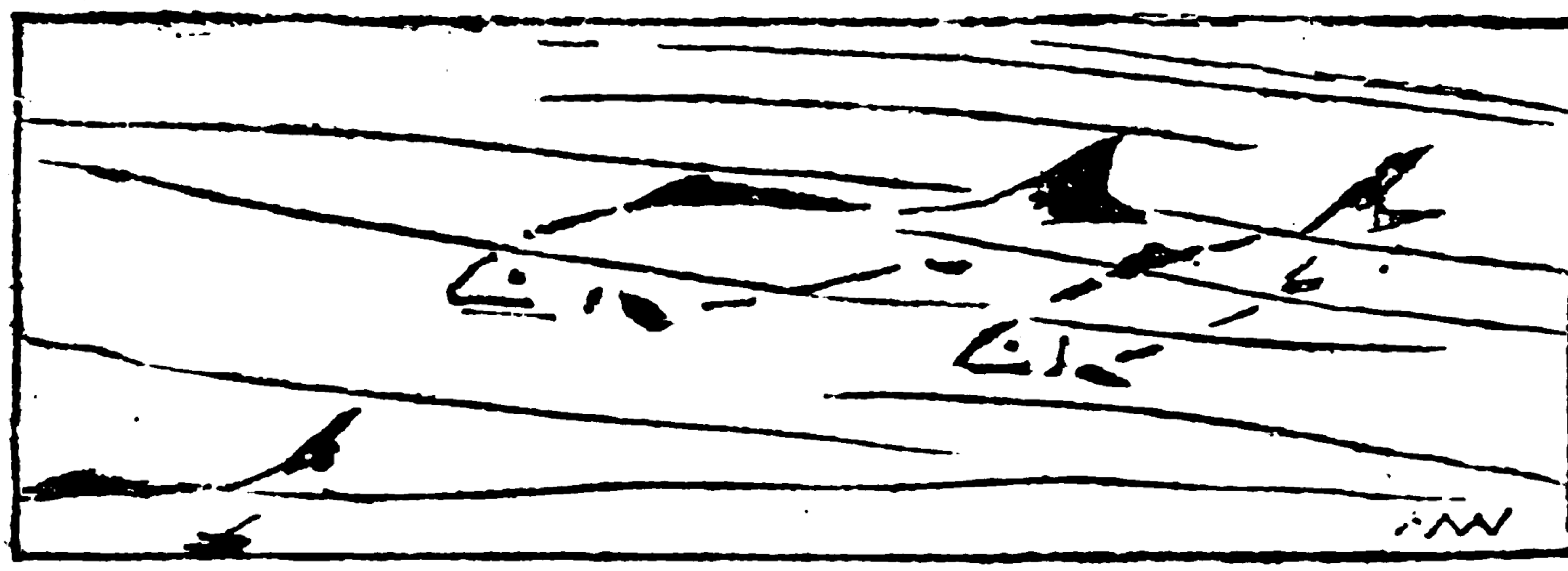
やツ。わしを呼ぶは誰ぢや。(立ち狂ふ波濤を見て。)おツ。惡鬼の姿！(間。)あツまた一つ現はれた！や、やツ、そちは重景！そちは石童丸！(吼えるが如き波の音。)うぬツ、われを罵るよな！なに惡魔とな？煩惱の犬とな？(

笑して。)ははははは、何とでも呼べや!そち等はわし一人を蘇らせた神佛の冥利のほどを得知らぬのぢや。何故あつて煩悩の犬を生かして、忠義者を殺しめさるのぢや?さ、これに返答かなはずば即座に消え失せてくれい!(消に進む。)まだ失せをらぬか。もうこれまでぢや!南無熊野三所大權現!惡鬼成佛を得させ給へ!成佛を得させ給へ!

(黒き影消ゆ。)はははは……(風やみて雨至る。)

(維盛、寒さに身ぶるひをする。宿の方へ歩く。)痛ツ。(つまづいて倒れる。)痛ツ……タツ……ダツ。(爪先をおさへる。)おゝ、高野で傷めた生爪のあとが!痛ツ……タツ……タツ……むーむツ。やつとな。(幾度も膝頭をつかんで起上らうとするが倒れてしまふ。やむなく兩手及び膝頭にて四つ這ひとなり宿に向つて這ふて行く。雨沛然と降る。裂けたる衣は宛かも尻尾の如く、その狀病める野良犬の如し。自らの姿を顧み、哀しい調子で。)ても淺猿しい姿ぢやなあ!犬畜生の姿をそのまゝ……あゝこれが無間地獄の苛責であらうか。ひツ、ひツ、ひツ……

(天暗く、强雨したゝかに犬の尻尾を打つ。)



赤ん坊

宇野千代

（一）

お弓は寢てゐる。赤ん坊も寢てゐる。常吉は今しがた、居酒屋へ行つた。

——陽が、庭の影を落し乍ら疊の上、お弓の寢てゐる蒲團の上に這ひ込んでゐる。蒲團を透して彼女のかつたるい素足にまで黄色い光線が滲みて居るのを、お弓は眠り乍ら知つて居る。綠色木綿の柔い肌觸りが、お弓を子守唄のやうに撫でて呉れる。お弓は、その光線と綠色木綿と常吉とを、ごつちやにして考へる。彼女の着て居る蒲團は、先刻出掛けに常吉が、裏の竹垣から外して掛けて呉れたのであつた。お弓の耳は、常吉の桐草履がだん〳〵遠ざかつて行くのを眠り乍ら聞いて居る。そして、何と言ふ優しい男だらう、と眠り乍ら思つて居る。——

瓦斯會社は休みではないけれども、常吉は昨日も今日も出て行かない。彼は、お弓

の微を氣遣ふと言ふよりも、赤ん坊が、今までは何處にも居なかつた赤ん坊が、ひよつこりと生れて來たと言ふ事が嬉しくて嬉しくて堪らない。彼は、變にそは／＼して如何しても會社へ出て行く事が出來ない。

彼はじつと赤ん坊の顏を見る。と、いきなり自分の手が、赤ん坊のくしや／＼した毛の生へた顏を押し潰して了ひさうな氣がする。彼はじつと見て居るのが怖くなつて來る。一寸、裏へ出る。そして直ぐ歸つて來る。彼は、見て居る間に赤ん坊の顏から水分がたつて、だん／＼萎びて來るのではあるまいかと言ふ氣がする。彼は、せめて一時間位、赤ん坊の側を離れて居なければならないと思ふ。

そして、家から一番近い居酒屋へ行く。

「燒酎を一杯、割らない奴を一杯、」

彼は、全で唄を唄ふやうに言ふ。彼は自分の聲が、「赤ん坊が生れたんだい、赤ん坊が生れたんだい、」と言つて居るのを聞く。彼は居酒屋の親父に、よつぽどさう言ひたいところを、やつと我慢して居る。ちびり、ちびり飲む。ほんたうに、こんな嬉しい事は誰にも聞かされる事じやあない、と思ひ乍ら飲む。

ポスターの若い女の顏が彼の方へ笑ひ掛ける。それが二つにも三つにもなつてちら／＼する。彼は急に、赤ん坊の顏が思ひ出せなくなる。そして急いで歸つて來る。

彼は、お乃も赤ん坊も眠つてゐるのを見る。

「全で、猫が兒を生んだやうなもんだなあ、」

彼は、感心したやうにさう言ふ。と彼は、朝から日にあてて置いた蒲團の事を思ひ出して、そつと二人の上へ掛け替

て遣る。それから、もう少し居酒屋へ行つて居ようと思ふよ。

――お弓は夢の中で、溝板の上を消えて行く常吉の足音を聞いて居る。彼女はうつすり眼を開かうとする。が、うとうとと眠り續ける。

おとゝひの晩から一日一夜、長い陣痛のために精根の盡きたお弓の體は、精根の盡きた儘でとろけるやうな眠りを貪つて居る。彼女の魂は夢幻の間を往つたり來たりして居る。

時々、うす眼を開いては側の赤ん坊を見る。

（八月兒は死んでも七月兒は育つ、と言ふんだつたかしら？）とお弓は考へる。赤ん坊は七月たつぷり、八月に少しかかつて居る。（月足らずだけれども、無論育つに極つて居る。今朝、産婆さんもさう言つた。「心臟がこんなに丈夫なのだから、儲けもんですよ。」この兒に心臟があるなんて……。）

お弓は、玩具の赤いポンプを想像する。そのポンプがだん／＼大きくなる。と、赤ん坊が、くしやんと嚔をする。然し、彼女の側の赤ん坊はすや／＼と眠つて居る。

お弓は赤ん坊の名を考へて居る。考へるまでもなく、彼女ひとりでちやんと極めて置いた名を頭の中で玩具にして居る。月子、月子、月子、然し、常吉はその名が好きではない。彼はお露と極めて居て、

「何だつてそんな名前を附けたがるんだ？」

と訊く。けれどもお弓は答へる事が出來ない。彼女は自分でも、如何して月子が好いのか解らない。何時如何して思ひ附いたのかさへ知らない。だから、月子を頑張るのは極りが惡くて仕方がない。彼女も今では、お露に極めても好いと思つて居る。

お弓は、お露がだん／＼大きくなる事を夢見て居る。袂の長い着物や、膝つこぶの出る洋服が眼の前にちら／＼する。今でこそ常吉は、瓦斯會社の職工をして居るけれども、彼は未だ若いのだから、何時監督にならないものでもない。勿論彼と彼女とは、お露のために毎月の積金をするであらう。そしてお露は、苦勞を知らない罪を知らない仕合せな娘になつて行くであらう。——

と、障子の明るい日差しが吸取紙に吸はれたやうに、すつと消えた。疊に、壁に、赤ん坊の顏に、うす暗い影がおほひかかる。棟割長屋のうそ寒さが家中をつつ走る。

（うちのひとは、何て遲いんだらう？）とお弓は案じ初める。（若しかしたら岡村さんとこへ？ああ不可ない不可ない、何卒岡村さんとこなぞへ行かないのであつて呉れれば……。）お弓は思はず眼を閉ぢる。もう一度眠らうとしたが、それは唯、眞似をするのに過ぎない事を彼女も知つて居る。（岡村さんはあの事を決して忘れやしないだらう。はつと思ふ間もなしに、

「この前のをあれしなかつたら、二人だぜ。」

と言ふ風に言つて了ふ事だらう。さう言はないまでも、言ひたさうな眼附をする事だらう。ああ、うちのひとがどんなに辛がる事か。）お弓は、彼女の後の押入れに隱してある小さい行李を思ひ出して居る。岡村から貰つた、飴色の小さい硝子壜を思ひ出して居る。粉藥を包んだオブラートの團子が、彼女の食道を今にも塞いで了ひさうに、ぐつぐつと下つて行く怖しい感覺を思ひ出して居る。

（二）

お弓の神經は次第に蒼白んで行く。その蒼白さの中で、雲母板を弄ぶやうな感傷に浸り乍ら、同時に、不可思議な恐しさを逆卷きにしながら、彼女の心は少しづゝ昔の方へ動き始めるのであつた。

――丁度二年前であつた。常吉は無職であつた。彼と彼女とは、身を切るやうな貧困を二人の愛情で隠さうとした。けれども、うすい眞綿のやうに引つ張り合つた愛情の隙間から、絶えず貧の苦しさが顔を出すのであつた。二人は泣き笑ひをした。そしてその時、お弓は姙娠したのであつた。若し、堕胎する事が出來るなら、と言ふ考へがぼんやりと二人の心に泛んでは消えた。けれどもそれは貧しい誰もが一度はさう思ふやうに彼等もそれを思ひ、そして、誰もが忘れ乍ら過ぎて了ふやうに彼等も何事もなく過ぎ去つて了ふであらうと言ふ、平和な感じが彼等を慰めた。二人は、寢物語りに、貧苦を忘れる氣晴しに、赤ん坊の生れる日を繰り返した。――が、さうし乍ら或る一つの考へ、その胎兒は決して赤ん坊になつて生れる事はないであらうと言ふ考へが、二人の胸の底に冷く沈んで居るのを知つて居た。

或夜、常吉は居酒屋へ這入つて行つた。其處に――壁寄りの細長い腰掛けに、醫學生の岡村が何日もの通り古ぼけた洋服の背中を向けて腰掛けて居るのを、常吉はちらと見た。そして何氣なく、全く何氣なく「居るな」と思つたのであつた。

彼は愛想よく岡村の肩を叩いた。そして、岡村と向ひ合せに腰を下して互ふの顔を見合せ乍ら、彼等の奇妙な財布――絶えず、十八錢か二十五錢かほんの濁酒一二杯代に事欠かない位の金が這入つて居て、決してそれ以上這入つた事のない財布を笑ひ合つた。

軈て、少し許りの直しが二人を浮かれさせた。

常吉は、素晴しい洒落を飛ばして相手を笑はせて遣りたいと言ふ考へに驅られた。彼は、彼の馬鹿々々しい貧窮を、

彼自身、女房の懷姙を、そして彼等が墮胎藥を欲しがつて居ると言ふ事を、聲高におどけ混じりに饒舌り初めた。彼自身、以外の何ものをも求めて居ないと言ふ事を信じ乍ら。——

と、國村は躍り上つて手を叩いた、

「雜作はねえ、その藥なら俺が持つて來て遣らあ、」

常吉は、この氣輕な呑み友達の輕口を笑つた。彼には、何時か彼も一緒くたになつて無茶苦茶に愉快になつて來た。そこで、同じやうに手を叩き乍ら

「雜作はねえ、全く雜作はねえや、」

と叫んだ。

——二三日して常吉は、錦紙の小さい硝子壜を持つて、うちへ歸つて來た。そして、變靜な表情をして言つた。

「おい、これを飲みなとよ。」

お弓は狼狽ててそれを引つ手繰つた。彼女は、兩方の耳朶がかあつとなつたのを感じた。何か、腹立しさに似た感情が彼女の體中を走つた。——餘りに容易く實現される事に對する名状し難い惧れが、初めて、二人の胸を掠めたのであつた。

——幾日か過ぎた。お弓は、常吉の居ない隙を見ては、あの藥を粉にする爲めに暗い臺所へ下りて行つた。常吉も一度だつて、あの藥を飲んだか如何かなぞと、お弓に訊きはしなかつた。二人は、二人の愛情の中に見詰めてはならない曇りを感じたのであつた。

——さうし乍らお弓は、臺所の隅にしやがんだ。ひよつと誰かが何處かから、彼女の樣子を見たにしても如何してさ、

いうだと解るものか、とお房は、自分で自分の心に言ひ聴かせ乍ら、擂鉢の中へ薬の幾粒かを落して、そつと袂の中へ前子壁を隠した。そして直ぐ頭の上の明り取りの引き窓を、——明るみと言へば只そこだけだ、と言ふところでそうつと——ひとりでにその方へ眼が吸ひ寄せられたやうな具合にそうつと見上げた。と、隣りの二階屋の高い軒に、干大根の枯れた葉つぱがぶら下つて居るのがちらと見えた。非常に遠いところにあるやうに見えた。——お房はその時の不可思議な感じを忘れる事が出来ない。

それから——お房は薬を砕き初めた。胡瓜の種ほどの粒が擂鉢の底に押しつけられる、ぎ、ぎ、ぎ、と言ふ音がお房の神経を咬しかけた。彼女は、彼女が恐しい子殺し婆あである事をはつきりと感じた、感じ乍ら、もつともつと力を籠めてあたり棒を押し附けた。と、——彼女の頭がくらくらつとした。腹の中の胎児が丁度アルコール漬けにでもしたやうな不気味な鮮明さで、お房の眼に描き出された。それは決して人間の胎児ではなく、蛙、ながい尾の生えた蛙のやうであつた。

若しこの薬を飲んだなら、——うす赤いどろんとした液体になるであらう毒薬は、蛙の背を、腹を、頭を、ぬる〱と包まうとする。蛙は頭をのめらしてそれを避けやうとする、が、時々、血の混つた細かいあぶくを吐き乍ら——お房は、自分の妄想から逃れたいと言ふ考へと、細かい血のあぶくを吐くであらう不気味な生物に対する憎悪とのために、他のさまざまな名状し難い感情が引き潮のやうに消えて行く一瞬間を感じた。彼女は狼狽てて、然し、誰か全で別の人の手ででもあるやうな器用さで薬をオブラートに包んでから、幾度となく嚥み下したのであつた。

或る朝、——お房は四ヶ月に満たない胎児を分娩した。

　常吉は留守であつた。人影のない家中が、お弓の體とともにずうんと地中へめり込んで行くやうな、もうお了ひだな、と言ふやうな感じ――それは單なる惧れでも驚きでもない、寧ろ、想像する事の出來ない靜けさであつた。――氷のやうに冷い感じでそつと周圍を見廻した。白い障子が、うす暗い壁が、疊の上に轉がつて居る瀬戸物の「招き猫」が、彼女の眼に映つた。お弓は、彼女が不斷の彼女とちつとも變つて居ないと言ふ事を、確めたかつたのであつた。が彼女は、彼女自身がそんなにも靜かな中に居ると言ふ事に、限りない不安を感じた。――鬱血のために紫色になつた小さい屍體は、襤褸の面に、全で吸ひ附いたやうにぺたりと喰つ附いて、丁度腐れかゝつた軟體動物の皮膚のやうなその皮膚全體で、お弓の恐怖を見透さうとして居るかのやうであつた。お弓は、その肉塊が最早や生きては居ないのだと言ふ事を信じる事が出來なかつた。彼女は指先きでそつと押した。

　と、――蛞蝓の體に觸れた時のやうな不氣味な軟かさが、彼女の指先きから頭のしんまで傳つて來た。お弓はいきなり、――その肉塊が彼女と同じ空氣を感じ、彼女と同じ憎しみを感じて居るのではあるまいかと言ふ恐怖のために、――もう一枚の襤褸きれをその上からおつ冠せた。そして、又その上を新聞紙で殆んど機械的にくる／＼と捲きつけた。――何でもなかつたのだ。何でもありはしなかつたのだ。と彼女は、自分で自分の心に言ひ聽かせるやうに、幾度も呟いた。――私はちつとも惧れてなぞ居やあしない、私は斯うする事だつて出來るのだ、――とお弓は、その新聞紙包みをくるくると疊の上に轉がした。

　はつとしてお弓は我れに返つた。その瞬間に彼女は、初めて彼女の犯罪を自覺したのであつた。刑罰に對する本能的な恐怖が、彼女の胸を突き刺した。お弓は狼狽てて、血痕の附着した汚物を一纏めに小さい行李へ詰めると、その上から固く縛つて押入の奥へ仕舞込んだ。

夕方、常吉が歸つて來たときには、それでもお弓は幾らか落付いて居た。彼女は、彼女の體が何ともなかつたと言ふ事を、さもその事だけが一番心配な事なのだと言ふやうに話したのであつた。頓て、常吉は胎兒の捨て場所を探しに出て行つた。

お弓はそれからの恐しい、長いひとりきりの時間を忘れる事が出來ない。――最早や彼女は、彼女の罪を少しも悔いては居なかつた。彼女を責めさいなんで絶望の淵に陥れるものは、只發覺の恐怖だけであつた。

如何して、裏の物置小屋の側へ埋めて了はなかつたのであらう、――と彼女は、次第に暗くなつて行く露路へうつろな眼を遣り乍ら、考へ戰つたのであつた。――常吉は失敗るに違ひない、彼女は如何して、もつとゆつくり相談をしなかつたのであらう。あゝ、若し常吉が捕つたら……。いや、決して捕りはしない。あの人が提げてゐる包みの中に赤ん坊が這入つて居るなんて、如何して解るものか、――お弓はぢつと眼を閉ぢて、動かないで居た。然し、フイルムの一端のやうになつて彼女の暗い眼瞼に映るものは、常吉の捕まる瞬間より外のものではなかつた。何かしら眼に見えないものに祈りたいやうな、――何卒、今夜だけは何事もなく歸つて來て呉れ、假令明日の朝あの包が見出されて彼等の罪が發かれようとも、――と言ふやうな氣持が、彼女の不安と恐怖の中を往來した。彼女は常吉に言はなければならない事が澤山あつた。もう一度、彼に逢ひたかつた。――あゝ、如何して彼女は、常吉だけを遣つたのであらう。何卒、何事もなく歸つて呉れ、――

その時、がたりと水口の開く音がした。お弓は衝動的に立ち上つてぱちんとスヰツチをひねつた。そして、音のした方へ駈けて行つた。

「おい、――何だつて暗くしたんだい！」

それは常吉の聲であつた。暗い中に隣家の軒燈のせいか星明りか、ほの白い腰高障子に常吉のいかつい肩がくつきりと浮いてゐた。――まあ、何だつて何だつて、と、お乃は懐しい男の聲を心の中で繰返し乍ら、頬許りで微かに笑つて見せた。彼女は光りが恐しかつた。暗い中にさえ居れば誰にも知れる氣遣はない、と言ふやうな氣がした。その中で、常吉の顔をそつと抱き乍ら、宜かつたわねえ、宜かつたわねえ、と言つて居たかつた。が、彼女は低い聲で、

「何處?」

と、訊いただけであつた。常吉のもの凄い眼が彼女に何事をも訊かせなかつた。

「南北堂の川堤だ、」

常吉は吐き出すやうに言つた。そしていきなり、お乃を制するやうに、又は自分の言ひ出す言葉を制するやうに、片手を擧げた。――お乃は、彼の激しいけはひを感じた。闇に馴染んだ彼女の眼に、明り窓の明るさが恐しい錯覺を捲き起したのであつた。お乃はぢつと、常吉の唇が動くのを見詰めて居た。

「俺はどんなに方々をほつき歩いたか知れなかつた。少しでも暗くなるのを待たうと思つたのだ。だが、俺には、何處へ捨てても同じ事だと言ふ氣がして、餘りほつき歩るのが可厭になつた。さうだよ、何處へ捨てたつてめつかる分にやあ同じ事だよ、――それだのに俺は、矢つ張り好い捨て場所を探さずには居られない。何處へ捨ててもめつかる、と思へば思ふほど、めつかりさうもないところを探したかつたのだ。

――到頭俺は、あの南北堂の川堤を三邊も四邊も、往つたり來たりしたのに氣が附いた。ふと俺は、――こんな人通りの少いところでうろ／＼して、若し誰かお巡りにでも出會して見ろ、と言ふ氣がした。さう思ふと、今にも井桁の陰から誰かが踊り出すのぢやないか、と言ふ氣がして、じつとして居られなくなつた。

——俺は、あの首吊り柳の下にしやがんで、好い加減の石を拾つた。その時俺は初めて、あの川堤の上から水の流れて居るところまで十四五間もありさうなのに、酷くゆるい勾配になつて居るその上に、一面に丈の高い茅萱が蓬々と生へて居るのを見たんだよ。到底も駄目だな、と思ひ乍ら俺は矢つ張り、拾つた小石をあの包みの紐の端にくくり附けた。川の水のところまでは到底も届かない、甘く放り込めやしないつて事はよく解つてたんだ。もう、そんな事は如何でも宜かつた。石を附けたのが宜かつたか悪かつたか、如何してそんな時に誰にだつて解るもんぢやあねえ。

——俺は思ひきり放つた。ざぐつと鈍い音がして、あの包みが茅萱の中へ落ちたのを聞き捨てて、俺は一目散に駈け出した。駈け乍ら俺は、夜、そんな處を死物狂ひで駈けてる奴は泥棒か人殺しに違ないと思はれさうな氣がし乍ら、とまる事が出來ねえんだ。それからやつと、土橋の際の一番初めの電信柱の先に灯がついてゐるのが見えるところまで來て、俺はひよいと止つた。と、直ぐ今にも、野良犬があれを銜へて這ひ出して來るのではないかと言ふ氣がして、野良犬が首を振り乍ら新聞紙を喰ひ破つて居る様子までがありありと眼に見えるぢやねえか。

——俺はあの、首吊り柳を目あてに又引返して行つた。お月様の出て居ねえ事がどんなに有難い事だつたか、さうして同じところを驅けたり驅け戻つたりして居る奴が、同じ一人の人間だとは誰にだつて解りやしねえ、俺はさう、無理にも拵へて考へ乍ら、茅萱を掻き分けて落ちたと思ふ邊りまで行つて見たが、いくら探したつて解りつこはねえ、——なんて、貴様は間抜けだ、——何だつて、石なんぞくくりやがつたんだ！と、われとわが身が情けなくなつて來た。糞！野良犬でも野狐でも銜へ出すなら出して見ろい！日本中で俺たちだけが、子を墮すもんだと決つてやしめえし。

——俺は又、色んな女々しい考へにとつつかれないやうに、もと來た道を一生懸命に走つて來た。街へ這入つてから立て續けに、大きな呼吸を三つも四つも吸ひ込んで、それから、ゆつくりと歩き出した。——その時になつて、兩方の

脛が刺すやうに痛むのをやつと知つたのだ。これ、――こんなに茅萱で切つた。何あに、如何せ脚絆で碇いに了ふんだから、誰にも解りつこねえ、――」

お弓はちらと、常吉の投げ出した足の方へ眼を遣つたが、彼女はそこに、蚯蚓膨れになつた痕を見る替りに、うす暗い川堤を思ひ描いた。そして、直ぐにも夜が明けて、そこだけがぽこつと凹んだ茅萱の中にしらしらと新聞包みの覗いて居る有樣まで、はつきりと眼に浮んだのであつた。――危險につい眞近かに迫つて居る、と言ふ考へに驅り立てられて、その危險から逃れようとする無益な焦燥の爲めに、一瞬間、お弓は常吉の事も彼の足の痕の事も忘れた。彼女はその儘裸足で川堤の方へ走り出したかつた。異常な早口で、何かしら口走りたかつた。――彼女の唇が痙攣的に動いたと、常吉が、矢庭に手を擧げてそれを遮つた。

「沈默つてろ！　何處へ捨てたら宜かつたなぞと、あとから一言でも吐かすと承知しねえぞ！」

それは恐しい聲であつた。お弓は危うく涙の浮びさうな眼を擧げて常吉を見た。彼等二人は、如何しても逃れる事は出來ないのだと言ふ恐しい觀念が、彼女の惱裡を掠めた。――その夜から、お弓は眠る事が出來なかつた。

――彼女は幾夜となく恐しい夢を見續けた。夢の中で、まざまざとあの胎兒を見た。頭と手と足とを一ところに縮めて、じつと動かずに居乍ら、紫色に鬱血して今にも腐爛しさうなその皮膚は、その死が自然的でなかつた事を、誰かに訴へようとして居た。胎内で受けた痛苦を物語つて居た。さうする事に依つて、殘酷な母體に對する復讐を試みようとして居るかのやうであつた。お弓は夢の中で胎兒の怨念をはつきりと感じた。彼女は、微かな呻き聲をたてて、眼に見えない胎兒の幽靈から逃れようとするやうに、兩手を空に爽搔いた。と、――捕縛の恐怖が直ぐそのあとから、彼女を追ひ掛けて來た。今まで、その事を思ひ出す事さへなかつたのに或夜ふと、あの時胎兒を包んだ繦褓が、彼女の眞新し

た絣絞りの浴衣であつた事を思ひ附いた時、彼女は異常な恐しさに驅られて飛び起きた。じつと、それは凍り附くやうな凝視であつた、うす暗い障子の桟を見詰めて居ると、——きつと今頃、あの新聞包が探し出され、あの絣絞りが擴げられて、眼の鋭い刑事達の間に問題になつて居るのではあるまいか、それを當吉も彼女も、唯つた今まで知らないで眠つて居たのだ、——と言ふ氣がした。

若し捕へられたら、と言ふ惧れが彼女を責めさいなんだ。若し捕へられたら——彼女は決して白狀しないであらう、誰も彼女の口を捻ぢ開ける事は出來ないのだ、だが、——と彼女は考へ續けた。——隣りの質入屋の娘があの浴衣を知つて居る、あの娘は、あれを襦袢の身頃にするから與れと言つた事があつた。刑事が來て、あの襤褸つきれに見覺えはないかと訊くであらう。と、あの娘が說明するであらう、——ええ、その浴衣はお弓さんが着て居たんですよ。——彼女はもう如何にしても逃れる事は出來ない。ああ、彼女は如何してあの時に、直ぐに浴衣を與れて了はなかつた事だらう。

彼女は餘り正直過ぎたのだ。あの時、如何してそれを思ひ附かなかつたのであらう。隣りのおばあさんにでも、唯つた一言さう言へば宜かつたのだ。——赤ん坊が墮りちやつたのよ、おばあさん、昨日、井戸端で轉んだのが不可なかつたんだわね？ それとも、餘り働き過ぎたせいなのかしら、——誰が、それを噓だと思ふ事が出來よう、そして、おばあさんは言ふであらう。——まあ、大變な事になつたねえ、だけどそんな小ちやい赤ん坊は屆けなくても好いんだよ。何處かのお寺へ埋めて貰ふんだね、——これで彼女は、何事もなくお寺へ埋めて貰ふ事が出來たのだ。だのに彼女は、誰にも一言も話さなかつた。彼女は話す事が出來なかつたのだ。誰にでも知られるのが恐しかつたのだ。——

ふと、お弓の頭を或る考へが掠めて過ぎた。——あれが、ほんの風邪藥か何かであつたとしたら？醫學生の岡村が、しがない彼女と彼女の良人とを揶揄つたのであつたとしたら？——如何して、さうでなかつたと言へよう、そして、彼

女はずつと體が惡かつたのだ。彼女の弱い體は、到底も胎兒を發育させる事が出來なかつたのだ。

ああ、――お弓は絶望的な溜息を吐いた。――だが、そんな事は皆、身勝手なひとりよがりの考へだ。あの赤ん坊は彼女が殺したのだ。さうだ、彼女ひとりが殺したのだ。――お弓の乾いた眼に大粒の涙が浮んだ。彼女は、涙の間から彼女の優しい共犯者の安らかな寢顏を見た。

――最早や彼女は、彼女の罪から逃れようとはしなかつた。せめて、彼女の愛する共犯者を救ふ事に依つて、甘酸つぱい犧牲者の歡びを味ひたかつた。彼女は當吉を揺り起した。そして悲しさうな、だが嬉しさうた涙聲で、――若し、彼と彼女とが捕へられる事があつたら、何卒、彼はちつとも知らなかつたのだ、いや、今でさへもそんな馬鹿げた事は信じられないのだ、と言つて呉れ、南北堂の川堤へ捨ててあつた新聞包みも彼が捨てに行つたのではない、と言つて呉れと、掻き口說くのであつた。その事を執念く約束させてから、彼女は又、不安な眠りに入るのであつた。

斯うした同じ妄想が同じ順序をもつて、ぐるぐるとお弓の頭をもの狂ほしく經廻るのであつた。罪の發覺に伴ふ入獄の恐しさは、永久にお弓を責めさいなむやうに見えた。

それから、半年ほど經つてお弓は再び姙娠した。生活の苦しさは少しも變らなかつたにも拘らず、彼女はそれをどんなに喜んだか知れなかつた。

最早や彼女は、あの紫色の幽靈と、發覺の恐怖とに惱まされる事はない、彼女はすつかり罪から解放せられたのだ、と思つた。彼女はこれまで、決して墮胎した事はなかつたのだと言ふ事を證據立てるために、彼女の姙娠をどんなに喜んで見せたか知れなかつた。隣りの娘にもおばあさんにも、赤ん坊の初着の寸法を訊いたり、名附け日の赤飯の小豆の

枷鎖を毀いたりした程であつた。そして、月滿ちて無事に分娩する事に依つて、恐ろしい犯罪の惡夢から完全に逃れようとしたのであつた。

斯うして今、彼女の側に眠つて居る赤ん坊が、月足らずではあり乍ら兎も角も安らかに生れた。——その赤ん坊の無心な顏を見た時、お弓の裝うた愛情や構へた喜びは影のやうに消えて、夢にも想像し得なかつた動物的溺愛が潮のやうに湧いて來るのを氣附いたのであつた。お弓は、彼女の眼の前が長い長い暗夜から、しら／＼と明けて來るやうな氣がしたのであつた。

（三）

長い、思ひ出の惡夢——さうだ、きつと夢だつたのだ、と彼女は思ふ。——から逃れようとして、お弓はうす眼をひらく。そうつと、蒲團の衿を押し退けようとする。と、柔かい縹色木綿の肌觸りが、彼女を決して不幸だとは思はせない。彼女は、影つた障子が又明るくなるのを信じて居ると同時に、暗い暗い思ひ出もみんな一場の惡夢であつた、と信じようとする。

彼女は、ほんたうにさう思ひたいために、又眼を閉ぢて寢た眞似をする。——が、今度は上下の眼瞼がきじきじと痛痒くむづり合ひはしない。如何か斯うか、うとうとと平和な眠りに入れさうである。側には赤ん坊が寢て居るし、常吉はちき居酒屋から歸つて來るであらうし、——彼女はうとうとと眠る、そして、それは、長い長いうまゐであつた。

（四）

「おい、――おもてに變な奴が立つてるぜ、」

お弓はうつすりと眼を開ける。――常吉のゲートルを卷いた足が、彼女の直ぐ枕のところに見える。ああ、歸つて來たのだわ、と一寸頭を擡げて常吉の顏の方へ笑ひ掛けようとするけれども、うまゐの中から醒めきらないお弓の頭は、その儘しどけなく眠り込む。

と、――がらがらとおもての障子が開く。常吉のゲートルを卷いた二本の足が、荒々しく縺れて、上り框の方へ行く。――眠り乍らお弓は、常吉のゲートルに繋がつて居る彼の顏面表情を感じる。何かしら、微かなけはひを、眠り痺れた頭の底で感じる。

「赤ん坊が生れたのかね？」

「赤ん坊だと？手前は一體、何處から來た！」

見知らない聲と常吉との對話が障子一重を隔てて聽えて來る。そしてそれは、何か意味を持つた言葉ではなく、一つ一つ離ればなれの單語になつて、お弓の痺れた腦髓の中に浸み込む。彼女の知覺は、丁度レコードの板を這ふ蓄音機の針のやうに、その、浸み込んだ腦髓の中から時々、ぽつんぽつんと何か知らの意味を拾ひ上げる。――

「何だい、赤ん坊が生れたのか如何か、訊いてるだけぢやあないか」

「餘計なお世話だ、俺あ、手前のやうな野郎から訊かれる譯がねえ、――如何も變な野郎だと思つたら違えねえ。人の家の前にじつと立つてやあがつて、全で空巣ねらひのやうな眼付きをしやあがつて、――今しがた、煙草屋の角を曲りしな、ひよいと見ると、おもての格子に張り附いて家の中へ聽耳を立ててやあがる……」

「貴樣、醉つてるんだな、」

「貴様だと？」

「それとも、酔つた振りをしてゐるのかい、──俺は、南分署の刑事だが、」

ああ、──お弓は聲のない短い叫びを擧げる。と、一瞬間、絶望的な無感覺が彼女の體中を走る。彼女は夢か現か解らない。錯覺がめまぐろしい速さで彼女の脳髓を寸斷する。──

「俺はちやんと知つて居るのだぞ、新屋小路の產婆から聽いて來たのだ、昨夜生れた赤ん坊は如何した？」

「赤ん坊が如何したと？この野郎！貴様、眼玉を持つてやあがるか、眼玉を持つてやがりやあ……」

お弓は、レコードの板の中から、少し許り慄へを帶びた常吉の濁み聲を拾ひ上げる。彼女は、眼に見えない哀韻を迸り乍ら、──常さん、何にも言ふんじやないよ、言ふんじやないよ、──

「ふざけるない！俺は先刻から、おもてに立つて聽いて居たんだぞ、ものゝ小一時間も聽いてゐたんだぞ、昨夜生れた許りの赤ん坊が、そんなに大人しいのかい！ちつとも泣かないのは如何したんだい！──この先の原つぱのお稻荷さんの後で、今朝めつかつた胞衣と初着とを貴様は知つてるだらう？」

「手前は、──俺が捨て子をしたと吐すのか、それとも子殺しをしたと吐すのか。」

がらりと、間の障子が開く。

「野郎！見えねえか、蒲團の中から出て居る頭が見えねえか、毛、毛の生いた可愛い頭が見えねえか、」

常吉の涙聲がお弓の頭のしんまで浸みる。と、彼女の眼がしらにも涙が浮んで來る。──さうよ、さうよ。私達が赤ん坊を棄てて了つたなんて、常さん、うんとおこつてお呉れよ。うんとおこつてお呉れよ。──彼女ははつきり眼を開く。然し彼女は、それが夢か現か解らない。

常吉のゲートルを巻いた足が、荒々しく縺れてお弓の方へ寄つて來る。そして、彼の片手が浴衣の衿をひきあける。——お弓の顔に、酒臭い呼吸と一緒にぽたりと一滴涙がかかる。——

常吉は、無情に赤ん坊をゆすぶる。

「おい、手前は何で泣かねえんだ、——俺が手前を殺したとよ。手前を殺して來てたんだとよ。——なあ、手前は死んでやしめえ、死、死ん、——」

常吉の顔が、その儘凍りつく。

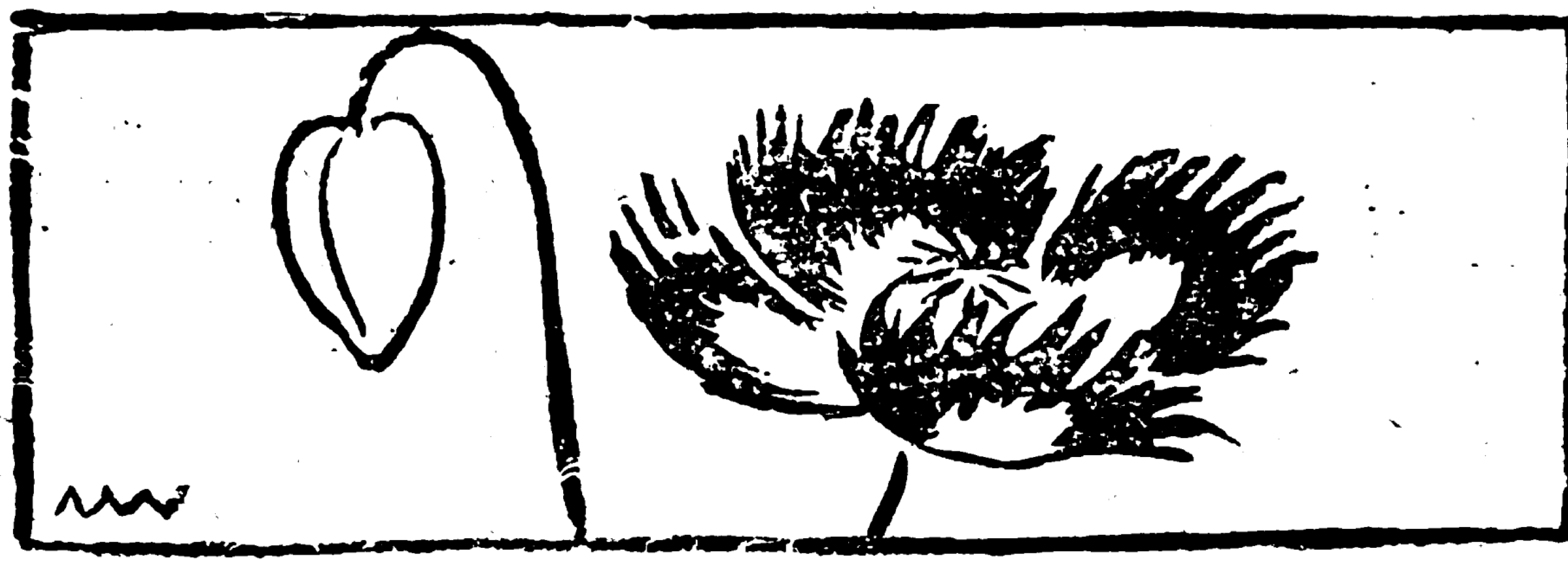
「——こいつは、お弓！——赤ん坊が冷べてえ、」

ええ？——再び、絶望的な無感覺がお弓の體中を走る。彼女は無意識に、そうつと手を伸ばして赤ん坊の頭を撫でる。と、生毛のたよりない、なま温い手觸りを透して氷のやうな冷めたさが——その冷さを彼女は知つてゐる。それは一年前の、襤褸の上にへばりついて居た肉塊の冷めたさであつた。——お弓の指先から頭のしんまで傳はる。赤ん坊は死んで居る。——お弓は、大きな瞳をぽつかり開けて、乾き上つた常吉の顔を見る。あゝ、赤ん坊が死んで居る。——夢か知ら、夢か知ら、これもみんな夢なのか知ら、——

その時、八燭の電燈がぽつかりと、死んで居る赤ん坊の頭の上に點く。

それから一時間後、常吉は南分署の刑事室へ連れて行かれた。が、其處で——彼の赤ん坊は、發育不完全のために極く自然的に死んで了つたのだ、そして、恐らく、長い陣痛から逃れた許りの、一種貧血性睡眠に陥つて居たであらうお弓は、少しもそれを知らなかつたのだ、と言つた一小兒科醫の證言に依つて彼は直ちに釋放せられた。——完——

一九二四・四・二九



女帝の悩み

上司小剣

一

女帝はいま、病ひに惱んで、混亂した頭を、宮居の庭の方に向けつゝ、いろ〳〵のことを考へてゐる。——

自分がいま死んだら、世の中はどうなるであらうか。それを考へることによつて、女帝の頭はまづ混亂しはじめる。あゝア死にたくない。生きてゐたい。二百歳ぐらゐまでは生きられないものか。自分はもう、孫の珂瑠の王を立てゝ皇太子を天皇の位に即けて、いまでは太上天皇ぢや。しかし世の中の政治はまだ〳〵この掌に握つて離さない。病んでも離さない。死んでも離したくない。あゝア、それで死にたくないのぢや。

もうそれ、大赦も行うた。百人の僧に度牒を與へて、畿内の國々の寺々で、金光明最勝王經を講じさせたけれど、なんのしるしもない。自分の生命は今年いツぱいもつ

か、もつまいか。

自分の生命は惜しくない……とも無理から言へば言はれぬこともなからう。死にたくはないが、生命は惜しくない、と變なことも言つてみたい。しかし自分の生命の惜しいといふことよりも、自分が亡き後の天下の不安と恐怖とが、第一に氣がゝりで、死んでも死にきれない。自分が眼を瞑るとゝもに、世の中が眞ツ暗になる。さういふ氣がするではないか。あゝア死にたくない。

當今を枕頭に呼び寄せ、太政大臣も側近く召して、もう遺詔といふものを下した。それで最後の覺悟はきめたつもりである。自分は女だ、女だから日輪だ。……とさういふ氣がしてゐる。世の中に女ほどえらいものがあらうか。女は子を生む、男は子が生めないぢやないか。子を生むものがなければ、世の中にはいつか滅亡が來るにきつてゐる。それだから女はえらいのぢや。自分は女の中の女ぢや。昔しの大比留女貴(おほひるめのむち)に並ぶべき女ぢや。あゝア自分が死ねば、自分の據つた天下は亂れる。さうして麻絲の亂れたやうに亂れるであらう。不安ぢや、恐怖ぢや。自分の冷たい骸(から)も、其の不安と恐怖とに慄(ふる)へるであらう。氷のやうな肉が慄へる。血汐の固く蝋飯のやうな塊りになつたのがびく〳〵と戰く。あゝア恐ろしや、恐ろしや。

死んでも死ぬまい、……と思ふ自分ではあるが、この病の床から、自分の最後の政治を布令(ふれ)にして出しておきたい。それはこれまで、帝(みかど)崩御の後には、必らず行ふた群臣の素服して哀號することを止めるのぢや。白い裝束に悲しみを湛へて、匍匐しつゝ哀號するものゝなかに、欠伸をば笏の陰に噛み殺してゐるものゝあるのを自分は見た、御父の帝天命開別(あめみことひらかすわけ)の大喪の折りにも、僕は背の君大海人(おほあま)の崩御の時にも。……

自分はこの風習を止めてやらう。さうして、日輪がいかなる日にも東から昇つて西へ沈むやうに、闇が來て夜が來る

やうに、文武百官の務めは、大喪の日にも、常の如く怠らぬやう。自分の葬は、何んの儀式もなく、喪具の匠の掛りと化するやう。………おうさうぢや。

二

萬事を簡素に、自然に、……との遺詔を、太政大臣に下した女帝は、大きな枕に載せた白髪の頭が、いくらか輕くなつたやうにおぼえた。自分の白髪が、病んでも亂れぬ如く、自分がたとへ、あすの日、冷たい骸にならうと、自分の遺詔が、群臣萬民を感泣させて、世の中が案外おだやかゝも知れぬ。日輪が西のかた生駒の山に沈む時、大空が淺緑りに晴れわたつて、風もない靜けさを見せるやうに。

幾分の安心が、女帝の白髪頭をおちつかせて、うつら〳〵と平和な眠りに落ちかゝつた。浮んで來るものには、何等の新しい考へがなくて、昔の夢ばかり繰りかへされた。

自分は旅が好きであつた。遠くへ御幸(みゆき)するのを、何よりの樂みとした。年々の花の頃には、思ひ出の多い吉野へ行かぬといふことがなかつた。吉野の山には花が咲く。自分の心にも花が咲いた。日嗣(ひつぎ)の位を辭して法體となり、帝(みかど)から袈裟を賜つた大海人とゝもに、從者あまた共して、志賀の都から菟道(うぢ)まで、公卿たちに送られつゝ、世を遁れたのは吉野の山であつた。『虎に翼を附けて放つやうなものぢや。』と、公卿の誰れ彼れは囁いだとやら。自分には其の時の旅が一生で一番思ひ出深いものとなつた。

朱鳥四年の正月に、自分がたうとう位に即いて、其の三月には早や旅好きの心おさへられず、伊勢に御幸しやうとした。ところが高市麿といふ男、長々しい表を捧げて、三月の御幸(みゆき)は百姓の迷惑で、農事の妨げになるから、見合はせた

がよかろうと言つてよこした。誰れもほかにそんなことを言ふものはないのに、はてさて物好きの漢よと、自分はをかしくなつた。そこで其の事々しく長つたらしい表を、商市膳めに突きかへして、伊勢への旅を見合はせることはならぬと言ひわたした。さうなると、兩方が意地づくで、自分にはわるいと思つてゐても、押し切らねば、氣が濟まなかつた。

しかし三月はまだ農業のさう忙しい時でないのを自分はよく知つてゐる。

春すぎて夏は來ぬらし白妙の

ころもさらせり天の香久やま

と詠んだ五月の頃にもなれば、水田に青い苗が、さながら湧き出すやうに萠えいでゝ、畦を傳ふ早乙女の姿にも、農事の忙しさは知らるゝ。しかし三月はそれほどにもない。百姓の迷惑を厭ふてゐては、自分なんぞ、とても外へ出ることはかなはぬ。いつもいつも宮居の奥深く垂れこめてゐねばならぬ。おほよそ自分だちの外出にあゝも仰々しい行列をつくつて、民草の上を踏みにじつて行くやうなことをしはじめたのはいつの世の頃からであらうか。古への帝は御笠深く、百姓の耕すさまを御覽じながら、歩ませられたものぢやさうな。本街道が廻々と召させられ、從者とても一人か二人、百姓の耕すさまを御覽じながら、歩ませられたものぢやさうな。本街道が廻はりになるなら、徑を傳ひ畦を渡つて近みちをあそばす。百姓は耕したまゝで、チラと見たばかり、「あゝあそこを帝の渡らせらるゝよ。よき稻作つて御感に入らう。」と考へるくらゐのもの。もし其の折りに、鍬で顎をさゝへつゝ、田畑の中に立つて息んでゐるものがあつたら、輕く目禮ぐらゐはしたさうな。かうやつて、帝の御幸は露ほども民草の重荷にはならなかつた。かくてこそ、君臣水魚の交りではないか。自分もさうしやう、侍女一人召し連れて、伊勢まで行かう、とさう言ふた時、さすがの商市膳も腋に汗して聞きよつた。けれども、萬乘の尊をもつて、左樣な輕擧はなりませぬと、まじめくさつて言ふものがあつたので、自分の旅はやはり仰々しい御幸の式によらなければならぬやうになつた。

『どうあつても、自分は伊勢の旅を思ひとゞまらぬ。』さう言ふと、高市麿は重ねて自分の前へ出て來た。『百姓共迄然いたしますれば。……』あの男の言ふことは、このほかになかつた。あの男はやがて冠を脫ぎ棄て、頭で床を叩いて、

『このたびの御幸は思ひとゞまらせたまへ。』と強情を張つた。あの男が強情なら、自分も輪をかけて強情であつた。

『どうしても行く。伊勢へ行く。』と、自分は押して言ひ切つた。高市麿は、男泣きに泣いて退出した。其の時のをかしさ。冠を脫いで、床に頭を叩きつけつゝ、何やらぶつ〳〵言つた樣子もをかしかつたが、落膽してすご〳〵出て行く後姿に、一層の面白さがあつた。かういふ面白い餘興を見ることとは、君主といふ窮屈な仕事に當らなければ、とても出來ぬ一つの得ぢや。

其の折りの伊勢への旅は面白かつた。近江で湖水を眺め、大和で山ばかり見てゐた眼に、果てしもない大海原を見るのが先づ心知よかつた。其の大海原がどこまでも靜かに、鏡の面のやうにつゞいて、向ふから來る小舟の数が、さながら天降るが如く思はれたのもよかつたし、風が吹き荒んで、山のやうな荒浪の打ち上げるさまも、平生おとなしい男の氣が狂ふたやうで、興のあることとであつた。

伊賀から伊勢へ、過ぐる道々の國人へは、みな其の年の貢をゆるしたので、青人草は御幸を迷惑に思ふどころか、鼓腹して歡び迎へた。『これはどうぢや、よう見ておけ。……』と、眼に物を言はせて、供奉の列にあつた高市麿をふりかへつた時の、……あら心知よさ。

志摩の國では、百姓の男女とも八十歲以上には、稻を五十束づつ分ち與へたので、いづれもの喜びやう。君の御德は大海の如し、と囁いて嬉し泣きに泣くものを見た。其の時自分は大海の岸に立つて、天涯萬里の青海原を眺めた。自分の祖先はあの青海原から降臨ましましたのか。青海原も天の原もつまりは同じことであらうと考へた。天と海とはつゞい

てゐる。緊がつてゐる。旅の好きな自分の、御幸の轍のあとは土の上に限られてゐる。いつかは一度、海を渡つて天に昇りたいといふ氣がしてゐる。自分の祖先が降臨まします前の住居の高天原に遊んでみたい。安の河原に撫子花が咲いてゐるのであらうか。——

あゝア、自分はもう死ぬのか。死ねば天に昇ると聞く。あの二見ケ浦から船出して、高天原に昇りたい。志賀の都で、父君とゝもに朝な夕な眺めくらした琵琶の湖は小さい。志摩や伊勢の海のやうに天へつゞいてはゐない。あらア、苦しい。苦しく悩ましいうちにも、今一度海が見たい。ひろ〳〵とした伊勢の海が見たい。昔に聞く日向の海、それは天への一番近道だといふ日向の海が見たい。旅の好きな自分にも、日向の國は遠すぎて、轍のあとが及ばなかつた。あゝア苦しい、悩しい。自分が都を遷したこの藤原の宮では海が見えない。大和の國には海がない。攝津の國に都を遷せばよかつたのに、今となつては仕様がない。自分が死んで、世の中に恐ろしいことがやつて來た時、都が海の畔にあつたなら、自分の孫たちはなんぼうか幸ひであらうに。

三

女帝は、日に夜にうつら〳〵としてゐた。長い夢がいつまでもつゞいて、多事だつた其の生活を、そこへまた繰りひろげて、白髪頭の中に再現するのであつた。

天命開別の帝の皇女として生れた自分は、鸕野讃良と名づけられた。蘇我山田石川の麿の女の腹に宿つたのであつた。父君の御弟で、自分には叔父にあたる東宮大海人の皇子と婚を結んでから、間もなく、安らかでない日がつゞいた。父君の御代の八年に內大臣藤原鎌足が薨じて、國の柱石がなくなつたと皆々が愛へた。自分も小さい胸を痛めたも

の丶一人であつた。其の時あの伊賀の采女の腹から生れた大友が太政大臣となつた。父君の一粒種で、眼の中に入つても痛いとはしたまはぬやうなあの大友を、自分は甥でありながら、どうも嫌ひぢやつた。それは伊賀の采女宅子といふものを自分は好かなんだので、其の腹に宿つた大友も好きになれなんだのぢや。しかし、父君の御寵愛は伊賀の腹た大友の一身にあつまつて、娘たる自分、姉たる自分なんぞは、そこに居るかとも言はれなかつた。面白くない色合ひが、志賀の都の内外に漂ふて、近いうちに何か恐ろしいことの起りさうな樣子はあり〳〵と見えてゐた。其の不安と恐怖との中へ、かて丶加へて、父の帝の御惱ぢや。御いたつきが輕くないばかりか、だん〳〵に重らせたまふ。

帝の宮居から、急の御使が我が夫大海人の宮へ見えた。大海人が急いで勅使に對面せんとする直衣の袖を控へて、自分は、大海人に囁いだ。

「きつと、天位を讓らうといふ父の帝の勅命にちがひありませぬ。もう東宮の位に備つておいであそばす御身ながら、父の帝は御弟の御身よりは大友の皇子がいとしうて、位を大友に讓りたい御心はやま〳〵ながら、御身へ義理を立て丶の勅使故、必らずともに勅命を御辭退あそばせや。」とさう囁いだ。妻でさうして姪にあたる自分をば、大海人はまたなきものとして何事も聽き從つてゐたので、この囁きも、すぐに耳の奧深くへ受け入れた。一人の甥ながらも、大海人は自分と同じに大友が嫌であつた。年なほ若くして、太政大臣顏をしてゐるのが氣に食はぬと言ふてゐた。

ところで、大海人が勅使に對面してみると、帝が大海人を大殿に召さる丶といふことだけで、御位の話は何もなかつた。勅使の退出後、大海人が裝束を改めて參内しやうとしてゐるところへ、仲のよい蘇我の安麿が、馬を飛ばして驅け付けて來た。大殿の內の模樣は手に取るが如く分つた。父の帝は大友に御讓位の前提として、大海人を召さる丶といふことが、明らかになつた。もし、大海人が卽座に天位をお受けするやうなことがあつたら、退出がけの殿中にいかなる

企みがあらうも知れぬ。おそらくは、生きて再びこの宮居へは立ち歸れまいと、安麿が手眞似までして物語つた。自分はそッと身ぶるひをした。大海人も慄へ戰いたが、しかし、何をとばかり勇氣を振ひおこして、安麿を隨へつゝ、參内の車に乘つた。

大殿では果して、父の帝が御いたつきの枕近く大海人を召されて、天位を授けたまはるよし仰せられた。其の時の大海人の答へは 自分が教へたとほり其のまゝであつた。『臣生來多病にござりますれば、九五の御位に備はるとも、其の重器を保たんこと、覺束なう存じまする。願はくは、賢明で御すこやかな大友の皇子を立てゝ東宮となしたまひ、すぐにも御位を讓らせたまはんことを、心の奥底から念じあげまする。それは即ち陛下の御喜びで、また臣が幸にござりまする。臣は世の中に望みが何もござりませぬ。……しかし、たゞ一つの望み、それを陛下がおかなへ下さらば、それより上の幸ひはござりませぬ。』と、大海人はしみ〴〵と靜かに、肺肝を披いて見せるやうに、さう言つたのであつた。天智とまで言はれたあの賢い、眼から鼻へ智惠が突き拔けて、大千世界を包まふとするやうな父の帝も、御いたつきと、子ゆゑの闇とに御心の鏡が曇らせられてか、大海人の心の底の底までも見透す御眼の力はなくて、窶れさせたまへる御顏に、嬉し氣な笑を浮べられ、痩せ細つた手に、大海人の肉つきのよい手をとつて、それでもやゝ不安な眼色で、『其のたゞ一つの望みといふのは何か？』と御下問になつた。

『僧となつて、吉野の山に分け入るのが、たゞ一つの望みにはべれば。……』と 大海人は其の時啜り泣きをしながら答へた。この白々しい言ひ分、野心に充ち滿ちた精悍な面魂をして、多病といふのに、其の手の肥えふとつて、艷々しいこと、多血の脈が鋭くしかも靜かに力强く打つてゐる。それを病ひの御手に握り締めながら、父の帝は何一つ見ぬく眼力がなかつたのである。ほつと安心をして、大海人の退出を枕の上から見送つた父の帝の御顏に嬉し涙の露が、一た

しづく、三下。

すぐにまた勅使が、大海人の宮に立つて、大海人の東宮辭退と出家とを許され、見事な金襴の袈裟を賜はつた。賍しさうに其の袈裟を睨んで、其の時ニヤリと笑つた大海人の顏の色の物凄さ。自分もまたニヤリ笑つたが、やはり凄い色をしてゐたであらう、

其の日にすぐ剃髪して、大海人は吉野へと向つた。自分は一日おくれて其の後を慕ふた。

四

大海人に吉野入りをさせるのは、虎に翼を附けて放つたやうなものぢや。……といふ評判はこの時から、宮廷の内外に起つて、不安に充ち滿ちた幾日かゞ送られたのであつた。父の帝の御惱は、日に日に重らせたまふばかりで、藥師の匙も一向に、しるしが見えなんだ。大友の皇子は内裏の西殿におはして、織物の曼陀羅の前に端座しつゝ、何事をか祈念してゐた。御側には左大臣蘇我赤兄、右大臣中臣金連、蘇我果安、巨勢人臣なんぞ扣へてゐた。大友の言はるゝやう、『天位は既に我れと定つた。群臣のうちに歸服せぬものがあつてはならぬ。』と、そこで手づから佛前の香爐をとつて、起ち上ると、『我れ今こゝに汝たち五人のものどもとゝもに、父の帝の大詔を拜して、儲の君となつた。この後もしこの大詔にそむくものがあつたら、天罰立ちどころに、其のものゝ身體を八つ裂きにするであらう。』と、おごそかに言ひわたした。すると、蘇我赤兄が起つて、『臣等五人のもの、君に從ひ奉りて、永久に忠節をつくすべく、御父の帝の大詔をいかでかそむき奉りませうや。もし逆ふものがございましたら、直ちに天神地祇の誅罰をうけて、子孫は斷絶し、家門は滅亡したでござらう。』と申しあげて、即座に大友へ一味の盟ひを立てた。それと殆んど時を同ふして、父天命開別の帝は

崩御になつた。——

この仔細を、吉野に居る自分と大海人とに告げ知らしたものは、朴井連雄君であつた。彼れは吉野の奥深く入つて來て、「臣近頃私の用事がござりまして、美濃の國までまゐりましたところ、大友皇子からの御沙汰ぢやと申して、人夫ども大勢が都へと馳せ上る樣子でござりました。御用の次第は、先帝の山陵を造らせたまふ次第と承りおよびましたが、それにしては不思議とも不思議、人夫め等は皆兵器を携へ居りまする。全く山陵造營とは僞り、それに事寄せて、今にも大友皇子の大軍がこの吉野の山に押しかゝり、君の御座所を取り卷くでござりませう。」と、息せき切つて言つた。其の時自分も大海人も、これはいよ／＼思ふ壺に嵌つてまゐつたと喜んだが、それを色にも見せず、「何とて左樣のことあるべきぞ、大友は自分の弟、自分の夫には甥にあたつてゐる。其の大友に自分たちを害しやうとする心のないのはよく分つてゐる。大友とて、まさかに一旦世を遁れた自分の夫に反叛の心があらうとは疑はぬであらう。山陵造營の人夫が兵器を携へたといふのも、夜道に狼を恐れたので、兵器と言つても、短かい劍か、よもや長卷きや弓矢は手にせぬのであらう。疑心暗鬼とやら、疑ふてはならぬ、つゆ疑ふてはならぬ。」と、自分は心の底をこんな言葉で押し包んで、わざと赤心を人のお腹に押しこむやうな風を見せたのであつた。朴井連雄君は、不服な顏をしながらも、親類同志の間柄のことを、他人が水でもさすやうに取られるのがいやであつたか、其のまゝ佛頂面をして、默り込んだ。萬事はもうすつかり壺に嵌つてゐるのぢやといふ悦びを深く隱して、自分と、背の君とは、倶も困つたものぢやといふ顏をして見せた。

其の後へ、また一人の者が、吉野の山の奥へ注進に馳せ參じた。「このごろ近江の都では、大和の京へ通ずる道々に、候をおかれ、また菟道の橋守りに仰せて、大海人皇子の御用米を押さへさせられました。」

これを聞いた大海人は、すツくと立つて、法服をかなぐりすて、「もうこれまでぢや、位を退き、世を遁れ、病を養ふ

て、身を全ふせんものとの心づくしも泡になつた。禍の迫つてくるのを避けもせで、徒らに潰ぶるも口惜しゝ。いでこの吉野から奥州にでも落ちて行かう。』と、悲鳴をあぐるが如く、痛まし氣に叫んだ。其の言葉の終るを待たで、自分はかねて用意の烏帽子に直衣を捧げて、背の君の法體をば拭ひ去るが如く俗體にかへた。

『いざ御車を。』と呼んで見ても、急場に用意も調はぬ。直ちに御馬に召されて、吉野を立たれた。從ふものは妃たる自分と御子の草壁、忍坂に、舍人、女孺たち十餘人、いづれも徒であつた。朴井連雄君もこれに加つた。先づ村岡の男依等を先き走りさせて、急に美濃の國に赴かせ、國司どもに觸れ知られて、後の恩賞を餌に、諸軍を發して、不破の關の要害を塞がせたのは、自分で言ふのも恥かしいが、自分の手柄であつた。これがなければ、あの勝利は思ひも寄らぬ。

自分たちの一行が甘羅の村を過ぐる頃、藤蔓の弓に太い征矢を持つた獵師が二十餘人ほど出て來て、御供の人數に加はつた。菟田の郡まで行くと、伊勢の貢米を積んだ駄馬五十頭がちや〳〵と音のわるい鈴を鳴らして向ふからやつて來た。

五

『やよ、土民たち、其の馬入用ぢや。そこへおいて行け。』

先きに立つた舍人の一個は、大聲でかう叫んだ。

『何んぢや、馬をおいて行け、ぢや。この馬はなア、大事の〳〵貢米を載せてゐるのぢや。馬をおいて行けや、米をおいて行かんならんわい。人間の肩では運び切れんこの米を、馬なしに運ぶ智惠があつたら、智惠と引きかへに馬は貸してやる。』と、口達者な農民の一人は、かう言ひながらも、相手の武裝した姿に、おそれ戰いて、尻込みした。しかし馬は平氣で、道草を食つて、馬子の尻込みに附き合はなかつた。

『馬なしに米を運ぶ智惠を貸してやる。それは運ばぬといふことぢや。米をこゝへおいて、土に上納するのぢや。こゝも王土の端くれぢや。』と、さう言ひながら、鎧武者の一人は持つてゐた鉾をとりなほすと、舍人は長い劍を拔いた。

『ひやア、盗人。米盗人。』と呼びながら、農民どもは手綱持つた手を離し、馬と別れて、馬を棄ておき、生命から〴〵といふ風で逃げ出したが、躓いて轉ぶもあり、突きあたつてよろけるもあり、威しに振り上げられた劍の光、突き付けられた鉾の輝きは、ぴか〳〵といつまでも、藁をつかねた笠の上にあるやうに、農民はドン〳〵と追はれもせぬ野路をば、後をも見ずに逃げ去つた。其のをかしな有樣を見ながら、自分は大海人と顏見合せてニッコリ笑つたが、百姓をいつくしむと、かね〴〵言つてゐながら、かういふこともしなければならぬ、今の身の上が、哀しくもまた寂しかつた。

駄馬の載せた米をおろして、其の米を棄てゝゐるのが惜しさうに、つく〴〵眺め込んでゐる舍人の横顏から、日が暮れかかつた。急がねばならぬと、スッカリ裸體にした駄馬のうちの一番見まさりのするのを、自分の乘り料にと、舍人の手で自分の傍へ牽かれた。今までは大海人一人であつた馬上の人が自分と二人になつて、轡を並べた。米を棄てた馬の數と徒立ちの人の數とが丁度合つて、人々は皆つゞいて馬に跨がつた。米の代りに人を乘せた馬の行列が長くつゞき、徒立ちの人は一つもなくなつた。これで一行の勇氣は百倍した。大野といふところまで馬を打たせると、もう四邊は眞つ暗になつた。民家の垣をこはして松明をつくるのも舍人の役であつた。盗んだ馬の上に盗んだ松明が、あか〴〵と振り照らされ、やがてはこの馬上に、天下をも盗まうといふのである。

隱の郡まで駄馬の足を進めた時は、もうかれこれ夜半であつた。路傍に藁を堆く積みあげてあるのへ、舍人が松明の火をうつすと、天を焦がさんばかりの勢ひで燃え上つた。邑のものはだいぶ驚いて戸をあけたが、怪しい鎧武者や、公卿の落人や女孺の如きものら一行が、駄馬に乘つて、さも〳〵疲れた風をしてゐる、百鬼夜行の生きた圖を見て、かゝり合

ひになるなよ、とでも囁き合ふ様子で、皆々戸を閉しつゝ、寝てしまつた風を装ふた。

朴井連雄君は、高聲を自慢の咽喉を絞つて、『先帝の皇子、東國に入らせたまふなり、人夫どもの御用がある。早やまゐれ。……』と、繰りかへし繰りかへし、三度呼んだけれど、一人も召しに應ずるものゝないのは、悲惨といふよりも滑稽で、滑稽といふよりは痛快でもあつた。世の中のことは、貢米を積んだ馬を牽いて行く土民を威かして駄馬を奪ふほどに、たやすくは行かぬものと、つくづく考へた自分と大海人との姿は、哀はれであつた。しかし、このみじめさは、それから二里ばかり、道を急いで伊賀の郡まで行つたところで、十分に慰められた。そこには當國の郡司ども數百の人夫を引き連れてまゐり合はし、また高市の皇子もそこに馳せ加はられた。いよいよ進んで伊勢の鈴鹿に着くと、當國の國司三宅の岩床が五百の軍卒を率ゐて味方に加はり、大津皇子のあとから、惠尺たちも馳せ付けて來た。お供の人數がだんだん加はつて、喜悦の色は、大海人の顔にも雑兵ばらの額にもあつた。ふところ鏡に映して見ると、自分の頬にもありありそれが見えた。もう夜が明けたのに、人々は松明を棄てるのを忘るゝまでに喜んでゐた。昨夜のみじめな自分たちと、今朝の冴え冴えした自分たちとは、まるでちがつた人々のやうであつた。一と晩眠らなかつたことなんぞは、皆々忘れてしまつて、なほも勢ひよく馬を進めた。

折りも折りとて、自分の計略の圖にあたつたことがわかつて、女軍師の鼻は高かつた。吉野から先發させた村國男依が、早くも美濃の國の軍兵三千人を發して、自分の言ひ付けにたがはず不破の道を塞いでゐた。そこで自分は男依に襃美の言葉を與へて、後日の恩賞を約し、其の大軍に迎へられて、不破の道を桑名へと進んだ。『もう大丈夫ぢや。大依く。』と、大海人の口から、滿足に感謝をかねた言葉が、馬上より馬上へと來た。伊勢は道が廣いので、二人は轡を並べて馬をうたせてゐたのである。自分の馬ももうあの貢米を載せた農民の駄馬ではなくて、男依の手から牽かせて來た

鹿毛の逸物であつた。大海人にもやはり男依の手で連錢葦毛の駿足が乘りかへに奉られた。心利いた男依はいかにもして、大海人と自分とに車をと思つて、いろ〳〵才覺したのであつたが、天さがる鄙に恰好な車はなかつた。大海人は心の弛みと、徹夜の旅の疲れとで、馬上ながらに、うつら〳〵と居眠りたまふ。自分は過ちのあるのをおそれて、馬を近く乘り寄せつゝ危なかつたら、抱きとめて、落馬させぬやうにと心がけてゐた。實にも背の折れた旅で、吉野から伊勢まで、なか〳〵に早く來たのを、自ら不思議に感ずるほどであつた。

桑名の郡家に至つて、皆々馬から下りた。こゝを當分の本營にするつもりなのぢや。大海人もハツキリと眼をさましてすぐに軍議を開いた。自分の獻策が多く用ゐられて、數日の滯留の間に、山背部の小田と、安斗の阿加布とに東海道を徇へさせ、稚櫻の五百瀨と土師の馬手とに東山道をきり從へさせた。東海東山並び進んで、味方の軍勢はいよ〳〵盛んに、近江の朝廷の運命は自分の掌に握つたのも同樣となつた。大友の死活はたゞ自分の思ひのまゝぢや。かへりみてこの時くらゐ、自分の胸の清々しく開いたことは、一生のうちに二度となかつたのである。

近江の朝廷では、大海人が吉野を出て東國に入つたといふことを聞いた時、群臣皆色を失つたさうぢや。或は東國に赴いて降參しやうとするのがあるし、また山澤に潛み隱れて、時節を待つか、其のまゝ土民の仲間に身を落さうかと思案するものもあつたげな。そんな風に、人の心がまち〳〵で、都は地震のやうに動搖したといふ話。

しかし、近江の朝廷にも、父の帝このかたの勇士が少しはあつた。さう〳〵腰ぬけどもばかりではなかつた。勇士の一人は大友に勸めて、大海人が不破の關へかゝらぬ前に、健かな騎馬の兵を催し、神速に追ひ討ちをかけたら、多くとも千騎はありとおぼえぬ大海人の同勢を殲滅することが出來やう、早く〳〵、と、焦つたけれど、大友は肯き入れずに、おそく謀つて、事をおくらしてしまふた。この時若し大友がこれに從つて、精鋭な騎馬武者を繰り出し、伊賀の郡あた

りに砂塵を捲いて追ひ寄せて來たら、自分も大海人も、馬足にかけられて、生命はなかつたであらう。敵ながらも自分には弟、大海人には甥だけあつて、大友は二人の生命の恩人ぢや、と自分は一生この折りの危さを考へるたびに苦笑ひをした。物事はすべて決斷が專一ぢやと、自分は其の時から、今の日まで思ひつゞけてゐる。

六

近江の朝廷の軍議は、さま〴〵で、なか〳〵きまらなかつた。其のうちにこつちの腰がいよ〳〵据つて、草も木も、大海人の旗いろものに動く勢ひとなつた。この勢ひを見て、眞ツ先きに桑名の軍門に降つたものは、大友方の大將大伴馬來田に其の弟吹負等であつた。そこへ尾張の國から國司小子部鉏鉤が二萬騎を率ゐて加はつたので、雪達磨の大きくなるが如く、味方の軍はます〳〵大軍となつた。大友方の意氣阻喪が思ひやられた。其の時遙か先手にあつた高市の皇子から桑名郡家の本營へ使が來た。大海人皇子の本營が遠くて、軍令を出すにも政治を行ふにも不便至極でござる。急いで近くに御座を進められい。それが使者の口上であつた。それで自分が桑名の郡家に留まつて後押さへになることとし大海人は其の日のうちに野上まで進發し、高市皇子に迎へられて、本營をそこにおいた。さうして、紀阿閉麿、置始連菟等を大將として、三萬騎で伊勢の大山越えに、大和へ向はせ、村國男依を大將として四萬騎で不破から直ちに近江の都へ攻め入らせやうとした。それもこれも皆桑名の郡家から授けた自分の軍法であつた。ところが吹負の軍勢が進み過ぎて、大友方の勇將大野果安に打ち破られて退いたので、自分は吹負を桑名の郡家まで召し寄せて、大に叱り付けたが、降參したばかりで、今までの味方を敵として戰つた苦しさが吹負の面にいツぱい現はれてゐたのが、哀はれであつた。なぜいつまでも大友のために働いてはやらなかつたか。勢のよい方に從ふのは卑しいであらう。」と、自分が言ふと、吹負か

女のやうに顔を赧らめたのもいよ〳〵哀はれであつた。吹負は其の時自分が大友の姉であることに漸く氣づいたとい風に、どぎまぎしてゐた。「そなたのやうな勇士を敵に奪はれたことは、弟の不運であつたなア。」と、自分がしめやかな調子で言ふと、吹負はいよ〳〵愧ぢ入つて、顔はます〳〵赧くなつた。この時ぐらゐ自分は男といふものを調弄してやつたことが、一生のうちにもうなかつた。

吹負は負けたけれど、男依は大友方の軍を息長横川に破つて、敵の兜首あまた打ち取り、勝に乘じて、勢田まで進んだ。これも自分の意匠で、味方の軍兵には皆赤符を附けさせたから、敵を追ふて進む勝色が、殊に鮮はしくて花々しかつたと、注進のものが、殊にそこへ力を入れて告げ知らせた。『赤勝て、赤勝て。』と、戰見物の土民が皆さう言つたさうな。

其の時、大友はけなげにも、親ら三軍に將として打つて出で、勢田の橋の西詰に陣を布いた。さすがに天子の親征とて、其の陣が五里にもわたり、旌旗空を覆ひ、烟塵雲につながつた。さうして勢田の長橋の橋板を三丈ばかりの間剝ぎとつて、其の代りに、廣い一枚板のやうに別の板を接ぎ合はせたのを敷き、大海人の兵がそこを踏んだら、接ぎ合はした板がごツそり、三丈ばかりの間、川へ落ちる仕掛けをした上、强弓の勇士を選り出して、長く太い矢を雨の如く射かけさしたから、味方の軍勢もたやすく橋を渡りかねて、敵の矢に射すくめられた形となつた。

男依の部將に大分稚彦といふものがある。平生から武勇自慢で、天下廣しと雖も、鉾をとり弓箭をとつて、やつがれの右に出づるものありともおぼえぬ、と廣言を吐いてゐたので、たじろく味方の眼は言ひ合はしたやうに稚彦の上へ注がれた。一ときは大きな赤符を鎧の上にひら〳〵さして、得意氣に馬上で乘りまはしてゐた稚彦も、先刻からの敵の弓勢に首をすくめて馬から下り、隅の方の木蔭に小さくなつてゐるやうに見られた。其の小さくなつてゐるものを、大き

く見やうとして、いづれもの眼は、稚彦を木陰から引き摺り出した。手で引き出したのではなくて、多くの眼の力が、この白褌勇士をばじツとしてゐられないやうにしたのぢや。今はこれまでと、稚彦も潔く覺悟をしたか、日頃の廣言を、天に響く敵の矢聲に打ち消されもしないで、徒立ちに鉾を横たへて、たゞ一人進み出た。『出た、出た。稚彦が出た。』の聲は、味方の陣中の口から耳へ、耳から口へと傳はつて、後陣のものは見えぬながらに、伸べ首をして、其の兜へ流矢を受けたりした。

稚彦はと見れば、あの鮮かな赤褌を鎧の袖にひら〳〵させながら、鉾でもつて敵の矢を拂ひつゝ進んだ。何だか腰のところの恰好がわるい。どうも今に倒れさうな腰つきぢや。ふら〳〵してゐる。しかし倒れはしないで、橋にかゝつた。橋にかゝつたと思ふと、コロリ倒れて、赤褌が鎧の上を血のやうに流れてゐた。

『稚彦が討たれた。』といふ聲が、また味方の軍卒の口から耳へ、耳から口へと傳はつた。敵の矢はいよ〳〵劇しく、ほんたうに雨のやうに飛んで來る。稚彦が倒れたので、矢は皆橋の上を高く素通りして、味方の陣中に落ちるのぢや。味方にも强弓のものがないではないが、どうも足並みの亂れかゝつたためか、弓勢が弱くて、辛ふじて川を越えるくらゐの、ひよろ〳〵矢が多い。大勇稚彦が討たれたと聞いては、ひよろ〳〵矢がいよ〳〵ひよろ〳〵して、味方の足までが皆ひよろ〳〵になる。折角こゝまでやつて、敗軍かと、大海人の溜息を吐く背後へ、妃の自分が男の裝ひして、近侍の若い武士の如く立つてゐるのに氣づくものはなかつた。實のところ、この天下分け目の戰が氣になつて仕様がないので、前の日ひそかに桑名の郡家から陣中へ乘り付けたのぢや。桑名にはちやんと、侍女の中で自分によう似たものを自分に仕立てゝ、後押さへの力を弛めぬやうにしてある。

稚彦は死んだのでない。討たれたのぢやない。自分の智惠が稚彦の上に働いてゐるのぢや。勇氣を持つて敵に打つか

る人間一人の力は知れたものぢや。いかに力が强いとて、千貫目のものは持てぬ。其の半分も四半分もむづかしい。けれども子供だとて千人集れば千貫目のものは樂に動かす。力は多くを集めて、智惠は一人が働かせる。こんな平凡なことでも、十分に心得てゐる人は尠ない。動もすると勇士によつて戰をしやうとする。勇士なんか飾り物ぢや、實地に使つて役に立たぬ。どんな勇士でも矢が一つ頭へ刺さつたらまゐつてしまふ。其の勇士といふ看板を、騙して得用に使ふ、それが自分の智惠ぢや。およそいかなる勇士の勇氣も、女が子を產む時の勇氣にくらべては、物の數に入らぬ。子を產むのは國を產むのぢや。自分はさう信じてゐる。女の勇氣と女の智惠、其の前に廻つては、男の勇氣や男の智惠は何んでもない。見よ大勇士として名うての稚彥も、女の勇氣に操られて進んでゐるではないか。賢明な皇子として聞えた大海人も女の智惠の傀儡ぢや。あら心知のよいこと。

敵も味方も、倒れた稚彥の死骸と見ゆるものが、一寸二寸づゝ、勢多の長橋の上を蚯蚓の這ふやうにして前進してゐるのを少しも知らずに、矢聲をあげ、鬨の聲を響かして、川をまん中に睨み合つてばかりゐた。一刻二刻とたつうちに、稚彥の死骸と見ゆるものが、一丈も二丈も先きへ行つてゐるのにさへ氣がつかぬほど、いづれも上氣してゐた。本陣の物見から、稚彥の死骸とおぼしい黑いものが、ほとんど眼には映らぬほど小さく、動くとは見えないで、いつの間にかだいぶ先きの方へ行つてゐるのを、肝心の矢とゝもに眺めてゐるのは、自分の眼ばかりであつた。總帥の大海人さへそれを知らずに、あたら味方の勇士を名も知れぬ敵の矢にかけたと言つて、がツかりしてゐる。

稚彥の身體がやがて、あの三丈ばかりの橋板の新らしく陷穽になつてゐるところまで近づいたと思ふと、死骸と思はれたものが、むツくり起き上つて、飛ぶが如く、新らしい橋板の仕掛けの上を駈け進み、敵も味方も、あはやと言つてゐる暇のないほど速かに、鉾取りなほして、陷穽の仕掛けの綱を切つてしまつた。この時おそくかの時はやく、自分は

大海人を促して、總進軍の號令をかけさせた。まことに潮のやうに味方の大軍は、もう危險の仕掛けのなくなつた勢多の長橋をば、順序よく混亂せずに、先きを爭ふこともなく、さうして迅速に渡つて行つた。其の先頭に立つものは、一旦死んだと見せかけた大分稚彦である。大友の同勢は、驀馳に中軍を衝かれて、本陣から潰亂し始めた。敵の先鋒智尊といふもの、獨り蹈みとゞまつて力戰したが大海人の近臣で自分の好きな稚臣が橋の西詰の欄下に隱れてゐて不意に鋒を突き出したので、さすがの智尊もそれに脇腹をやられて討死した。そんな工合にして大友方の勇士は犬養連、谷鹽手なんぞ、皆味方の騙し打ちにかゝつて斃された。こんな次第で、この戰ひは、この爭ひは、大海人の吉野入りから隱山の大友の最後まで、スツカリ、智惠と勇氣との戰であつた。嘘と眞との爭ひであつた。智惠は勇氣に勝つもの、眞は嘘に負くるものとの信念は、自分の一生を通じて變らぬ。學問と言ひ武術と言ひ、皆嘘で眞を被る方法を教ゆるものぢやと、自分は信じてゐる。嘘といふものを一ばんよく活用するもの、それは女ぢや、女あつての男ぢや、男女あつての世間ぢや。女がもとぢや。

七

大友の最後は、姉の身として、自分の口から言ふに忍びぬ。隱山に逃げ込んで、みづから縊れたとなつてゐる。さういふ記錄を作つたのも自分の業ぢや。勢田の敗軍の後に、いたはしや、大友方では左右の大臣をはじめ、群臣が皆蜘蛛の子を散らすが如く逃げ失せて、御側には物部連麿と舍人一個ばかりが從ふてゐた。この皇子は幼少の頃から賢こくて、眼の光さへ、常人とは變つてゐた。學問を好み、武道を嗜んだけれど、行ふところが、眞一文字に過ぎて、嘘の効用を知らなんだ。それが終りもよくせぬもとゝなつて、僅か二十五で滅びたのであらう。思へばいとしいものであつた。

自分は大友の最後に、せめてもの花を添へてやりたい心で、彼れのために辭世の一首をものしやうとした。しかし彼れは和歌よりも漢詩に秀いでゝ、日本の詩賦の元祖と言はるゝまでに、二十歳やそこいらで、才學ともに進んでゐた。それほどの秀才をむざ／＼殺す惜しさを償ふために、立派な辭世をば我が弟の作として後の世に遺したいと思ふたが、彼れに代つて、彼れの詩を僞作するものは先づない。そこで自分は大友ほどの詩人の再び我が國に現はるゝまでは と思ふて、十幾年根氣よく待ちつゞけた。さうして漸く、大津の皇子を得た。この皇子は、大海人の第三の御子であるけれど、正妃たる自分の出ではなくて、自分の姉大田の皇女の御腹から生れられた。自分はこの皇子が大友にもまして、賢明に、學問武術に秀でたのを心にくゝ思つて、あまり親しくはしてゐなんだけれど、大友の辭世を僞作するとなると、どうしてもこの皇子に相談するよりほかはなかつた。皇子は自分の相談を受けて、當時の戰の記錄を題に、すら／＼と即座に一首を賦した。それも心にくいほどの手際であつた。大友滅びて十幾年、彼の辭世は初めて世に出たのである。

金烏臨西舍　鼓聲催短命
泉路無賓主　此夕誰家向

これを大友の辭世とするに十分であつた。こんな立派な辭世まで遺したのだもの、權勢の爭ひの敗者として、我が弟は、いゝ最後を遂げたものとなつた。それがせめては姉たる自分の慰めでもあつた。

大津の朝廷を滅ぼして、其の左右大臣をはじめ、大友に與した百官有司を刑に處した翌年、大海人は位に即いた。自分は直ちに皇后であつた。治世十五年は泰平の天下であつたが、淨御原の宮に黑雲がかゝつて、帝の崩御が萬民に知れ渡つた時、不安恐怖の時代はまたもや押し寄せて來た。

大田の皇女を母とした大津皇子と自分の腹に生れた草壁皇子との對立が、亂階となるのぢや。しかし、自分の眼の黑

い間は決して、大津を昔の大海人にしてしまつて、草壁に大友の足痕を踏ませるやうなことをするものか。自分にはもうちやんと考へが定まつてゐた。新羅から來た僧の行心といふもの、大津皇子を相して、叛逆の心があると言つた。臣下の列にあらば、御身完たからず、と忠告した。其の一言を理由として、大津皇子は終に死罪となつた。群臣のうちには、生命まで召さずとも、出家を遂げさせて、山に入らしめたまへ、と諫むるものもあつたが、出家と山入とは、大海人の昔しの例が、當てにならぬ證據として、今も活々してゐる。あんなことになつてたまるものかと、自分は嘲笑つた。

ところが、其の草壁の皇子が、間もなく病のために世を去られたのには、自分も何んだか報ひの恐ろしさを感じかけたが、『女だぞ、自分は女だぞ、日輪だぞ。世の中にえらいものは女で、女の中の女は自分だぞ。』といふ自信が、自分の勇氣を百倍させて、自ら天位に昇つたのぢや。――

過去を追懷すれば、人生は幻の如きものぢや。しかし、自分は世の中のたゞ一人ぢや。日輪と同じものぢや。篤い病に犯されて、今は玉の緒のたのみも細うはなつたけれど、自分は死んだとて死ぬものか。三たびこの世で自分の前に來るべき不安恐怖の時代を、どういふ風にして動かぬやうに繋ぎとめやうか。自分は死んでも死なぬ。

大友が滅びて十餘年の後に、大友の辭世を代作した大津は、已れの死に臨んで一首の歌も詩も遺す暇がなかつた。そんな暇を、自分は彼れに與へないまでに彼れを恐れたのぢや。――あゝア苦しい惱ましい、自分は今、大津皇子の辭世を代作をしてやりたいやうな氣がしてゐる。

――二四、五、一五――



中央公論大賣捌所

同 [illegible]一丁目	東京堂
同 [illegible]	北隆館
同 日本橋區本石町	至誠堂
同 本[illegible]春木町	盛春堂
大阪市北區梅田町	盛文館
同 北區東梅田町	[illegible]盛堂
京都市七條停車場前	共盛社
同 四條西洞院	前田大誠社
名古屋市富澤町	中京堂
朝鮮京城本町二丁目	日韓書房

◉定價 金八拾錢 郵税金貳錢五厘（海外郵税金貳拾八錢）
但[illegible]號を除く

冊數	内國	外國
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢
以上郵便共		

◆[illegible]

廣告取次所
博[illegible]堂 萬年社 告天社
正路喜社 [illegible] 日本廣告社
[illegible]

一 振替貯金 口座番號東京三四番 長野三一〇五番なり
一 [illegible]代用 [illegible]に不代の場合[illegible]
一 代金前金 小切手の取扱は一切謝絶す
一 [illegible]
一 金二圓以上五圓迄 金十錢
一 金五圓迄 金八錢（[illegible]）
一 中央公論及婦人公論代金取扱の場合には[illegible]
一 受領證請求は必ず返信料を要す

大正十三年六月十五日印刷納本
大正十三年六月十九日發行（[illegible]）

發行兼編輯人 瀧田哲太郎
印刷人 高木[illegible]三

發行所 東京市丸ノ内ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話丸ノ内[illegible] 振替[illegible] 牛込五〇八九

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舍

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

◎本號特價金壹圓八拾錢　郵税金五錢



夏の御支度は三越

青葉に清々しく、熾く陽の光に、夏は參りました。三越では涼味と美趣に溢れた中形浴衣、簾、蚊帳、夏座蒲團、團扇など澤山に取揃へました

◆六月の催物◆

夏衣裳陳列會	（一日より）
メートル法普及展覽會	（一日より）
傳神洞繪畫展覽會	（二日より）
白日會油繪展覽會	（十一日より）
夏季用家具陳列會	（十四日より）
三彩會染織展覽會	（十五日より）
新製夏帶陳列會	（十五日より）
長光會繪畫展覽會	（廿一日より）
眞野紀太郎氏南洋寫生畫展覽會	（廿四日より）

雨の御用意は三越

若葉の綠濃かに、梅雨の季節が參りました。三越では防水が完全で、體裁の優美な雨外套、雨傘、雨天用洋傘、ゴム靴等各種陳列致しました

三越呉服店

◆東京駿河町◆